静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第68集

尾　羽　廃　寺　跡

静　　岡　　市

国道１号清水立体埋蔵文化財発掘調査報告書

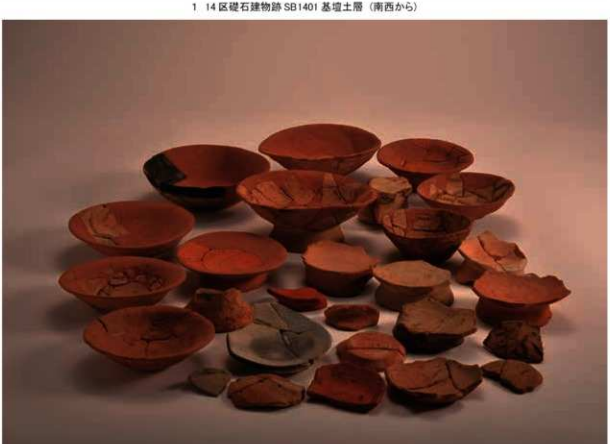
２０２３

静 岡 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

14 区礎石建物跡 SB1401 全景（南東から）

巻頭図版2

1　14区礎石建物跡 SB1401 基壇土層（南西から）



2　SX1507 出土遺物集合

序

尾羽廃寺跡は、静岡市清水区尾羽に所在する古代寺院跡です。昭和26年から断続的に発掘調査が行われ、金堂と講堂が確認されています。令和元年度に静岡市が実施した調査では、塔心礎と推定される石材が出土しました。同時に、駿河国廬原郡衙についても調査研究が進められ、この結果、廬原郡衙の位置は尾羽廃寺の隣接地と推定されるようになりました。

今回の調査では、金堂の東南に当たる地点で、基壇を伴う礎石建物跡が検出されました。畿内を除く地域に古代に礎石建物があるのは寺院や官衙に限られること、建物付近で炭化米がまとまって出土したことなどから、この建物跡は廬原郡衙の正倉である可能性が考えられます。礎石建物跡の北側では、東西約130mにわたって直線的に延びる大溝が検出され、溝内から木簡が出土しました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、国土交通省中部地方整備局ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2023年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
深井善一郎

例　　言

1　本書は、静岡県静岡市清水区尾羽（しずおかししみずくおばね）に所在する尾羽廃寺（おばねはいじ）跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、国道１号清水立体に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、国土交通省中部整備局静岡国道事務所の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査及び資料調査の期間は以下のとおりである。

現地調査　　平成 28 年７月～平成 29 年３月　調査対象面積 2462 ㎡（本調査）
　　平成 29 年８月～平成 29 年 11 月　調査対象面積 833 ㎡（本調査）
　　平成 30 年７月～平成 31 年２月　調査対象面積 1738 ㎡（本調査）
　　令和２年９月～令和２年 11 月　調査対象面積 86 ㎡（本調査）

資料調査　　令和元年７月～令和５年３月

4　調査体制は以下のとおりである。

平成 28 年度
　所長　堤　敏幸　　次長兼総務課長　田中雅代　　調査課長　中鉢賢治
　主幹兼事業係長　杉山智彦　　主幹兼総務係長　土戸美樹　主幹兼調査係長　富樫孝志
　主査　勝又直人

平成 29 年度
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　山本広子　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　土戸美樹　　調査班長　笹原千賀子　　主任　木崎道昭

平成 30 年度
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　山本広子　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　土戸美樹　　調査班長　溝口彰啓　　主査　岩崎しのぶ　主査　武田寛生

平成 31 年度・令和元年度
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　中野克彦　　調査課長　中鉢賢治
　総務班長　土戸美樹　　調査班長　溝口彰啓　　主査　武田寛生

令和２年度
　所長　酒井敏明　　次長兼総務課長　中野克彦　　調査課長　中鉢賢治
　調査課長代理兼調査班長　富樫孝志　　総務班長　島田真紀　　主査　勝又直人
　主査　井鍋誉之

令和３年度
　所長　野村浩司　　次長兼総務課長　吉田光廣　　技監兼調査課長　中鉢賢治
　調査課長代理兼調査班長　富樫孝志　　総務班長　島田真紀　　主査　勝又直人

令和４年度
　所長　深井善一郎　　次長兼総務課長　鈴木良二　　技監兼調査課長　中鉢賢治
　調査課長代理兼調査班長　富樫孝志　　総務班長　島田真紀　　主査　岩崎しのぶ

5　本書の執筆は岩崎しのぶ（静岡県埋蔵文化財センター）・中川律子（同）・武田寛生（静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課）・勝又直人（伊豆の国市教育委員会）が分担して行った。分担は以下のとおりである。

第１章～第３章第３節・第４章：岩崎
第３章第４節・第５節
遺構：１～３区・５区・８区－勝又
４区・６区・７区・９区・10～19区、大溝－岩崎
礎石建物跡・炭化米集中遺構－武田
遺物（土器）：礎石建物跡・炭化米集中遺構－武田　左記以外－岩崎
（瓦）：武田　（木製品）：中川　（その他）：岩崎

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　現地調査に係る委託業務実施業者は下記のとおりである。
平成 28 年度　掘削等業務委託　国際文化財株式会社
遺跡測量業務委託　株式会社イビソク
平成 29 年度　掘削・遺跡測量等業務委託　国際文化財株式会社
平成 30 年度　掘削・遺跡測量等業務委託　国際文化財株式会社
令和２年度　発掘調査支援業務委託　　国際文化財株式会社

8　資料調査に係る委託業務実施業者は下記のとおりである。
平成 31・令和元年度　整理作業・保存処理業務委託　株式会社イビソク
令和２年度　整理作業・保存処理業務委託　株式会社イビソク
令和３年度　整理作業・保存処理業務委託　株式会社イビソク
令和４年度　整理作業・保存処理業務委託　株式会社イビソク

9　現地調査において、平成 30 年度と令和２年度に元奈良文化財研究所山中敏史氏による調査指導を実施した。

10　資料調査において実施した自然科学分析及び委託者は以下のとおりである。
令和元年度　放射性炭素年代測定・火山灰同定　パリノ・サーヴェイ株式会社
樹種同定　鈴木三男氏（東北大学）
令和３年度　放射性炭素年代測定　株式会社パレオ・ラボ
樹種同定　鈴木三男氏（東北大学）
出土炭化米粒形質分析　上條信彦氏（弘前大学）

11　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
静岡市文化財課　磐田市教育委員会
上原真人・大川敬夫・大橋泰夫・小澤　毅・梶原義実・楠　賢司・田中弘志・出浦　崇・中村一郎・平野吾郎・古尾谷知浩・前田清彦・三舟隆之・三好清超・村田泰輔・山本祥隆・渡辺晃宏（五十音順・敬称略）

12　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系（日本測地系 2000）を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。

なお、グリッド杭は平成 28 年度調査で設定したグリッドを基準に南側に伸張した。グリッドの名称は、南北にアルファベット（A、B、C・・・・）、東西にアラビア数字（1，2，3・・・・）を用い、グリッド杭は南北、東西のグリッドラインの交点の名称とし、アルファベットを前に、数字を後にして、「A１」、「B２」などと呼称した。また、グリッドの名称は、各グリッドの北西杭の名称を用いた。グリッドの基準となるA１グリッドの国土座標は下記のとおりである。

A１グリッド杭（平面直角座標第Ⅷ系　X＝－ 55,050，Y＝－ 143,530）

3　検出された遺構は、平成 28 年、29 年、令和２年度の調査では、地区ごと、遺構の種類別に、検出された順に 01 番から番号を付し、平成 30 年度の調査では、地区ごと、遺構の種類を分類せず、検出された順に 01 番から番号を付した。なお、調査の過程で遺構に該当しないと判断し、削除したものについては欠番としている。

4　遺構略号は次のとおりである。

SB：礎石または掘立柱建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SH：建物状遺構　SK：土坑

SP：柱穴もしくは小穴　SX：その他の遺構　NR：自然流路跡

5　色彩に関する用語・記号は、『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修 1997 後期版）を使用した。

6　第１章の遺跡位置図（第１図）は国土地理院発行１：50,000 地形図「清水」「吉原」、第２章第２節の周辺遺跡分布図（第３図）は国土地理院発行１：25,000 地形図「清水」「興津」を複写し加工・加筆した。

目　次

巻頭図版　序　例言　凡例　目次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　遺跡の概要
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 3
第３節　これまでの尾羽廃寺跡・廬原郡衙跡の研究 …… 6

第３章　尾羽廃寺跡の調査
第１節　調査の方法と経過 …… 9
第２節　土層と堆積状況 …… 16
第３節　遺構の概要 …… 19
第４節　遺構と遺物 …… 82
第５節　包含層出土の遺物 …… 220

第４章　まとめ …… 244

第５章　自然科学分析
第１節　尾羽廃寺跡の自然科学分析 …… 273
第２節　放射性炭素年代測定 …… 279
第３節　尾羽廃寺跡から出土した木材の樹種 …… 293
第４節　尾羽廃寺跡出土米の粒形質分類 …… 308

写真図版
抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　尾羽廃寺跡周辺地形図 …… 2
第３図　周辺遺跡分布図 …… 4
第４図　尾羽廃寺跡調査区位置図 …… 10
第５図　基本土層図１ …… 17
第６図　基本土層図２ …… 18
第７図　グリッド配置図 …… 21
第８図　第１面全体図 …… 22
第９図　第２面全体図 …… 23
第 10 図　図郭割図 …… 24
第 11 図　第１面遺構配置図１ …… 25
第 12 図　第１面遺構配置図２ …… 26
第 13 図　第１面遺構配置図３ …… 27
第 14 図　第１面遺構配置図４ …… 28
第 15 図　第１面遺構配置図５ …… 29
第 16 図　第１面遺構配置図６ …… 30
第 17 図　第１面遺構配置図７ …… 31
第 18 図　第１面遺構配置図８ …… 32
第 19 図　第１面遺構配置図９ …… 33
第 20 図　第１面遺構配置図 10 …… 34
第 21 図　第１面遺構配置図 11 …… 35
第 22 図　第１面遺構配置図 12 …… 36
第 23 図　第１面遺構配置図 13 …… 37
第 24 図　第２面遺構配置図１ …… 38
第 25 図　第２面遺構配置図２ …… 39
第 26 図　第２面遺構配置図３ …… 40
第 27 図　第２面遺構配置図４ …… 41
第 28 図　第２面遺構配置図５ …… 42
第 29 図　第２面遺構配置図６ …… 43
第 30 図　第２面遺構配置図７ …… 44
第 31 図　第２面遺構配置図８ …… 45
第 32 図　SB1401 廃絶後～中近世全体図 …… 46
第 33 図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図１ …… 47
第 34 図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図２ …… 48
第 35 図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図３ …… 49
第 36 図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図４ …… 50
第 37 図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図５ …… 51
第 38 図　SB1401 構築後～廃絶前全体図 …… 52
第 39 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図１ …… 53
第 40 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図２ …… 54
第 41 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図３ …… 55
第 42 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図４ …… 56
第 43 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図５ …… 57
第 44 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図６ …… 58
第 45 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図７ …… 59
第 46 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前全体図 …… 60
第 47 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図１ …… 61
第 48 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図２ …… 62
第 49 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図３ …… 63
第 50 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図４ …… 64
第 51 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図５ …… 65
第 52 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図６ …… 66
第 53 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図７ …… 67
第 54 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図８ …… 68
第 55 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図９ …… 69
第 56 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前全体図 …… 70
第 57 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図１ …… 71
第 58 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図２ …… 72
第 59 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図３ …… 73
第 60 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図４ …… 74
第 61 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図５ …… 75
第 62 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図６ …… 76
第 63 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図７ …… 77
第 64 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図８ …… 78
第 65 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図９ …… 79
第 66 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 10 …… 80
第 67 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 11 …… 81
第 68 図　１区遺構詳細図 …… 82

第 69 図　2 区トレンチ土層断面図 …… 83
第 70 図　2 区遺構詳細図 1 …… 84
第 71 図　2 区 SD0201 出土遺物実測図 …… 85
第 72 図　2 区遺構詳細図 2 …… 86
第 73 図　2 区 SE0201・0202 出土遺物実測図 …… 86
第 74 図　2 区遺構詳細図 3 …… 87
第 75 図　2 区遺構詳細図 4 …… 88
第 76 図　2 区遺構詳細図 5 …… 89
第 77 図　2 区 NR0201・0202 出土遺物実測図 …… 90
第 78 図　2 区 NR0202 出土遺物実測図 …… 91
第 79 図　3 区遺構詳細図 1 …… 92
第 80 図　3 区遺構詳細図 2 …… 93
第 81 図　3 区 SD0302・0304 出土遺物実測図 …… 94
第 82 図　3 区 SD0305 出土遺物実測図 …… 95
第 83 図　3 区遺構詳細図 3 …… 96
第 84 図　3 区遺構詳細図 4 …… 97
第 85 図　3 区 SP0308・0309 出土遺物実測図 …… 97
第 86 図　4 区遺構詳細図 1 …… 98
第 87 図　4 区 SD0403・0404 出土遺物実測図 …… 99
第 88 図　4 区遺構詳細図 2 …… 100
第 89 図　4 区 SP0406・0407 出土遺物実測図 …… 101
第 90 図　5 区調査区北壁・東壁土層断面図 …… 102
第 91 図　5 区遺構詳細図 1 …… 103
第 92 図　5 区 SD0509 出土遺物実測図 …… 104
第 93 図　5 区遺構詳細図 2 …… 105
第 94 図　5 区 SD0511 出土遺物実測図 …… 106
第 95 図　6 区調査区南壁土層断面図 …… 107
第 96 図　6 区遺構詳細図 1 …… 108
第 97 図　6 区 SD0601 出土遺物実測図 …… 109
第 98 図　6 区遺構詳細図 2 …… 109
第 99 図　6 区 SD0603 ～ 0605 出土遺物実測図 …… 110
第 100 図　7 区遺構詳細図 …… 111
第 101 図　8 区遺構詳細図・SD0801 出土遺物実測図 …… 112
第 102 図　10 区トレンチ土層断面図 …… 113
第 103 図　10 区遺構詳細図 1 …… 114
第 104 図　10 区遺構詳細図 2 …… 115
第 105 図　10 区遺構詳細図 3 …… 116
第 106 図　10 区遺構詳細図 4 …… 117
第 107 図　10 区 SD1001・1002 出土遺物実測図 …… 118
第 108 図　10 区 SD1002 出土遺物実測図 …… 119
第 109 図　10 区 SX1001・1004、SP1003 出土遺物実測図 …… 120
第 110 図　11 区調査区南壁・東壁土層断面図 …… 122
第 111 図　11 区遺構詳細図 …… 123
第 112 図　11 区 SD1103・1105 出土遺物実測図 …… 124
第 113 図　12 区調査区南壁・東壁土層断面図 …… 125
第 114 図　12 区遺構詳細図 1 …… 126
第 115 図　12 区 SD1201・1204・1207 出土遺物実測図 …… 127
第 116 図　12 区遺構詳細図 2 …… 128
第 117 図　12 区 SD1211・1212、SK1214 出土遺物実測図 …… 130
第 118 図　13 区遺構詳細図 …… 131
第 119 図　13 区 NR1301 出土遺物実測図 1 …… 132
第 120 図　13 区 NR1301 出土遺物実測図 2 …… 133
第 121 図　13 区 NR1301 出土遺物実測図 3 …… 134
第 122 図　13 区 NR1301 出土遺物実測図 4 …… 135
第 123 図　14 区遺構詳細図 …… 137
第 124 図　14 区 SD1409 出土遺物実測図 …… 138
第 125 図　14 区 SX1425 石室検出状況図・基底石検出状況図 …… 139
第 126 図　14 区 SX1425 展開図 …… 140
第 127 図　14 区 SX1425 断面図・完掘状況図 …… 141
第 128 図　14 区 SX1425 出土遺物実測図 …… 142
第 129 図　15 区遺構詳細図 1 …… 143
第 130 図　15 区 SD1501・1502・1504 出土遺物実測図 …… 144
第 131 図　15 区遺構詳細図 2 …… 145
第 132 図　15 区遺構詳細図 3 …… 146
第 133 図　15 区 SD1505 出土遺物実測図 1 …… 147
第 134 図　15 区 SD1505 出土遺物実測図 2 …… 148
第 135 図　15 区 SD1506・1557、SK1508 出土遺物実測図 …… 149
第 136 図　15 区遺構詳細図 4 …… 150
第 137 図　16 区遺構詳細図 1 …… 151
第 138 図　16 区遺構詳細図 2 …… 152
第 139 図　16 区 SD1618・1619 出土遺物実測図 …… 153
第 140 図　16 区 SD1620 出土遺物実測図 …… 154
第 141 図　16 区遺構詳細図 3 …… 155
第 142 図　16 区 SK1608 出土遺物実測図 …… 156
第 143 図　15・16 区遺構詳細図 …… 157
第 144 図　15・16 区掘立柱建物跡 SB1501 出土遺物実測図 …… 158
第 145 図　17 区調査区北壁土層断面図 …… 159
第 146 図　17 区調査区西壁土層断面図 …… 160
第 147 図　17 区遺構詳細図 1 …… 162
第 148 図　17 区 SD1703・1728 出土遺物実測図 …… 163
第 149 図　17 区 SD1736・1737 出土遺物実測図 …… 164
第 150 図　17 区遺構詳細図 2 …… 165
第 151 図　17 区 SD1770・1773 出土遺物実測図 …… 166
第 152 図　17 区遺構詳細図 3 …… 168
第 153 図　17 区 SH17111・17112 出土遺物実測図 …… 169
第 154 図　17 区遺構詳細図 4 （SB1701） …… 169
第 155 図　17 区遺構詳細図 5 （SB1702） …… 170

第156図　17区遺構詳細図6 …… 171
第157図　17区遺構詳細図7 …… 172
第158図　17区掘立柱建物跡・ピット列出土遺物実測図 …… 172
第159図　18区調査区北壁・東壁土層断面図 …… 173
第160図　18区遺構詳細図1 …… 175
第161図　18区遺構詳細図2 …… 177
第162図　18区遺構詳細図3 …… 178
第163図　18区SD1801出土遺物実測図 …… 179
第164図　18区SD1802・1803出土遺物実測図 …… 180
第165図　18区SD1803・1809・1815出土遺物実測図 …… 181
第166図　18区SD1816出土遺物実測図 …… 182
第167図　18区遺構詳細図4 …… 183
第168図　18区SK1801・1802・1806出土遺物実測図 …… 184
第169図　18区遺構詳細図5 …… 185
第170図　18区SX1801・1802、SP1803出土遺物実測図 …… 186
第171図　19区遺構詳細図 …… 187
第172図　19区土器集中地点出土遺物実測図 …… 188
第173図　礎石建物跡SB1401周辺遺構実測図 …… 189
第174図　礎石建物跡SB1401実測図1 …… 190
第175図　礎石建物跡SB1401実測図2 …… 191
第176図　礎石建物跡SB1401および周辺出土遺物実測図1 …… 192
第177図　礎石建物跡SB1401および周辺出土遺物実測図2 …… 193
第178図　礎石建物跡SB1401および周辺出土遺物実測図3 …… 194
第179図　炭化米集中遺構SX1507実測図1 …… 195
第180図　炭化米集中遺構SX1507実測図2 …… 196
第181図　炭化米集中遺構SX1507出土遺物実測図 …… 197
第182図　大溝全体図 …… 199
第183図　大溝実測図（3区） …… 200
第184図　大溝実測図（4区） …… 201
第185図　大溝実測図（5区） …… 202
第186図　大溝実測図（6区） …… 203
第187図　大溝実測図（7区） …… 205
第188図　大溝実測図（8区） …… 206
第189図　大溝実測図（9区） …… 207
第190図　大溝実測図（10区） …… 208
第191図　大溝出土遺物実測図1 …… 209
第192図　大溝出土遺物実測図2 …… 210
第193図　大溝出土遺物実測図3 …… 211
第194図　大溝出土遺物実測図4 …… 212
第195図　大溝出土遺物実測図5 …… 213
第196図　大溝出土遺物実測図6 …… 214
第197図　大溝出土遺物実測図7 …… 215
第198図　大溝出土遺物実測図8 …… 216
第199図　大溝出土遺物実測図9 …… 217
第200図　木簡実測図 …… 219
第201図　1・2区包含層出土土器実測図 …… 220
第202図　3区包含層出土土器・土製品実測図 …… 221
第203図　4区包含層出土土器実測図 …… 222
第204図　5区包含層出土土器実測図1 …… 223
第205図　5区包含層出土土器実測図2 …… 224
第206図　6区包含層出土土器実測図 …… 225
第207図　7区包含層出土土器実測図 …… 226
第208図　8・10区包含層出土土器実測図 …… 227
第209図　11区包含層出土土器実測図 …… 228
第210図　12・13区包含層出土土器実測図 …… 229
第211図　14・15区包含層出土土器実測図1 …… 230
第212図　14・15区包含層出土土器実測図2 …… 231
第213図　14・15区包含層出土土器実測図3 …… 232
第214図　16区包含層出土土器実測図 …… 233
第215図　17・18区包含層出土土器実測図 …… 235
第216図　18区包含層出土土器実測図 …… 236
第217図　19区包含層出土土器実測図 …… 237
第218図　2区包含層出土瓦実測図 …… 238
第219図　5・9・10区包含層出土瓦実測図 …… 239
第220図　11～14・19区包含層出土瓦実測図 …… 240
第221図　19区包含層出土木製品実測図 …… 242
第222図　包含層出土石器・銭貨実測図 …… 243
第223図　尾羽廃寺跡遺構配置図 …… 245

挿表目次

第1表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第2表　尾羽廃寺跡発掘調査一覧表 …… 7
第3表　尾羽廃寺跡調査工程表 …… 14
第4表　尾羽廃寺跡主要遺構一覧表 …… 20
第5表　遺構観察表 …… 247
第6表　出土遺物観察表 …… 252

挿写真目次

写真１　発掘作業風景 …… 15
写真２　山中敏史氏による現地指導 …… 15
写真３　現地説明会 …… 16
写真４　基壇土層剝ぎ取り作業 …… 16
写真５　資料整理作業 …… 16
写真６　保存処理作業 …… 16

写真図版目次

巻頭図版１
巻頭図版２
図版１　１　１区全景（北から）
　　２　１区全景（東から）
　　３　１区 SD0101（南から）
図版２　１　２区 SE0201（南から）
　　２　２区 SE0201 内漆椀出土状況（西から）
　　３　２区 SE0202（南から）
　　４　２区 SE0202 内天目茶碗出土状況（南から）
図版３　１　２区 NR0202 礎等出土状況（南から）
　　２　２区 NR0202 北壁（南から）
　　３　２区 NR0202 南壁（北から）
図版４　１　２区天目茶碗出土状況（東から）
　　２　２区 NR0202 礎内擂鉢出土状況
　　３　２区 G11 土器出土状況
　　４　２区 G11 土器出土状況
　　５　２区 G11 土器出土状況
　　６　２区 G11 土器出土状況
図版５　１　２区 SD0201（東から）
　　２　２区 NR0201（南から）
　　３　２区調査終了後（東から）
図版６　１　３区第１面全景（西から）
　　２　３区第１面全景（東から）
　　３　３区大溝（東から）
　　４　３区 SD0303・0304（西から）
図版７　１　３区 SP0308 礫板出土状況（南から）
　　２　３区 SP0305 礫板出土状況（南から）
　　３　３区 SD0305 内出土土器
　　４　３区 SD0306 他（北から）
図版８　１　４区第１面全景（南から）
　　２　４区第２面全景（南から）
　　３　４区大溝（西から）
　　４　４区 SP0406・0407（南から）
図版９　１　５区第１面全景（東から）
　　２　５区第１面全景（西から）
図版 10　１　５区大溝（東から）
　　２　５区大溝土層帯断面（東から）
　　３　５区大溝西壁土層断面
図版 11　１　５区大溝北側遺物出土状況（北から）
　　２　５区大溝北側土器出土状況（北から）
　　３　５区大溝北側瓦出土状況（北から）
図版 12　１　５区第２面検出状況（東から）
　　２　５区第２面検出状況（西から）
図版 13　１　５区 SD0509（東から）
　　２　５区 SD0510（北から）
　　３　５区 SD0511（西から）
図版 14　１　５区包含層土器出土状況
　　２　５区包含層土器出土状況
　　３　５区 SD0509 内土器出土状況
　　４　５区 SD0511 内土器出土状況
　　５　５区 SD0511 内土器出土状況
図版 15　１　６区第１面 SD0601（東から）
　　２　６区第１面全景（東から）
　　３　６区大溝（西から）
　　４　６区大溝内木簡出土状況
　　５　６区第２面全景（東から）
　　６　６区 SD0603・0604（東から）
図版 16　１　７区第１面全景（西から）
　　２　７区第１面土器出土状況（東から）
　　３　７区第１面大溝内土器出土状況
　　４　７区第２面 SD0702（西から）
図版 17　１　８区第１面大溝（東から）
　　２　８区第１面大溝西壁土層断面
　　３　８区第１面大溝東壁土層断面
　　４　８区第１面 SD0801（北から）
　　５　９区第１面全景（西から）
　　６　９区大溝（西から）
図版 18　１　10 区第１面全景（西から）
　　２　10 区第１面 SD1001（東から）
　　３　10 区第１面全景（東から）
図版 19　１　10 区大溝（東から）
　　２　10 区大溝（西から）

3 10区大溝西壁土層断面
図版20 1 10区大溝覆土上層土器出土状況
2 10区大溝覆土上層土器出土状況
3 10区大溝覆土上層土器出土状況
図版21 1 10区大溝内木簡出土状況（東から）
2 10区大溝内木簡出土状況（拡大）
図版22 1 10区SD1002全景（北東から）
2 10区SD1002全景（西から）
3 10区SD1002土器出土状況（北から）
図版23 1 10区SX1004遺物出土状況（北から）
2 10区SX1004（南から）
3 10区SP1010（南から）
4 10区SX1003（南から）
5 10区SD1005（南西から）
6 10区SP1006・1007（西から）
図版24 1 11区第1面全景（北西から）
2 11区SD1105（北から）
図版25 1 12区第1面東側全景（東から）
2 12区第2面東側全景（東から）
3 12区SD1204（北から）
4 12区SD1204内土器出土状況（南西から）
5 12区SD1211・1212（南から）
6 12区第2面西側全景（南から）
図版26 1 13区NR1301（北東から）
2 13区NR1301（北西から）
3 13区NR1301内柱根出土状況（南西から）
図版27 1 14区第1面全景（南西から）
2 14区第1面全景（南東から）
図版28 1 14区SX1425石室検出状況（南東から）
2 14区SX1425石室検出状況（南から）
3 14区SX1425石室床面検出状況（南東から）
4 14区SX1425石室床面検出状況（北東から）
5 14区SX1425基底石検出状況（南東から）
6 14区SX1425基底石検出状況（北東から）
図版29 1 14区SX1425周溝・墓壙検出状況（南から）
2 14区SX1425墓壙検出状況（南から）
3 14区SD1409（南東から）
4 14区SD1409礎出土状況（南東から）
5 14区SD1412（北西から）
6 14区SD1409土層帯断面（西から）
図版30 1 14区礎石建物跡SB1401検出状況（北西から）
2 14区礎石建物跡SB1401基壇（南西から）
3 14区礎石建物跡SB1401基壇（西から）
図版31 1 14区礎石建物跡SB1401基壇（南から）
2 14区礎石建物跡SB1401基壇（南から）
図版32 1 14区礎石建物跡SB1401基壇土層①（北東から）
2 14区礎石建物跡SB1401基壇土層②（南西から）
3 14区礎石建物跡SB1401基壇土層③（北から）
4 14区礎石建物跡SB1401基壇土層④（北西から）
5 14区礎石建物跡SB1401基壇土層⑤（南東から）
6 14区礎石建物跡SB1401基壇土層⑥（北東から）
図版33 1 14区礎石建物跡SB1401礎石（南から）
2 14区礎石建物跡SB1401礎石（北から）
3 14区SK1433（東から）
4 14区SK1435（東から）
5 14区SK1436（北東から）
6 14区SK1437（北東から）
7 14区SK1413（北から）
8 14区SK1458（北から）
図版34 1 14区SK1419（北から）
2 14区SK1417（北から）
3 14区SK1459（北から）
4 14区SK1441・1442（北から）
5 14区SK1444（北から）
6 14区SK1421（北から）
7 14区SK1423（北から）
8 14区SK1443（北から）
図版35 1 15区炭化米集中遺構SX1507（南から）
2 15区炭化米集中遺構SX1507（北東から）
図版36 1 15区第1面全景（南東から）
2 15区SD1501～1503（北から）
3 15区SD1504（北から）
4 15区SD1506（北から）
5 15区SK1508（北から）
図版37 1 15区第2面全景（東から）
2 15区第2面全景（北西から）
図版38 1 15区SP1550～1552（東から）
2 15区SD1505（北から）
3 15区SD1505東岸木製品出土状況（北から）
4 15区SD1505東岸土器出土状況（西から）
5 15区SD1556（北から）
6 15区SD1557（北から）
図版39 1 16区第2面全景（北から）
2 16区第2面全景（東から）
図版40 1 16区SD1618（南東から）
2 16区SK1607（南東から）
3 16区SD1619（北西から）
4 16区SD1619遺物出土状況（西から）
5 16区SD1620（北西から）
6 16区SD1620遺物出土状況（北西から）
図版41 1 15区掘立柱建物跡SB1501（東から）
2 15区掘立柱建物跡柱穴SP1546（南から）
3 15区掘立柱建物跡柱穴SP1547（南から）
4 15区掘立柱建物跡柱穴SP1548（北から）

5　15 区掘立柱建物跡柱穴 SP1549（北から）
図版 42　1　16 区掘立柱建物跡・柱穴 SP1612（東から）
2　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1613（東から）
3　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1615 検出状況（南から）
4　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1615（南から）
5　16 区掘立柱建物跡 SB1501（西から）
6　16 区掘立柱建物跡 SB1501（北から）
図版 43　1　17 区第 1 面全景（南西から）
2　17 区第 1 面全景（北東から）
図版 44　1　17 区第 2 面全景（北東から）
2　17 区 SD1770（南から）
3　17 区 SD17101・17102（南から）
図版 45　1　17 区掘立柱建物跡 SB1701・1702（南から）
2　17 区 SP1763 ～ 1765（南から）
3　17 区竪穴建物状遺構 SH1751（南西から）
4　17 区 SP17111 ～ 17115（南から）
5　17 区 SD1703（南から）
6　17 区 SD1736・1737（南から）
図版 46　1　18 区第 1 面全景（西から）
2　18 区 SD1801（北東から）
3　18 区 SD1801（南西から）
図版 47　1　18 区土器出土状況
2　18 区 SD1812・1814（南東から）
3　18 区 SD1802（北西から）
4　18 区 SD1805 ～ 1808（北西から）
5　18 区 SD1813（南西から）
6　18 区 SD1815（北西から）
図版 48　1　18 区 SX1801（東から）
2　18 区 SK1804（南西から）
3　18 区 SK1805（南から）
4　18 区 SK1806（南西から）
5　18 区 SP1801（南東から）
6　18 区第 1 面包含層土器出土状況
図版 49　1　18 区第 2 面全景（西から）
2　18 区 SD1803・1816
3　18 区 SD1803 遺物出土状況
4　18 区 SD1803 遺物出土状況
5　18 区 SD1816 遺物出土状況
6　18 区 SD1816 土器出土状況（北西から）
図版 50　1　19 区第 1 面全景（北東から）
2　19 区第 1 面全景（北西から）
図版 51　1　19 区基壇上面（北西から）
2　19 区基壇上面（北西から）
3　19 区基壇内礎①（北西から）
4　19 区基壇内礎②（北西から）
5　19 区基壇内礎③（北から）
6　19 区基壇内礎④（北から）
図版 52　1　19 区基壇土層①（西から）
2　19 区基壇土層②（西から）
3　19 区基壇土層③（西から）
4　19 区基壇土層④（西から）
5　19 区基壇土層⑤（西から）
6　19 区基壇掘込地業（西から）
図版 53　1　19 区 SK1901・1902（北から）
2　19 区 SP1901（北東から）
3　19 区基壇北辺域木製品出土状況
4　19 区 SD1409（北西から）
5　19 区 SD1409 内木製品出土状況（北西から）
6　19 区土器集中地点（北から）
図版 54　1　19 区調査区南壁全景（北から）
2　19 区調査区南壁①（北から）
3　19 区調査区南壁②（北から）
4　19 区調査区南壁③（北から）
5　19 区調査区南壁④（北から）
6　19 区調査区南壁⑤（北から）
図版 55　1　5 区 SD0509 出土遺物集合
2　15 区 SX1507 出土遺物集合
図版 56　2 ～ 4 区遺構出土土器・土製品・瓦
図版 57　4・5 区遺構出土土器
図版 58　5・6 区遺構出土土器
図版 59　10・12・13・16 区遺構出土土器・土製品
図版 60　17・18 区遺構出土土器
図版 61　18 区遺構、大溝出土土器
図版 62　大溝出土土器
図版 63　大溝出土土器
図版 64　大溝、15 区遺構出土土器
図版 65　15・14 区遺構出土土器・瓦
図版 66　14 区遺構、1・2 区包含層出土土器
図版 67　3・5 区包含層出土土器
図版 68　5・6・10・13 ～ 16 区包含層出土土器
図版 69　16 ～ 18 区包含層出土土器
図版 70　18・19 区包含層、19 区遺構出土土器・瓦
図版 71　2 区遺構、大溝出土瓦
図版 72　大溝出土瓦
図版 73　大溝出土瓦
図版 74　大溝出土瓦
図版 75　11 区包含層、大溝出土瓦・2・13 区遺構出土銭貨
図版 76　11・10・19 区包含層、大溝、2・13 区遺構出土金属製品・石器・石製品
図版 77　2 ～ 4 区遺構、大溝出土木製品
図版 78　4 区遺構、大溝出土木製品
図版 79　大溝出土木製品
図版 80　大溝、10・13 区遺構出土木製品

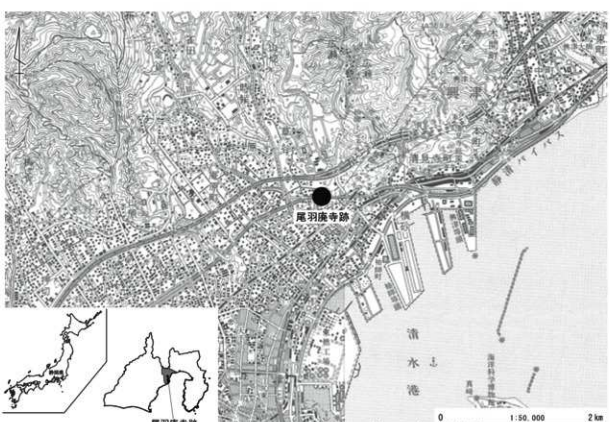
図版81　13区遺構出土木製品
図版82　15区遺構出土木製品
図版83　15・16区遺構出土木製品
図版84　19区遺構出土木製品
図版85　大溝出土木簡赤外線写真1
図版86　大溝出土木簡赤外線写真2・3
図版87　大溝、13区NR1301出土木簡赤外線写真4

第１章　調査に至る経緯

静清バイパスは静岡県清水区興津東町から同市駿河区丸子までを結ぶ国道１号バイパスである（第１図）。 国土交通省中部地方整備局静岡国道事務所（以下国交省静岡国道事務所）は、静清バイパスの全線４車線化・高架化工事の一環として清水立体工事を計画した。平成 19 年度、国交省静岡国道事務所は静岡県教育委員会文化課（平成 22 年度に文化財保護課に課名変更、平成 30 年度に知事部局文化観光部文化財課に移管、令和３年度にスポーツ・文化観光部文化財課に部名変更）の事業照会に対し、この事業を計画していると回答した。文化課は工事計画範囲における周知の埋蔵文化財包蔵地の存在の有無を調べた結果、工事計画範囲内に尾羽廃寺跡が含まれていることが明らかとなり、国交省静岡国道事務所に文化課との調整が必要であることを回答した。

平成 24 年 12 月と同 28 年１月、文化財保護課は、工事対象地のうち、国道１号北側の尾羽廃寺跡の試掘確認調査を実施した。この結果、２面の遺物包含層の存在を確認した。平成 26 年３月に国道１号南側の試掘確認調査を実施した結果、遺物包含層の存在を確認した。工事によって遺跡が破壊されることから、文化財保護課は記録保存を目的とした本発掘調査が必要であると判断し、国交省静岡国道事務所にこの旨を報告した。

平成 27 年５月、国土交通省中部地方整備局と静岡県は国道１号清水立体埋蔵文化財発掘調査業務委託 を締結した。発掘調査は静岡県埋蔵文化財センター（以下県埋文）が実施する運びとなった。



第１図　遺跡位置図

第２章 遺跡の概要

第１節 地理的環境

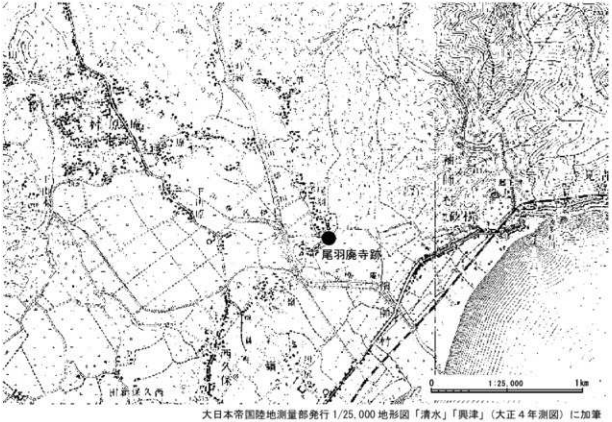
尾羽廃寺跡は、静岡県のほぼ中央にあたる、静岡市清水区尾羽、東名高速道路清水インターチェンジから東へ約 1.3km、JR 東海道本線清水駅から北北東へ約 2.4km 離れた地点に位置する。

尾羽廃寺跡の北部には、静岡県最北端の南アルプス赤石山脈から連なる標高 300m から 400m の庵原山地がある。 庵原山地は、新第三紀中新世の火山活動により成立したアルカリ火山岩類の竜爪層群、砂岩・泥岩のフリッジ型互層を主体とした静岡層群、和田島層群、清見寺層群、小河内層群から成り立つ。

これらの山地はフォッサマグナの南部にあたり、瑞穂・フォッサマグナ摺曲帯と大井川摺曲帯に接触するため、山塊は南北方向に摺曲する。そしていくつかの断層を伴い、複雑な地形をなして、西側では約 1000m の竜爪山地に連なる。

この断層に沿って、羽田打川、山切川、庵原川が南北に流れる。このうち庵原川は、北部の庵原山地を源流に山切川やいくつかの小河川と合流し、南部に開析作用による小規模な谷底平野（庵原低地）を形成し、駿河湾へと注ぐ（第２図）。

今回の調査地は、庵原山地の丘陵の南端に沿う。そして、この地域は丘陵裾部に沿って流れる小河川の沖積作用を受けている。今回の調査区は沖積作用によって運ばれた砂礫土により基盤層が形成された微高地に当たる。調査区の間には、庵原川の支流である西山田川が南流する（第４図）。



大日本帝国陸地測量部発行 1/25,000 地形図「清水」「興津」（大正４年測図）に加筆

第２図　尾羽廃寺跡周辺地形図

第２節 歴史的環境

尾羽廃寺跡（１）が位置する庵原地区には、多くの遺跡が点在し、旧石器時代から現在にいたるまで生活の営みが確認できる。

旧石器時代は町屋遺跡（25）で終末期の細石刃などがブロックで検出されている。その他にも大乗寺遺跡（17）でナイフ形石器が表採されている。

縄文時代は町屋遺跡（25）で早期前半にさかのぼる撚糸文系土器が出土している。大乗寺遺跡（17）では土坑から前期中葉の諸磯式土器や関西の北白川下層式土器が出土しているほか、中期の加曽利Ｅ式、後期の加曽利Ｂ式土器が確認されている。近接する高部山遺跡（19）では加曽利Ｂ式土器や中期前半の東海地方の北屋敷式土器が確認されている。

弥生時代には、中期後葉頃に庵原川周辺の丘陵斜面で遺跡が展開する。大乗寺遺跡の北側、谷を挟んだ西側に位置する原平遺跡（18）で弥生後期中葉の土器棺が確認されている。上嶺遺跡（55）では弥生時代中期後葉の環濠と考えられる溝や竪穴建物跡が検出されている。午王堂山Ⅰ遺跡（49）では溝状遺構から中期後葉の土器が確認されている。また、後期後半の竪穴建物跡や溝状遺構が検出されている。午王堂山Ⅰ遺跡の北側に位置する午王堂山Ⅱ遺跡（45）では、中期から後期後半の竪穴建物跡が検出されている。特異な遺物として鳥形土器が出土している。低地部では、一丁田遺跡（28）から弥生時代後期から古墳時代前期にかけての水田のほか弥生時代中・後期の土器が確認されている。

古墳時代前期には、神明山第１号墳（56）（静岡県指定史跡）が築かれる。奈良県の箸墓古墳を模したと考えられる前方部が撥形に開く前方後円墳である。同じく前期古墳として午王堂山古墳群（46～48）があり、その内の３号墳（46）は全長約 50m の前方後方墳で、主体部の粘土槨からは三角縁神獣鏡が出土している。

三池平古墳（16）（静岡県指定史跡）は、全長 65m の前方後円墳で竪穴式石槨から水銀朱の塗られた割竹形石棺が見つかり、成人男性の人骨とともに、変形方格規矩四神鏡、四獣文鏡、帆立貝形石製品などの装身具、筒形銅器、鉄製武器、農具など、多彩な副葬品が出土した。これらの副葬品から築造時期は前期末、４世紀後葉頃の古墳と考えられる。

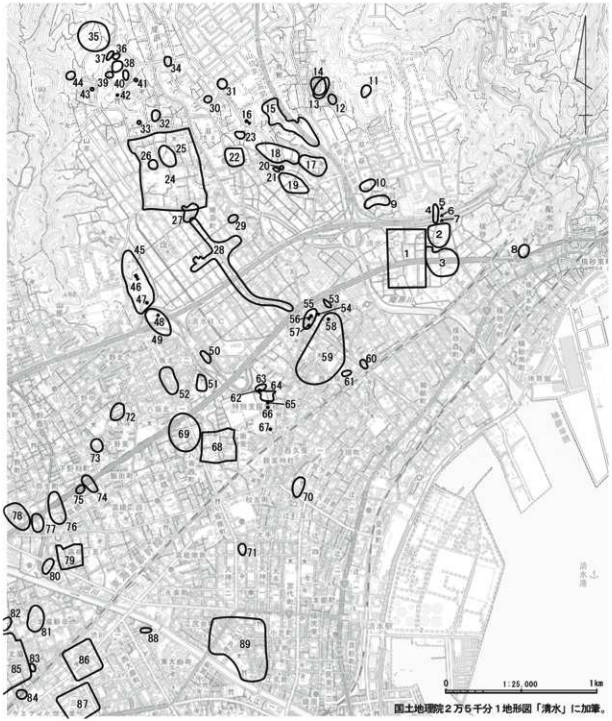
後期古墳は、全長約 11m の横穴式石室を持つ円墳である神明山４号墳（54）（静岡県指定史跡）があり、金銅製の馬具、鉄製の甲冑、勾玉、丸玉などの副葬品が出土した。神明山古墳群（54・56～58）の南側には秋葉山古墳群（65～67）があり、銅鏃や鉄製の馬具、武器等が出土している。尾羽廃寺跡の北西に位置する東久佐那岐古墳群（13）は６世紀中葉に築造が始まっている。６世紀中葉の築造と考えられる５号墳からは王類、刀子、鉄鏃などが出土した。６世紀後半の古墳として、西山遺跡（２）がある。横穴式石室を持つ３基の円墳が確認され、鉄製の馬具、武器、勾玉、ガラス小玉、水晶製切子玉などの副葬品が出土している。

古墳時代の遺跡は、上嶺遺跡（55）で弥生時代から引き続き古墳時代前期の竪穴建物跡が発見されている。町屋遺跡（25）では、古墳時代前期の竪穴建物跡からなる集落域と、方形周溝墓で構成された墓域が検出されている。小里前遺跡（27）では、古墳時代前期・中期の土器集積遺構のほか中期の竪穴建物跡、祭祀遺構が検出されている。一丁田遺跡（28）では弥生時代後期から引き続き営まれた水田跡が発見されている。秋葉山古墳群（65～67）に近接する秋葉山古窯跡群（63）は、６世紀後半から７世紀後半に須恵器窯として操業した窯跡が６基以上存在したことが確認されている。

古代になると、廬原氏が勢力を伸ばし、廬原の国造として周辺を治めていたと考えられている。『日本書紀』天智２年（663 年）８月 13 日の条には、白村江の戦いの際、廬原君臣が水軍を率いて戦ったと

の記述もある。乙巳の変後、廬原国と珠流河国の領域を併せ、駿河国となった。廬原の地名は、律令期にも庵原郡として見られ、平安時代に編さんされた『和名類聚抄』には庵原郡の郷に西奈、大井、河名（加波奈）、廬原、蒲原、息津の６郷が確認できる。『延喜式』では、駅家として蒲原と息津が、伝馬に廬原が確認できる。

古代の遺跡は、一丁田遺跡（28）で水田遺構が確認されている。その他、官衙関連遺跡と考えられる小里前遺跡（27）では、奈良時代前半の鍛冶工房が発見され、竪穴建物跡からは施釉陶器、墨書土器、円面硯、帯金具が出土した。 また隣接する町屋遺跡（25）でも奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡、竪穴建物跡が検出され、灰釉陶器、黒色土器の他、鉄滓が出土しており、小里前遺跡との関連



第３図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	尾羽廃寺跡	31	調練場遺跡	61	猿遺跡
2	西山遺跡	32	上町屋遺跡	62	秋葉山遺跡
3	山ノ鼻遺跡	33	大門古墳	63	秋葉山古窯跡群
4	東山田遺跡	34	薄念寺平遺跡	64	堀下地点１号窯跡
5	東山田第３号窯跡	35	薬師平古墳群	65	秋葉山３号墳
6	東山田第１号窯跡	36	塔作遺跡	66	秋葉山２号墳
7	東山田第２号窯跡	37	丸山古墳群	67	秋葉山１号墳
8	廬崎遺跡	38	塔作古墳群	68	飯田館跡
9	上平遺跡	39	勝負釜遺跡	69	大田切Ⅰ遺跡
10	若宮遺跡	40	寺ノ後遺跡	70	矢倉遺跡
11	夕日讃無砦	41	寺山遺跡	71	一本杉遺跡
12	宮平Ⅱ遺跡	42	寺山３号墳	72	大坪遺跡
13	東久佐奈岐古墳群	43	新小路遺跡	73	角田遺跡
14	宮平Ⅰ遺跡	44	浅間平遺跡	74	下野遺跡（Ａ地区）
15	庵原山城跡	45	午王堂山Ⅱ遺跡	75	下野遺跡（Ｂ地区）
16	三池平古墳	46	午王堂山第３号墳	76	下野遺跡（Ｃ地区）
17	大乗寺遺跡	47	午王堂山第１号墳	77	飯田遺跡（久保田地点）
18	原平遺跡	48	午王堂山第２号墳	78	飯田遺跡（向原地点）
19	高部山遺跡	49	午王堂山Ⅰ遺跡	79	高橋館跡
20	寺田遺跡	50	船山遺跡	80	殿屋敷遺跡
21	足高遺跡	51	山ノ根遺跡	81	風呂の段遺跡
22	大手前遺跡	52	大田切Ⅱ遺跡	82	高木遺跡
23	三池遺跡	53	神明遺跡	83	北脇遺跡
24	庵原館跡	54	神明山第４号墳	84	原部Ⅲ遺跡
25	町屋遺跡	55	上猿遺跡	85	北脇館跡
26	小屋敷遺跡	56	神明山第１号墳	86	渋川館跡
27	小屋前遺跡	57	神明山第３号墳	87	大門遺跡
28	一丁田遺跡	58	神明山第２号墳	88	大曲遺跡
29	下河原遺跡	59	大屋敷遺跡	89	江尻城跡
30	於後平遺跡	60	深田遺跡		

性も想定される。上猿遺跡（55）では、平安時代の竪穴建物跡が15棟確認されている。東山田古窯群（５～７）では、７世紀後半から８世紀にかけての４基の瓦窯跡と須恵器窯１基が検出され、同瓮瓦の存在から 尾羽廃寺に瓦を供給した瓦窯と推定される。尾羽廃寺の東側に位置する山ノ鼻遺跡（３）では、奈良時代の４間×４間の総柱建物跡が見つかり、礎板と柱根が検出された。同じく尾羽廃寺の東側に位置する廬崎遺跡（８）では、平安時代の土師器が焼土や炭化物とともに多量に出土している。

中世には、平安時代後期に藤原惟清が土着し、入江氏と称したとされる。入江荘の開発から勢力を伸ばし、吉川氏、渋川氏、息津氏、船越氏などに分かれ、さらに勢力を伸ばした。鎌倉時代の『吾妻鏡』巻16 正治２年（1200年）には、梶原景時一族を討伐した際の国人衆に吉川氏、渋川氏とともに庵原氏の名前も現れるが、この庵原氏が古代から続くかは不明である。大田切Ⅰ遺跡（69）では、掘立柱建物跡２棟、柵、区画溝、井戸などが検出され、12世紀後半から13世紀前半の青磁や白磁、山茶碗などが出土している。

戦国期になると、庵原城（15）が築かれ、発掘調査の結果、曲輪８、堀切２、竪堀４、虎口１、溝１、掘立柱建物跡１、柵３が確認され、15世紀の貿易陶磁や国産陶器が出土した。庵原城は今川氏滅亡後、武田氏家臣となった朝比奈信置が入城したが、天正10年（1582年）徳川氏の大軍に攻められ落城した。庵原地区では、発掘調査により、曲輪と堀切が確認された上平砦、曲輪と掘立柱建物跡が確認された夕日讃無砦（11）、曲輪２、柵、堀切が確認された宍原砦などが存在する。

近世に入り、海上交通の要衝である江尻城周辺に東海道が整備され、そこに江尻宿、清見寺周辺に興津宿が整えられ宿場としての機能を持つようになる。

第3節　これまでの尾羽廃寺跡・廬原郡衙跡の研究

尾羽廃寺研究の歴史は古く、江戸時代の天保5年に、新庄道雄氏は『駿河国新風土記巻十九』で尾羽村の寺崎より古瓦が出土したと述べている（新庄 1834）。近代に入ると、大正2年刊行の『庵原郡庵原村史』に尾羽寺崎の地から古瓦や仏像、鰐口の発見があったことが記されている（庵原郡 1913）。昭和6年刊行の『静岡懸史』に牧田氏宅に伝わる瓦についての報告がある（静岡県 1931）。昭和27年、望月博光氏は『ふうどⅣ』の中で、昭和26年に庵原村で行われた発掘調査の内容を報告している（望月博 1952）。また望月薫弘氏は同書の中で周辺寺院との関係について述べている（望月薫 1952）。昭和51年刊行の『清水市史』には、建立された伽藍の説明と東山田瓦窯から尾羽廃寺に瓦が供給されたことが述べられている（清水市史編さん委員会 1976）。昭和54年に梅島満氏は尾羽廃寺の出土瓦について報告を行っている（梅島 1979）。平成元年には川崎文昭氏が過去の発掘調査結果について述べている（川崎 1989）。平成2年刊行の『静岡県史』で、斎藤忠氏は過去の発掘調査結果から尾羽廃寺を有力豪族の私寺とした（斎藤 1990）。佐野明生氏は平成10年刊行の『大乗寺誌』で大乗寺の原点を尾羽地区に求めている（佐野 1998）。昭和46年の清水バイパスに伴う発掘調査を担当した杉山満氏は、平成17年に『清見潟 15』で文献資料から廬原氏と尾羽廃寺の関係について記している（杉山 2005）。

尾羽廃寺について精力的に研究を行ったのが大川敏夫氏である。昭和63年、「地形からみた尾羽廃寺」において、地形図をもとに寺域の復原を試みている（大川 1988）。平成2年には「尾羽廃寺出土の瓦について」では、出土瓦の分析を行い、大部分は東山田窯跡からの供給品であろうとした（同 1990a）。平成10年には「石造露盤について」の中で、残存する石造露盤の大きさから三重塔の存在を指摘した（同 1990b）。平成12年、「尾羽廃寺出土の軒丸瓦について」では、出土軒丸瓦の分析を行った上で、全国の寺院からの出土例を比較し、川原寺式を模倣して創作された瓦と述べた（同 2000）。平成15年、『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』の「尾羽廃寺跡」の項では、平成12年までの調査結果から伽藍の建造物の報告を行っている（同 2003）。さらにそれらをまとめ、平成19年に『尾羽廃寺跡の研究』を刊行している。これまでの調査成果の総括を行うとともに、発掘調査が行われた全国の古代寺院の集成を行った。また、尾羽廃寺と周辺の古墳や式内社との関係についても考察した（同 2008）。

令和元年度に静岡市教育委員会が実施した発掘調査で、白鳳期創建時のものと思われる塔心礎が出土した。出土地点は、これまで塔の推定地とされてきた寺域の東側にある石造露盤の採取地から金堂跡を間に挟んでおよそ西へ55m離れた位置にある。尾羽廃寺跡においては、大川敏夫氏によって、金堂の北に講堂を配置し、露盤採取地に当たる金堂の東隣に塔を配置した法起寺式の伽藍配置が想定されている（大川 2008）が、この塔心礎の出土によって、塔、金堂、講堂が南北に並ぶ四天王寺式の伽藍配置であった可能性が考えられるようになった（静岡市教委 2020、小泉・勝又 2022）。

尾羽廃寺跡と併せて、廬原郡衙跡の位置についても検討が行われてきた。尾羽廃寺の位置については古くから静岡市清水区尾羽に考えられてきた。しかし、廬原郡衙比定地については、平成6年刊行の『静岡県史』では、明治36年（1903年）刊行の『日本地理志料』や旧『静岡懸史』第二巻をもとに、清水市庵原町（字小屋敷）としている（静岡県 1994）。一方で、尾羽廃寺跡の隣接地では、金堂及び講堂と類似した主軸方位をとる掘立柱建物跡の検出例が増加していった。矢田勝氏は、尾羽廃寺跡と廬原郡衙推定地として、尾羽廃寺跡周辺にあてている（矢田 1996）。尾羽廃寺跡と廬原郡衙について渡辺康弘氏は、創建伽藍の主軸線の方向が官衙の周囲を含めた基軸線としている（渡辺 2000）。また平野吾郎氏は、尾羽廃寺跡が廬原郡衙と推定される尾羽遺跡に隣接していることを述べている（平野 2004）。このように、廬原郡衙跡の位置は尾羽廃寺跡の隣接地であると考えられるようになった。

大川敏夫氏は『尾羽廃寺跡の研究』第四章第三節の中で、尾羽廃寺跡と廬原郡衙跡の位置関係についても、全国の郡衙跡等の施設と隣接する寺院跡の類例を集成して検討を行っている。寺院跡の隣接地に郡衙の正倉跡が存在する例が多く見られることから、尾羽廃寺跡の隣接地も郡衙の正倉跡が存在している可能性を示している（大川 2008）。

昭和 26 年の第１次から現在までに主要なもので 16 回の発掘調査が実施され（第２表）、尾羽廃寺跡及び隣接地の実態が次第に判明してきた。

第２表　尾羽廃寺跡発掘調査一覧表

次数	調査期間	調査原因	調査種別	調査機関	主要検出遺構・遺物	文献
1	1951 年７月	村史編纂	確認調査	静女大島村民蔵・清水商船大学田中稔	総柱礎石建物、瓦、土師器、須恵器	1
2	1951 年冬	村史編纂	確認調査	静女大島村民蔵・清水商船大学田中稔	石組、瓦	2
3	1971 年４月～ 1971 年８月	国道１号バイパス建設	本調査	清水市教育委員会	総柱礎石建物、掘立柱建物跡、土師器、須恵器	3
4	1990 年４月～ 1992 年１月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	総柱建物（礎板）、溝（古墳時代）、土師器、灰釉陶器	4
5	1991 年 11 月～ 1991 年 12 月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	整地層、瓦敷排水溝、基壇、土坑、瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦堂	5
6	1993 年１月～ 1993 年３月	自治会館建替え	本調査	清水市教育委員会	整地層、溝、瓦、土師器、須恵器、山茶碗	6
－	1993 年 12 月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	旧河道	7
7	1995 年 11 月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	整地層、小河川跡	8
8	1997 年１月～ 1997 年２月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	１地点：小穴、２地点：版築、３地点：掘立柱建物（礎板）、瓦、土師器、須恵器	9
9	1998 年１月～ 1998 年３月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	金堂跡（地覆石・版築）、瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器	10
10	1998 年９月～ 1998 年 10 月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	講堂跡（版築）、瓦、土師器、瓦堂、石斧	11
11	2000 年１月～ 2000 年２月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	総柱建物、土師器、須恵器、灰釉陶器	12
－	2000 年７月	宅地造成	確認調査	清水市教育委員会	ピット、瓦、土師器、陶磁器	13
－	2001 年６月	宅地造成	確認調査	清水市教育委員会	瓦、土師器	14
12	2002 年１月～ 2002 年２月	範囲確認	確認調査	清水市教育委員会	金堂跡、瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器	15
－	2005 年 11 月	宅地造成	確認調査	静岡市教育委員会	古式土師器	16
－	2011 年６月	宅地造成	確認調査	静岡市教育委員会	なし	17
－	2012 年５月	墓地造成	確認調査	静岡市教育委員会	なし（遺物包含層か）	18
－	2013 年５月	事務所造成	確認調査	静岡市教育委員会	なし（遺物包含層か）	19
－	2016 年７月	店舗造成	確認調査	静岡市教育委員会	なし	20
13	**2016 年７月～ 2017 年３月 2017 年８月～ 2017 年 12 月 2018 年６月～ 2019 年２月 2020 年９月～ 2020 年 11 月**	**国道１号清水立体**	**本調査**	**静岡県埋蔵文化財センター**	**礎石建物跡、炭化米集中遺構、大溝、掘立柱建物跡、溝、古墳、木簡、瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器**	**本書**
－	2017 年４月	住宅建設	確認調査	静岡市教育委員会	なし	21
14	2018 年６月	自治会館建替え	本調査	静岡市教育委員会	版築（掘込地業）、溝（中世）、瓦、土師器、須恵器、陶器	22
15	2019 年 10 月～ 2020 年１月	市道整備	本調査	静岡市教育委員会	塼跡（平安）、瓦溜、塔心礎、礎石、瓦、土師器、須恵器、陶器	23
16	2021 年２月～ 2021 年３月	内容確認	確認調査	静岡市教育委員会	版築（掘込地業）、瓦、土師器、須恵器、陶器	24

※遺構未検出や狭小な試掘・確認調査は調査次数を付けないことで整理した
※静岡市教委 2020（文献 23）第２表に加筆

1　庵原村 1952「庵原村の遺跡」『社会教育』
2　望月博光 1952「尾羽廃寺について」『ふうどⅣ』清水東高校郷土研究部
3　清水市教育委員会 1971『清水市尾羽廃寺・寺崎Ⅰ遺跡・山ノ鼻遺跡発掘調査概報』
4　清水市教育委員会 1991『高部山遺跡・尾羽廃寺跡発掘調査報告書』
5　清水市教育委員会 1992『秋葉山古墳群確認調査報告書・尾羽廃寺跡発掘調査報告書』
6　清水市教育委員会 1993『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成４年度）』
7　清水市教育委員会 1994『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成５年度）』
8　清水市教育委員会 1996『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成７年度）』
9　清水市教育委員会 1997『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成８年度）』
10　清水市教育委員会 1998『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成９年度）』
11　清水市教育委員会 1999『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 10 年度）』
12　清水市教育委員会 2000『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 11 年度）』
13　清水市教育委員会 2001『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 12 年度）』
14　清水市教育委員会 2002『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 13 年度）』
15　清水市教育委員会 2003『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 14 年度）』
16　清水市教育委員会 2006『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 17 年度）』
17　清水市教育委員会 2012『清水市内遺跡群発掘調査報告書（平成 23 年度）』
18　静岡市教育委員会 2013『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（平成 24 年度）』
19　静岡市教育委員会 2014『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（平成 25 年度）』
20　静岡市教育委員会 2017『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（平成 28 年度）』
21　静岡市教育委員会 2018『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（平成 29 年度）』
22　静岡市教育委員会 2019『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（平成 30 年度）』
23　静岡市教育委員会 2020『尾羽廃寺跡 - 市道尾羽草ケ谷２号線整備に伴う発掘調査報告書 - 』
24　静岡市教育委員会 2022『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（令和３年度）』

第３章　尾羽廃寺跡の調査

第１節　調査の方法と経過

１　発掘調査の方法

当該事業の調査範囲は東西約230ｍに及ぶものである。用地内の既設道路や個人住宅等への進入路が多数あるため、それらを境として18の区画に分割し、静清バイパスより北側は、西から東に向かって１区から10区、南側は、西から東に向かって11区から18区の名前を付した。平成30年度に14区の調査を実施したところ、基壇を有する礎石建物跡SB1401が北側の調査区外にも続く可能性が認められたため、追加して調査を行う必要が生じた。このため、14区の拡張区として19区を設定した（第４図）。

本発掘調査は平成28～30年度及び令和２年度に実施した。いずれの調査区もバックホウを使用して表土等除去を行った。排土はダンプトラックに積み込み、所定の排土仮置場に運搬した。各調査区の周囲には、調査区外への砂塵等の飛散を防ぐために防塵ネット及びネットフェンスを設置した。表土等除去と並行して掘削防護柵を設置した。表土等除去終了後、ジョレンやスコップ等を用いて、人力で包含層を掘削した。排土はベルトコンベアでダンプトラックに積み込み、所定の排土仮置場へ運搬した。包含層掘削終了後、人力で遺構検出作業を実施し、確認された遺構は人力で掘削した。遺構面が２面以上ある調査区については、面数に応じて包含層掘削・遺構検出・遺構掘削を繰り返し行った。遺構掘削は写真撮影、図化作業を行いながら実施した。遺構写真は６×７判モノクロネガフィルム及び６×７判カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。高所からの撮影は高所作業車及びローリングタワーを使用した。また、ポール撮影による写真測量、ドローンを使用した空中写真測量も実施した。

平成28年度の調査では、一連の作業終了後に埋戻し作業を実施した。排土置場で調査区から排出された土砂をバックホウで積み込み、ダンプトラックで搬出した。バックホウにより敷均しを行った後、防塵ネット及びネットフェンスの撤去を行った。

現地の発掘調査と並行して、基礎整理作業として、現地から出土した遺物の洗浄・注記や記録類の整理を、受託業者が実施した。

２　発掘調査の経過

試掘確認調査は、平成24年度に２、６、10区、平成26年度に11、13、17、18区、平成27年度に１区となる地点を対象に実施した。この結果、各調査地点で１面または２面の遺構検出面が存在することを確認した。

本発掘調査は、平成28年度は１、２、３、５、７、８、10区、平成29年度は16区と18区、平成30年度は４、６、９、11、12、13、14、15、17区、令和２年度に19区の調査を実施した（第３表）。

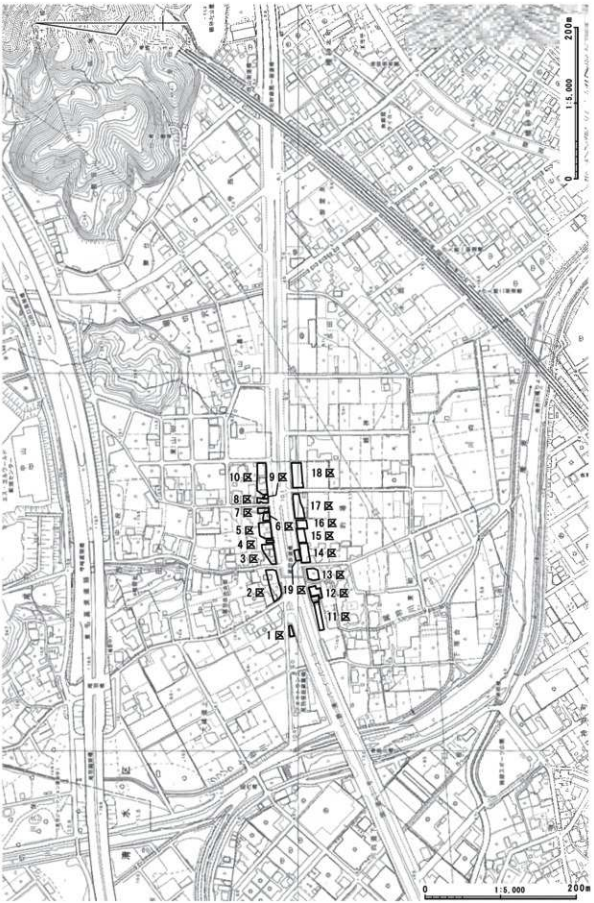
（１）平成28年度

ア　１区

８月８日表土除去開始。８月10日表土除去終了。８月９日包含層掘削開始。９月21日包含層掘削終了。９月22日遺構検出開始。９月28日遺構検出終了。10月４日埋戻し実施。

イ　２区

８月23日表土除去開始。９月３日表土除去終了。８月31日第１面包含層掘削開始。９月28日第１面包



第４図　尾羽廃寺跡調査区位置図

含層掘削終了。９月29日第１面遺構検出実施。９月29日第１面遺構掘削開始。10月14日第１面遺構掘削終了。９月29日第２面包含層掘削開始。10月18日第２面遺構掘削開始。10月21日第２面包含層掘削・遺構掘削終了。10月24日埋戻し開始。11月４日埋戻し終了。

ウ　３区

８月25日表土除去開始。９月21日表土除去終了。９月21日第１面包含層掘削開始。10月18日第１面遺構掘削開始。10月21日第１面包含層掘削・遺構掘削終了。10月24日第２面包含層掘削開始。11月９日包含層掘削終了。11月３日第２面遺構検出・掘削開始。11月９日第２面遺構検出・掘削終了。11月10日第３面包含層掘削･遺構検出･遺構掘削開始。11月28日第３面包含層掘削･遺構検出･遺構掘削終了。11月29日埋戻し開始。12月７日埋戻し終了。

エ　５区

９月26日表土除去開始。10月７日表土除去終了。10月21日第１面包含層掘削開始。11月９日第１面包含層掘削終了。11月３日第１面遺構検出・掘削開始。11月９日第１面遺構検出・掘削終了。11月10日第２面遺包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。12月13日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。12月14日第３面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。12月26日第３面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。平成29年１月６日埋戻し開始。１月18日埋戻し終了。

オ　７区

11月14日表土除去開始。11月18日表土除去終了。11月30日第１面包含層掘削開始。12月13日第１面包含層掘削終了。12月14日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。12月26日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。平成29年１月５日第３面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。１月16日第３面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。１月18日埋戻し開始。１月25日埋戻し終了。

カ　８区

12月７日表土除去開始。12月10日表土除去終了。12月12日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。平成29年１月11日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。１月16日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。１月17日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。１月25日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。１月26日埋戻し開始。１月31日埋戻し終了。

キ　10区

12月15日表土除去開始。平成29年１月６日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。１月31日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。２月１日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。２月22日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。２月24日埋戻し開始。３月４日埋戻し終了。

（２）平成29年度

ア　16区

10月５日表土除去実施。10月６日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。10月18日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。10月18日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。11月７日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。

イ　18区

８月21日表土除去開始。８月24日表土除去終了。８月29日第１面包含層掘削開始。９月13日第１面遺構検出・遺構掘削開始。９月21日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。９月22日第２面包含層掘削開始。９月26日第２面遺構検出・遺構掘削開始。10月３日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。

（３）平成30年度

ア　４区

７月11日表土除去実施。７月12日第１面包含層掘削・遺構検出開始。７月17日第１面遺構掘削開始。７月19日第１面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。７月20日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。７月25日第２面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。７月26日第３面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削開始。８月６日第３面包含層掘削・遺構検出・遺構掘削終了。

イ　６区

８月８日表土除去開始。８月９日表土除去終了。８月10日第１面包含層掘削開始。８月28日第１面包含層掘削終了。８月28日第１面遺構検出実施。８月28日第１面遺構掘削開始。９月19日第１面遺構掘削終了。９月20日第２面包含層掘削開始。９月26日第２面包含層掘削終了。９月25日第２面遺構検出開始。９月26日第２面遺構検出終了。９月27日第２面遺構掘削開始。10月５日第２面遺構掘削終了。

ウ　９区

９月６日表土除去開始。９月12日表土除去終了。９月19日第１面包含層掘削・遺構検出実施。９月21日第１面遺構掘削開始。10月３日第１面遺構掘削終了。10月４日第２面包含層掘削・遺構検出実施（新たな遺構検出なし）。

エ　11区

９月14日表土除去開始。９月26日表土除去終了。10月４日第１面包含層掘削開始。10月10日第１面包含層掘削終了。10月９日第１面遺構検出開始。10月10日第１遺構検出終了。10月11日第１面遺構掘削開始。10月16日第１面遺構掘削終了。10月17日第２面包含層掘削開始。10月26日２面包含層掘削終了。10月27日第２面遺構検出実施。実測作業を経て11月１日調査終了。

オ　12区

工事工程の都合上、調査区を２分割した。

前半部分は、７月９日表土除去開始。７月11日表土除去終了。７月12日第１面包含層掘削開始。７月17日第１面包含層掘削終了。７月18日第１面遺構検出開始。７月19日第１面遺構検出終了。７月19日第１面遺構掘削開始。７月24日第１面遺構掘削終了。７月25日第２面包含層掘削開始。７月27日第２面包含層掘削終了。７月30日第２面遺構検出実施。７月31日第２面遺構掘削開始。８月７日第２面遺構掘削終了。

前半調査で遺構面数が１面であることが確認されたため、後半部分については１面のみの調査とした。平成31年１月７日表土除去開始。１月10日表土除去終了。１月11日包含層掘削開始。１月17日包含層掘削終了。１月16日遺構検出開始。１月17日遺構検出終了。１月18日遺構掘削開始。１月25日遺構掘削終了。

カ　13区

８月１日表土除去開始。８月７日表土除去終了。８月８日包含層掘削開始。８月10日包含層掘削終了。８月16日遺構検出実施。８月17日遺構掘削開始。10月１日遺構掘削終了。

キ　14区

表土除去作業中に南北に横断して埋設された水道管が発見された。このため、水道管を境に調査区を東西に分割し、西側を14区、東側を15区とした。

10月２日表土除去開始。10月15日表土除去終了。10月11日包含層掘削開始。10月26日遺構検出開始。11月２日遺構掘削開始。２月13日遺構掘削終了。２月25日山中敏文氏による現地指導。

基壇を有する礎石建物跡の保存に係る経緯については、別途第３項に記載する。

ク　15区

表土除去は14区と並行して実施。10月19日第１面包含層掘削開始。10月25日第１面包含層掘削終了。10月25日第１面遺構検出実施。11月14日第１面遺構掘削開始。平成31年１月９日第１面遺構掘削終了。

１月10日第２面包含層掘削開始。１月16日第２面遺構検出実施。１月17日第２面遺構掘削開始。１月25日第２面遺構掘削終了。

ケ　17区

10月25日表土除去開始。11月８日表土除去終了。11月９日第１面包含層掘削開始。11月21日第１面包含層掘削終了。11月26日第１面遺構検出実施。11月27日第１面遺構掘削開始。12月18日第１面遺構掘削終了。12月19日第２面包含層掘削開始。12月28日第２面包含層掘削終了。調査中断。平成31年１月28日第２面遺構検出開始。１月29日第２面遺構検出終了。１月28日第２面遺構掘削開始。２月５日第２面遺構掘削終了。

（４）令和２年度

19区の調査を実施した。９月８日表土除去開始。９月11日表土除去終了。９月14日第１面包含層掘削開始。９月18日第１面包含層掘削終了。９月23日第１面遺構検出開始。９月28日第１面遺構検出終了。９月29日第１面遺構掘削開始。10月２日山中敏文氏現地指導。10月26日第１面遺構掘削終了。10月27日第２面包含層掘削開始。並行して10月29日第２面遺構検出・掘削開始。11月２日第２面全工程終了。

２　資料調査

（１）資料調査の方法

遺物図版は、実測図をコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS６によってトレース・版組作業を実施して作成した。遺構図版は、写真測量及びトータルステーションによる計測データをコンピュータに取り込み、Adobe Illustrator CS６によってトレース・版組作業を実施して作成した。遺物写真は６×７判モノクロネガフィルム及び６×７判カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。

（２）資料調査の経過

ア　平成31年度（令和元年度）

出土品及び記録類について、分類、仕分け、接合、復原、実測、遺物写真撮影、写真整理、観察表作成、図面編集作業を実施した。

木製品及び金属製品について、木製品の保存処理の前半業務（処理前記録～安定化処理）と、金属製品の保存処理作業を実施した。

木製品、炭化物及び火山灰について、樹種同定、火山灰同定、放射線炭素年代測定の自然科学分析を実施した。

イ　令和２年度

出土品及び記録類について、分類、仕分け、接合、復原、実測、写真整理、観察表作成、図面編集作業、図版版組、トレースを実施した。

木製品及び金属製品について、木製品の保存処理の後半業務（修復作業・仮収納）と、金属製品の保存処理作業を実施した。

ウ　令和３年度

出土品及び記録類について、実測、遺物写真撮影、写真整理、観察表作成、図面編集作業、図版版組、トレース、写真図版作成を実施した。

木製品及び金属製品について、木製品の保存処理の前半業務（処理前記録～安定化処理）と、金属製品の保存処理作業を実施した。

木製品について、樹種同定及び放射性炭素年代測定を実施した。また、出土炭化米の粒形質分析を実施した。

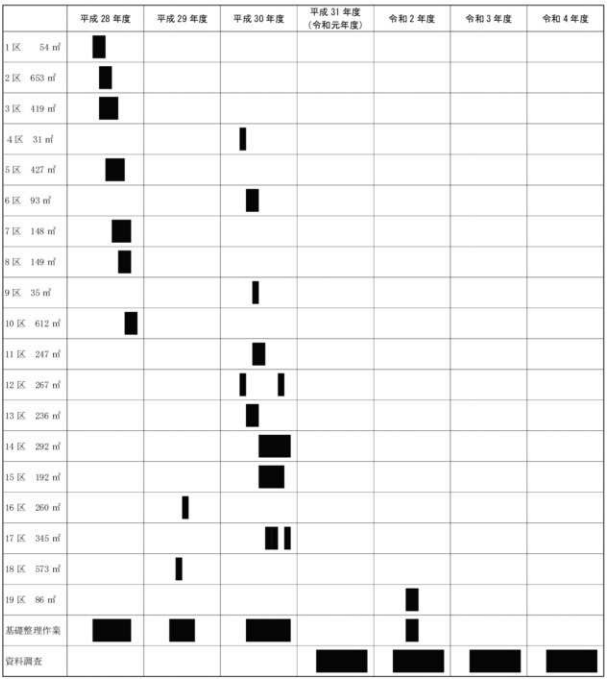
エ　令和４年度

出土品及び記録類について、実測、遺物写真撮影、写真整理、観察表作成、図面編集作業、図版版組、トレース、写真図版作成を実施した。

木製品について、木製品の保存処理の後半業務（修復作業・仮収納）を実施した。

遺物と記録類の版組作業終了後に編集作業を実施した。また、報告書の作成とともに、収納作業を実施した。

第３表　尾羽廃寺跡調査工程表



3　礎石建物跡SB1401の保存について

発掘調査の過程で、基壇を有する礎石建物跡SB1401、多量の炭化米、大溝といった廬原郡衙に係る可能性がある遺構や遺物が確認された。このことから、元奈良文化財研究所文化遺産部長山中敏史氏から調査方法及び全国的類例等について指導を仰いだ。この結果、14区で検出された礎石建物跡SB1401は廬原郡衙の正倉である可能性が高いこと、基壇が伴う郡衙正倉は、東海地方では岐阜県の国史跡弥勒寺官衙遺跡に次いで２例目、郡衙正倉で掘込地業が行われた基壇は東海地方で初めての事例となること、などの所見を受けた。そして、礎石建物跡SB1401については、保存に向けて開発事業者と協議を進めるべきとの意見を受けた。

センターは文化財課にこの旨を報告し、文化財課は平成30年12月、国交省に対して遺構の現状保存と道路計画の両立についての検討を依頼した。国交省は平成31年２月、文化財課に対して、礎石建物跡については、遺構表面を被覆して地中に保存する旨を回答した。埋戻しに先立って、基壇の土層断面については、土壌の剥ぎ取りを実施した。平成31年３月、埋戻し作業を実施した。埋戻しに際しては、遺構全体を厚さ約20cmの砂で保護し、基壇の上に埋蔵文化財が保存されていることを表示するアクリル板を置いた後、土で被覆した。但し、礎石建物跡北側の未調査範囲においては、現状保存が不可能であったため、14区の北側に19区を設定して、本発掘調査による記録保存とすることとなった。令和２年９月から11月にかけて、センターは19区の発掘調査を実施し、記録保存を行った。

4　普及公開活動

発掘調査及び資料調査期間中に実施した主な普及公開活動は以下のとおりである。

木簡学会からの依頼を受け、平成29年11月刊行の『木簡研究』第40号「2017年出土の木簡」、平成30年11月刊行の『木簡研究』第41号「2018年出土の木簡」の項に、本遺跡で出土した木簡についての報文を寄稿した。平成30年６月、地域と考古学の会・浜松市博物館・静岡県考古学会シンポジウム「静岡県と周辺地域の官衙出土文字資料と手工業生産」において、「静岡市尾羽廃寺跡出土木簡について」と題して誌上報告を行った。同年12月７・８日に開催された木簡学会第41回研究集会において、「静岡県尾羽廃寺跡の発掘調査と出土木簡」と題し、奈良文化財研究所山本祥隆氏と共同で報告を行った。12月９日には現地説明会を実施し、約120名の参加者を集めた。翌令和元年11月２日に、当センター主催遺跡調査報告会「ふじのくにの原像をさぐる」において調査成果を報告した。令和４年度は、文化庁等主催「発掘された日本列島2022」展に静岡市文化財課と共同で出土遺物を出品し、展示解説図録に調査成果の概要を掲載した。

写真１　発掘作業風景

写真２　山中敏史氏による現地指導

写真３　現地説明会

写真４　基壇土層剥ぎ取り作業

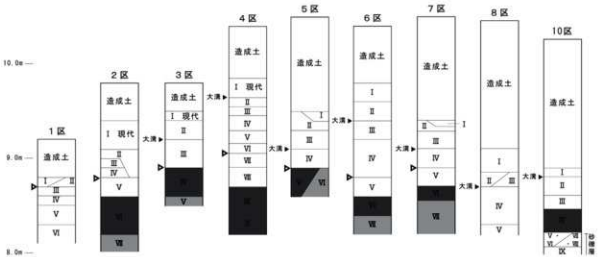
写真５　資料整理作業

写真６　保存処理作業

第２節　土層と堆積状況

調査区の現況はほぼ平坦で、現地表面での標高は静清バイパスの道路面で10.1mをはかる。静清バイパスを挟んで、丘陵を控えた北東側は標高値が上がり、庵原川の流域にあたる北西から南、さらに駿河湾を控えた東側は標高値が下がってくる。

調査範囲が東西230m近くに及び、遺跡内の堆積物は河川堆積物が主体であるため、調査区によって堆積している土層が異なっている。したがって、標準土層を設定して標準的な土層番号を付けることができなかった。丘陵に近い静清バイパス北側の２区から８区の土層堆積は、地区によって土層の発色や土質の違い、中間層の有無があるものの、概ね上層から①整地層、②褐灰色シルト質土層、③黒褐色シルト～粘質土層、④黒褐色粘土層、⑤還元化した青灰色粘土層の順に堆積していることが確認できる。①から④の土層については、各層とも酸化鉄を多く含み、一部は赤化している箇所が見られる。河川に近い10区と、バイパス南側の調査区については、最下層に平野の基盤層である沖積作用によって運ばれた砂または砂礫土、その直上にバイパス北側の調査区の④層に相当すると思われる発色の悪い黒褐色粘土層が堆積していることが確認できる。上層については、調査区によって堆積している土層の差異が大きく、傾向を把握することは不可能であった。



1区
I　にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト質土　粘性あり　しまり強　酸化鉄多量に含む　カーボン粒少量含む
II　暗青灰色土　5B6/1　粘性あり　しまり強　酸化鉄多量に含む
III　褐灰色　10YR6/1　シルト質土　粘性あり　しまり強　酸化鉄多量に含む　砂礫少量含む　遺構確認面
IV　灰色　10YR7/1　シルト質土　粘性強　しまり強　酸化鉄多量に含む　カーボン粒微量含む
V　褐灰色　10YR6/1　シルト質土　粘性強　しまり強　酸化鉄多量に含む　カーボン粒微量含む
VI　褐灰色　10YR5/1　シルト質土　粘性強　しまり強　酸化鉄中量含む

2区
I　にぶい黄褐色　10YR4/2　シルト質土　粘性ややあり　しまりあり　カーボン粒、
φ1～5mm程の礫、遺物（近代）少量含む
II　褐黄灰色～にぶい黄褐色　10YR6/2～4/3　シルト質土　粘性なし　しまり強　砂礫少量含む
φ1～5mm程の礫、酸化鉄多量に含む　酸化鉄により黄色をなす
III　褐色土　10YR4/4～4/6　粘性あり　しまりあり　カーボン粒少量含む
下層のV層ブロック少量含む
IV　にぶい黄褐色～褐色土　10YR5/4～4/4　粘性あるはなし　しまり強　カーボン粒微量含む
本来は灰黄褐色の土が酸化鉄の影響を受けた
V　褐灰色土　10YR5/1　粘性強　しまりあり　砂粒少量含む　酸化鉄多量に含む　遺構確認面
VI　黒褐色　10YR 2/3　粘土　1mmはV下の礫中量含む　砂岩か
VII　オリーブ黒色　5Y3/1～3/2　シルト質粘土　黒色粘土が混じる　還元化の影響が青色を呈す

3区
I　灰黄褐色土　7.5YR4/2　粘性弱　しまり強　φ0.5～1mm程のブロックを微量含む　現代の撹乱層
II　褐灰色　10YR4/1　シルト　粘性あり　しまり強　φ1～10mm程のブロックを多量含む
III　褐灰色　10YR6/1　砂質シルト　粘性やや強　しまりあり　酸化鉄を斑状に多量に含む
遺構確認面
IV　黒色土　10YR2/1　粘性あり　しまり強　φ1～10mm程の酸化鉄を粒状に中量含む　遺構確認面
V　青黒色　10B2/1　粘土　粘性強　しまり弱　粒状の酸化鉄少量含む

4区
I　褐灰色　10YR5/1　粘土質シルト　粘性弱　しまり強　4～5mcXの酸化鉄粒多く含む
II　褐灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粘性弱　しまり強　4～5mcXの酸化鉄粒多く含む
遺構確認面
III　褐灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粘性強　しまり強　4～5mcXの酸化鉄粒多く含む
一部は酸化鉄の影響により赤色している
IV　褐灰色　10YR4/1　シルト　粘性なし　しまり強　4～5mcXの酸化鉄粒少量含む
V　黒褐色　10YR3/1　シルト　粘性なし　しまり強　4～5mcXの酸化鉄粒多く含む
VI　黒褐色　10YR3/1　粘質土　粘性弱　しまり強　細粒～2mcXの酸化鉄粒多く含む
VII　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまりやや強　細粒～2mcXの酸化鉄粒多く含む
遺構確認面
VIII　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　上層は細粒～5mcXの酸化鉄粒多く含む
一部は酸化鉄の影響により赤化している　下層は2～3mcXの酸化鉄粒多く含む
IX　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質
X　明オリーブ灰色　5G7/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質

5区
I　褐灰色　10YR6/1　砂質　粘性弱　しまりやや弱　酸化鉄多量に含む
II　褐灰色　10YR4/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　φ～1cm程の砂礫中量含む
一部は酸化鉄の影響により赤色をなす
III　褐灰色　10YR4/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄多量に含む
IV　黒褐色　10YR3/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄多量に含む　遺構確認面
V　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄多量に含む　一部は酸化鉄の影響により赤色をなす
VI　青黒色　10B2/1　粘土　粘性強　しまり強　遺構確認面

6区
I　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
II　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
III　黒褐色　7.5YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　遺構確認面
IV　暗褐色　7.5YR3/2　粘質土　粘性強　しまり強
V　暗褐色　7.5YR3/2　粘土　粘性強　しまり強　遺構確認面
VI　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性強　しまり強　軟質　酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化している
VII　灰色　N4/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質　還元化の影響が青色を呈す

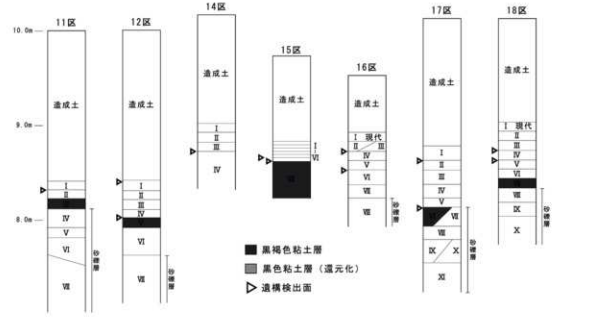
7区
I　黒褐色　10YR3/2　シルト　粘性あり　しまりなし　酸化鉄の影響を受けてより黄色をなす
II　褐灰色土　10YR4/1　粘性あり　しまりなし　酸化鉄を中量含み、その影響で一部は黄色、赤色をなす
III　黒褐色　10YR3/1　シルト　粘性あり　しまり弱　酸化鉄の影響で赤色をなす
IV　黒色　10YR2/1　粘質シルト　粘性あり　しまり強　酸化鉄の影響で赤色をなす　遺構確認面
V　黒褐色　10YR3/2　粘質シルト　粘性やや弱　しまり弱　酸化鉄の影響を強く受けてより黄色をなす　本来は黒褐色（10YR3/1）だったと思われる
遺構確認面
VI　暗灰色　N/3　粘土　粘性強　しまり弱
VII　暗青灰色　10B6 3/1　粘土　粘性強　しまり弱　青灰色（10B6/1）の砂が混じる　還元化の影響のため青い

8区
I　褐灰色　10YR6/1　シルト　粘性あり　しまり強　酸化鉄中量含み、その影響で赤色をなす
II　褐灰色土　10YR4/1　粘性あり　しまりなし　酸化鉄中量含み、その影響で赤色をなす
φ～2cm程の砂礫を少量含む
III　黒褐色　10YR3/1　シルト　粘性強　しまりあり　酸化鉄多多量に含み、その影響で赤色をなす
IV　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄多多量に含み、その影響で黄色をなす
遺構確認面
V　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄微量含む

10区
I　褐灰色土　10YR4/1　粘性なし　しまり強　酸化鉄中量含み、その影響で赤色をなす
II　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性あり　しまり弱　酸化鉄中量含み、その影響で褐色をなす
遺構確認面
III　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性あり　しまり弱　酸化鉄多量含み、その影響で赤色をなす
IV　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性あり　しまり強い　酸化鉄少量含む
V　灰黄褐色　10YR4/2　砂質　粘性なし　しまりかなり弱　酸化鉄少量含む
明瞭より砂が細い
VI　黒褐色　10YR3/1　砂質シルト　粘性あり　しまり弱　酸化鉄多少量含む
VII　褐灰色　10YR4/1　砂質シルト　粘性なし　しまりかなり弱　酸化鉄少量含む
VI層よりも砂質強
VIII　褐灰色　10YR4/1　砂質　粘性なし　しまりかなり弱　酸化鉄少量含む
IX　褐灰色　10YR5/1　砂質　粘性なし　しまり弱　VIII層よりも砂が細かい
上層になるにしたがって黒色へ変化する

0　1:200　5m

第5図　基本土層図1



11区
Ⅰ　にぶい黄褐色　10YR5/3　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒少量含む
Ⅱ　褐灰色　10YR5/1　粘土　粘性強　酸化鉄斑状に混じる　遺構確認面
Ⅲ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強
Ⅳ　黒色　10YR2/1　粘砂　粘性なし　しまりやや強　酸化鉄斑状に混じる
Ⅴ　黒褐色　10YR3/1　礫混じり粘砂　粘性なし　しまりやや強　10cm大の礫が密集する
Ⅵ　褐灰色　10YR5/1　礫混じり粘砂　粘性なし　しまりやや強　10cm大の礫を含み、一部密集する
Ⅶ　にぶい黄褐色　10YR5/4　粘砂　粘性なし　しまりやや強　10cm大の礫を含む

14区
Ⅰ　黒褐色　10YR3/1　シルト
Ⅱ　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト質粘土　炭化米を含む
Ⅲ　灰オリーブ　5Y5/2　シルト　白色火山灰を含む
Ⅳ　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり　上位に円礫あり　鉄分沈澱　基場検出面

15区
Ⅰ　暗褐色　10YR3/3　シルト　粘性あり　しまりあり（第179図1層）
Ⅱ　褐灰色　10YR4/1　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粘分少量混じる
Ⅲ　黒褐色　2.5Y3/1　シルト　粘性あり　しまりあり（第179図3層）
Ⅳ　明黄灰色　2.5Y5/1　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　灰色粘土ブロック混じる（第179図4層）
Ⅴ　オリーブ黒色　5Y3/2　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　上部に炭化物（米）層を形成（第179図5層）
Ⅵ　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　白色火山灰含む（第179図6層）遺構確認面
Ⅶ　オリーブ黒色　5Y3/1　シルト質粘土　粘性あり　しまりあり（第179図7層）遺構確認面

16区
Ⅰ　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂質土　粘性あり　しまりあり　径1～10mmの灰色砂質土を中量、径1～5mmの炭化物を微量含む　旧耕作土か
Ⅱ　オリーブ黒色　5Y3/1　粘土　粘性強　しまりあり　径1～20mmの灰色粘土を中量含む　鼻下部には層厚10～30mmの炭化物が薄中して堆積
調査区北側でのみ確認
Ⅲ　灰オリーブ色　5Y4/2　粘土　粘性あり　しまりあり　径1～20mmの灰色砂質土を少量、径1～3mmの炭化物を微量含む
Ⅳ　暗オリーブ灰色　2.5GY3/1　粘土　粘性強　しまりあり　径1～30mmの褐灰色粘土を少量含む　遺構確認面
Ⅴ　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまりあり　径～1mmの白色粒子を微量、径1～2mmの炭化物を微量含む
Ⅵ　灰黄褐色　10YR5/2　粘土　粘性強　しまりあり　径1～20mmの褐灰色粘土少量含む　遺構確認面
Ⅶ　オリーブ灰色　2.5GY5/1　粘土　粘性強　しまりあり　径1～30mmの褐灰色粘土少量含む
Ⅷ　灰黄褐色　10YR5/2　砂質粘土　粘性あり　しまり弱　径1～20mmの褐灰色粘土少量含む

17区
Ⅰ　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性強　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む　白色粒多く含む
Ⅱ　暗色　10YR4/4（西半部）　淡褐色　7.5YR4/2（東半部）粘質土　粘性弱　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む　白色粒多く含む　遺構確認面
Ⅲ　暗褐色　10YR3/3　粘質土　粘性弱　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
Ⅳ　暗色　10YR4/4　粘質土　粘性弱　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
Ⅴ　黄褐色　10YR6/5　粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
Ⅵ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　遺構確認面
Ⅶ　黒褐色　10YR3/1（西半部）　褐灰色　7.5YR4/1（東半部）粘砂　粘性なし　しまり強
Ⅷ　灰黄褐色　10YR5/2　粘砂　粘性なし　しまり強
Ⅸ　灰色　5Y4/1　粘砂　粘性なし　しまり強
Ⅹ　黒褐色　7.5YR3/2　粘砂　粘性なし　しまり強
Ⅹ１　灰黄褐色　10YR5/2　粘砂　粘性なし　しまり強

18区
Ⅰ　灰オリーブ色　5Y4/2　砂土　粘性弱　しまりあり　径2～5mmの礫少量、径1～3mmの灰色粘土少量含む　旧耕作土
Ⅱ　黄褐色　2.5Y5/3　シルト　粘性あり　しまりあり　径1～20mmの灰オリーブ粘土を中量、径2～5mmの礫少量、径1～2mmの炭化物微量含む
Ⅲ　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　径1～5mmの灰オリーブ粘土少量、径1～2mmの炭化物微量含む
Ⅳ　暗褐色土　10YR3/3　粘性弱　しまりあり　径1～20mmの黄褐色砂質土少量、径～1mmは下の白色粒子少量、径1～5mmの炭化物微量含む　遺構確認面
Ⅴ　黒褐色土　10YR2/3　粘性あり　しまりあり　径1～20mmの黄褐色砂質土少量、径～1mmは下の白色粒子少量、鉄分少量含む　遺構確認面
Ⅵ　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性強　しまりあり　径1～20mmの明黄褐色粘土少量、鉄分多量含む
Ⅶ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまりあり　径1～20mmの明黄褐色粘土微量含む
Ⅷ　褐灰色　10YR4/1　砂質土　粘性あり　しまりあり
Ⅸ　灰色　5Y4/1　細粒砂　粘性なし　しまり弱
Ⅹ　灰オリーブ色　5Y4/2　細粒砂　粘性なし　しまり弱

0　1:200　5m

第６図　基本土層図２

第３節　遺構の概要

今回の調査では、試掘確認調査の結果をもとに、各地区１面～３面の遺構検出面を設定して調査を進めたが、土層の後世の撹乱による削平などにより、異なる時期の遺構が同一面で検出されている。１区・２区・８～11 区については当初２面の遺構検出面を設定したが、調査を進めた結果、遺構検出面は１面であることが確認された。また、３区～５区・７区については当初３面の遺構検出面を設定したが、調査を進めた結果、遺構検出面は２面であることが確認された。遺構の時期を、① SB1401 廃絶後（10 世紀前半：平安時代前期）～中近世、② SB1401 構築後（８世紀後半～９世紀初頭：奈良時代後期～平安時代初頭）～廃絶前（10 世紀前半：平安時代前期）、③ SB1501 構築後（６世紀後半～７世紀中頃：古墳時代後期）～ SB1401 構築前（８世紀後半～９世紀初頭：奈良時代後期～平安時代初頭）、④弥生時代後期～ SB1501 構築前（６世紀後半～７世紀中頃：古墳時代後期）の４期に分類し、時期別の全体図を掲載する（第 31 図～ 67 図）。

各地区の調査の概要は以下のとおりである。

１区：検出面は１面。時期不明の溝跡 SD0101 のみ検出された。

２区：検出面は１面。調査区東端部で西山田川（尾羽川）右岸の河道跡と考えられる NR0202 が検出された。NR0202 の右岸で近世の遺物を伴う井戸跡と考えられる SE0201 と SE0202 が検出された。

３区：検出面は２面。第１面で大溝が検出された。大溝は４区から 10 区にかけても検出されている。第２面で礎板を伴う柱穴 SP0308（弥生時代中期～後期）と SP0309（古墳時代中期～後期）、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が検出された。

４区：検出面は２面。第１面で大溝が検出された。第２面で礎板を伴う柱穴 SP0406 と SP0407（ともに８世紀前半）、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が検出された。

５区：検出面は２面。第１面で大溝が検出された。第２面で弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が検出された。

６区：検出面は２面。第１面で大溝が検出された。第２面で弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が検出された。

７区：検出面は２面。第１面で大溝が検出された。第２面で時期不明の溝跡が検出された。

８区：検出面は１面。大溝と、大溝と同時期に所属すると推定される溝跡が検出された。

９区：検出面は１面。調査区全体が大溝の中にある。

10 区：検出面は１面。大溝の他、平安時代の礎板を伴う柱穴 SP1003、古墳時代後期から奈良時代の溝跡と土坑、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡と土坑が検出された。

11 区：検出面は１面。弥生時代後期、古墳時代後期から奈良時代、中近世の溝跡と土坑が検出された。

12 区：検出面は２面確認されたが、第１面は撹乱を受けていた。第２面で弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡、土坑が検出された。

13 区：検出面は１面。西山田川（尾羽川）左岸の河道跡と考えられる NR1301 が検出された。

14 区：検出面は１面。調査区西側で基壇を伴う礎石建物跡 SB1401 が検出された。調査区東側では、SB1401 に先行する溝跡 SD1409、SD1409 に先行して築造された円墳 SX1425 が検出された。

15 区：検出面は２面。第１面で 10 世紀前半の炭化米集中遺構 SX1507 と溝跡が、古墳時代後期から平安時代に位置付けられる溝跡と土坑が検出された。第２面で、炭化米集中遺構 SX1507 の下層から、古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物跡 SB1501 が 16 区にもまたがって検出された。また、弥

生時代後期から古墳時代前期の溝跡と、弥生時代後期から SB1501 構築前のピットが検出された。

16 区：検出面は２面。第１面での検出遺構は少なく、弥生時代後期後半から古墳時代前期の溝跡 SD1618 と土坑 SK1607 が検出されたのみである。第２面で 15 区にまたがる掘立柱建物跡 SB1501 が検出された。また、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡と、弥生時代後期から SB1501 構築前のピットが検出された。

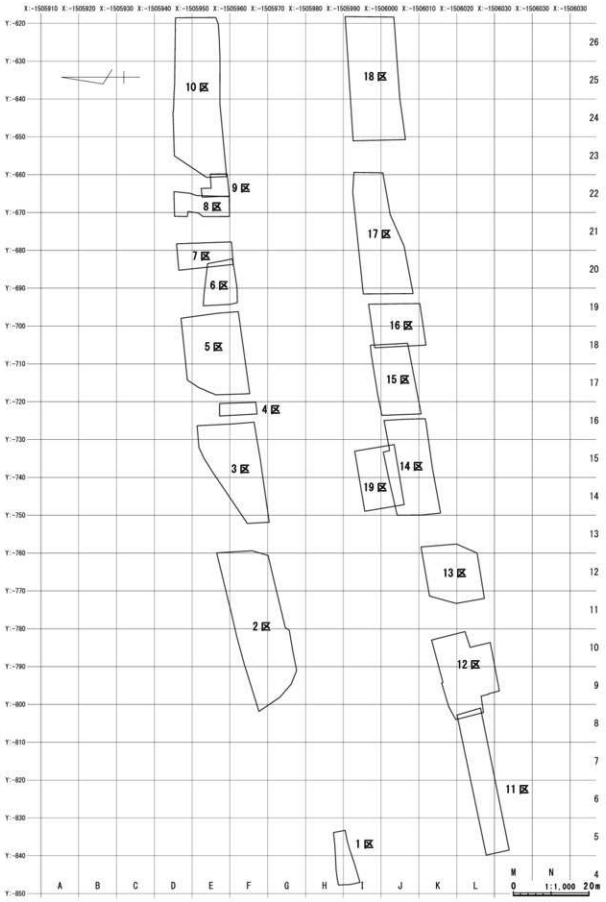
17 区：検出面は２面。第１面は、調査区西側では弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡、東側では古墳時代後期から奈良時代の溝跡が検出された。15 区・16 区の掘立柱建物跡 SB1501 とほぼ同じ規模の柱穴 SP1763 ～ 1765、弥生時代後期から SB1501 構築前と考えられる掘立柱建物跡 SB1701・1702 もこの面で検出された。第２面では調査区東側で弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が検出された。また、両面から弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物跡の痕跡と考えられる遺構が検出された。

18 区：検出面は２面。第１面は古墳時代後期から奈良時代の溝跡 SD1801 と土坑 SX1801、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡と土坑が検出された。第２面では調査区西側で弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡が検出された。

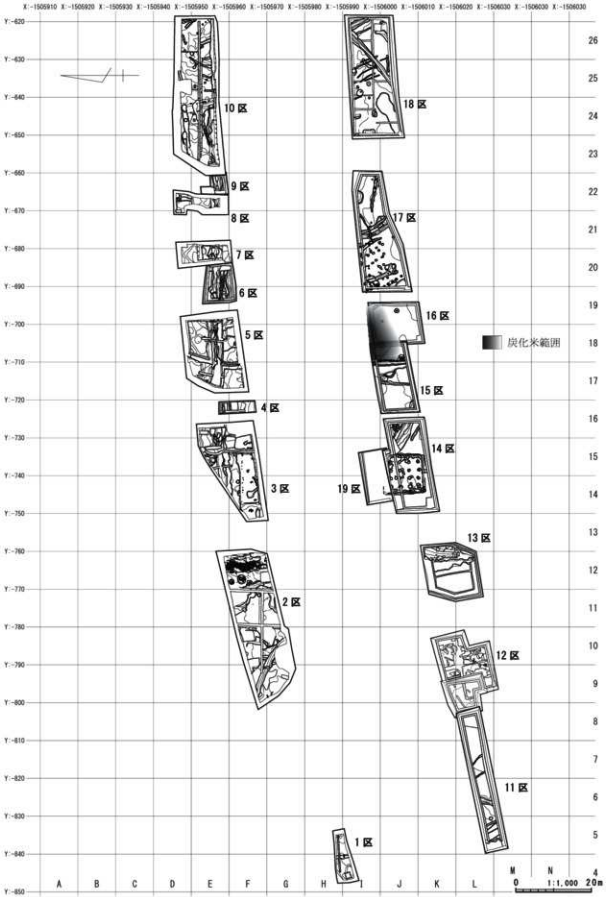
19 区：14 区に続いて検出された礎石建物跡 SB1401 の検出面を第１面とした。SB1401 検出時に、廃絶後の遺構である土坑とピットが検出された。基壇より下位で、14 区から続く溝跡 SD1409 と、弥生時代後期から古墳時代前期の土器集中地点が検出された。なお、礎石建物跡 SB1401 の基壇より下位で検出された遺構は第２面全体図（第９図）、同遺構配置図（第 28 図）に示した。

第４表　尾羽廃寺跡主要遺構一覧表

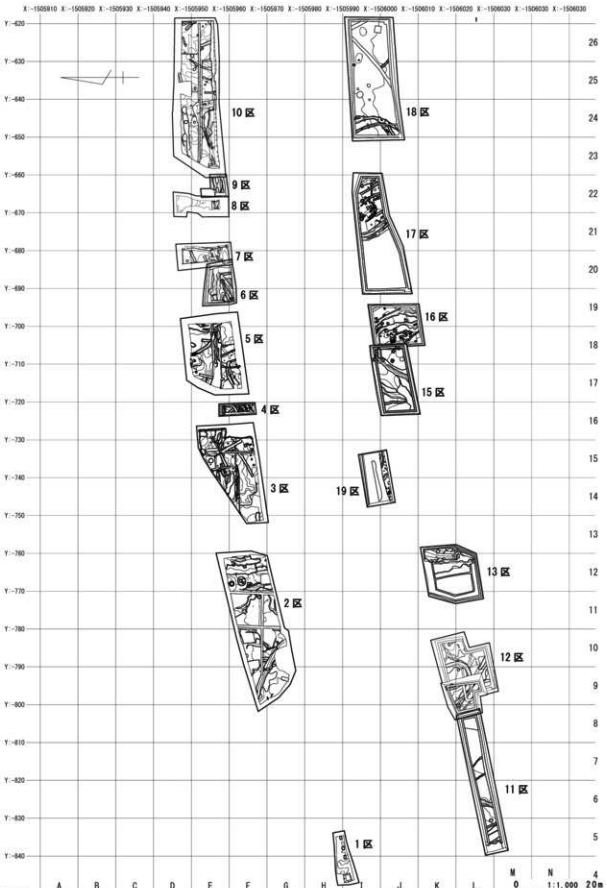
		SB1401 廃絶後～中近世	SB1401 構築後～廃絶前	SB1501 構築後 ～ SB1401 構築前	弥生時代後期 ～ SB1501 構築前
1 区					
2 区		河川跡 NR0202　溝 SD0201 井戸 SE0201・0202 自然流路 NR0201	自然流路 NR0201	自然流路 NR0201	
3 区	第１面		大溝	大溝	
	第２面			柱穴 SP0309	溝 SD0302 ～ 0306 柱穴 SP0308
4 区	第１面		大溝	大溝	
	第２面			柱穴 SP0406・0407	溝 SD0403 ～ 0405
5 区	第１面		大溝	大溝	
	第２面				溝 SD0508 ～ 0511
6 区	第１面	溝 SD0601	大溝	大溝	
	第２面				溝 SD0603 ～ 0605
7 区	第１面		大溝	大溝	
	第２面				
8 区			大溝　SD0801	大溝	
9 区			大溝	大溝	
10 区			大溝　柱穴 SP1003	大溝　溝 SD1001 土坑 SX1001	溝 SD1002　土坑 SX1004
11 区		土坑 SK1104		溝 SD1103	溝 SD1101・1102・1105
12 区	第２面				溝 SD1201・1204・1211・1212 土坑 SK1214
13 区		河川跡 NR1301			
14 区			礎石建物跡 SB1401	溝 SD1409　円墳 SX1425	
15 区	第１面		炭化物集中遺構 SX1507 溝 SD1501・1502	溝 SD1503・1504・1506 土坑 SK1508	
	第２面			掘立柱建物跡 SB1501	溝 SD1505・1556・1557
16 区	第１面				溝 SD1618　土坑 SK1607
	第２面			掘立柱建物跡 SB1501	溝 SD1619・1620　ピット
17 区	第１面			溝 SD1735・1739 柱穴 SP1763 ～ 1765	溝 SD1703・1728・1736・1737 掘立柱建物跡 SB1701・1702 竪穴建物状遺構　ピット
	第２面				溝 SD1770・1773　ピット
18 区	第１面			溝 SD1801・土坑 SX1801	溝 SD1802・1809・1815 土坑 SK1801・1802・1806
	第２面				溝 SD1803・1816
19 区			礎石建物跡 SB1401	溝 SD1409	土器集中地点


X:-1505910 X:-1505920 X:-1505930 X:-1505940 X:-1505950 X:-1505960 X:-1505970 X:-1505980 X:-1505990 X:-1506000 X:-1506010 X:-1506020 X:-1506030 X:-1506030 X:-1506030
Y:-620
Y:-630
Y:-640
Y:-650
Y:-660
Y:-670
Y:-680
Y:-690
Y:-700
Y:-710
Y:-720
Y:-730
Y:-740
Y:-750
Y:-760
Y:-770
Y:-780
Y:-790
Y:-800
Y:-810
Y:-820
Y:-830
Y:-840
Y:-850
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
10 区
9 区
8 区
7 区
6 区
5 区
4 区
3 区
2 区
1 区
18 区
17 区
16 区
15 区
14 区
19 区
13 区
12 区
11 区
M
N
0
1:1,000
20m

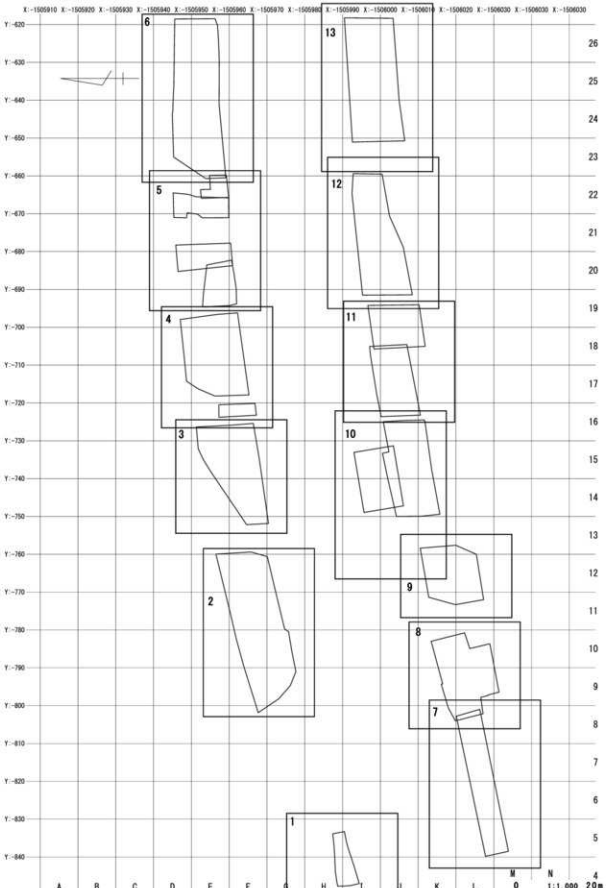
第７図　グリッド配置図


X:-1505910 X:-1505920 X:-1505930 X:-1505940 X:-1505950 X:-1505960 X:-1505970 X:-1505980 X:-1505990 X:-1506000 X:-1506010 X:-1506020 X:-1506030 X:-1506030 X:-1506030
Y:-620
Y:-630
Y:-640
Y:-650
Y:-660
Y:-670
Y:-680
Y:-690
Y:-700
Y:-710
Y:-720
Y:-730
Y:-740
Y:-750
Y:-760
Y:-770
Y:-780
Y:-790
Y:-800
Y:-810
Y:-820
Y:-830
Y:-840
Y:-850
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
10区
9区
8区
7区
6区
5区
4区
3区
2区
1区
18区
17区
16区
15区
14区
19区
13区
12区
11区
炭化米範囲
0
1:1,000
20m

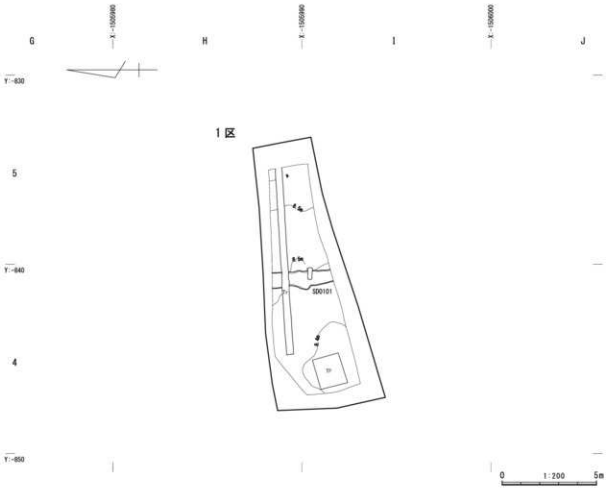
第８図　第１面全体図


X:-1505910 X:-1505920 X:-1505930 X:-1505940 X:-1505950 X:-1505960 X:-1505970 X:-1505980 X:-1505990 X:-1506000 X:-1506010 X:-1506020 X:-1506030 X:-1506030 X:-1506030
Y:-620
Y:-630
Y:-640
Y:-650
Y:-660
Y:-670
Y:-680
Y:-690
Y:-700
Y:-710
Y:-720
Y:-730
Y:-740
Y:-750
Y:-760
Y:-770
Y:-780
Y:-790
Y:-800
Y:-810
Y:-820
Y:-830
Y:-840
Y:-850
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
10 区
9 区
8 区
7 区
6 区
5 区
4 区
3 区
2 区
1 区
18 区
17 区
16 区
15 区
19 区
13 区
12 区
11 区
M
N
0
1:1,000
20m

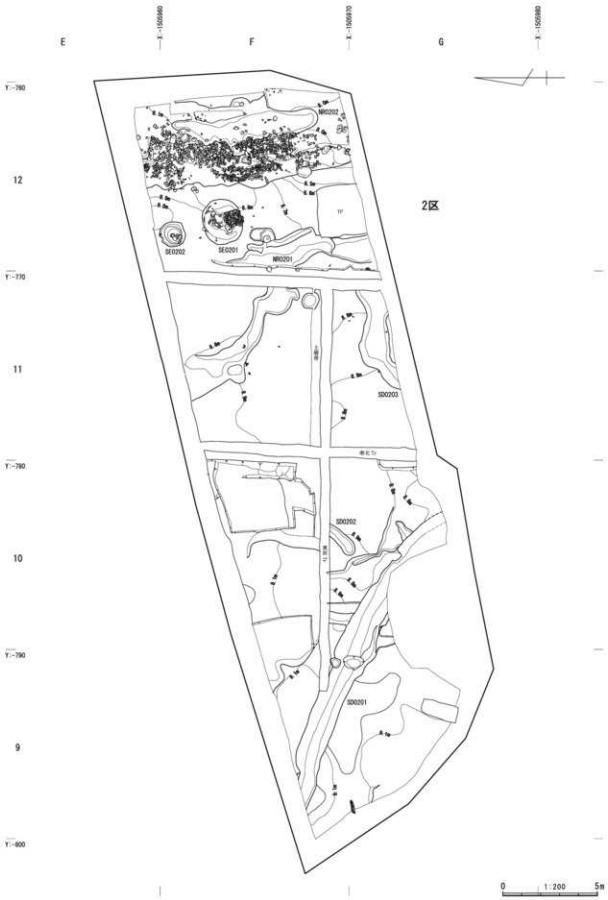
第９図　第２面全体図


X:-1505910 X:-1505920 X:-1505930 X:-1505940 X:-1505950 X:-1505960 X:-1505970 X:-1505980 X:-1505990 X:-1506000 X:-1506010 X:-1506020 X:-1506030 X:-1506030 X:-1506030
Y:-620
Y:-630
Y:-640
Y:-650
Y:-660
Y:-670
Y:-680
Y:-690
Y:-700
Y:-710
Y:-720
Y:-730
Y:-740
Y:-750
Y:-760
Y:-770
Y:-780
Y:-790
Y:-800
Y:-810
Y:-820
Y:-830
Y:-840
Y:-850
A B C D E F G H I J K L
26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
M N
0 1:1,000 20m

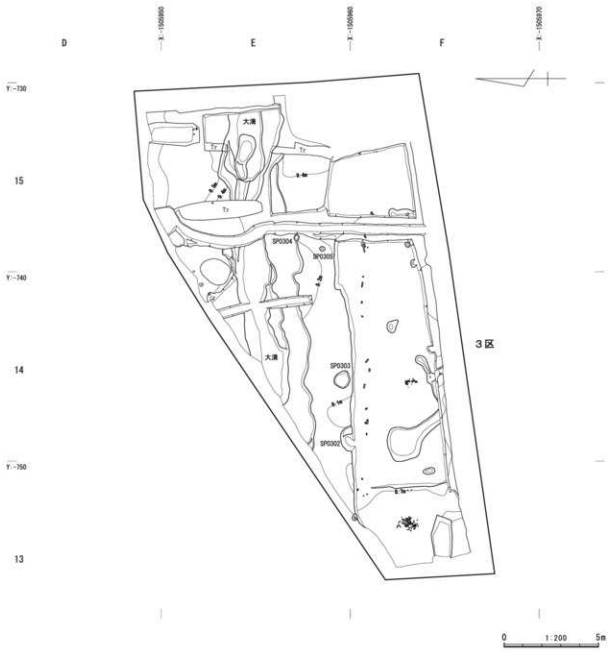
第10図　図郭割図



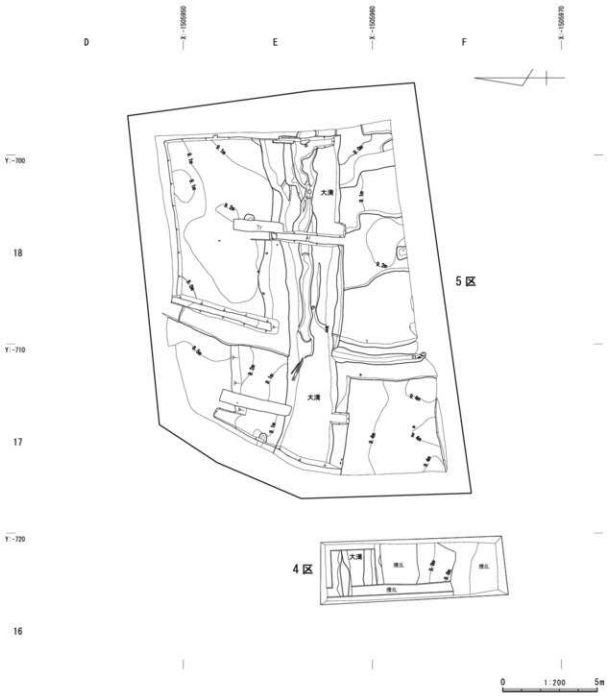
第11図　第1面遺構配置図1



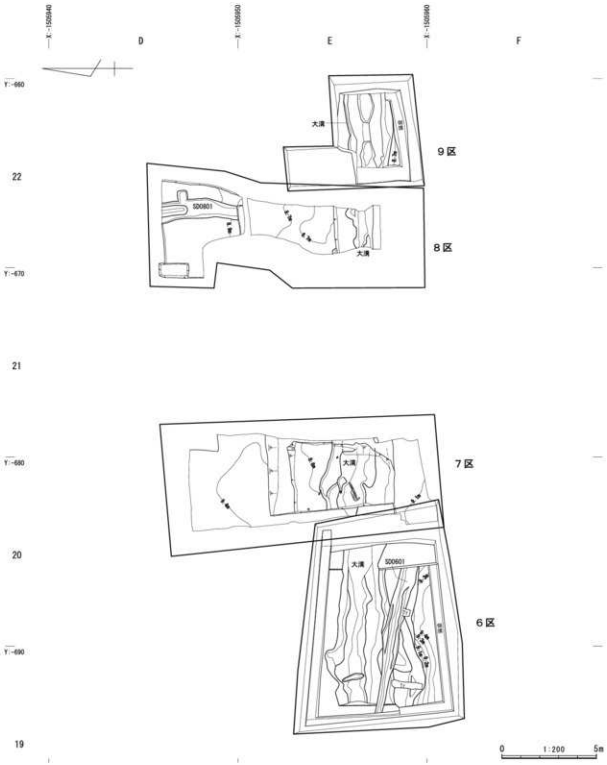
第12図　第1面遺構配置図2



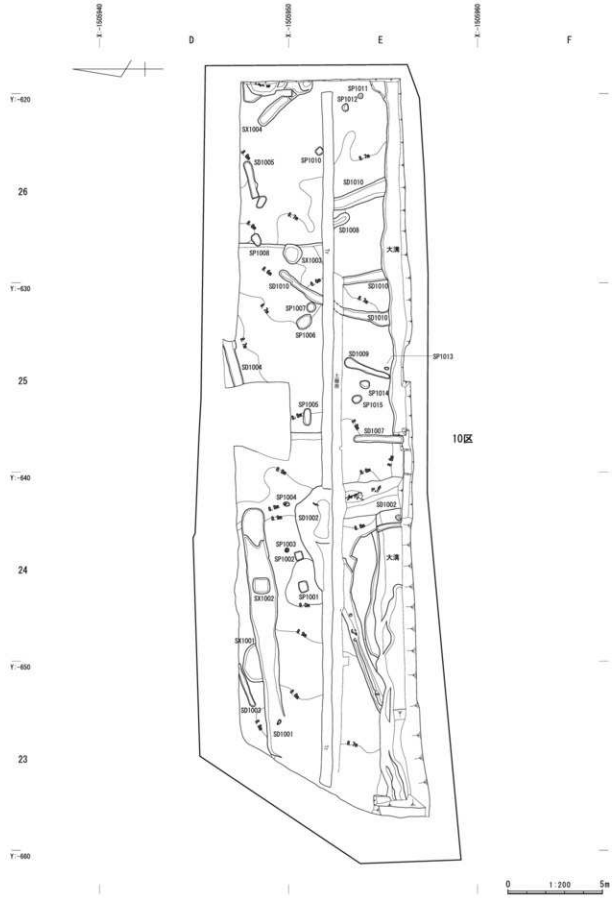
第13図　第1面遺構配置図3



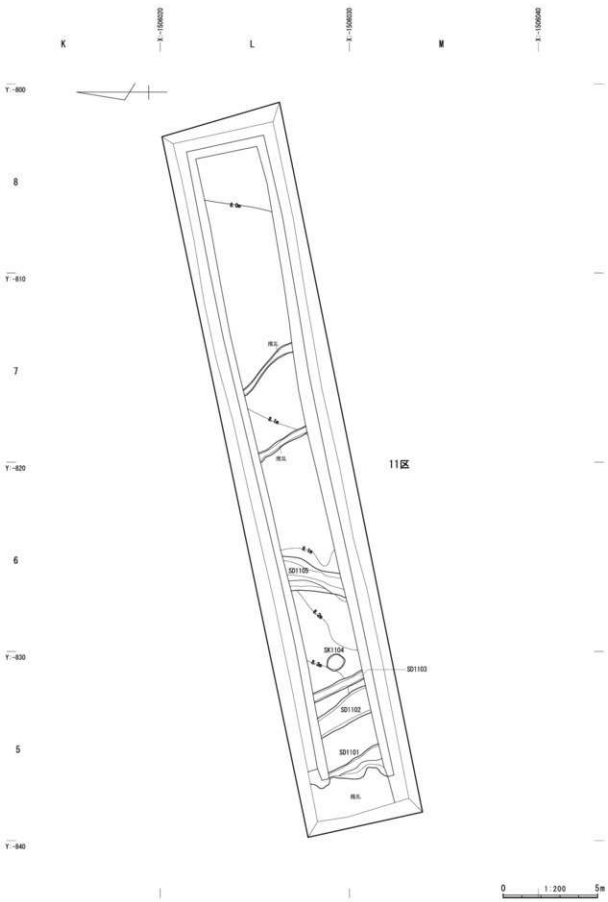
第14図　第1面遺構配置図4



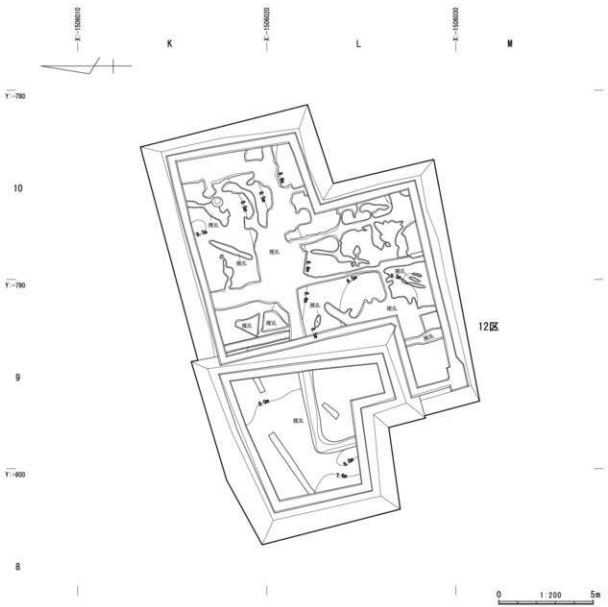
第15図　第1面遺構配置図5



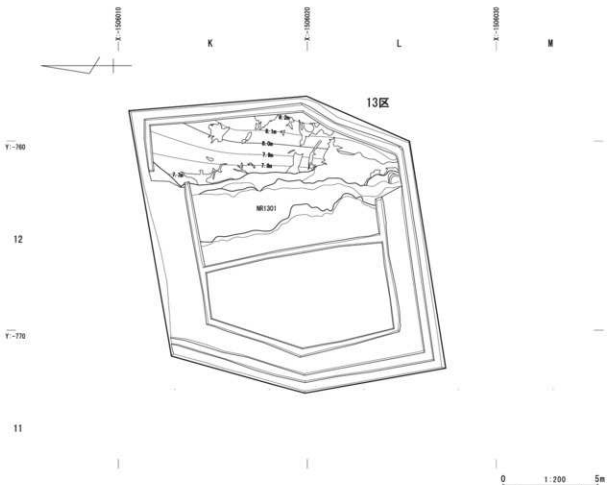
第16図　第1面遺構配置図6



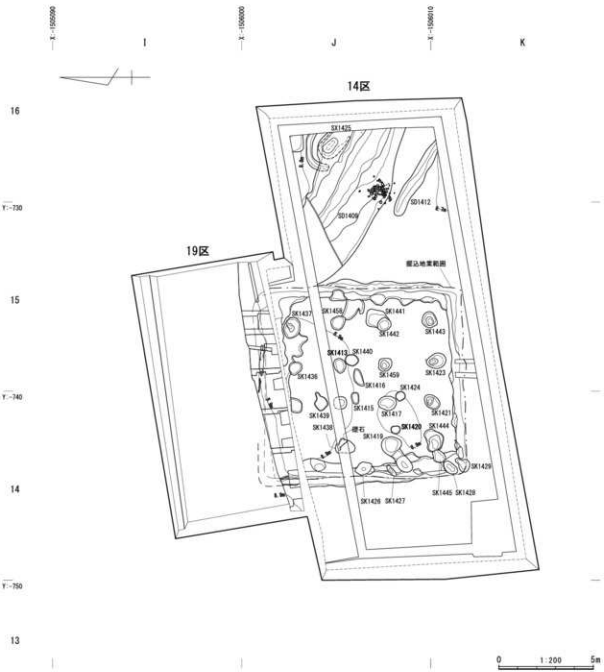
第17図　第1面遺構配置図7



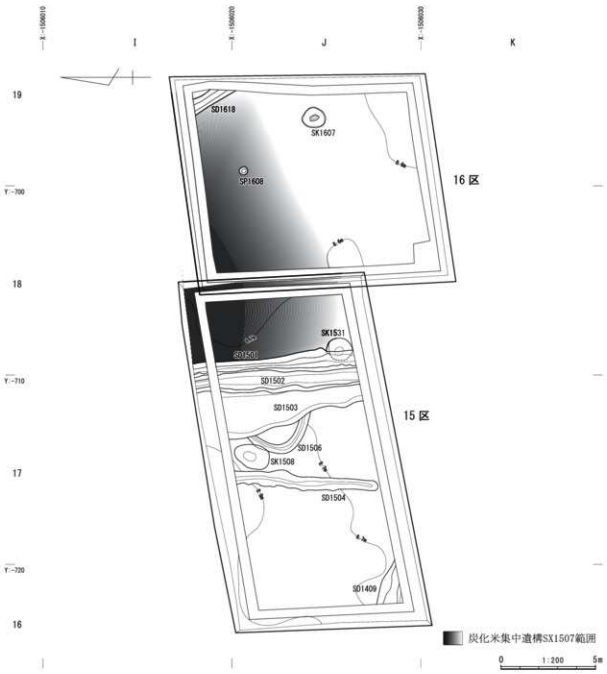
第18図　第1面遺構配置図8



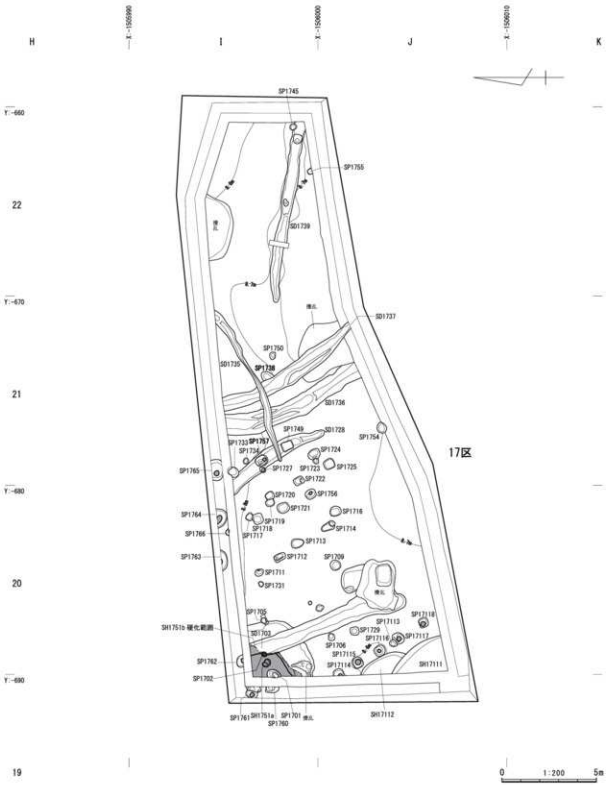
第19図　第1面遺構配置図9



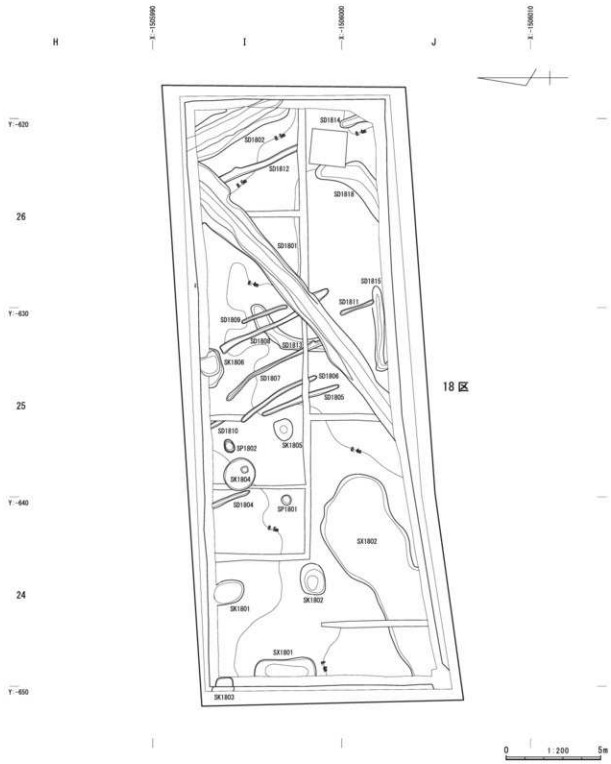
第20図　第1面遺構配置図10



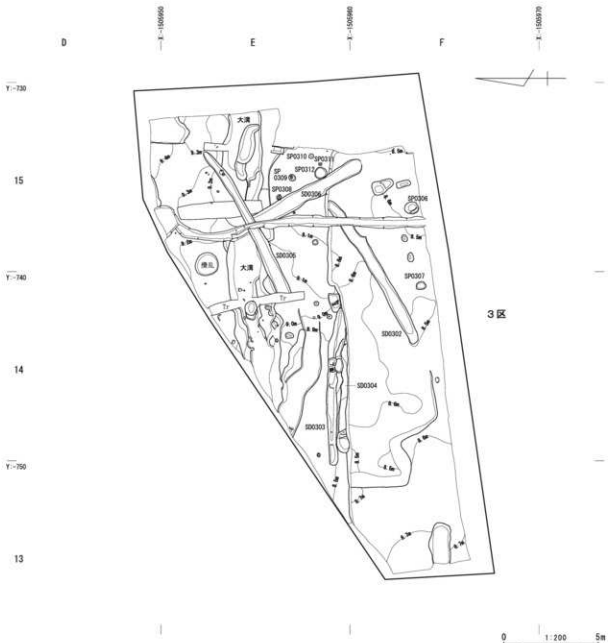
第 21 図　第 1 面遺構配置図 11



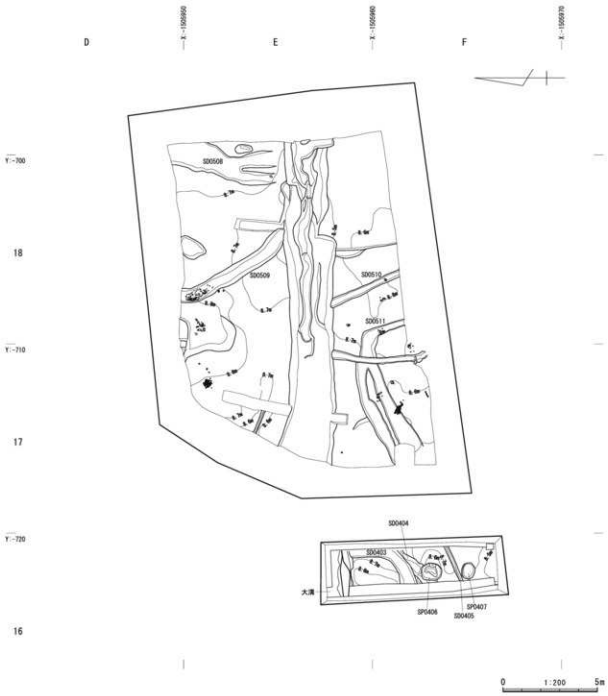
第22図　第1面遺構配置図12



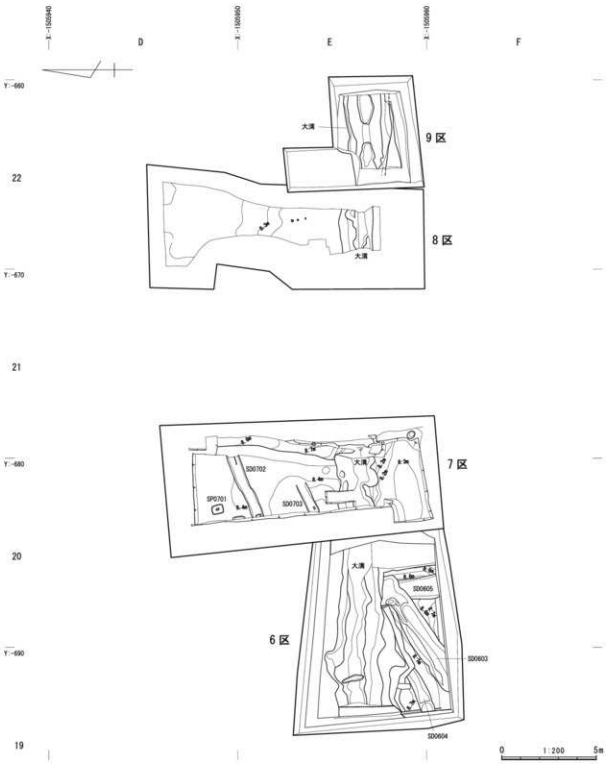
第23図　第1面遺構配置図13



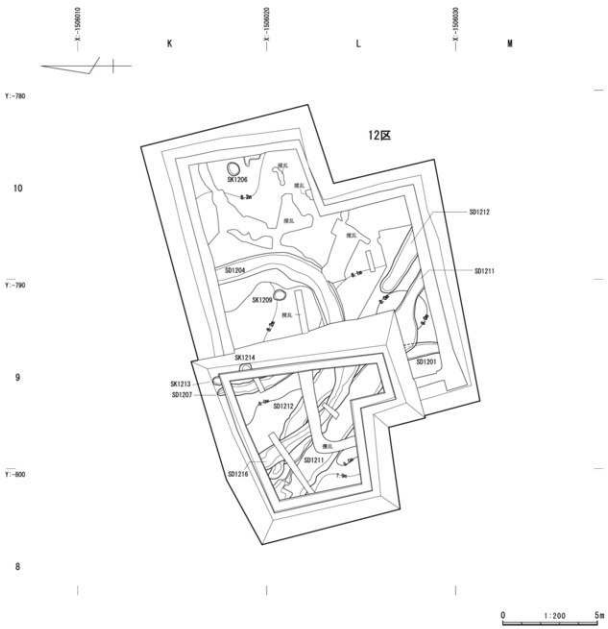
第 24 図　第 2 面遺構配置図 1



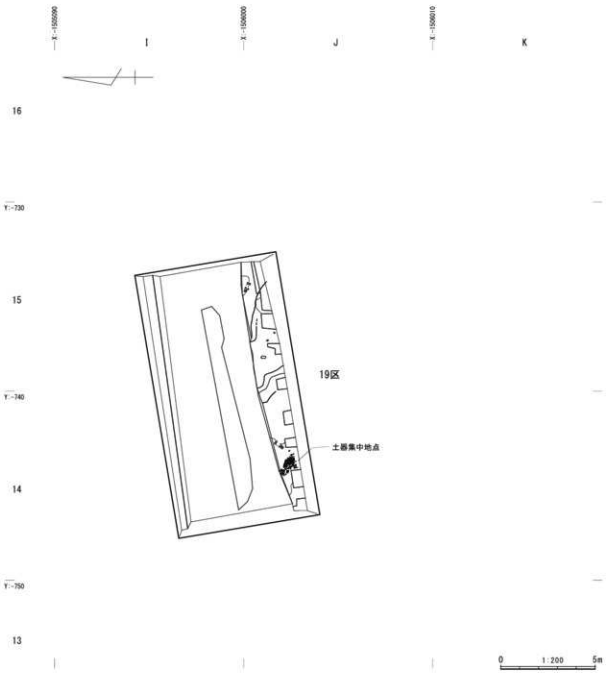
第25図　第2面遺構配置図2



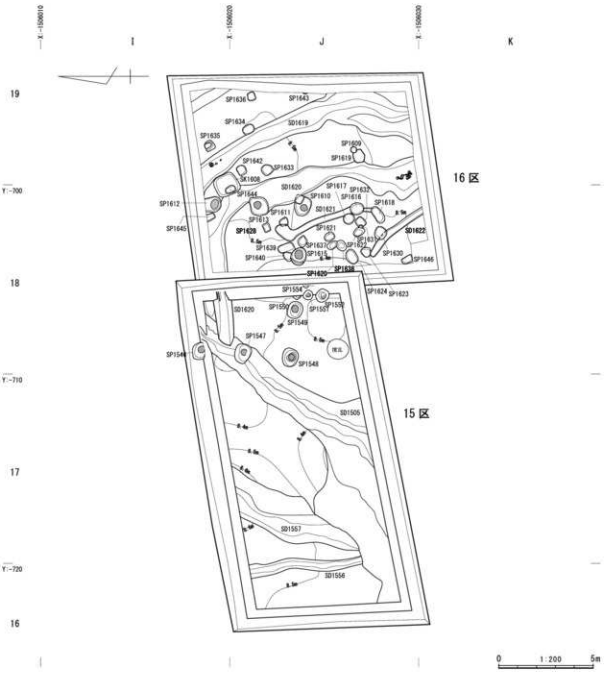
第26図　第2面遺構配置図3



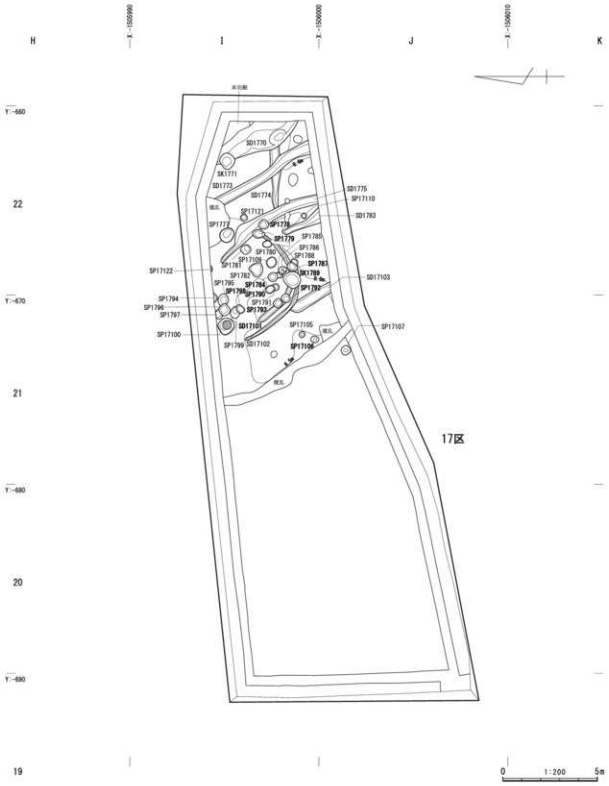
第27図　第2面遺構配置図4



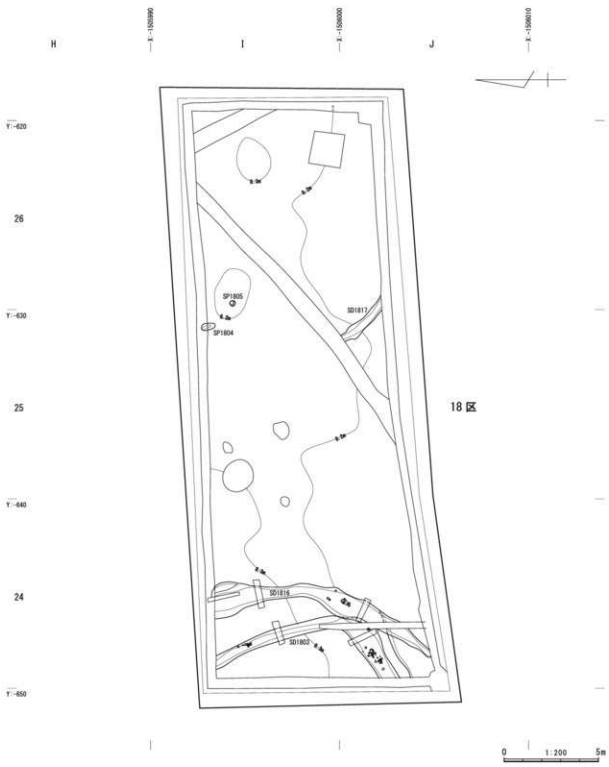
第28図　第2面遺構配置図5



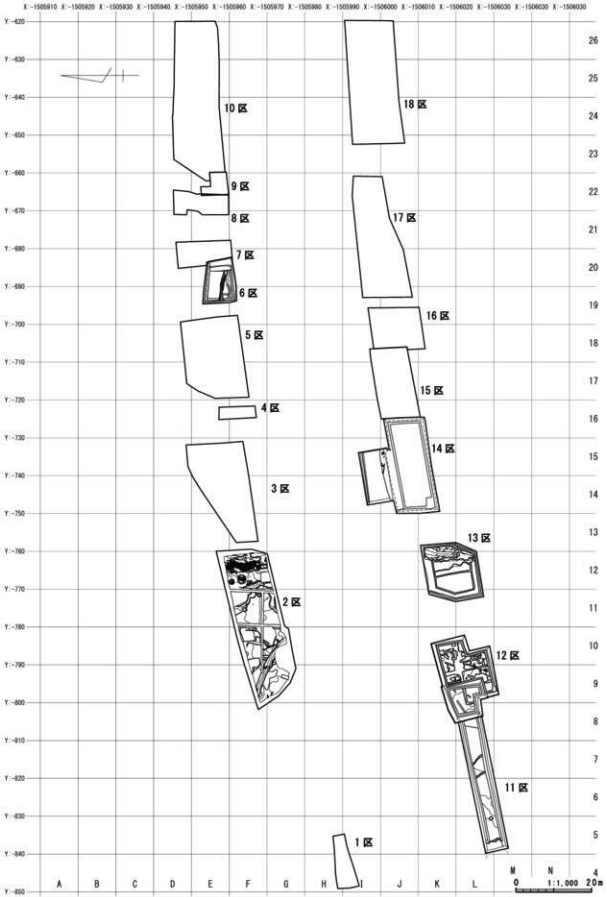
第29図　第2面遺構配置図6



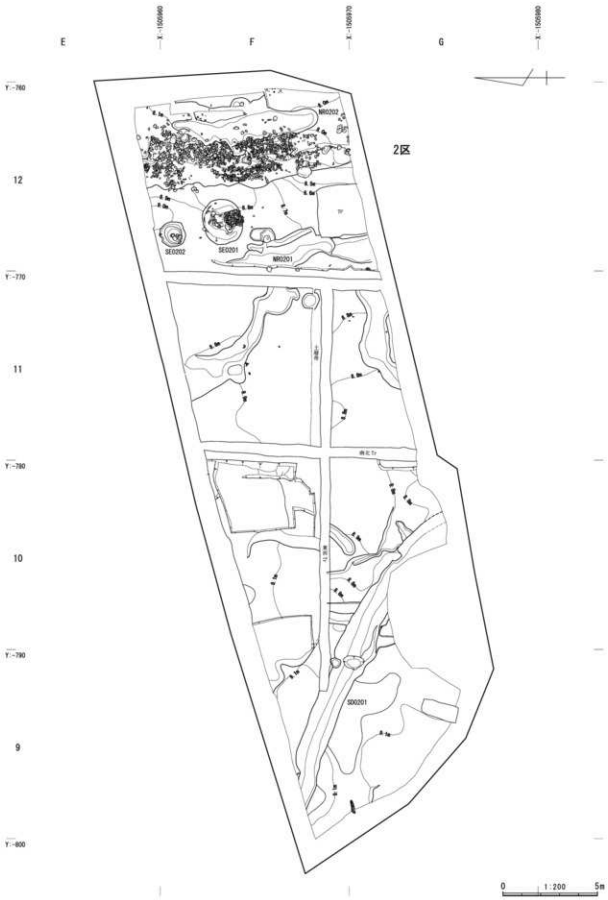
第30図　第2面遺構配置図7



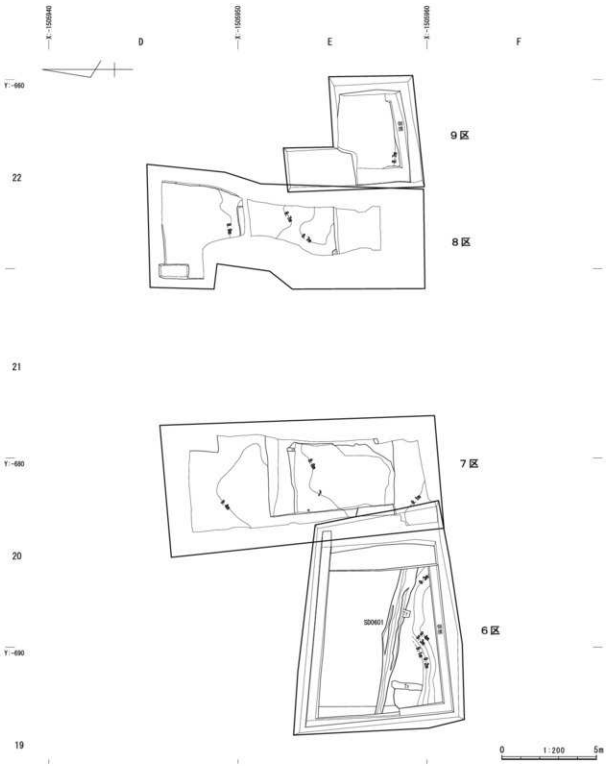
第31図　第2面遺構配置図8



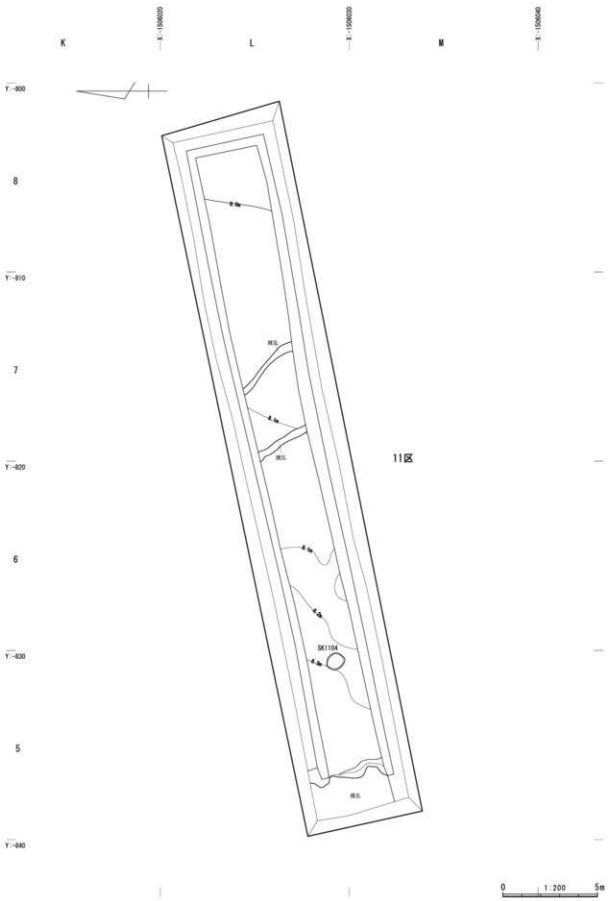
第 32 図　SB1401 廃絶後～中近世全体図



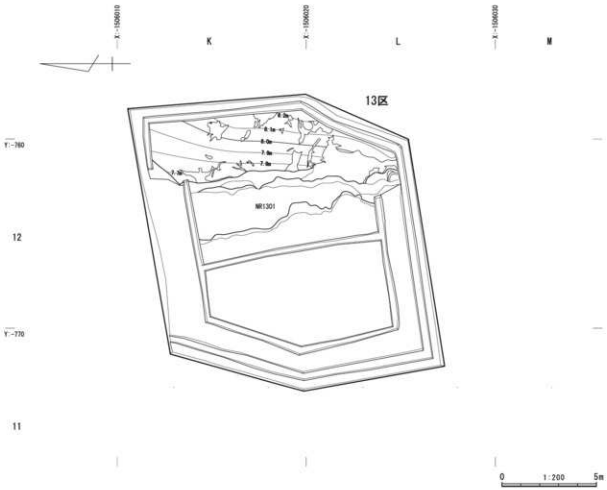
第33図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図1



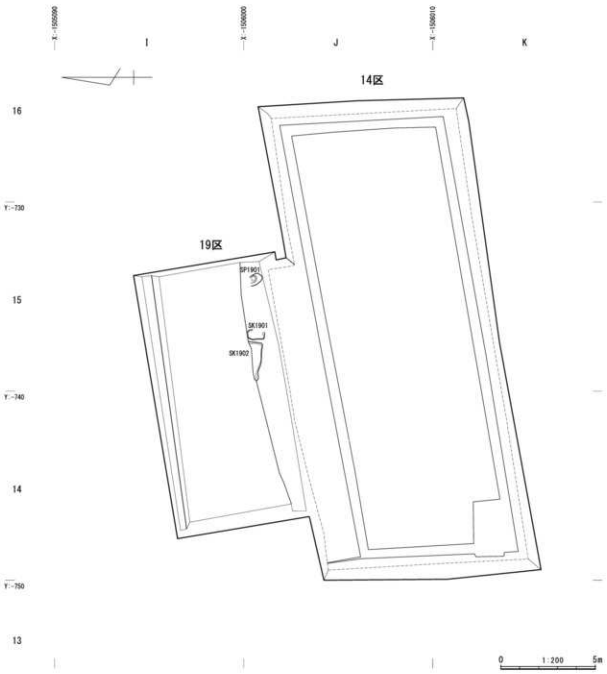
第34図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図2



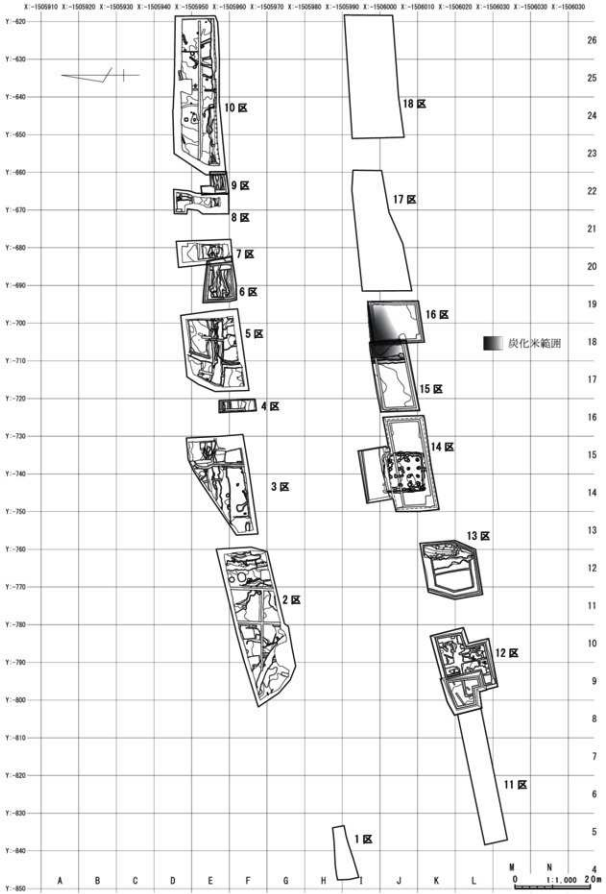
第35図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図3



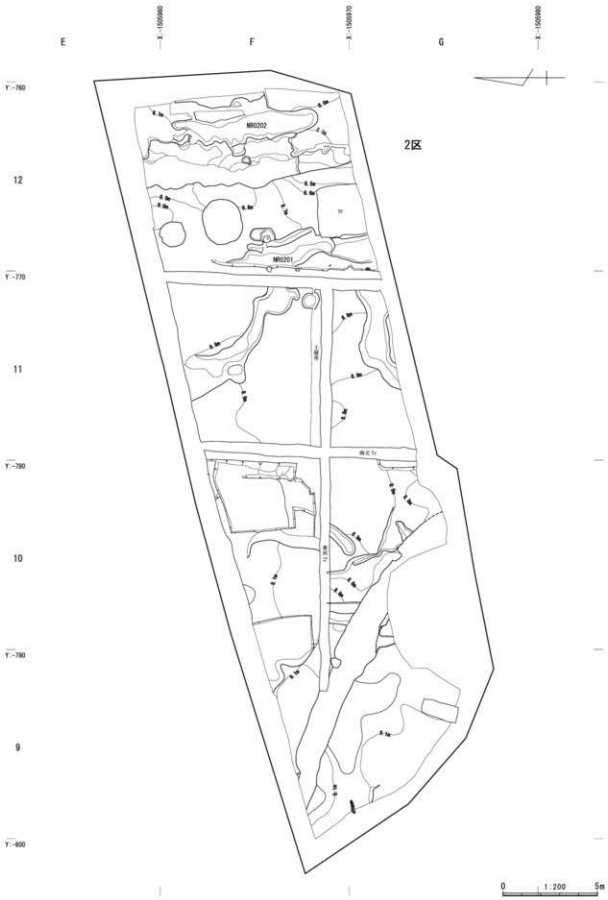
第36図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図4



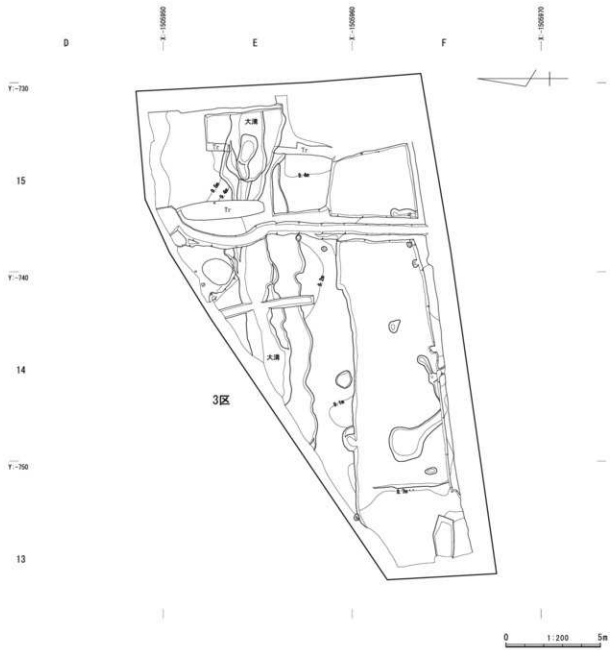
第37図　SB1401 廃絶後～中近世遺構配置図5



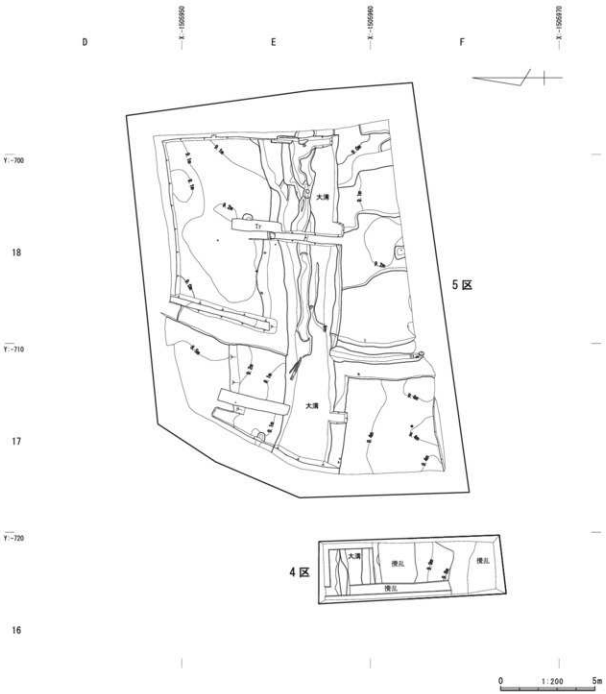
第38図　SB1401 構築後～廃絶前全体図



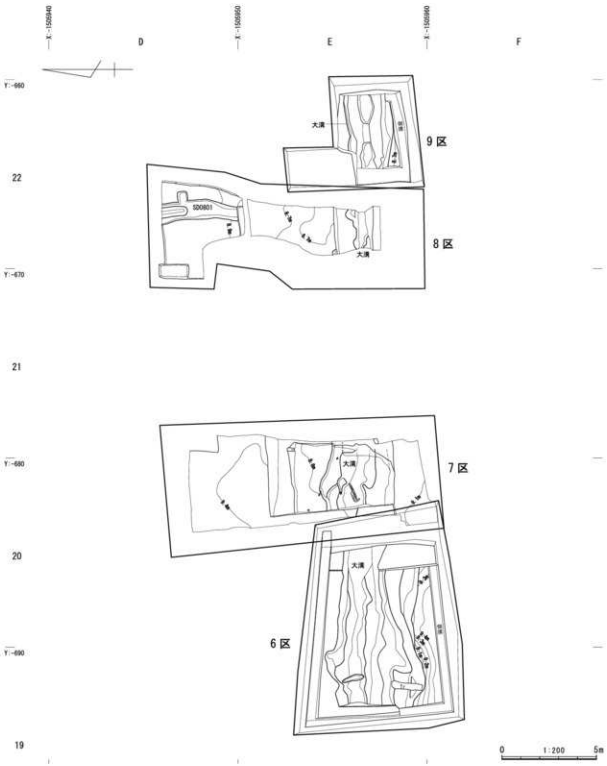
第39図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図 1



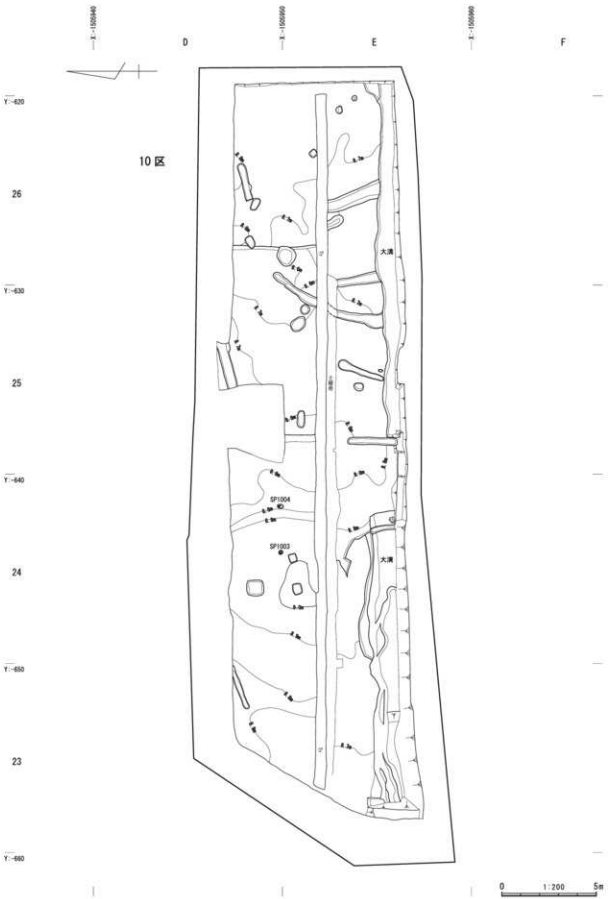
第 40 図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図 2



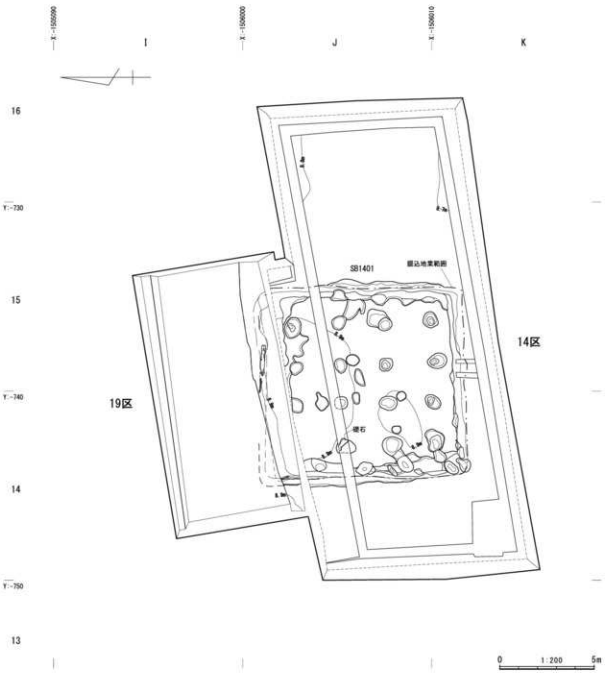
第41図　SB1401構築後～廃絶前遺構配置図3



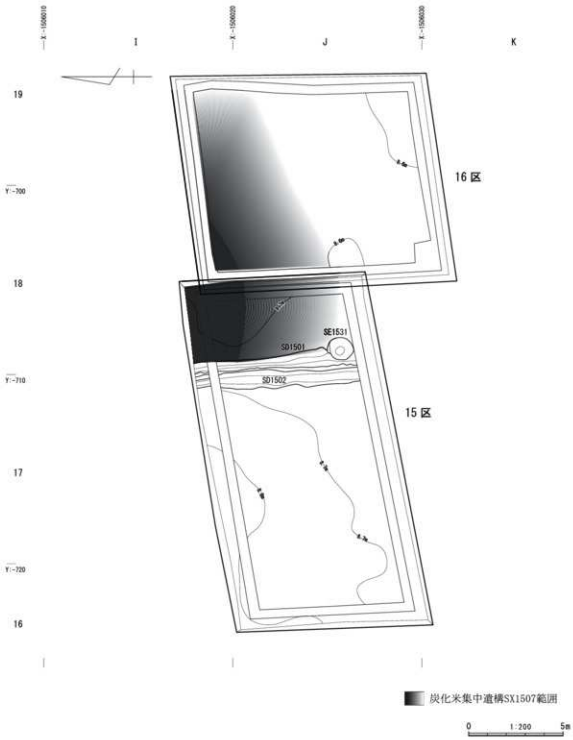
第42図　SB1401構築後～廃絶前遺構配置図4



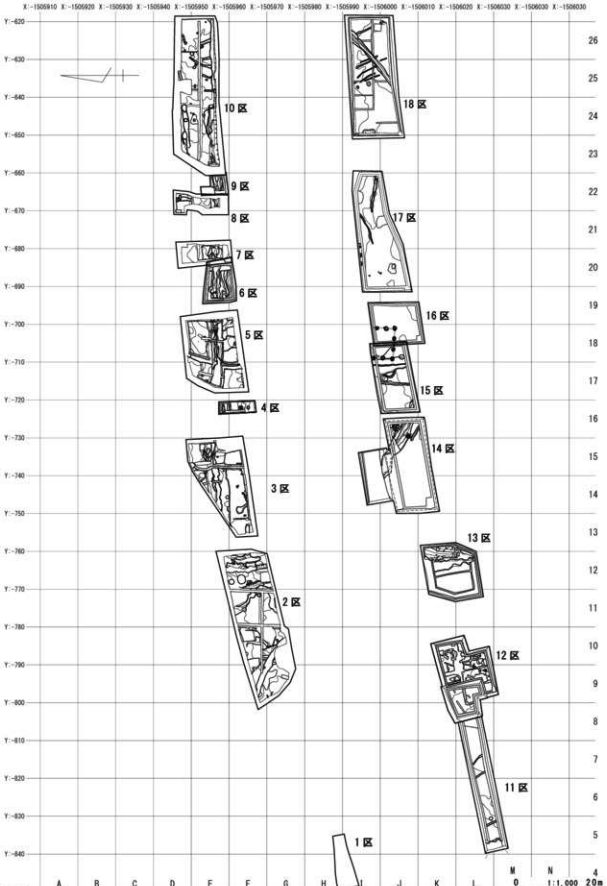
第43図　SB1401 構築後～廃絶前遺構配置図5



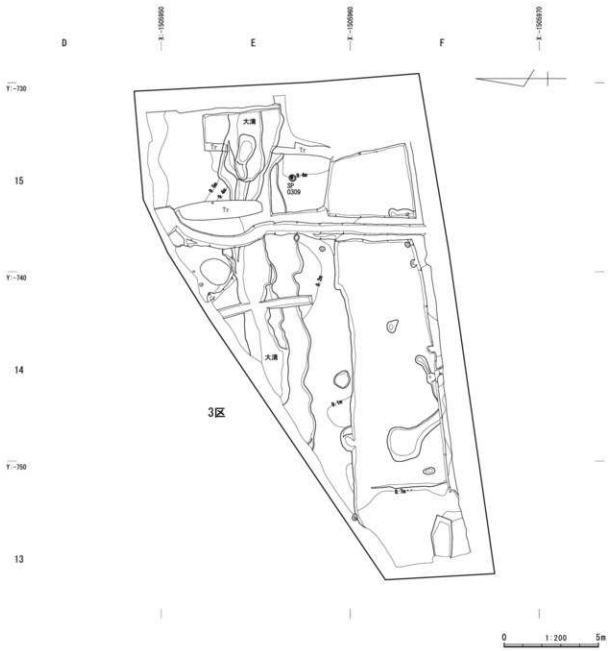
第44図　SB1401構築後～廃絶前遺構配置図6



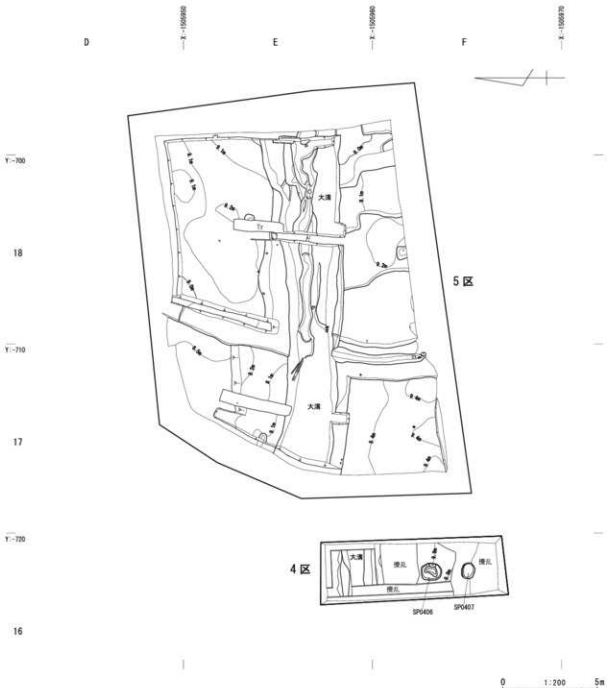
第45図　SB1401構築後～廃絶前遺構配置図7



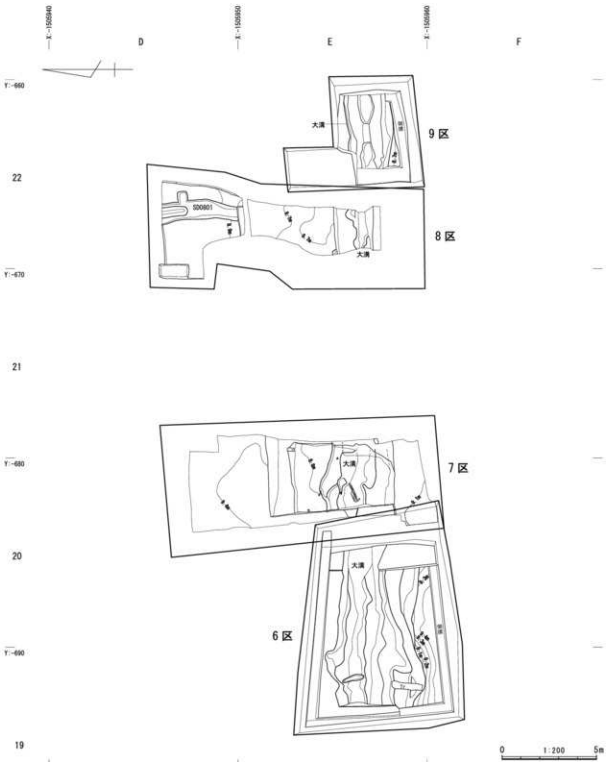
第46図　SB1501構築後～SB1401構築前全体図



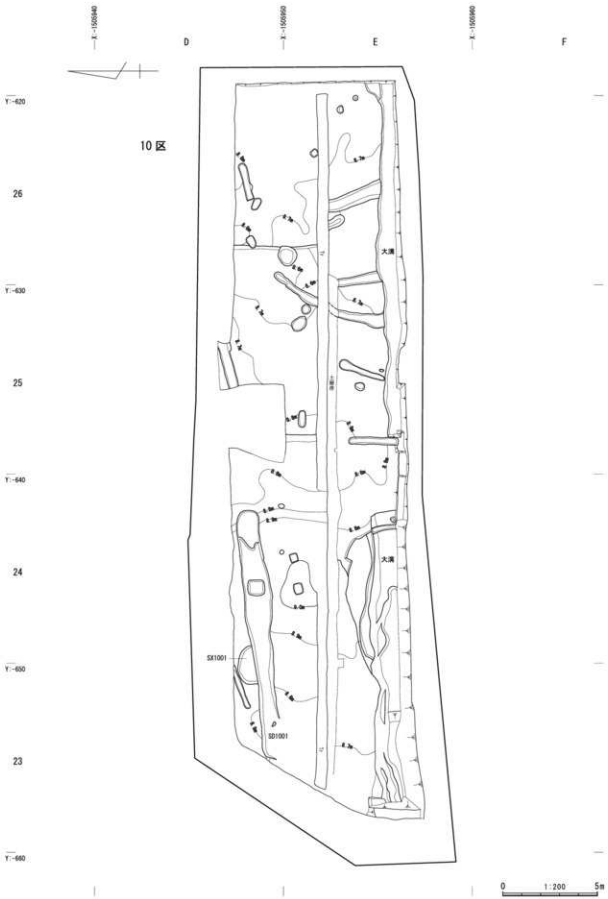
第 47 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図 1



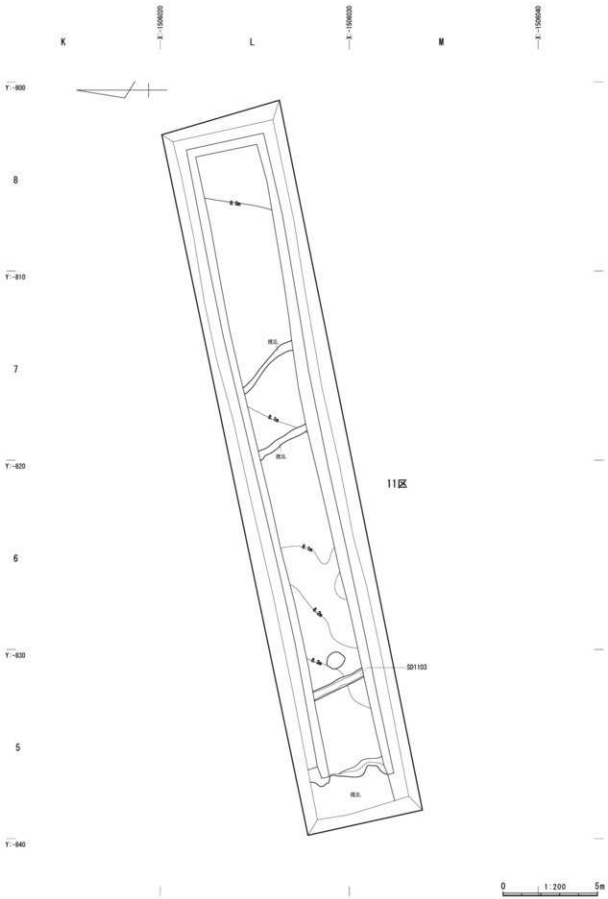
第 48 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図 2



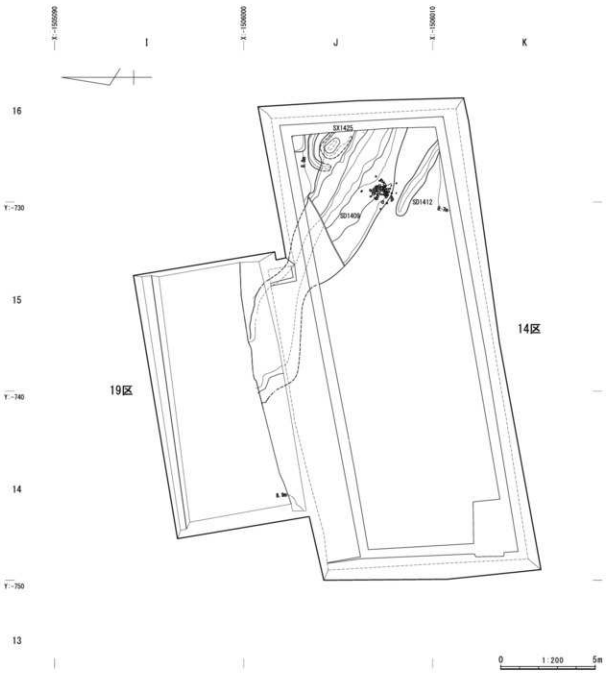
第49図　SB1501構築後～SB1401構築前遺構配置図3



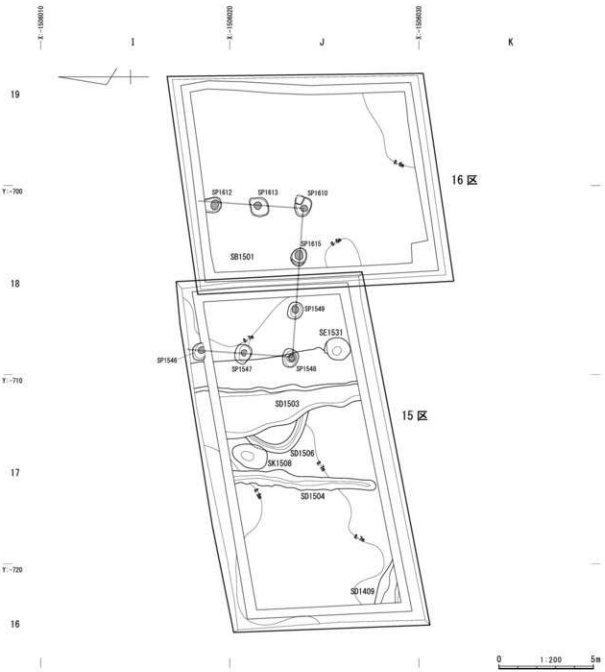
第 50 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図 4



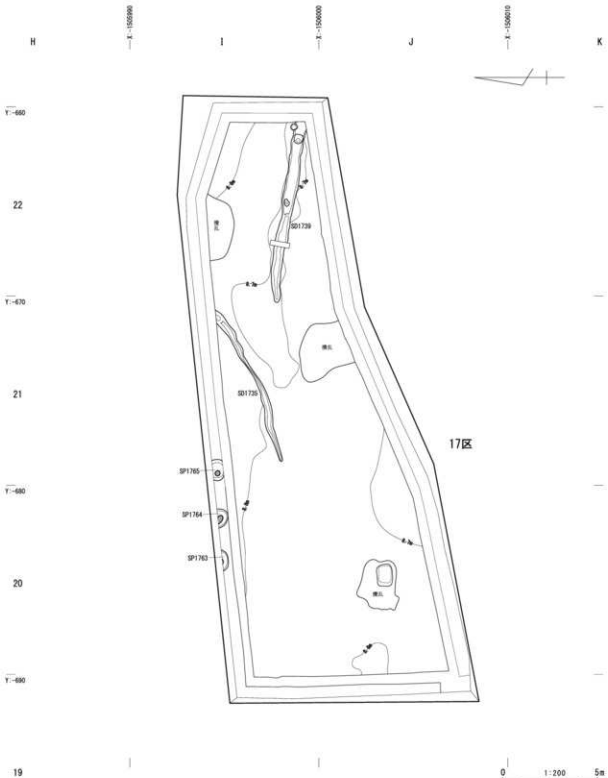
第51図　SB1501構築後～SB1401構築前遺構配置図5



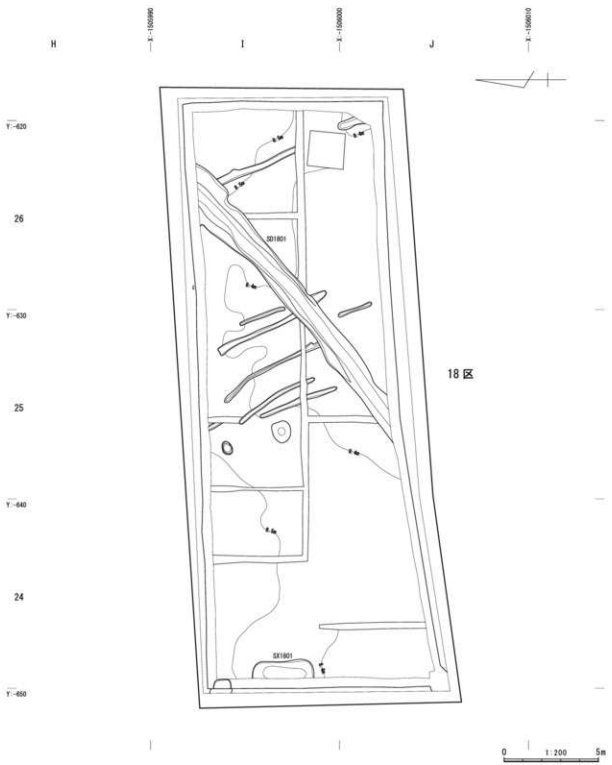
第 52 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図 6



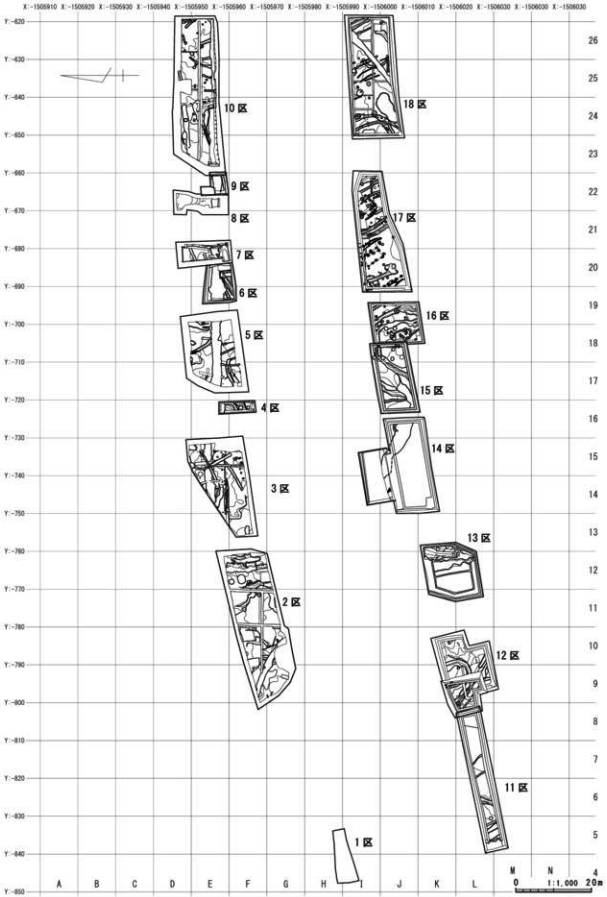
第 53 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図 7



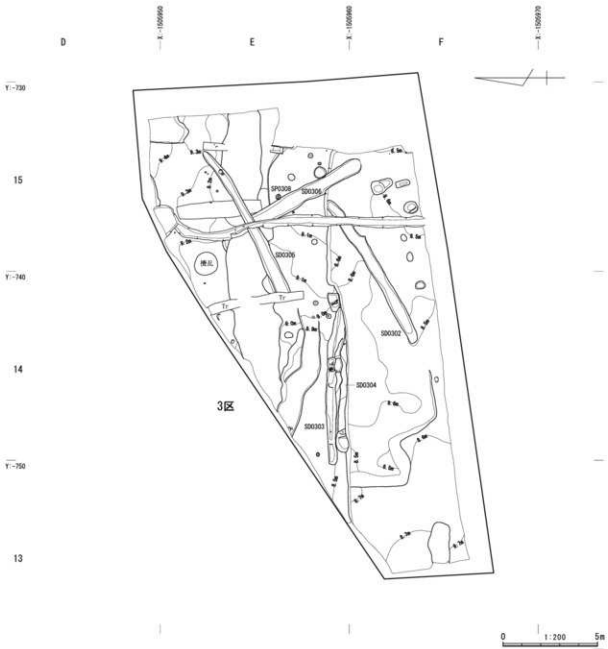
第 54 図　SB1501 構築後～ SB1401 構築前遺構配置図８



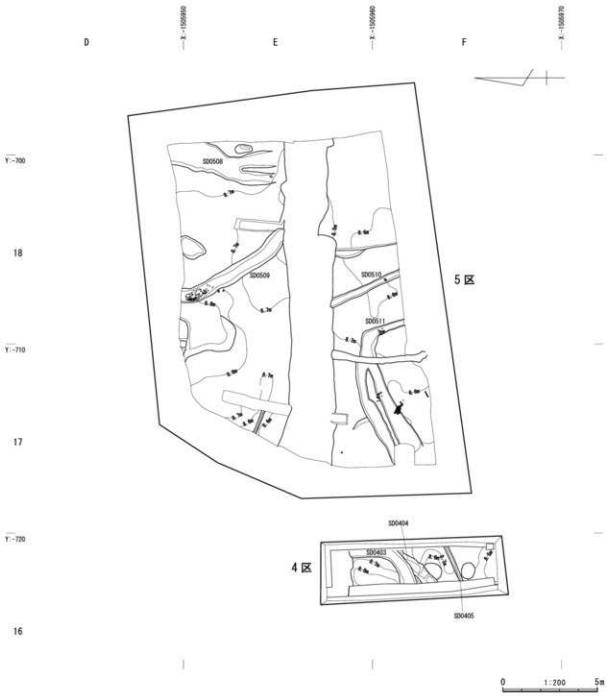
第55図　SB1501構築後～SB1401構築前遺構配置図9



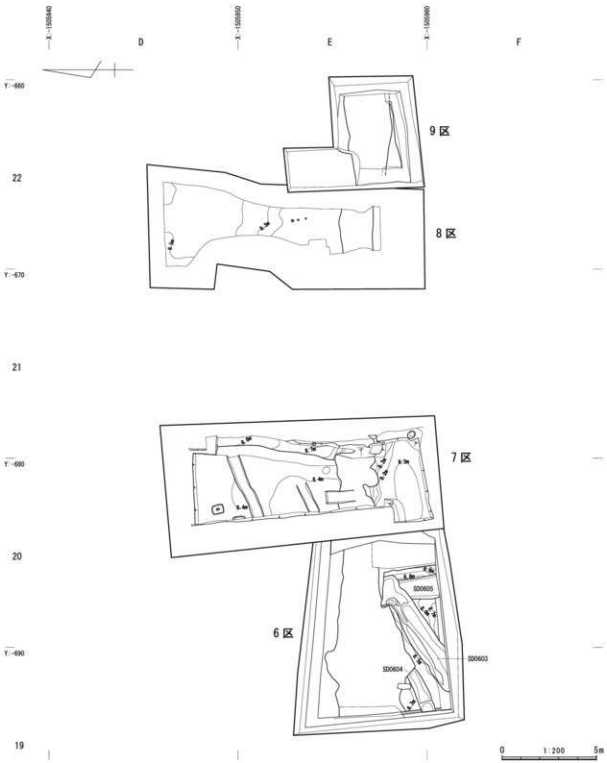
第56図　弥生時代後期～SB1501構築前全体図



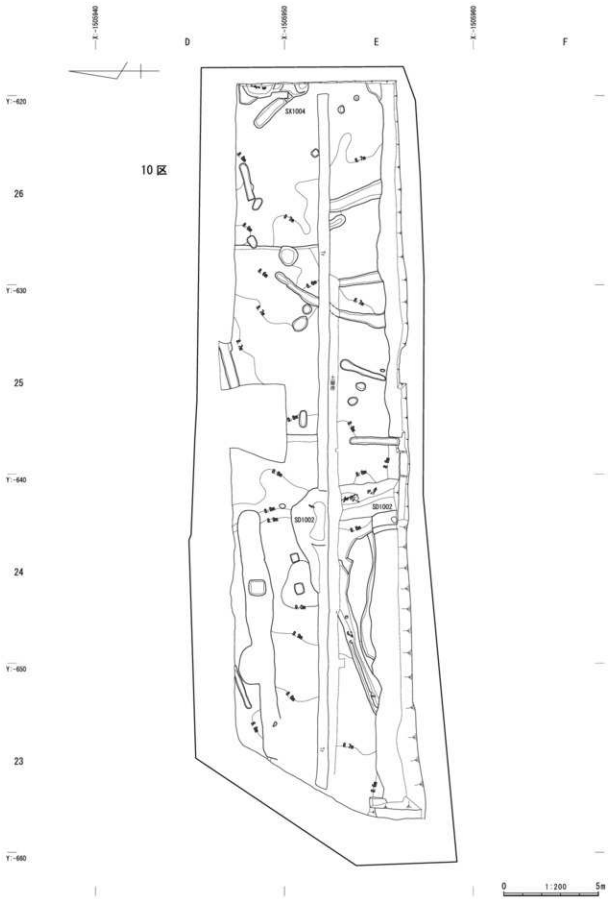
第 57 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 1



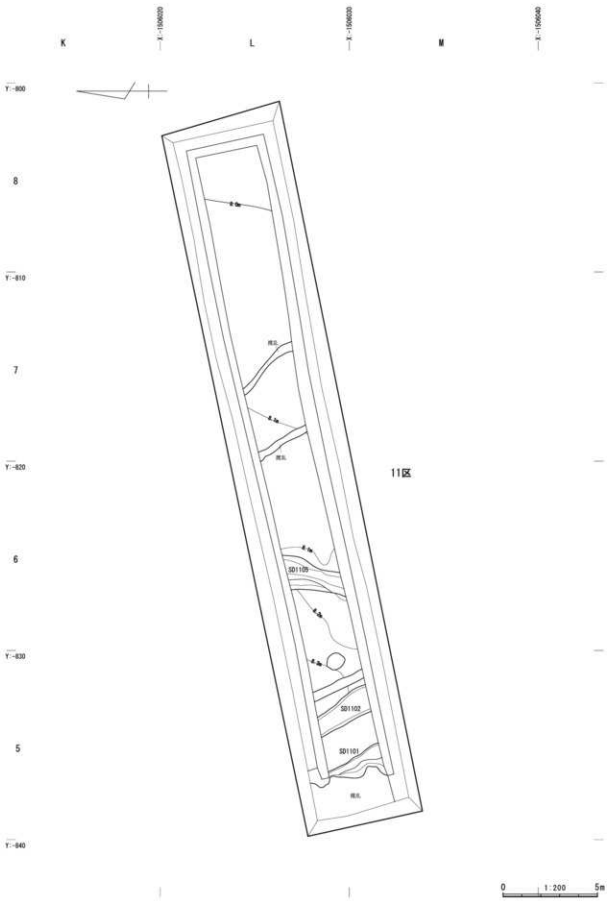
第 58 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 2



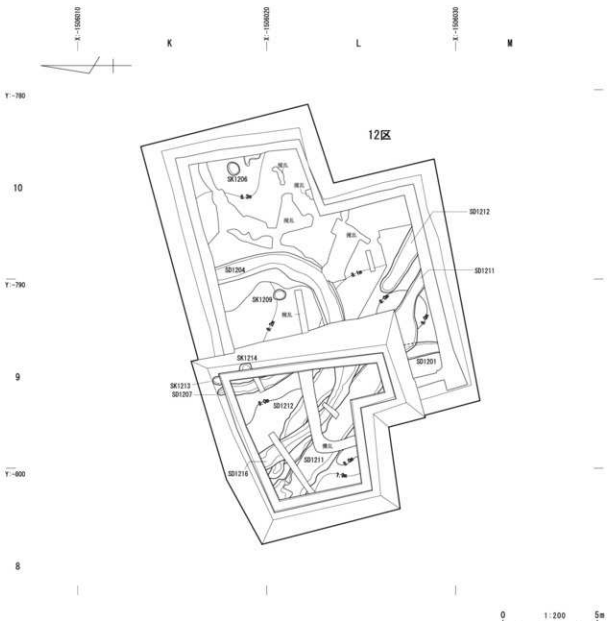
第59図　弥生時代後期～SB1501構築前遺構配置図3



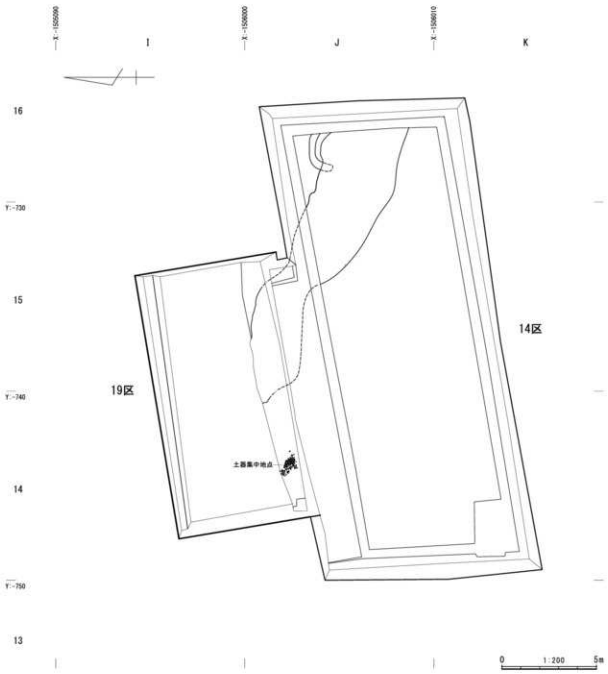
第60図　弥生時代後期～SB1501構築前遺構配置図4



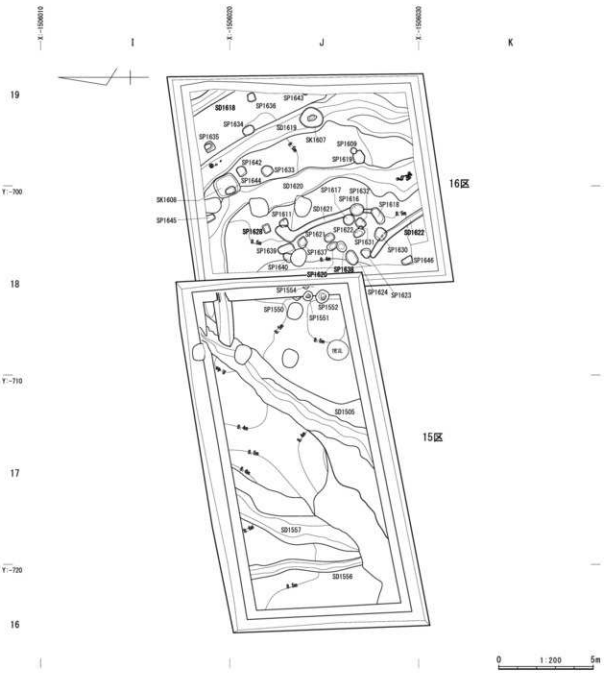
第 61 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図５



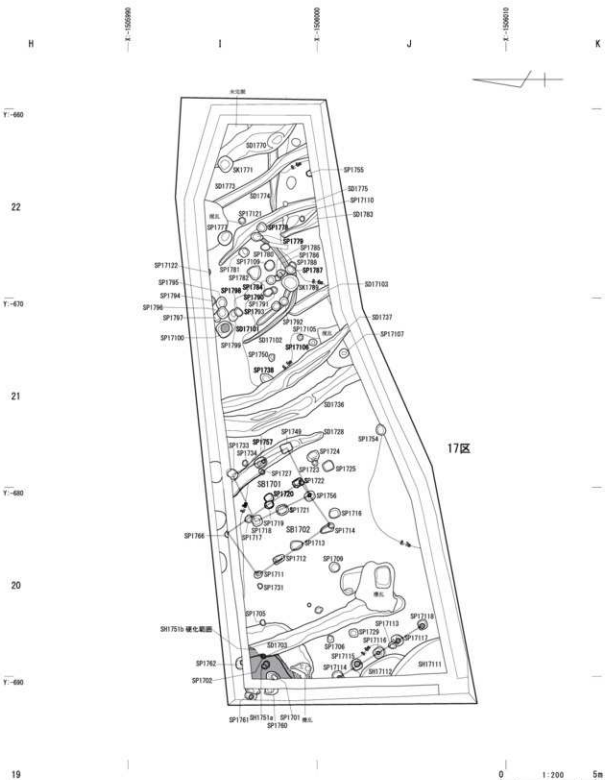
第 62 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 6



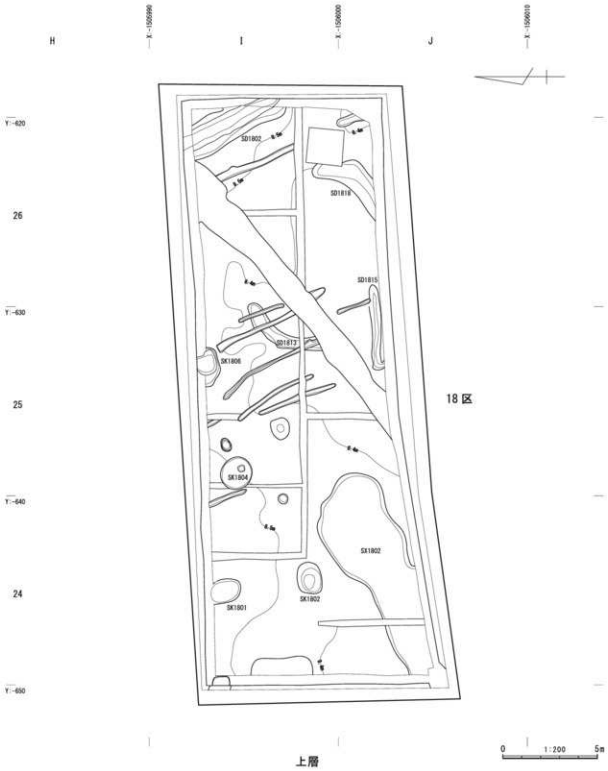
第 63 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 7



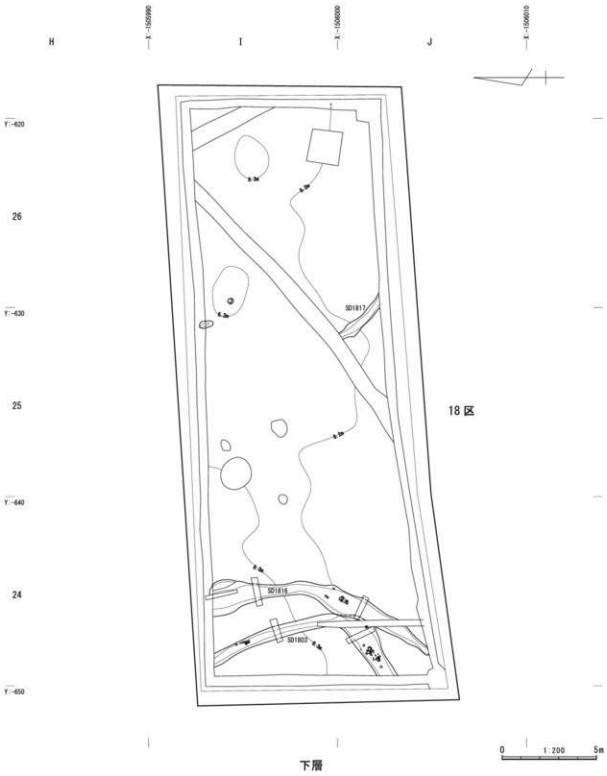
第 64 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 8



第 65 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 9



第 66 図　弥生時代後期～ SB1501 構築前遺構配置図 10



第67図　弥生時代後期～SB1501構築前遺構配置図11

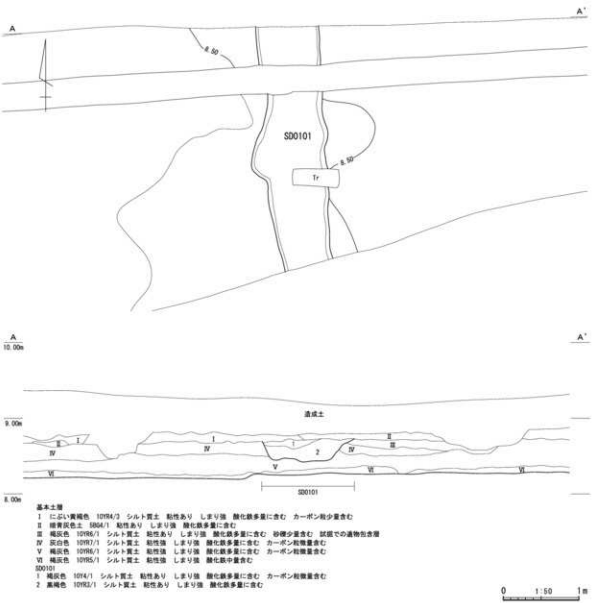
第４節　遺構と遺物

本節では、検出された遺構について所見を記載する。なお、調査時に検出された順に付した遺構番号順での記述のため、遺構の検出面及び時期は前後する。

１　１区

SD0101（第68図　図版１）

Ｈ４、Ｉ４グリッドで検出された。北から南へ直線的に延びる溝跡である。Ⅲ層を掘り込んで掘削されている。検出長3.16ｍ、最大幅0.73ｍ、深さ0.09ｍである。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第68図　１区遺構詳細図

2　2区

SD0201（第70図　図版5）

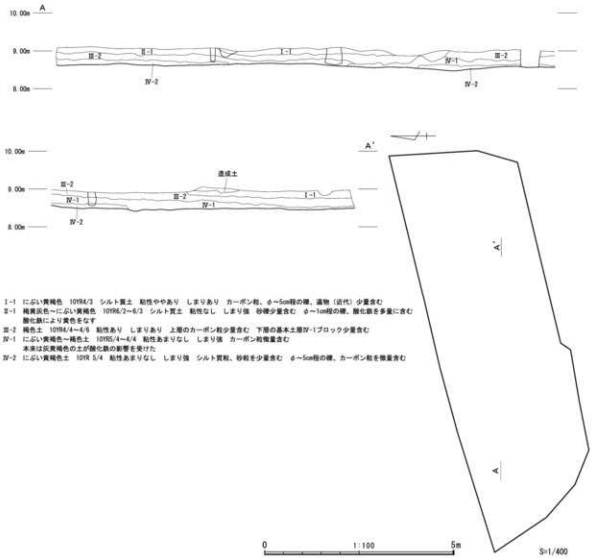
F 12グリッドで検出された。調査区北西隅部付近から緩やかに湾曲しながら南東方向へ延びる溝跡である。検出長14.29 m、最大幅1.26 m、深さ1.23 mである。底面は平坦である。断面はやや角度のきつい台形であるが、一部テラス状の段差を有する。

遺物は第71図1～4が出土した。1は近世の瀬戸産の徳利である。2は7世紀後半代の須恵器の合子状坏身である。径9㎝台と小型で、立ち上がりが内傾する形状を呈する。3は土師器の坏である。丸みを帯びた底部から湾曲しつつ立ち上がり、口縁部を直立させ、端部を尖らせる。時期は2とほぼ同時期か。4は近世の鉄釘である。片側を折り曲げた頭部を持つ平釘で、先端部が欠損しているが、残存状況より4寸釘と想定される。

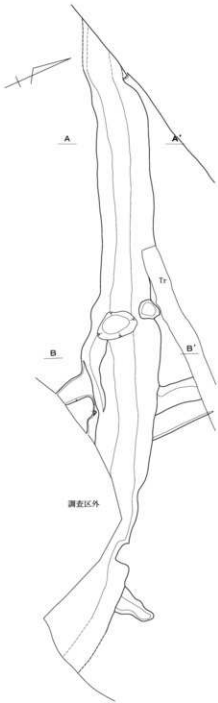
遺構の時期は出土した土器から近世以降としておく。

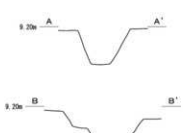
SD0202（第70図）

F 10、G 10グリッドで検出された。調査区のほぼ中央部に位置する、規模の小さな浅い溝跡で、検出長1.85 m、最大幅0.61 m、深さ0.15 mである。底面は平坦である。北側は攪乱され、判然としない。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

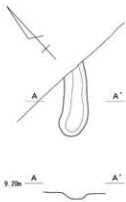


第69図　2区トレンチ土層断面図

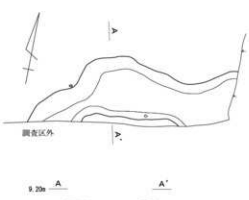




SD0201

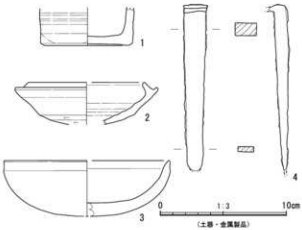


SD0202



SD0203

第70図　２区遺構詳細図１



第71図　2区SD0201出土遺物実測図

SD0203（第70図）

G 11グリッドで検出された。調査区南辺沿いに位置する浅い溝跡である。平面形は蛇行しており、東側のNR0202に向けて延びている。検出長1.85 m、最大幅0.61 m、深さ0.15 mである。底面は平坦で浅く、断面形状は皿状を呈する。

SD0203が位置するG 11グリッドでは、弥生時代後期以降の土器（図版4）が出土しているが、調査時にはこの遺構に伴うものか判然としていないため、遺構の時期は不明である。

SE0201（第72図　図版2）

F 12グリッドで検出された。調査区東半部に位置する井戸跡である。この井戸跡の計測値は長径2.36 m、短径2.01 mを測り、平面形は円形に近い。深さ0.94 mである。底面は概ね平坦である。覆土は3層に分かれる。比較的大きな礫が中央部から北よりの位置に、3層から2層にかけて認められる。また2層付近で直径10 cm以下の礫が大量に廃棄されていた。

遺物は土師器の甕第73図5、平瓦6、木製の漆椀7が出土した。前者2点は流れ込みの遺物である。5は摩滅が著しく、頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。6は平瓦の広端部の破片であり、凸面には格子目叩きが残る。凹面は粘土板の合せ目が剥離している。粘土の合せ目はS型で、剥離面には糸切痕が明瞭に残る。7は漆椀である。内面は朱漆、外面は黒漆塗り、高台内面にも黒漆が塗られている。外面には朱漆で模様が描かれている。模様は松と、鶴または亀か。材質はケヤキで、横木取り柾目である。全体の約1/3が残存しており、口縁部は欠損し、高台がわずかに残る。口縁の残存径は13.2 cm、高台径は8.0 cm、残存高は5.0 cmである。

遺構の時期は漆椀7から判断して、近世に位置づけられる。

SE0202（第72図　図版2）

E 12、F 12グリッドで検出された。調査区東半部に位置する井戸跡である。前述のSE0201の南側に位置する。この井戸跡の計測値は長径1.39 m、短径1.31 mを測り、平面形は円形に近い。深さ0.53 mである。覆土中位付近には大きな礫が廃棄されていた。平坦な底面から直線的に立ち上がり、10 cm程度の平場を設けている。

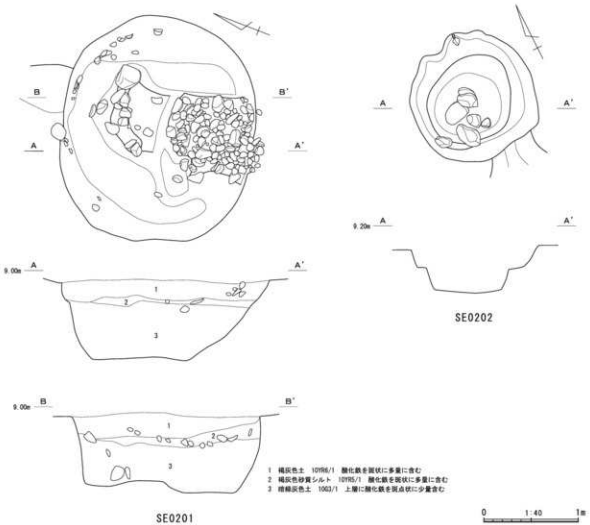
遺物は志都呂産の天目茶碗第73図8が出土した。8は削り出し高台を有し、内面は全体に、外面は高台部分を除き鉄釉を施釉する。高台部の接地面に糸切り痕が見られる。

遺構の時期は出土遺物から判断して、近世に位置づけられる。

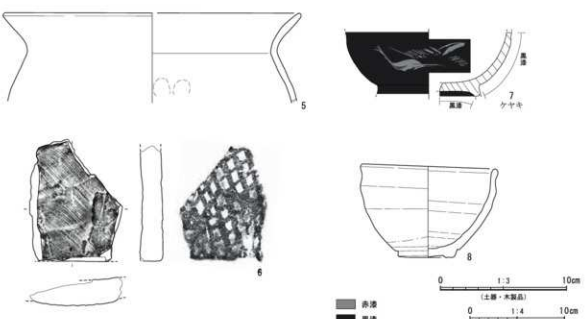
NR0201（第74図）

F 12グリッドで検出された。調査区の東半部に位置する自然流路跡である。前述のSD0203に続く遺構である。SE0201・0202より下層で検出されている。平面形は不定形である。

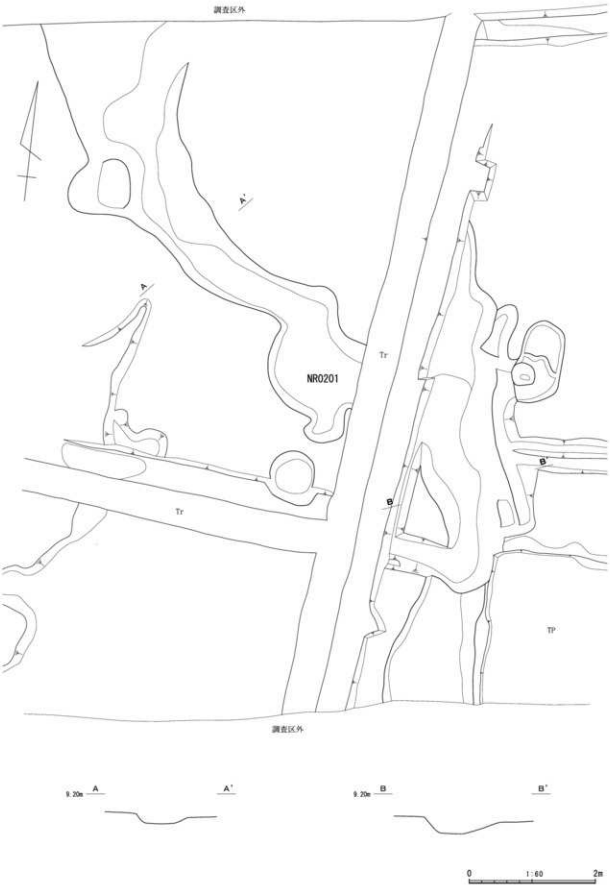
遺物は第77図9～15が出土した。9は土師器の坏である。小片のため詳細は不明であるが、古墳時代後期の須恵器坏蓋模倣坏か。10～15は古墳時代前期と考えられる土器である。10と11は折返し口縁壷である。10は頸部が短く、口縁部が直線的に大きく開く。11は大廓式の白色粒を含む胎土を持ち、口縁部内面にRLの縄文と円形の竹管文を施す。12と13は壷の底部である。14と15は小型の土器の底部で、壷または鉢の可能性がある。



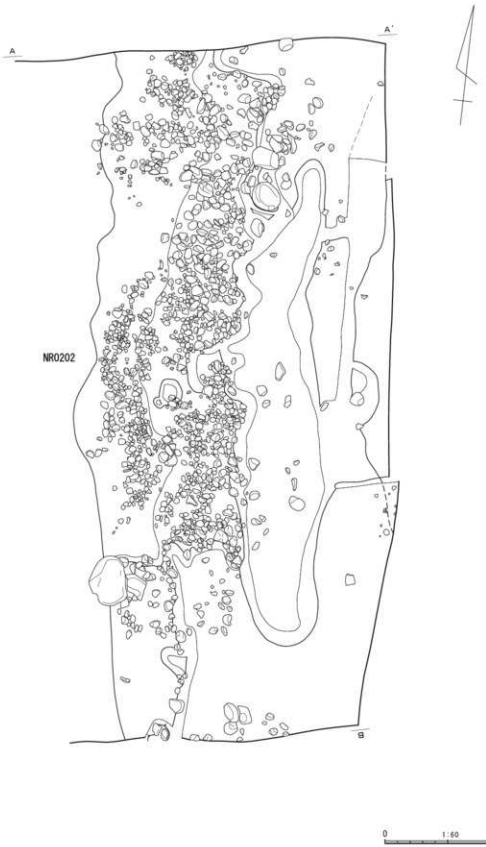
第 72 図　２区遺構詳細図２



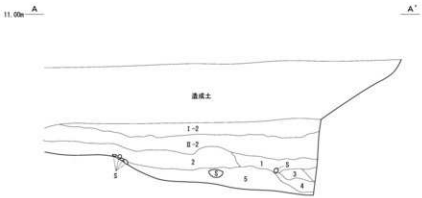
第 73 図　２区 SE0201・0202 出土遺物実測図



第74図　2区遺構詳細図3



第75図　2区遺構詳細図4

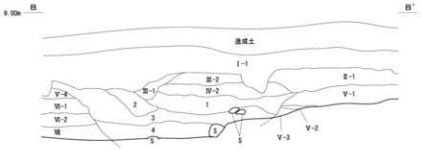


河川跡　北壁

1　にぶい黄橙色～にぶい黄褐色　10YR6/3～5/3　砂質土　径1cm以下の礫多量に含む　上位は粘質シルト、中位は砂質シルト、下位は5cm以下の砂利含む
2　灰黄褐色　10YR5/2　シルト質土　1mm以下の礫少量含む　カーボン粒微量含む　下位は砂質
3　灰黄褐色　10YR6/2　粘土　砂粒を量含む　黒側は砂質　下位に酸化鉄含む
4　褐灰色　10YR6/1　砂粒を極めて微量含む
5　灰オリーブ色　5Y5/2　砂層　青味強　上位に酸化鉄多量に含む　見られる硬の大半はこの層

基本土層

Ⅰ-2　にぶい黄褐色～褐色　10YR4/3～4/4　シルト質土　1mm以下の礫、土器片少量含む　黄褐色 10YR 5/6、浅黄橙色 10YR 8/4 粒子多量に含む
Ⅱ-2　にぶい黄褐色　10YR5/3　シルト質土　1mm以下の礫少量含む　暗褐色 10YR 3/2 粘土ブロック多量に含む　上位に黄褐色土粒子、下位に灰黄褐色砂質粒子多量に含む



河川跡　南壁

Ⅰ　にぶい黄褐色　10YR5/4　砂粒を極めて多量に含む　1cm以下の礫微量含む　下層の砂層が混じる　酸化鉄により赤味をなす
2　にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト質土　砂粒微量含む　カーボン粒少量含む
3　にぶい黄橙色　10YR6/4～5/4　粘土　1cm以下の礫少量含む　酸化鉄、砂粒やや多量に含む
4　灰色　N5/　粘土　ややシルト質　細片状の自然木極めて多量に含む　還元化のため黄色を呈す

基本土層

Ⅰ-1　にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト質土　径5cm以下の礫、遺物（近代）少量含む
Ⅱ-1　褐灰色～にぶい黄褐色　10YR6/2～6/3　シルト質土　砂礫少量含む　1cm以下の礫、酸化鉄多量に含む　酸化鉄により黄色をなす
Ⅲ-1　にぶい黄褐色～褐色土　10YR5/4～4/4　カーボン粒微量含む　本来は灰黄褐色の土が酸化鉄の影響を受けた
Ⅲ-2　褐色土　10YR4/4～4/6　上層のカーボン粒少量含む　下層のV層ブロック少量含む
Ⅳ-2　にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性あまりなし　しまり強　シルト質粘、砂粒を少量含む　φ～5cm程の礫、カーボン粒を微量含む
Ⅴ-1　褐灰色土　10YR5/1　粘性強　しまりあり　砂粒少量含む　酸化鉄多量に含む
Ⅴ-2　褐灰色土　10YR6/1　粘性強　しまりあり　2cm以下の酸化鉄粒中量含む　酸化鉄を多量に含む
Ⅴ-3　にぶい黄褐色　10YR5/3　シルト質粘土　粘性あり　しまりややあり　砂をやや多く含む
Ⅴ-4　赤褐色土　5YR4/6　シルト混じり　酸化鉄の影響により赤色をなす
Ⅵ-1　黒褐色　10YR2/3　粘土　1cm以下の礫少量含む　砂混か
Ⅵ-2　褐灰色～黒褐色 10YR4/1～3/1　粘土　上位は酸化鉄のためうっすら灰色化（10YR7/1）している
Ⅶ　オリーブ黒色　5Y3/1～3/2　シルト質粘土　黒色粘土が混じる　還元化の影響か青色を呈す

0　1:60　2m

第76図　2区遺構詳細図5

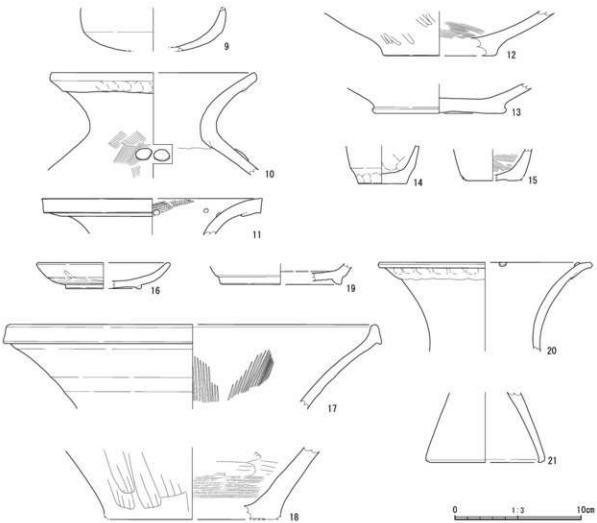
遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代後期以降に位置付けられる。

NR0202（第75・76図　図版3）

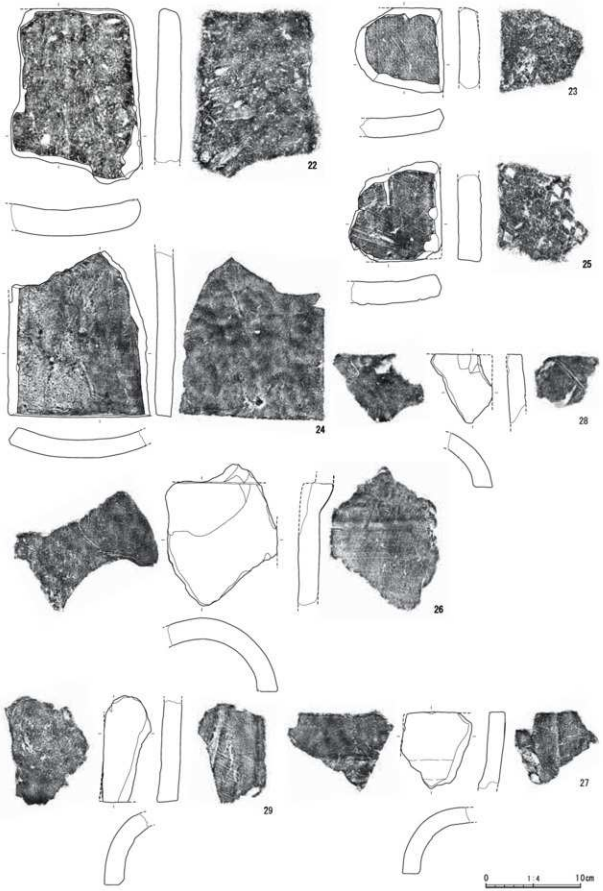
F 11、F 12、G 12グリッドで検出された。調査区東端に位置する。西山田川（尾羽川）の河道跡と考えられる自然流路である。遺構西側の立ち上がりはなだらかで、最下層、北側断面5層（灰オリーブ色砂層）中に礫が大量に含まれていた。この礫群を構成する礫は拳大の大きさの円礫で、自然流路西岸に人為的に置かれたものと考えられる。礫と礫の隙間から弥生土器、須恵器、瓦、近世陶器等が出土している。礫群の時期は陶器の出土状況から判断して近世とした。西側にはSE0201・0202もあることから、礫群との関連性を窺わせる。

第77図16は志都呂産の丸皿である。貼り付け高台を有し、鈍い赤褐色の露胎に灰釉が施釉されている。17は擂鉢である。口唇部外面に下方に小さく垂下する縁帯を有する。器面全体に錆釉が施釉されている。18は甕の底部である。器面全体に錆釉が施釉されている。19は8世紀前半台の須恵器の有高台坏身である。断面四角形の削り出し高台を有する。20と21は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。20は折返し口縁壷である。口縁部は外反して開く。21は台付甕の脚部である。脚裾部の内面端部が内湾する。

第78図22～25は平瓦である。22と23は狭端部の破片で、22は摩滅が著しく表面の痕跡が不明瞭



第77図　2区NR0201・0202出土遺物実測図



第 78 図　2 区 NR0202 出土遺物実測図

であるが、凹面には側板痕とみられる凹凸が確認できる。23 は凸面に格子目叩き、凹面には糸切痕と布目が残る。24 と 25 は広端部の破片である。24 は凸面にナデ調整が施されており、叩き目は残らない。凹面には布目痕が残り、広端側と側端側に削り調整が施されている。25 は凸面に格子目叩き、凹面には糸切痕と布目が残る。いずれも、側面は凸面側に面取りが施されている。26 ～ 29 は丸瓦である。26 は段部から玉縁部にかけての破片である。凸面には全面にナデ調整が施されており、凹面には布目痕が残る。筒部と玉縁部を一体の粘土で作り、凸面側に粘土を付加して段部を形成している。27 と 28 は玉縁部の破片である。凸面は横方向のナデ調整が施され、27 の凹面には布綴じ痕が認められる。29 は広端部の破片である。凸面は全面にナデ調整が施され、叩き目は残らない。凹面には布綴じ痕が認められ、側面側に削り調整が施されている。26 ～ 28 は有段式の丸瓦、29 は広端部のみの破片で、有段式か無段式か判別できない。

3　3区

3 区から 10 区で検出された大溝については、別項に記載する。

SD0302（第 80 図）

第 2 面E 15、F 14、F 15 グリッドで検出された。北東から南西に向かって直線的に延びる溝跡である。検出長 8.65 m、幅 0.57 m、深さ 0.22 m である。

遺物は第 81 図 30 と台付甕の脚台部の破片が出土した。30 は折返し口縁壺である。口縁部は大きく外反して開く。時期の特定は困難であるが、出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と推定される。

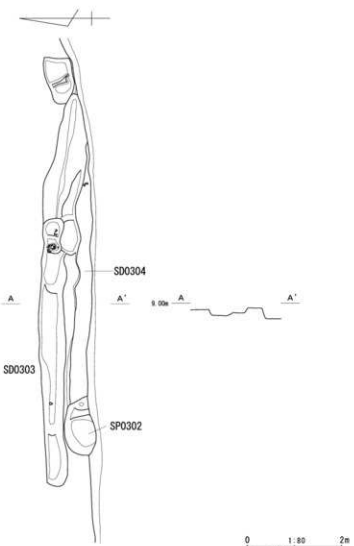
SD0303（第 79 図）

第 2 面E 13、E 14 グリッドで検出された。調査区の中央部に東西に直線的に延びる溝跡である。検出長は 8.27 m、幅 0.42 m、深さ 0.29 m である。すぐ南側に SD0304 が並行して掘り込まれている。

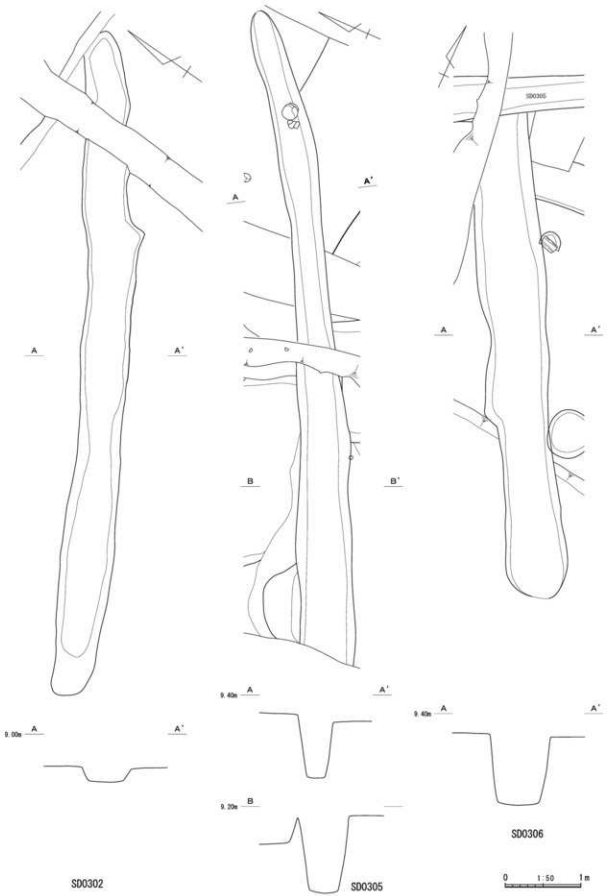
遺物は S 字状口縁台付甕の破片 1 点を含む土器の小片が出土した。時期の特定は困難であるが、出土遺物から古墳時代前期の遺構と推定される。

SD0304（第 79 図）

第 2 面E 14 グリッドで検出され



第 79 図　3 区遺構詳細図 1



第 80 図　3 区遺構詳細図 2

た。調査区の中央部に東西に直線的に延びる溝跡である。検出長 5.49 m、現存幅 0.4 m、深さ 0.1 m である。すぐ北側に SD0303 が並行して掘り込まれている。溝の西端部で SP0302 に切られている。

遺物は第 81 図 31 と 32 が出土した。ともに深く、直線的に開く坏部を有する高坏の破片である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。

SD0305（第 80 図・図版 7）

第 2 面 E 14、E 15 グリッドで検出された。北東から南西に向かって直線的に延びる溝跡である。検出長 9.17 m、幅 0.4 m、深さ 0.89 m である。溝の中央部で SD0306 に直交するように切っている。

溝内から土器が大量に出土した（第 82 図 33 ～ 48、図版 7）。33 は複合口縁壺である。大型で、複合部が短く、複合部内面の屈曲が明瞭である。34 と 35 は折返し口縁壺である。34 は折返し部分の幅が広く、口縁部の開きが直線的で、一見複合口縁壺に見える。35 は口縁部が大きく外反して開く。36 は小型壺の胴部である。37 と 38 は壺の底部、39 と 40 は小型壺の底部である。41 は甕の口縁部である。頸部が緩やかに外反し、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。42 は甕である。胴中位に最大径を有する。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。43 は折返し口縁を有する甕である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。44 ～ 46 は台付甕の脚部である。44 はやや低脚である。46 は脚裾部内面に折返しを有する。47 は高坏の脚部である。脚裾部は直線的に大きく開く。48 は手づくねのミニチュア土器の坏である。

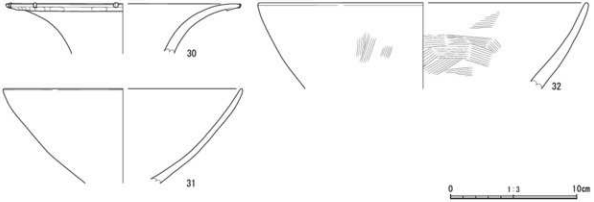
遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD0306（第 80 図・図版 7）

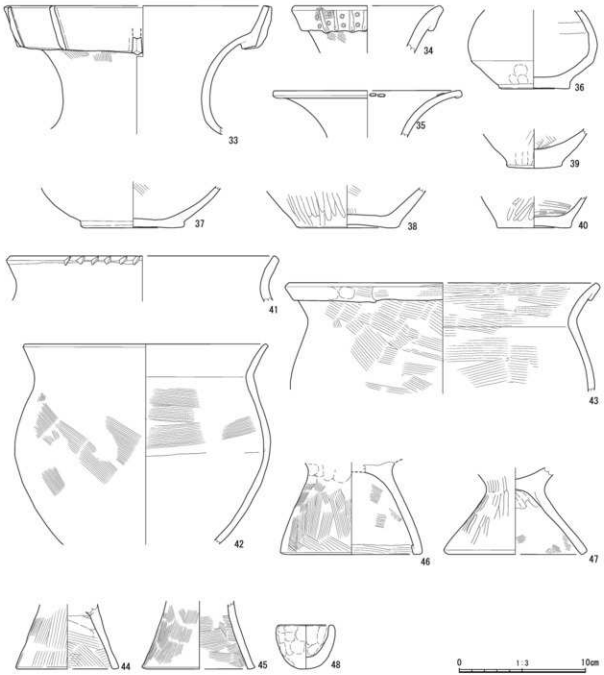
第 2 面 E 15、F 15 グリッドで検出された。北西から南東に向かって直線的に延びる溝跡である。検出長 6.96 m、幅 0.67 m、深さ 0.53 m である。北端部で SD0305 を直交するように切られている。遺物は出土しなかった。板状木製品が出土した SP0308 と接しているが、SD0306 が SP0308 より時期的に新しいと考えられる。時期の特定は困難であるが、SD0305 との新旧関係から、SD0305 より前の弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

SP0302 ～ 0312（第 83・84 図　図版 7）

SP0302 ～ 0305 は第 1 面、0306 ～ 0312 は第 2 面で検出された。SP0302・0303 はその状況から柱穴というよりは土坑に近い。SP を付与した遺構のうち、0308 と 0309 は、底面あるいは底面に近い層位から板状木製品（第 86 図 49・50）が出土した。出土したこの 2 点は放射性炭素年代測定を実施しており、



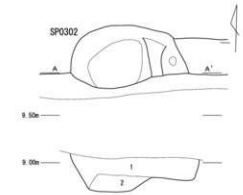
第 81 図　3 区 SD0302・0304 出土遺物実測図



第 82 図　3 区 SD0305 出土遺物実測図

前者（49）は弥生時代中期後葉から後期前半に当たる 47cal BC-65 cal AD（95.45%）、後者（50）は古墳時代中期から後期に当たる 415-481 cal AD（55.17%）の結果が出ている。

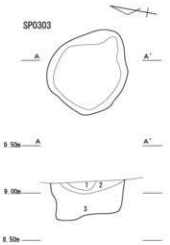
49 は板状木製品である。出土位置から礎板として使われていた可能性が高い。スギ材で木目は板目である。全長は 23.0 ㎝、幅は 10.7 ㎝、厚さは 2.2 ㎝である。表・裏ともに割面のままで、面整形されていない。側面の一部に面加工の痕跡がある。上端部には切断された痕がある。丁寧な造りではないことから、建築部材からの転用等とは考えにくい。50 も板状を呈するスギ材の板目板である。出土状況から見て、49 と同様、礎板として使われたと思われる。表と裏面は面加工の痕がなく、割面のままであった。上端部は切断された痕がある。上半分に節があることから、外皮に近い部分から割り出した



SP0302

1　褐灰色　10YR4/1　砂質シルト　粘性普通　しまりとても弱い　酸化鉄を斑状に中量含む
　0.5～10mm大の橙色の砂質ブロック中量含む

2　暗緑灰色　10G3/1　砂質シルト　粘性強　しまり普通　酸化鉄少量含む
　0.5～10mm大の明緑灰色の砂質ブロック中量含む

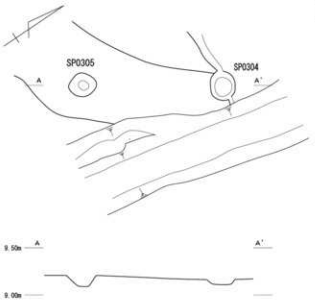


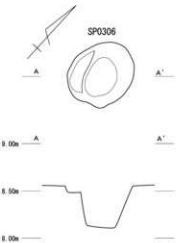
SP0303

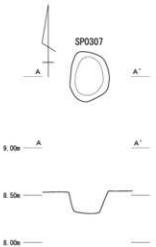
1　褐灰色　10YR6/1　砂質シルト　粘性普通　しまりとても弱い　酸化鉄を斑状に多く含む

2　褐灰色　10YR4/1　粘質シルト　粘性普通　しまりとても弱い　酸化鉄中量含む

3　褐灰色　10YR6/1　粘質シルト　粘性普通　しまりとても弱い　酸化鉄を斑状に多く含む

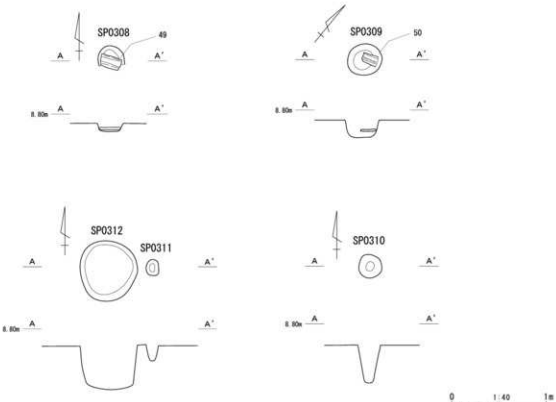






0　1:40　1m

第 83 図　３区遺構詳細図３



第84図　3区遺構詳細図4

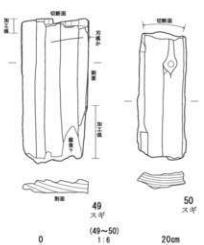
材であろう。全長は20.3㎝、幅は7.6㎝、厚みは2.2㎝である。

4　4区

SD0403（第86図　図版8）

第2面E 16、F 16グリッドで検出された。調査区北東部では南北に延び、南東側をコーナーとして東西方向に屈曲する溝跡である。幅0.98 m、深さ0.28 mである。断面形状は逆台形を呈する。屈曲する位置でSD0404を切っている。

遺物は溝の底部付近から第87図51～55がまとまって出土した。51は折返し口縁壷である。口縁部は外反して開く。52は壷の胴下部である。丸みを持つ下膨れの形状を呈する。53は台付甕の胴部で、丸い胴部を有する。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反して開く。54は折返し口縁を有する甕である。大型で、頸部から口縁部の立ち上がりは直立気味で、口縁端部付近で外反して開く。55は高坏の坏部と考えられる。折返し口縁を有した、丸く深い碗形の形状を呈する。

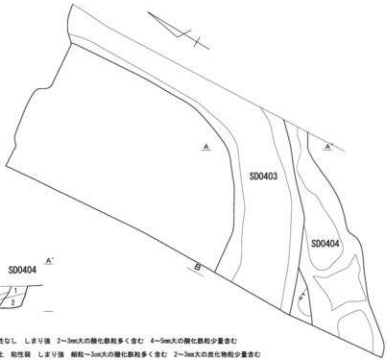


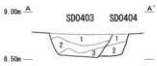
第85図　3区SP0308・0309出土遺物実測図

遺構の時期は出土遺物とSD0404との新旧関係から判断して、SD0404より後の弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD0404（第86図　図版8）

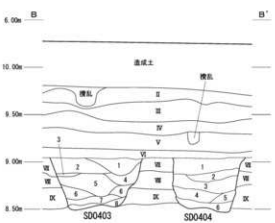
第2面F 16グリッドで検出された。調査区の南西から北東に直線状に延びる溝跡である。検出長2.44



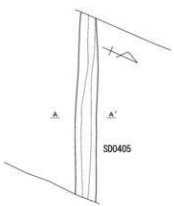


SD0403
1　黒褐色　10YR2/1　シルト　粘性なし　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む　4～5mm大の酸化鉄粒少量含む
　2～3mm大の炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　細粒～3cm大の酸化鉄粒多く含む　2～3mm大の炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒少量含む
4　黒褐色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性強　しまり弱　粒～3cm大の酸化鉄粒多く含む
5　黒褐色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性強　しまり弱　粒～3cm大の酸化鉄粒非常に多く含む
6　暗灰色　10YR4/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
7　黒色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　粒～3mm大の酸化鉄粒多く含む　粒～3mm大の青灰色粒含む
8　基本土層Ⅸと７層土の混土　4～5cm大の風化した砂岩含む

SD0404
1　黒褐色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　細粒～3cm大の酸化鉄粒多く含む　2～3mm大の炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　細粒～1cm大の酸化鉄粒多く含む
3　黒色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　粒～2cm大の酸化鉄粒多く含む
4　黒色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強　粒～3mm大の酸化鉄粒多く含む　粒～3mm大の青灰色粒少量含む
5　黒色　10YR2/1　砂混じり粘土　粘性強い　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
6　基本土層Ⅹと４層土の混土　4～5cm大の風化した砂岩含む



Ⅱ　暗灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粘性弱　しまり強　4～5mm大の酸化鉄粒多く含む
　造構検認面
Ⅲ　暗灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粘性弱　しまり強　4～5mm大の酸化鉄粒多く含む
　一部は酸化鉄の影響により赤化している。
Ⅳ　暗灰色　10YR4/1　シルト　粘性なし　しまり強　4～5mm大の酸化鉄粒少量含む
Ⅴ　黒褐色　10YR3/1　シルト　粘性なし　しまり強　4～5mm大の酸化鉄粒多く含む
Ⅵ　黒褐色　10YR3/1　粘質土　粘性強　しまり強　細粒～3cm大の酸化鉄粒多く含む
Ⅶ　黒褐色　10YR3/1　砂混じり粘土　粘性強　しまりやや弱　細粒～2cm大の酸化鉄粒多く含む
　造構検認面
Ⅷ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　上層は細粒～5cm大の酸化鉄粒多く含む
　一部は酸化鉄の影響により赤化している。下層は2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
Ⅸ　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質



SD0405
1　黒褐色　10YR 3/1 砂混じり粘土　粘性弱　しまり弱
　細粒～1cm大の酸化鉄粒多く含む

0　1:40　1m

第86図　４区遺構詳細図１

m、幅0.74 m、深さ0.26 mである。断面形状は逆台形を呈する。北東部はSD0403に切られている。SP0406はこの溝の埋没後に掘りこまれている。

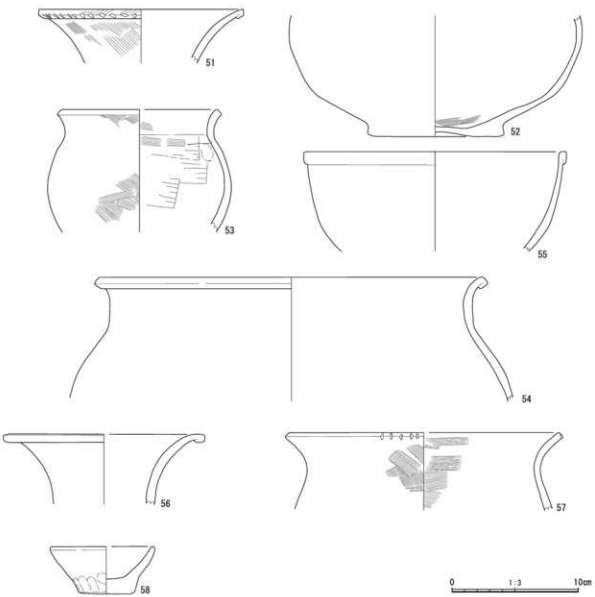
遺物は溝の底部付近から第87図56～58がまとまって出土した。56は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。57は甕の口縁部である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部が外反気味に開く。口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。58は小型の鉢である。

遺構の時期は出土遺物とSD0403との新旧関係から判断して、SD0403より前の弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD0405（第86図　図版8）

第2面F 16グリッドで検出された。南西から北東に直線的に延びる細い溝跡である。SD0403・0404より1層下のⅦ層から掘り込まれている。検出長1.94 m、幅0.17 m、深さ0.18 mである。遺物は弥生時代後期後半の土器の小片が出土した。

遺構の時期は、出土遺物と検出層位から、弥生時代後期後半としておく。



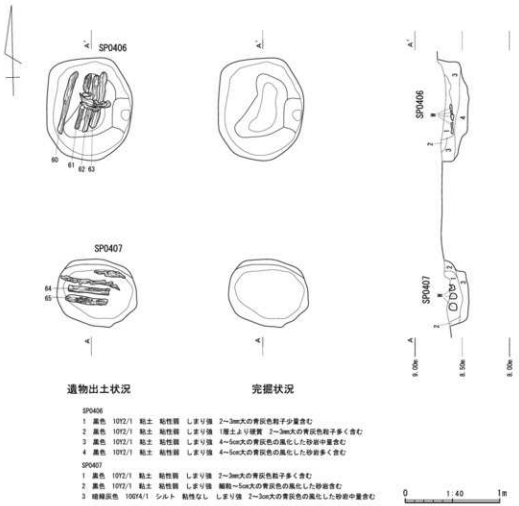
第87図　4区SD0403・0404出土遺物実測図

SP0406・SP0407（第88図　図版8）

第2面F 16グリッドで検出された柱穴跡である。SP0406が北側、SP0407が南側に並んで掘削されている。平面形状はともに楕円形を呈し、底面は平坦である。検出面での規模はSP0406が南北軸1.09 m×東西軸0.9 m、深さ0.27 m、SP0407が南北軸0.7 m×東西軸0.87 m、深さ0.17 mである。柱間間隔は約2 mである。主軸方位はN－2°－Eである。SP0406はSD0404の埋没後に掘りこまれている。

遺物はSP0406の掘方から第89図59と土師器甕の破片が出土した。SP0407の掘方から混入品と思われる弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土した。59は8世紀前半代の須恵器の有高台坏身である。断面四角形の低い貼り付け高台を有し、底面には糸切り痕が見られる。

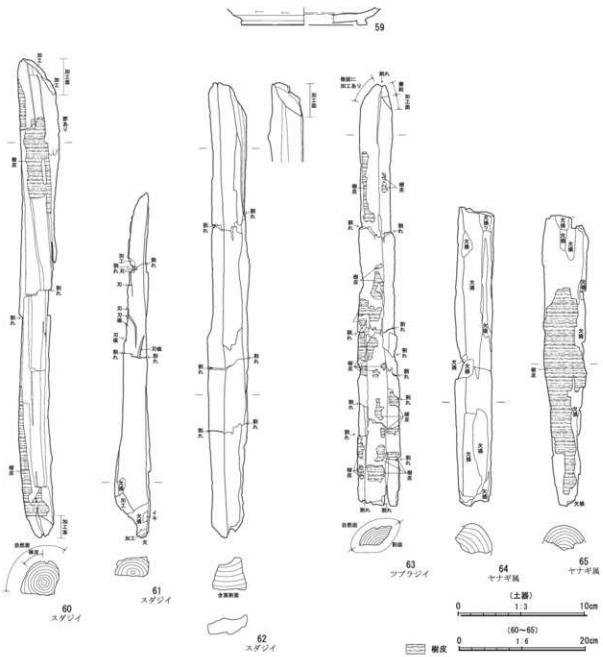
SP0406、0407ともに底面付近で木材が出土した。第90図60～65は分割材である。このうち60～63がSP0406より出土した。樹種同定では60・61・62がスダジイ、63がツブラジイとの結果が出ている（第5章第3節）。60は表面に樹皮が付いたままの状態で、上部には節の痕跡がある。長さは76.0 cm、幅は6.1 cm、厚さ5.5 cmである。上下端部は斜めに切り落とされた刃物痕がある。右側面と裏面は割面で、意図的に分割された可能性がある。61～65も同様の分割材。残存状況は悪く、表面は風化している。上端部や下端部には斜めに切り落とした加工の痕がある。61は板目材で、周囲は割面である。長さ54.7 cm、幅5.3 cm、厚さは3.2 cmである。左側面にほぼ等間隔で刃物痕がある。放射性炭素年代測定では677-770 cal AD（95.4%）との結果であった。62は60と同じ長さで、長さ72.1 cm、幅6.2 cm、



第88図　4区遺構詳細図2

厚さが5.2㎝である。上端部は、斜めに切断した刃物痕がある。4面とも割面になっている。63は表面の所々に樹皮が残っている。裏面は分割したときの割面である。上端部には斜めに入る刃物痕がある。放射性炭素年代測定では658-705 cal AD(49.75%)との結果であった。64は自然面が残る分割材である。長さは47.5㎝、幅は5.9㎝、厚さは4.8㎝である。放射性炭素年代測定では725-773 cal AD (51.08%)と、同じ建物から出土した木製品と同じ年代であった。65は樹皮が広範囲に残っている。長さは46.0㎝、幅は6.4㎝、厚さは3.9㎝である。どちらもヤナギ属と樹種同定結果が出ている。同一材であった可能性が考えられる。

60～63はSP0406、64・65はSP0407より出土しているが、どちらの柱穴底部も木材が横に並んでいた状態であったことから、柱を支える礎板として使われていたものであろう。SP0406とSP0407は隣り合う柱穴で、またSP0406出土の60～62の樹種はいずれもスダジイ、SP0407出土の64・65はいずれ



第89図　4区 SP0406・0407出土遺物実測図

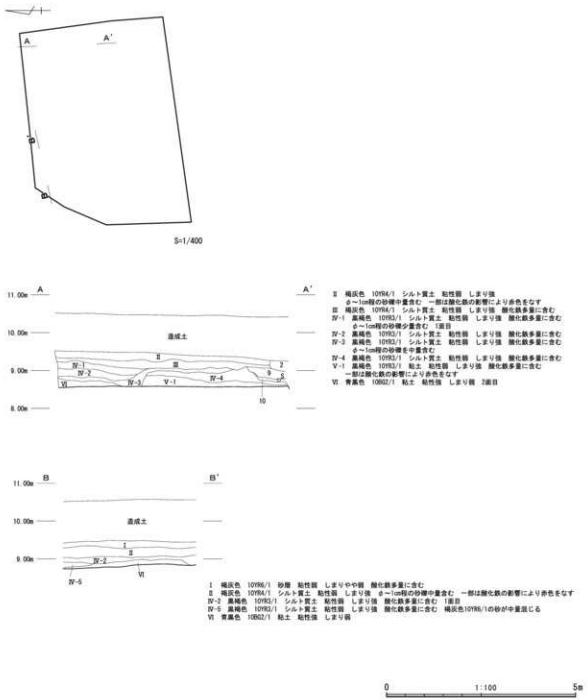
もヤナギ属であることから、同一材から分割した可能性もある。接合を試みたが、著しく乾燥して表面が風化している状態のため、接点は確認できなかった。

遺構の時期は、出土遺物と木材の年代測定結果から判断して、８世紀前半と位置づけられる。

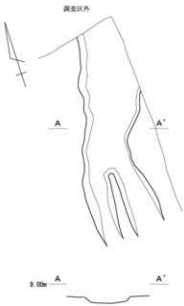
５　５区

SD0508（第 91 図）

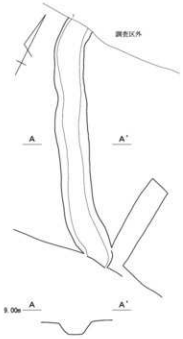
第２面D 18、D 19、E 18、E 19 グリッドで検出された。５区調査区北東隅から南へ延びる溝跡である。検出長 5.89 m、幅 1.15 m、深さ 0.08 m である。南端は大溝の手前で消失する。遺物は弥生土器の細



第 90 図　５区調査区北壁・東壁土層断面図

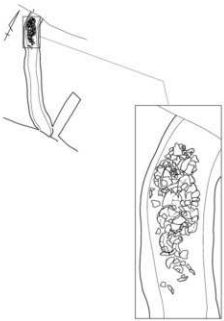


SD0508



SD0509

0　1:100　4m



SD0509遺物出土状況

0　1:40　1m

第91図　5区遺構詳細図1

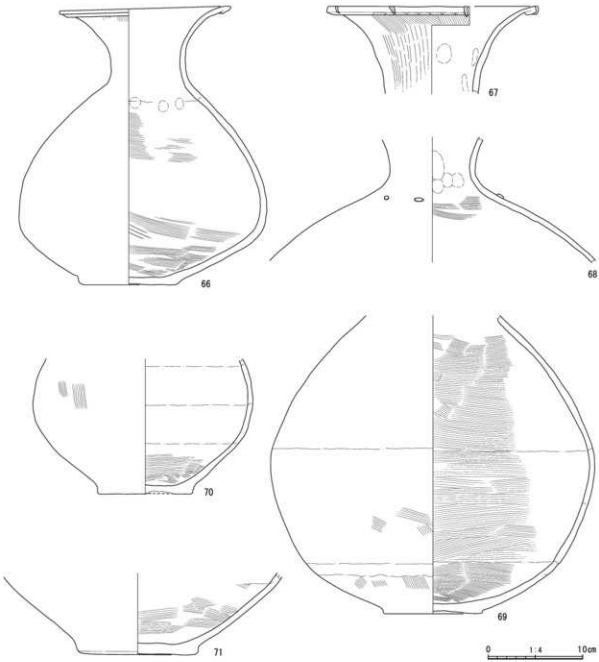
片が出土したのみである。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半としておく。

SD0509（第91図　図版13・14）

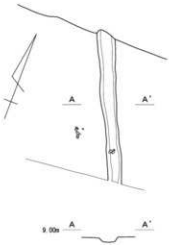
第2面D 18、E 18グリッドで検出された。調査区北壁から南東方向へ微かに湾曲しながら延びる溝跡である。検出長6.29 m、幅0.73 m、深さ0.42 mである。

北端付近で溝内に弥生土器の壺が投棄された状態で出土した。第92図66と67は折返し口縁壷である。ともに口縁部が大きく外反して開き、66は下膨れの胴部を有する。68は壷の頸部～肩部の破片である。胴部が大きく張る個体である。69と70は壷の胴部～底部である。69は最大径が胴中位に位置し、丸い下膨れの胴部を有する。71は壺の底部である。

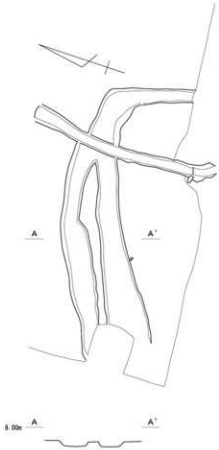
遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半に位置付けられる。



第92図　5区SD0509出土遺物実測図

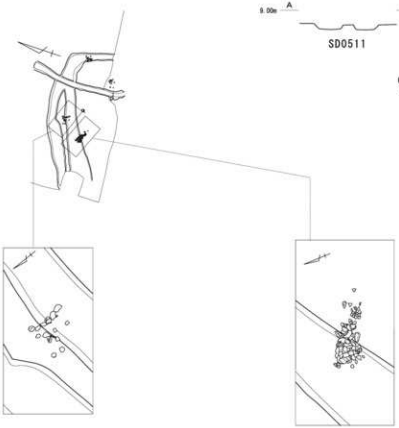


SD0510



SD0511

0　1:100　4m



SD0511遺物出土状況１

SD0511遺物出土状況２

0　1:40　1m

第 93 図　５区遺構詳細図２

SD0510（第93図　図版13）

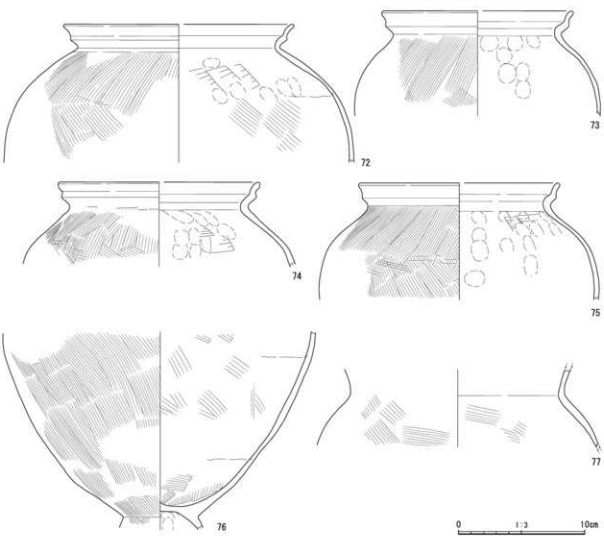
第2面E 15、F 15グリッドで検出された。調査区南壁中央部から北西へ直線的に延びる溝跡である。北端は大溝により削平されている。検出長3.98 m、幅0.33 m、深さ0.16 mである。遺物は弥生土器の小片が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半としておく。

SD0511（第93図　図版13）

第2面E 17、E 18、F 17、F 18グリッドで検出された。調査区西壁から東へ延びた後に南へ方向を変え、2条に分かれた溝跡である。検出長9.06 m、幅0.35 m、深さ0.28 mである。

溝跡付近に土器集中が3箇所確認された。出土位置から見て、遺構の実際の掘り込み面は検出面より上層にあったと考えられる。72～76はS字状口縁台付甕である。いずれも在地の赤褐色の胎土を有し、外面肩部のヨコハケが省略されている。72は肩部の張りが強く、口縁部上段が薄く延びる。73～75は口縁部が肥厚し、上段の外反も72に比して小さい。76はS字状口縁台付甕の胴部である。77は甕の頸部である。頸部の屈曲は明瞭である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。



第94図　5区SD0511出土遺物実測図

6　6区

SD0601（第96図　図版15）

第1面E 19、E 20グリッドで検出された。大溝廃絶後に掘削された浅い溝跡である。調査区の北西から南東にかけて直線的に延びる。検出長7.84 m、幅1 m、深さ0.13 mである。側壁は溝の中央部分に一部テラスを有して斜めに立ち上がる。

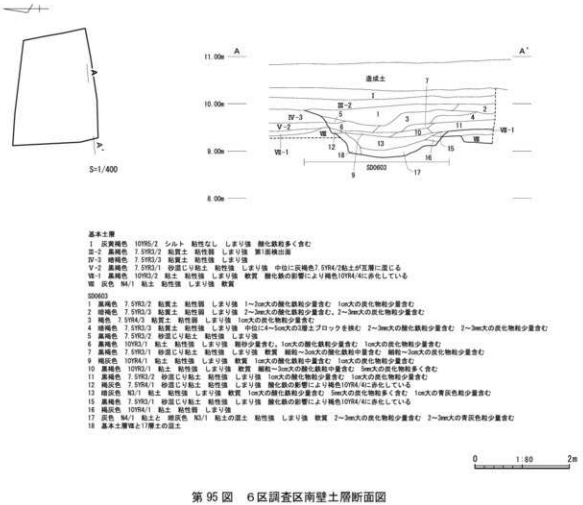
遺物は古式土師器から灰釉陶器まで混在して出土した。いずれも流れ込みの遺物であると考えられる。第97図78は8世紀前半代の須恵器の有高台坏身である。鋭さを欠く断面四角形の貼り付け高台を有する。底面はナデ調整である。79は灰釉陶器の碗である。内面全体に灰釉を施釉している。底面は回転糸切り痕が見られる。

遺構の時期は、大溝との新旧関係から、大溝廃絶後の10世紀前半以降としておく。

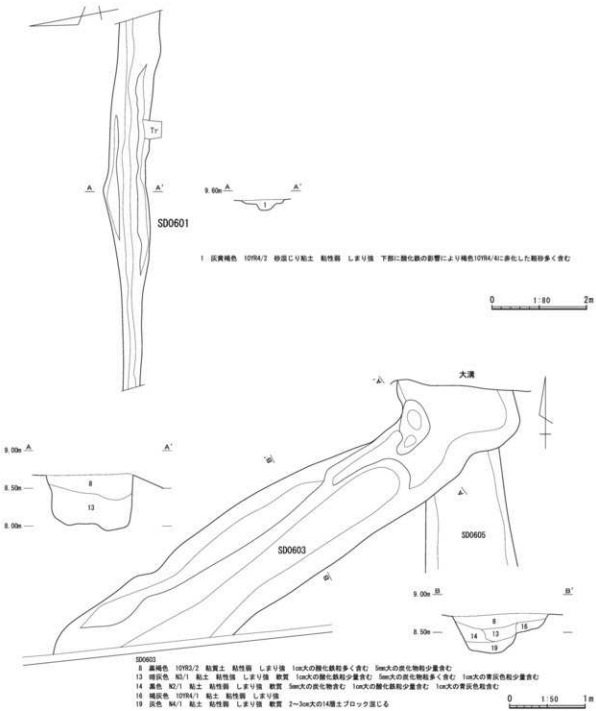
SD0603（第96図　図版15）

第2面E 19、E 20、F 19、F 20グリッドで検出された溝跡である。調査区の南西から北東にかけて直線的に延び、途中直角に屈曲し、大溝に切られている。検出面より1層上層のⅣ層から掘り込まれている。検出長2.31 m、最大幅1.4 m、深さ0.13 mである。断面形状は逆台形を呈する。覆土は下層に灰色粘土、中層に暗灰色粘土、上層に黒褐色粘質土が堆積する。屈曲する位置でSD0605を切っている。

遺物は第99図80～88が比較的まとまった状態で出土した。80は複合口縁壷である。複合部内面の屈曲は緩やかである。81と82は折返し口縁壷である。ともに口縁部は大きく外反して開く。83は小



第95図　6区調査区南壁土層断面図



第 96 図　6 区遺構詳細図 1

型壷の胴部である。頸部が細長く、算盤玉形の胴部を有する。84 は壷の底部である。85 は甕の口縁部である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外反気味に開く。86 は折返し口縁を有する甕である。大型で、頸部から口縁部の立ち上がりはわずかに外反して開く。87 と 88 は台付甕の脚部である。ともに脚裾部内面に折返しを有する。

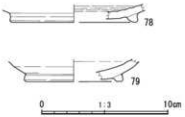
遺構の時期は出土遺物と SD0605 との新旧関係から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。

SD0604（第98図　図版15）

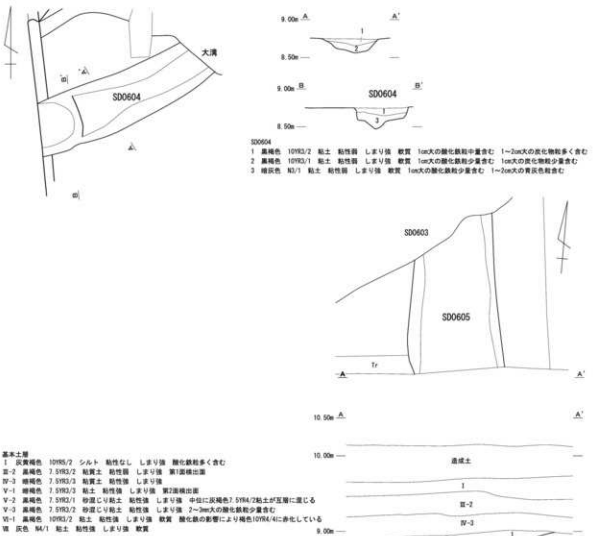
第2面E 19、F 19グリッドで検出された。調査区の南西部で、SD0603に並行して延びる浅い溝跡である。V層から掘り込まれている。検出長2.31 m、幅0.74 m、深さ0.3 mである。大溝に切られている。

遺物は第99図89と90が出土した。89は甕の口縁部である。摩滅の著しい個体である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外反して開く。90は台付甕の脚部である。

遺構の時期は出土遺物と検出層位から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。



第97図　6区SD0601出土遺物実測図

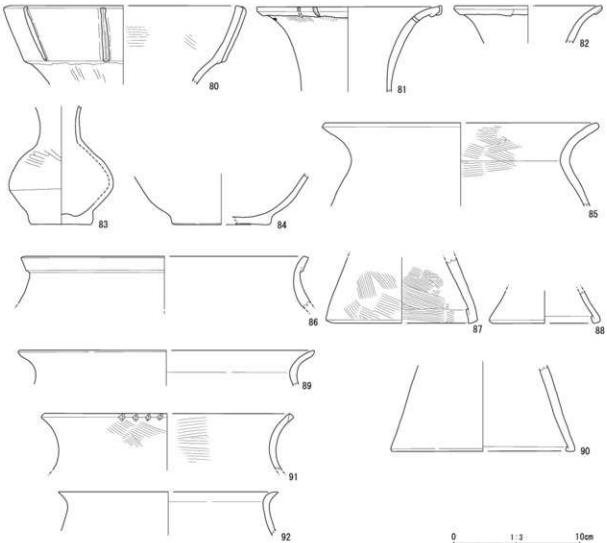


SD0604
1　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性弱　しまり強　軟質　1cm大の酸化鉄粒少量含む　1～2cm大の炭化物粒多く含む
2　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性弱　しまり強　軟質　1cm大の酸化鉄粒少量含む　1cm大の炭化物粒少量含む
3　暗灰色　N3/1　粘土　粘性弱　しまり強　軟質　1cm大の酸化鉄粒少量含む　1～2cm大の青灰色粒含む

基本土層
Ⅰ　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
Ⅱ-2　黒褐色　7.5YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　第1面横出面
Ⅳ-3　暗褐色　7.5YR3/3　粘質土　粘性強　しまり強
Ⅴ-1　暗褐色　7.5YR3/3　粘土　粘性強　しまり強　第2面横出面
Ⅴ-2　黒褐色　7.5YR2/1　砂混じり粘土　粘性強　しまり強　中位に灰褐色7.5YR4/3粘土が互層に混じる
Ⅴ-3　黒褐色　7.5YR3/2　砂混じり粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の酸化鉄粒少量含む
Ⅵ-1　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性強　しまり強　軟質　酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化している
Ⅵ　灰色　N4/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質

SD0605
1　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまり強　粗砂少量含む　1cm大の炭化物粒少量含む
　　2～3cm大の土ブロック少量混じる。
2　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまり強　粗砂少量含む　2～3mm大の炭化物粒少量含む
3　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり強　1cm大の炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/2　砂混じり粘土　粘性強　しまり強　軟質
5　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化している
6　灰色　N4/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質　1cm大の炭化物粒少量含む　青灰色粒少量含む

第98図　6区遺構詳細図2



第 99 図　6 区 SD0603 ～ 0605 出土遺物実測図

SD0605（第 98 図）

第 2 面E 20、F 20 グリッドで検出された。調査区の南東部で南北に延びる溝跡である。検出長 1.79 m、幅 1.28 m、深さ 0.62 mである。V層から掘り込まれている。断面形状は逆台形を呈する。北側で SD0603 に切られている。

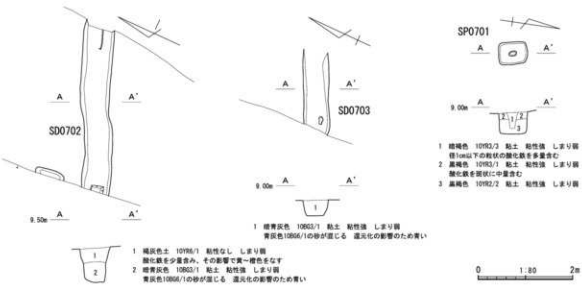
遺物は第 99 図 91 と 92 が出土した。91 と 92 は甕の口縁部である。91 は頸部の屈曲が緩やかで、口縁部が外反気味に開く。口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。92 は磨滅により原形をとどめていない。

遺構の時期は出土遺物と SD0603 との新旧関係から判断して、弥生時代後期後半に位置付けられる。

7　7区

SD0702（第 100 図　図版 16）

第 2 面D 20、D 21、E 20 グリッドで検出された。調査区北側に位置し、SD0703 と並行して直線的に延びる溝跡である。検出長 3.5 m、幅 0.76 m、深さ 0.35 mである。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。



第100図　7区遺構詳細図

SD0703（第100図）

第2面E 20グリッドで検出された。SD0702の約3m南側に位置し、SD0702と並行して直線的に延びる溝跡である。元々は調査区全域に延びていたと推定されるが、東側が消滅し、西側のみが残存している。検出長1.6m、幅0.53m、深さ0.3mである。

遺物は須恵器壺の小片と、弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土した。遺構の時期の特定は、出土遺物が乏しいことと、大溝より下位の層から検出されていること以外に手がかりがなく困難である。

SP0701（第100図）

第2面D 20グリッドで検出された。調査区北西隅に位置する。東西0.47m、南北0.61m、深さ0.47mの方形の柱穴である。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。中央部には柱根の痕跡が見られる。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

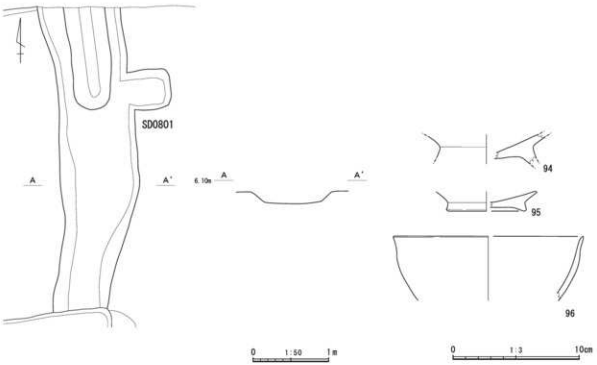
8　8区

SD0801（第101図　図版17）

D 22グリッドで検出された。調査区北壁から南へ直線的に延びる溝跡である。検出長3.99m、幅0.84m、深さ0.26mである。東側の一部に張り出しがある。

遺物は土師器の碗等が出土した。図示できた土器はいずれも摩滅が著しく、原形を留めていない。第101図94と95は10世紀代の土師器の高台碗である。94はハの字状に開く高い高台を有すると想定される。95は低い断面三角形の高台を貼り付けている。96は7世紀後半から8世紀前半の土師器の坏である。口縁部が短く外反する。

遺構の時期は出土遺物から判断して、大溝とほぼ同時期に位置付けられる。



第101図　8区遺構詳細図・SD0801出土遺物実測図

9　9区

検出された遺構は大溝のみである。大溝については別項で記載する。

10　10区

SD1001（第103図　図版18）

D 23、D 24グリッドで検出された。調査区西側から南北方向に延びる溝跡である。検出長9.06 m、幅0.82 m、深さ0.37 mである。底面は平坦である。SX1001を切っている。底面からSX1002を掘り込んでいる。

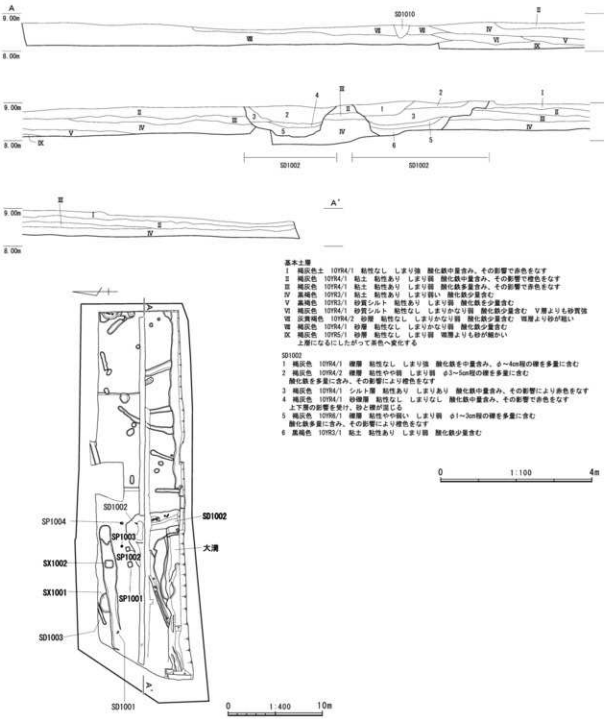
遺物は弥生時代後期後半の台付甕の脚部第107図97が出土したが、土砂とともに混入した遺物と見られる。

時期の特定は困難であるが、SX1001との新旧関係から古墳時代後期以降と考えられる。

SD1002（第104図　図版22）

E 23、E 24グリッドで検出された。平面形がL字状を呈した溝跡である。溝跡は調査区南壁沿いに位置する大溝に時期的に先行する。調査区南壁から直線的に北へ延びた後、南西方向へ方向を変える。E 24グリッド付近の溝の幅3 m、深さ0.8 m、方向を南西に変えた位置で幅0.6 mを測り、断面形状はV字状を呈する。

溝内の覆土上層から壷形土器が大量に出土した。第107図98は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。99～109は複合口縁壷である。99～104は複合部内面の屈曲が明瞭である。105～108は複合部内面の屈曲が緩やかである。109は複合部内面の屈曲が見られず、頸部から一体化して斜めに延びている。第108図110は単純口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。口縁端部に部分的に棒状浮文を模した沈線を施している。111は単純口縁、112は折返し口縁の小型壷である。111は口縁部が直線的に開く。112は口縁部が大きく外反して開く。113～120は壷の底部である。121は甕の



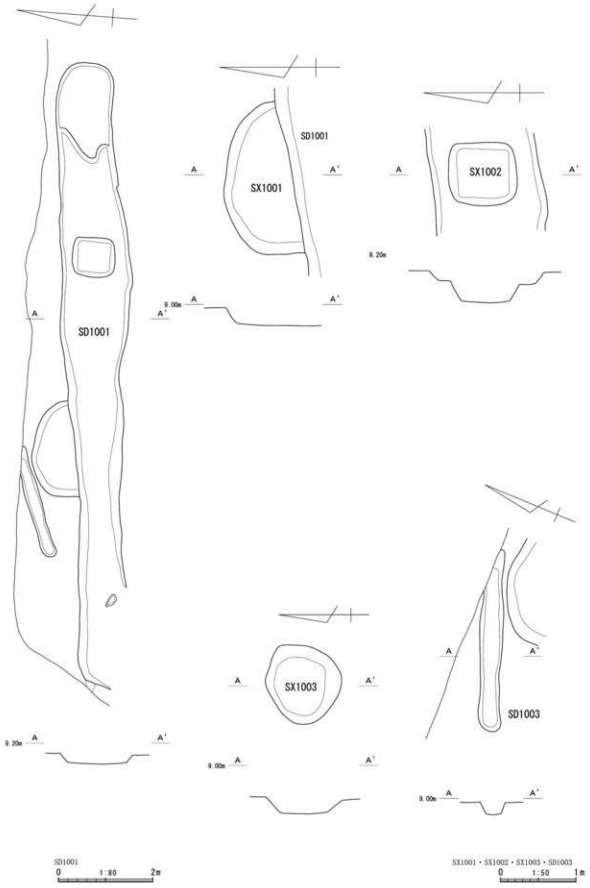
第102図　10区トレンチ土層断面図

胴部である。胴部の張りが小さく、胴部径より口径が大きい。口縁部は大きく外反して開く。

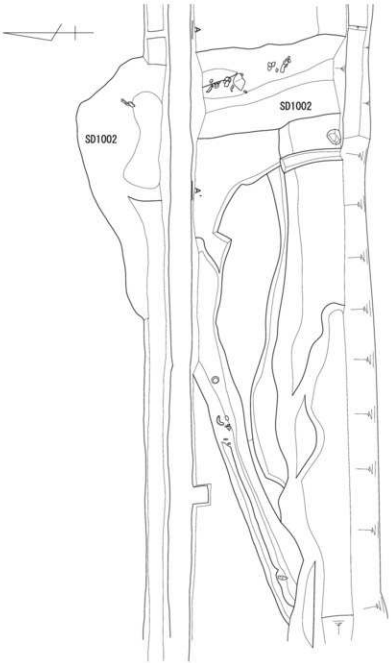
遺構の時期は出土遺物と大溝との新旧関係から判断して、弥生時代後期後半に位置付けられる。

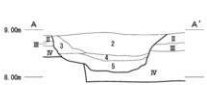
SD1003～1005・1007～1010（第103図・105図　図版23）

SD1003はD 23グリッド､その他の溝はD 25､E 25グリッド以東で検出された。いずれも幅0.2～0.8m、深さ0.1～0.4mの溝跡である。遺物は出土しなかったため、時期は明らかにできなかった。



第 103 図　10 区遺構詳細図 1



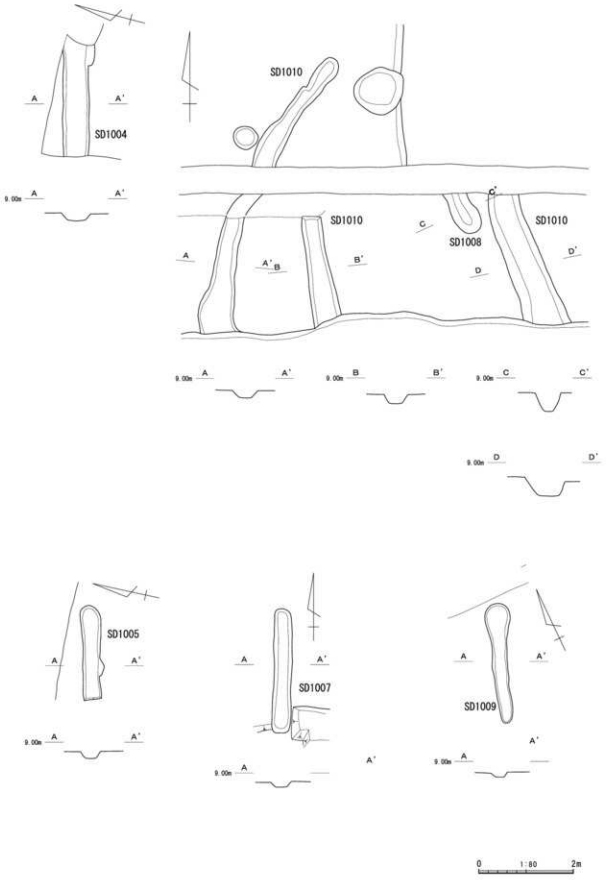


SD1002
2　暗灰色　10YR4/2　礫混　粘性やや弱　しまり弱　φ3～5cm程の礫を多量に含む
　酸化鉄を多量に含み、その影響により橙色をなす
3　暗灰色　10YR4/1　シルト混　粘性あり　しまりあり　酸化鉄中量含み、その影響により赤色をなす
4　暗灰色　10YR4/1　砂礫混　粘性なし　しまりなし　酸化鉄中量含み、その影響で赤色をなす
　上下層の影響を受け、砂と礫が混じる
5　暗灰色　10YR5/1　礫混　粘性やや弱い　しまり弱　φ1～3cm程の礫を多量に含む
　酸化鉄多量に含み、その影響により橙色をなす

基本土層
Ⅱ　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性あり　しまり弱　酸化鉄中量含み、その影響で橙色をなす　1層目
Ⅲ　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性あり　しまり弱　酸化鉄多量含み、その影響で赤色をなす
Ⅳ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性あり　しまり弱い　酸化鉄少量含む

0　1:80　2m

第104図　10区遺構詳細図2



第105図　10区遺構詳細図3

SX1001（第103図）

D 23、D 24 グリッドで検出された。調査区北西部に位置する。東西軸 2.04 m、南北軸は現存で 1.31 m、深さ 0.3 mの円形の土坑である。底面は平坦である。南半部を SD1001 に切られている。

遺物は古墳時代前期の土器第109図122～127、土錘128、須恵器甕の小片が出土した。図示でできた土器はいずれも土砂とともに混入したものと見られる。122は壺の頸部である。123～125は甕の口縁部である。123は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部が外反気味に開き、端部が鋭角的に尖るように面取りされている。124は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部が直線的に開く。125は磨滅が著しく、口縁部も原形を保っていない。126は台付甕の脚部である。127は小型壷の底部あるいは小型の鉢である。128は土師質の円筒形の管状土錘である。一部欠損があるがほぼ完形で、長さ 5.3 cm、幅 4.0 cm、厚さ 3.6 cm、重量 88.0g である。

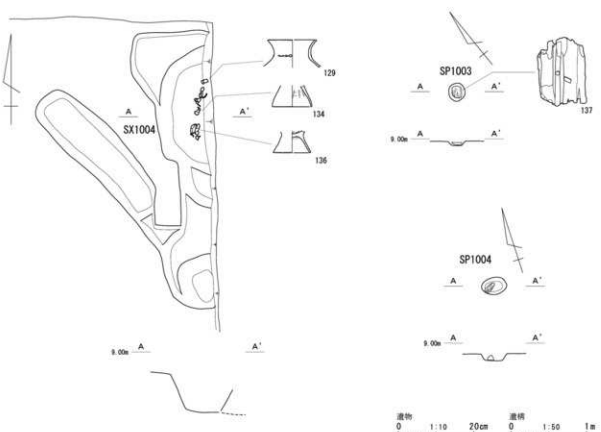
遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代後期以降に位置づけられる。

SX1002（第103図）

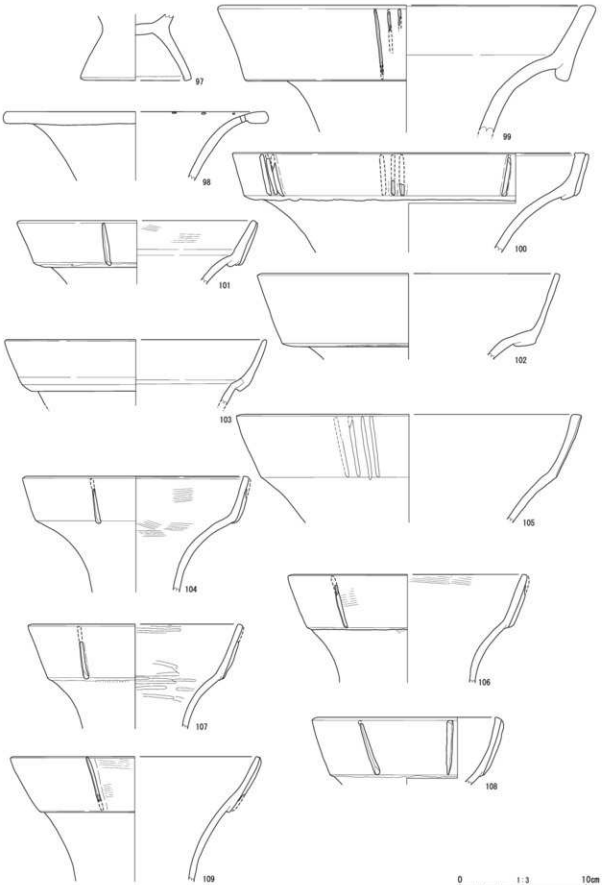
D 24 グリッドで検出された。SD1001 の底面で検出された。一辺 0.32～0.36 m、SD1001 底面からの深さ 0.12 mの方形の土坑である。遺物は出土しなかったため、時期は明らかにできなかった。また、SD1001 との新旧関係も明らかにできなかった。

SX1003（第103図　図版23）

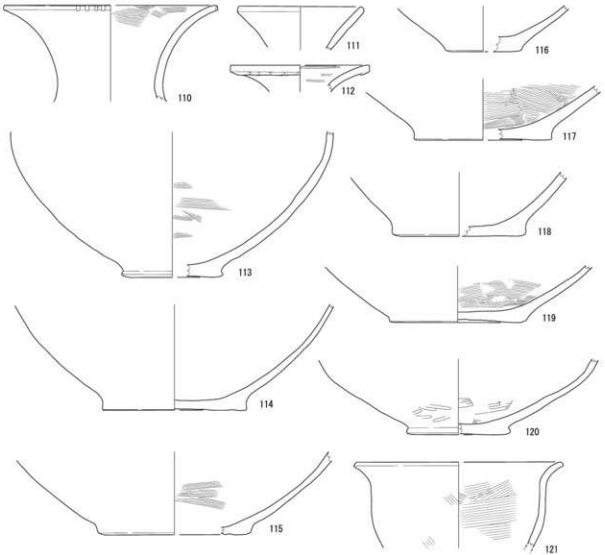
D 26・E 26 グリッドで検出された。調査区中央よりやや東に位置する。直径 0.23 m、深さ 0.06 m の浅い円形の土坑である。遺物は出土しなかったため、時期は明らかにできなかった。



第106図　10区遺構詳細図4



第 107 図　10 区 SD1001・1002 出土遺物実測図



第 108 図　10 区 SD1002 出土遺物実測図

SX1004（第 106 図　図版 23）

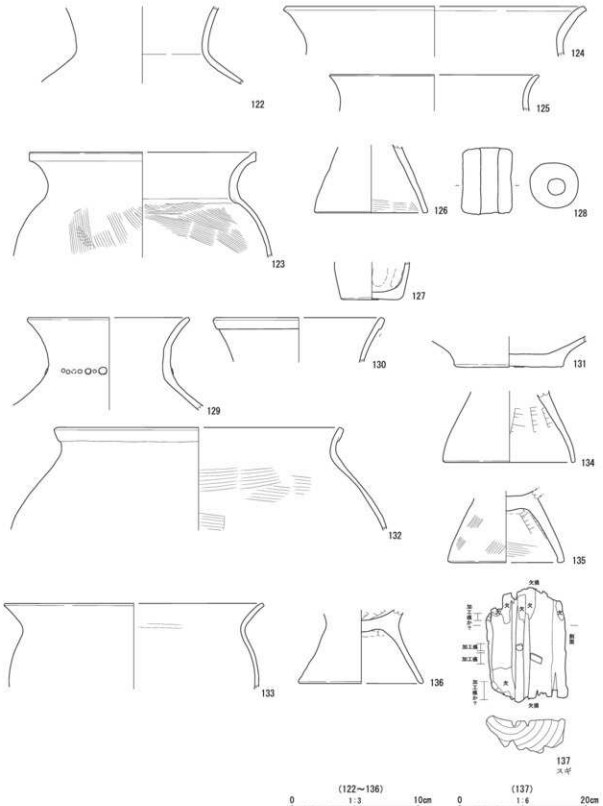
D 26、D 27 グリッドで検出された。調査区東壁付近に位置する。東半部は調査区外のため平面プランは確認できなかった。不規則な掘り込みを伴うが、遺構の主体は現存で東西軸 1.50 m、南北軸 0.77 m、深さ 0.6 mの楕円形の土坑である。底面は平坦である。

遺物は第 109 図 129 ～ 136 が出土した。129 は短頸の単純口縁壷である。頸部が短く、口縁部は外反して開く。肩部に円形浮文と竹管文を組み合わせて施文している。130 は折返し口縁壷である。口縁部の開きが小さく、頸部から直線的に開く。132 は折返し口縁を有する甕の口縁部である。胴部が張り、頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は短く、直線的に開く。133 は甕の口縁部である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。131 は壷の底部である。134 ～ 136 は台付甕の脚部である。134 と 135 は脚裾部が内湾する。136 は底部から脚裾部にかけて外反気味に開く。

遺構の時期は、図示できた遺物の他、小型高坏の小片が出土していることから、古墳時代前期に位置付けられる。

SP1003（第106図）

D 24、E 24グリッドで検出された。調査区中央よりやや西側に位置する。直径0.23 m、深さ0.06 mの円形の柱穴である。



第109図　10区SX1001・1004、SP1003出土遺物実測図

底面から木片第109図137が出土した。スギ材の半裁された板で、表面が平坦であることから礎板として使われていたのであろう。腐食が著しく進み、加工痕ははっきりとは見えない。放射性炭素年代測定では875-977 cal AD（85.02%）との結果が出ているが、ここから判断すると、9世紀後半から10世紀後半のいずれかの時期としておきたい。

SP1004（第106図）

D 24、E 24グリッドで検出された。SP1003から東に2.5 m離れた地点に位置する。東西軸0.33 m、南北軸0.23 m、深さ0.1 mの楕円形の柱穴である。

底面から礎板と推定される木片が出土した。時期の特定は困難であるが、規模と底面の標高、遺物の出土状況から、SP1003とほぼ同時期の遺構と考えられる。

11　11区

SD1101（第111図）

L 5、M 5グリッドで検出された。調査区西壁付近で北西から南東に直線的に延びる溝跡である。西側が撹乱されている。検出長2.8 m、幅は南壁での計測値で1.12 m、深さ0.3 mである。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片2点が出土した。時期の特定は困難であるが、出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD1102（第111図）

L 5、M 5グリッドで検出された。調査区西側で北西から南東に直線的に延びる溝跡である。検出長2.84 m、幅1.46 m、深さ0.23 mである。掲載した平面図はⅡ層まで掘削してから作成したため、図面上ではSD1102とSD1103は独立した遺構であるが、SD1103に切られることが南壁断面で確認できる。

遺物はS字状口縁台付甕を含む土器の小片が出土した。遺構の時期は出土遺物とSD1103との新旧関係から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。

SD1103（第111図）

L 5、M 5グリッドで検出された。調査区西側でほぼ南北方向に直線的に延びる溝跡である。検出長2.76 m、幅0.5 m、深さ0.27 mである。SD1102を切っていることが南壁断面で確認できる。

遺物は第112図138が出土した。138は平瓦の側端部の破片である。全体的に表面の摩滅が著しいが、凸面には格子目叩き、凹面には布目痕が認められる。側面は凸面側を面取り調整している。

遺構の時期は出土遺物とSD1102との新旧関係から判断して、古墳時代後期以降に位置付けられる。

SD1105（第111図　図版24）

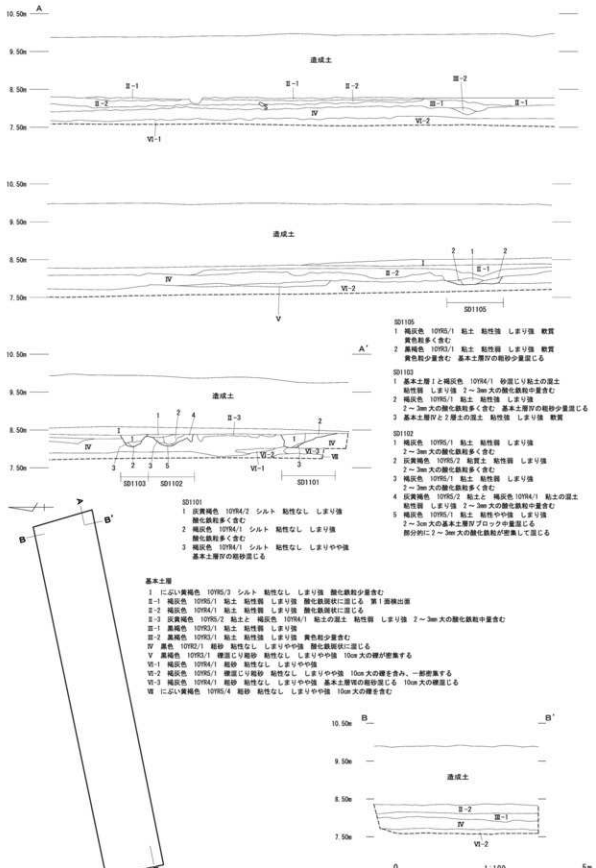
L 6グリッドで検出された。南西から北東にかけて直線的に延びる溝跡である。検出長2.86 m、幅1.78 m、深さ0.38 mである。基本土層のⅡ-2層はこの遺構の埋没に伴って堆積した層である。

遺物は第112図139～141が出土した。139は壺の底部である。140はS字状口縁台付甕の口縁部である。在地の赤褐色の胎土を有する。小片かつ摩滅が著しく、正確な形状を復原できない。141は小型高坏の坏部である。坏下部に稜を有し、口縁部に向かって直線的に開く。

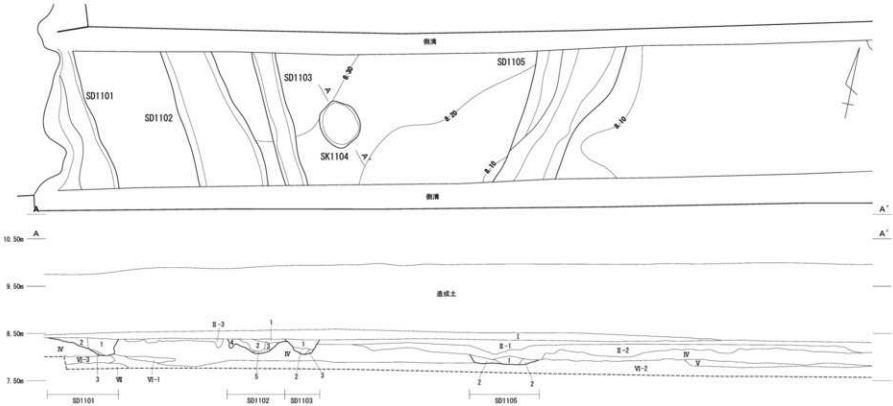
遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。

SK1104（第111図）

L 5グリッドで検出された。長径1 m、短径0.83 m、深さ0.43 mの円形の土坑である。底面は平坦で、壁はほぼ直立する。遺物は染付磁器の小片が出土した。遺構の時期は出土した土器から近世以降としておく。



第 110 図　11 区調査区南壁・東壁土層断面図



基本土層
Ⅰ にぶい黄褐色 10YR5/2 シルト 粘性なし しまり強 酸化鉄粒少量含む
Ⅱ-1 褐灰色 10YR5/1 粘土 粘性弱 しまり強 酸化鉄斑状に混じる 遺構検出面
Ⅱ-2 褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性弱 しまり強 酸化鉄斑状に混じる
Ⅱ-3 灰黄褐色 10YR5/2 粘土と褐灰色 10YR4/1 粘土の混土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒中量含む
Ⅳ 黒色 10YR2/1 粘砂 粘性なし しまりやや強 酸化鉄斑状に混じる
Ⅴ 黒褐色 10YR3/1 礫混じり粘砂 粘性なし しまりやや強 10cm大の礫が密集する
Ⅵ-1 褐灰色 10YR4/1 粘砂 粘性なし しまりやや強
Ⅵ-2 褐灰色 10YR5/1 礫混じり粘砂 粘性なし しまりやや強 10cm大の礫を含み、一部密集する
Ⅵ-3 褐灰色 10YR4/1 粘砂 粘性なし しまりやや強 基本土層III の粘砂混じる 10cm大の礫混じる
Ⅵ にぶい黄褐色 10YR5/4 粘砂 粘性なし しまりやや強 10cm大の礫を含む

SK1104

1 褐灰色 10YR5/1 シルト質粘土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
2～3cm大の基本土層IVブロック中量混じる
2 緑オリーブ灰色 5GY4/1 シルト質粘土 粘性弱 しまり強

SD1101
1 灰黄褐色 10YR4/2 シルト 粘性なし しまり強 酸化鉄粒多く含む
2 褐灰色 10YR4/1 シルト 粘性なし しまり強 酸化鉄粒多く含む
3 褐灰色 10YR4/1 シルト 粘性なし しまりやや強 基本土層IVの粘砂混じる

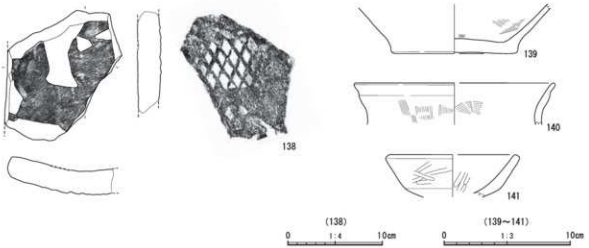
SD1102
1 褐灰色 10YR5/1 粘土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
2 灰黄褐色 10YR5/2 粘質土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
3 褐灰色 10YR5/1 粘土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒多く含む
4 灰黄褐色10YR5/2粘土と褐灰色10YR4/1粘土の混土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒中量含む
5 褐灰色 10YR5/1 粘土 粘性やや強 しまり強 2～3cm大の基本土層IVブロック中量混じる 部分的に2～3mm大の酸化鉄粒が密集して混じる

SD1103
1 基本土層Ⅰと褐灰色10YR4/1砂混じり粘土の混土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒中量含む
2 褐灰色 10YR5/1 粘土 粘性強 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒多く含む 基本土層IVの粘砂少量混じる
3 基本土層IVと2層土の混土 粘性強 しまり強 軟質

SD1105
1 褐灰色 10YR5/1 粘土 粘性強 しまり強 軟質 黄色粒多く含む
2 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性弱 しまり強 軟質 黄色粒少量含む 基本土層IVの粘砂少量混じる

0 1:80 2m

第111図 11区遺構詳細図



第 112 図　11 区 SD1103・1105 出土遺物実測図

12　12 区

SD1201（第 114 図）

第２面Ｌ９グリッドで検出された。東側調査区南西隅に位置し、南北方向へ直線的に延びる溝跡である。検出長 1.73 m、幅 0.83 m、深さ 0.43 mである。SD1211 に切られている。

遺物は第 115 図 142 ～ 147 が出土した。142 と 143 は複合口縁壷である。142 は複合部内面がわずかに屈曲し、口縁部は外反しながら大きく開く。143 は複合部内面の屈曲が見られず、頸部から一体化して斜めに延びている。144 は小型壷の底部である。145 と 146 は甕の口縁部である。ともに頸部の屈曲が緩やかで、口縁部は直線的に開く。145 は大型品であるが、小片で、口縁部は摩滅が著しく、原形を保っていない。147 は台付甕の脚部である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、SD1211 より前の古墳時代前期に位置付けられる。

SD1204（第 116 図　図版 25）

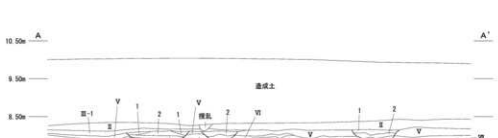
第２面Ｋ９、Ｋ 10、Ｌ９、Ｌ 10 グリッドで検出された。東側調査区北西部に位置し、南東側にコーナーを有して湾曲する溝跡である。西側調査区調査時に SD1207 または SD1216 と接続する可能性を検討したが、平面形状及び土層断面の観察結果から収束すると判断した。幅は 1.4 m、深さ 0.57 mである。

遺物は第 115 図 148 ～ 158 が出土した。148 は単純口縁壷である。頸部は屈曲が見られ、口縁部は直線的に開く。149 は折返し口縁壷である。口縁部は外反して大きく開く。150 は壷の底部である。151 と 152 は甕の口縁部である。151 は頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は直線的に開く。152 は大型で、口縁部は外反して開く。153 は小型甕の胴部である。丸い胴部を有する。154 は高坏の坏下部から脚部である。坏部の低い位置に稜を有することから、口縁部に向かって直線的に開く深い坏部を持つと考えられる。脚部は比較的低く、裾部への開きは直線的である。155 ～ 157 は高坏の脚部である。155 と 156 は裾部への開きは外反気味である。157 は中位にやや膨らみを持つ。158 は小型丸底土器の胴部である。丸い形状を有する。

遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。

SD1207（第 116 図）

第２面Ｋ９、Ｌ９グリッドで検出された。西側調査区の北西隅に位置する溝跡である。やや東寄りに湾曲しながら南北方向に延びる。調査区北東隅で収束し、南側は SB1204 の手前で収束すると想定される。検出長 3.6 m、幅 0.6 m、深さ 0.3 mである。



Ⅱ　暗灰黄色　2.5Y5/2　粘土　粘性強　しまりあり、酸化鉄を斑状に含む
Ⅲ-1　黒褐色　10YR3/2　砂質シルト　粘性弱　しまりあり
Ⅴ　褐色　7.5YR4/3　シルト質粘土　粘性強　しまりあり
Ⅵ　褐灰色　7.5YR4/1　シルト　粘性強　しまりあり　黒色土・砂多く混じる
Ⅶ　黒褐色　10YR2/2　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄を斑状に多く含む
Ⅷ　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄を斑状に多く含む
区　攪乱

SD1212
1　黒褐色　7.5YR3/1　シルト　粘性強　しまりあり　黄色粒含む
2　炭黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性強　しまりあり　黄色粒含む
3　にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト　粘性弱　しまりあり　底部に黒色土ブロック混じる

SD1201
1　黒褐色　7.5YR3/1　シルト　粘性弱　しまりあり
2　にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト　粘性弱　しまりあり
3　褐灰色　7.5YR5/1　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　炭化物・黄色粒を含む

SD1211
2　褐灰色　10YR4/1　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄を斑状に含む
4　黒褐色　10YR3/1　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　褐灰色土ブロック混じる

SD1211
1　黒褐色　10YR3/1　シルト質粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄斑状に混じる　炭化物粒少量含む
3　褐灰色　10YR4/1　シルト質粘土　しまり強　1層土中量混じる　酸化鉄斑状に混じる　黄色粒少量含む　炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　褐灰色土ブロック混じる
5　黒褐色　10YR3/1　砂質ロリ粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む

Ⅰ　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト　粘性弱　しまりあり
Ⅲ-2　黒褐色　10YR3/2　砂質シルト　粘性なし　しまり強
10cm大の炭黒褐色10YR4/2シルト質粘土ブロック中量混じる　酸化鉄斑状に混じる
Ⅴ　褐色　7.5YR4/3　シルト質粘土　粘性強　しまりあり
Ⅵ　褐灰色　7.5YR4/1　シルト　粘性強　しまりあり　黒色土・砂多く混じる
Ⅶ　黒褐色　10YR2/2　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄を斑状に多く含む
Ⅷ　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまりあり　酸化鉄を斑状に多く含む

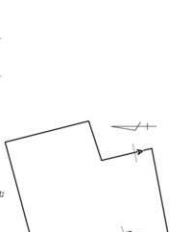
SD1211
3　暗灰色　10YR4/1　シルト質粘土　粘性強　しまり強　1層土中量混じる　酸化鉄斑状に混じる　黄色粒少量含む　炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　シルト質粘土　粘性強　しまりあり　褐灰色土ブロック混じる
5　黒褐色　10YR3/1　砂質ロリ粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む

SD1216
1　炭黄色　7.5YR4/2　シルト質粘土　粘性弱　しまり強　3層土少量混じる　酸化鉄斑状に混じる
2　炭黄褐色　10YR4/2　シルト質粘土　粘性弱　しまり強　3層土少量混じる　酸化鉄斑状に混じる　炭化物粒少量含む
3　にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄斑状に混じる
4　褐灰色　10YR4/1　シルト質粘土　粘性強　しまり強　3層土少量混じる　酸化鉄斑状に混じる　炭化物粒中量含む

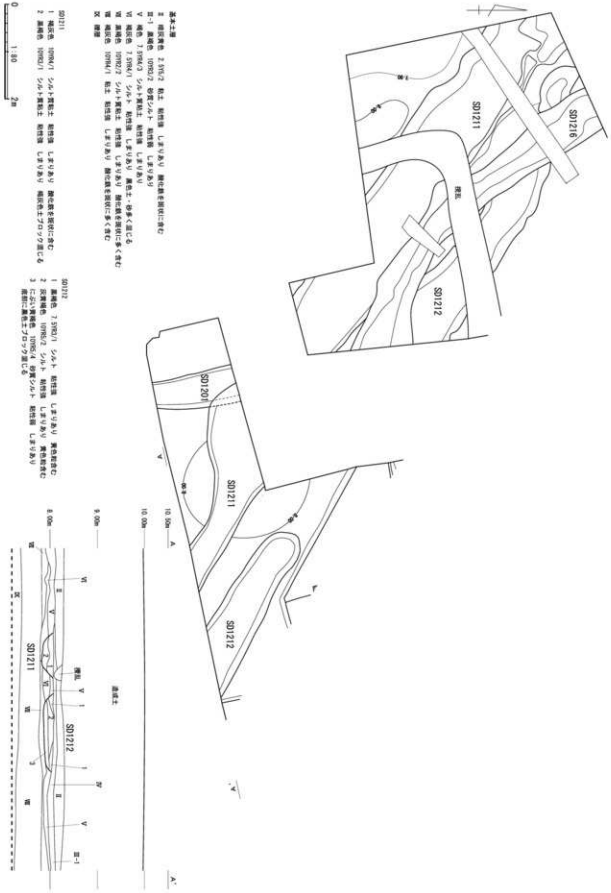
SK1214
1　にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト質粘土　粘性弱　しまり強　炭化物粒少量含む
2　炭黄褐色　10YR4/2　シルト質粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄斑状に多く混じる　黄色粒少量含む　炭化物粒少量含む
3　褐灰色　7.5YR4/1　シルト質粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄斑状に多く混じる　炭化物粒少量含む
4　炭黄褐色　10YR4/2　粘土　粘性強　しまり強　やや軟質　酸化鉄斑状に多く混じる　黄色粒少量含む　炭化物粒少量含む
5　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまり強　やや軟質　酸化鉄斑状に多く混じる　炭化物粒少量含む

SD1212
1　褐灰色　10YR4/1　シルト質粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄斑状に混じる　黄色粒多く含む

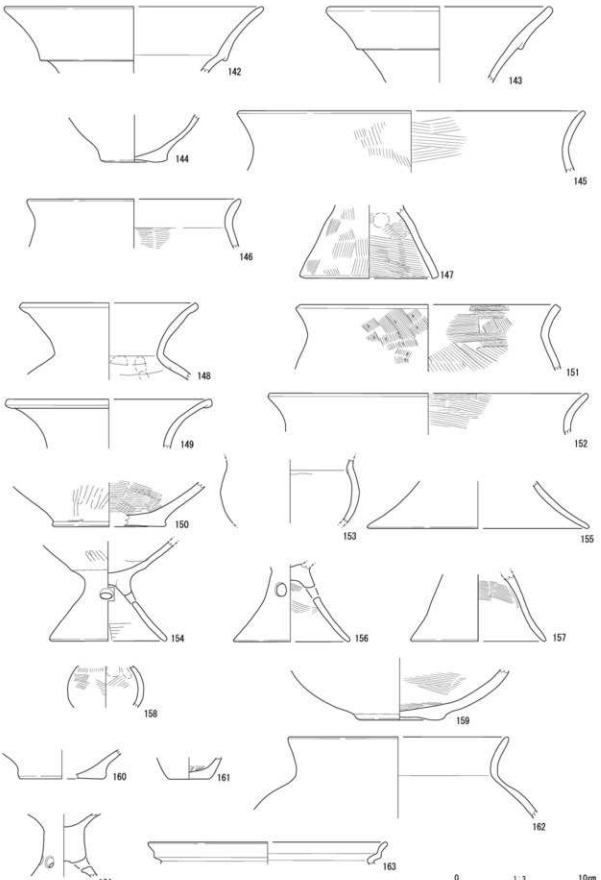
SD1207
1　炭黄褐色　10YR4/2　シルト質粘土　粘性弱　しまり強　黄色粒中量含む　炭化物粒少量含む



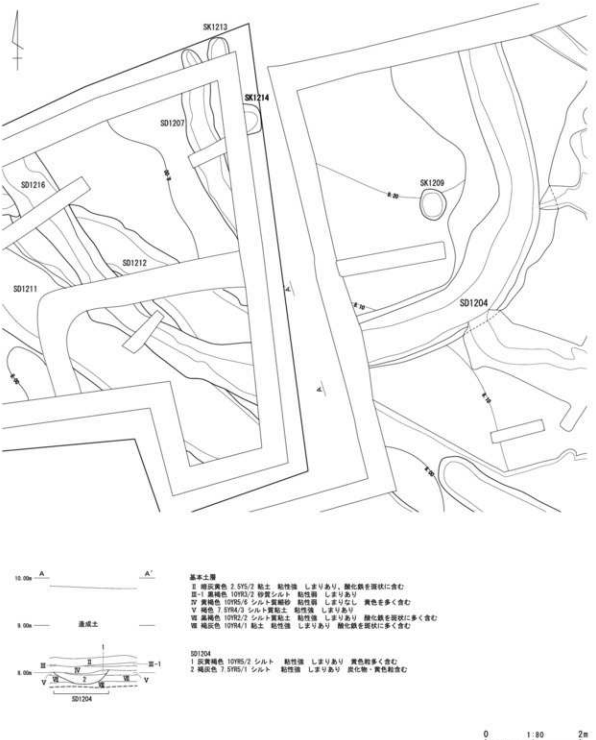
第113図　12区調査区南壁・東壁土層断面図



第114図　12区遺構詳細図1



第 115 図　12 区 SD1201・1204・1207 出土遺物実測図



第116図　12区遺構詳細図2

遺物は第115図159～164が出土した。159と160は壺の底部である。161は小型壺の底部である。162は甕の口縁部である。胴部が張り、頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は緩やかに開く。口縁端部は丸く収める。163はS字状口縁台付甕の口縁部である。在地の赤褐色の胎土を有する。164は高坏の脚部である。脚上部は中実の柱状で、裾部が開く形状を呈する。間隔を開けた2個1対の円孔を前後に穿孔している。

遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。

SD1211（第116図　図版25）

第2面L8、L9グリッドで検出された。東側調査区南西隅から西側調査区北西隅に向かって直線的に延びる溝跡である。検出長13.91m、溝幅は狭い箇所で0.7m、最大で1.68m、深さ0.17mである。底面は平坦である。東側調査区でSD1201を切り、西側調査区でSD1216に切られている。

遺物は第117図165～171が出土した。165と166は折返し口縁壷である。165は口縁部が外反気味に開き、166は大きく外反して開く。167は壷の底部である。168は小型壷の底部である。169は甕の口縁部である。大型で、口縁部が緩やかに開く。170は台付甕の脚部である。171は小型高坏の坏部である。坏下部に稜を有し、口縁部に向かって直線的に大きく開く。

遺構の時期は出土遺物とSD1201との新旧関係から判断して、SD1201より後の古墳時代前期に位置付けられる。

SD1212（第116図　図版25）

第2面L9、L10グリッドで検出された。東側調査区南西隅から西側調査区北西隅に向かって、SD1211の東側に並行して直線的に延びる溝跡である。東側調査区の西壁付近で一部途切れる箇所がある。検出面での幅1.6m、深さ0.19mである。底面は平坦である。覆土は主に褐灰色シルト質粘土、灰黄褐色シルトが堆積する。西側調査区でSD1216に切られている。

遺物は西側調査区で第117図172と173が出土した。172は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。173は甕の口縁部である。口縁部は直線的にわずかに開く。小片で摩滅が著しく、原形を保っていない。

遺構の時期は出土遺物とSD1216との新旧関係から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1216（第116図）

第2面L9グリッドで検出された。西側調査区の北西から南東にかけてやや東寄りに湾曲しながら延びる溝跡である。検出面での幅1.24m、深さ0.5mである。SD1211、SD1212を切っている。

遺物は古墳時代前期の土器片が少量出土した。遺構の時期は出土遺物とSD1211、1212との新旧関係から判断して、SD1211、1212より後の古墳時代前期に位置付けられる。

SK1206

第2面K10グリッドで検出された。東側調査区北東部に位置する。長径0.73m、短径0.62mの円形の土坑である。底面は水平で、壁はほぼ直立する。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の壷と見られる小片が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期と判断した。

SK1209（第116図）

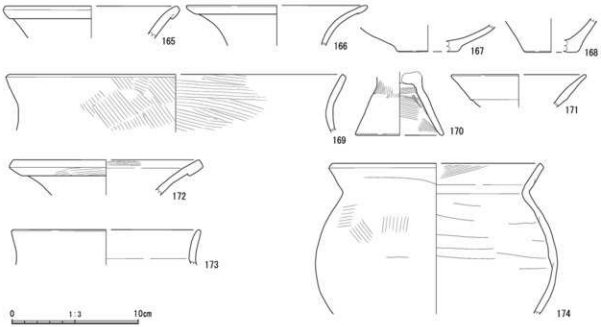
第2面でL9グリッド検出された。東側調査区に位置する。長径0.68m、短径0.55mの円形の土坑である。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土した。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期と判断した。

SK1213（第116図）

第2面K9グリッドで検出された。西側調査区の北壁面に設けたテラス上で検出され、南側が側溝で削平されている。現状での平面形状は長楕円形の土坑である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は覆土から比較的多く出土したが、弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片のみである。時期の特定は困難であるが、出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と考えられる。



第 117 図　12 区 SD1211・1212、SK1214 出土遺物実測図

SK1214（第 116 図）

第２面Ｋ９グリッドで検出された。西側調査区の東壁面に設けたテラス上で検出され、西側が側溝で削平されている。現状での平面形状は隅丸方形の土坑である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は第 117 図 174 が出土した。174 は丸い胴部を有する甕である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。

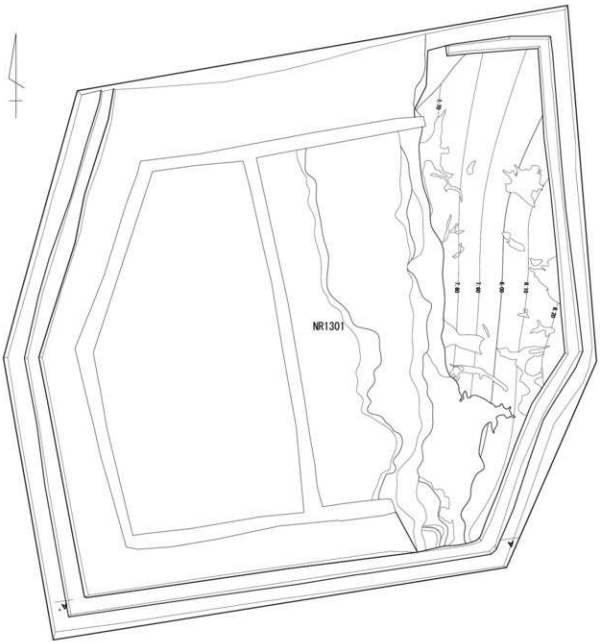
遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

13　13 区

NR1301（第 118 図　図版 26）

西山田川（尾羽川）の河道と考えられる自然流路である。流路の東半部が検出された。南壁断面の遺構検出面での計測値は、幅が 10.84 m、深さが 1.06 mである。川底は平坦である。流路の東側法面は急勾配で、水流による洗掘が確認できる。覆土の最下層は砂礫層、下層は灰色砂層、中層は灰色シルトと粘土の互層、上層は黄褐色砂質シルトが堆積している。調査区東側の遺構検出面では地割れと噴砂の痕跡が確認できる。

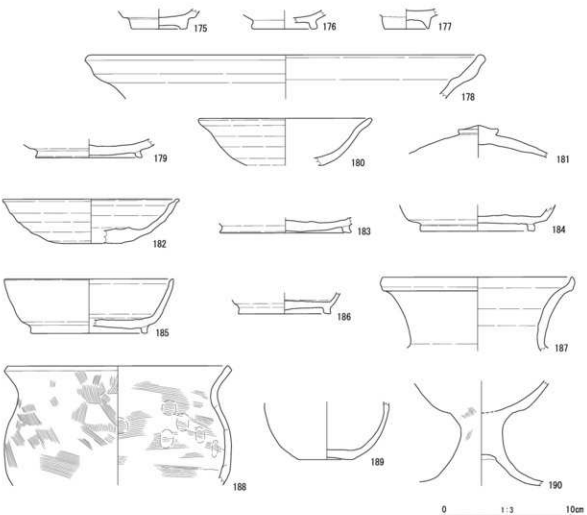
遺物は、河床付近で第 121 図 200 の柱根、199 の板状木製品、201 ～ 205 の板材が出土した。200 の柱根は斜めに傾いた状態で、199、201 ～ 205 は柱根の下から出土しており、板材は礎板として使用されたものと考えられる。遺構検出面より深い位置で出土したことから、洪水等によって地中にあった柱が土ごと洗掘されて河床に落ちたものと推測される。最下層の砂礫層では第 120 図 191 の瓦が出土した。下層からの遺物の出土量は少なく、土器は第 119 図 177 と 180、この他、近世の陶器片がわずかに混じる程度である。瓦は第 120 図 194 と 196 が出土した。中層では、土器は第 119 図 175、176、178 が出土した。この他染付等近世後半の陶磁器の小片が出土した。瓦は第 120 図 192 と 193 が出土した。覆土上層では、土器は 179・181 ～ 187 が出土した。この他、染付等近世後半から近代にかけての陶磁器の小片が出土した。瓦は第 120 図 195 と 197 が出土した。木製品は、第 121 図 198 の漆椀 198 と第 200



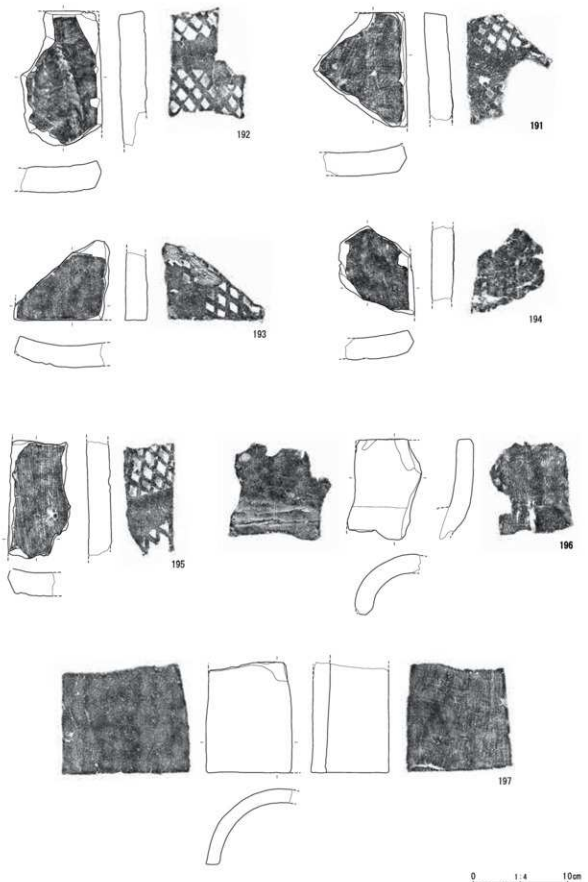
第118図　13区遺構詳細図

図656の木簡が出土した。木簡の詳細は別項で記述する。金属製品は第122図206の鉄釘、207の用途不明の鉄製品、208と209の銭貨が出土した。東側の河岸部で第119図188～190の土器が出土した。覆土の各層位で幅広い年代の遺物が混在して出土していることから、検出された自然流路は近世のものと位置づけられるが、古墳時代後期以降近世までほぼ同じ位置を流れていたことが想定される。

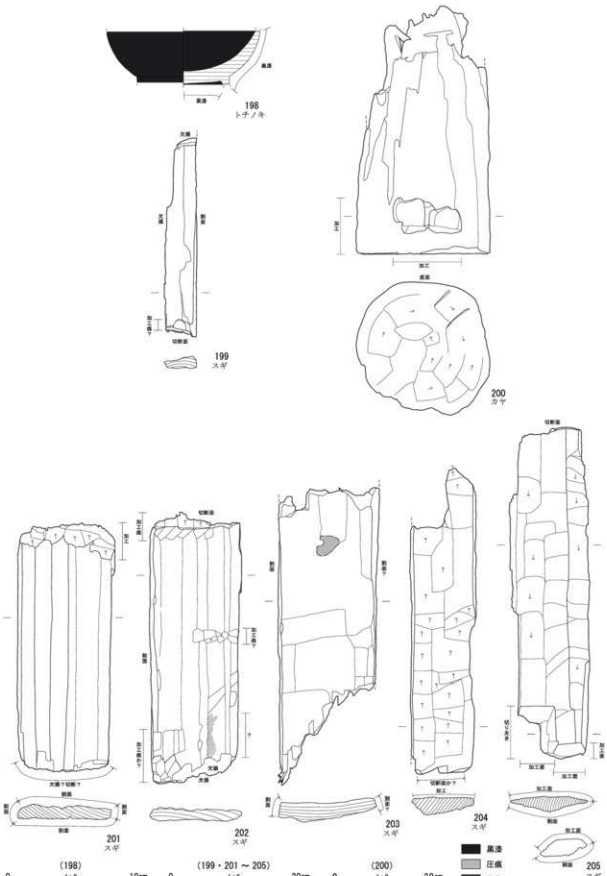
第119図175～177は近世の陶器である。175は天目茶碗の底部である。内面全体に鉄釉を施釉している。176と177は碗の底部である。176は内面全体に灰釉を施釉している。177は内面全体に鉄釉を施釉している。178は擂鉢と推定される。器面全体に錆釉を施釉している。口縁部付近が有段になる形状を呈する。179は灰釉陶器の碗である。断面四角形の高台を貼り付けている。外面全体は回転ナデ調整、内面全体に灰釉を施釉している。180は平安期と考えられる土師器の碗である。体部はやや腰が張って大きく開き、口縁部付近が外反する。181～187は8世紀前半代の須恵器である。181は坏蓋である。外面全体に自然釉が付着する。低い擬宝珠状の摘みを有する。182は無高台丸底の坏である。全体に半楕円形状を呈している。外面底部はナデ調整で仕上げている。口縁端部内面に強いナデを施して端部を薄く仕上げている。183～185は有高台平底の坏身である。いずれも断面四角形の貼り付け高台を有し、器面全体を回転ナデ調整で仕上げている。184は腰部に屈曲が見られ、外面底面に×のヘラ記号を付している。185は腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直線的に開く形状を呈する。186は有高台の瓶である。断面四角形の貼り付け高台を有し、器面全体を回転ナデ調整で仕上げている。187は広口の短頸壺の口



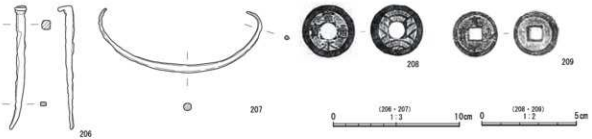
第119図　13区NR1301出土遺物実測図1



第120図　13区NR1301出土遺物実測図2



第121図　13区NR1301出土遺物実測図3



第 122 図　13 区 NR1301 出土遺物実測図 4

縁部である。濃い灰色の砂質の胎土を有する。口縁端部付近は内面にナデを施して、直立気味に立ち上げる。188 は弥生時代後期後半の甕の胴部である。胴部は丸く、頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に開く。189 と 190 は古墳時代前期の土器である。189 は小型壺の胴部である。球胴の胴部を有する。190 は高坏の脚部である。脚上部は中実の柱状で、裾部が開く形状を呈する。深い坏部を有する。

第 120 図 191 ～ 194 は平瓦である。191 は狭端部の破片で、凸面には格子目叩き、凹面には布目痕が残る。側面は、凸面側に広く面取りを施している。192 と 193 は広端部の破片である。いずれも凸面には格子目叩き、凹面には布目痕が残る。192 の凹面には布綴じ痕が確認でき、側面は凸面側に幅の広い面取りが施されている。194 と 195 は側端部の破片である。195 は表面の摩滅が著しいが、いずれも凸面には格子叩きが残り、側面は凸面側に幅の広い面取りが施されている。196 と 197 は丸瓦である。196 は段部から玉縁部の破片で、玉縁部の凸面は横方向にナデ調整されており、凹面には布目痕が残る。段部は凸面側に粘土を付加して整形しているとみられるが剥離している。197 は広端部の破片である。凸面には全面に縦方向の削り調整が施されており、凹面には糸切痕と布目痕が残る。

第 121 図 198 は体部から底部が 1/2 程残存している漆椀である。内外面と高台内面にも黒漆が塗られている。材質はトチノキで、板目材から整形されている。口縁部は欠損し、高台は摩滅しているが、わずかに残っている。復原口径は 12.2 ㎝、器高は 4.3 ㎝、高台の外径は 7.3 ㎝である。199 はスギ材の板状木製品である。表・裏面と右側面は割面で、左側と上部は欠損している。下端部は切断した痕跡がある。放射線炭素年代測定では 539-603　cal AD（95.45%）の結果が出ている。200 はカヤの芯持ち材の柱根である。上部は著しく腐食が進んでいるが、下部は良好な状態で残っている。残存長は 52.3 ㎝、最大直径は 28.2 ～ 28.7 ㎝である。底面には切断したときの刃物痕があり、方向性も確認できる。体部の下方には、7.6 × 6.8 ㎝と 5.7 × 6.55 ㎝の方形に近い切り込みがある。柱を運ぶか、建てる時に使われたものであろうか。放射線炭素年代測定では 603-626　cal AD（95.40%）の結果が出ている。201 ～ 205 は河床より出土したスギ板材である。201 は 4 面とも割面の長方形の板で、木目は追い柾目である。長さは 39.6 ㎝、幅は 14.9 ㎝、厚さは 2.1 ㎝、上下端部は切断された痕跡があり、特に上部には刃物痕が明瞭に残っている。202 も 201 と同様の特徴を持つ長方形板である。体部の中央右寄りと左下方に面加工された刃物痕がある。203 は上下が欠損している。元々は同一幅を持つ板材であったと考えられる。残存長は 47.2 ㎝、最大幅は 15.6 ㎝、最大厚は 3.1 ㎝と厚みがある。特に加工はなく、各面とも割面である。放射線炭素年代測定の結果では 539-603　cal AD（95.45%）の結果が出ている。204 は柾目板で、表面全体に面加工した痕がある。手斧の幅は 3 ㎝程であったと推定される。裏面は風化が著しく、加工面なのか、割面であったか判断できない。205 は長方形の柾目板で、長さは 52.6 ㎝、幅は 12.3 ㎝、厚さは 2.9 ㎝である。裏面は割面を残し、表面は平坦面にするための手斧痕がある。加工痕は同一方向に 3 列程、並んでいる。上下端部は切断した痕がある。左下方には切り欠きがある。

第 122 図 206 は鉄釘である。片側を折り曲げた頭部を持つ平釘である。207 は用途不明の鉄製品である。

太さ最大0.6㎝の棒状の鉄を弧状に曲げて把手状の製品を作り出している。208と209は寛永通宝である。

14　14区

礎石建物跡SB1401については、別項に記載する。

SD1409（第123図　図版29）

第1面J 15、J 16グリッドで検出された。調査区東側に位置し、北西から南東方向に直線的に延びる溝跡である。一部は15区と19区にまたがる。古墳SX1425の周溝及び石室の一部を破壊して掘削している。19区では礎石建物跡SB1401の掘込地業に切られている。検出長13.6ｍ、最大幅3.79ｍ、深さ0.53ｍである。底面の平坦面は狭く、両壁は緩やかに立ち上がる。覆土下層は黒色の砂質シルト、中層は黄灰色粘土質シルト、上層は暗灰黄色粘土質シルトが堆積する。上層の第2層にSX1425の石室石材に類似する円礫が混じる。これより下層に円礫が混じらないことから、溝の中層まで埋設してから、一部残存していた古墳の円礫が混じる土を人為的に埋設したことが想定される。また、遺構検出作業の途中で、溝の西側の肩に当たる位置で円礫が密集する箇所が確認された。この円礫もSX1425の石室石材の礫に類似することから、SD1409の埋設土に混じっていた円礫が残存したものと考えられる。

遺物は遺構覆土の各層から満遍なく出土したが、図示できた遺物は上層から出土したものが多い。底面から第124図221～223の燃え差し（付け木）、下層から第124図218の丸瓦、中層から第124図215の須恵器の坏身と第124図217の軒丸瓦、その他の遺物は上層から出土した。図示できた遺物は、木製品は19区、その他の遺物は14区で出土した。

第124図210～216は8世紀前半代の須恵器である。210と211は坏蓋である。ともに天井部を欠損している。210はにぶい橙色の胎土を有する。外面の強いヨコナデ調整で端部断面を三角形状となすよう受部を作出している。211は端部を折り曲げて受部を作出している。212～215は有高台平底の坏身である。いずれも断面四角形の貼り付け高台を有している。212～214は平底で、腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直線的に開く形状を呈する。213は口縁端部付近の内面に沈線を施している。214は底面に回転ヘラケズリを施している。215は底部が高台より突出する。216は212～214より深い箱型の坏身で、低い断面四角形の削り出し高台を有する。

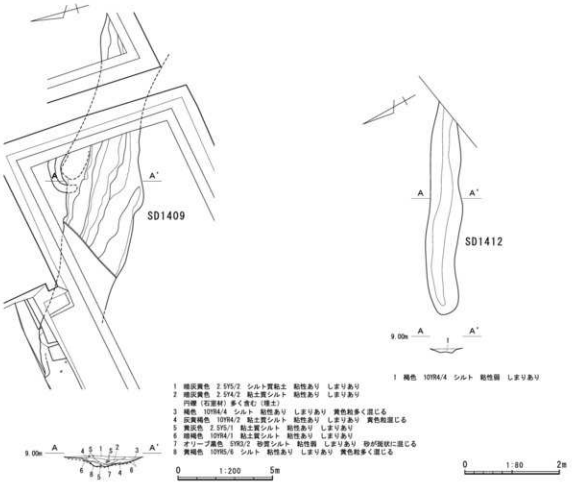
第124図217は軒丸瓦で、瓦当の外縁から花弁先端部分までの破片である。周縁部は線鋸歯文で、花弁は複弁蓮華文である。丸瓦接合部は無加工である。218は丸瓦の広端部の破片である。側面は凸面側に面取り調整が施されている。219と220は平瓦の広端部の破片である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。叩き目は摩耗して木目が浮いている。側面には、凸面側に幅広の面取りが施されている。

第124図221～223は燃え差し（付け木）である。221は長さが25.4㎝、幅は1.6㎝、厚さは1.4㎝の角棒状で、一部が加工面、残りは割面となっている。222は長さが23.15㎝、幅は1.8㎝、厚さは1.0㎝で各面とも割面である。223は長さが19.4㎝、幅は1.6㎝、厚さは1.1㎝で、一部が加工面、残りは割面である。いずれも下端部が炭化しており、上端部は欠損している。樹種もヒノキ材で、他の調査区で出土した付け木と同様である。

遺構の時期は、掘削年代は古墳SX1425の周溝及び墳丘の一部に掘削が及んでいること、瓦が出土していることから7世紀後半、埋没年代は須恵器の年代から、8世紀前半と想定される。この溝が埋没してから礎石建物SB1401は構築されている。

SD1412（第123図　図版29）

第1面J 15、J 16、K 16グリッドで検出された。調査区東側に位置し、SD1409の西側に並行して直線的に延びる浅い溝跡である。検出長4.5ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍである。



第 123 図　14 区遺構詳細図

遺構から出土した遺物は、削り調整を施した土師器の小片１点のみで、時期の特定は困難であるが、出土遺物から SD1409 と同時期の可能性が考えられる。

SX1425（第 125 ～ 127 図　図版 29）

第１面 J 16 グリッドで検出された古墳である。周溝の一部と横穴式石室が残存している。

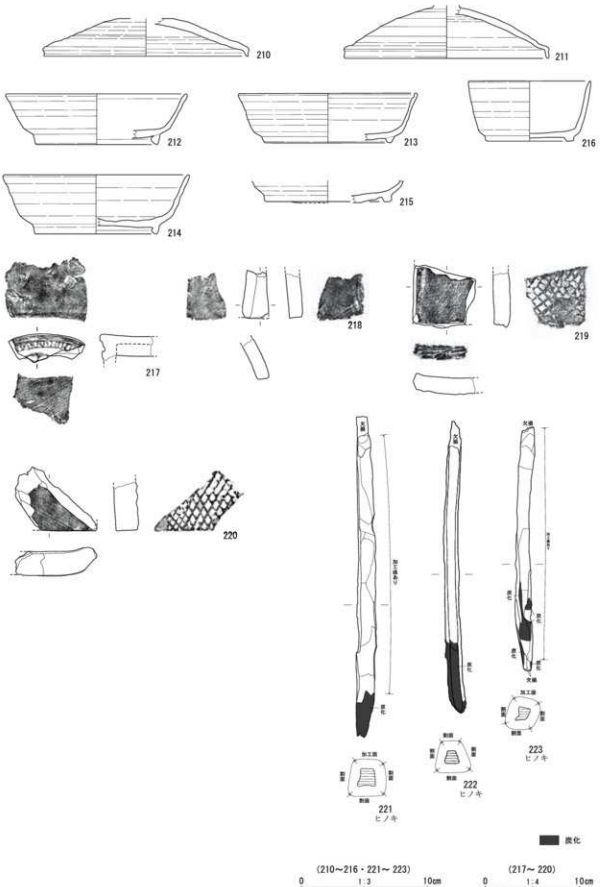
周溝は北側が残存し、西側は SD1409 に切られている。東側の先端は途切れているため不明である。残存長は２m、周溝幅 0.6 m～ 0.8 m、検出面からの深さ 0.35 m である。断面形状は逆台形を呈する。

墓壙の平面形状は長方形を呈する。開口部は南東側にある。残存長は約 1.7 m、幅は奥壁付近で約１m、開口部付近は推定で約 0.9 m である。検出面からの深さ奥壁付近で 0.3 m であるが、開口部付近は削平されているため不明である。

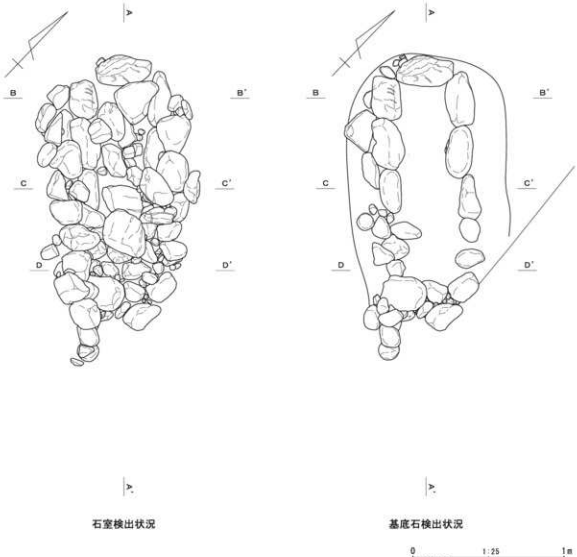
主体部は無袖式の横穴式石室である。石室の上部は破壊され、奥壁１枚と基底石もしくは２段目までの側壁の一部、崩落した側壁が出土した。石室残存長は約２m、幅は内法で奥壁付近が 0.3 m、中央部で 0.4 m、開口部付近で 0.3 m である。石室主軸は N-43.5°-W である。

奥壁は、縦 25 ㎝、横 40 ㎝、厚さ 20 ㎝の角礫１枚が残存していた。角礫は広口積みに据えている。

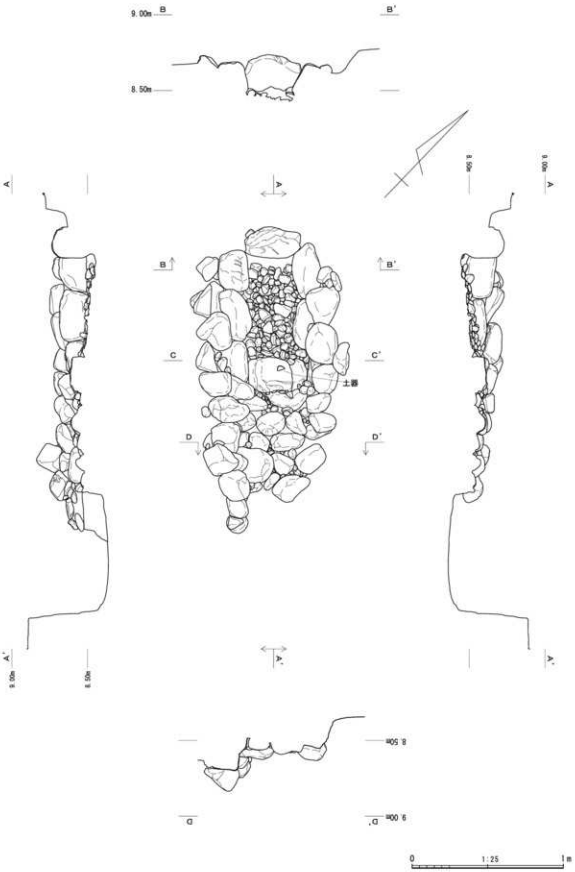
側壁の基底石は、左右とも奥壁から３石目までは、横 30 ～ 45 ㎝、縦 10 ～ 20 ㎝、厚さ 10 ～ 20 ㎝の亜角礫を用い、右側壁はすべて広口積み、左側壁は奥壁から１石目は広口積み、２石目と３石目を平積みに据えている。開口部側は左右とも 10 ～ 20 ㎝大の亜角礫を据えているが、破壊による影響か配置は



第124図　14区 SD1409 出土遺物実測図

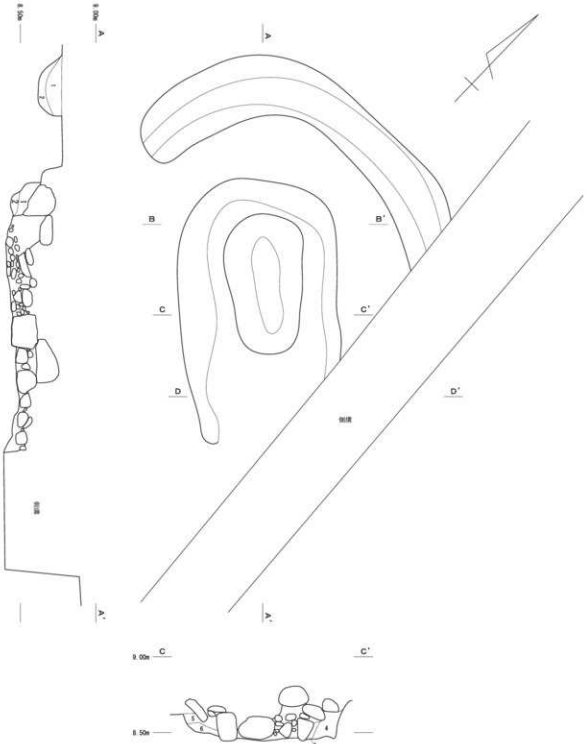


第125図　14区SX1425石室検出状況図・基底石検出状況図



第 126 図　14 区 SX1425 展開図

周溝
1　暗褐色　10YR3/3　シルト　粘性あり　しまりあり
2　褐灰色　10YR4/1　シルト質粘土　粘性あり　しまりあり

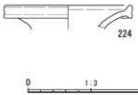


掘方
1　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる
2　黒褐色　10YR3/1　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり
3　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒混じる
4　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり
5　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒混じる
6　褐灰色　10YR4/1　砂質シルト　粘性弱　しまりあり　黄色粒多く混じる

0　1:25　1m

第127図　14区 SX1425 断面図・完掘状況図

乱雑で、原位置を保っているかも不明である。また、右側壁の開口部付近にある縦 30 cm、横 25 cm、厚さ 10 cmの礫は袖石、左右側壁をつなぐように配置された礫は框石である可能性も考えられるが、破壊のため定かではない。２段目は 20 cm大前後の亜角礫を平積みにしている。



第 128 図　14 区 SX1425 出土遺物実測図

奥壁から２石目の側壁付近までは、５～ 10 cm大の亜角礫の敷石が敷設されている。３石目の側壁から開口付近までは、側壁と同じ 20 cm大前後の亜角礫を敷設し、隙間を５～ 10 cm大の亜角礫で埋めている。

遺物は、石室床面から８世紀前半の須恵器の長頸壺の口縁部破片 224 が出土したが、この古墳を破壊して掘削している SD1409 の出土遺物から判断して、石室の時期を示す遺物ではないと思われる。石室掘方及び周溝の覆土からは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土しているが、古墳に関連する遺物は出土しなかった。SD1409 との新旧関係から、この古墳は７世紀後半代に破壊されていることは推定できるが、築造年代についてはこれ以前と記すに留めておく。

15　15 区

掘立柱建物跡 SB1501、炭化米集中遺構 SX1507 については、別項に記載する。

SD1501（第 129 図　図版 36）

第１面 J18 グリッドで検出された。調査区東側に位置し、SD1502 に接して、南北方向に直線的に延びる浅い溝跡である。炭化米集中遺構 SX1507 の西側を切って掘削されている。西側の壁を SD1502 に切られている。SD1505 の埋没後に掘削されている。検出長 3.66 m、残存幅は最大で１m、深さ 0.1 m である。

遺物は土師器の坏の底部第 130 図 225 が出土した。この他、土師器の高台碗や格子目叩きの平瓦の小片が出土した。

遺構の時期は出土遺物と SX1507 との新旧関係から判断して、10 世紀前半以降に位置付けられる。

SD1502（第 129 図　図版 36）

第１面 I17、I18、J17、J18 グリッドで検出された。調査区東側に位置し、SD1501 と SD1503 に接して、南北方向に直線的に延びる溝跡である。SD1501 の西側の壁、SD1503 の東側の壁を切っている。第２面で検出された SD1505 の埋没後に掘削されている。検出長 3.68 m、幅 1.36 m、深さ 0.13 mである。

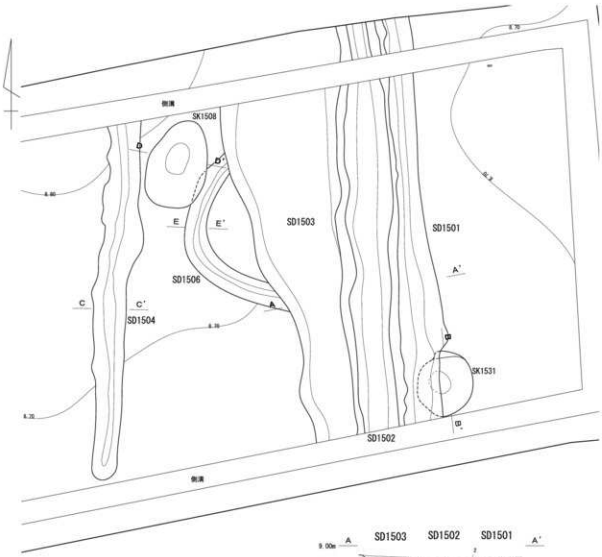
遺物は土師器の甕第 130 図 226 と平瓦 227 が出土した。この他、土師器の高台碗の小片も出土した。226 は甕の口縁部である。摩滅が著しく、口縁端部は原形を保っていない。口縁部は直線的に開く。227 は平瓦の狭端部の破片である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。側面は凸面側を幅広に面取りする。

遺構の時期は出土遺物と SD1503 との新旧関係から判断して、SD1501 より新しい 10 世紀前半以降に位置付けられる。SD1501 と 1502 の時期差は少ないものと考えられる。

SD1503（第 129 図　図版 36）

第１面 I17、J17 グリッドで検出された。調査区東側に位置し、SD1502 に接して、南北方向に直線的に延びる浅い溝跡である。西側で SD1506 を切り、東側の壁を SD1502 に切られている。第２面で検出された SD1505 の埋没後に掘削されている。検出長 3.68 m、溝幅は調査区南側が 0.8 m、北側が 2.6 m、深さ 0.1 mである。覆土は主ににぶい黄褐色シルトが堆積する。

遺物は８世紀代の須恵器坏身や土師器甕の破片が出土した。遺構の時期は出土遺物から判断して、８



SD1504
1　黒褐色　10YR3/2　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる

SD1501
1　黄褐色　10YR5/6　シルト　粘性弱　しまりあり　黄色粒多量に混じる
2　暗褐色　10YR3/3　シルト　粘性あり　しまりあり
3　黄褐色　10YR5/6　シルト　粘性弱　しまりあり　暗褐色土ブロック混る　黄色粒多量に混じる
SD1502
1　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒混じる
2　明灰黄色　2.5Y4/2　砂　粘性なし　しまりあり
3　暗褐色　10YR3/3　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる
SD1503
2　にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる
3　暗灰黄色　2.5Y4/2　砂　粘性なし　しまりなし

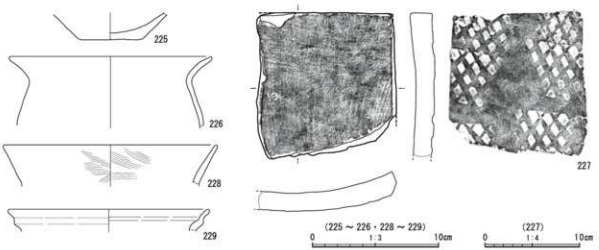
SK1508
1　暗灰色　10YR4/1　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる
2　暗灰色　7.5YR4/1　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる
3　暗褐色　10YR3/4　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり

SK1531
1　暗灰色　5YR4/1　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる
2　黄灰色　2.5Y5/1　粘土　粘性強　しまりあり　黒色土ブロック混じる
3　暗灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり　粘土ブロック混じる
4　暗灰色　7.5YR4/1　シルト質粘土　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる
5　黄灰色　2.5Y4/1　シルト　粘性あり　しまりあり　粘土ブロック少量混じる
6　黒褐色　7.5YR3/1　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり
7　黒色　10YR2/1　シルト　粘性あり　しまりあり

SD1506
1　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる

0　1:80　2m

第129図　15区遺構詳細図1



第 130 図　15 区 SD1501・1502・1504 出土遺物実測図

世紀代としておきたい。

SD1504（第 129 図　図版 36）

第 1 面 J17 グリッドで検出された。調査区中央部に位置し、やや北東に傾きながら直線的に延びる浅い溝跡である。第 2 面で検出された SD1505 の埋没後に掘削されている。検出面での計測値は幅 0.8 m、深さ 0.18 m である。溝跡の両壁は緩やかに立ち上がる。

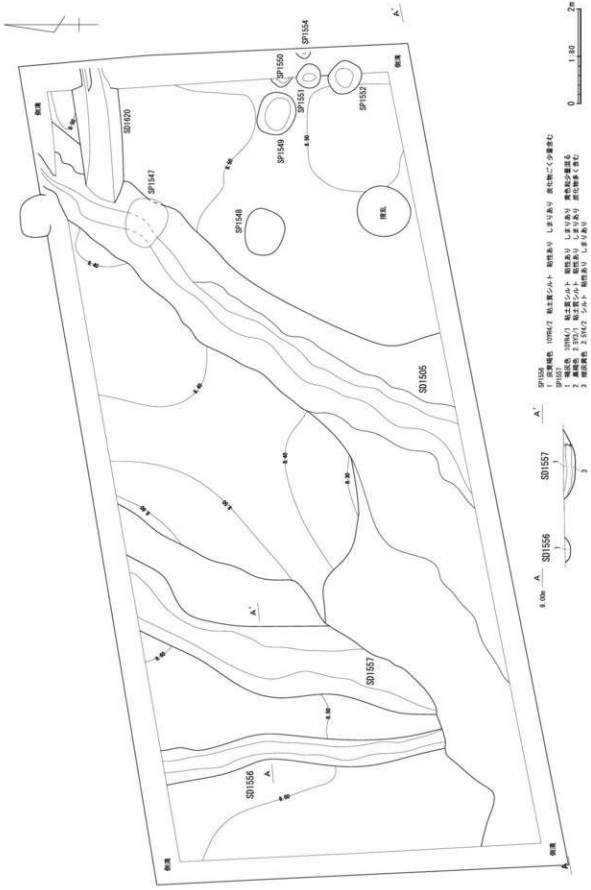
遺物は古墳時代前期の土器第 130 図 228 と 229 が出土したが、SD1505 に伴う遺物である可能性が高い。228 は甕の口縁部である。口縁部は直線的に開く。229 は S 字状口縁台付甕である。在地の赤褐色の胎土を有する。口縁部下段が肥厚し、上段は外反して伸びる。

遺構の時期は、SD1505 埋没後の 5 世紀前半～6 世紀中頃以降、周囲の遺構の状況から判断して、8 世紀までの年代のものとしておきたい。

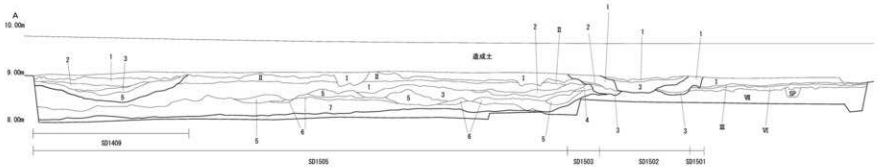
SD1505（第 131 図）

第 2 面 J17 グリッドで検出された。調査区東側に位置し、北東から南西に向かって延びる幅広の溝跡である。掘立柱建物跡 SB1501 の柱穴 SP1546 と SP1547 に切られている。北東隅で 16 区から続く溝 SD1620 を切っている。また、SD1556、SD1557 を切っている。第 1 面で検出された SD1501 ～ 1504 はこの溝が埋没してから掘削されている。検出面での計測値は、北壁付近で幅 1.4 m、南壁付近では幅 11 m と大きく拡がる。深さは北壁付近、南壁付近ともに約 0.7 m である。底面は広い平坦面を有し、側壁は緩やかに傾斜する。覆土下層は砂や礫、上層は暗褐色シルトが堆積する。

遺物は覆土の各層から満遍なく弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器第 133 図 230 ～ 235、237 ～ 249 が出土した。230 ～ 232 は折返し口縁壷である。230 と 231 は口縁部が大きく外反して開き、232 は口縁部の外反が小さく、直線的に開く。233 ～ 235 は壷の底部である。237 ～ 242 は甕の口縁部である。いずれも頸部の屈曲は緩やかである。237 ～ 239 は口縁端部の面取り後、下端に浅い刻みを施す。237 と 238 は口縁部が大きく外反して開き、口縁端部は面取りしている。239 は口縁部の開きが小さく、端部は丸い。240 と 241 は口縁端部に刻みのない個体である。240 は口縁部が大きく外反して開くのに対し、241 は口縁部の開きが小さい。242 は折返し口縁を有する甕である。口縁部が短く、頸部の屈曲は明瞭である。244 ～ 247 は台付甕の脚部である。いずれも比較的低脚である。244 は脚裾部への開きが大きい個体である。248 は高坏の脚部である。裾部は外反して開く。249 は器台の脚部である。器壁が厚く、大型品になる可能性が高い。間隔を開けた 2 個 1 対の円孔を前後に穿孔している。東岸の



第131図　15区遺構詳細図2



基本土層

I　暗褐色　10YR2/3　シルト　粘性あり　しまりあり
II　褐灰色　10YR4/1　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる
III　黒褐色　2.5Y3/1　シルト　粘性あり　しまりあり
VI　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　白色火山灰含む
VII　オリーブ黒色　5Y3/1　シルト質粘土　粘性あり　しまりあり（下層横出面）

SD1505
1　オリーブ褐色　2.5Y4/3　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる
2　灰オリーブ色　7.5Y4/3　砂　粘性なし　しまりあり　黄色粒混じる
3　明黄褐色　10YR6/8　砂質シルト　粘性弱　しまりあり　黄色地・灰色砂混じる
4　灰色　7.5Y4/1　砂質シルト　粘性弱　しまるあり　灰色砂混じる
5　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂礫　粘性なし　詰くしまる　径2cm程の円礫多く混じる
6　灰色　7.5Y4/1　砂　粘性なし　しまり弱　黄色粒少量混じる
7　灰オリーブ色　5Y4/2　砂礫　粘性なし　しまりあり　径1cm程の砂利多く混じる

SD1501
1　黄褐色　10YR5/6　シルト　粘性弱　しまりあり　黄色粒多量に混じる
3　黄褐色　10YR5/6　シルト　粘性弱　しまりあり　暗褐色土ブロック混じる　黄色粒多量に混じる

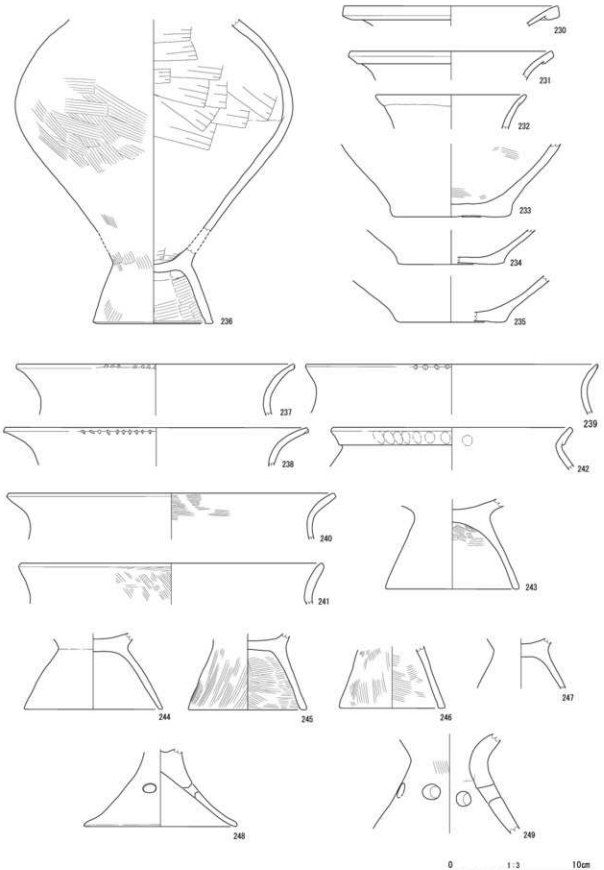
SD1502
1　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒混じる
3　暗褐色　10YR3/3　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる

SD1503
1　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト　粘性あり　しまりあり
2　にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒少量混じる
3　暗灰黄色　2.5Y4/2　砂　粘性なし　しまりなし

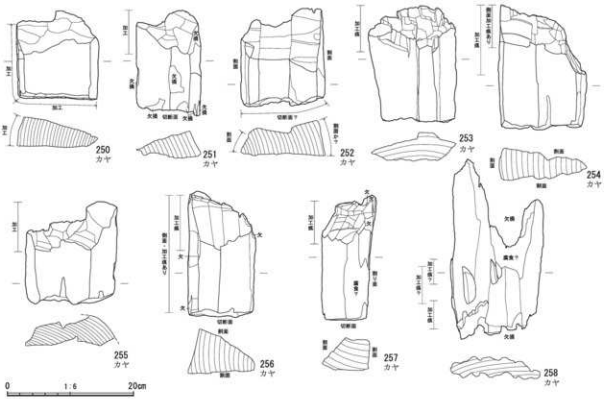
SD1409
1　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト質粘土　粘性あり　しまりあり
2　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり　円礫（石室材）多く含む（埋土）
3　褐色　10YR4/4　シルト　粘性あり　しまりあり　黄色粒多く混じる
5　黄灰色　2.5Y5/1　粘土質シルト　粘性あり　しまりあり

0　1:80　2m

第132図　15区遺構詳細図3



第133図　15区 SD1505 出土遺物 1



第 134 図　15 区 SD1505 出土遺物実測図 2

SP1547 付近で、溝の覆土上層から加工木片第 134 図 250 ～ 258 が集中して出土した。第 134 図 250 ～ 257 は、いずれも長さが 10 cm前後の板状断片で、すべてカヤ材であった。8 点とも表・裏面や側面は割面のままで、面加工はされていない。また上下端部は切断された跡が顕著に残っている。このことから、原材料から分割する際に発生する端材の可能性がある。また、257、258 は放射性炭素年代測定を行っており、257 は 416-482 cal AD (53.42%)、258 は 428-545 cal AD (95.45%) との結果が得られている。258 は全体に欠損している部分が多く、腐食が進んでいる。カヤの板目板で、長さは 28.6 cm、幅は 14.7 cm、厚さは 3.6 cmが最大値である。東岸上層の、加工木片が集中して出土した地点から南に約 1 m離れた地点で、頸部から上を欠く古墳時代前期の台付甕第 133 図 236 が出土した。236 は胴上部に最大径を有し、底部から胴下部の開きは直線的である。脚部は低く、直線的に開く。

遺物の出土状況から、この溝は自然流路であると判断した。遺構の時期は、出土遺物と SD1501 ～ 1504 との新旧関係、木材の年代測定の結果から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて形成され、5 世紀前半～ 6 世紀中頃に埋没したと考えられる。

SD1506（第 129 図　図版 36）

第 1 面 J17 グリッドで検出された。調査区中央部に位置する。東側を SD1503 に切られているため、形状の詳細は不明であるが、現存では半円形に掘削されている浅い溝跡である。第 2 面で検出された SD1505 の埋没後に掘削されている。溝幅は 0.45 m、深さは 0.08 mである。

遺物は覆土下層から平瓦第 135 図 259 の他、須恵器甕、土師器の小片が出土した。259 は平瓦の広端部の破片である。凸面には格子叩き、凹面には布目と糸切痕が残る。

遺構の時期は出土遺物と SD1503 との新旧関係から判断して、7 世紀後半に位置付けられる。

SD1556（第 131 図　図版 39）

第 2 面 J16 グリッドで検出された。調査区西側に位置し、南北方向に延びる浅い溝跡で、南側を

SD1505に切られている。検出長5.96 m、幅0.72 m、深さ0.14 mである。遺物は出土しなかった。時期の特定は困難であるが、SD1505との新旧関係から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構であると考えられる。

SD1557（第131図　図版38）

第2面J17グリッドで検出された。調査区西側に位置し、北東から南西方向に向かって延びる浅い溝跡で、南側がSD1505に切られている。検出長6.74 m、幅1.4 m、深さ0.12 mである。

遺物は第135図260～262が出土した。260は単純口縁壺である。頸部は短く、口縁部は外反して開く。261は複合口縁壺の口縁部である。262は壺の底部である。

遺構の時期は出土遺物とSD1505との新旧関係から判断して、弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けられる。

SK1508（第129図　図版36）

第1面I17グリッドで検出された。調査区北中央部に位置し、SD1506に接する。長径1.9 m、短径1.28 m、深さ0.2 mの楕円形の土坑である。底面の平坦面は狭く、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は須恵器の坏蓋第135図263が出土した。径2 cm程の扁平な擬宝珠状の摘みを有する。

遺構の時期は出土遺物から判断して、8世紀前半に位置付けられる。

SK1531（第129図）

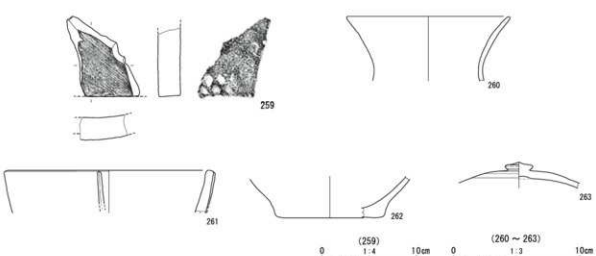
第1面J18グリッドで検出された。調査区南東隅に位置し、SD1501の掘削後に検出された。炭化米集中遺構SX1507の西側を切って掘削されている。長径1.4 m、短径1.18 m、深さ0.78 mの円形の土坑である。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

遺物は土師器あるいはかわらけの小片が出土した。遺構の時期は出土遺物と後述するSX1507との新旧関係から判断して、10世紀前半以降としておきたい。

SP1550・SP1551・SP1552（第136図　図版39）

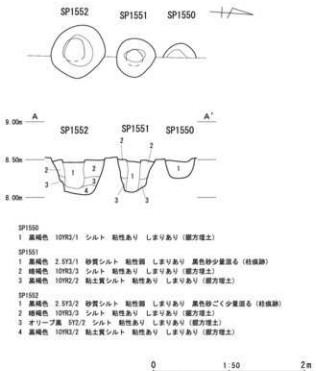
第2面J18グリッドの東壁排水溝付近で、南北に並んだ状態で検出された円形の柱穴である。SP1550は東半部全体、SP1551と1552は東半部の上部を排水溝に切られている。検出面での計測値はSP1551が径0.5 m、深さ0.45 m、SP1552が径0.7 m、深さ0.48 mである。SP1551とSP1552では柱根の痕跡が確認できた。

遺物は、3基とも掘方覆土から弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土した。時期の特定



第135図　15区SD1506・1557、SK1508出土遺物実測図

は困難であるが、16 区で検出された同様のピットが SB1501 の柱穴 SP1615 に切られていることから、6 世紀後半～ 7 世紀中頃より以前の遺構と考えられる。



第 136 図　15 区遺構詳細図 4

16　16 区

SD1618（第 137 図　図版 41）

第 1 面 J18 グリッドで検出された。調査区北東隅に位置し、北西から南東にかけて、SD1619 に並行するように延びる溝跡である。検出の途中で上面に炭化物の堆積層が確認され、炭化物層とその下の 1 層を掘り下げた段階で検出された。この炭化物層は、15 区の炭化米集中遺構 SX1507 が 16 区にも拡がっていたと推測されるものである（同章 22 項参照）。検出面での幅 0.74 m、深さ 0.27 m である。底面は平坦で、両壁は斜めに立ち上がる。覆土は主にオリーブ黒色の粘土が堆積する。

遺構検出の途中で 10 世紀前半代の土師器第 139 図 264 ～ 266 が出土したが、炭化米の層に伴う遺物であり、直接この遺構の年代を示すものではない。264 と 265 は高台碗である。ともにハの字状に開く高い高台を貼り付けている。266 は坏である。底面に糸切り痕が残る。

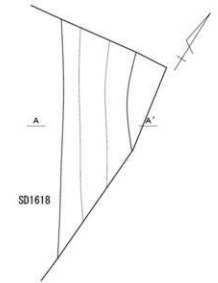
遺構の時期の特定は困難であるが、覆土が SD1619 と類似することから、弥生時代後期後半から古墳時代前期としておきたい。

SD1619（第 138 図　図版 41）

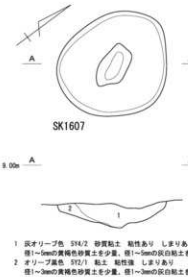
第 2 面 I18、I19、J19 グリッドで検出された。調査区東側に位置し、北西から南東にかけて緩やかに湾曲しながら延びる。検出長 11.57 m、調査区北側の計測値で幅 0.89 m、深さ 0.7 m である。断面形状は、調査区北側では逆台形を呈するが、南側は水流により崩れている。覆土は灰オリーブ～オリーブ黒色の粘土が主体である。

遺物は第 139 図 267 ～ 279 が出土した。このうち 272 ～ 274 と 277 は北壁付近で比較的まとまった状態で出土した。267 ～ 269 は折返し口縁壷である。267 と 268 は口縁部が大きく外反して開く。269 は口縁部の開きが直線的で、折返し部分の幅が広く、一見複合口縁壷に見える。270 と 271 は複合口縁壷である。270 は複合部内面の屈曲が緩やかである。271 は複合部内面の屈曲が明瞭ではなく、頸部から一体化して斜めに延びている。272 ～ 274 は壺の底部である。275 は甕の口縁部の破片である。頸部がくの字状に屈曲する。276 と 277 は S 字状口縁台付甕の口縁部で、いずれも在地の赤褐色の胎土を有する。276 は小片のため全体形状の復原は困難である。口縁部下段が突出し、中段が直立し、上段が外へ開く。277 は口縁部全体が肥厚し、下段は斜めに開き、中段と上段の境が不明瞭で、立ち上がりは短く直立する。肩部にわずかにヨコハケが残る。278 は高坏の坏部である。坏部が浅く、下部に明瞭な稜を有して直線的に大きく開く。279 は蓋である。天井部から裾部までは直線的に大きく開き、摘みは扁平である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、古墳時代前期に位置付けられる。



1　オリーブ黒色　5Y3/1　粘土　粘性強　しまりあり
径1～10mmの黄褐色砂質土を多量、径1～3mmの炭化物を少量、径1～50mmの灰色細粒砂を中量含む
2　オリーブ黒色　5Y2/2　粘土　粘性あり　しまりあり
径1～5mmの黄褐色砂質土を少量、径1～10mmの炭化物を微量、径1～3mmの黄褐色粘土を微量含む
3　オリーブ黒色　5Y2/2　粘土　粘性強　しまりあり
径1～5mmのオリーブ灰色粘土を多量、径1～3mmの炭化物を微量含む



1　灰オリーブ色　5Y4/2　砂質粘土　粘性あり　しまりあり
径1～5mmの黄褐色砂質土を少量、径1～5mmの灰白粘土を少量含む
2　オリーブ黒色　5Y2/1　粘土　粘性強　しまりあり
径1～3mmの黄褐色砂質土を少量、径1～3mmの灰白粘土を少量含む

0　1:40　1m

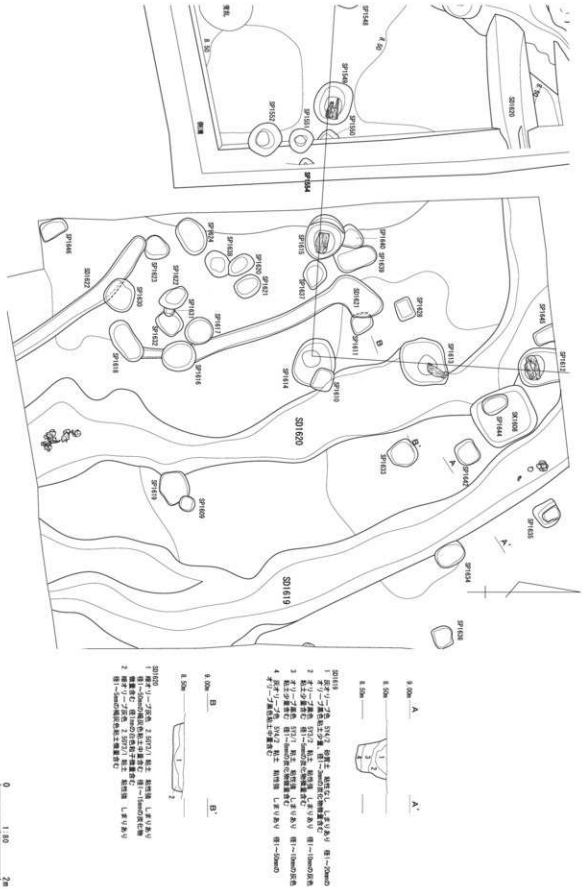
第137図　16区遺構詳細図1

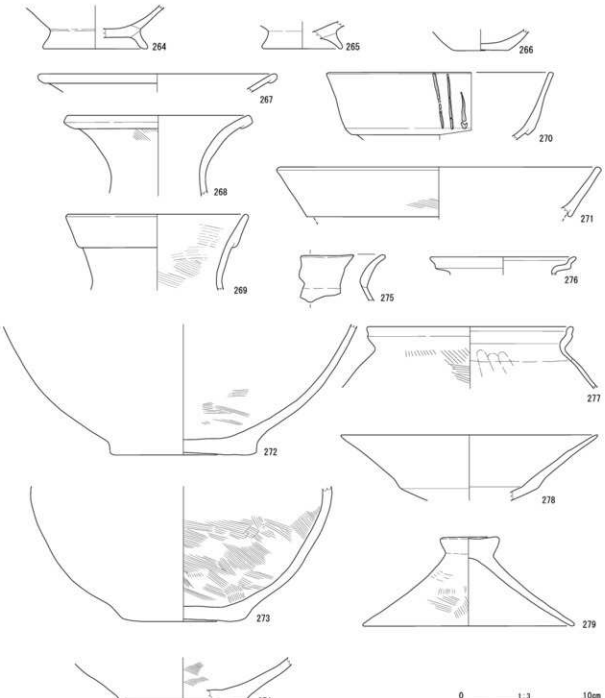
SD1620（第138図　図版41）

第2面I18、J18、J19グリッドで、一部15区にまたがって検出された。調査区中央部に位置する。調査区北壁付近では東西に延び、北壁の中央部で大きく南方向に屈曲し、SD1619に並行するように、緩やかに湾曲しながら延びる溝跡である。15区でSD1505に切られている。また、掘立柱建物跡SB1501の柱穴SP1612～1614に切られている。溝幅の変化が大きく、最小で0.6 m、最大で2 m、深さは0.29 mである。底面は広い平坦面を有し、両壁は緩やかに傾斜する。覆土は主に暗オリーブ灰色の粘土が主体である。

遺物は第140図280～293の土器が出土した。このうち、282、285、287、290は南壁付近で比較的のまとまった状態で出土した。280は折返し口縁壺である。口縁部は外反して開く。281は複合口縁壺である。複合部内面に屈曲が見られる。282は壺の胴部である。下膨れの形状を呈する。283と284は壺の底部である。285は台付甕である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開く。口縁端部は断面が四角形になるように面取りし、面に対して垂直に浅い刻みを施す。胴部は中位よりやや上に最大径を有し、底部から胴下部の開きは直線的である。脚部の開きは直線的である。286～290は甕である。286～288はいずれも頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反気味に開く。口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。289と290は、胴部の張りは小さく、頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は短く直線的に開く。291は台付甕の底部である。292と293は台付甕の脚部である。293は低脚で、脚裾部への開きも小さい。

遺構の時期は出土遺物とSB1501、SD1505との新旧関係から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。


SD620
SD619
SP1444
SP1445
SP1446
SP1447
SP1448
SP1449
SP1450
SP1451
SP1452
SP1453
SP1454
SP1455
SP1456
SP1457
SP1458
SP1459
SP1460
SP1461
SP1462
SP1463
SP1464
SP1465
SP1466
SP1467
SP1468
SP1469
SP1470
SP1471
SP1472
SP1473
SP1474
SP1475
SK1400
SK1401
SD1621
SD1622
SD1623
SD1624
SD1625
SD1626
SD1627
SD1628
SD1629
SD1630
SD1631
SD1632
SD1633
SD1634
SD1635
SD1636
SD1637
SD1638
SD1639
SD1640
SD1641
SD1642
SD1643
SD1644
SD1645
SD1646
SD1647
SD1648
SD1649
SD1650
SD1651
SD1652
SD1653
SD1654
SD1655
SD1656
SD1657
SD1658
SD1659
SD1660



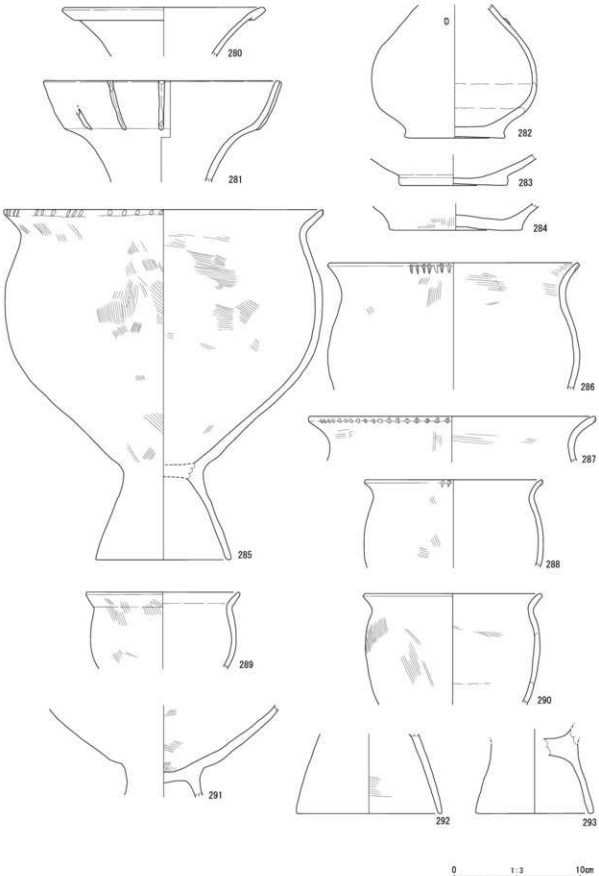
第139図　16区SD1618・1619出土遺物実測図

SK1607（第137図　図版41）

第1面J19グリッドで検出された。調査区東側に位置する。長径1.24 m、短径1.09 m、深さ0.3 mの円形の土坑である。SD1619の埋没後に掘削されている。底面の中央に落ち込みが見られ、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土した。遺構の時期は出土遺物とSD1619との新旧関係から判断して、SD1619より後の古墳時代前期としておきたい。

SK1608（第141図）



第140図　16区SD1620出土遺物実測図

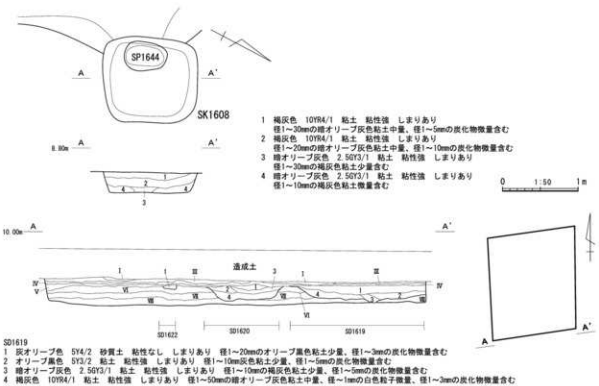
第2面 I18、J18、J19 グリッドで検出された。調査区北側中央に位置し、長軸 1.24 m、短軸 1.12 m、深さ 0.27 m の隅丸方形の土坑である。SD1620 の埋没後に掘削されている。底面は平坦で、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、小片が中心だが土器が比較的まとまった状態で出土した。第 142 図 294 は折返し口縁壷の口縁部である。口縁部が大きく外反して開く。295 は壺の底部である。294 と 295 は胎土がほぼ同質であることから、同一個体である可能性が高い。

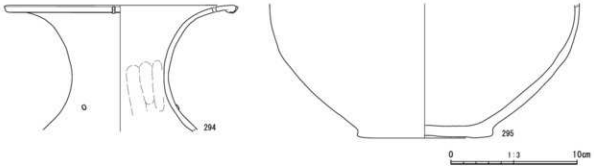
遺構の時期は出土遺物と SD1620 との新旧関係から判断して、SD1620 より後の弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

ピット（第 138 図　図版 42）

16 区では、掘立柱建物 SB1501 を構成する SP1612 ～ 1615 を除くと、第 2 面で 38 基のピットが検出された。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。時期の特定は困難であるが、SP1644 が SK1608 を切っていることから、古墳時代前期より後、SP1640 が SP1615 に切られていることから、6 世紀後半～7 世紀中頃より以前の範囲と考えられる。



第 141 図　16 区遺構詳細図 3



第 142 図　16 区 SK1608 出土遺物実測図

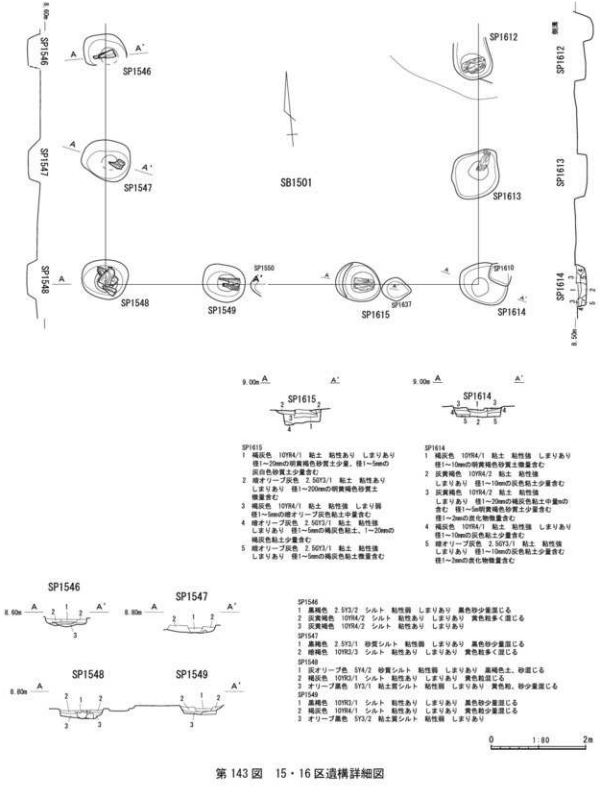
17　15・16 区掘立柱建物跡

SB1501（SP1546 ～ 1549・SP1612 ～ 1615）（第 143 図　図版 38・42）

15 区と 16 区にまたがった J18 グリッドに構築されている掘立柱建物跡である。15 区の炭化米集中遺構 SX1507 の層と、その下の白色火山灰（神津島天上山テフラ）を含む土層を掘削した直下の面で検出された。SP1546 ～ 1549、1612 ～ 1615 の 8 基の柱穴で構成される。桁行 3 間、梁行は現存で 2 間の側柱建物で、建物南側の柱穴列と東西の柱穴列の一部が検出された。規模は柱間で桁行約 7.8 m、梁行は現存で 4.8 m である。柱間間隔は、SP1549 と SP1615 間は 3.0 m、その他の柱間は 2.2 m ～ 2.6 m である。主軸方位は N － 5°　－ E である。柱穴の平面形状は、SP1613 が隅丸方形の他はいずれも楕円形を呈する。柱穴の規模は、直径または一辺が 0.85 m ～ 1.2 m、掘方までの深さは 0.15 ～ 0.55 m である。柱痕跡の直径は 0.4 ～ 0.5 m である。SP1546 と 1547 が SD1505 を切り、SP1612 と 1613 が SD1620 を切っている。

各柱穴の掘方覆土から弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土した。混入品と考えられ、遺構の年代を示す土器は出土しなかった。このうち第 144 図 296 ～ 298 を図示することができた。いずれも磨滅が著しい。296 は SP1546 から出土した甕の口縁部破片である。口縁端部は磨滅で原形を留めていない。胴部の張りは小さく、頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は短く直線的に延びる。297 は SP1612 から出土した甕の口縁部破片である。口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。298 は SP1613 から出土した折返し口縁壷の破片である。

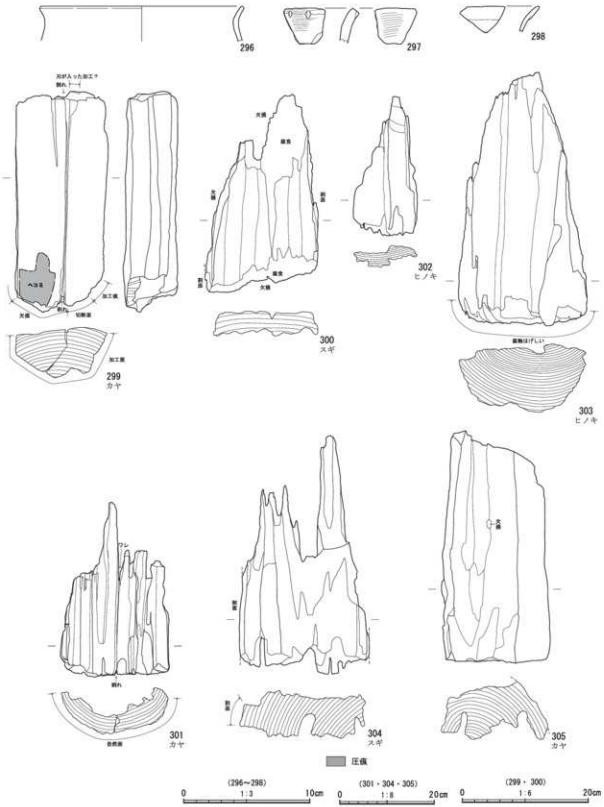
SP1614 を除く柱穴からは木製品第 144 図 299 ～ 305 が出土した。299 と 300 は SP1546 の柱穴底より出土した。出土状況から見て礎板として使われていたと考えられる。299 の上面は平坦で下方にはへこんだ部分がある。裏側の 4 面は加工されている。上下端部は切断の痕がある。長さは 35.05 cm、幅は 14.5 cm、板の厚さは 8.05 cm である。300 はスギの板目材である。全体に腐食と欠損が激しいが、加工された面ではなく割面であろう。残存長 31.4 cm、幅 18.1 cm、板厚 3.1 cm である。301 ～ 303 は SP1548 の柱穴底より、折り重なるような状態で出土した（第 143 図）。柱の底を支える礎板として使用されていたものであろう。301 は湾曲したカキ板材で、柱穴内では上部で検出した。腐食が著しく進んでいるが、表面は芯材が抜け落ちた状態で、裏面には表皮下面が残っている。柱を支える添え木か、あるいは柱の一部であった可能性もある。302 は柱穴の中心から南にずれた位置より出土した。ヒノキ材の板目板の断片で、整形された痕跡は見られない。303 は柱穴の最下面より出土した。ヒノキの半裁材に近いもので、面を加工した痕は見られない。下端部面は腐食が激しい。SP1548 は角柱にあたることから、礎板として、高さ調整や柱の沈み込みを防ぐ役割があったのであろう。304 は柱穴 SP1549 の最下部より出土した。全体に腐食や欠損が激しく、加工面等は確認出来ない。柱の礎板か、高さ調整のために使われていたと考えられる。スギの板目材で、長さは 47.5 cm、幅は 27.5 cm、厚さは 9.0 cm である。305 は 16 区で検出した SP1615 より出土した礎板である。出土状況からみて、柱の沈み込みを防ぐ礎板



第 143 図　15・16 区遺構詳細図

として使われたと考えられる。長さは 49.1 ㎝、幅は 22.6 ㎝、厚さは 12.1 ㎝でカヤの半裁材であろう。表面はかなり風化して、芯材の一部は抜け落ちている。放射線炭素年代測定では、299 は 573-644 cal AD (95.45%)、303 の は 606-659 cal AD (95.4%)、304 は 603-655 cal AD (95.45%)、305 は 581-650 cal AD (95.4%) と、ほぼ同年代を示すの結果が出ている。

遺構の時期は検出層位と SD1505、SD1620 との新旧関係、木製品の年代測定結果から判断して、6 世



第 144 図　15・16 区掘立柱建物跡 SB1501 出土遺物実測図

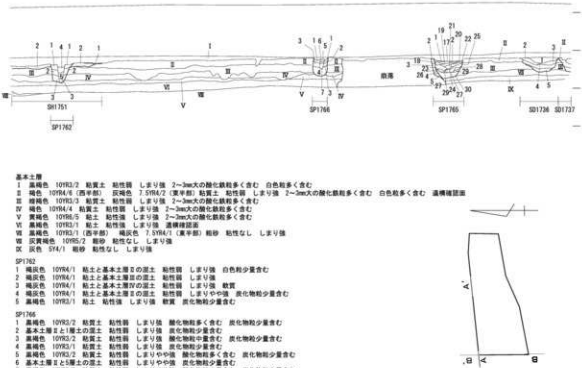
紀後半～７世紀中頃に位置付けられる。

18　17区

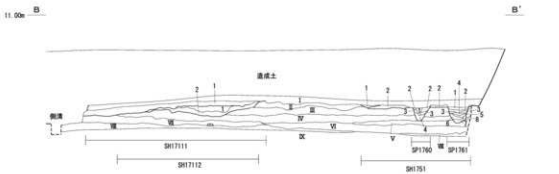
SD1703（第147図）

第１面Ｉ20、Ｉ21グリッドで検出された。調査区西側に位置し、やや西に傾いて南北に直線的に延びる溝跡である。検出長8.58ｍ、最大幅1.19ｍ、深さ0.24ｍである。底面は平坦で、両壁は斜めに立ち上がる。覆土は２層に分かれているが、いずれも黒褐色粘質土である。竪穴建物状遺構SH1751を切っている。

遺物は第148図306～317が出土した。306～310は折返し口縁壺である。306～309は口縁部が大きく外反して開く。307は口縁端部に刻みを施し、口縁部内面に円形浮文を貼り付け、浮文のやや下には円孔を穿孔している。310は306～309に比して口縁部の開きが小さい個体である。311は複合口縁壺である。複合部は棒状浮文を貼り付けた後、口縁端部に強いナデを施して天井部に面を作る。このた



第145図　17区調査区北壁土層断面図



基本土層
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む　白色粒多く含む
II　暗色　10YR4/6（西半部）　褐暗色　7.5YR4/2（東半部）粘質土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む
白色粒多く含む　遺構確認面
III　暗褐色　10YR3/3　粘質土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む
IV　暗色　10YR4/4　粘質土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む
V　黄褐色　10YR6/5　粘土　粘性強　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む
VI　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　遺構確認面
VII　黒褐色　10YR3/1（西半部）　褐灰色　7.5YR4/1（東半部）粗砂　粘性なし　しまり強
VIII　灰黄褐色　10YR6/2　粗砂　粘性なし　しまり強
IX　灰色　5Y4/1　粗砂　粘性なし　しまり強

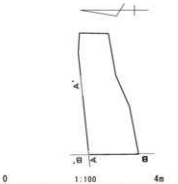
SH1711
1　暗褐色　10YR3/3　粘質土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む

SH1712
1　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む
2　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3mm大の酸化鉄粒多く含む

SH1751
1　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄粒多く含む　2~3cm大の基本土層ブロック多く混じる
2　暗灰色　10YR4/1　粘質土　粘性弱　しまり強　10cm大の基本土層ブロック多く混じる

SP1760
1　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　1~2cm大の基本土層ブロック中量混じる　白色粒少量含む
2　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3cm大の基本土層ブロック中量混じる
3　暗褐色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3cm大の基本土層ブロック中量混じる
4　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまりやや強

SP1761
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　2~3cm大の基本土層ブロック少量含む　白色粒少量含む
2~3cm大の炭化物粒少量含む
2　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3cm大の基本土層ブロック、2~3cm大の1層土ブロック中量混じる　2~3mm大の炭化物粒少量含む
3　暗灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3cm大の基本土層ブロック多く混じる　2~3mm大の炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性弱　しまり強　2~3cm大の基本土層ブロック多く混じる　2~3mm大の炭化物粒少量含む
5　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　粗砂少量含む　2~3mm大の炭化物粒少量含む
6　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　2~3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒小量含む　2~3mm大の炭化物粒少量含む
7　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　2~3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒多く含む　2~3mm大の炭化物粒少量含む
8　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質　2~3mm大の炭化物粒少量含む



第146図　17区調査区西壁土層断面図

め口縁端部外面は突出し、断面が鋭角的に尖る。口縁部内面は緩やかに屈曲する。口縁部は大きく外反して開く。312は小型壷の胴部である。丸い胴部を有する。313と314は甕の口縁部である。いずれも口縁部は外反して開き、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。315と316は折返し口縁を有する甕である。315は頸部の屈曲が見られず、口縁部がほぼ直立する。316は頸部が長く、口縁部は緩やかに外反して開く。317は台付甕の脚部である。

遺構の時期は出土遺物と竪穴建物状遺構SH1751の新旧関係から判断して、竪穴建物状遺構SH1751より後の弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1728（第147図）

第1面Ⅰ20、Ⅰ21グリッドで検出された。調査区中央部に位置し、やや西に傾いて南北に直線的に延びる溝跡である。検出長5.91 m、最大幅0.82 m、深さ0.18 mである。底面は平坦で、両壁は斜めに立ち上がる。掘立柱建物跡SB1701を構成する柱穴SP1733・1749・1757とSD1735に切られている。

遺物は第148図318と319が出土した。318は壷の底部である。319は台付甕の脚部である、脚中位が膨らむ形状を呈する。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1735（第147図）

第1面Ⅰ21グリッドで検出された。調査区中央部に位置し、SD1728、1736、1737を横断するように切って東西に延びる浅い溝跡である。検出長8.31 m、最大幅0.35 m、深さ0.13 mである。SD1728、

1736、1737の埋没後に掘削されている。

遺物は時期不明の土師器の小片が少量出土した。時期の特定は困難であるが、SD1728、1736、1737との新旧関係から、古墳時代後期以降の遺構としておきたい。

SD1736（第147図　図版45）

第1面Ⅰ21、Ⅰ21グリッドで検出された。調査区中央部に位置し、やや東側に湾曲して南北に延びる溝跡である。検出長7.59 m、最大幅1.48 m、深さ0.59 mである。底面に狭い平坦面を有し、側壁は一部テラスを有して斜めに立ち上がる。SD1735に切られている。

遺物は第149図320～332が出土した。320～322は折返し口縁壷である。いずれも口縁部は外反して開く。323は複合口縁壷である。大型で、複合部の幅は狭く、口縁端部の面取りは部分的で、一部丸いままの箇所がある。複合部内面は屈曲して頸部につながる。324は壷の底部である。325と326は小型壺の底部である。327と328は甕の口縁部である。ともに口縁部は外反して開く。328は摩滅が著しく、原形を留めていない。329と330は折返し口縁を有する甕である。いずれも口縁部は外反して開く。331と332は高坏の脚部である。331は裾部の開きは大きく、直線的である。332は裾部が外反して開くと考えられる個体である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1737（第147図　図版45）

第1面Ⅰ21、Ⅰ21グリッドで検出された。調査区中央部に位置し、緩やかに東側に弧を描きながら、SD1736の東側に並行して延びる溝跡である。検出長7.98 m、最大幅1.08 m、深さ0.47 mである。底面に狭い平坦面を有し、側壁は一部テラスを有して斜めに立ち上がる。SD1735に切られている。

遺物は第149図333～337が出土した。333は単純口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。334は折返し口縁を有する甕である。334は大型で、口縁部は外反して開く。335は台付甕の胴下部である。底部は粘土を充填させて脚部と接合させている。336は台付甕の脚部である。底部との接合部分がわずかに膨らむ。337は折返し口縁を有する鉢と考えられる。頸部から胴部が一体化し、口縁部の折返しの部分が大きく外傾する。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1739（第147図）

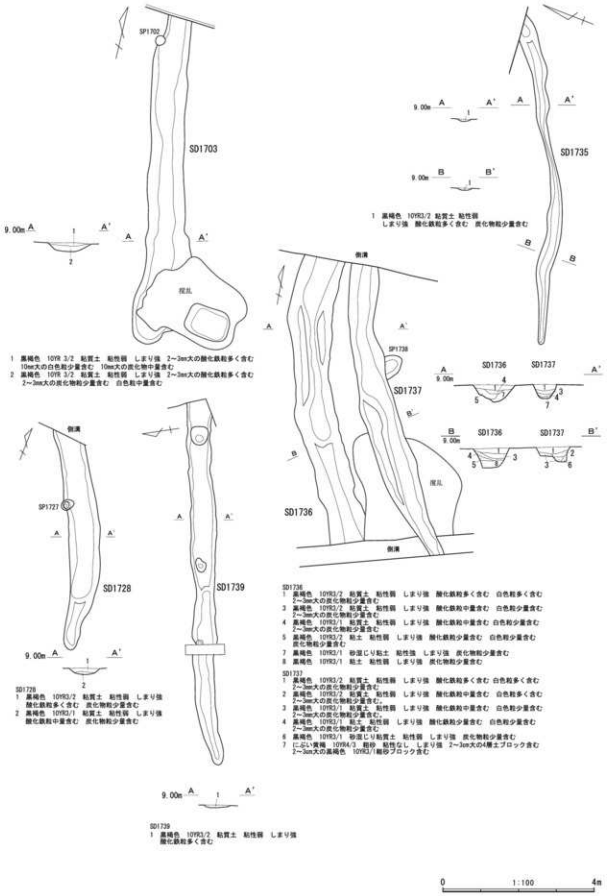
第1面Ⅰ21・Ⅰ22グリッドで検出された。調査区南東隅から中央部に向かって東西方向に直線的に延びる浅い溝跡である。検出長9.65 m、最大幅0.65 m、深さ0.1 mである。SD1770、1773、1775の埋没後に掘削されている。途中で2ヶ所ピットに切られている。

遺物は須恵器と平安時代の碗皿類の可能性がある土師器の小片が少量出土した。時期の特定は困難であるが、出土遺物から古墳時代後期以降の遺構としておきたい。

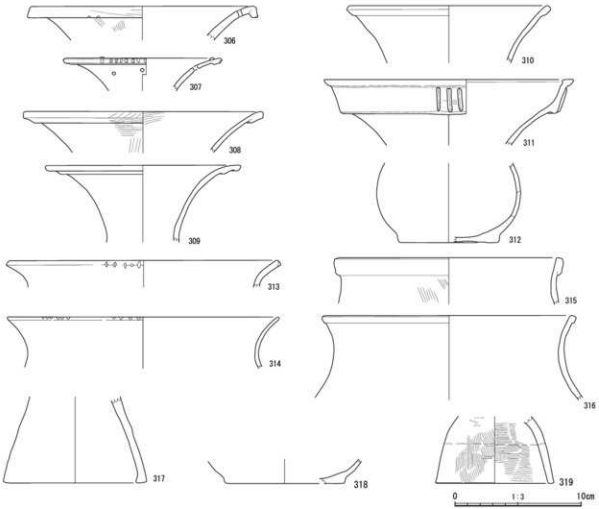
SD1770（第150図）

第2面Ⅰ22グリッドで検出された。調査区北東隅に位置する、比較的規模の大きな溝跡である。掘削途中で北壁と東壁が崩落したため、完掘することができなかった。検出長4.88 m、現存幅2.01 m、深さ0.69 mである。SD1774を切っている。

遺物は第151図338～346が出土した。338～341は折返し口縁壷である。338は口縁部が大きく外反して開く。面取りした口縁端部にＲＬの横位縄文を施文し、棒状浮文を貼り付け、折返し部直下に円孔を穿孔している。339は口縁部が大きく外反して開き、口縁端部に刻みを施し、口縁部内面にはＲＬの横位縄文を施文している。341は口縁部が大きく開く。342は壷の胴部である。胴部は丸く、肩部はなだらかで、頸部が太い個体である。343は壷の底部である。344は台付甕の口縁部である。口径が胴部最大径を上回る。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反して開く。345は台付甕の脚部である。裾部



第147図　17区遺構詳細図1



第 148 図　17 区 SD1703・1728 出土遺物実測図

への開きは小さく、短く直立気味である。346 は鉢である。体部の開きは直線的である。口縁端部は丸い。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半に位置付けられる。

SD1773（第 150 図　図版 44）

第２面Ｉ 22 グリッドで検出された。調査区東側で、SD1770 の西側に並行して、北西から南東にかけてほぼ直線的に延びる溝跡である。検出長 5.75 m、最大幅 0.71 m、深さ 0.28 m である。断面形状は逆台形を呈する。SD1774 を切っている。

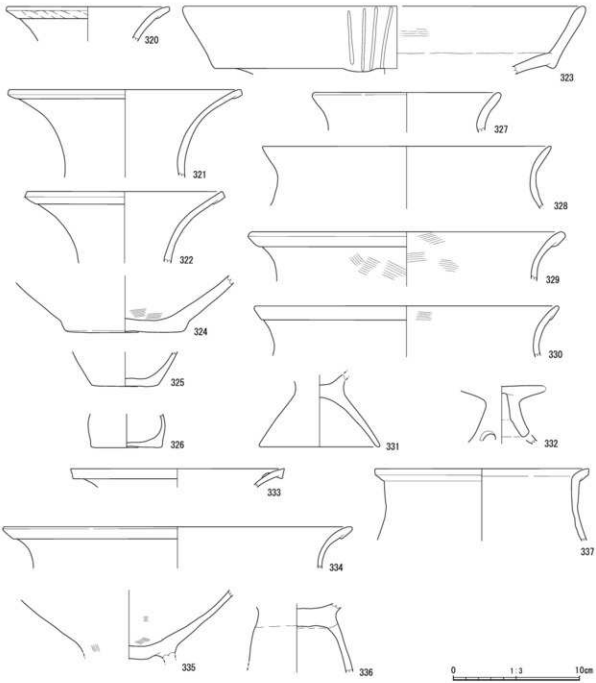
遺物は第 151 図 347 と 348 が出土した。347 は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。348 は小型壷の底部である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1774（第 150 図）

第２面Ｉ 22 グリッドで検出された浅い溝跡である。SD1770、1773、1775 に切られ、この３条の中央部を横断するように掘削されている。検出長 3.16 m、最大幅 0.51 m、深さ 0.15 m である。覆土が粗砂であることから、比較的早く埋まったものと考えられる。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片１点が出土した。時期の特定は困難であるが、周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半としておきたい。



第149図　17区SD1736・1737出土遺物実測図

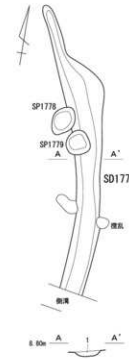
SD1775（第150図）

第2面Ⅰ22グリッドで検出された。調査区東側で、SD1773の西側に並行して、北西から南東にかけてほぼ直線的に延びる浅い溝跡である。検出長6.09 m、最大幅0.84 mで、北側の先端部は0.25 mと狭くなる。深さは溝の中央部で0.13 m、南壁付近で0.3 mである。SD1774を切っている。

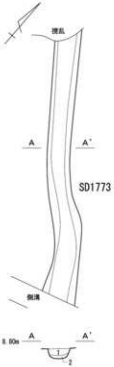
遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の壺口縁部と台付甕の小片が出土した。時期の特定は困難であるが、出土遺物とSD1774との新旧関係から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD1783（第150図）

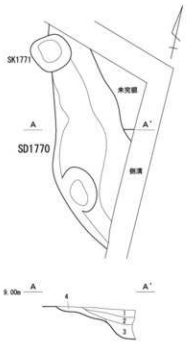
第2面Ⅰ22、J22グリッドで検出された。調査区東側で、SD1775の西側に並行して、北西から南東



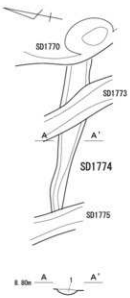
1　灰褐色　7.5YR4/2　砂混じり粘質土　粘性弱　しまり強
酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む



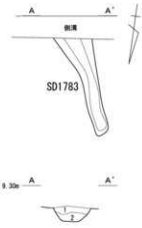
1　灰褐色　7.5YR4/2　粗砂　粘性なし　しまり弱
酸化鉄粒少量含む
2　灰褐色　7.5YR4/2　粗砂　粘性なし　しまり強
基本土層IXが中量混じる　酸化鉄粒少量含む



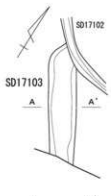
1　灰褐色　7.5YR4/2　粗砂　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
2　褐色　7.5YR4/3　粗砂　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒少量含む
3　褐灰色　7.5YR4/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強
酸化鉄炭化に混じる
4　褐灰色　7.5YR5/1　粗砂　粘性なし　しまり強



1　褐灰色　7.5YR4/1　粗砂　粘性なし　しまり強

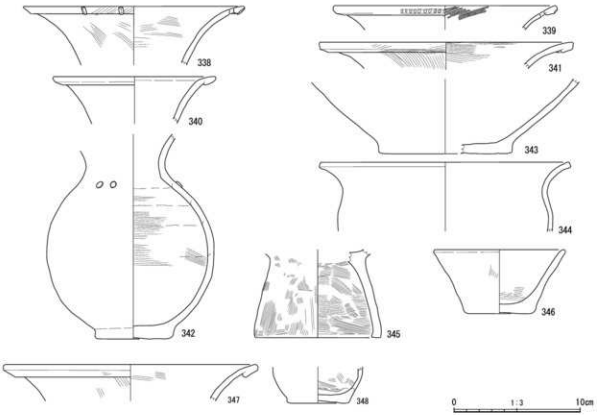


1　灰褐色　7.5YR4/2　砂混じり粘質土　粘性弱　しまり強
酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　褐灰色　7.5YR4/1　粗砂　粘性なし　しまり強
炭化物粒少量含む



1　褐灰色　7.5YR4/1　砂混じり粘質土　粘性弱
しまり強　炭化物粒少量含む

第150図　17区遺構詳細図2



第 151 図　17 区 SD1770・1773 出土遺物実測図

にかけてほぼ直線的に延びる溝跡である。北側で収束する。検出長 2.16 m、幅 0.66 m、深さ 0.3 m である。遺物は出土しなかった。他の遺構との切り合い関係もなく、時期の特定は困難であるが、周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD17103（第 150 図）

第２面Ｉ 21、Ｉ 22 Ｊ 21、Ｊ 22 グリッドで検出された。調査区中央よりやや東側で、SD1783 の西側に並行して、北西から南東にかけてほぼ直線的に延びる浅い溝跡である。北側で収束し、先端部を SD17102 に切られている。検出長 2.42 m、幅 0.58 m、深さ 0.1 m である。遺物は土師器の小片２点が出土したが、流れ込みの遺物である。時期の特定は困難であるが、周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD17101・17102（第 152 図　図版 44）

第２面Ｉ 21、Ｉ 22 グリッドで検出された。調査区中央より東側に位置する。SD17101・17102 ともに幅 0.26 m、深さ 0.14 m の細い溝である。SD17101 が１辺約 4.5 m の隅丸方形の形状に湾曲して掘り込まれ、その後 SP1787・1788 付近から SD17102 が SD17101 の外側を沿うように掘り込まれている。溝のつながり方や覆土の相違から、SD17101 が竪穴建物の壁溝であると判断した。

遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器の小片が出土したが、遺物から遺構の年代を特定するのは困難である。建物跡を考えた場合、その形状から弥生時代後期後半から古墳時代前期と想定しておきたい。

SH1751（第 152 図）

第１面Ｉ 20 グリッドで検出された。調査区北西隅に位置する。土坑 SH1751a、硬化した地表面 SH1751b と溝状遺構で構成される遺構である。溝状遺構は SD1703 に切られている。SH1751a は長径 0.44m、

短径0.35m、深さ0.32mの楕円形の土坑で、中に被熱した人頭大の角礫が置かれ、南側には焼土が拡がっている。SH1751aの周辺には硬化した地表面SH1751bが拡がっている。SH1751bの外側には最大幅1.5m、深さ0.1mの浅い溝状遺構が楕円形に巡っている。検出状況から判断して、これら3基の遺構で1軒の竪穴建物を構成すると考えられ、SH1751aは炉跡、SH1751bは床、溝状遺構は掘方に相当する。

遺物は溝状遺構の覆土から弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土していることから、遺構の時期も同時期と考えられる。

SH17111（第152図）

第1面J 20グリッドで検出された。調査区南西隅に位置しており、北側でSH17112を切っている。北東部のみ検出され、その他の部分は調査区外のため確認できなかった。覆土に焼土粒や炭化物を多く含むことと、炉石と思われる被熱した石が出土したことから、竪穴建物の掘方であると考えられる。

遺物は第153図349と350が出土した。349は折返し口縁壷である。口縁部は外反して大きく開く。350は壷の底部である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SH17112（第152図）

第1面I 20、J 20グリッドで検出された。調査区南西隅に位置しており、南側をSH17111に切られている。北東部のみ検出され、その他の部分は調査区外のため確認できなかった。底面は凹凸があり、両壁は斜めに立ち上がる。覆土に炭化物を多く含むことから、竪穴建物の掘方であると考えられる。

遺物は第153図351が出土した。351は折返し口縁壷である。口縁部は大きく開く。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SB1701（SP1733・1757・1749・1718・1721・1756）（第154図）

第1面I 20、I 21グリッドで検出された。調査区北辺中央の西寄りに位置する。東西1間×南北2間以上の掘立柱建物跡と想定される。東側の柱穴列は北からSP1733、1757、1749、西側の柱穴列は北からSP1718、SP1721、SP1756の順で柱穴が並んでいる。各柱穴の平面形状は楕円形または隅丸方形を呈し、規模は長軸が0.55～0.65m、短軸が0.48～0.55mである。建物跡となる場合の規模は、柱間での計測値で2.7m×3.2m、柱間間隔は約1.6mである。主軸方位はN -26°　-Wである。東壁側の柱穴3基は溝跡SD1728を掘り込んでいる。SP1718はSB1702の柱穴SP1717に切られている。

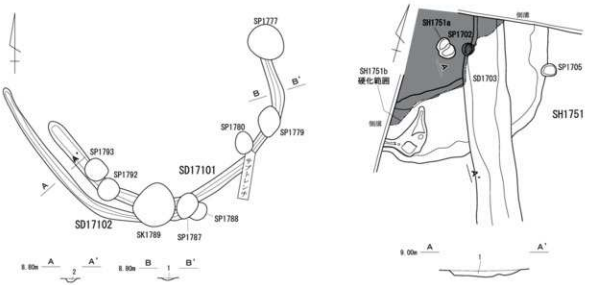
遺物はSP1718の掘方覆土から第158図352、353が出土した。この他すべての柱穴の掘方覆土から弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器の小片が出土した。352は甕である。小型で、胴部の張りが小さく、頸部の屈曲は明瞭で、口縁部の開きは小さく直線的である。口縁部は摩滅が著しく、原形を留めていない。353は小型器台である。受部が小さく、直線的に大きく開く。

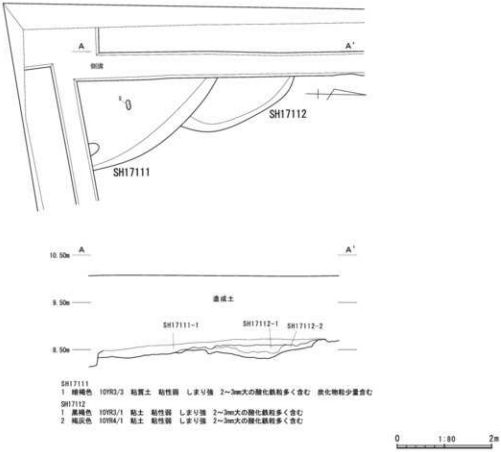
時期の特定は困難であるが、形状が15・16区で検出されたSB1501の柱穴以外の柱穴及びピットに類似することから、SD1728廃絶後の古墳時代前期より後、7世紀中頃より以前の遺構としておきたい。

SB1702（SP1766・1717・1719・1722・1711・1712・1713・1714）（第155図）

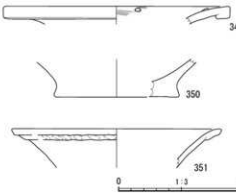
第1面I 20、I 21グリッドで検出された。調査区北辺中央の西寄りに位置する。東西1間×南北3間以上の掘立柱建物跡と想定される。東側の柱穴列は北からSP1766、1717、1719、1722、西側の柱穴列は北からSP1711、SP1712、SP1713、1714の順で柱穴が並んでいる。各柱穴の平面形状は円形、楕円形、隅丸方形を呈し、規模は長軸で0.46～0.7m、短軸で0.35～0.49mである。建物跡となる場合の規模は、柱間での計測値で4.6m×2.6m、柱間間隔は1.3～2.0mである。主軸方位はN -34°　-Wである。SP1717はSB1701の柱穴SP1718を切っている。

遺物はSP1719を除く柱穴の掘方覆土から弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器の小片が出土した。時期の特定は困難であるが、形状が15・16区で検出されたSB1501の柱穴以外の柱穴及びピット





第152図　17区遺構詳細図3

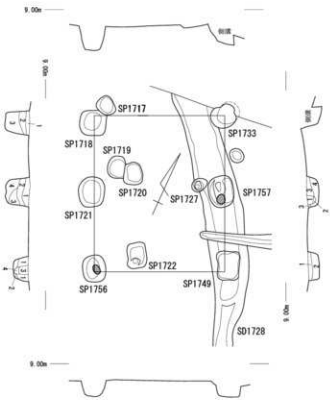


第153図　17区SH17111・17112出土遺物実測図

に類似することから、SB1701廃絶後の古墳時代前期より後、7世紀中頃より以前の遺構としておきたい。

SP1763・1764・1765（第156図）

第1面Ⅰ20、Ⅰ21グリッドで検出された。北壁に設けたテラス上で、柱穴が東西に3基並んだ状態で検出された。SP1763と1764は北半部が調査区外にあるため完掘できず、柱痕も正確に検出できなかった。現況での列の規模は5.8 m、柱穴の間隔は約2.2 mと2.8 mである。柱穴の平面形状は残存状況から3基とも円形を呈すると想定さ



SP1718
1　黒褐色　10YR2/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR2/2　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の炭化物粒少量含む

SP1721
1　黒褐色　10YR2/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性弱　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/1　砂混じり粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む

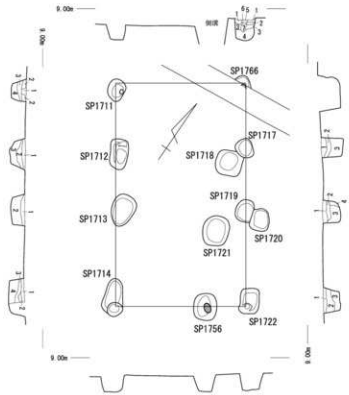
SP1756
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまりやや強　酸化鉄粒多く含む炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性弱　しまり強

SP1757
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまりやや強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性弱　しまり強

SP1749
1　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/1　砂混じり粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の炭化物粒少量含む

0　1:80　2m

第154図　17区遺構詳細図4（SB1701）



SP1711
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　基本土層Ⅱと黒褐色10YR3/2粘土の混土　粘性弱　しまり強
3　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強
4　黒色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強

SP1712
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　暗褐色　10YR3/3　粘土　粘性強　しまり強
3　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強

SP1713
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強

SP1714
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒中量含む　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/1　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒中量含む　炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む

SP1756
1　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　基本土層Ⅱと1層土の混土　粘性弱　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化物粒中量含む　炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　粘質土　粘性弱　しまり強　炭化物粒少量含む
5　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまりやや強　酸化物粒多く含む　炭化物粒少量含む
6　基本土層Ⅱと5層土の混土　粘性弱　しまりやや強　炭化物粒少量含む
7　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまりやや強　酸化物粒中量含む　炭化物粒少量含む

SP1717
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強

SP1719
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄粒多く含む2～5mmの炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3mm大の炭化物粒少量含む

SP1722
1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　炭化物粒少量含む
2　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒中量含む　炭化物粒少量含む
3　黒褐色　10YR3/1　粘質土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む

0　1:80　2m

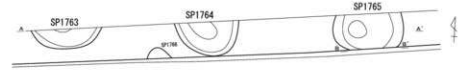
第155図　17区遺構詳細図5（SB1702）

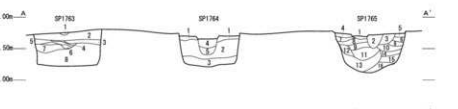
れ、直径は3基とも約1.1mと推定される。主軸方位は現況でN -1.5°　-Wである。

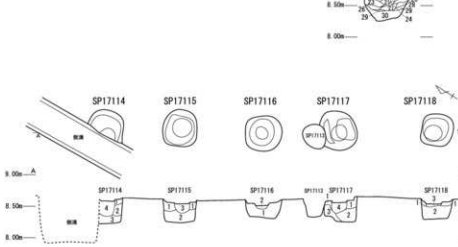
遺物は、SP1763の掘方覆土から須恵器の小片と弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土し、SP1764と1765の掘方覆土から弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土した。時期の特定は困難であるが、柱穴の形状が15・16区で検出されたSB1501と類似することから、SB1501とほぼ同時期の遺構としておきたい。

SP17114～SP17118（第156図）

第1面J 20グリッドで検出された。調査区西壁付近に位置する。5基の柱穴が一列に並ぶ。柱穴列の規模は約5.2m、柱間間隔は約1.2～1.5mである。各柱穴の平面形状は円形または隅丸方形を呈し、直径または一辺の長さは0.5m前後である。柱痕の直径は0.2～0.3mである。主軸方位はN -32.5°







SP1763
1 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 暗褐色7.5YR4/2灰褐色粘砂多く混じる 炭化物粒少量含む
2 褐色 7.5YR4/3 粘質土 粘性弱 しまり強 1層とが一部互層になる 炭化物粒少量含む
3 褐色 7.5YR4/3 粘質土 粘性弱 しまり強 5cm大の層土ブロック中量混じる
4 褐色 7.5YR4/4 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
5 褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 炭化物粒少量含む
6 褐色 7.5YR4/4 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
7 褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 4層と2層土が一部互層に混じる 炭化物粒少量含む
8 黒色 10YR2/1 粘土 粘性強 しまり強 10cm大の層土ブロック中混じる 炭化物粒少量含む

SP1764
暗褐色 7.5YR3/3 粘質土 粘性弱 しまり強 酸化鉄粒多く含む 白色粒多く含む 炭化物粒少量含む
褐色 7.5YR4/3 粘質土 粘性弱 しまり強 10cm大の褐灰色10YR4/1粘土ブロック中混じる 炭化物粒少量含む
基本土層Ⅳと褐灰色10YR4/1粘土の混土 粘性弱 しまり強 酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む
褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 白色粒多く含む 炭化物粒少量含む
褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 白色粒少量含む 炭化物粒少量含む

SP1765
1 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
2 暗褐色 10YR3/3 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
3 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒多く含む 炭化物粒少量含む
4 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 1cm大の基本土層Ⅳブロック多く混じる 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
5 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 2～3cm大の基本土層Ⅳブロック多く混じる 炭化物粒少量含む
6 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性やや強 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒多く含む 炭化物粒少量含む
7 黒褐色10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 2～3cm大の基本土層Ⅳブロック多く混じる 2～3cm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
8 黒褐色10YR3/2 砂質じり粘質土 粘性弱 しまり強 2～3cm大の基本土層Ⅳブロック多く混じる 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
9 黒褐色 10YR3/2 砂質じり粘質土 粘性弱 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒少量含む 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
10 黒褐色 10YR3/2 砂質じり粘質土 粘性やや強 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
11 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 2～3cm大の基本土層Ⅳブロック多く混じる 2～3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒少量含む 炭化物粒少量含む
12 黒褐色 10YR3/1 砂質じり粘土 粘性弱 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
13 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性弱 しまり強 2～3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒少量含む 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
14 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性弱 しまり強 4～5cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒中量含む 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
15 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまり強 4～5cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む
16 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまり強 4～5cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む
17 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
18 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
19 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
20 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 2～3cm大の層土ブロック多く混じる 砂粒～3mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
21 暗褐色 10YR3/3 粘質土 粘性弱 しまり強 炭化物粒少量含む
22 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
23 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性弱 しまり強 2～3cm大の層土ブロック多く混じる 2～3mm大の酸化鉄粒少量含む 砂粒～5mm大の白色粒少量含む
24 黒褐色 10YR3/2 砂質じり粘土 粘性やや強 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
25 黒褐色 10YR3/2 砂質じり粘土 粘性やや強 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒少量含む 砂粒～5mm大の白色粒多く含む 炭化物粒少量含む
26 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性やや強 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
27 黒褐色 10YR3/2 砂質じり粘土 粘性強 しまり強 2～3mm大の酸化鉄粒少量含む 砂粒～5mm大の白色粒中量含む 炭化物粒少量含む
28 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性やや強 しまり強 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
29 黒褐色 10YR3/2 砂質じり粘土 粘性強 しまり強 2～3cm大の層土ブロック少量混じる 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む
30 黒褐色 10YR3/1 粘土 粘性強 しまり強 2～3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒少量含む 砂粒～5mm大の白色粒少量含む 炭化物粒少量含む

SP1714
1 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 酸化鉄粒多く含む
2 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまり強
3 褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 10cm大の基本土層Ⅳブロック多く混じる
4 黒褐色 10YR3/2 砂質土 粘性強 しまりやや強 酸化鉄粒多く含む

SP1715
1 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまり強 酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む
2 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまり強 酸化鉄粒少量含む 炭化物粒少量含む
3 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまりやや強 酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む

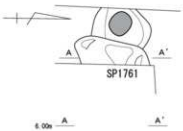
SP1716
1 褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 2～3cm大の基本土層Ⅳブロック少量混じる 炭化物粒少量含む
2 褐灰色 10YR4/1 粘土 粘性強 しまり強 酸化鉄粒少量含む

SP1717
1 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む
2 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまり強
3 黒褐色 10YR3/2 砂質土 粘性強 しまりやや強 酸化鉄粒多く含む
4 黒褐色 10YR3/2 砂質土 粘性強 しまりやや強 酸化鉄粒多く含む 炭化物粒少量含む

SP1718
1 黒褐色 10YR3/2 粘質土 粘性弱 しまり強 酸化鉄粒多く含む
2 褐灰色 10YR4/1 砂質じり粘土 粘性弱 しまり強 酸化鉄粒多く含む
3 黒褐色 10YR3/2 粘土 粘性強 しまりやや強 酸化鉄粒多く含む

0 S=1:60 2m

第156図 17区遺構詳細図6

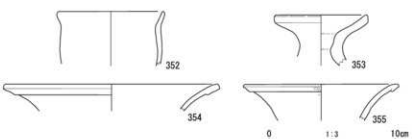


1　黒褐色　10YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む　2～3cm大の基本土層III ブロック少量混じる
白色粒少量含む　2～3mm大の炭化物粒少量含む
2　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2～3cm大の基本土層III ブロック、2～3cm大のI層土ブロック中量混じる
2～3mm大の炭化物粒少量含む
3　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　2～3cm大のI層土ブロック多く混じる　2～3mm大の炭化物粒少量含む
4　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3cm大のII層土ブロック多く混じる　2～3mm大の炭化物粒少量含む
5　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　粒砂少量含む　2～3mm大の炭化物粒少量含む
6　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒小量含む
2～3mm大の炭化物少量含む
7　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3cm大のブロック状にまとまった酸化鉄粒多く含む
2～3mm大の炭化物少量含む
8　黒褐色　10YR2/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質　2～3mm大の炭化物粒少量含む

第 157 図　17 区遺構詳細図 7

－Wである。

遺物は、SP17115 の掘方覆土から第 158 図 354 が出土した。この他、各柱穴の掘方覆土から 354 と同時期の土器の小片が出土した。354 は折返し口縁壷である。口縁部は外反して大きく開く。



第 158 図　17 区掘立柱建物跡・ピット列出土遺物実測図

時期の特定は困難であるが、形状が 15・16 区で検出された SB1501 の柱穴以外の柱穴及びピットに類似することから、古墳時代前期より後、7 世紀中頃より以前の遺構と考えられる。

SP1761（第 157 図）

第 1 面 I 20 グリッドで検出された。調査区北西隅の西壁に設けたテラス上で検出された不定形のピットである。東側は側溝で削平されている。現況での計測値は、残存幅 0.82 m、深さ 0.46 m である。

遺物は第 158 図 355 が出土したが、流れ込みの遺物である。355 は折返し口縁壷である。口縁部は外反して開く。

時期の特定は困難であるが、形状が 15・16 区で検出された SB1501 の柱穴以外の柱穴及びピットに類似することから、古墳時代前期より後、7 世紀中頃より以前の遺構と考えられる。

ピット

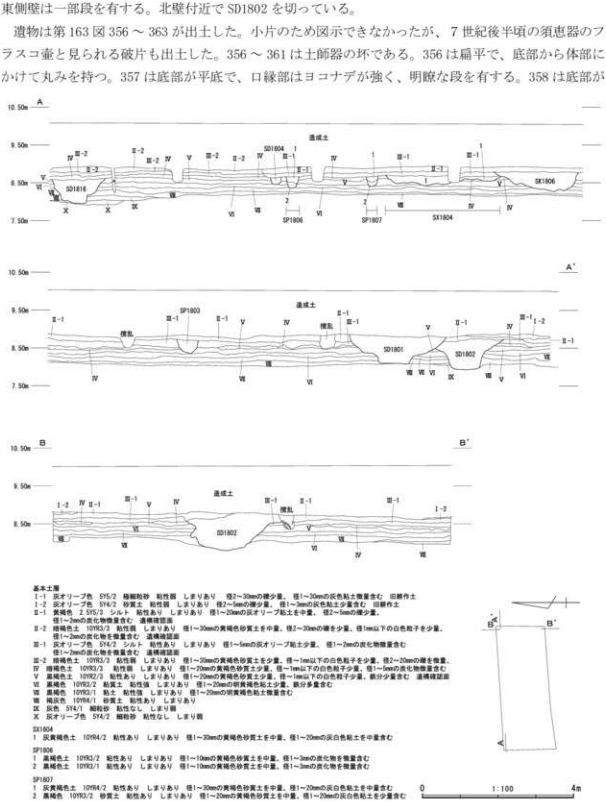
17 区では、先に記載した掘立柱建物跡や柱穴列を構成する柱穴をはじめとした柱穴・ピットの他に、第 1 面、第 2 面で計 74 基のピットが出土した。一部のピットで弥生土器あるいは土師器の小片が出土したが、いずれも流れ込みの遺物である。時期の特定は困難であるが、弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けた溝跡を切っていることから、古墳時代前期より後、形状が 15・16 区で検出された SB1501 の柱穴以外の柱穴及びピットに類似することから、6 世紀後半～ 7 世紀中頃より以前の範囲としておきたい。

19　18区

SD1801（第160図　図版46）

第1面I25、J25、J26グリッドで検出された。調査区中央に位置し、北東から南西にかけて直線的に延びる溝跡である。検出長15.53 m、幅2 m、深さ0.43 mである。断面形状は、西側壁は緩やかであるが、東側壁は一部段を有する。北壁付近でSD1802を切っている。

遺物は第163図356～363が出土した。小片のため図示できなかったが、7世紀後半頃の須恵器のフラスコ壺と見られる破片も出土した。356～361は土師器の坏である。356は扁平で、底部から体部にかけて丸みを持つ。357は底部が平底で、口縁部はヨコナデが強く、明瞭な段を有する。358は底部が



第159図　18区調査区北壁・東壁土層断面図

丸底で、底面に木葉痕が残る。口縁部はヨコナデが強く、明瞭な段を有する。359は358と同じ形態と推定される。360と361は須恵器坏蓋模倣の坏で、体部から口縁部がS字状に屈曲し、口縁部が内湾する。362と363は流れ込みの弥生時代後期の土器である。362は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開き、口縁端部に棒状浮文を貼り付けている。363は壷底部である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、8世紀前半に位置付けられる。

SD1802（第160図　図版47）

第1面I26、I27グリッドで検出された。調査区北東隅に位置し、北西から南東にかけて直線的に延びる溝跡である。検出長5.44 m、幅1.86 m、深さ0.79 mである。断面形状は逆台形を呈する。北壁付近でSD1801に切られている。

遺物は壺の底部第164図364が出土した。

時期の特定は困難であるが、出土遺物と周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD1803（第161図　図版49）

第2面I24、J24グリッドで検出された。調査区西側に位置する。北西から南東に向かって延び、途中南東部にコーナー状の屈曲を有して南西に方向を変えて延びる溝跡である。計測値は北側で幅0.7 m、深さ0.6 m、南側で幅1.4 m、深さ0.52 mである。屈曲部分の一部をSD1816に切られている。

遺物は第164図365～第165図391が出土した。遺物の出土位置は南東部に集中する。366、380に縄文の施文が見られるなど、本遺跡の弥生時代後期の土器の中でもやや古式の様相を持つものが見られる。365は単純口縁壺である。口縁部は大きく外反して開き、端部がやや肥厚する。365～372は折返し口縁壷である。366～371は口縁部が大きく外反して開く。366は口縁部内面にＲＬの縄文を施文し、口縁端部にハケ調整の工具で刻みを施す。372は頸部が短く、口縁部の開きが小さい個体である。373は複合口縁壷である。複合部内面の屈曲が明瞭である。374は壷の胴部である。胴下部に最大径を有し、底部が大きく、肩部がやや張る。375～377は壺の底部である。第165図378は小型の単純口縁壷である。口縁部は直線的に開く。379は小型の折返し口縁壷である。口縁部が大きく外反して開き、口縁端部は面に対して垂直に刻みを施す。380は小型壷の頸部から胴部である。頸部は細く、肩部が張り、胴部は丸く、下部の接合部に稜を有する。胴上部にＲＬの縄文を1段横位に施文している。381～383は小型壷の底部である。385～387は甕の口縁部である。385は口縁部が短く緩やかに開き、口縁端部は面に対して垂直に浅い刻みを施す。386は口縁部が外反して開き、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。387は頸部の屈曲が緩やかで、口縁部は直線的に開く。388は折返し口縁を有する甕である。頸部の屈曲が緩やかで、口縁部は直線的に開く。389～391は台付甕の脚部である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半に位置付けられる。

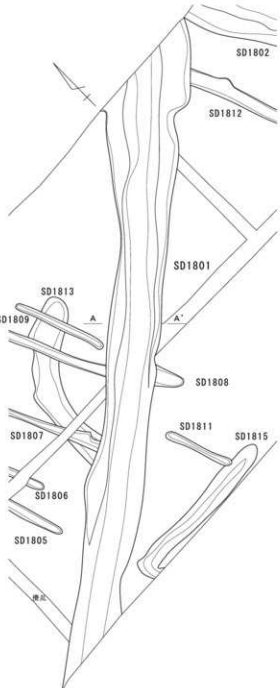
SD1804～1812・1814（第160～162図　図版47）

10条の細い溝跡である。いずれも第1面で検出された。調査区全域にわたって、北西から南東に向かって直線的に延びる、幅0.16～0.43 m、深さ0.09～0.25 mの浅く細長い溝が平行に配置されている。SD1807～1809はSD1813を切っている。SD1811はSD1815を切っている。SD1807、SD1808、SD1812はSD1801に切られている。位置関係から見て、SD1812とSD1814は同一の溝である可能性が高い。

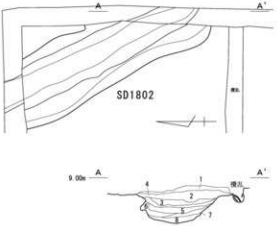
遺物は、SD1809の覆土から弥生時代後期後半から古墳時代前期の壺の底部第165図392が出土したが、流れ込みの遺物と考えられる。この他の溝では遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

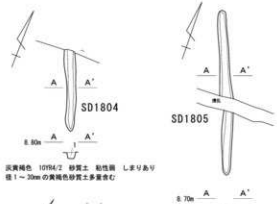
SD1813（第162図　図版47）

第1面I25、I26グリッドで検出された。調査区中央部に位置し、東側に緩やかに湾曲して南北に延びる溝跡である。検出長4.52 m、幅0.66 m、深さ0.16 mである。SD1807、SD1808、SD1809はこの溝

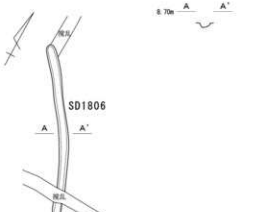


1　灰黄褐色　10YR5/2　砂質土　粘性弱　しまり強　径1～20mの黄褐色砂質土を少量含む
2　黄褐色　10YR5/8　砂質土　粘性弱　しまり強　径1～20mの黄褐色砂質土を多量、径1～30mの砂礫を少量含む
3　灰黄褐色　10YR4/2　細粒砂　粘性弱　しまり弱　径1～2mの暗褐色細粒砂中量含む
4　暗灰色　10YR5/1　シルト　粘性弱　しまり弱　径1～20mの灰黄褐色粘土を微量、鉄分多く含む
5　暗灰色　10YR5/1　シルト　粘性弱　しまり弱　径1～20mの黄褐色砂質土を中量、径1～2mの暗褐色細砂、径1～30mの灰黄褐色粘土を少量含む
6　に近い黄褐色　10YR5/3　細粒砂　粘性なし　しまり弱　径1～30mの灰黄褐色粘土、径1～30mの黄褐色砂質土を少量含む。
7　に近い黄褐色　10YR4/3　シルト　粘性なし　しまり弱　径1～30mの炭化物微量含む
8　に近い黄褐色　10YR4/3　シルト　粘性なし　しまり弱　径1mm以下の黄褐色小粒砂を少量、径1～50mの炭化物を微量含む





1　灰黄褐色　10YR4/2　砂質土　粘性弱　しまりあり
径1～30mの黄褐色砂質土多量含む



1　灰黄褐色　10YR4/2　砂質土　粘性弱　しまりあり　径1～20mの黄褐色砂質土を多量、径1～20mの礫を少量、径1～10mの炭色粘土を少量含む　上部には巻一人頭大の礫が混入する
2　黄灰色　2.5Y4/1　砂質土　粘性あり　しまりあり　径1～80mの炭色粘土中量含む
3　暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土　粘性弱　しまりあり　径1～10mの黄褐色砂質土少量含む
4　暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土　粘性あり　しまりあり　径1～20mの黄褐色砂質土中量含む

0　1:100　5m

第160図　18区遺構詳細図1

の埋没後に掘り込まれている。南側をSD1801に切られている。位置関係から見て、SD1817、SD1818と同一の溝である可能性が高い。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片が出土した。時期の特定は困難であるが、出土遺物と周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD1815（第162図　図版47）

第1面J25、J26グリッドで検出された。調査区中央部の南側溝付近に位置し、東西に直線的に延びる溝跡である。検出長4.63 m、幅0.31 m、深さ0.28 mである。SD1817の埋没後に掘り込まれている。SD1811に切られている。

遺物は第165図393～396が出土した。393は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開き、棒状浮文を貼り付けている。394は壺の底部である。395は折返し口縁を有する甕である。胴部の張りが強く、頸部の屈曲が緩やかである。口縁部は短く、直立気味である。396は台付甕の脚裾部である。

遺構の時期は出土遺物と周囲の溝跡の状況から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1816（第161図　図版49）

第2面I24、J24グリッドで検出された。調査区西側に位置し、西側に緩やかに湾曲して南北に延びる溝跡である。検出長12.27 m、最大幅1.5 m、深さ0.52 mである。断面形状は浅い逆台形を呈する。SD1803の屈曲部の一部を切っている。

遺物は第166図397～409が出土した。397～399は折返し口縁壷である。いずれも口縁部は大きく外反して開く。397は口縁部内面に稜を有する。398はやや小型の壷で、胴部に対して頸部から口縁部の占める割合が大きく、頸部の太い個体である。400と401は複合口縁壷である。いずれも口縁部外面に棒状浮文を貼り付け、複合部内面の屈曲が明瞭である。402は小型壷の胴部である。胴下位に最大径を有し、肩部が張り、細い頸部を有する。403と404は壷の胴部である。ともに肩部が張り、胴下部に最大径を有する。肩部に円形浮文を貼り付けている。405は壷の底部である。406～408は口縁部の輪積み痕を折返しに見立てた甕である。いずれも頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反して開く。輪積み痕は部分的にナデ消している。406は口縁端部を面取りし、下端に刻みを施す。409は台付甕の脚部である。低く、裾部への開きが小さい個体である。

遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

SD1817（第162図）

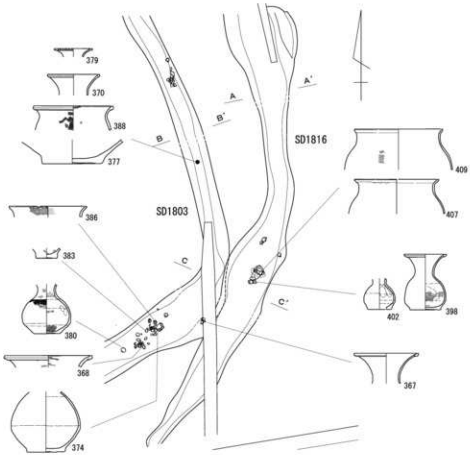
第2面J25、J26グリッドで検出された。調査区中央部の南側溝付近に位置し、東側に緩やかに湾曲して南北に延びる溝跡である。検出長2.62 m、幅0.44 m、深さ0.29 mである。位置関係から見て、SD1813、SD1818と同一の溝である可能性が高い。北側をSD1801に切られている。遺物は出土しなかった。時期の特定は困難であるが、周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SD1818（第162図）

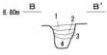
第1面I26、J26グリッドで検出された。調査区東側南側溝付近に位置する。東側に湾曲して南北に延びる浅い溝跡である。現存長4.05 m、幅1.2 m、深さ0.26 mである。位置関係から見て、SD1813、SD1817と同一の溝である可能性が高い。遺物は出土しなかった。時期の特定は困難であるが、周囲の溝跡の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SK1801（第167図）

第1面I24グリッドで検出された。調査区西側北側溝付近に位置し、東西軸1.25 m、南北軸は現存で1.64 m、深さ0.3 mの楕円形の土坑である。底面は広い平坦面を有し、壁は直立気味に立ち上がる。



1　黒褐色　10YR2/2　粘土　粘性強　しまりあり
　径1～40mmの黄褐色砂質粘土少量、径1～10mmの灰白色粘土少量、
　径1mm以下の白色粘子少量、径1～3mmの炭化物微量含む
2　暗灰色　10Y4/1　シルト　粘性あり　しまりあり
　径1～10mmの灰色粘土少量含む
3　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性あり　しまりあり
　径1～20mmの灰白色粘土少量、径1～20mmの黄褐色粘土微量含む

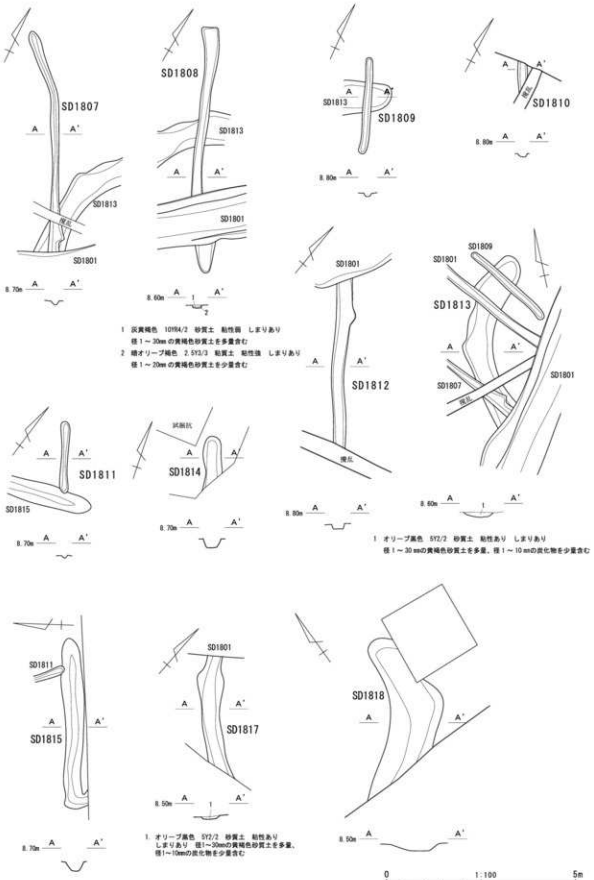


1　オリーブ黒色　5Y3/2　砂質土　粘性あり しまりあり
　径1～20mmの黄褐色砂質土少量、径1～5mmの炭化物微量含む
2　灰褐色　10Y4/2　砂質土　粘性あり　しまりあり
　径1mm以下の白色細粒砂を多量、径1～5mmの黄褐色砂質土を少量、
　径1～10mmの炭化物を少量含む
3　暗灰色　10Y4/1　極細粒砂　粘性なし　しまりあり
4　暗灰色　10Y4/1　極細粒砂　粘性なし　しまり弱
　径1～200mmの黒褐色粘土小量含む

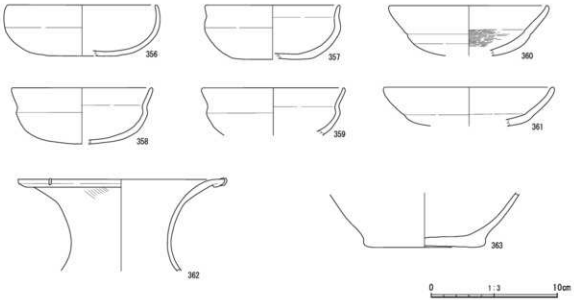
1　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性あり　しまりあり
　径1～50mmの灰白色粘土少量、径1～30mm
　の炭化物少量含む
2　黒褐色　10YR3/1　砂質粘土　粘性あり　しまりあり
　径1～40mmの暗灰色砂質土少量含む

土器　0　1:10　20cm　　遺構　0　1:100　4m

第161図　18区遺構詳細図2



第162図　18区遺構詳細図3



第163図　18区SD1801出土遺物実測図

SD1816を切って掘削されている。

遺物は第168図410～412が出土した。410は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。口縁部内面にＲＬの縄文を施文している411は壷の底部である。412は甕の口縁部である。口縁部の開きが小さく、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。

時期の特定は困難であるが、出土遺物とSD1816との新旧関係から、SD1816廃絶後の古墳時代前期以降の遺構としておく。

SK1802（第167図）

第1面I24グリッドで検出された。調査区西側に位置し、東西軸1.66 m、南北軸1.3 m、深さ0.33 mの楕円形の土坑である。底面の平坦面は狭く、東側の壁は緩やかに立ち上がり、西側の壁は直立気味に立ち上がる。SD1816を切って掘削されている。

遺物は第168図413～416が出土した。413は壷の底部である。416は折返し口縁を有する甕である。胴部の張りが小さい個体である。口縁部と頸部の境が明瞭でなく、短い口縁部の外側に折返しの粘土帯を貼り付けている。414と415は甕の口縁部である。414は摩滅が著しく、口縁部が原形を留めていない。ともに頸部の屈曲が明瞭で、口縁部が大きく開く。

時期の特定は困難であるが、出土遺物とSD1816との新旧関係から、SD1816廃絶後の古墳時代前期以降の遺構としておく。

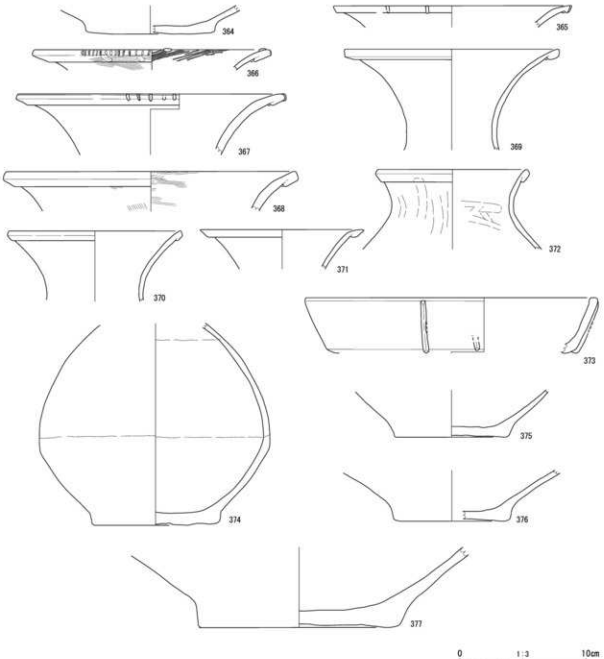
SK1803（第167図）

第1面I23・I24グリッドで検出された。調査区北西隅の西側溝内及び西壁に設けたテラス上で検出され、遺構の北側は削平されている。東西軸1.15 m、南北軸は現存で0.73 m、深さ0.31 mの隅丸方形の土坑である。底面は平坦で、壁は直立する。遺物は出土しなかったため、遺構の時期の特定は困難である。

SK1804（第167図　図版48）

第1面I25グリッドで検出された。調査区中央部の北側溝付近に位置する。直径1.7 m、深さ0.28 mの円形の土坑である。底面は平坦で、壁は直立する。

遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片1点が出土した。時期の特定は困難であるが、出



第 164 図　18 区 SD1802・1803 出土遺物実測図

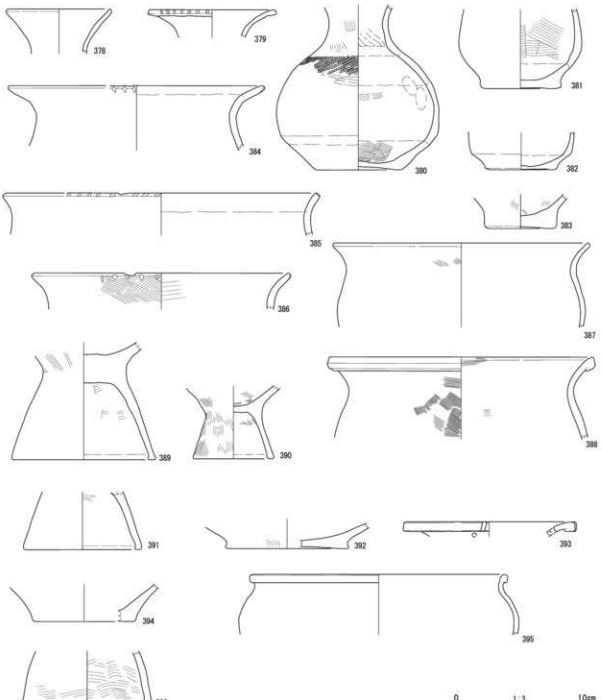
土遺物や周辺の遺構の状況から、弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構としておきたい。

SK1805（第 167 図　図版 48）

第 1 面 I25 グリッドで検出された。調査区西側に位置する。直径 1.1 m、深さ 0.34 mの不整形な円形の土坑である。底面の平坦面は狭く、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかったため、遺構の時期の特定は困難である。

SK1806（第 167 図　図版 48）

第 1 面 I25 グリッドで検出された。調査区中央部北側溝付近に位置し、遺構の北側は側溝で削平されている。東西軸 2.07 m、南北軸は現存で 1.22 m、深さ 0.27 mの不整楕円形の土坑である。底面は中央に落ち込みを有し、壁は緩やかに立ち上がる。



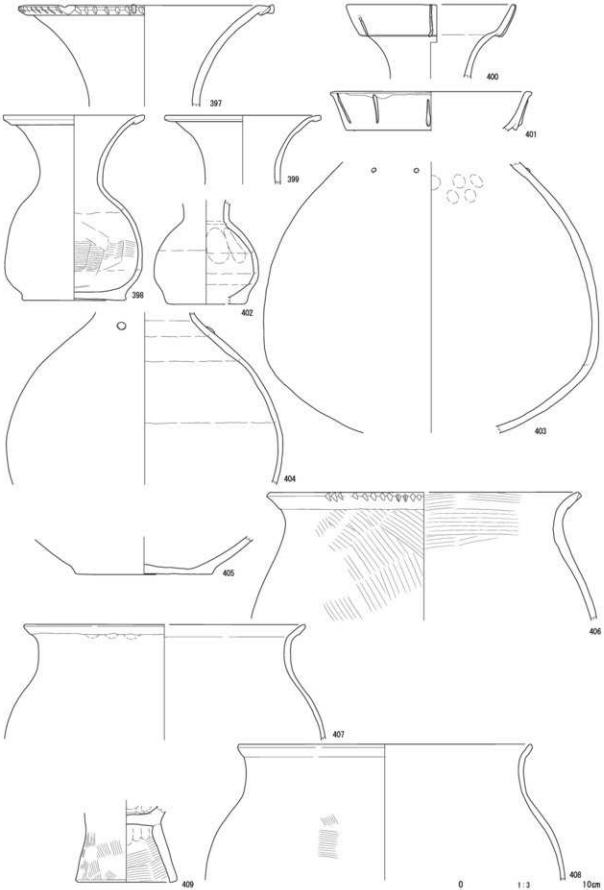
第 165 図　18 区 SD1803・1809・1815 出土遺物実測図

遺物は第 168 図 417 ～ 419 が出土した。417 と 418 は折返し口縁壺である。ともに口縁部は外反して開く。419 は複合口縁壺である。複合部内面の屈曲が明瞭であり、口縁部外面に棒状浮文を貼り付けている。

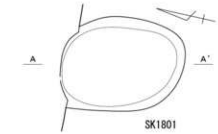
遺構の時期は出土遺物から、弥生時代後期から古墳時代前期としておく。

SX1801（第 169 図　図版 48）

第 1 面 I24 グリッドで検出された。調査区西側溝付近に位置し、遺構の西側は側溝で削平されている。東西軸は現存で 0.8 m、南北軸 3.26 m、深さ 0.29 m の隅丸方形の土坑である。底面は広い平坦面を有し、

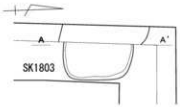


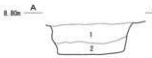
第 166 図　18 区 SD1816 出土遺物実測図



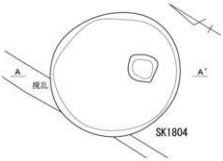
1　オリーブ褐色　5Y4/4　砂質土　粘性あり　しまりあり　径1～20mmの黄褐色砂質土中量。
　径1～50mmのオリーブ褐色砂質粘土少量。径1～20mmの炭化物少量含む
2　オリーブ黒色　5Y3/2　砂質粘土　粘性　しまりあり　径1～20mmの黄褐色砂質土少量含む

1　暗褐色　10YR3/3　砂質粘土　粘性あり　しまりあり　径1～30mmの炭化物少量。
　径1～20mmの黄褐色砂質土少量。径1～20mmの焼土微量含む。
2　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　粘質土　粘性あり　しまりあり　径1～10mmの炭化物
　微量。径1～20mmの黄褐色砂質土微量含む

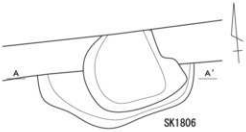




1　暗褐色　10YR3/3　シルト　粘性弱　しまりあり　径1～20mmの黄褐色砂質土
　中量。径1～20mmの灰白粘土少量含む
2　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性強　しまりあり　径1～10mmの黄褐色砂質土
　少量。径1～20mmの灰白粘土少量。径1～2mmの炭化物微量含む



1　黒褐色土　10YR 3/2　粘性あり　しまりあり　黄・橙色粒子を多く、
　炭化物粒をやや多く、赤色粒子を僅かに含む
2　黒褐色土　10YR 2/2　やや砂質　粘性あり　1層と比してしまりやや弱い
　大粒の黄色粒子をやや多く含む
3　暗褐色土　10YR 3/3　粘性強　大粒の黄色粒子を多量に含む
4　黒褐色土　10YR 2/2　粘性強　しまりややあり　部分的に砂質部分を含む
　黄色粒子は少ない

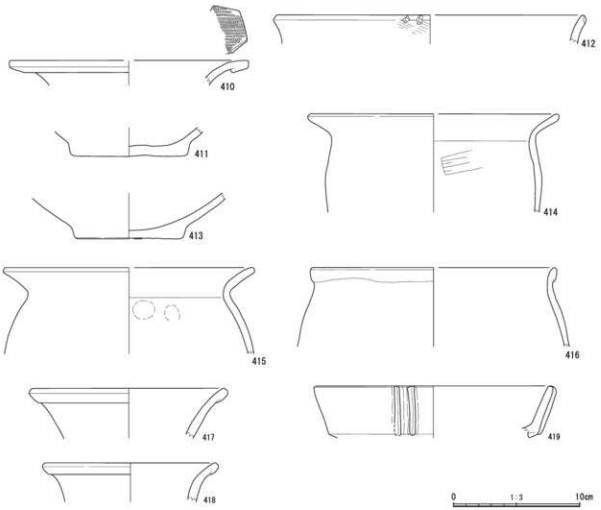


1　オリーブ黒色　5Y3/1　砂質土　粘性弱　しまり弱　径1～50mmの黄褐色砂質土中量。
　径1～30mmの焼土微量含む
2　暗オリーブ　5Y4/3　砂質土　粘性弱　しまりあり　径1～30mmの黄褐色砂質土多量。
　径1～10mmの炭少量含む

1　暗褐色土　10YR3/3　やや砂質　粘性強　しまり弱
　大粒の炭化物少量含む
2　暗褐色土　10YR3/4　1層より砂質　粘性強　しまり弱
　大粒の橙色粒子多量含む

0　1:50　1m

第167図　18区遺構詳細図4



第 168 図　18 区 SK1801・1802・1806 出土遺物実測図

壁は直立気味に立ち上がる。

遺物は第 170 図 420 の瓦が出土した。また、弥生時代後期から古墳時代前期の土器の小片も出土したが、混入品と見られる。420 は平瓦の側端部の破片である。表面が著しく摩滅しており、凹凸面の痕跡は確認できない。側面は、凸面側に幅の広い面取りが施されている。

遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期以降としておきたい。

SX1802（第 169 図）

第 1 面 I24、J24、J25 グリッドで検出された。調査区南西隅に位置する。東西 11.47 m、南北 2.48 m の範囲に溝に似た形状で拡がる浅い窪み状の遺構である。

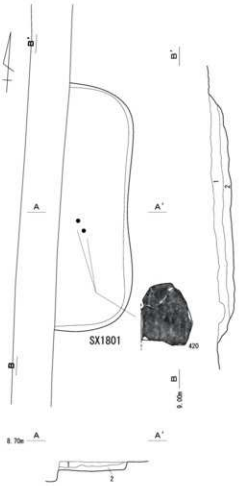
遺物は第 170 図 421 と 422 が出土した。421 は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。422 は壷の底部である。

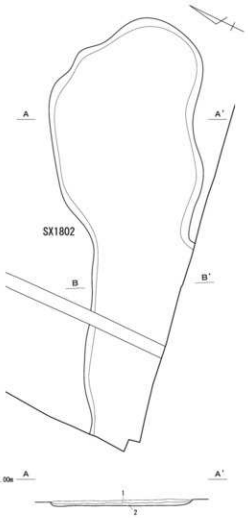
遺構の時期は出土遺物から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代前期に位置付けられる。

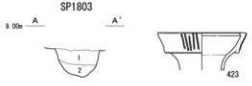
SP1803（第 169 図）

I26 グリッドの調査区北壁で確認された。排水溝掘削時に遺構の大部分を掘削してしまったため、平面プランは確認できなかった。Ⅲ層から掘り込まれている。遺物は出土した土器第 170 図 423 が比較的大型の破片であることから、遺構は土坑である可能性が考えられる。

423 は複合口縁壷である。大廓式の白色粒子を含む胎土を有する。大型で、複合部の幅が広く、口縁





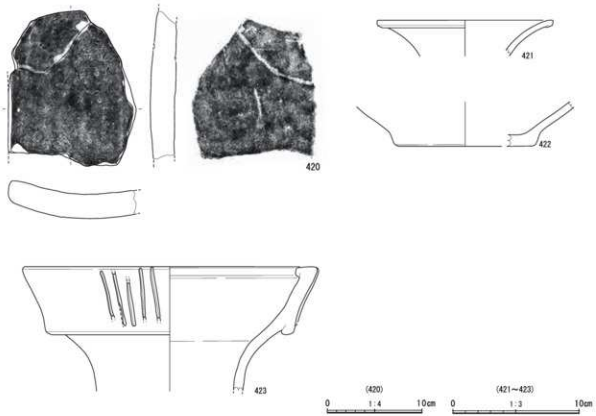


遺物 0 1:10 20cm　SX1801・SP1803 0 1:50 1m　SX1802 0 1:100 4m

第169図　18区遺構詳細図5

端部内面に凸帯を有している。複合部内面の屈曲が明瞭ではなく、頸部から一体化して斜めに延びている。

遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期としておきたい。



第 170 図　18 区 SX1801・1802、SP1803 出土遺物実測図

20　19 区

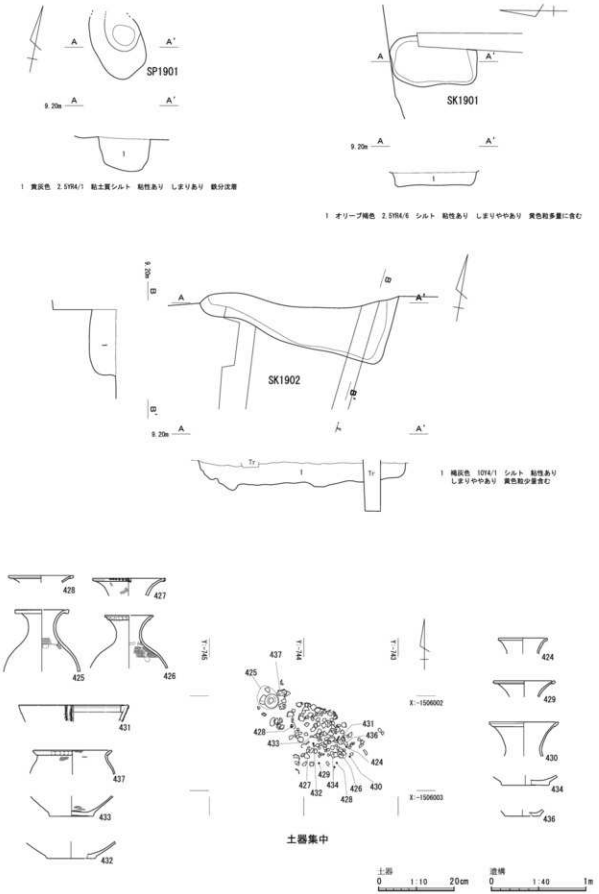
SK1901・SK1902・SP1901（第 171 図　図版 53）

J 15 グリッドで検出された。いずれも表土直下で確認されたことから、14 区から続く礎石建物跡 SB1401 より先行する遺構と推定される。SK1901 は東西軸 0.88 m、南北軸 0.54 m、深さ 0.12 m、SK1902 は、東西軸は残存値で 2.04 m、南北軸は残存値で 0.7 m、深さ 0.22 m の、ともに隅丸方形の平面形状を呈すると想定される土坑である。底部は平坦で、壁は直立する。SP1901 は現状で東西軸 0.56 m、南北軸は残存値で 0.64 m、深さ 0.32 m の楕円形の平面形状を呈するピットである。いずれの遺構からも遺物は出土しておらず、遺構の時期の特定は困難である。

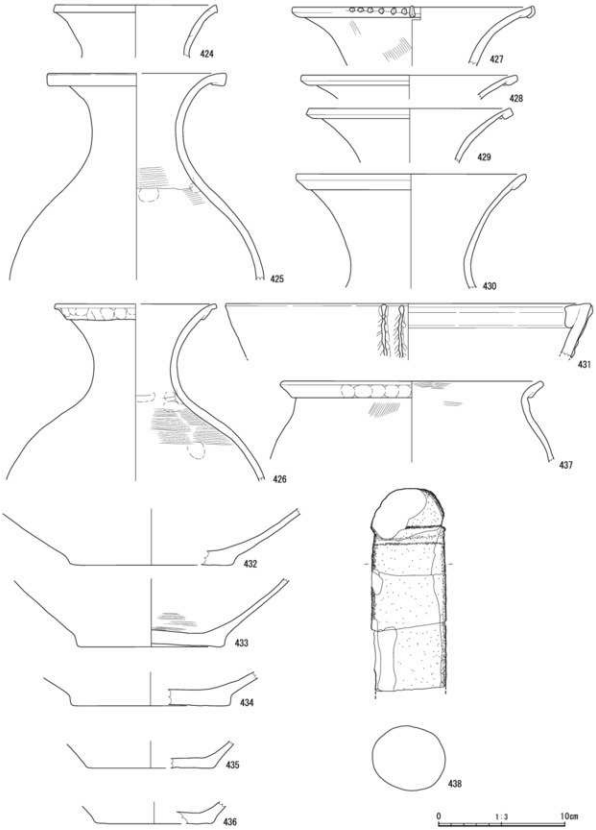
土器集中地点（第 171 図　図版 53）

J14 グリッドで検出された。調査区南東隅に位置する。礎石建物跡 SB1401 の基壇の北西隅付近に位置する。土器は長軸約 1.3 m、短軸約 0.6 m の楕円形状に拡がるが、土坑状の落ち込みは確認できなかった。土器は投棄された状態で多量に出土しており、被熱し破砕した石棒も遺構全体に散らばった状態で出土している。

第 172 図 424 は単純口縁壷である。やや短頸で、口縁部の外反は小さい。425 ～ 430 は折返し口縁壷である。425 と 426 は胴上部まで残存する。425 は大廓式の白色粒子を含む胎土を有する。口縁部が外反して大きく開き、肩部はなだらかである。器面の摩滅が著しく、文様や調整の詳細は不明である。426 は口縁部が外反して開く。肩部はなだらかである。折返し部には指頭痕が明瞭に残る。427 ～ 430 は口縁部のみ残存する。427 と 428 は口縁部が外反して大きく開き、429 と 430 は口縁部の外反がやや小さい。431 は複合口縁壷である。大型で、大廓式の白色粒子を含む胎土を有する。複合部の口縁端部



第 171 図　19 区遺構詳細図



第 172 図　19 区土器集中地点出土遺物実測図

内面に断面四角形の凸帯を有しており、外面に棒状浮文を貼り付けている。432～436は壷の底部である。433は破損後に被熱している。437は折返し口縁を持つ甕である。口縁部全体が折返し面となる。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は短く、直線的に開く。折返し部には指頭痕が明瞭に残る。遺物の時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期の範囲に収まる。

第172図438は石棒である。円柱状の砂岩礫を素材としている。有頭で、下半部を欠損している。被熱により破砕し、赤化している。整形手法の詳細は不明であるが、全面的に敲打による加工が想定される。

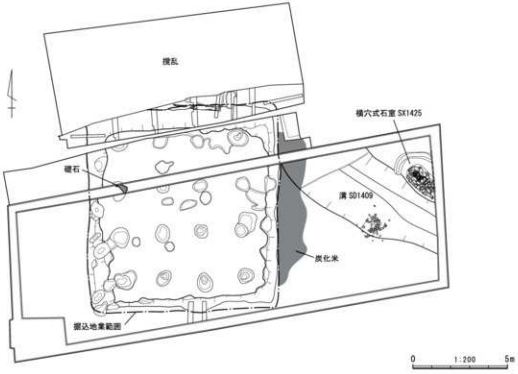
21　礎石建物

SB1401（第173・174図　図版30～34）

14区で検出された基壇を伴う礎石建物である。平成30年度に建物の大部分について調査を行ったが、北側が国道及び歩道であり調査が実施できなかったため、令和2年度に別途調査を実施した。なお、平成30年度調査範囲については、国土交通省との保存協議の結果現状保存が可能となったため、基壇上面までの調査とし、基壇の解体調査は行っていない。また、基壇の土層断面については、剥ぎ取りを実施した。

残存する礎石は、西側柱列の北から2番目に相当する1個のみである。長さ約70㎝・幅約30㎝・厚さ約30㎝の自然礫である。礎石は上面が基壇検出面より約4㎝の深さまで沈下した状態で出土しており、北側に向かって傾いている。礎石の表面は基本的に滑らかで、上面は平らであるが、西側のみ破断面となっており、沈下の際に割れている可能性がある。その他の礎石はすべて抜き取られているが、抜き取り時に形成されたとみられる深さ約1～2㎝の浅い窪み状の痕跡が検出されており、礎石位置の推定が可能である。なお、地元住民への聞き取りによって、戦後土地造成した際に、残存する礎石のような大きな石が複数個出土し、庭石に使うために持ち帰った住民もいたとの証言を得ている。

建物は、桁行3間×梁行3間の総柱建物である。建物規模は、桁行7.2ｍ×梁行6.3ｍで、柱間は桁行が2.4ｍ（8尺）の等間、梁行が2.1ｍ（7尺）の等間である。建物の主軸は、N－1°－Wとわず

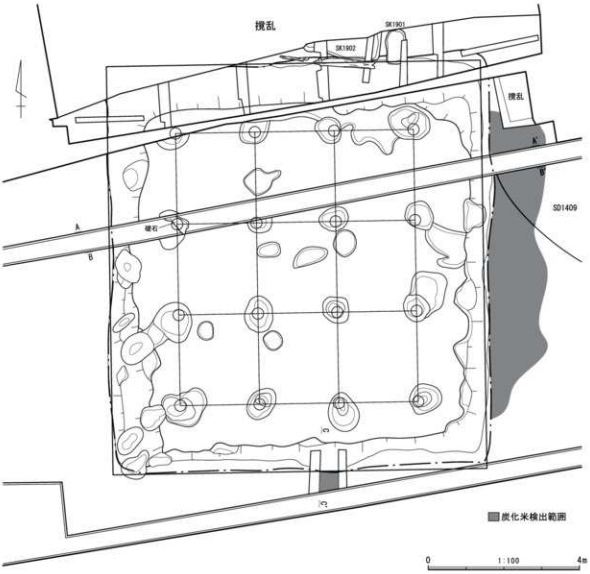


第173図　礎石建物跡 SB1401 周辺遺構実測図

かに西に振るがほぼ真北である。

基壇は、桁行方向10.2（34尺）m×梁行方向9.6（33尺）mの規模であり、高さは約15～20㎝残存する。造成土の直下で基壇が検出されており、基壇上面は造成時に多少削平されている可能性がある。基壇斜面は、後世の耕作等による掘削の痕跡も多く見られるが、残存状態が良好な箇所では、約15～20度で斜めに立ち上がる形状であり、外装は認められない。

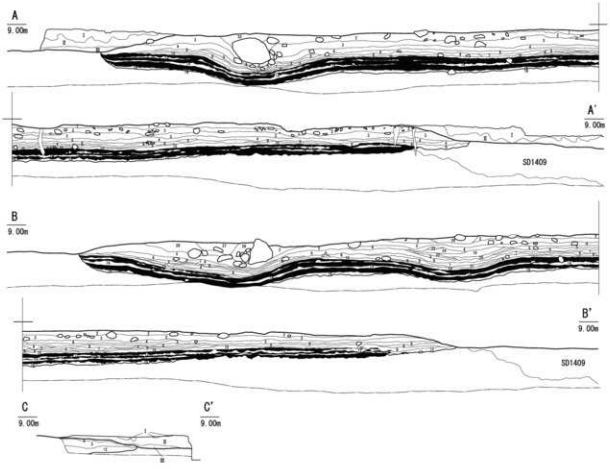
地業は掘込地業（総地業）で、基壇下端とほぼ同位置から施している。掘込地業の深さは約12～20㎝で、地業土は灰褐色シルトと黒色砂の互層である。灰褐色シルトと黒色砂の1層の厚さは3～6㎝程で、地表面まで各3層重ねている。灰褐色シルトは築造時の基盤層に相当する土であり、掘込地業の掘削土を利用したとみてよい。一方、黒色砂は、この地域ではシルト層より下層に堆積する特徴的な砂である。やや距離は離れるが、調査地から約500m東に位置する横砂交差点付近の工事現場では、シルト層から約1m下層で厚い黒色砂の堆積を確認している。排水性を高める目的で近隣で採掘した砂を運び込み、地盤改良材として使用したものと推定できる。基壇土は、拳大程度の円礫を混ぜた黄褐色土であり、硬く叩き締められている。全体に均質な土が使用されており、分層が困難な状況であるが、色調の違いなどから5～6層の単位が認められる。



第174図　礎石建物跡SB1401実測図

残存する礎石の直下と北・東隣の礎石推定位置近くの下層では、地盤の沈下が確認されている。特に礎石の直下を断ち割った箇所では、基壇土や地業土が圧縮されて褶曲しており、掘込地業の底面で約15 cm沈下している。奈良文化財研究所の村田泰輔主任研究員に現地指導を依頼した結果、基壇や調査区壁面に微細な噴砂の痕跡が認められ、調査区の近隣で大規模な噴砂が発生し、建物の重量が掛かっていた礎石の部分が沈下した可能性があるとのことである。礎石の直下及びその近くの下層調査を行った3箇所すべてで沈下が認められていることから、未調査である他の礎石においても沈下が発生している可能性がある。

基壇築造後の堆積土からは、白色の火山灰が検出されている。パッチ状に見られる特徴があり、特に基壇掘部において多く確認された。テフラ分析の結果、この白色火山灰は神津島天上山テフラであることが判明している（273 ～ 278 頁）。神津島天上山テフラは、承和5（838）年に放出された火山灰で、『続日本後記』承和五年九月甲申条に降灰の記述がある。火山灰が確認されたのは、基壇土の直上に堆積し

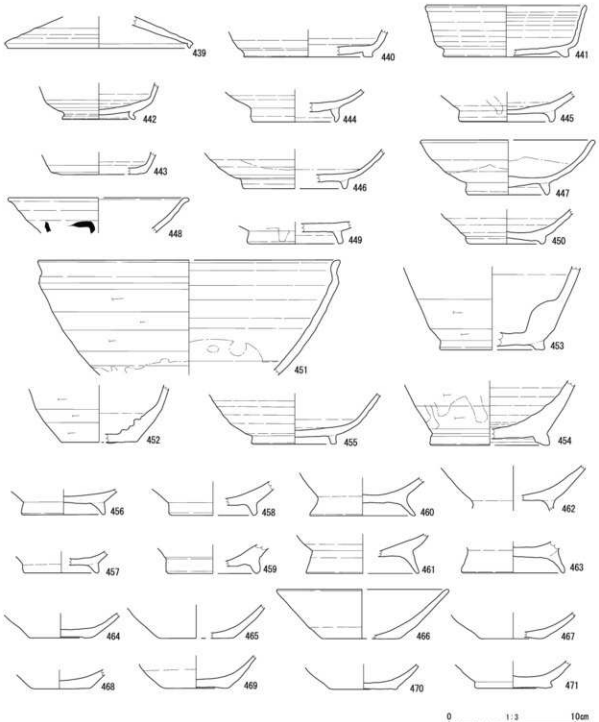


遺物包含層
1　黒褐色　10YR2/1　シルト
Ⅱ　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト質粘土　炭化米を含む
Ⅲ　灰オリーブ　5Y5/2　シルト　白色火山灰を含む

基壇
1　明黄褐色　10YR6/6　シルト　暗褐色土ブロック・小礫少量混る
2　橙赤褐色　5YR3/2　砂質ローム　砂利・円礫多く混る　鉄分沈着
3　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　円礫少量混る　鉄分沈着（上面に硬石）
4　褐灰色　10YR4/1　シルト　円礫少量混る　鉄分沈着
5　褐灰色　2.5YR4/2　シルト　黒褐色土ブロック混る　鉄分沈着
6　黒褐色　10YR3/1　粘土質シルト
8　黒褐色　7.5YR3/1　粘土質シルト
9　にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト　黒褐色土ブロック混る
10　黒褐色　2.5YR3/2　粘土質シルト
11　黒色　7.5YR2/1　砂　黒褐色土ブロックごく少量混る
12　黒褐色　2.5YR3/2　粘土質シルト
13　黒色　7.5YR2/1　砂　黒褐色土ブロックごく少量混る
14　黒褐色　2.5YR3/2　粘土質シルト
15　黒色　10YR2/1　砂
16　暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　粘土質シルト
20　黒褐色　10YR3/2　シルト
21　にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト
23　暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト
24　黒褐色　10YR5/6　シルト
25　黒褐色　7.5YR3/1　粘土質シルト
26　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　砂質　鉄分沈着（抜取穴埋土）
27　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　砂質　鉄分沈着（抜取穴埋土）
28　にぶい黄色　2.5YR6/4　シルト（抜取穴埋土）
29　褐灰色　7.5YR4/1　シルト　円礫多く混る（抜取穴埋土）
30　暗灰色　2.5YR4/2　粘土質シルト　黒褐色土ブロック・黄色砂多く混る
31　灰オリーブ色　5YR4/2　粘土質シルト　黒褐色土ブロック混る
33　にぶい黄色　2.5Y6/4　シルト　小礫多く混じる

0　1:40　1m

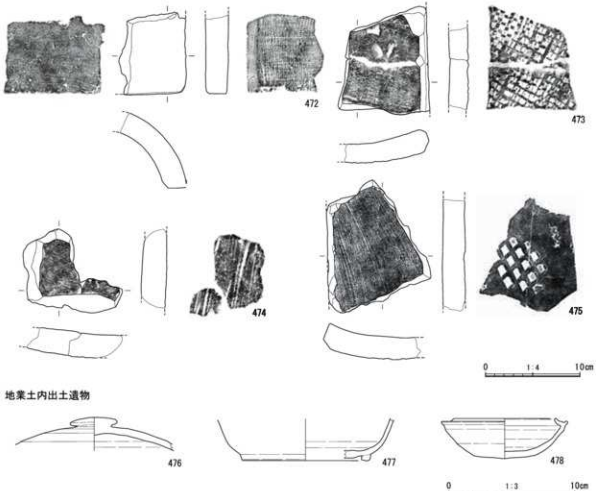
第175図　礎石建物跡 SB1401 実測図2



第176図　礎石建物跡SB1401内および周辺出土遺物実測図1

た土層であり、基壇の築造年代の下限を示している。

基壇の東側では炭化米の分布が確認されており、範囲としては認識できなかったが、南側でも出土している。炭化米が確認されたのは、火山灰を含む土層の上に堆積するⅡ層である。後述する炭化米集中遺構（SX1507）とは異なり数量は少なく、土を水洗して採取した総量は49.9ｇである。基壇の検出上面では、炭化米や被熱の痕跡が確認されていないが、前述のように造成の際に上面が削平されている可能性がある。基壇の北側と西側についても、東側及び南側と同条件で土を水洗したが、炭化米は採取さ

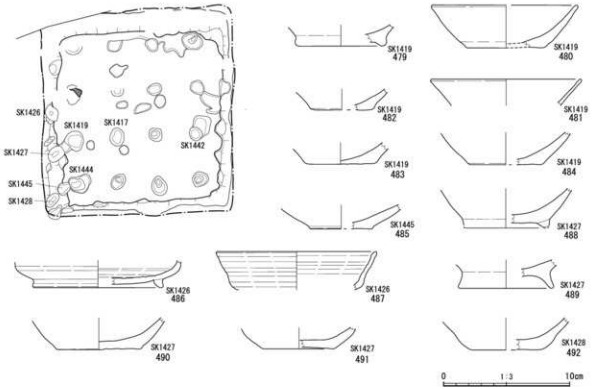


第177図　礎石建物跡 SB1401 内および周辺出土遺物実測図2

れていない。建物は火災に遭い東側へ倒壊している可能性が高い。出土した炭化米2点については、放射性炭素年代測定を実施しており、基壇南側から出土したものが887-981 cal AD (95.4%)、東側から出土したものが889-980 cal AD (95.4%) という結果が出ている（第5章参照）。

基壇の周辺から出土した遺物は、須恵器や瓦などの奈良時代の遺物も少量みられるが、灰釉陶器や土師器を中心に10世紀代の遺物が主体となっている。

第176図439～471は、基壇の斜面及び裾付近において、基壇や旧地表面の直上に堆積した灰褐色の土層から出土した遺物である。基壇東側及び南側では、炭化米を含む土層に相当する。439は須恵器の坏蓋の破片である。440～443は須恵器の坏身である。440～442は高台坏、443は無高台坏で、いずれも底部付近の破片である。444～450は灰釉陶器の碗である。444～446・449・450は底部の破片で、444以外の底部外面には糸切痕が残る。447は底部から口縁部にかけての破片で、全体の3分の1程度が残存する。口縁部付近の内外面に、漬け掛けの灰釉が明瞭に残る。448は口縁部の破片である。体部下半が欠損するため判読できないが、外面に墨書が残る。451は灰釉陶器の鉢である。口縁部から体部にかけての内外面に灰釉が施されている。452と453は須恵器の瓶である。453には焼膨れが多くみられ、外面には自然釉が付着している。454は灰釉陶器の瓶である。底部付近の破片であり、底部外面には糸切痕、高台部には藁の圧痕が残る。455は緑釉陶器の碗である。比較的軟質の焼成で、内外面全面に淡緑色の緑釉が施されている。



第178図　礎石建物跡 SB1401 内および周辺出土遺物実測図3

456 ～ 471 は土師器である。456 ～ 463 は碗である。456 ～ 459 は低い高台を有し、460 ～ 462 は高くハの字に開く高台である。456・462 は基壇南側、457 ～ 459・461 は基壇の東側、460 は基壇の西側の基壇斜面の直上、463 は基壇の北側で出土している。464 ～ 471 は坏である。いずれも破片であり、表面の摩滅が著しい。466 は底部から口縁部まで復元できる個体で、全体の 4 分の 1 程度残存する。いずれも平らな底部から斜め上方へ直線的に立ち上がり、口縁部に至る。464・467・469 は基壇の南側、465・468・471 は基壇の東側、466 は基壇の西側、470 は基壇の北側で出土している。

第 177 図 472 は丸瓦の広端部の破片である。凸面は横方向のナデ調整が施されており、凹面には布目が残る。側面は凹面側に面取りが施されている。473 ～ 475 は平瓦である。473 と 475 の凸面には目の細かい格子叩き、474 には縄叩きが残る。473 と 474 の凹面は摩滅が著しく、痕跡が確認できない。475 の凹面には布目と糸切り痕が残る。473 の側面には凸面と凹面に面取りが施されており、475 の側面には、凸面側に幅広の面取りが施されている 472 ～ 474 は基壇の東側、475 は基壇北側で出土している。

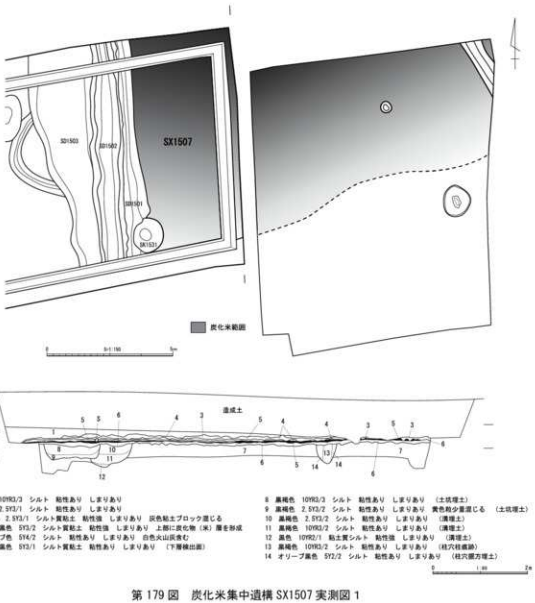
第 178 図 479 ～ 484 は、礎石の抜き取り痕跡である SK1419 から出土した遺物である。479 は土師器の碗で、高台部付近の小破片である。480 ～ 484 は土師器の坏の破片であり、表面の摩滅が著しい。これらは、礎石抜取り時に基壇の上層から土とともに混入した遺物とみてよく、土師器の他に炭化米も数粒出土している。なお、礎石の抜き取り痕跡では、図示できない小片であるが、SK1417 で土師器 1 点、SK1423 で須恵器（坏蓋か）1 点、SK1442 で土師器 2 点、SK1444 で土師器 4 点と灰釉陶器 1 点が出土している。

485 ～ 492 は、礎石建物の廃絶後に掘削された土坑状の窪みから出土した遺物である。485 は SK1445 から出土した土師器の坏で、底部付近の破片である。486・487 は SK1426 から出土した須恵器の坏である。破片であり接合しないが、同一個体の可能性がある。SK1426 からは、この他に図示できない小破片であるが、土師器の碗及び坏の破片が 3 点出土している。488 ～ 491 は SK1427 から出土した土師器である。

488・489 は椀で高台部付近の破片、490・491 は坏で底部付近の破片である。SK1427 では他に平瓦の小破片が１点出土している。492 は SK1428 から出土した土師器坏である。SK1428 では、これ以外に図示できない小破片であるが、須恵器１点と土師器３点が出土している。

基壇土及び地業土からは、須恵器（第 177 図 476 ～ 478）や土師器の小片が出土している。477 は須恵器の坏身である。地業土の黒色砂層の間のシルト層から出土している。底部から体部にかけての破片で、外面に自然釉が付着する。476 は須恵器の坏蓋である。頂部付近の破片であり、掘込地業の底部付近から出土している。478 は須恵器の坏身である。底部から口縁部まで復元できる破片で、全体の５分の１程度残存する。いずれも令和２年度調査における基壇解体時に出土している。476 と 477 は８世紀前半、478 は７世紀後半の土器である。

礎石建物の建築年代は、基壇と重複する溝 SD1409 が埋め立てられた年代や、基壇土から出土した土器、建築後に堆積した火山灰の年代から、８世紀後半から９世紀初頭に位置付けられる。焼失年代は、廃絶後の堆積土出土の遺物や、炭化米の放射性炭素年代測定結果、後述する SX1507 の年代から、10 世紀前半に位置付けられる。

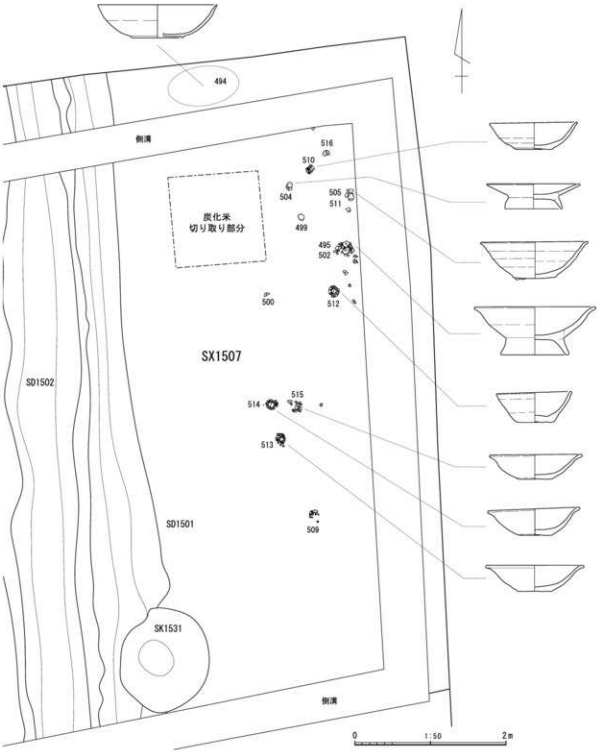


第 179 図　炭化米集中遺構 SX1507 実測図１

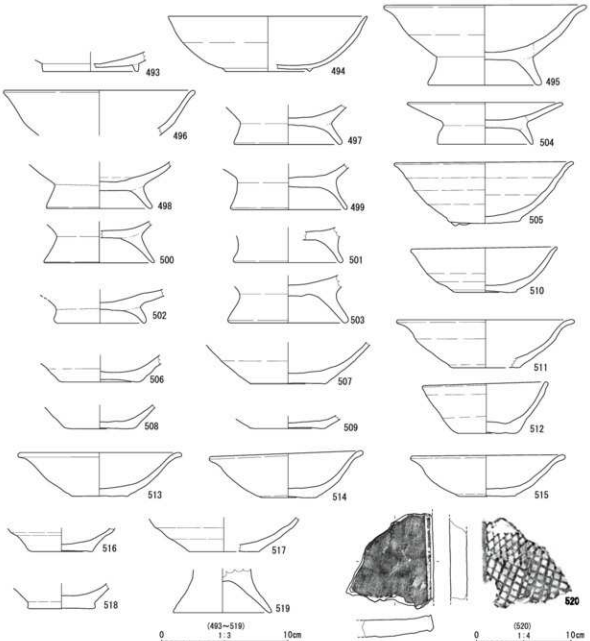
22　炭化米集中遺構

SX1507（第 179・180 図　図版 35）

15 区の東側において、白色火山灰（神津島天上山テフラ）を含む土層の直上で、炭化米が集中して出土していることから、炭化米集中遺構として捉えた。炭化米は、厚い所で 5 ㎝程の層を成しており、南側に向かって徐々に薄く数もまばらになり、調査区南端ではほとんど確認できなくなる。炭化米以外には、1～2 ㎝程度の大きさの炭化材も少量含まれている。採取時に観察した限り、炭化米は一粒一粒



第 180 図　炭化米集中遺構 SX1507 実測図 2



第181図　炭化米集中遺構 SX1507 出土遺物実測図

が離れて出土しており、穎の状態での出土は確認できなかった。なお、炭化米が最も良好な状態で発見された1.2 m四方の範囲については、土層ごと切り取って保存している。

遺構の北側は調査区外となり、西側は後世の溝 SD1501・1502・1503 で失われているが、それらの遺構より西側では検出されないことから、最大でも SD1503 付近までとみてよい。なお、SX1507 の東側の16 区の調査では、炭化米は採取されておらず、範囲の実測図等は残されていない。しかし、16 区西側の調査壁面の写真を確認したところ、炭化米とみられる黒色の帯が明確に写っており、16 区まで続いていたことは確実である。また、調査補助員の日誌に、「炭化物を多く含む土層が 16 区北側に広がっていた」との記録と略図があることから、正確な範囲は復元できないが、SX1507 は 16 区の北側に広がっていたもの推測される。遺構の規模としては、南北 8.5 m、東西約 14 m以上である。

炭化米は、土ごと取り上げて水洗を行って採取した。採取した炭化米は、総量で 2174.5g である。粒

形質分析の結果、基壇周辺で採取された炭化米と有意な差異は認められず、一定形質のイネでもともとは他の形質が混ざらないまとまった状態で保管されていたとされる(第5章参照)。また、2点について、放射性炭素年代測定も実施しており、893-995 cal AD (95.4%) と892-995 cal AD (95.4%) という結果が出ている（第5章参照)。

遺物としては、土師器や灰釉陶器、黒色土器が出土している。第181図493～518は、炭化米の上面及び炭化米を含む層から出土した土器である。493は灰釉陶器碗の破片で、炭化米の上面から出土している。494は黒色土器の坏である。残存するのは全体の2分の1程度であるが、調査区端（側溝北側の犬走り部分）で出土しているため、本来は完形で残りの破片は調査区外にある可能性が高い。底部に低い高台が付き、内面全面と外面口縁部に黒色処理が施されている。495～503は土師器の高台碗である。495はほぼ完形で、底部にハの字形に広がる高い高台が貼り付けられている。502などの破片とともに、炭化米の上面で出土している。496は口縁部、497～503は高台部～底部のみの破片である。504は土師器の高台皿である。一部欠損しているがほぼ完形で、炭化米の上面で出土している。505～518は土師器の坏である。505は深い碗形の形態で、底部には糸切痕が残る。一部欠損するがほぼ完形であり、炭化米の上面で出土している。506～509は底部のみの破片である。510は505に比べて口径が小さく、やや浅い。下半でややふくらみ口縁に至る。一部欠損するがほぼ完形であり、炭化米の上面で出土している。512は口径に比べて深く、底部から直線的に立ち上がる。ほぼ完形であり、炭化米の上面で出土している。513～515は浅く皿状の形態で、口縁部はやや外反する。いずれも一部欠損するがほぼ完形であり、炭化米の上面で出土している。516～518は底部のみの破片である。

494・495・504・505・510・512～515は、完形または一部欠損するがほぼ完形の個体であり、炭化米の上面でつぶれたような状態で出土していることから、炭化米集中遺構形成時の一括資料として捉えられる。

519と520は、炭化米直下の火山灰を含む層から出土した遺物である。519は土師器の甕である。脚部のみの破片である。520は平瓦の側面付近の破片である。凸面は格子叩き、凹面には布目が残る。叩き目は摩耗してやや木目が浮いている。側面は凸面側に面取りが施されている。凹面には側面に平行して、分割界線とみられる窪みが残る。SX1507が形成される以前の遺物である。

約25m西側の礎石建物周辺でも炭化米は出土しているが、その出土数は微量であることや、ほかに焼失した倉庫跡が認められないこと、両者の炭化米の自然科学分析（形質分析・放射性炭素分析）結果において、差異を示していなことから、この遺構は火災の残滓を集積・廃棄した痕跡の可能性が高い。

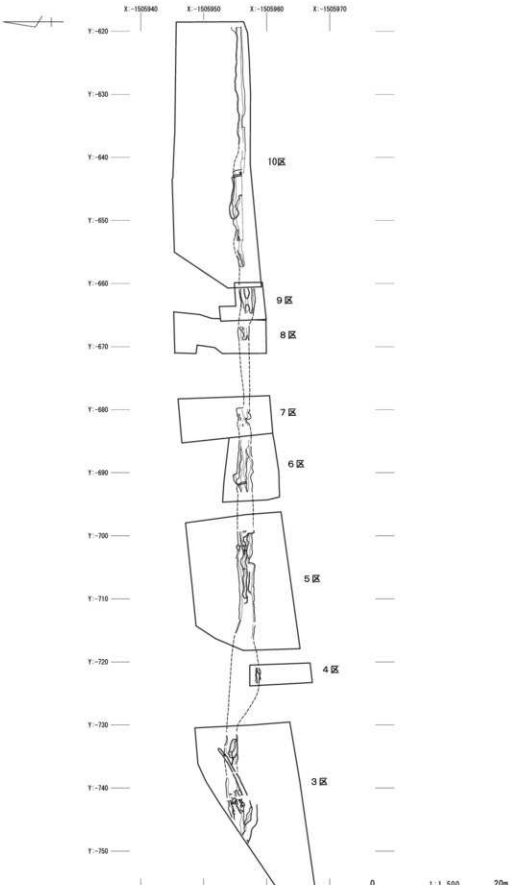
遺構の年代は、一括遺物として捉えられる黒色土器と土師器や、下層の火山灰の年代、自然科学分析（形質分析・放射性炭素分析）の結果から、10世紀前半に位置付けられる。

23　大溝（第182～190図）

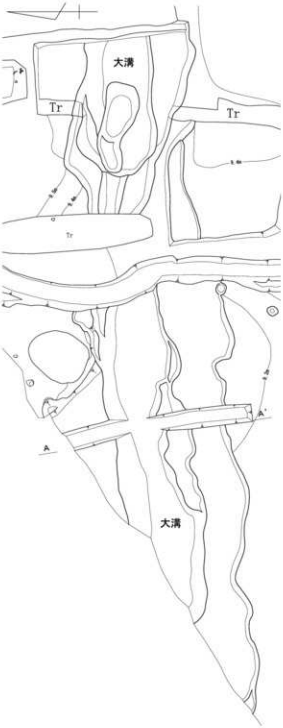
3区から10区にわたる範囲で、第1面とした遺構面から、東西方向に延びる大規模な溝が検出された。

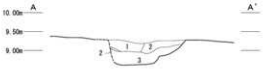
全体の形状は、ほぼ直線状に延びている。このうち、溝の両壁が完全に検出できた調査区は3区と5区である。4区と6区は北側の壁が未検出である。9区は調査区全体が遺構となり、全体のプランを検出することができなかった。7区、8区、10区は南側の壁が未検出である。規模は遺構検出面からの計測値で、長さは現存で約130m、最大幅約4m、最大深度約1.5mである。2区で検出された自然流路跡NR0202との関係ついては、調査区外となっていたため、西側への延長は確認できなかったが、東側は10区よりさらに東に延びることが想定される。

断面の形状は、完掘できた箇所で観察すると、底面は平坦で、両側壁は不規則な階段状を呈している。底面の標高は、4区で8.4m、6区で8.1m、9区で7.6mとなっており、西から東に進むにつれ、


X:-1505940
X:-1505950
X:-1505960
X:-1505970
Y:-620
Y:-630
Y:-640
Y:-650
Y:-660
Y:-670
Y:-680
Y:-690
Y:-700
Y:-710
Y:-720
Y:-730
Y:-740
Y:-750
10区
9区
8区
7区
6区
5区
4区
3区
0
1:1,500
20m

第182図　大溝全体図

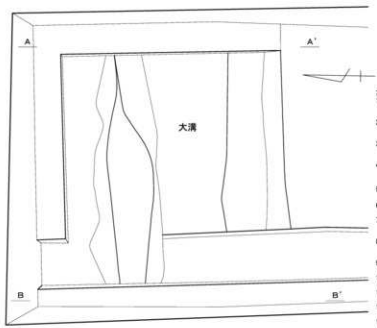




1　褐灰色　10YR6/1　細層　粘性やや弱　しまり弱　φ1～3cm程の礫を多量に含む
　　酸化鉄を多量に含み、その影響により橙色をなす
2　灰白色　10YR8/1　砂質ロリシルト　粘性弱　しまり強　酸化鉄を斑状に多量に含む
3　褐灰色　10YR6/1　シルト　粘性弱　しまりやや弱　酸化鉄を斑状に多量に含む

0　1:100　4m

第183図　大溝実測図（３区）

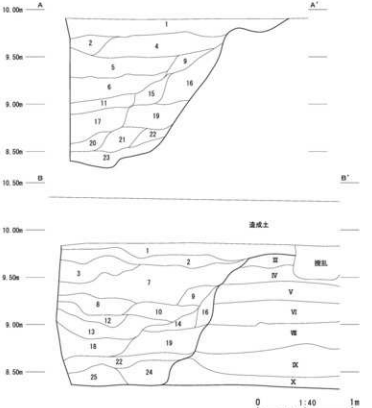


大溝

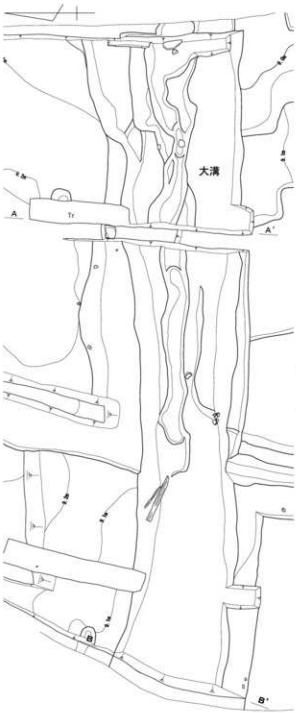
1　灰黄褐色　10YR5/2　粘土質シルト　粘性弱　しまり強
2～3mの大の酸化鉄粒多く含む　一部は酸化鉄の影響により赤化
している　1mの大の酸化鉄粒少量含む
2　灰黄褐色　10YR5/2　粘土質シルト　粘性弱　しまり強
4～5mの大の酸化鉄粒多く含む　一部は酸化鉄の影響により赤化
している　上層に4～5mの赤褐色酸化鉄粒が密集する
3　灰黄褐色　10YR5/2　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強
4～5mの大の酸化鉄粒多く含む　一部は酸化鉄の影響により赤化
している　上層に4～5mの赤褐色酸化鉄粒が密集する
4　灰黄褐色　10YR5/2　粘土質シルト　粘性弱　しまり強
4～5mの大の酸化鉄粒多く含む　一部は酸化鉄の影響により赤化
している
5　灰黄褐色　10YR5/2　粘土と赤色細砂の混土　粘性弱　しまり強
細砂に粘土が少量混じる　細砂は酸化鉄の影響により赤化している
6　灰黄褐色　10YR5/2　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強
細粒～5mの大の酸化鉄粒多く含む
7　灰黄褐色　10YR5/2　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強
細粒～5mの大の酸化鉄粒多く含む　一部は酸化鉄の影響により
赤化している
8　灰黄褐色　10YR5/2　粘土と橙色細砂の混土　粘性弱　しまり強
細砂に粘土が少量混じる　上層に5mの大の酸化鉄粒が密集する
下層に細粒～5mの赤褐色酸化鉄粒が密集する
9　黄褐色　2.5Y5/3　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強
2～3mの大の酸化鉄粒多く含む
10　灰黄褐色　10YR5/2　粘質土　粘性なし　しまり弱
2～3mの大の酸化鉄粒多く含む
11　灰色　10Y4/1　細砂　粘性なし　しまり弱　上層に細粒～2mの大の
酸化鉄粒が密集する
12　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり弱
酸化鉄粒が4～5mの大の斑状に混じる
13　10YR5/2　灰黄褐色シルト　粘性なし　しまり弱　シルトは少量
細粒～5mの大の酸化鉄粒が密集する
14　灰黄褐色　10YR5/2　粘土　粘性強　しまり弱　細砂少量混じる
細粒～5mの大の酸化鉄粒多く含む
15　褐色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまり強　2～3mの大の酸化鉄粒
多く含む
16　黒褐色　10YR3/2　砂混じり粘土　粘性弱　しまり強
2～3mの大の酸化鉄粒多く含む
17　灰黄褐色　10YR5/2　シルトと赤褐色細砂の混土　粘性なし
しまり弱　2～3mの大の礫状　細砂は酸化鉄の影響により赤化
している
18　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり弱
下層に2～3mの大の礫混じる
19　灰色　10Y4/1　粘土　粘性強　しまり強　やや硬質
2～3mの大の酸化鉄粒少量含む
20　灰色　10Y4/1　細砂　粘性なし　しまり弱　2～3mの大の礫が
密集する
21　灰色　10Y4/1　シルト　粘性なし　しまり強　炭然木多く出土
22　灰色　10Y4/1　粘土　粘性弱　しまり強　やや軟質
23　灰色　10Y4/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまり弱　軟質
24　灰色　10Y4/1　礫混じり細砂　粘性なし　しまり強
4～5mの大の礫多く含む
25　灰色　10Y4/1　細砂　粘性なし　しまり強　2～3mの大の礫
多く含む

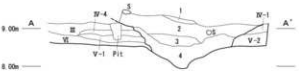
基本土層

Ⅲ　暗灰色　10YR4/1　粘土質シルト　粘性弱　しまり強
4～5mの大の酸化鉄粒多く含む一部は酸化鉄の影響により
赤化している
Ⅳ　暗灰色　10YR4/1　シルト　粘性なし　しまり強
4～5mの大の酸化鉄粒少量含む
Ⅴ　黒褐色　10YR2/1　シルト　粘性なし　しまり強
4～5mの大の酸化鉄粒多く含む
Ⅵ　黒褐色　10YR3/1　粘質土　粘性弱　しまり強
細粒～2mの大の酸化鉄粒多く含む
Ⅶ　黒褐色　10YR3/1　砂混じり粘土　粘性弱　しまりやや強
細粒～3mの大の酸化鉄粒多く含む
Ⅷ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強
上層は細粒～5mの大の酸化鉄粒多く含む
一部は酸化鉄の影響により赤化している
下層は2～3mの大の酸化鉄粒多く含む
Ⅸ　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質
Ⅹ　暗オリーブ灰色　5GY3/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質



第184図　大溝実測図（4区）

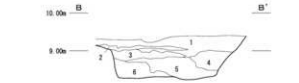




大溝
1　褐灰色　10YR6/1　砂層　粘性弱　しまりやや弱
2　褐灰色　10YR6/1　砂層　粘性弱　しまりやや弱　酸化鉄多量に含む
3　褐灰色　10YR6/1　砂層　粘性弱　しまりやや弱　酸化鉄多量に含む
4　暗青灰色　10BG3/1　砂層（上層）・礫層（下層）　粘性弱　しまり弱
還元化により青色をなす

基本土層
Ⅲ　褐灰色　10YR4/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　φ～1cm大の砂礫や量含む
一部は酸化鉄の影響により赤化している
Ⅳ-1　黒褐色　10YR3/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄多量に含む
Ⅳ-4　黒褐色　10YR3/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　φ～1cm程の砂礫を微量含む
Ⅴ-1　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄多量に含み、その影響により赤化している
Ⅴ-2　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄多量に含み、その影響により赤化している
Ⅵ　青黒色　10BG2/1　粘土　粘性強　しまり弱

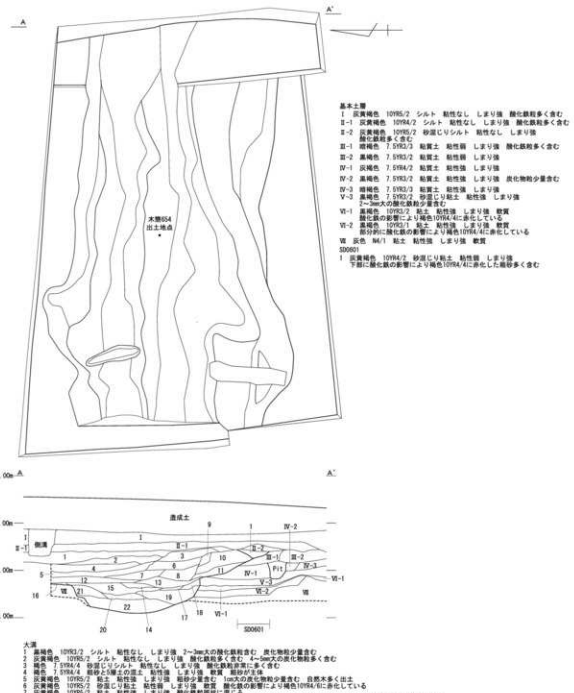
Fi1　褐灰色　10YR4/1　シルト質土　粘性弱　しまり強　φ～1cm程の砂礫を微量含む



1　灰白色　10YR8/1　砂層　粘性弱　しまり弱
酸化鉄多量に含む。酸化鉄の影響により赤化している
2　褐灰色　10YR6/1　砂層　粘性弱　しまりやや弱
酸化鉄多量に含む
3　黒褐色　10YR3/1　シルト質土　粘性弱　しまり強
酸化鉄多量に含む
4　褐灰色　10YR6/1　礫混じりシルト　粘性弱　しまりやや弱
φ～5cmの礫多量に含む　酸化鉄多量に含む
5　暗青灰色　10BG3/1　砂層（上位）・礫層（下位）粘性弱　しまり弱
還元化により青色をなす
6　青黒色　10BG2/1　粘土　粘性やや弱　しまり強

0　1:100　4m

第185図　大溝実測図（５区）



基本土層
Ⅰ　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
Ⅱ-1　灰黄褐色　10YR4/2　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
Ⅱ-2　灰黄褐色　10YR5/2　砂質ロシルト　粘性なし　しまり強
酸化鉄粒多く含む
Ⅲ-1　褐色　7.5YR3/3　粘質土　粘性弱　しまり強　酸化鉄粒多く含む
Ⅲ-2　黒褐色　7.5YR3/2　粘質土　粘性弱　しまり強
Ⅳ-1　灰褐色　7.5YR4/2　粘質土　粘性強　しまり強
Ⅳ-2　黒褐色　7.5YR3/2　粘質土　粘性強　しまり強　炭化物粒少量含む
Ⅳ-3　褐褐色　7.5YR3/3　粘質土　粘性強　しまり強
Ⅴ-3　黒褐色　7.5YR3/2　砂質ロシ粘土　粘性強　しまり強
1～3mmの酸化鉄粒少量含む
Ⅵ-1　黒褐色　10YR3/2　粘土　粘性強　しまり強　軟質
酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化している
Ⅵ-2　黒褐色　10YR3/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質
部分的に酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化している
Ⅶ　灰色　N4/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質

SD0601
1　灰黄褐色　10YR4/2　砂質ロシ粘土　粘性弱　しまり強
下部に酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化した褐粒多く含む

大溝
1　黒褐色　10YR3/2　シルト　粘性なし　しまり強　3～3mm大の酸化鉄粒含む　炭化物粒少量含む
2　灰黄褐色　10YR5/2　シルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む　4～5mm大の炭化物粒多く含む
3　褐色　7.5YR4/4　砂質ロシルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒非常に多く含む
4　褐色　7.5YR4/4　褐砂ロ層土の混土　粘性強　しまり強　軟質　褐砂少混入
5　灰黄褐色　10YR5/2　粘土　粘性強　しまり強　褐砂少量含む　1mmの炭化物粒少量含む　自然木多く出土
6　灰黄褐色　10YR5/2　砂質ロ粘土　粘性強　しまり強　軟質　酸化鉄の影響により褐色10YR4/6に赤化している
7　灰黄褐色　10YR5/2　粘土　粘性強　しまり強　酸化鉄粒密状に混じる
8　灰黄褐色　10YR5/2　砂質ロ粘土　粘性弱　しまり強　軟質　6層より褐砂多く含む　酸化鉄の影響により褐色10YR4/6に赤化している
9　褐色　7.5YR4/3　粘質土　粘性弱　しまり強　褐砂少量含む　2～3mm大の酸化鉄粒少量含む
10　暗褐色　7.5YR3/3　粘質土　粘性弱　しまりやや中間　褐砂少量含む　2～3mm大の酸化鉄粒少量含む
11　暗褐色　7.5YR3/3　砂質ロ粘土　粘性弱　しまりやや強　2～3mm大の酸化鉄粒少量含む　2～3mm大の炭化物粒少量含む
12　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性強　しまり強　軟質　褐砂少量含む　一部は酸化鉄の影響により褐色10YR4/4に赤化している　2～3mm大の炭化物粒少量含む
13　灰黄褐色　10YR4/2　砂質ロシルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む
14　褐灰色　10YR4/1　砂質ロシルト　粘性なし　しまり強　酸化鉄粒多く含む　2～3mm大の黒ヘドロ砂粒含む
15　灰色　10YR4/1　砂質ロ層土　粘性なし　しまり強　1～3mm大の礫主体　最大5cmの黒ヘドロ砂粒含む
16　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強
17　灰黄褐　10YR4/2　砂質土　粘性強　しまり強　酸化鉄粒少量含む　1cm大の炭化物粒少量含む
18　褐灰色　10YR4/1　粘土　粘性弱　しまり強　軟質　酸化鉄粒多く含む
19　灰色　10YR4/1　粘土　粘性なし　しまり弱　黒褐色10YR3/1粘土、にぶい黄褐色10YR3/3粘砂が互層に混じる
20　黒褐色　7.5Y3/2　砂質ロ礫層　粘性なし　しまり強　1cm大の礫主体　最大3cm大の礫含む
21　暗青灰色　5BA/1　粘砂　粘性なし　しまり強
22　暗青灰色　5B3/1　砂質ロ礫層　4～5cm大の礫主体

第186図　大溝実測図（6区）

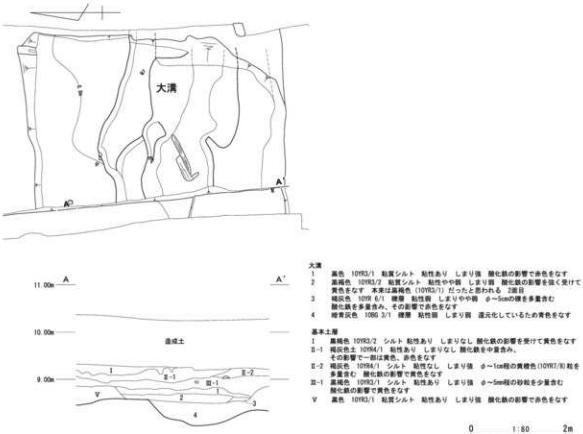
周辺地形の変化に伴って低くなる。

覆土は、いずれの地区も、下層は青灰色の礫層あるいは粗砂の堆積が見られる。上層から中層は人為的に埋めた土であると考えられ、一部酸化鉄の影響により赤化した灰黄褐色のシルト層、同色の砂混じりの粘土層が互層に堆積している。

遺物は土器、瓦、木製品が出土した。土器の内訳は、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器である。須恵器は8世紀前半代の坏蓋と坏身が主体である。各調査区で出土しているが、分布の中心は6区以西の調査区にある。土師器は10世紀前半代の高台碗と坏が主体である。6区以東の調査区で出土しており、分布の中心は9区と10区の覆土上層にある。出土状況から、須恵器が溝として機能していた時期の遺物であり、土師器は溝の埋没途中で廃棄されたものと考えられる。瓦の内訳は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦である。各調査区で出土しているが、須恵器と同様、分布の中心は6区以西の調査区にあり、特に5区で比較的多く出土している。各調査区の覆土下層からは、木片及び木製品が部分的に集中箇所を形成した状態で出土した。木簡は652～655の4点が出土した。652は10区調査区西側の最下層の覆土から出土した。654は6区覆土中位の南側壁付近で出土した。653と655は6区の覆土一括出土資料である。なお、木簡についての所見は別項で記載する。

第191図は須恵器の坏身を図示した。521～537は有高台坏身である。521～525は腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直線的に開く形状を呈する。底部の形状は、521は地に接するが、522～525は平底である。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の貼り付け高台を有している。口径は523が13㎝台、521、522、524は14㎝台である。525は口径が11㎝台で、体部の開きも直立気味である。526～528は底部が突出し、断面四角形の貼り付け高台を有している。526はにぶい灰黄褐色の胎土を有する。器面全体を回転ナデで仕上げている。527は底面に回転ヘラケズリを施している。528は底部が丸く、腰部の立ち上がりも緩やかである。器面全体を回転ナデで仕上げている。529と530はともに底部が地に接し、断面四角形の高台を貼りつけている。底面に回転ヘラケズリを施している。531は内外面とも被熱している。底部は丸く、腰部の立ち上がりも緩やかである。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の貼り付け高台を有している。532は底部が丸く、腰部に屈曲が見られる。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面三角形の貼り付け高台を有している。533～535は底面に糸切り痕が残る。533は平底で、腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直線的に立ち上がる形状を呈する。口径は11㎝台である。断面四角形の貼り付け高台を有している。底部内面に×のヘラ記号を付している。534と535の形状は533とほぼ同じと推定される。ともに断面四角形の貼り付け高台を有している。535は濃い灰色の砂質の胎土を有する。536は低い削り出し高台の有高台坏身である。にぶい灰黄褐色の胎土を有する。平底で、高台部の削り出しの部分から体部が立ち上がる。器面全体を回転ナデで仕上げている。537は口径16㎝台、器高が6.5㎝の大型の有高台坏身である。平底で、腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直立気味に立ち上がる形状を呈する。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の貼り付け高台を有している。538は8世紀後半代と推定される無高台坏身である。平底で、腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直立気味に立ち上がる形状を呈する。器面全体を回転ナデで仕上げている。

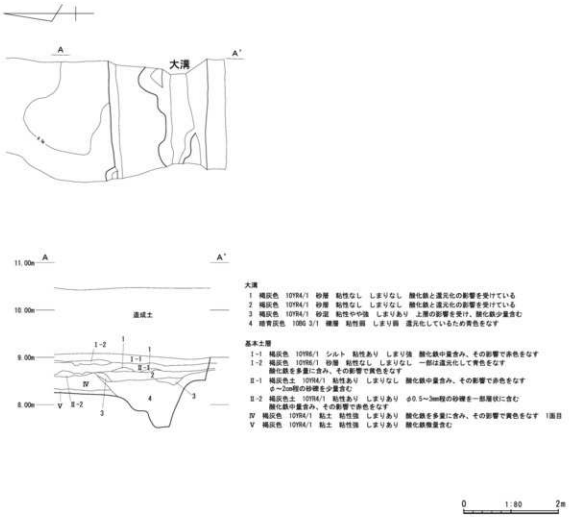
第192図は坏蓋をはじめその他の器種の須恵器を図示した。539～553は坏蓋である。いずれも天井部に摘みを有した形状と推定される。また、外面の天井部は回転ヘラケズリを施し、その他の部分は回転ナデで仕上げている。539は扁平で、天井部から受部まで丸く下がる。径は15㎝である。口縁端部を折り曲げて受部を作出している。天井部に径2㎝台の擬宝珠状の摘みを付す。540は径が18㎝台、541は20㎝台となる。541は受部付近がわずかに反る。540、541の受部の作出方法は539とほぼ同様、口縁端部を折り曲げている。542～544は受部付近が大きく反る。口縁端部は折り曲げ、折り曲げた後に強いヨコナデを施している。このため、折り曲げた部分が蓋の中に入り込む。542と543は径



第 187 図　大溝実測図（７区）

が 15 ㎝台、544 は 17 ㎝台である。542 は外面に灰が付着する。545 ～ 547 は径が 15 ㎝または 16 ㎝台で、受部付近がわずかに反る。口縁端部は折り曲げているが、折り曲げた部分のヨコナデは弱い。548 は受部を欠損する。天井部に径２㎝台の擬宝珠状の摘みを付す。外面全体に自然釉が付着している。549 ～ 552 は径が 17 ㎝から 18 ㎝台である。口縁端部の折り曲げが顕著ではなく、外面の強いヨコナデ調整で端部断面を三角形状となすよう受部を作出している。549 は天井部付近に自然釉が付着している。550 は全体的に摩滅が著しい。553 は径 14 ㎝台である。外面の強いヨコナデ調整で端部断面を三角形状となすよう受部を作出している。天井部には中央が凹む摘みを付している。554 と 555 は盤である。ともに摩滅が著しい。平底の底部に断面四角形の貼り付け高台を有している。556 と 557 は甕の口縁部である。ともに濃い灰色の砂質の胎土を有する。556 は短頸で、口縁部が直線的に開き、口縁部下に凸帯を配している。口縁端部は上下に引き伸ばして断面三角形に仕上げる。胴部はタタキ痕が見られる。557 は口縁部が直線的に開き、口縁端部は上下に引き伸ばして断面三角形に仕上げる。558 は転用硯である。大型の甕の胴部破片を転用している。摺面とした内面側に墨が付着する。外面側にはタタキ痕が確認できる。

第 193 図 559 は緑釉陶器の輪花碗である。丸く立ち上がる体部を有し、断面四角形の高台を貼り付けている。輪花の作り出し技法は指おさえである。高台の接地面を除く器面全体に緑釉を施釉している。560 ～ 565 は灰釉陶器の碗である。560 は丸く立ち上がる体部を有し、口縁部が外反する。器面全体に灰釉を施釉している。561 ～ 565 は高台部の破片である。565 を除いて、内面見込み部分は重ね焼き痕が確認できる。高台の形状は、561 ～ 563、565 が三日月高台、564 が断面三角形である。561 は糸切り痕をナデ消した外面底部に墨書を施している。562 は比較的高い高台を貼り付けている。563 は底

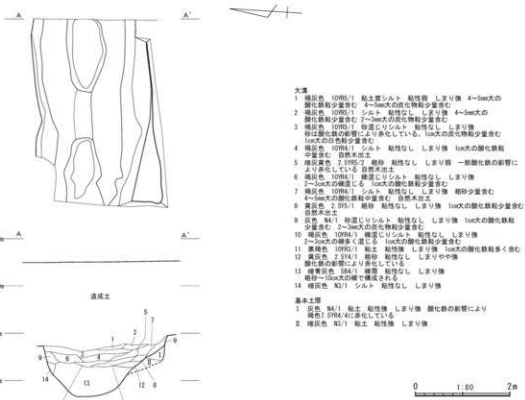


第188図　大溝実測図（8区）

面に糸切り痕が残る。564は体部側に高台を貼り付け、ナデ調整で整えている。底面に糸切り痕が残る。565は底径6㎝台である。体部側に高台を貼り付け、器面全体をナデ調整で仕上げている。

566は土師器の盤である。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の高台を貼りつけている。567～583は土師器の高台碗である。567、568、570、571、573～578の高台部はハの字状に開く。567はやや腰が張って丸みを持つ体部を有し、口縁端部は外反する。口径は15㎝台、体部の器高は5㎝台、高台部の高さは2㎝台である。568と569は高さ2.5㎝から3㎝台の高台部である。569は直立気味で、接合部に強いナデが観察できる。570と571は体部が567より扁平になる。体部は直線的に口縁まで開く。571は口縁端部が外反する。572も571と同じ形状と想定される。573と574は高さ2㎝台の高台部である。575は高台部の高さが1.5㎝台である。また、比較的深い体部を有する個体と推定される。576は573、574と同じ形状と想定される。577は、高さ2㎝台の高台部を有するが、口径が12㎝台と小さくなり、体部は直線的に口縁まで開く。578は高台部の開きが大きい個体である。579～582は高さ1㎝台、径7㎝台の高台部である。579は、比較的深い体部を有すると想定される。583は高さ1㎝台、径6㎝台の高台部である。

第194図は土師器の坏を図示した。いずれも摩滅が著しい。584はやや腰が張って立ち上がる体部を有し、底部付近に強い回転ナデを施している。底面には糸切り痕が残る。口径は12㎝台、器高は3㎝台、底部径は5㎝台である。585は584とほぼ同じ形状と想定される。586は器高が4㎝台の深い体部を有

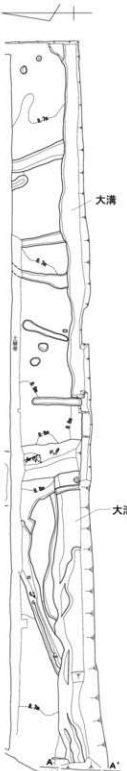


第189図　大溝実測図（9区）

する。平底で、体部は直線的に大きく開く。底部付近は584と同様、強い回転ナデを施している。587は586とほぼ同じ形状と想定される。588は口径が10㎝台、器高が2.5㎝台の個体である。やや腰が張って立ち上がる体部を有し、口縁端部は外反する。底面には糸切り痕が残る。589は588とほぼ同じ形状と想定される。590は口径が14㎝台、器高が4㎝台である。やや腰が張って立ち上がる体部を有し、口縁端部はわずかに外反する。591と592は590と同じ形状と想定される。593と594はともに口径が11㎝台、器高が3㎝台である。平底で、体部は直線的に大きく開く。595は593、594と同じ形状と想定される。596と597は、口径と器高は593、594とほぼ同じであるが、底部径が7㎝台となる。全体的に器壁が厚い。平底で、体部は直線的に開く。597は口縁端部が外反する。

第194図598・599は5区で出土した流れ込みの土器である。598は土師器の坏である。磨滅の著しい小片である。時期は7世紀代か。599は外反して大きく開く単純口縁を有した、弥生時代後期から古墳時代前期の小型壷の口縁部破片である。

第195図600と601は軒丸瓦である。600は中房から花弁にかけての瓦当の破片である。瓦当文様は平面的であり、中房の高まりはなく端部に突線を配するのみである。小破片のため花弁の文様は判然としない。601は瓦当が剥落しているが、凹凸面の補充粘土が確認できる。凸面には縦方向の削り調整が認められる。602～607は重弧文軒平瓦である。602は三重弧文軒平瓦で、顎部は貼付け段顎である。凸面には、平瓦部だけでなく顎部にも目の細かい格子目叩きが残っており、木目が浮いている点が特徴的である。603～606は剥離した顎部の破片であり、いずれも凸面に格子目叩きが残る。604はやや摩滅しており判然としないが、603と605の叩き目は602と同じ木目が浮いた格子目叩きである。606には格子線が太く、木目が見られないことから、別の叩き板が使用されている。607は顎部が剥離した瓦当部の破片である。



大溝

1　褐灰色　10YR5/1　砂層　粘性なし　しまりあり　φ～1cm程の砂礫を少量含む　酸化鉄を中量含み、その影響により赤色をなす

2　青灰色　10BG5/1　砂層　粘性なし　しまりなし　1層が還元化したもの

3　青灰色　10BG5/1　砂層　粘性なし　しまりなし　2層をベースに砂礫φ～5cm程を含む

4　暗青灰色　10BG3/1　砂層　粘性なし　しまりなし　3層をベースに粘土が混じる　酸化鉄少量含む

5　褐灰色　10YR4/1　シルト　粘性あり　しまりあり　酸化鉄中量含み、その影響により赤色をなす

6　褐灰色　10YR 4/1　砂質シルト　粘性あり　しまりあり　φ～3cm程の砂礫を上から3/2まで含む
下層は還元化している　酸化鉄が量含む

7　暗青灰色　10B6 3/1　礫層　粘性弱　しまり弱　還元化しているため青色をなす

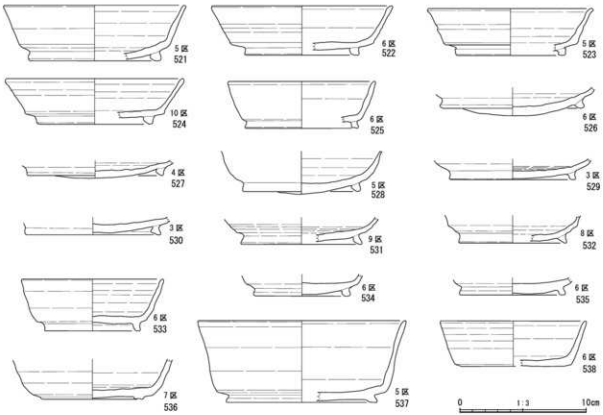
基本土層

Ⅱ　褐灰色土　10YR 4/1　粘性あり　しまり弱い　酸化鉄を中量含み、その影響により橙色をなす

0　1:200　5m

0　1:100　4m

第190図　大溝実測図（10区）



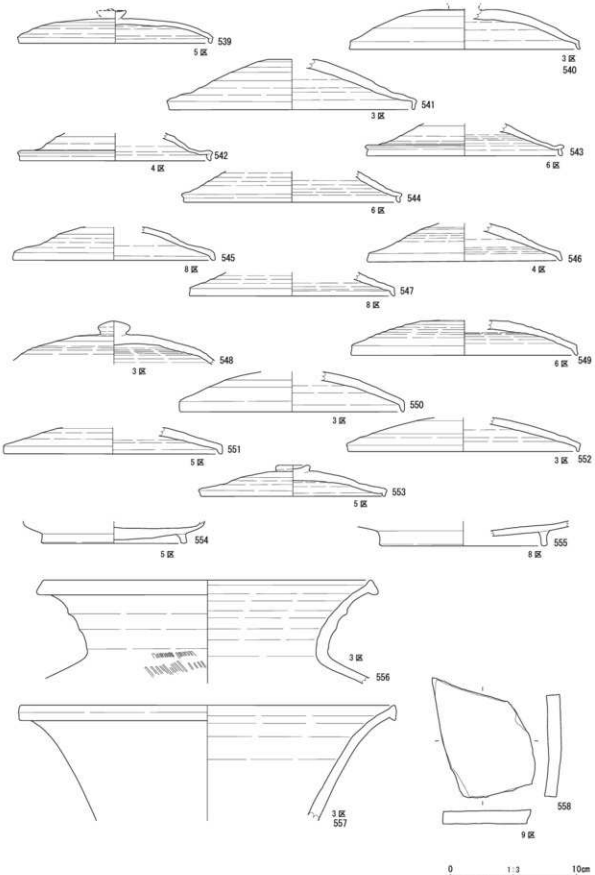
第191図　大溝出土遺物実測図1

第196図608～615は丸瓦である。608～610は無段式丸瓦の狭端部である。608と610には凹面に布綴じ痕がみられ、609には糸切痕がわずかに残る。608と610の凸面は、タテ方向の削りの後横ナデ調整されている。611は丸瓦の狭端部であるが、残存長から無段式か有段式か判別できない。612は有段式丸瓦の段部である。凸面に粘土を付加したのち整形し、段部を整形している。613～615は丸瓦の広端部である。613は凸面には全面にナデ調整が施され、凹面には布目と糸切痕が残る。614はやや表面が摩滅しているが、凸面をタテ方向の削りの後に横ナデ調整されている様子が観察できる。615の凹面には布綴じ痕と粘土の合せ目が残り、合せ目はS型である。

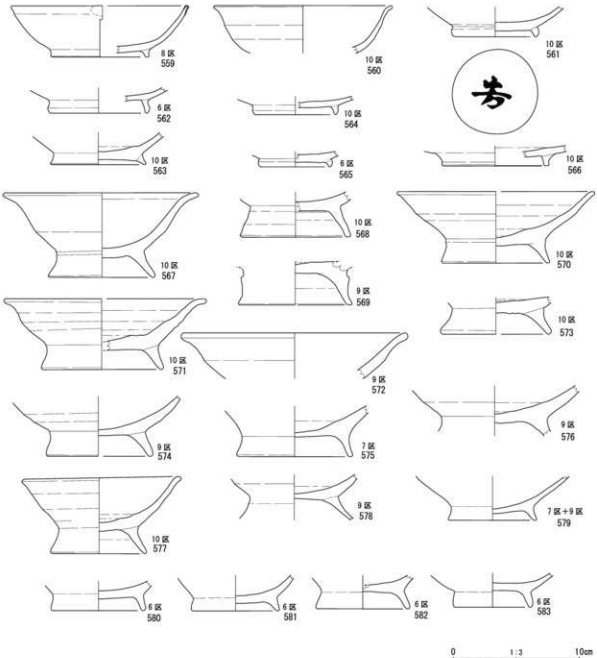
第197図616～第198図632は平瓦である。616～621は狭端部、622～629は広端部、630～632は側端部の破片である。616、617、630には、粘土板の合せ目が残り、合せ目はいずれもZ型である。619と620は凸面には格子叩き、凹面には布目痕が残る。側面は、凸面側に幅広の面取りが施されている。625には布綴じ痕が残っており、平行してまつり縫いとぐし縫いがみられる。626の表面は被熱して煤けている。627には布端が確認でき、綴じ目が開いていたためか、側端部側には布目がみられない。629の凸面は削り調整されており、叩き目が残らない。その他の凸面は格子叩きであり、叩き板の摩滅が進み木目が浮いているものと、そうでないものがみられる。側面には、凸面側に幅の広い面取りを施しており、629のみ面取りに加えて側端部と広端部に削り調整を施している。

第198図633は熨斗瓦である。凸面は格子叩きで木目が浮いている。凹面は摩滅が著しいが、わずかに布目が確認できる。側面には、凹面側から入れられた分割截面と分割破面が残る。平瓦を約9cmの幅で分割して作成している。

第199図は木製品を図示した。634は角棒状の形状を持つ。4区から出土した。全長は17.2cm、幅は1.9cmで、厚さは0.8cmである。4面とも割面で、上端部に刃物痕がある。下端部は焦げていることから、



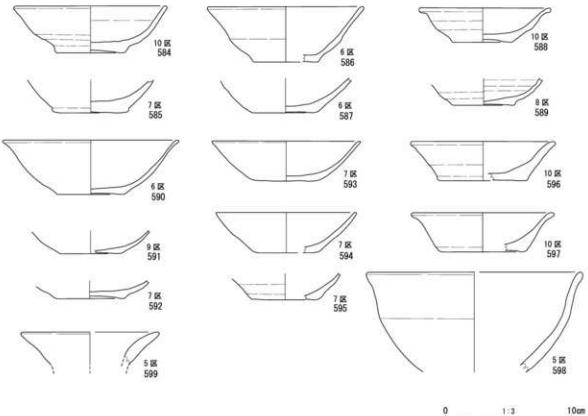
第 192 図　大溝出土遺物実測図 2



第 193 図　大溝出土遺物実測図３

ヒノキ材の燃え差し（付け木）と思われる。635 は角状に加工されている。欠損して全体形が解らないため、用途は不明である。４区より出土した。残存長は 8.9 ㎝、幅は 7.0 ㎝、厚みは 2.8 ㎝で、木目からして、スギの分割材を使用している。底部の断面形は正方形で、正面はＬ字形に段差を作り出して、全面加工をしている。上部の加工は枘孔であった可能性がある。

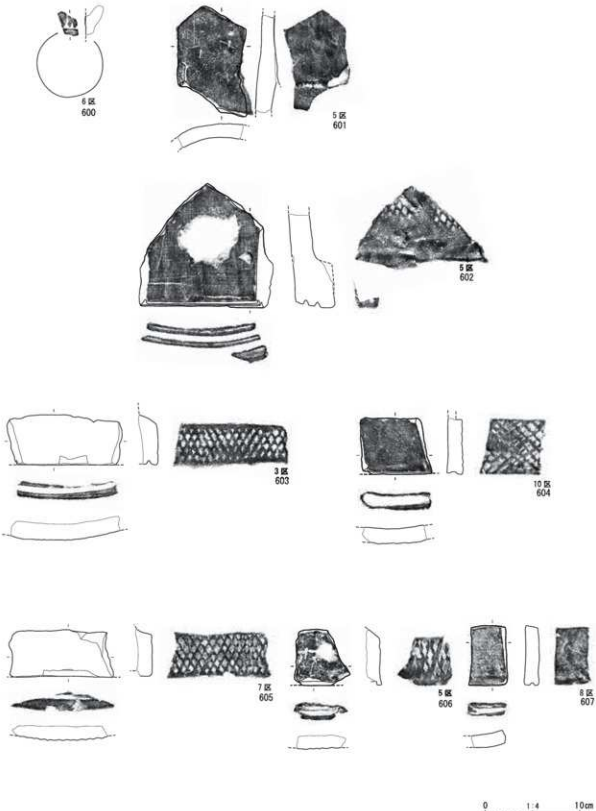
636 ～ 648 は６区から出土した木製品である。636 と 637 は容器、638 ～ 648 は燃え差し等の棒状製品である。636 と 637 は刳りもの容器の破片である。636 は容器の口縁部片で、材はトチノキを使っている。幅は 8.8 ㎝、高さは 3.7 ㎝、器厚は 1.1 ㎝である。小片のため全体の形状や大きさが復原できないが、口縁の径や全体に厚みがあることなどから、中型以上の容器と思われる。637 は円形容器の底部分である。残存長は 15.0 ㎝、幅は 5.2 ㎝、厚さは 1.1 ㎝で、口縁から体部、底部の半分強は欠損



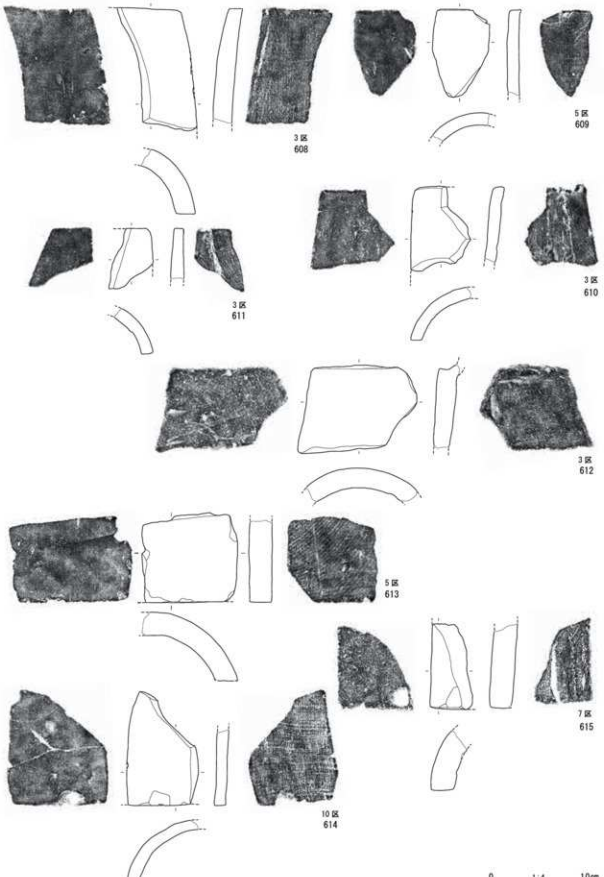
第 194 図　大溝出土遺物実測図 4

している。ヒノキ材で、木目は横木取り柾目であろう。638 ～ 648 は棒状の木片である。638 は斉串状の完形品で、長さ 12.1 ㎝、幅 1.5 ㎝、厚さは 0.35 ㎝である。トチノキの板目材で、上部はやや薄く、表は面調整され、墨痕等は認められない。裏面は面調整が不十分のため、平坦ではない。上端部は切断面、下端部は左右両側面から先端に向かって斜めに削り尖らせている。639 と 640 は燃え差しと思われ、下端部が炭化している。いずれもヒノキ材の小片である。639 は削られた面が一部残る小片で、下端部は焦げている。640 は全長 20.75 ㎝、幅は 2.2 ㎝、厚さは 0.8 ㎝で全形が残っている。上端部は刃物で切断された痕がある。641 ～ 647 はスギ材である。641 は 4 面のうち 3 面が整形されている。上部は欠損し、下端部は切断されている。放射線炭素年代測定の結果では 562-641 cal AD(95.45%) と出ている。642 は 4 つの面を持ち、上下端部に切断痕がある。643 は全長が 14.55 ㎝、幅 1.1 ㎝、厚さは 0.6 ㎝で、下方に向かって細く、箸状を呈する。644 は 4 面とも面を作り出している。上端部は切断痕があり、下端部は細く尖っている。表面には刃物痕が見える。長さは 15.2 ㎝、幅は 1.7 ㎝、厚さは 1.0 ㎝である。645 は表・裏は削られ、左右側面が割れている。上端部は欠損している。646 は 4 面のうち 3 面に面を削った痕がある。647 も右側面のみ割れているが 3 面は丁寧に削られている。下端部は欠損している。648 はヒノキ材で、4 面を持つ。表・裏は面として削り、左右側面は割面のままである。

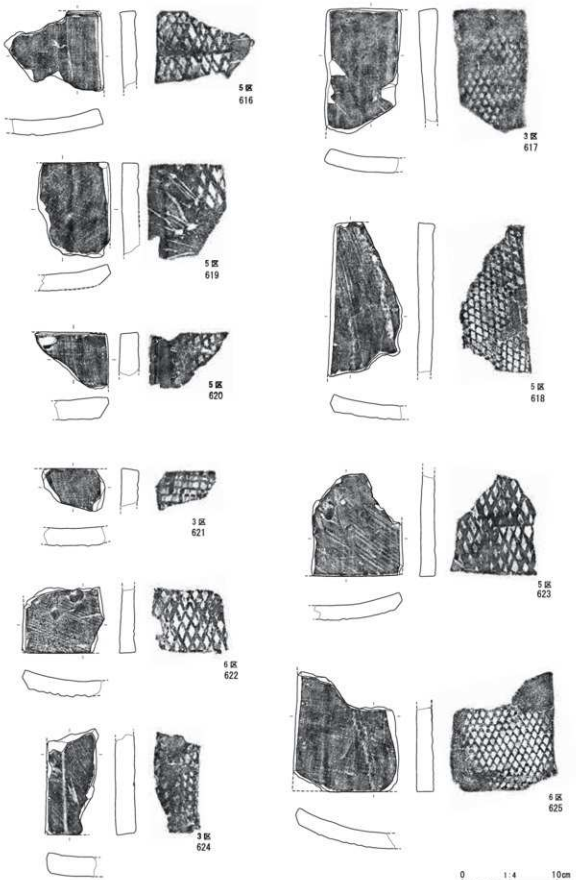
649 ～ 651 は 10 区から出土した。649 はスギの板目材で、全面、板状に整形されている。上端部は欠損し、下端部は先端を尖らせた加工がある。長さは 20.5 ㎝、幅は 2.6 ㎝、厚さは 0.65 ㎝である。形状は木簡や斉串のようだが、墨書は見られない。650 は細い棒状で、下端部に焦げがあることから、燃え差しであろう。651 は用途不明木製品である。スギの柾目材で、コの字形に整形され、側面から見ると台形状を呈する。全面に加工されているが、特に表・裏面に刃物痕が顕著に見える。長さは 13.5 ㎝、



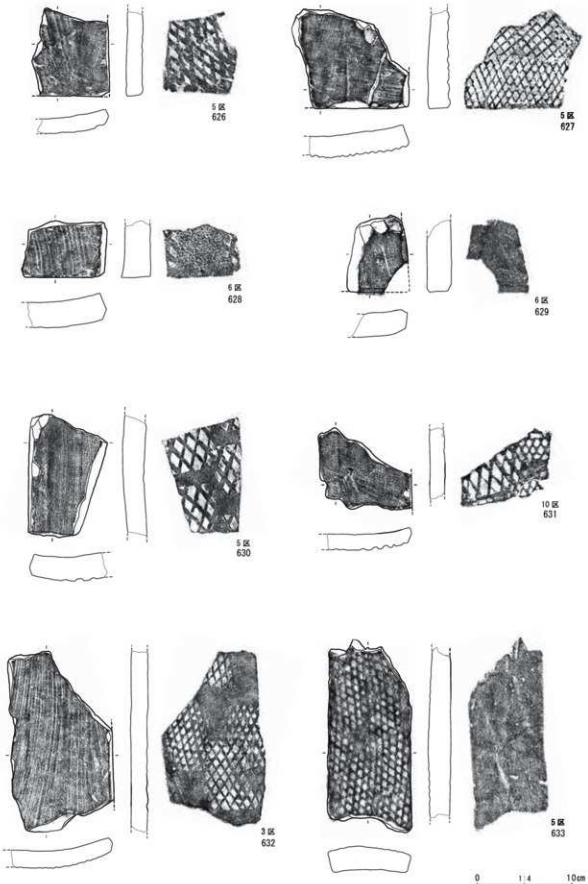
第 195 図　大溝出土遺物実測図 5



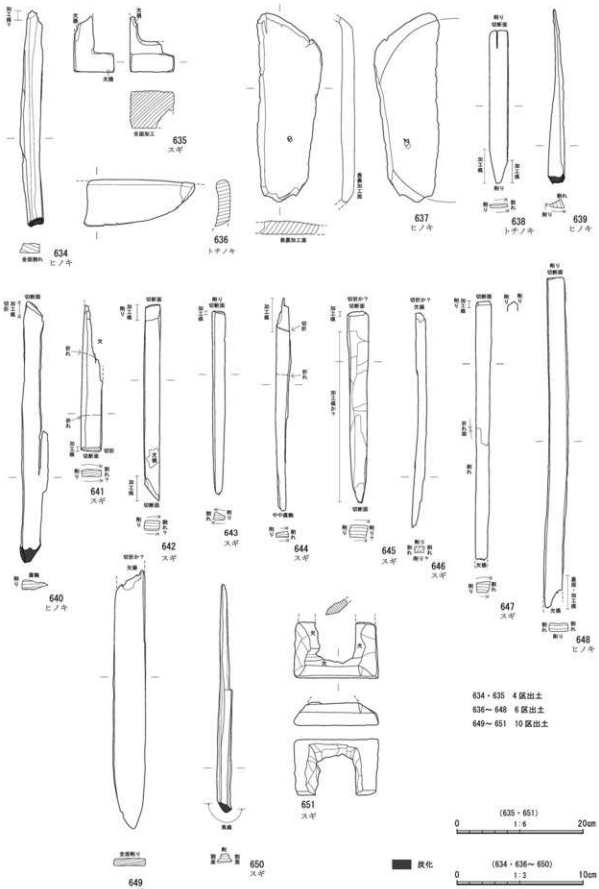
第196図　大溝出土遺物実測図6



第197図　大溝出土遺物実測図7



第 198 図　大溝出土遺物実測図 8



第199図　大溝出土遺物実測図9

幅は8.8㎝、高さは3.5㎝である。

遺構の年代は、出土した須恵器の時代から判断して、8世紀前半に位置付けられる。

24　木簡（第200図　図版31～33）

本遺跡では5点の木簡が出土した。本文中の木簡の釈文及び内容についての記載は、652は『木簡研究』第40号「2017年出土の木簡」、653～656は『木簡研究』第41号「2018年出土の木簡」の項に先行して掲載した報文による。

木簡の釈読にあたっては、奈良文化財研究所史料研究室の方々の御教示をいただいた。

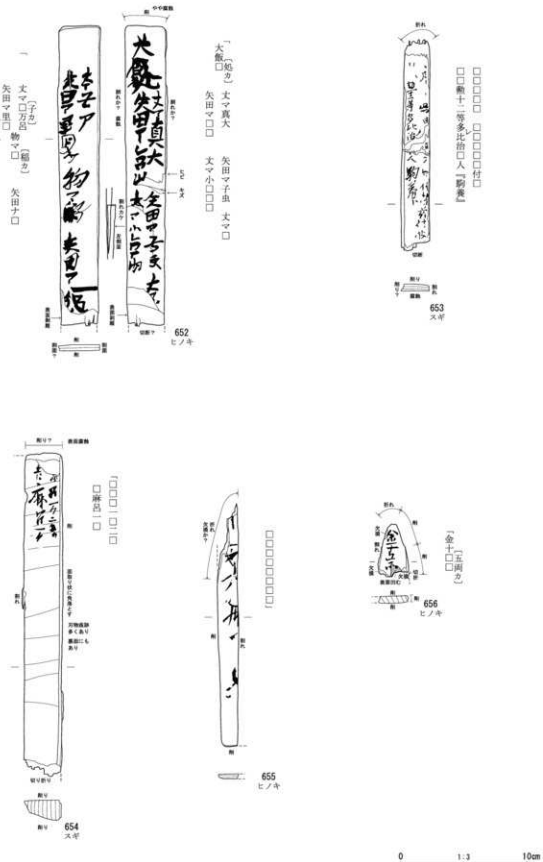
652は10区の大溝から出土した。ヒノキの板目材を用いている。長さは23.8㎝、幅は3.3㎝、厚さは0.5㎝である。長方形を呈し、全体の厚みは同じである。表・裏面は平坦に削られ、左右側面は一部、面加工されているが割面部分が残っている。上端部は面を削り出し、下端部は切断されたようである。表面上部には削り痕が見える。中央部分には傷やヒビが入り、左側は割れて欠けている。墨書は表裏両面にあり、鮮明に残っている。表面の「大飯」は「大殿」ではとの指摘もあったが、これに続く「矢田マ」との間の字は「処」とも読め、「殿」の偏付近が「飯の旧字体「飯」の部首「𩚬」偏と解される。木簡表面には「丈部」「矢田部」、裏面には「丈部」「矢田部」「物部」などのウジ名を持つ計9人の名が見られる。裏面の「矢田部里男」の「男」は字形が大きく崩れている。

653～655は6区の大溝から出土した。653はスギの板目材を用いている。長さ16.7㎝、幅2.0㎝、厚さは0.6㎝で、上部は折れ、下端部は切断されたような痕がある。全体に腐食しており、厚みは中央より上は薄く、下方に向かって、やや厚みを増していく。墨書面側は表面を削り、中央より下半部は削り痕があり、平坦面としている。裏面は腐食しているが、面調整された痕はなく、左右の面も割面である。墨書は表面の全体に見える。右行の墨書は薄い。「駒養」は、他の文字に比べて大きく、筆跡が異なっており、自署と推定される。右行二文字目は「月」とも考えられるが、行全体の軸を考慮すると偏（肉月）である可能性が高いか。

654は厚みのあるスギの柾目材を用いている。器面全体の厚みは変わらない。木目は0.1～0.2㎝程と幅広い。長さは25.7㎝、幅は3.0㎝、厚さは1.6㎝である。左側面は欠損し、下端部も刃物で切り込まれた後に折られている。表・裏面とも面を平坦に削り、刃物痕が多く見える。右側面は面取り状に角を落としている。墨書は上部に集中し、左行二文字目から四文字目に「麻呂一」、右行三文字目に「一」、同五文字目に「二」の文字が見える。

655はヒノキの板目材を用いている。全体に木表側に膨らんで湾曲している。表・裏面とも面を平坦に削っている。上部と右側が欠損しているが、左側面と下端部面は削られた面となっている。残存長は19.3㎝、幅は1.6㎝、厚さは0.4㎝である。墨書は表面の複数箇所に文字の痕跡がある。墨痕が薄く、肉眼ではほとんど文字が確認できない。

656は13区NR1301上層から出土した。ヒノキの追い柾目材で、表・裏面は丁寧に削られている。左側と下方は欠損している。右側面は刃物により削られている。表面の一文字目と二文字目に「金十」の墨書が見え、比較的明瞭に残る。



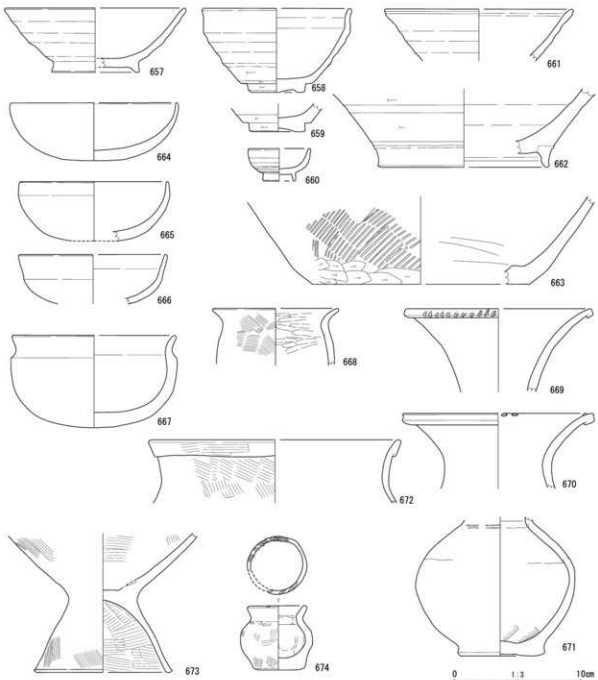
第 200 図　木簡実測図

第5節　包含層出土の遺物

1　土器・土製品

1区包含層

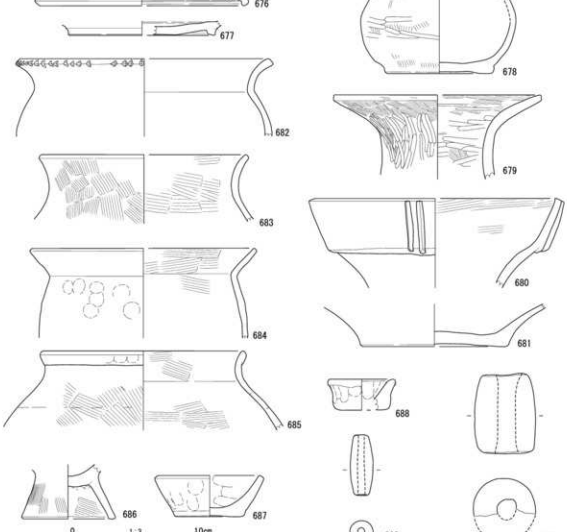
第201図657は10世紀代の土師器の高台碗である。やや腰が張って丸みを持つ体部を有する。断面三角形の高台を貼り付けている。



第201図　1・2区包含層出土土器実測図

2区包含層

第201図658は瀬戸美濃産、659は志都呂産の天目茶碗である。658は削り出し高台を有し、鉄釉を施釉している。659はにぶい赤褐色の露胎を有する。削り出し高台を有し、内面に鉄釉の施釉が確認できる。660は志野の餌皿である。外面に長石釉を施釉している。661は山茶碗の碗である。体部が直線的に開く。662は渥美産の高台付の鉢である。底部付近は横方向のケズリを施している。663は常滑産の壺である。大型品で、外面はタタキ調整で仕上げた後、底部付近にケズリを施している。665～668は7世紀から8世紀前半代の土師器である。664～666は坏である。664は扁平で、底部から体部にかけて丸みを持つ。665は664に比しては体部が深く、底部から体部にかけて丸みを持つ。口縁部はヨコナデで直立させている。666は丸底で、口縁部が上方へ直線的に立ち上がる。667は鉢である。体部が深く、底部から体部にかけて丸みを持つ。口縁部は強いヨコナデで端部を外反させている。668は小型



第202図　3区包含層出土土器・土製品実測図

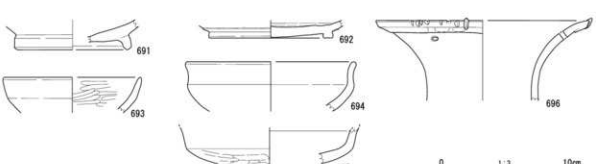
甕である。赤褐色の微細な白色粒子や小礫を多く含む胎土を有する。内面はヘラミガキ状のナデ調整である。669～674は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。669と670は折返し口縁壷である。ともに口縁部は外反して開く。669は頸部がやや細長い。670は頸部が短く太い。671は壷の胴部である。胴中位に最大径を有する丸い胴部である。672は折返し口縁を持つ甕である。頸部が長く、緩やかに屈曲し、口縁部はわずかに外反して開く。673は台付甕の脚部である。脚部の開きは直線的である。674はミニチュアの壺である。平底で、底部径が大きく、胴中位に最大径を有する。頸部内面はナデで直立させ、口縁部は短く、直線的に開く。口縁端部には面に対して垂直に刻みを施す。

3区包含層

第202図675～677は8世紀前半代の須恵器である。675と676は坏蓋である。いずれも天井部に摘みを有した形態のものと考えられる。675は口縁端部を折り曲げて受部を作出している。676は外面の強いヨコナデ調整で端部断面を三角形状となすよう受部を作出している。677は有高台坏身である。底面が突出している。器面全体を回転ナデで仕上げ、低い断面四角形の貼り付け高台を有する。678～688は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。678は小型壷である。底部が大きく、胴下部に最大径を有し、肩部はなだらかである。頸部に屈曲が見られ、口縁部は直線的に開いた後、稜を有して直線的に立ち上げる。679は単純口縁壷である。頸部がやや長く、口縁部は大きく外反して開く。680は複合口縁壷である。複合部内面の屈曲は緩やかである。681は壷の底部である。682～685は甕の口縁部である。682は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部が外反気味に開き、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。683は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部は外反して開く。684は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部は直線的に開く。685は折返し口縁を有する。胴部が張り、頸部が緩やかに屈曲し、口縁部はわずかに開く。686は台付甕の脚部である。低脚で、開きは直線的である。687は小型の鉢である。体部の開きは直線的である。688は手づくねのミニチュアの鉢である。689と690は土師質の土錘である。689は紡錘形で、ほぼ完形である。690は円筒形の管状土錘で、半分を欠損している。

4区包含層

第203図691は灰釉陶器の碗の高台部である。底面に糸切り痕が残る。692は8世紀前半代の須恵器の有高台坏身である。底面は回転ヘラケズリを施し、低い断面四角形の貼り付け高台を有する。693～695は7世紀から8世紀前半代の土師器の坏である。693は体部の中位で屈曲し、口縁部が外傾して立ち上がる。694と695は須恵器坏蓋模倣の坏と考えられる。ともに内外面に朱塗の痕跡が残る。694は口縁部が上方へ立ち上がり、端部が外反する。696は弥生時代後期後半から古墳時代前期の折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開き、口縁端部に刻みと棒状浮文を施している。

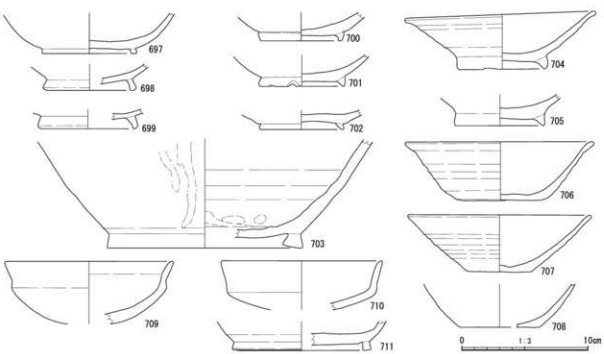


第203図　4区包含層出土土器実測図

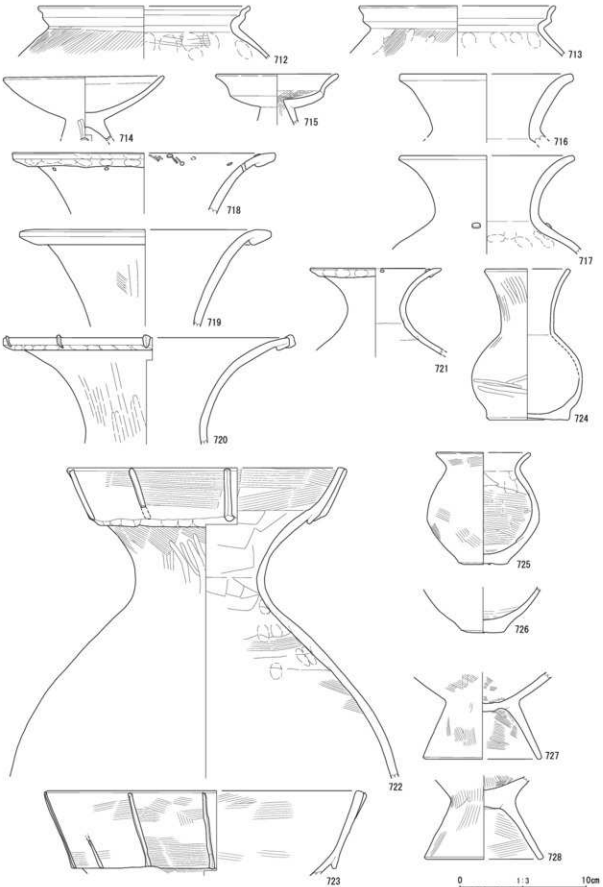
5区包含層

第204図に図示した土器は主に第1面検出時に出土した。697～701は灰釉陶器の碗である。697は丸い体部を有し、低い断面四角形の高台を貼り付けている。底面中央に回転ヘラケズリの痕跡が残る。内面全体に淡緑色の釉が厚く施されている。698と699は断面四角形の高台を貼り付けている。700は底面に回転糸切り痕が残り、断面三角形の高台を貼り付けている。701は底面に回転糸切り痕が残り、体部側に断面三角形の高台を貼り付けている。高台の底には指頭圧痕が残る。内面には重ね焼きの痕跡が見られる。702は山茶碗の碗である。底面に回転糸切り痕が残り、低い断面三角形の高台を貼り付けている。703は灰釉陶器の壷の底部である。大型品で、断面四角形の高台を貼り付けている。704と705は土師器の高台碗である。ともに高さ1cm台の断面三角形の高台を貼り付けている。704は腰が張らず、口縁部まで直線的に開く体部を有する。706～708は土師器の坏である。いずれも無高台で、平底を有し、体部は直線的に開く。706は底部径が7cm台をはかり、回転糸切り痕が残る。707は口径と器高は706とほぼ同じだが、底部径が5cmとなるため、体部の開きが大きくなる。704～708の時期は10世紀代と想定される。709と710は7世紀から8世紀前半代の土師器の坏である。ともに須恵器坏蓋模倣の坏で、709は体部から口縁部がS字状に屈曲する。710は口縁部が上方へ直線的に立ち上がる。711は8世紀前半代の須恵器の有高台坏身である。底部は回転ヘラケズリをナデ消し、体部の立ち上がりの位置に断面四角形の貼り付け高台を有する。

第205図に図示した土器は主に第2面検出時に出土した。712～718は古墳時代前期に位置付けられ、719～728は古墳時代前期を含め、弥生時代後期後半まで下ると考えられる。712と713はS字状口縁台付甕の口縁部である。ともに在地の赤褐色の胎土を有する。712は頸部から口縁部下段が肥厚し、上段は外反して伸びる。713は口縁部上段が長く伸びる。714は高坏の坏部である。浅い皿状の坏部を有する。715は小型器台である。受部の中位に稜を有し、口縁部は大きく外反して開く。716と717は単純口縁壷である。ともに頸部が短く、716は内面に稜を有して屈曲する。口縁部は外反して開く。718～721は折返し口縁壷である。いずれも口縁部は大きく外反して開く。718は大廓式の白色粒子を多く含んだ橙色の胎土を有する。口縁部内面にＲＬの縄文を施文している。721は頸部がやや短い個体であ



第204図　5区包含層出土土器実測図1

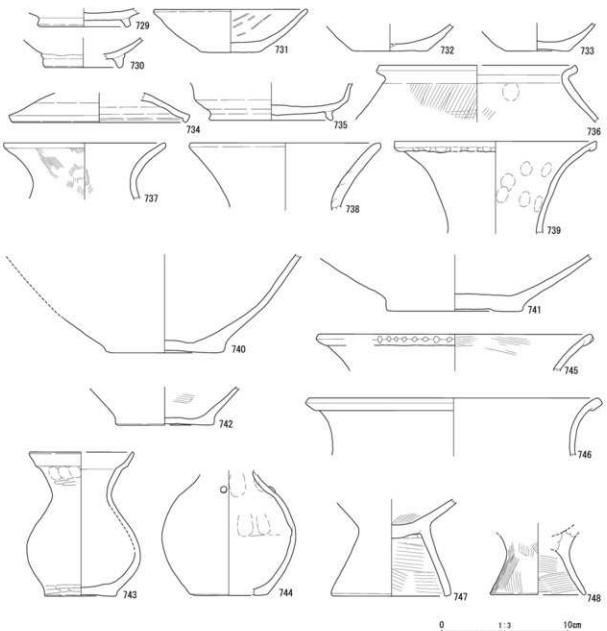


第 205 図　5 区包含層出土土器実測図 2

る。722 と 723 は複合口縁壷である。ともに複合部内面の屈曲は緩やかである。722 は胴上部まで残存する。胴下部に最大径を有し、肩部はなだらかで、頸部がやや短い。724 は単純口縁の小型壷である。底部が大きく、丸い胴部を有し、頸部が長く、口縁部はわずかに外反して開く。725 は平底甕の形状を呈する小型壷である。胴中位に最大径を有し、肩部はなだらかである。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外傾して開く。726 は小型壺の底部である。727 と 728 は台付甕の脚部である。いずれも低脚で、裾部への開きは直線的である。

6区包含層

第 206 図 729 と 730 は灰釉陶器の碗である。729 は底部が平坦で、重ね焼きの痕跡が確認できる。断面四角形の高台を貼り付けている。底面には糸切り痕が残る。730 は底部が丸く、断面三角形の高台を貼り付けている。731 ～ 733 は土師器の無高台坏である。731 は体部が直線的に大きく開く。底部には



第 206 図　6区包含層出土土器実測図

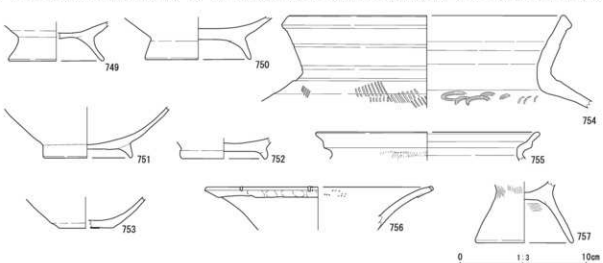
糸切り痕が残る。729 ～ 733 の時期はいずれも平安期に位置付けられる。734 と 735 は 8 世紀前半代の須恵器である。734 は坏蓋である。天井部に摘みを有する形態のものと考えられる。口縁端部を折り曲げて受部を作出している。735 は有高台坏身である。腰部に屈曲が見られる。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の高台を貼り付けている。736 は胎土及び器壁の厚さが在地の S 字状口縁台付甕と同じ特徴を有する甕の小片である。肩部にわずかにヨコハケが確認できる。口縁部の上段を設けず、中段にわずかな立ち上がりを残した形態の S 字状口縁台付甕と判断した。古墳時代前期に位置付けられる。737 ～ 748 は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。737 と 738 は単純口縁壷である。737 は頸部が短く、口縁部は大きく外反して開く。738 は口縁部が外反して開く。739 は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。740 ～ 742 は壷の底部である。743 と 744 は小型壷である。743 は胴下部に最大径を有し、肩部はなだらかで、頸部が太い。口縁部は外傾して開き、強いナデで複合口縁状の段を付けている。744 は丸い胴部が残存する。頸部の細い個体で、肩部に円形浮文が施される。745 と 746 は折返し口縁を有する甕である。745 は口縁部が外傾して開き、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。746 は頸部が長く、口縁部は外反して開く。747 と 748 は台付甕の脚部である。ともに裾部への開きは直線的である。748 は小型の個体である。

7区包含層

第 207 図 749 ～ 752 は土師器の高台碗である。749 と 750 はハの字状に開く高い高台を有する。751 と 752 は断面三角形の高台を貼り付けている。751 は丸みを持つ体部を有する。753 は土師器の坏の底部である。749 ～ 753 の時期は 10 世紀代と想定される。754 は須恵器の甕である。大型品で、口縁部は短く外傾する。胴部外面はタタキ、内面は同心円状の当て具の痕跡が残る。時期は 8 世紀前半か。755 は S 字状口縁台付甕の口縁部である。在地の赤褐色の胎土を有する。全体的に口縁部が肥厚し、口縁部上段が外側に伸びる。古墳時代前期に位置付けられる。756 と 757 は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。756 は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。757 は台付甕の脚部である。裾部への開きは直線的である。

8区包含層

第 208 図 758 と 759 は土師器の高台碗である。758 は断面四角形の高台を貼り付けている。759 は低い断面三角形の高台を貼り付けている。760 は小片のため器種の特定は難しいが、土師器の坏としてお

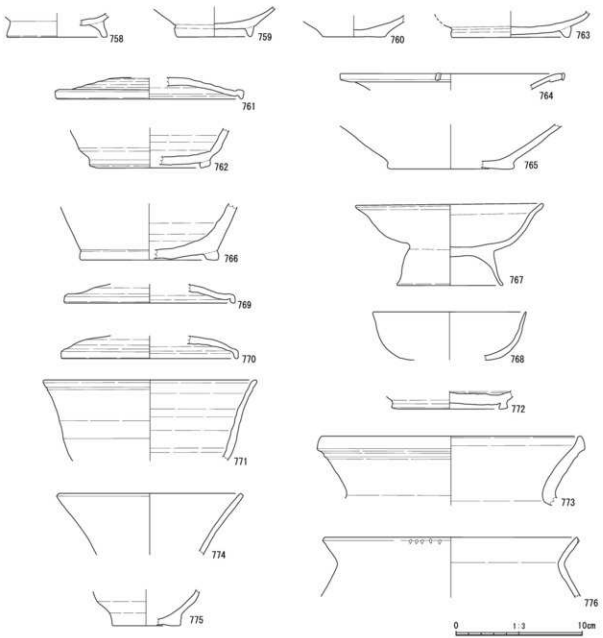


第 207 図　7区包含層出土土器実測図

く。758 ～ 760 の時期は 10 世紀代と想定される。761 ～ 763 は 8 世紀前半代の須恵器である。761 は坏蓋である。内面に自然釉が付着する。扁平で、天井部に摘みを有する形態のものと考えられる。受部付近が大きく反り、口縁端部を折り曲げて受部を作出している。762 と 763 は有高台坏身である。762 は淡い灰白色の胎土を有したやや軟質の個体である。腰部が屈曲して立ち上がり、断面四角形の低い貼り付け高台を有する。763 は外面が被熱し、煤が付着している、底面に回転ヘラケズリを施し、断面四角形の貼り付け高台を有する。764 と 765 は弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。764 は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開き、口縁端部に棒状浮文を貼り付けている。765 は壷の底部である。

10 区包含層

第 208 図 766 は灰釉陶器の瓶である。内面の底部に自然釉が付着している。断面四角形の高台を貼

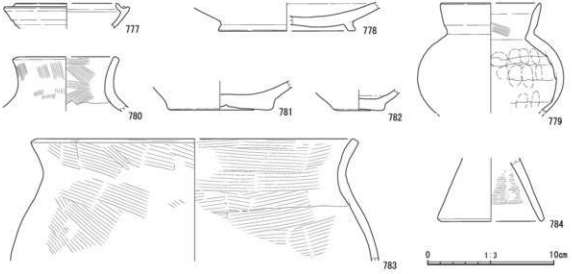


第 208 図　8・10 区包含層出土土器実測図

り付けている。767 は土師器の高台碗である。高台と体部の高さがほぼ同じで、各々 3 cm 台をはかる。腰が張って丸みを持つ体部を有し、口縁端部は外反する。高台はハの字状に開く。時期はともに平安期に位置付けられる。768 は 7 世紀から 8 世紀前半の土師器の坏である。底部から体部にかけて丸みを持つ。口縁部は強いヨコナデで端部を尖らせる。769 ～ 773 は 8 世紀前半の須恵器である。769 と 770 は坏蓋である。ともに扁平で、天井部に摘みを有する形態のものと考えられる。口縁端部を折り曲げて受部を作出している。769 は口縁部付近が大きく反る。770 は外面に自然釉が付着し、天井部から口縁部まで丸く下がる。外面の口縁端部直下に沈線を施している。771 は坏身である。深い箱型の器形を呈するものと想定される。下部に回転ヘラケズリが確認できる。772 は有高台坏身である。表面が灰色、断面が灰赤褐色の精緻な胎土を有する。底面には糸切り痕が残り、断面四角形の貼り付け高台を有する。773 は壷の口縁部である。口縁部が短く外傾する。外面の口縁端部直下に沈線を 2 条施している。口縁端部は先端が尖るように仕上げている。774 ～ 776 は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。774 は単純口縁壷である。口縁部は外傾して開く。775 は小型壷の底部である。776 は甕の口縁部である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に開き、口縁端部は面取り後、下端に浅い刻みを施す。

11 区包含層

第 209 図 777 と 778 は須恵器である。777 は 7 世紀後半代の合子状坏身である。表面が灰色、断面が灰赤褐色の精緻な胎土を有する。内径 8.2cm と小型で、立ち上がりが内傾する形状を呈する。778 は 8 世紀前半代の有高台坏身である。にぶい灰黄褐色の胎土を有し、外面は被熱している。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の貼り付け高台を有している。高台の接地面にはスノコ痕が残る。779 は小型丸底土器である。胴部は丸く、頸部内面に稜を有して屈曲し、口縁部が短く直立する。外面頸部が屈曲する位置に強いヨコナデを施している。口縁端部は丸く収めている。779 の時期は古墳時代中期になる可能性がある。780 ～ 784 は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。780 は単純口縁壷である。頸部が太くて短く、口縁部はわずかに外反して開く。781 は壷の底部である。782 は小型壷の底部である。783 は甕の口縁部である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反して開く。784 は台付甕の



第 209 図　11 区包含層出土土器実測図

脚部である。

12 区包含層

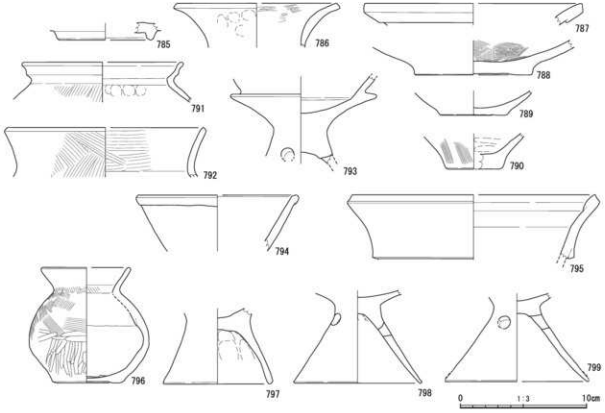
第 210 図 785 は 8 世紀前半代の須恵器の有高台坏身である。器面全体を回転ナデで仕上げ、断面四角形の貼り付け高台を有している。786 ～ 792 のうち、791 と 792 は古墳時代前期、それ以外は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。786 は単純口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。787 は折返し口縁壷である。口縁部は大きく外反して開く。788 と 789 は壷の底部である。790 は小型壷の底部である。791 は S 字状口縁台付甕の口縁部である。在地の赤褐色の胎土を有する。口縁部上段が長く伸びる。792 は甕の口縁部である。口縁部の開きは小さく、直線的に開く。793 は高坏の受部である。稜の部分に断面三角形の突出部を作出している。

13 区包含層

第 210 図 794 ～ 799 は古墳時代前期の土器である。794 は折返し口縁壷である。口縁部は直線的に大きく開く。795 は複合口縁壷である。口縁端部の粘土帯は内面を肥厚させている。複合部内面の屈曲が明瞭ではなく、頸部から一体化して斜めに延びている個体と想定される。796 は平底甕の形状を有する小型壷である。胴中位に最大径を有し、肩部はなだらかである。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は外傾して開く。797 は台付甕の脚部である。798 と 799 は高坏の脚部である。ともに裾部は直線的に大きく開く。

14・15 区包含層

第 211 図 800 は灰釉陶器の碗である。体部は直線的に大きく開き、口縁端部が外反する。内面全体を施釉している。801 は山茶碗の碗の底部である。焼成不良の個体である。体部は丸く、低い断面三角形

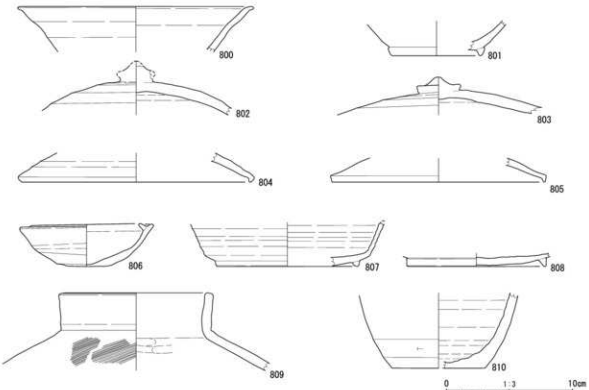


第 210 図　12・13 区包含層出土土器実測図

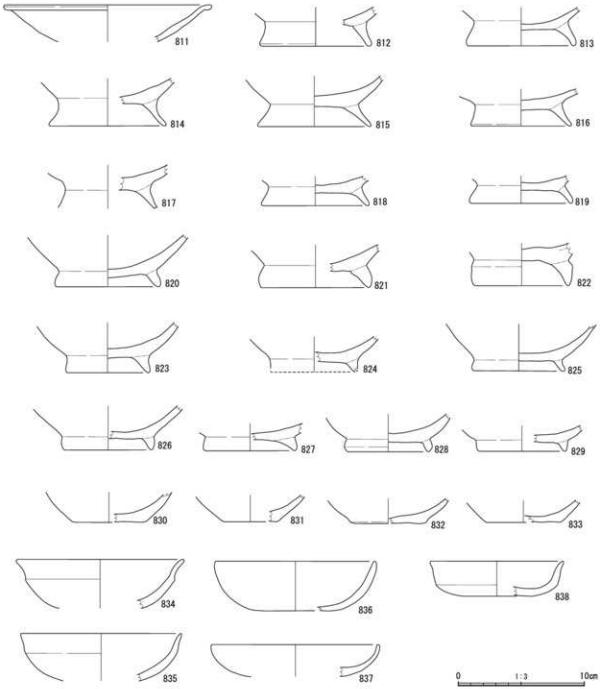
の高台を貼り付けている。806は7世紀後半代、802～805、807～810は8世紀前半代の須恵器である。802～805は坏蓋である。802と803は擬宝珠状の摘みが残存する。802は摘み、体部とも比較的高さを持つ。803はにぶい橙色の胎土を有し、摘み、体部とも扁平な個体である。摘みの径は3.5cmをはかる。804と805は口縁端部の折り曲げが顕著ではなく、外面の強いヨコナデ調整で端部断面を三角形状となすよう受部を作出している。805は外面に自然釉が付着する。806は合子状坏身である。破損のない完形品である。内径8cm台と小型で、立ち上がりが内傾する形状を呈する。底部には同心円状のヘラケズリが確認できる。807と808は有高台坏身である。807は平底で、腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直線的に開く形状を呈する。器面全体を回転ナデで仕上げ、低い断面四角形の貼り付け高台を有する。808は底面に回転ヘラケズリを施し、断面三角形の貼り付け高台を有する。809は壺の口縁部である。胴部に自然釉が付着する。胴部外面にタタキ調整を施している。口縁部は短く、直立して立ち上がる。810は無高台の瓶の底部である。底面と胴下部に回転ヘラケズリが確認できる。

第212図は土師器を図示した。811は高台碗の口縁部である。体部は直線的に大きく開き、口縁端部が外反する。812～829は高台碗の高台部である。812～820はハの字状に開く高台で、高さは1.5cmから2cmをはかる。821と822は全体的に器壁の厚い個体である。高さ1.5cm台の外側に膨らみを持つ厚い高台を貼り付けている。823～829は高さ1cm台の断面三角形の高台を貼り付けている。830～833は土師器の坏である。811～833の時期は10世紀代と想定される。834～837は7世紀から8世紀前半代の坏である。834は須恵器坏蓋模倣の坏と考えられ、体部から口縁部がS字状に屈曲する。835は底部が丸く、口縁部はヨコナデが強く、明瞭な段を有する。836と837は底部から体部にかけて丸みを持つ。838は底部が広く平坦で、体部は下部に稜を有して屈曲し、直線的に立ち上がる。口縁端部はヨコナデでわずかに外反している。

第213図839と840はS字状口縁台付甕の口縁部である。ともに在地の赤褐色の胎土を有し、口縁部上段が長く延びる。839の肩部にはタテハケに加えてヨコハケも確認できる。841は高坏の底部である。

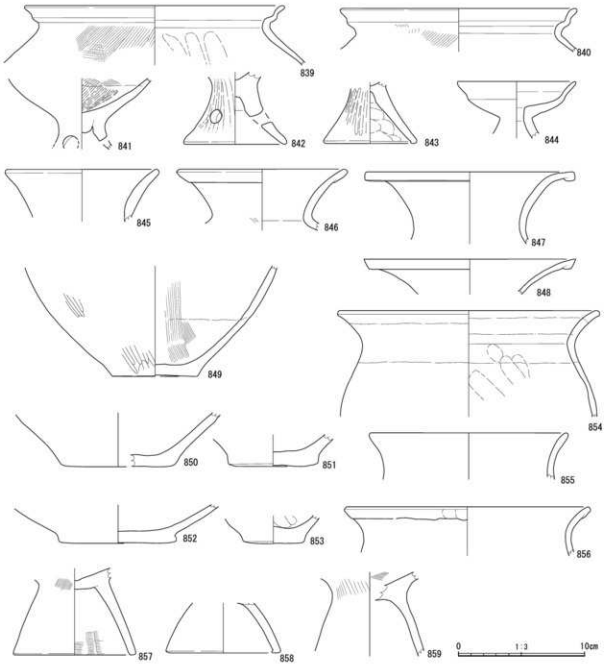


第211図　14・15区包含層出土土器実測図1



第 212 図　14・15 区包含層出土土器実測図 2

丸い坏部を有すると想定され、底部は粘土を充填させている。842 と 843 は高坏の脚部である。844 は小型器台の受部である。受部の中位に稜を有し、口縁部は大きく外反して開く。845 は単純口縁壷である。頸部が短く、口縁部は直線的に開く。846 ～ 848 は折返し口縁壷である。846 は頸部が短く、屈曲が見られる。口縁部は外反して開く。847 と 848 は口縁部が大きく外反して開く。849 ～ 852 は壷の底部である。853 は小型壺の底部である。854 と 855 は甕の口縁部である。854 は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部が外反して開く。855 は口縁部がわずかに外反して開く。856 は折返し口縁を有する甕である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反して開く。857 ～ 859 は台付甕の脚部である。857 と 859 は裾部が直線的に開く。858 は裾部の開きが大きい個体である。839 ～ 859 の時期は、839 ～ 847、859 は古墳時代

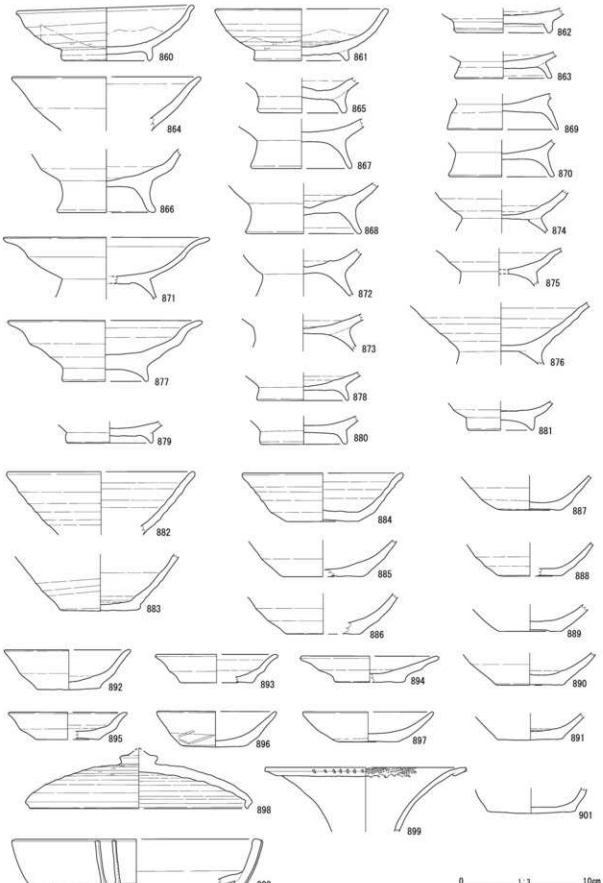


第 213 図　14・15 区包含層出土土器実測図 3

前期、848 ～ 858 は古墳時代前期を含め、弥生時代後期まで下がる可能性がある。

16 区包含層

第 214 図 860 ～ 863 は灰釉陶器の碗である。860 と 861 はともに丸く立ち上がる体部を有する。底部には糸切り痕が残り、断面四角形の高台を貼り付けている。体部の高台部付近は回転ヘラケズリを施している。体部は灰釉を漬け掛けで施釉している。860 は高台の接地面に籾痕と重ね焼き痕が残る。内面にも重ね焼き痕が残る。ともに折戸 53 号窯式期のものと考えられる。862 は底面に回転ヘラケズリを施し、断面四角形の高台を貼り付けている。863 は底面に糸切り痕が残り、比較的高さのある断面四角形の高台を貼り付けている。高台はハの字状に開く形状を呈する。865 ～ 881 は土師器の高台碗である。



第 214 図　16 区包含層出土土器実測図

864は口縁部である。体部は直線的に開く。864～875は高さ1.5cmから2cm台のハの字状に開く高台を有するか、有すると想定される。865は底面に糸切り痕が残る。866は腰部に張りが見られ、深い体部を有すると想定される。871は全体的に扁平で、底部は丸く、中央から口縁部にかけて大きく外反する体部を有する。876は直線的に立ち上がる比較的深い体部を有すると想定される。877～881は低い断面三角形の高台を有する。877は体部が直線的に開き、中位に稜を有し、口縁部にかけて大きく外反する。底面に糸切り痕が残る。

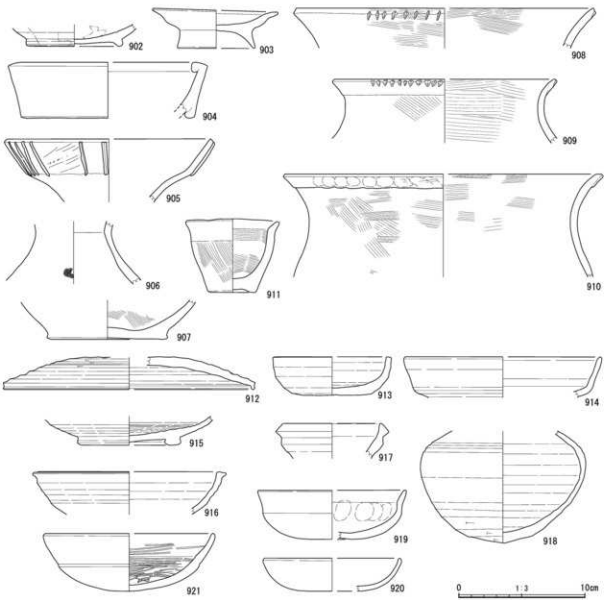
882～897は土師器の坏または皿である。時期は10世紀代と想定される。882は883と同一個体と想定される口縁部である。復原径が14.8cmである。884は口径12.8cm、器高3.85cm、底部径5.8cmである。扁平な底部を有し、体部は直線的に開く。底面に糸切り痕が残る。885～891は884と同形態と想定される坏の底部である。886、889、891の底面には糸切り痕が残る。892は口径10cm、器高3.15cm、底部径5cmと小型のもので、底面に糸切り痕が残る。893～895、897は皿である。893～895は体部中位に強い回転ナデによりできた稜を有する。894は口径が11cmで、体部が直線的に開く。893と895はともに口径9cm台をはかり、口縁端部が外反する。896は器高が2.8cmの坏であり、体部が直線的に開く。897は体部が底部からわずかに丸みを持って開く。898は8世紀前半代の須恵器の坏蓋である。径3.1cmの擬宝珠状の摘みを有し、天井部から口縁部まで丸く下がる。口縁端部を折り曲げて受部を作出している。899～901は弥生時代後期後半の土器である。899は折返し口縁壷である。頸部がやや細く、口縁部は大きく外反して開く。口縁部内面にS字状結節文を付加したＲＬの縄文を施文し、口縁端部の下端に刻みを施している。900は複合口縁壷である。口縁端部内面が肥厚する。複合部内面は屈曲して頸部につながる。901は小型壷の底部である。

17区包含層

第215図902は灰釉陶器の碗である。外内面ともに灰釉を流し掛けている。底面は糸切り痕が残り、低い断面四角形の高台を貼り付けている。内面底部には重ね焼き痕が残る。903は土師器の高台皿である。口径10cm台の小型品で、高台と体部の高さが各々1.5cm台とほぼ等しい。体部の口縁端部が大きく外反して開く。時期はともに平安期に位置付けられる。904は古墳時代前期、905～911は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。904と905は複合口縁壷である。904は大廓式の白色粒子を含む胎土を持つ。口縁部内面に粘土帯を貼り付けている。複合部内面の屈曲が見られず、頸部まで直線的につながる。905は頸部がやや細い個体と想定される。複合部内面の屈曲は緩やかである。906は壷の頸部である。なだらかな肩部を有し、ＲＬの縄文を施文している。907は壷の底部である。908は甕の口縁部である。口縁部は外反して開く。口縁端部を面取り後、下端に浅い刻みを施す。909と910は折返し口縁を持つ甕である。ともに頸部の屈曲は緩やかで、口縁部は外反して開く。909は口縁端部を面取り後、下端に浅い刻みを施す。910は大型で、胴部の張りが小さい個体である。折返し部には指頭圧痕が残る。911はミニチュアの壷である。コップ状の胴部を有し、口縁部はヨコナデを施して短く外傾させている。底部は上げ底である。

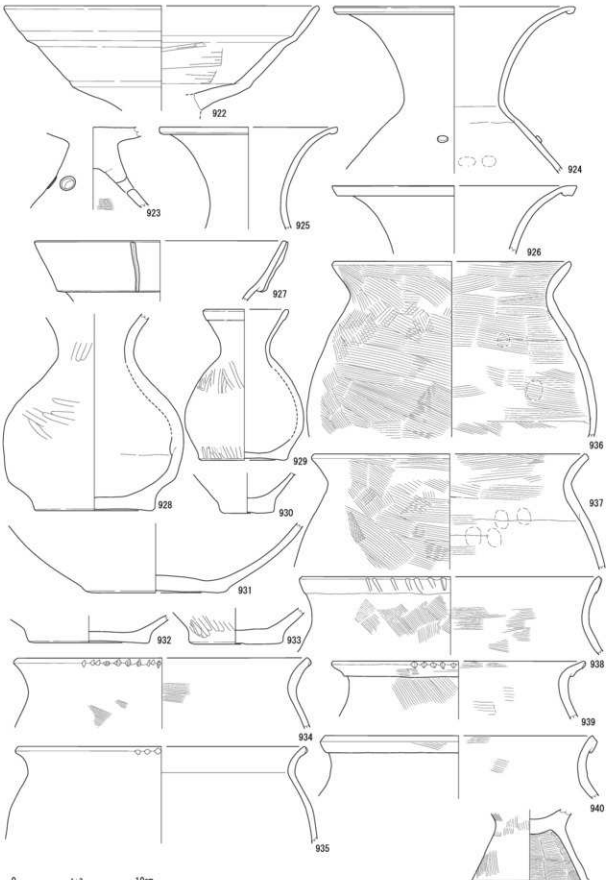
18区包含層

第215図912～918は8世紀前半代の須恵器である。912は須恵器の坏蓋である。口径20cmをはかる大型の個体である。摘みを欠損した形態のものと考えられる。口縁端部を折り曲げて受部を作出している。外内面に重ね焼き痕が認められ、外面口縁部付近に自然釉が付着する。913は無高台坏身である。小型で、平坦な底部を有し、体部が丸みを持って立ち上がる。スノコ痕が残る底部はナデ、体部は回転ナデ調整を施す。914と915は有高台坏身である。914は腰部が屈曲し、体部が口縁部まで直線的に開



第 215 図　17・18 区包含層出土土器実測図

く形状を呈する。915 は底部が丸く、腰部の立ち上がりも緩やかである。底部に回転ヘラケズリを施し、低い断面四角形の貼り付け高台を有する。高台の厚さは不均等である。916 は高坏の坏部である。丸い碗形の形状を有する個体である。917 は壷の口縁部である。外面口縁端部直下に強い回転ナデを施して沈線を作り、口縁端部を尖らせる。口縁端部に自然釉が付着する。918 は壷の胴部である。丸底で、球状の形状を呈する。底部は同心円状の回転ヘラケズリを施している。胴上部に沈線を２条施し、沈線か



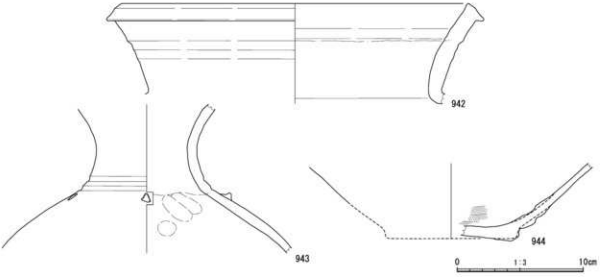
第 216 図　18 区包含層出土土器実測図

ら上部には自然釉が付着する。919 ～ 921 は 7 世紀から 8 世紀前半代の土師器の坏である。919 は底部が丸底で、底面に木葉痕が残る。口縁部はヨコナデが強く、明瞭な段を有する。920 は底部から体部にかけて丸みを持つ。921 は須恵器坏蓋模倣の坏で、体部から口縁部にかけて極めて緩やかなＳ字状の屈曲をなす。内面は横方向のミガキ調整が確認できる。底部にスノコ痕が残る。

第 216 図 922 は高坏の坏部である。大型の有段高坏で、時期は古墳時代中期か。923 は古墳時代前期の高坏の脚部である。間隔を開けた 2 個 1 対の円孔を前後に穿孔している。裾部が開く形状と想定される。924 ～ 941 は弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器である。924 ～ 926 は折返し口縁壷である。いずれも口縁部は大きく外反して開く。924 はなだらかな肩部を有し、円形浮文を貼り付けている。927 は複合口縁壷である。全体的に摩滅が著しく、原形を留めていない。複合部内面の屈曲が見られず、頸部まで直線的につながる。928 は壷の胴部である。胴下部に最大径を有し、胴上部が張る個体である。929 は折返し口縁を有する小型壷である。胴下部に最大径を有し、肩部はなだらかである。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に開く。930 は小型壷の底部である。931 ～ 933 は壷の底部である。934 ～ 937 は甕の口縁部である。いずれも頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に開く。934 と 935 は口縁端部の面取り後、下端に浅い刻みを施す。936 は胴中位まで残存し、やや長胴の形状を有する。938 ～ 940 は折返し口縁を有する甕である。いずれも頸部の屈曲は緩やかである。939 は口縁部が短く、大きく外傾して開く。938 と 940 は口縁部が緩やかに外反して開く。938 と 939 は口縁端部の面取り後、下端に浅い刻みを施す。941 は台付甕の脚部である。低脚で、裾部は直線的に開く。

19 区包含層

第 217 図 942 は 8 世紀前半代の須恵器の甕である。大型品で、口縁部は短く外傾する。口縁端部は強いナデを施している。943 と 944 は弥生時代後期の土器である。943 は壷の頸部である。肩部はなだらかで、頸部と胴部の境に沈線を 2 条施文し、下に突起状の浮文を貼り付けている。944 は壷の底部である。器面の一部が被熱を受け、高温により発泡している。

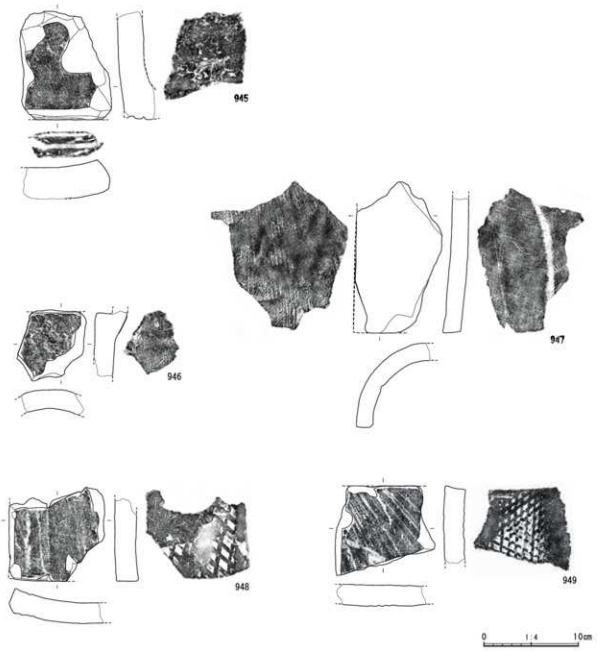


第 217 図　19 区包含層出土土器実測図

2　瓦

2区包含層

第218図945は全体的に摩滅や欠損部が多いが、四重弧文軒平瓦の瓦当部の破片である。幅の狭い貼付け段顎で、平瓦部凸面は叩き目がナデ消されており、凹面には布目が残る。946は有段式丸瓦の段部で、屈曲部は斜めに屈曲し、凸面側に粘土を付加して段部を形成している。947は丸瓦の広端部である。凸面には部分的に縄叩きが残っている。凹面には布目が残り、布綴じ痕が確認できる。948と949は平瓦である。948は広端部の破片であり、凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。布綴じ痕と平行してぐし縫いの痕跡が確認できる。側面には凸面側に幅の広い面取りが施されている。949は狭端部の破片であり、凸面には摩耗して木目が浮いた格子叩きが残る。凹面は摩滅しているが、部分的に布目と糸切痕が残る。



第218図　2区包含層出土瓦実測図

5区包含層

第219図950は丸瓦の広端部の破片である。凸面は全面ナデ調整で、凹面には布目が残る。951は平瓦の狭端部の破片である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。側面は凸面側に面取りが施されている。薄く湾曲がほとんどないため、熨斗瓦の可能性もある。

9区包含層

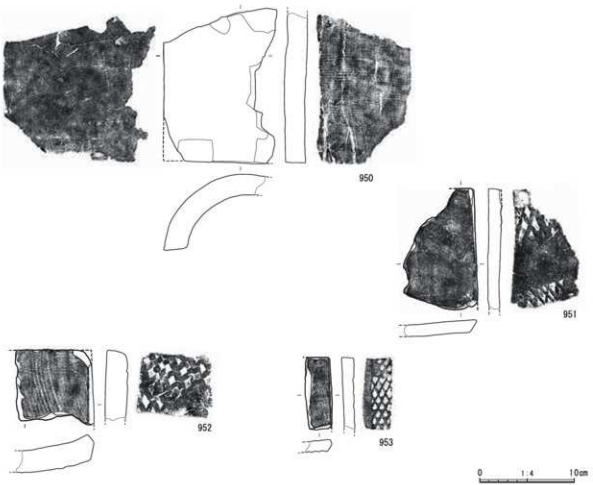
第219図952は平瓦の狭端部の破片である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。側面は凸面側に面取りが施されている。

10区包含層

第219図953は平瓦の狭端部の破片である。凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。側面は凸面側に面取りが施されている。薄く湾曲がほとんどないため、熨斗瓦の可能性もある。

11区包含層

第220図954は隅平瓦の広端部の破片であり、焼成前に広端側を斜めに切断している。凸面に格子叩き、凹面に布目が残る。側面は広端側に幅広の面取りを施している。955は平瓦である。平側の広端部の破片で、凸面には格子叩き、凹面には布目が残る。断面に被熱の痕跡が確認できる。



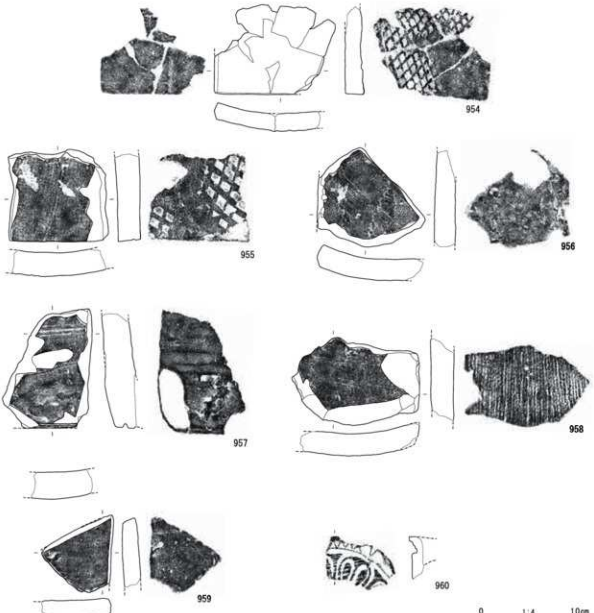
第219図　5・9・10区包含層出土瓦実測図

12 区包含層

第 220 図 956 は平瓦の側端部の破片である。凸面は摩滅しており不明であるが、凹面には布目痕と糸切痕が残る。側面は凸面側を幅広に面取りしている。

13 区包含層

第 220 図 957 は軒平瓦である。顎部が剥落しているが、三重弧文軒平瓦と推定される。平瓦部には凹凸面ともに横方向のナデ調整が施されており、叩き目や布目の痕跡は残らない。



第 220 図　11 ～ 14・19 区包含層出土瓦実測図

14 区包含層

第 220 図 958 は平瓦の側端部の破片で、凸面は縄叩き、凹面には布目痕が残る。明確な側板痕の凹凸がなく、側面も垂直に調整されていることから、一枚づくりの可能性がある。959 は隅平瓦の広端部の破片であり、焼成前に広端側を斜めに切断している。表面が摩滅しており、凸面は不明、凹面にはわずかに布目が確認できる。

19 区包含層

第 220 図 960 は軒丸瓦である。瓦当の外縁から内区にかけての破片であり、瓦当裏面は剥落している。周縁部鋸歯文の大きさから、14 区 SD1409 出土の軒丸瓦とは明らかに異笵である。瓦笵の摩耗が進んでおり、花弁や間弁には木目が浮き出ている。

3　木製品

木製品の包含層資料はすべて 19 区より出土した。第 221 図 961 と 962 は礎石建物跡 SB1401 の北側から出土した。961 は、長さ 165.5 ㎝、幅 18.4 ㎝、厚さは 4.4 ㎝のスギ材で、木目は板目方向である。表・裏面とも風化が著しく、かなり脆弱で、加工されていたかどうかも分からない状態であった。放射性炭素年代測定では 589-649 cal AD (95.45%)、6 世紀後半～7 世紀初頭に属する結果が出ている。962 も 961 と同じくスギ板材だが、腐食が激しく、木目方向は不明である。長さは 84.0 ㎝、幅は 14.0 ㎝、厚さは推定で 5.0 ㎝を測る。放射性炭素年代測定結果では 544-604 cal AD (95.45%) 6 世紀中頃～7 世紀初頭の年代に属する。963 と 964 も SB1401 の北側から出土した杭状木製品である。963 はヒノキの芯持材で下端部は斜めに削り尖らせている。放射性炭素年代測定では 1877- 1916 cal AD(33.97%)、1695- 1725 cal AD (28.97%)、1811- 1838 cal AD (27.04%) 等の結果が出ている。964 はクリの板目材で同じく下端部を斜めに削って先端を尖らせている。放射性炭素年代測定では 1642-1674 cal AD (46.76%)、1777-1799 cal AD (37.54%) 等の結果が出ている（第 5 章第 2 節）。いずれも 17 世紀末～20 世紀中頃との結果により、基壇に伴うものではないであろう。965 は有孔板材で、長さは 22.9 ㎝、幅は 9.6 ㎝、厚さは 2.9 ㎝、追い柾目のクリ材である。各面とも割り面で、面を整形した痕跡はない。年代は不明である。

4　石器・石製品

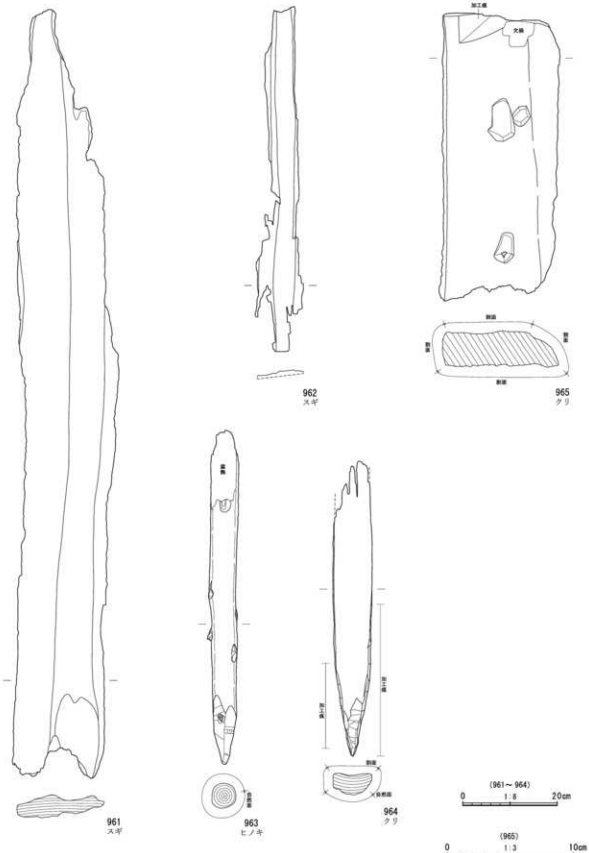
5 区包含層

第 222 図 966 は打製石斧である。撥形の形状を呈する。右側縁に礫面が残る薄い粘板岩の板状剥片に周縁加工を施している。基部の両側縁につぶし痕が確認できる。刃部は使用により摩滅している。石材の採取層群は安倍川木枯森付近瀬戸川層群と推定される（註）。

10 区包含層

第 222 図 967 は表土から出土した石棒である。円柱状の砂岩礫を素材としている。有頭の完形品である。全体を研磨して整形しているが、上端部の括れの位置と下端部に敲打痕が残る。石材の採取層群は静岡層群厚層砂岩層と推定される。（註）

（註）石器の石材鑑定は静岡大学楠　賢司氏による。

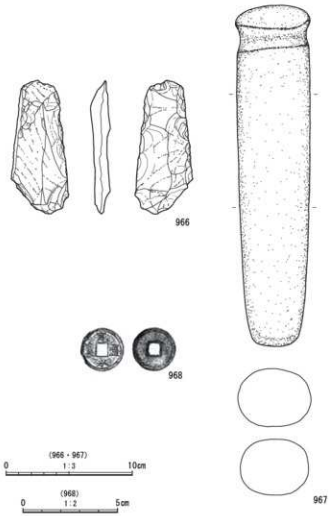


第221図　19区包含層出土木製品実測図

5　銭貨

2区包含層

第222図968は撹乱内から出土した寛永通宝である。



第222図　包含層出土石器・銭貨実測図

第４章　まとめ

本章では、今回の調査対象地で検出された主要な遺構の変遷について、過去の調査で検出された遺構との関係も含めてまとめとしたい。

第３章において、年代の区分に遺構名を用いたが、今回の調査を代表する遺構である 15・16 区検出の掘立柱建物跡 SB1501 と 14・19 区検出の礎石建物跡 SB1401 が、出土遺物からだけでは時期決定ができず、他の遺構との新旧関係や自然科学分析の結果を時期決定の要素として含めた結果、かなり広い年代幅が生じることとなった。そのため、時期の絞り込みが出来ず、遺構の構築あるいは廃絶を遺構変遷の画期とせざるを得なかったためである。

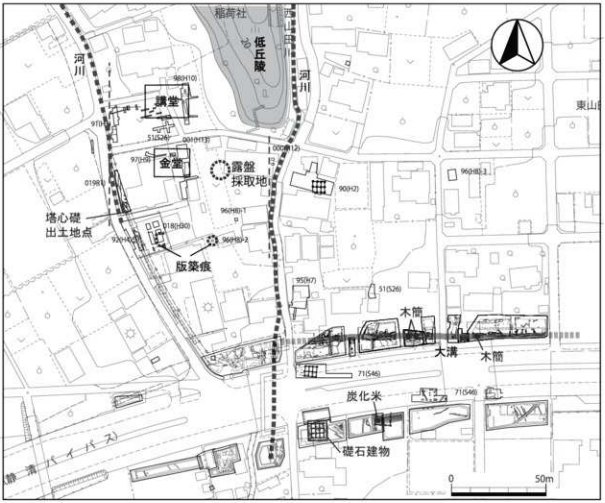
今回の調査対象地においては、弥生時代後期後半に遺構の構築が始まる。３～６・10～12・15～18 区で、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器を伴う溝跡が検出された。溝は様々な方向に掘り込まれており、時期的な差異があったことが推察されるが、層位や出土遺物からは、詳細な時期差を見出すことができなかった。17 区では隅丸方形の竪穴建物状遺構が検出されており、その形状から、溝と同時期、その中でも弥生時代後期と推定した。同じ 17 区で検出された掘立柱建物跡 SB1701、SB1702 は明確な時期決定ができる遺物が出土しなかったが、柱穴の一部が、先述した溝跡を切って掘り込まれていることから、15 区から 17 区で検出された同形態のピットを含めて、古墳時代前期から後述する SB1501 構築前までの時期に収まる遺構として整理した。

古墳時代後期になると、15・16 区には、掘立柱建物 SB1501 が構築される。これも時期の特定を可能とする遺物の出土が無かったため、柱穴から出土した礎板の年代測定結果を基に６世紀後半～７世紀中頃に位置付けざるを得なかった。なお、SB1501 は後述する炭化米集中遺構 SX1507 の下層から検出されている。SB1501 の時期に収まる遺構は、４区の礎板を伴う柱穴 SP0406 と SP0407、14 区の古墳 SX1425 がある。

８世紀前半に機能していたと考えられる遺構として、３区から 10 区にかけて検出された大溝がある。この他、同時期に位置付けられる遺構には、14 区で古墳 SX1425 を切って掘り込まれた溝跡 SD1409、18 区の溝跡 SD1801 があげられる。

８世紀後半以降の遺構は、14・19 区で検出された礎石建物跡 SB1401 がある。詳細については、既に第３章で記載しており、ここでは触れないが、前述した溝 SD1409 の埋没後に構築されていることが確認されていることや、基壇内部から出土した土器、構築後に堆積した火山灰の年代から、建築時期は８世紀後半～９世紀初頭とした。廃絶時期については、廃絶後の堆積土出土の遺物や、周辺から出土した炭化米の年代測定結果などから 10 世紀前半とした。隣接する 15 区では SB1401 の廃絶時期に近い 10 世紀前半に位置付けられる炭化米集中遺構 SX1507 が検出されており、SB1401 との関連が窺われる。前述した大溝では、主に９区と 10 区の覆土上層から 10 世紀前半の土師器が出土しており、これらは溝の埋没途中で廃棄されたものと考えられる。

今まで述べてきた遺構変遷の内、遺跡の中心となる SB1501 構築後（６世紀後半～７世紀中頃以降）から SB1401 廃絶前（10 世紀前半以前）に位置づけられる遺構と過去の静岡市（旧清水市）教育委員会の調査で検出された遺構の配置を第 223 図に示した。寺院についてはこれまでの発掘調査により、金堂と講堂が確認されおり、建立は 680 年以降、廃絶時期については、明らかにされてはいないものの、中世まで存続していた可能性が示されるとともに、寺院の伽藍配置の推定が行われている（大川 2008）。過去の静岡市（旧清水市）教育委員会が実施した調査で検出された尾羽廃寺に関連する遺構は、大部分



第 223 図　尾羽廃寺跡遺構配置図

が西山田川（旧尾羽川）の右岸側に分布しているのに対し、今回の調査対象地で検出された、遺跡の中心となる時期に位置付けられる遺構は、すべて同河川の左岸側に分布していることが確認できる。

礎石建物 SB1401 廃絶後の 10 世紀後半から中世までの遺構は確認されていない。近世の遺構の分布は希薄で、遺物を伴う遺構は２区で検出された江戸時代前期と推定される井戸跡 SE0201 と SE0202 のみである。また、２区と 13 区では、西山田川（旧尾羽川）の河道である自然流路 NR0202 と NR1301 が検出された。

参考文献

新庄道雄　1834　「国分寺について」『駿河国新風土記　巻十九』

庵原郡　1913　「七堂伽藍」『庵原郡庵原村史　一巻』

静岡県　1931　『静岡懸史　第二巻』

望月博光　1952　「尾羽廃寺について」『ふうどⅣ』静岡懸立清水東高校郷土研究部

望月薫弘　1952　「尾羽廃寺を中心とした二、三の問題」『ふうどⅣ』静岡懸立清水東高校郷土研究部

土　隆一　1971　「静岡平野・清水平野とその周辺の地形・地質について」『竹原平一教授記念論集』

清水市史編さん委員会　1976　『清水市史　第一巻』

梅島　満　1979　『古瓦の研究』緑星社

清水市史編さん委員会　1986　「清水市の自然」『清水市史』

大川敏夫　1988　「地形から見た尾羽廃寺」『考古学叢考』斎藤忠先生頌受記念刊行会編

川崎文昭　1989　「駿河の寺院小史」『駿河の古寺』静岡郷土出版社

斎藤　忠　1990　「尾羽廃寺跡」『静岡県史　資料編二　考古二』静岡県

大川敏夫　1990a　「尾羽廃寺跡出土の瓦について」『静岡県考古学研究 No. 23 』

大川敏夫　1990b　「石造露盤について」『静岡県の考古学』植松章八先生還暦論集

静岡県　1994　『静岡県史』通史編一　原始古代

矢田　勝　1996　「駿河国中西部における古代東海道」『東海道交通史の研究』

佐野明生　1998　『大乗寺誌』臨済宗高部山大乗寺

大川敏夫　2000　「尾羽廃寺出土の軒丸瓦について」『静岡県考古学研究 No. 32』

渡辺康弘　2000　『東山田窯跡群』

大川敏夫　2003　「尾羽廃寺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会

平野吾郎　2004　「古代の静岡」『ジュビタの想い』

杉山　満　2005　「白村江の戦いと尾羽廃寺」『清見潟 15』清水郷土史研究会

大川敏夫　2008　『尾羽廃寺跡の研究』同成社

勝又直人　2018　「静岡市尾羽廃寺跡出土木簡について」地域と考古学の会・浜松市博物館・静岡県考古学会シンポジウム「静岡県と周辺地域の官衙出土文字資料と手工業生産」資料集

武田寛生　2020　「駿河国庵原郡衙の調査～尾羽廃寺跡～」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要第７号』

小泉祐紀・勝又直人　2022　「尾羽廃寺跡」『発掘された日本列島 2022　調査研究最前線』文化庁

第５表　遺構観察表

遺構番号	調査区	グリッド	現存長または長径 (m)	最大幅または短径 (m)	深度 (m)	検出面	時期	備考
SD0101	1区	H4・I4	(3.16)	0.73	0.09	第1面	不明	
SD0201	2区	F9・G9・G10	(14.29)	1.26	1.23	第1面	近世	
SD0202	2区	F10・G10	(1.85)	0.61	0.15	第1面	不明	
SD0203	2区	G11	(5.59)	0.94	0.11	第1面	不明	
SE0201	2区	F12	2.36	2.01	0.94	第1面	近世	
SE0202	2区	E12・F12	1.39	1.31	0.53	第1面	近世	
SP0201	2区	F12	1.31	0.69	0.21	第1面	不明	
NR0201	2区	F12	(3.27)	0.72	0.21	第1面	古墳後期～近世	範囲が曖昧
NR0202	2区	F11・F12, G12	(13.77)	0.89	0.60	第1面	近世	
SD0302	3区	E15・F14・F15	8.65	0.57	0.22	第2面	弥生～古墳前期	
SD0303	3区	E13・E14	8.27	0.42	0.29	第2面	弥生～古墳前期	
SD0304	3区	E14	(5.49)	(0.40)	0.10	第2面	弥生～古墳前期	
SD0305	3区	E14・E15	(9.17)	0.40	0.89	第2面	弥生～古墳前期	
SD0306	3区	E15・F15	(6.96)	0.67	0.53	第2面	弥生～古墳前期	
SP0302	3区	E14	1.37	(0.76)	0.47	第1面	不明	
SP0303	3区	E14	0.92	0.80	0.43	第1面	不明	
SP0304	3区	E15	0.30	0.24	0.12	第1面	不明	
SP0305	3区	E15	0.30	0.28	0.06	第1面	不明	
SP0306	3区	E15	0.70	0.70	0.46	第2面	不明	
SP0307	3区	F14	0.54	0.42	0.22	第2面	不明	
SP0308	3区	E15	0.27	(0.21)	0.06	第2面	弥生～古墳前期	木製品年代測定データあり
SP0309	3区	E15	0.37	0.33	0.29	第2面	古墳後期～平安	木製品年代測定データあり
SP0310	3区	E15	0.25	0.25	0.21	第2面	不明	
SP0311	3区	E15	0.17	0.15	0.35	第2面	不明	
SP0312	3区	E15	0.64	0.61	0.26	第2面	不明	
SD0403	4区	E16・F16	(4.12)	0.98	0.28	第2面	弥生～古墳前期	
SD0404	4区	F16	(2.44)	0.74	0.26	第2面	弥生～古墳前期	
SD0405	4区	F16	(1.94)	0.17	0.18	第2面	弥生～古墳前期	
SP0406	4区	F16	1.09	0.90	0.27	第2面	古墳後期～奈良	木製品年代測定データあり
SP0407	4区	F16	0.87	0.70	0.17	第2面	古墳後期～奈良	木製品年代測定データあり
SD0508	5区	D18・E18・E19	(5.89)	1.15	0.20	第2面	弥生～古墳前期	
SD0509	5区	D18・E18	(6.29)	0.73	0.42	第2面	弥生～古墳前期	
SD0510	5区	E18・F18	(3.98)	0.33	0.16	第2面	弥生～古墳前期	
SD0511	5区	E17・F17・F18	(9.06)	0.35	0.28	第2面	弥生～古墳前期	
SD0601	6区	E19・E20	(7.84)	1.00	0.13	第1面	中近世	
SD0603	6区	E19・E20・F19・F20	(5.67)	1.40	0.82	第2面	弥生～古墳前期	
SD0604	6区	E19・F19	(2.31)	0.74	0.30	第2面	弥生～古墳前期	
SD0605	6区	E20・F20	(1.79)	1.28	0.62	第2面	弥生～古墳前期	
SD0702	7区	D20・E20・E21	(3.50)	0.65	0.70	第2面	不明	
SD0703	7区	E20	(1.60)	0.53	0.30	第2面	不明	
SP0701	7区	D20	0.61	0.47	0.47	第2面	不明	
SD0801	8区	D22	(3.99)	0.72	0.26	第1面	古墳後期～平安？	
SD1001	10区	D23・D24	(13.01)	0.82	0.37	第1面	古墳後期～奈良	
SD1002	10区	E24	(15.07)	1.77	0.93	第1面	弥生～古墳前期	
SD1003	10区	D23	(2.30)	0.30	0.14	第1面	不明	
SD1004	10区	D25	(2.44)	0.56	0.12	第1面	不明	
SD1005	10区	D26	2.00	0.40	0.15	第1面	不明	
SD1007	10区	E25	2.60	0.40	0.08	第1面	不明	
SD1008	10区	E26	(0.92)	0.66	0.14	第1面	不明	
SD1009	10区	E25	2.52	0.30	0.06	第1面	不明	
SD1010	10区	D25・E25・E26	6.32	0.80	0.38	第1面	不明	
SX1001	10区	D23・D24	2.04	1.31	0.23	第1面	古墳後期～奈良	
SX1002	10区	D24	0.90	0.82	0.20	第1面	不明	
SX1003	10区	D26・E26	1.00	1.00	0.25	第1面	不明	
SX1004	10区	D26・D27	1.50	(0.77)	0.61	第1面	弥生～古墳前期	
SP1001	10区	E24	0.58	0.50	0.13	第1面	不明	
SP1002	10区	E24	0.36	0.32	0.12	第1面	不明	
SP1003	10区	D24・E24	0.23	0.23	0.06	第1面	平安	木製品年代測定データあり
SP1004	10区	D24・E24	0.33	0.23	0.10	第1面	平安？	
SP1005	10区	E25	0.90	0.40	0.08	第1面	不明	
SP1006	10区	E25	0.92	0.62	0.13	第1面	不明	
SP1007	10区	E25	0.54	0.50	0.11	第1面	不明	
SP1008	10区	D26	0.64	0.44	0.12	第1面	不明	
SP1009	10区	D26	0.64	0.40	0.21	第1面	不明	
SP1010	10区	E26	0.38	0.38	0.16	第1面	不明	

第５表　遺構観察表

遺構番号	調査区	グリッド	現存長または長径 (m)	最大幅または短径 (m)	深度 (m)	検出面	時期	備考
SP1011	10 区	E26	0.28	0.28	0.09	第１面	不明	
SP1012	10 区	E26	0.40	0.36	0.06	第１面	不明	
SP1013	10 区	E25	0.24	0.12	0.24	第１面	不明	
SP1014	10 区	E25	0.52	0.42	0.19	第１面	不明	
SP1015	10 区	E25	0.54	0.42	0.07	第１面	不明	
SD1101	11 区	L5・M5	(2.80)	1.12	0.30	第１面	弥生～古墳前期？	
SD1102	11 区	L5・M5	(2.84)	1.46	0.23	第１面	弥生～古墳前期	
SD1103	11 区	L5・M5	(2.76)	0.50	0.27	第１面	古墳後期～奈良	
SD1105	11 区	L6	(2.86)	1.78	0.38	第１面	弥生～古墳前期	
SK1104	11 区	L5	1.00	0.83	0.43	第１面	近世？	
SD1201	12 区	L9	(1.73)	0.73	0.34	第２面	弥生～古墳前期	
SD1204	12 区	K9・K10・L9・L10	(8.32)	1.40	0.57	第２面	弥生～古墳前期	
SD1207	12 区	K9・L9	(3.60)	0.6	0.30	第２面	弥生～古墳前期	
SD1211	12 区	L8・L9	(13.91)	1.68	0.17	第２面	弥生～古墳前期	
SD1212	12 区	L8・L9・L10	(15.00)	1.60	0.19	第２面	弥生～古墳前期	
SD1216	12 区	K9・L9	(7.20)	1.24	0.50	第２面	弥生～古墳前期	
SK1206	12 区	K10	0.73	0.62	0.25	第２面	弥生～古墳前期	
SK1209	12 区	L9	0.68	0.55	0.18	第２面	弥生～古墳前期	
SK1213	12 区	K9	0.46	(0.43)	0.37	第２面	弥生～古墳前期	
SK1214	12 区	K9	0.68	(0.31)	0.34	第２面	弥生～古墳前期	
NR1301	13 区	K12・L12	(10.84)	(9.28)	1.06	第１面	近世	
SD1409	14 区 15 区 19 区	J15・J16	(13.60)	3.79	0.53	第１面	古墳後期～奈良	
SD1412	14 区	J15・J16・K16	(4.50)	0.70	0.10	第１面	古墳後期～奈良？	
SK1413	14 区	J15	0.78	0.61	0.10	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1415	14 区	J14・J15	0.62	0.40	0.03	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1416	14 区	J15	0.99	0.47	0.05	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1417	14 区	J14	0.96	0.74	0.10	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1419	14 区	J14	2.22	1.05	0.40	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1420	14 区	J14	0.50	0.42	0.04	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1421	14 区	K14	0.92	0.67	0.06	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1423	14 区	K15	1.02	0.81	0.07	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1424	14 区	J14	0.51	0.48	0.02	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1426	14 区	J14	1.01	0.69	0.19	第１面	平安	基壇斜面の落ち込み
SK1427	14 区	J14	0.71	0.25	0.13	第１面	平安	基壇斜面の落ち込み
SK1428	14 区	K14	0.86	0.50	0.10	第１面	平安	基壇斜面の落ち込み
SK1429	14 区	K14	0.87	0.63	0.08	第１面	平安	基壇斜面の落ち込み
SK1433	14 区	J14	0.90	(0.32)	0.16	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1435	14 区	J14	(0.65)	0.72	0.09	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1436	14 区	J15	0.72	0.63	0.09	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1437	14 区	J15	1.07	0.90	0.06	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1438	14 区	J14	1.04	0.83	0.55	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1439	14 区	J14	0.97	0.68	0.04	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1440	14 区	J15	0.71	0.59	0.01	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1441	14 区	J15	(0.80)	0.99	0.05	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1442	14 区	J15	0.72	0.65	0.02	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1443	14 区	J15・K15	0.86	0.76	0.04	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1444	14 区	J14・K14	(1.15)	0.90	0.11	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1445	14 区	K14	(0.70)	0.59	0.02	第１面	平安	基壇上の落ち込み
SK1458	14 区	J15	0.68	0.64	0.06	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SK1459	14 区	J15	0.79	0.70	0.11	第１面	平安	SB1401 礎石跡
SD1501	15 区	I18・J18	(3.66)		0.10	第１面	平安	
SD1502	15 区	I17・I18・J17・J18	(3.68)	1.36	0.13	第１面	平安	
SD1503	15 区	I17・J17	(3.68)	(2.60)	0.10	第１面	古墳後期～奈良？	
SD1504	15 区	J17	(7.56)	0.80	0.18	第１面	古墳中期～奈良？	
SD1505	15 区	J17	(10.80)	1.40	0.77	第１面	弥生後期～古墳後期	
SD1506	15 区	J17	3.28	0.45	0.08	第１面	古墳後期～奈良	
SD1556	15 区	J16	(5.96)	0.72	0.14	第２面	弥生～古墳前期？	
SD1557	15 区	J17	(6.74)	1.40	0.36	第２面	弥生～古墳前期	
SK1508	15 区	I17	1.90	1.28	0.20	第１面	古墳後期～奈良	
SK1531	15 区	J18	1.40	1.18	0.78	第１面	平安	
SP1546	15 区	J18	0.88	(0.60)	0.42	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴 木製品年代測定データあり

第５表　遺構観察表

遺構番号	調査区	グリッド	現存長または長径 (m)	最大幅または短径 (m)	深度 (m)	検出面	時期	備考
SP1547	15 区	J18	1.02	0.85	0.34	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴 木製品年代測定データあり
SP1548	15 区	J18	1.00	0.86	0.54	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴 木製品年代測定データあり
SP1549	15 区	J18	0.93	0.83	0.39	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴 木製品年代測定データあり
SP1550	15 区	J18	0.44	0.19	0.26	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1551	15 区	J18	0.51	0.50	0.45	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1552	15 区	J18	0.71	0.70	0.48	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1554	15 区	J18	(0.44)	(0.44)	0.40	第２面	弥生～古墳中期？	
SD1618	16 区	I19・J19	(1.79)	0.74	0.27	第１面	弥生～古墳前期？	
SD1619	16 区	I18・I19・J19	(11.57)	0.89	0.70	第２面	弥生～古墳前期	
SD1620	16 区	I18・J18・J19	(13.88)	0.57	0.29	第２面	弥生～古墳前期	
SD1621	16 区	J18	(5.20)	0.20	0.16	第２面	不明	
SD1622	16 区	J18・K18	(3.63)	0.36	0.15	第２面	不明	
SK1607	16 区	J19	1.24	1.09	0.30	第１面	弥生～古墳前期？	
SK1608	16 区	I18・J18・J19	1.24	1.12	0.27	第２面	弥生～古墳前期	
SP1609	16 区	J19	0.34	0.32	0.05	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1610	16 区	J18	0.55	0.49	0.15	第２面	古墳後期～奈良	SP1614 の抜き取り穴か？
SP1611	16 区	J18	0.52	0.46	0.06	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1612	16 区	I18	(0.84)	0.79	0.15	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴
SP1613	16 区	J18	1.20	1.02	0.25	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴
SP1614	16 区	J18	0.40	0.36	0.24	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴
SP1615	16 区	J18	0.97	0.80	0.36	第２面	古墳後期～奈良	SB1501 柱穴 木製品年代測定データあり
SP1616	16 区	J18	0.72	0.63	0.14	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1617	16 区	J18	0.61	0.56	0.25	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1618	16 区	J18	0.95	0.48	0.21	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1619	16 区	J19	0.73	0.64	0.04	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1620	16 区	J18	0.60	0.38	0.27	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1621	16 区	J18	0.56	0.44	0.29	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1622	16 区	J18	0.62	0.42	0.26	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1623	16 区	J18	(0.52)	0.50	0.28	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1624	16 区	J18	0.79	0.58	0.41	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1628	16 区	J18	0.45	0.36	0.21	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1630	16 区	J18	0.70	0.67	0.35	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1631	16 区	J18	0.23	(0.15)	0.11	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1632	16 区	J18	0.54	0.49	0.31	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1633	16 区	J19	0.65	0.58	0.34	第２面	弥生～古墳中期？	掘立柱建物柱穴？
SP1634	16 区	J19	0.64	0.47	0.41	第２面	弥生～古墳中期？	掘立柱建物柱穴？
SP1635	16 区	J19	0.62	0.59	0.46	第２面	弥生～古墳中期？	掘立柱建物柱穴？
SP1636	16 区	J19	0.51	0.49	0.28	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1637	16 区	J18	0.62	0.49	0.33	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1638	16 区	J18	0.61	0.48	0.40	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1639	16 区	J18	0.86	0.42	0.26	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1640	16 区	J18	0.43	(0.42)	0.22	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1642	16 区	J19	0.52	0.44	0.36	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1643	16 区	J19	0.25	(0.06)	0.15	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1644	16 区	I18・I18	0.57	0.37	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	掘立柱建物柱穴？
SP1645	16 区	I18	(0.45)	0.33	0.10	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1646	16 区	J18	0.58	0.36	0.33	第２面	弥生～古墳中期？	
SD1703	17 区	I20・I21	(8.58)	1.19	0.24	第１面	弥生～古墳前期	
SD1728	17 区	I20・I21	(5.91)	0.82	0.18	第１面	弥生～古墳前期	
SD1735	17 区	I21	(8.31)	0.35	0.13	第１面	古墳後期～奈良？	
SD1736	17 区	I21・J21	(7.59)	1.48	0.59	第１面	弥生～古墳前期	
SD1737	17 区	I21・J21	(7.98)	1.08	0.43	第１面	弥生～古墳前期	
SD1739	17 区	I21・I22	(9.65)	0.65	0.10	第１面	古墳後期～奈良？	
SD1770	17 区	I22	(4.88)	(2.01)	0.69	第２面	弥生～古墳前期	
SD1773	17 区	I22	(5.75)	0.71	0.28	第２面	弥生～古墳前期	
SD1774	17 区	I22	(3.16)	0.51	0.15	第２面	弥生～古墳前期？	
SD1775	17 区	I22	(6.09)	0.84	0.13	第２面	弥生～古墳前期？	
SD1783	17 区	I22・J22	(2.16)	0.66	0.30	第２面	弥生～古墳前期？	
SD17103	17 区	I21・I22・J21・J22	(2.42)	0.58	0.10	第２面	弥生～古墳前期？	
SD17101・17102	17 区	I21・I22	9.04	0.26	0.14	第２面	弥生～古墳前期？	竪穴建物状遺構

第５表　遺構観察表

遺構番号	調査区	グリッド	現存長または長径 (m)	最大幅または短径 (m)	深度 (m)	検出面	時期	備考
SD1704	17 区	I20	(4.60)	1.48	0.44	第１面	弥生～古墳前期	竪穴建物状遺構
SH1751	17 区	I20	0.44	0.35	0.32	第１面	弥生～古墳前期	竪穴建物状遺構　計測値は伊藤部分
SH17111	17 区	J20	(3.10)	(2.02)	0.28	第１面	弥生～古墳前期	竪穴建物状遺構
SH17112	17 区	I20・J20	(2.60)	(1.06)	0.30	第１面	弥生～古墳前期	竪穴建物状遺構
SK1708	17 区	J20	(1.21)	1.20	0.13	第１面	弥生～古墳中期？	
SK1738	17 区	I21	(0.60)	(0.53)	0.12	第１面	弥生～古墳中期？	
SK1771	17 区	I22	0.85	0.78	0.40	第２面	弥生～古墳中期？	
SK1782	17 区	I22	0.74	0.70	0.25	第２面	弥生～古墳中期？	
SK1789	17 区	I22	0.92	0.86	0.25	第２面	弥生～古墳中期？	
SK17100	17 区	I21	0.80	0.76	0.24	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1701	17 区	I19・I20	0.74	(0.40)	0.42	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1702	17 区	I20	0.25	0.25	0.19	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1705	17 区	I20	0.31	0.27	0.33	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1706	17 区	I20	0.39	0.32	0.10	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1707	17 区	I20・J20	0.38	0.33	0.44	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1709	17 区	J20	0.55	0.43	0.38	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1711	17 区	I20	0.46	0.36	0.32	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1712	17 区	I20	0.63	0.38	0.35	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1713	17 区	I20	0.70	0.49	0.29	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1714	17 区	J20	(0.72)	0.45	0.34	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1716	17 区	J20	0.60	0.52	0.42	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1717	17 区	I20	0.41	0.35	0.48	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1718	17 区	I20	0.55	0.55	0.52	第１面	弥生～古墳中期？	SB1701 柱穴
SP1719	17 区	I20	0.48	(0.38)	0.39	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1720	17 区	I20	0.48	0.41	0.35	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1721	17 区	I20	0.64	0.54	0.46	第１面	弥生～古墳中期？	SB1701 柱穴
SP1722	17 区	I20・I21	0.53	0.40	0.36	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1723	17 区	I21	0.30	0.28	0.32	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1724	17 区	I21	0.65	(0.56)	0.37	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1725	17 区	I21	0.57	0.53	0.37	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1727	17 区	I21	0.34	0.28	0.25	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1729	17 区	J20	0.46	0.40	0.31	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1731	17 区	I20	0.30	0.25	0.29	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1733	17 区	I21	(0.54)	0.54	0.45	第１面	弥生～古墳中期？	SB1701 柱穴
SP1734	17 区	I21	0.32	0.27	0.44	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1745	17 区	I22	0.37	0.33	0.17	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1746	17 区	I20	0.71	0.70	0.11	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1748	17 区	I20	0.61	0.45	0.25	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1749	17 区	I21	0.59	0.49	0.44	第１面	弥生～古墳中期？	SB1701 柱穴
SP1750	17 区	I21	0.40	0.29	0.25	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1754	17 区	I21	0.60	(0.50)	0.39	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1755	17 区	I22	0.33	(0.25)	0.22	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1756	17 区	I20	0.57	0.48	0.37	第１面	弥生～古墳中期？	SB1701 柱穴
SP1757	17 区	I21	0.65	0.51	0.41	第１面	弥生～古墳中期？	SB1701 柱穴
SP1760	17 区	I20	0.69	(0.35)	0.42	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1761	17 区	I20	0.82	(0.35)	0.46	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1762	17 区	I20	0.62	(0.32)	0.52	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1763	17 区	I20	(1.11)	(0.32)	0.53	第１面	古墳後期～奈良？	
SP1764	17 区	I20	(1.02)	(0.54)	0.57	第１面	古墳後期～奈良？	
SP1765	17 区	I21	1.12	(0.55)	0.63	第１面	古墳後期～奈良？	
SP1766	17 区	I20	(0.40)	(0.17)	0.48	第１面	弥生～古墳中期？	SB1702 柱穴
SP1767	17 区	I19	0.63	(0.41)	0.53	第１面	弥生～古墳中期？	
SP1776	17 区	I22	0.37	0.33	0.18	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1777	17 区	I22	0.80	0.70	0.36	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1778	17 区	I22	0.50	0.50	0.12	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1779	17 区	I22	0.65	0.48	0.16	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1780	17 区	I22	0.46	0.35	0.10	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1781	17 区	I22	0.49	0.48	0.18	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1784	17 区	I22	0.50	0.47	0.15	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1785	17 区	I22	(0.35)	0.31	0.14	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1786	17 区	I22	0.45	0.38	0.25	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1787	17 区	I22	0.56	0.42	0.19	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1788	17 区	I22	0.37	0.26	0.21	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1790	17 区	I22	0.50	0.40	0.14	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1791	17 区	I22	(0.35)	0.35	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	

第５表　遺構観察表

遺構番号	調査区	グリッド	現存長または長径（m）	最大幅または短径（m）	深度（m）	検出面	時期	備考
SP1792	17 区	I22	0.47	0.44	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1793	17 区	I22	0.47	0.45	0.16	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1794	17 区	I21・J21	(0.54)	0.19	0.09	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1795	17 区	I21・J21	0.65	0.53	0.20	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1796	17 区	I21	0.60	0.54	0.23	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1797	17 区	I21	0.54	(0.36)	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1798	17 区	I21	0.48	0.36	0.10	第２面	弥生～古墳中期？	
SP1799	17 区	I21	0.61	0.50	0.12	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17105	17 区	I21	0.34	0.30	0.08	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17106	17 区	I21	0.40	0.35	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17107	17 区	J21	0.49	0.45	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17109	17 区	I22	0.58	0.53	0.16	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17110	17 区	I22	0.31	0.24	0.11	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17113	17 区	J20	0.40	0.29	0.31	第１面	弥生～古墳中期？	
SP17114	17 区	J20	0.62	(0.36)	0.42	第１面	弥生～古墳中期？	
SP17115	17 区	J20	0.57	0.55	0.37	第１面	弥生～古墳中期？	
SP17116	17 区	J20	0.58	0.54	0.29	第１面	弥生～古墳中期？	
SP17117	17 区	J20	0.60	(0.55)	0.40	第１面	弥生～古墳中期？	
SP17118	17 区	J20	0.50	0.49	0.34	第１面	弥生～古墳中期？	
SP17120	17 区	I22	0.68	0.54	0.23	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17121	17 区	I22	0.60	0.49	0.14	第２面	弥生～古墳中期？	
SP17122	17 区	I22	(0.33)	(0.09)	0.13	第２面	弥生～古墳中期？	
SD1801	18 区	I25・J25・J26	(15.53)	2.00	0.43	第１面	古墳後期～奈良	
SD1802	18 区	I26・I27	(5.44)	1.86	0.79	第１面	弥生～古墳前期	
SD1803	18 区	I24・I24	(10.82)	1.40	0.52	第２面	弥生～古墳前期	
SD1804	18 区	I24・I25	(2.14)	0.23	0.20	第１面	不明	
SD1805	18 区	I25	4.34	0.26	0.13	第１面	不明	
SD1806	18 区	I25	4.67	0.22	0.09	第１面	不明	
SD1807	18 区	I25	(5.95)	0.16	0.21	第１面	不明	
SD1808	18 区	I25・I26	6.50	0.25	0.14	第１面	不明	
SD1809	18 区	I25・I26	2.56	0.19	0.12	第１面	不明	
SD1810	18 区	I25	(0.60)	0.25	0.09	第１面	不明	
SD1811	18 区	I25・J25・J26	1.90	0.16	0.07	第１面	不明	
SD1812	18 区	I26	(4.33)	0.32	0.17	第１面	不明	SD1814 と同一か？
SD1813	18 区	I25・I26	(4.52)	0.66	0.16	第１面	弥生～古墳前期？	SD1817・SD1818 と同一か？
SD1814	18 区	I26・J26・J27	(1.16)	0.43	0.23	第１面	不明	SD1812 と同一か？
SD1815	18 区	J25・J26	(4.63)	0.31	0.28	第１面	弥生～古墳前期	
SD1816	18 区	I24・J24	(12.27)	1.50	0.52	第２面	弥生～古墳前期	
SD1817	18 区	J25・J26	(2.62)	0.44	0.29	第２面	弥生～古墳前期？	SD1813・SD1818 と同一か？
SD1818	18 区	I26・J26	(4.05)	1.20	0.26	第１面	弥生～古墳前期？	SD1813・SD1817 と同一か？
SK1801	18 区	I24	1.64	1.25	0.30	第１面	弥生～古墳前期	
SK1802	18 区	I24	1.66	1.30	0.33	第１面	弥生～古墳前期	
SK1803	18 区	I23・I24	1.15	(0.73)	0.31	第１面	不明	
SK1804	18 区	I25	1.70	1.69	0.28	第１面	弥生～古墳前期？	
SK1805	18 区	I25	1.12	1.07	0.34	第１面	不明	
SK1806	18 区	I25	2.07	(1.22)	0.27	第１面	弥生～古墳前期	
SP1801	18 区	I24・I25	0.54	0.51	0.29	第１面	不明	
SP1802	18 区	I25	0.73	0.53	0.27	第１面	不明	
SP1803	18 区	I26	(0.68)	－	0.32	第１面	弥生～古墳前期	壁面
SP1804	18 区	I25	0.76	0.35	0.33	第２面	不明	
SP1805	18 区	I26	0.31	0.30	0.16	第２面	不明	
SX1801	18 区	I24	3.26	(0.89)	0.18	第１面	古墳後期～奈良？	
SX1802	18 区	I24・J24・J25	(11.47)	2.67	0.15	第１面	弥生～古墳前期	
SK1901	19 区	J15	0.88	0.54	0.12	第１面	中近世？	
SK1902	19 区	J15	(2.04)	(0.70)	0.22	第１面	中近世？	
SP1901	19 区	J15	(0.64)	0.56	0.32	第１面	中近世？	

※数値は検出面での計測値　（　）は現存長または現存径

第６表　出土遺物観察表

【土器】

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
1	2	SD0201	－	陶器	徳利	－	7.3	(3.0)	－	底部 50%	灰白色 2.5Y8/2	
2	2	SD0201	－	須恵器	坏身	(9.4)	－	(3.3)	－	口縁部～体部 20%	内：灰白色 N7/ 外：灰色 N6/	
3	2	SD0201	－	土師器	坏	(13.2)	－	4.4	－	25%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
5	2	SE0201	－	土師器	甕	(23.6)	－	(7.15)	－	口縁部 10%	橙色 7.5YR7/6	
8	2	SE0202	－	陶器	天目茶碗	10.9	－	7.4	4.5	70%	底部：灰黄褐色 10YR6/2 釉：黒色 10YR2/1	
9	2	NR0201	－	土師器	坏	－	－	(3.4)	－	口縁部～体部 15%	橙色 5YR6/8	
10	2	NR0201	－	土師器	壺	(16.4)	－	(8.1)	－	口縁部 15～ 頸部 30%	橙色 5YR6/6	
11	2	NR0201	－	土師器	壺	(17.6)	－	(2.9)	－	口縁部 30%	橙色 7.5YR7/6	
12	2	NR0201	－	弥生土器	壺	－	(9.0)	(3.55)	－	底部 25%	灰白色 2.5YR/2	
13	2	NR0201	－	弥生土器	壺	－	(10.6)	(2.35)	－	底部 30%	内：褐灰色 10YR5/1 外：橙色 7.5YR7/6	
14	2	NR0201	－	弥生土器	小型壺 または鉢	－	(3.9)	(3.0)	－	体部 15～底部 50%	橙色 5YR7/8	
15	2	NR0201	－	弥生土器	小型壺 または鉢	－	(4.6)	(2.5)	－	体部～底部 30%	浅黄橙色 10YR8/3	
16	2	NR0202	－	陶器	丸皿	(10.6)	－	2.05	(6.0)	25%	素地：灰白色 N7/ 底部：にぶい赤褐色 5YR5/4 釉：灰オリーブ色 7.5Y5/2	
17	2	NR0202	－	陶器	擂鉢	(29.6)	－	(6.7)	－	口縁部 15%	内：褐灰色 2.5Y4/1 外：明褐色 7.5YR5/8	
18	2	NR0202	－	陶器	甕	－	(14.0)	(5.7)	－	底部 15%	内：灰褐色 7.5YR5/2 外：にぶい橙色 7.5YR6/4	
19	2	NR0202	－	須恵器	坏身	－	－	(1.65)	(9.7)	底部～高台部 15%	灰白色 N7/	
20	2	NR0202	－	弥生土器	壺	(17.0)	－	(7.1)	－	口縁部 20%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
21	2	NR0202	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.6)	－	脚台部 25%	にぶい橙色 7.5YR6/4	
30	3	SD0302	－	弥生土器	壺	(18.6)	－	(3.95)	－	口縁部 40%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
31	3	SD0304	－	土師器	高坏	(19.0)	－	(7.5)	－	口縁部 25～ 体部 15%	橙色 7.5YR7/6	
32	3	SD0304	－	土師器	高坏	(26.2)	－	(6.8)	－	口縁部～体部 10% 以下	内：灰白色 10YR8/2 外：にぶい黄橙色 10YR7/3	
33	3	SD0305	－	弥生土器	壺	(21.0)	－	(10.2)	－	口縁部 25%	橙色 5YR7/6	
34	3	SD0305	－	弥生土器	壺	(12.0)	－	(3.75)	－	口縁部 15%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
35	3	SD0305	－	弥生土器	壺	(15.0)	－	(3.7)	－	口縁部 20%	内：にぶい橙色 7.5YR7/3 外：橙色 2.5YR7/6	
36	3	SD0305	－	弥生土器	小型壺	－	5.7	(6.3)	－	体部～底部 30%	内：褐灰色 10YR4/1 外：橙色 5YR6/6	
37	3	SD0305	－	弥生土器	壺	－	8.3	(3.3)	－	底部 100%	内：褐灰色 10YR6/1 外：にぶい黄橙色 10YR7/2	
38	3	SD0305	上層	弥生土器	壺	－	8.1	(3.2)	－	底部 100%	内：褐灰色 7.5YR7/4 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
39	3	SD0305	－	弥生土器	小型壺	－	4.4	(3.1)	－	底部 100%	内：灰白色 10YR7/1 外：にぶい黄橙色 10YR7/2	
40	3	SD0305	－	弥生土器	小型壺	－	5.9	(2.5)	－	底部 100%	灰黄色 2.5Y7/2	
41	3	SD0305	－	弥生土器	甕	(21.6)	－	(3.65)	－	口縁部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
42	3	SD0305	上層	弥生土器	甕	19.5	－	(15.9)	－	口縁部～体部 80%	にぶい橙色 7.5YR6/3	
43	3	SD0305	－	弥生土器	甕	(25.0)	－	(8.6)	－	口縁部～頸部 15%	にぶい橙色 7.5YR6/4	
44	3	SD0305	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.15)	－	脚台部 70%	にぶい橙色 5YR6/4	
45	3	SD0305	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.4)	－	脚台部 50%	灰黄色 2.5Y7/2	
46	3	SD0305	下層	弥生土器	台付甕	－	－	(7.3)	－	脚台部 60%	灰黄褐色 10YR6/2	
47	3	SD0305	－	弥生土器	高坏	－	(11.4)	(6.9)	－	脚部 30%	にぶい黄橙色 10YR7/2	
48	3	SD0305	－	土製品	模造品	(4.5)	－	3.5	－	40%	内：黒褐色 10YR3/1 外：にぶい赤褐色 5YR5/4	
51	4	SD0403	－	弥生土器	壺	(16.2)	－	(4.3)	－	口縁部 25%	にぶい橙色 7.5YR6/4	
52	4	SD0403	－	弥生土器	壺	－	10.8	(9.65)	－	底部 80%	内：褐灰色 10YR6/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/3	
53	4	SD0403	－	弥生土器	甕	(13.0)	－	(9.7)	－	口縁部 30～ 体部 10%	明赤褐色 5YR5/6	
54	4	SD0403	－	弥生土器	壺	(31.1)	－	(9.9)	－	口縁部 30%	内：橙色 5YR6/6 外：にぶい黄橙色 10YR6/6	
55	4	SD0403	－	弥生土器	高坏	(20.8)	－	(7.9)	－	口縁部～体部 30%	内：橙色 5YR6/6 外：褐灰色 10YR6/1	
56	4	SD0404	－	弥生土器	壺	(16.0)	－	(5.6)	－	口縁部 15%	内：にぶい橙色 7.5YR6/4 外：橙色 5YR7/8	
57	4	SD0404	－	弥生土器	甕	(22.0)	－	(6.2)	－	口縁部 10%	にぶい橙色 7.5YR7/3	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
58	4	SD0404	－	弥生土器	鉢	(8.3)	4.4	3.75	－	60%	にぶい橙色7.5YR7/4	
59	4	SP0406	－	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	(10.0)	底部～高台部15%	灰白色N7/	
66	5	SD0509	－	弥生土器	壺	18.1	10.4	29.5～29.0	－	70%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい黄橙色10YR7/2	
67	5	SD0509	－	弥生土器	壺	(21.8)	－	(9.2)	－	口縁部50%	内：灰白色N7/ 外：橙色7.5YR7/6	
68	5	SD0509	－	弥生土器	壺	－	－	(13.2)	－	頸部～体部30%	橙色7.5YR7/6	
69	5	SD0509	－	弥生土器	壺	－	10.4	(31.6)	－	体部50～底部100%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい黄橙色10YR7/3	
70	5	SD0509	－	弥生土器	壺	－	10.0	(14.3)	－	体部～底部40%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：にぶい黄橙色10YR7/2	
71	5	SD0509	－	弥生土器	壺	－	12.8	(8.65)	－	底部100%	にぶい橙色7.5YR7/4	
72	5	SD0511	－	土師器	S字甕	(18.2)	－	(10.95)	－	口縁部～頸部50%	橙色7.5YR7/6	
73	5	SD0511	－	土師器	S字甕	(15.2)	－	(8.3)	－	口縁部～頸部15%	内：褐灰色10YR5/1 外：橙色2.5YR6/6	
74	5	SD0511	－	土師器	S字甕	(16.0)	－	(6.7)	－	口縁部～頸部15%	橙色7.5YR7/6	
75	5	SD0511	－	土師器	S字甕	(16.0)	－	(9.3)	－	口縁部50～頸部25%	明赤褐色5YR5/6	
76	5	SD0511	－	土師器	S字甕	－	－	(15.7)	－	体下部30%	内：橙色7.5YR6/6 外：にぶい橙色7.5YR7/4 橙色5YR6/8	
77	5	SD0511	－	土師器	S字甕	－	－	(6.2)	－	頸部30%	にぶい黄橙色10YR7/3	
78	6	SD0601	－	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	(10.2)	底部～高台部15%	灰白色5Y8/1	完形に復原
79	6	SD0601	－	灰釉陶器	椀	－	－	(1.8)	(7.85)	底部～高台部15%	灰白色N8/	
80	6	SD0603	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(6.3)	－	口縁部15%	内：黄灰色2.5Y6/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
81	6	SD0603	－	弥生土器	壺	14.6	－	(6.75)	－	口縁部100%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
82	6	SD0603	－	弥生土器	壺	(11.8)	－	(13.0)	－	口縁部45%	橙色7.5YR7/6	
83	6	SD0603	－	弥生土器	小型壺	－	4.8	(9.4)	－	頸部～底部100%	灰黄色2.5Y7/2	
84	6	SD0603	－	弥生土器	壺	－	(7.8)	(4.1)	－	底部25%	内：黄灰色2.5Y5/1 外：橙色5YR7/6	
85	6	SD0603	－	弥生土器	甕	(22.0)	－	(6.6)	－	口縁部10%以下	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい橙色5YR6/4	
86	6	SD0603	－	弥生土器	甕	(22.6)	－	(4.2)	－	口縁部10%	にぶい橙色7.5YR7/3	
87	6	SD0603	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.2)	－	脚台部15%	浅黄橙色7.5YR8/3	
88	6	SD0603	－	弥生土器	台付甕	－	－	(2.6)	－	脚台部15%	にぶい橙色5YR7/4	
89	6	SD0604	－	弥生土器	甕	(23.5)	－	(2.8)	－	口縁部10%以下	灰色5Y5/1	
90	6	SD0604	－	弥生土器	台付甕	－	－	(6.8)	－	脚台部20%	にぶい黄橙色10YR7/4	
91	6	SD0605	－	弥生土器	甕	(20.0)	－	(4.5)	－	口縁部10%以下	内：にぶい橙色5YR7/4 外：にぶい黄橙色10YR7/4	
92	6	SD0605	－	弥生土器	甕	(17.4)	－	(3.5)	－	口縁部10%以下	にぶい橙色7.5YR6/4	
94	8	SD0801	－	土師器	坏	－	－	(2.4)	－	底部30%	橙色5YR7/6	
95	8	SD0801	－	土師器	坏	－	－	(1.5)	(6.4)	底部～高台部15%	橙色7.5YR7/6	
96	8	SD0801	－	土師器	椀	(15.1)	－	(5.1)	－	口縁部～体部10%	橙色5YR7/6	
97	10	SD1001	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.25)	－	脚台部50%	橙色7.5YR7/6	
98	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(21.0)	－	(5.5)	－	口縁部50%	浅黄橙色7.5YR8/4	
99	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(30.0)	－	(10.1)	－	口縁部15%	橙色7.5YR6/6	
100	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(28.0)	－	(7.9)	－	口縁部25%	橙色7.5YR7/6	
101	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(5.05)	－	口縁部15%	橙色5YR6/6	
102	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(24.0)	－	(6.8)	－	口縁部10%	橙色5YR7/6	
103	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(20.8)	－	(5.2)	－	口縁部20%	橙色5YR7/6	
104	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(18.0)	－	(9.2)	－	口縁部10%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：橙色7.5YR7/6	
105	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(27.4)	－	(8.6)	－	口縁部10%	橙色7.5YR7/6	
106	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(8.6)	－	口縁部20%	にぶい黄橙色10YR7/4	
107	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(17.0)	－	(8.3)	－	口縁部15%	浅黄橙色10YR8/3	
108	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(15.0)	－	(5.3)	－	口縁部20%	橙色7.5YR7/6	
109	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(19.8)	－	(9.9)	－	口縁部10%	にぶい黄橙色10YR7/4	
110	10	SD1002	－	弥生土器	壺	(17.0)	－	(7.6)	－	口縁部25%	にぶい黄橙色10YR7/4	
111	10	SD1002	－	弥生土器	小型壺	10.6	－	(3.45)	－	口縁部70%	橙色7.5YR7/6	
112	10	SD1002	－	弥生土器	小型壺	(11.0)	－	(2.1)	－	口縁部15%	浅黄橙色10YR8/4	
113	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(8.0)	(11.6)	－	体下部～底部20%	内：にぶい黄橙色10YR6/4 外：橙色7.5YR6/6	
114	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(11.4)	(8.4)	－	体下部～底部25%	内：灰黄色2.5Y7/2 外：にぶい黄橙色10YR7/4	
115	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(12.0)	(6.6)	－	底部20%	内：褐灰色10YR6/1 外：橙色7.5YR6/6	
116	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(6.0)	(3.65)	－	底部30%	内：にぶい黄橙色10YR7/4 外：にぶい橙色7.5YR7/1	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
117	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(11.0)	(4.3)	－	底部 25%	内：にぶい黄橙色 10YR7/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
118	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(10.6)	(5.1)	－	底部 40%	内：黒褐色 5YR2/1 外：橙色 5YR7/6	
119	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	10.8	(4.5)	－	底部 100%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
120	10	SD1002	－	弥生土器	壺	－	(8.2)	(6.0)	－	底部 25%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
121	10	SD1002	－	弥生土器	甕	(16.6)	－	(6.8)	－	口縁部 10% 以下～体部 15%	にぶい黄橙色 10YR6/4	
122	10	SX1001	上層	弥生土器	壺	(16.0)	－	(6.15)	－	口縁部 10 ～頸部 25%	橙色 5YR7/8	
123	10	SX1001	上層	弥生土器	甕	(18.0)	－	(8.3)	－	口縁部～頸部 15%	内：浅黄橙色 7.5YR8/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
124	10	SX1001	上層	弥生土器	甕	(24.0)	－	(4.0)	－	口縁部 10% 以下	浅黄橙色 7.5YR8/4	
125	10	SX1001	上層	土師器	甕	(16.6)	－	(2.9)	－	口縁部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
126	10	SX1001	上層	弥生土器	台付甕	－	－	(5.4)	－	脚台部 100%	内：灰色 5Y5/1 外：にぶい橙色 7.5YR6/4	
127	10	SX1001	上層	弥生土器	小型壺または鉢	－	5.0	(3.0)	－	底部 100%	灰白色 10YR8/2	
129	10	SX1004	－	弥生土器	壺	(12.9)	－	(7.4)	－	口縁部 90%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
130	10	SX1004	－	弥生土器	壺	(13.6)	－	(3.6)	－	口縁部 25%	浅黄橙色 7.5YR8/6	
131	10	SX1004	－	弥生土器	壺	－	(8.7)	(2.45)	－	底部 25%	内：黄灰色 2.5Y4/1 外：浅黄橙色 7.5YR8/4	
132	10	SX1004	－	弥生土器	甕	(23.0)	－	(8.2)	－	口縁部 15%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
133	10	SX1004	－	土師器	甕	(20.6)	－	(6.8)	－	口縁部 10%	橙色 5YR7/6	
134	10	SX1004	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.7)	－	脚台部 70%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
135	10	SX1004	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.7)	－	脚台部 40%	灰白色 10YR8/1	
136	10	SX1004	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.85)	－	脚台部 70%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
139	11	SD1105	－	弥生土器	壺	－	(10.0)	(3.95)	－	底部 25%	内：にぶい橙色 7.5YR6/4 外：橙色 7.5YR7/6	
140	11	SD1105	－	弥生土器	甕	(15.9)	－	(3.3)	－	口縁部 10% 以下	橙色 5YR6/6	
141	11	SD1105	－	弥生土器	高坏	(10.6)	－	(3.35)	－	口縁部 25%	浅黄橙色 10YR8/3	
142	12	SD1201	－	弥生土器	壺	(20.6)	－	(5.3)	－	口縁部 10% 以下	浅黄橙色 7.5YR8/6	
143	12	SD1201	－	弥生土器	壺	(18.0)	－	(6.0)	－	口縁部 20%	橙色 7.5YR6/6	
144	12	SD1201	－	弥生土器	小型壺	－	5.2	(3.7)	－	底部 100%	にぶい黄橙色 10YR7/2	
145	12	SD1201	－	弥生土器	甕	(27.6)	－	(4.9)	－	口縁部 10% 以下	灰黄褐色 10YR6/2	
146	12	SD1201	－	弥生土器	甕	(17.0)	－	(3.9)	－	口縁部 10% 以下	灰白色 2.5YR8/2	
147	12	SD1201	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.8)	－	脚台部 25%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
148	12	SD1204	－	弥生土器	壺	(16.4)	－	(3.9)	－	口縁部 25%	橙色 7.5YR7/6	
149	12	SD1204	－	土師器	壺	(14.2)	－	(6.1)	－	口縁部 25%	橙色 5YR7/6	
150	12	SD1204	－	弥生土器	壺	－	(9.0)	(3.5)	－	底部 20%	灰白色 2.5YR8/2	
151	12	SD1204	－	弥生土器	甕	(21.0)	－	(5.2)	－	口縁部 15%	浅黄橙色 10YR8/4	
152	12	SD1204	－	弥生土器	甕	(25.8)	－	(3.3)	－	口縁部 10% 以下	内：にぶい橙色 7.5YR5/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/3	
153	12	SD1204	－	弥生土器	甕	－	－	(5.1)	－	頸部～体部 25%	内：灰色 5Y5/1 外：にぶい橙色 5YR7/4	
154	12	SD1204	－	土師器	高坏	－	－	(7.9)	－	60%	橙色 5YR6/6	
155	12	SD1204	－	土師器	高坏	(17.6)	－	(3.75)	－	口縁部 30%	橙色 2.5YR7/6	
156	12	SD1204	－	土師器	高坏	－	－	(6.15)	－	脚部 30%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
157	12	SD1204	－	土師器	高坏	－	－	(5.3)	－	脚部 20%	にぶい橙色 5YR7/4	
158	12	SD1204	－	土師器	小型丸底土器	－	－	(3.3)	－	体部 25%	浅黄橙色 10YR8/3	
159	12	SD1207	－	弥生土器	壺	－	6.9	(4.0)	－	底部 100%	内：灰白色 10YR8/2 外：黒褐色 10YR3/1	
160	12	SD1207	－	弥生土器	壺	－	(7.0)	(2.3)	－	底部 40%	内：黄灰色 2.5Y5/1 外：にぶい橙色 7.5YR6/3	
161	12	SD1207	－	弥生土器	小型壺	－	(3.4)	(1.7)	－	底部 50%	内：褐灰色 10YR4/1 外：にぶい黄橙色 10YR7/2	
162	12	SD1207	－	土師器	甕	17.5	－	(6.5)	－	口縁部 75%	橙色 2.5YR6/8	
163	12	SD1207	－	土師器	S 字甕	(19.0)	－	(1.8)	－	口縁部 10%	内：にぶい橙色 7.5YR6/4 外：にぶい橙色 5YR7/4	
164	12	SD1207	－	土師器	高坏	－	－	(5.0)	－	柱状部 100%	橙色 5YR7/6	
165	12	SD1211	－	弥生土器	壺	(14.0)	－	(2.55)	－	口縁部 10%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
166	12	SD1211	－	弥生土器	壺	(14.4)	－	(3.2)	－	口縁部 15%	橙色 7.5YR7/6	
167	12	SD1211	－	弥生土器	壺	－	(4.8)	(2.1)	－	底部 15%	内：黄灰色 2.5Y6/1 外：橙色 7.5YR7/6	
168	12	SD1211	－	弥生土器	小型壺	－	(4.3)	(2.7)	－	底部 20%	内：灰色 5Y4/1 外：浅黄橙色 7.5YR8/3	
169	12	SD1211	－	弥生土器	甕	(27.0)	－	(4.6)	－	口縁部 10%	浅黄橙色 7.5YR8/3	
170	12	SD1211	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.0)	－	脚台部 30%	灰白色 10YR8/2	
171	12	SD1211	－	土師器	小型高坏	(10.7)	－	(2.55)	－	口縁部 100%	橙色 5YR7/8	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
172	12	SD1212	－	弥生土器	壺	(15.4)	－	(2.8)	－	口縁部15%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：橙色5YR7/6	
173	12	SD1212	－	土師器	甕	(15.0)	－	(2.8)	－	口縁部10%以下	橙色5YR6/6	
174	12	SK1214	－	弥生土器	甕	(17.0)	－	(12.0)	－	口縁部25～体部30%	にぶい橙色7.5YR7/3	
175	13	NR1301	埋土中層	陶器	天目茶碗	－	－	(1.6)	(4.4)	底部50%	内：暗赤褐色5YR3/6 外：灰白色5Y7/1	
176	13	NR1301	埋土中層	陶器	碗	－	－	(1.5)	(5.2)	底部30%	内：灰白色2.5Y8/2 外：灰白色2.5Y8/1	
177	13	NR1301	埋土下層	陶器	天目茶碗	－	－	(1.6)	3.5	底部100%	内：暗褐色10YR3/3 外：灰黄色2.5Y6/2	
178	13	NR1301	埋土中層	陶器	擂鉢	(31.8)	－	(3.5)	－	口縁部5%	にぶい赤褐色5YR5/4	
179	13	NR1301	埋土上層	灰釉陶器	碗	－	－	(1.5)	(8.4)	底部50%	内：灰白色7.5Y7/2 外：灰白色5Y8/1	
180	13	NR1301	埋土下層	土師器	碗	(13.8)	－	(3.7)	－	口縁部10%	灰黄色2.5Y7/2	
181	13	NR1301	埋土上層	須恵器	坏蓋	－	－	(2.5)	－	天井部50%	内：灰白色2.5Y7/1 外：灰白色5Y7/2	
182	13	NR1301	埋土上層	須恵器	坏身	(14.0)	－	3.5	－	40%	灰白色N8/	
183	13	NR1301	埋土上層	須恵器	坏身	－	－	(1.2)	(10.4)	高台部20%	灰白色N7/	
184	13	NR1301	埋土上層	須恵器	坏身	－	－	(2.1)	(9.0)	高台部40%	内：灰白色5Y8/1 外：灰白色5Y7/1	
185	13	NR1301	埋土上層	須恵器	坏身	(9.2)	－	4.3	－	20%	灰白色N8/	
186	13	NR1301	埋土上層	須恵器	瓶	－	－	(1.7)	(7.3)	高台部100%	灰白色2.5Y7/1	
187	13	NR1301	埋土上層	須恵器	壺	(15.4)	－	(5.9)	－	口縁部20%	内：灰色N5/　外：灰色N6/	
188	13	NR1301	上～中層	弥生土器	甕	(18.0)	－	(9.5)	－	口縁部～体部40%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：灰黄褐色10YR4/2	
189	13	NR1301	上～中層	土師器	小型壺	－	4.4	(4.5)	－	体部～底部50%	内：黄灰色2.5Y5/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
190	13	NR1301	上～中層	土師器	高坏	－	－	(8.3)	－	40%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：橙色5YR7/6	
210	14	SD1409	上層	須恵器	坏蓋	(16.2)	－	(3.0)	－	50%	にぶい橙色10YR7/3	
211	14	SD1409	上層	須恵器	坏蓋	(16.3)	－	(4.2)	－	30%	灰白色N7/	
212	14	SD1409	上層＋中層	須恵器	坏身	(14.4)	－	(4.0)	(9.8)	20%	灰白色N8/	
213	14	SD1409	上層	須恵器	坏身	(14.2)	－	(3.9)	(10.2)	20%	内：灰白色2.5Y7/1 外：灰白色N7/	
214	14	SD1409	上層	須恵器	坏身	(14.8)	－	4.7	(9.6)	40%	灰白色2.5Y8/1	
215	14	SD1409	中層	須恵器	坏身	－	－	(1.6)	(10.1)	高台部20%	灰白色10YR7/1	
216	14	SD1409	上層	須恵器	坏身	(9.7)	－	4.8	7.0	30%	灰白色N7/	
224	14	SX1425	石室床面	須恵器	長頸瓶	(10.2)	－	(1.9)	－	口縁部15%	内：灰黄色2.5Y7/2 外：灰黄色2.5Y8/1	
225	15	SD1501	埋土	土師器	坏	－	(5.2)	(2.1)	－	底部25%	橙色5YR7/8	
226	15	SD1502	埋土	土師器	甕	(16.1)	－	(3.1)	－	口縁部10%	橙色5YR6/6	
228	15	SD1504	埋土	弥生土器	甕	(17.0)	－	(3.3)	－	口縁部10%	橙色5YR7/6	
229	15	SD1504	埋土	土師器	S字甕	(16.0)	－	(1.8)	－	口縁部10%	灰黄褐色10YR4/2	
230	15	SD1505	上～中層	弥生土器	壺	(17.2)	－	(1.6)	－	口縁部10%	内：橙色7.5YR7/6 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
231	15	SD1505	上層	弥生土器	壺	(16.3)	－	(2.3)	－	口縁部10%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：橙色7.5YR7/6	
232	15	SD1505	黄色土外側	弥生土器	壺	(12.0)	－	(2.7)	－	口縁部20%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：にぶい橙色5YR7/4	
233	15	SD1505	中～下層＋黄色土外側	弥生土器	壺	－	(9.4)	(5.8)	－	体部～底部40%	内：灰白色10YR8/ 外：にぶい黄橙色10YR6/4	
234	15	SD1505	－	弥生土器	壺	－	8.4	(2.7)	－	底部90%	内：灰黄褐色10YR6/2 外：にぶい橙色7.5YR7/3	
235	15	SD1505	埋土	弥生土器	壺	－	(8.8)	(3.7)	－	底部30%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：橙色5YR7/6	
236	15	SD1505	暗褐色土	弥生土器	有台甕	－	9.5	(24.1)	－	体部30～脚台部50%	にぶい黄橙色10YR6/4	
237	15	SD1505	中～下層	弥生土器	甕	(22.1)	－	(4.1)	－	口縁部10%	内：橙色5YR6/6 外：橙色5YR7/6	
238	15	SD1505	上～中層	弥生土器	甕	(24.2)	－	(3.1)	－	口縁部15%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：灰褐色7.5YR5/2	
239	15	SD1505	上～中層	弥生土器	甕	(23.2)	－	(4.0)	－	口縁部10%	にぶい橙色7.5YR7/3	
240	15	SD1505	黄色土外側	弥生土器	甕	(26.2)	－	(3.6)	－	口縁部10%	内：にぶい橙色7.5YR6/4 外：にぶい黄橙色10YR7/3	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
241	15	SD1505	埋土	弥生土器	甕	(24.2)	－	(3.3)	－	口縁部 10%	内：灰褐色 7.5YR6/2 外：明褐灰色 7.5YR7/2	
242	15	SD1505	上～中層	弥生土器	甕	(19.2)	－	(3.4)	－	口縁部 15%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：にぶい橙色 5YR6/4	
243	15	SD1505	－	弥生土器	台付甕	－	(10.6)	(7.1)	－	脚台部 70%	内：明赤褐色 5YR5/6 外：橙色 2.5YR6/6	
244	15	SD1505	－	弥生土器	台付甕	－	(11.0)	(6.1)	－	脚台部 50%	内：橙色 5YR5/3 外：にぶい橙色 5YR6/4	
245	15	SD1505	黄色土外側	弥生土器	台付甕	－	9.4	(6.0)	－	脚台部 100%	内：黄灰色 2.5Y5/1 外：灰白色 2.5Y8/2	
246	15	SD1505	上～中層	弥生土器	台付甕	－	8.4	(4.9)	－	脚台部 70%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：明褐灰色 7.5YR7/2	
247	15	SD1505	中～下層	弥生土器	台付甕	－	－	(4.0)	－	脚台部 20%	内：橙色 5YR6/6 外：橙色 5YR6/8	
248	15	SD1505	中～下層	土師器	高坏	－	12.2	(6.15)	－	脚部 80%	橙色 5YR7/6	
249	15	SD1505	埋土	土師器	器台	－	－	(7.9)	－	60%	赤橙色 5YR4/6	
260	15	SD1557	－	弥生土器	壺	(13.0)	－	(5.1)	－	口縁部 20%	内：灰色 5Y6/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
261	15	SD1557	－	弥生土器	壺	(16.6)	－	(3.4)	－	口縁部 10%	内：にぶい黄橙色 10YR7/3 外：にぶい黄橙色 10YR7/4	
262	15	SD1557	－	弥生土器	壺	－	(8.6)	(3.3)	－	底部 20%	内：橙色 2.5YR6/6 外：灰黄褐色 10YR6/2	
263	15	SK1508	埋土	須恵器	坏蓋	－	－	(2.1)	－	1%	灰白色 N7/	
264	16	SD1618	－	土師器	鍋	－	－	(3.5)	(6.3)	底部 50%	橙色 7.5YR7/6	
265	16	SD1618	－	土師器	鍋	－	－	(2.2)	(6.4)	底部 20%	灰白色 10YR8/2	
266	16	SD1618	－	土師器	坏	－	(4.4)	(1.7)	－	底部 20%	灰白色 2.5YR/2	
267	16	SD1619	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(1.4)	－	口縁部 10	内：にぶい橙色 5YR6/4 外：明黄褐色 2.5YR6/6	
268	16	SD1619	－	弥生土器	壺	(15.0)	－	(6.5)	－	口縁部 30%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
269	16	SD1619	－	弥生土器	壺	(14.5)	－	(6.1)	－	口縁部 50%	浅黄橙色 7.5YR8/3	
270	16	SD1619	－	弥生土器	壺	(18.0)	－	(5.4)	－	口縁部 10%	内：にぶい黄橙色 10YR7/3 外：にぶい黄橙色 7.5YR7/4	
271	16	SD1619	－	弥生土器	壺	(25.8)	－	(3.95)	－	口縁部 20%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
272	16	SD1619	－	弥生土器	壺	－	11.6	(10.4)	－	体部～底部 50%	内：暗灰色 7.5YR5/1 外：にぶい橙色 7.5YR6/3	
273	16	SD1619	－	土師器	壺	(16.8)	－	7.1	－	30%	内：橙色 2.5YR6/6 外：にぶい橙色 5YR6/4	
274	16	SD1619	－	弥生土器	壺	－	(9.7)	(3.65)	－	底部 15%	灰白色 2.5Y8/2	
275	16	SD1619	－	弥生土器	甕	－	－	(4.65)	－	－	内：浅黄橙色 5YR8/6 外：橙色 5YR7/6	
276	16	SD1619	－	土師器	S字甕	(11.6)	－	(1.45)	－	口縁部 10%	内：にぶい橙色 7.5YR6/4 外：にぶい橙色 7.5YR6/3	
277	16	SD1619	－	土師器	S字甕	(16.4)	－	(4.9)	－	口縁部 20%	内：浅黄橙色 10YR8/3 外：にぶい黄橙色 10YR6/4	
278	16	SD1619	－	土師器	高坏	(20.4)	－	(5.2)	－	坏部 15%	内：橙色 5YR7/6 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
279	16	SD1619	－	弥生土器	壺	－	9.8	(10.7)	－	体部～底部 30%	内：黄灰色 2.5Y6/1 外：橙色 7.5YR7/6	
280	16	SD1620	－	弥生土器	壺	(16.2)	－	(3.9)	－	口縁部 15%	内：にぶい橙色 7.5YR7/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
281	16	SD1620	－	弥生土器	壺	(18.8)	－	(8.1)	－	口縁部 20%	内：にぶい橙色 7.5YR6/3 外：明褐灰色 7.5YR7/2	
282	16	SD1620	－	弥生土器	壺	－	8.0	(10.6)	－	60%	内：灰白色 10YR7/1 外：にぶい黄橙色 10YR7/2	
283	16	SD1620	－	弥生土器	壺	－	(8.6)	(2.5)	－	底部 60%	内：灰黄褐色 10YR6/2 外：にぶい黄橙色 10YR7/3	
284	16	SD1620	－	弥生土器	壺	－	(10.6)	(2.1)	－	底部 40%	内：黄灰色 2.5Y5/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
285	16	SD1620	－	弥生土器	甕	(25.4)	10.7	27.8	－	30%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：にぶい橙色 7.5YR6/3	
286	16	SD1620	－	弥生土器	甕	(20.0)	－	(10.1)	－	口縁部～体部 20%	内：にぶい橙色 7.5YR7/3 外：明褐灰色 7.5YR7/2	
287	16	SD1620	－	弥生土器	甕	(22.8)	－	(3.7)	－	口縁部 30%	内：にぶい橙色 5YR7/4 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
288	16	SD1620	－	弥生土器	甕	(14.2)	－	(7.0)	－	口縁部～体部 20%	内：にぶい橙色 7.5YR6/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/3	
289	16	SD1620	－	土師器	甕	(12.2)	－	(6.1)	－	口縁部～体部 30%	内：にぶい橙色 7.5YR7/3 外：橙色 5YR7/6	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
290	16	SD1620	－	土師器	甕	(14.2)	－	(8.8)	－	口縁部～体部40%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：にぶい黄橙色10YR7/2	
291	16	SD1620	－	弥生土器	台付甕	－	－	(7.4)	－	体部～接合部20%	内：にぶい黄橙色10YR7/4 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
292	16	SD1620	－	弥生土器	台付甕	－	(11.6)	(6.3)	－	脚台部30%	内：橙色5YR6/6 外：灰白色10YR8/2	
293	16	SD1620	－	土師器	台付甕	－	(9.4)	(6.7)	－	脚台部20%	灰白色10YR8/2	
294	16	SK1608	－	弥生土器	壺	(18.4)	－	(10.0)	－	口縁部～頸部30%	灰白色10YR7/1	
295	16	SK1608	－	弥生土器	壺	－	10.7	(10.7)	－	底部60%	内：灰白色10YR7/1 外：にぶい黄橙色10YR7/4	
296	15	SP1546	掘方埋土	土師器	甕	(16.1)	－	(2.8)	－	口縁部8%	内：灰褐色7.5YR6/2 外：灰黄褐色10YR5/2	
297	16	SP1612	掘方埋土	弥生土器	甕	－	－	(2.8)	－	－	内：浅黄橙色7.5YR8/3 外：橙色5YR7/6	
298	16	SP1613	－	弥生土器	壺	－	－	(2.0)	－	－	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい黄橙色10YR7/3	
306	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(18.3)	－	(2.7)	－	口縁部20%	内：灰黄褐色10YR6/2 外：橙色5YR6/6	
307	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(12.6)	－	(2.6)	－	口縁部20%	内：灰白色10YR7/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
308	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(3.3)	－	口縁部15%	内：灰白色10YR7/1 外：橙色7.5YR7/6	
309	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(15.6)	－	(6.1)	－	口縁部15%	灰白色2.5Y7/1	
310	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(16.1)	－	(4.6)	－	口縁部25%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
311	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(19.8)	－	(5.2)	－	口縁部20%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい橙色5YR7/4	
312	17	SD1703	－	弥生土器	壺	－	8.0	(6.3)	－	体部～底部40%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい黄橙色10YR7/2	
313	17	SD1703	－	弥生土器	甕	(21.8)	－	(2.1)	－	口縁部10%	にぶい黄橙色10YR7/3	
314	17	SD1703	－	弥生土器	甕	(21.6)	－	(4.1)	－	口縁部20%	内：橙色5YR6/6 外：灰褐色7.5YR6/2	
315	17	SD1703	－	弥生土器	壺	(18.2)	－	(3.7)	－	口縁部10%	内：黄灰色2.5Y5/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
316	17	SD1703	－	弥生土器	甕	(20.2)	－	(6.7)	－	口縁部20%	橙色7.5YR7/6	
317	17	SD1703	－	弥生土器	台付甕	－	(11.4)	(6.9)	－	脚台部40%	内：橙色7.5YR7/6 外：にぶい橙色7.5YR6/4	
318	17	SD1728	－	弥生土器	小型壺	－	(9.4)	(1.95)	－	底部25%	にぶい橙色7.5YR7/4	
319	17	SD1728	－	弥生土器	台付甕	－	(9.4)	(5.4)	－	脚台部30%	灰黄褐色10YR6/2	
320	17	SD1736	下層	弥生土器	壺	(13.0)	－	(2.75)	－	口縁部25%	橙色7.5YR7/6	
321	17	SD1736	－	弥生土器	壺	(18.6)	－	(7.0)	－	口縁部15%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：灰黄褐色10YR6/2	
322	17	SD1736	－	弥生土器	壺	(15.9)	－	(5.7)	－	口縁部20%	橙色7.5YR7/6	
323	17	SD1736	下層	弥生土器	壺	(32.0)	－	(5.4)	－	口縁部10%	内：黄灰色2.5Y6/1 外：にぶい黄橙色10YR6/3	
324	17	SD1736	－	弥生土器	壺	－	(9.4)	(4.45)	－	底部60%	内：褐灰色10YR6/1 外：浅黄橙色10YR8/3	
325	17	SD1736	－	土師器	小型壺	－	5.2	(2.8)	－	底部80%	にぶい橙色7.5YR7/4	
326	17	SD1736	－	弥生土器	小型壺	－	5.6	(2.7)	－	底部60%	内：褐灰色7.5YR6/1 外：浅黄橙色7.5YR8/4	
327	17	SD1736	－	土師器	甕	(15.0)	－	(3.15)	－	口縁部25%	浅黄橙色10YR8/3	
328	17	SD1736	－	土師器	甕	(22.9)	－	(5.0)	－	口縁部10%	にぶい橙色5YR7/4	
329	17	SD1736	－	弥生土器	甕	(25.2)	－	(3.9)	－	口縁部10%	にぶい橙色5YR6/3	
330	17	SD1736	－	弥生土器	甕	(24.2)	－	(4.1)	－	口縁部10%	灰白色10YR8/2	
331	17	SD1736	－	土師器	高坏	－	(9.6)	(5.75)	－	脚部30%	浅黄橙色10YR8/3	
332	17	SD1736	－	土師器	高坏	－	－	(4.6)	－	脚部40%	橙色5YR6/8	
333	17	SD1737	－	弥生土器	壺	(17.0)	－	(1.5)	－	口縁部10%	にぶい橙色7.5YR7/4	
334	17	SD1737	－	弥生土器	甕	(27.8)	－	(3.3)	－	口縁部25%	にぶい黄橙色10YR7/4	
335	17	SD1737	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.5)	－	体部～接合部20%	内：橙色7.5YR7/6 外：にぶい黄橙色10YR7/3	
336	17	SD1737	－	弥生土器	台付甕	－	－	(5.6)	－	脚台部60%	にぶい黄橙色10YR7/4	
337	17	SD1737	－	弥生土器	鉢	(17.0)	－	(5.75)	－	口縁部10%	内：灰白色10YR7/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
338	17	SD1770	－	弥生土器	壺	(17.6)	－	(4.7)	－	口縁部20%	にぶい橙色7.5YR6/4	
339	17	SD1770	－	弥生土器	壺	(17.8)	－	(1.9)	－	口縁部15%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
340	17	SD1770	－	弥生土器	壺	(20.2)	－	(2.1)	－	口縁部25%	内：黄灰色2.5Y6/1 外：橙色7.5YR7/6	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
341	17	SB1770	－	弥生土器	壺	(13.0)	－	(3.7)	－	口縁部10%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
342	17	SB1770	－	弥生土器	壺	－	6.2	16.3	－	90%	内：にぶい橙色7.5YR6/3 外：にぶい橙色5YR7/4	
343	17	SB1770	－	弥生土器	壺	－	(10.6)	(6.0)	－	体部～底部25%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：橙色7.5YR7/6	
344	17	SB1770	－	弥生土器	甕	(20.0)	－	(5.5)	－	口縁部～体部15%	橙色5YR6/6	
345	17	SB1770	－	弥生土器	台付甕	－	(10.0)	(7.0)	－	脚台部40%	内：にぶい橙色5YR6/4 外：にぶい橙色7.5YR6/4	
346	17	SB1770	－	弥生土器	小型鉢	(9.5)	5.5	5.1	－	50%	橙色5YR7/6	
347	17	SB1773	－	弥生土器	壺	(20.2)	－	(2.9)	－	口縁部15%	内：にぶい橙色5YR6/4 外：にぶい橙色7.5YR6/3	
348	17	SB1773	－	弥生土器	小型壺	－	4.9	(2.9)	－	体部～底部60%	内：灰褐色7.5YR6/2 外：にぶい黄橙色10YR7/2	
349	17	SB17111	－	弥生土器	壺	(18.0)	－	(1.4)	－	口縁部10%	にぶい橙色7.5YR7/3	
350	17	SB17111	－	弥生土器	壺	－	(10.0)	(3.0)	－	底部25%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
351	17	SB17112	－	弥生土器	壺	(16.6)	－	(3.1)	－	口縁部20%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：橙色7.5YR7/6	
352	17	SP1718	－	土師器	甕	(8.6)	－	(4.3)	－	口縁部10%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：浅黄橙色10YR8/4	
353	17	SP1756	－	土師器	器台	(7.4)	－	(4.0)	－	口縁部30%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
354	17	SP17115	撹乱埋土	弥生土器	壺	(17.2)	－	(2.2)	－	口縁部10%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：橙色7.5YR7/6	
355	17	SP1761	－	弥生土器	壺	(12.2)	－	(2.9)	－	口縁部15%	橙色7.5YR7/6	
356	18	SB1801	－	土師器	坏	(11.7)	－	4.05	－	30%	淡橙色5YR6/4	
357	18	SB1801	－	土師器	坏	(10.6)	－	4.3	－	40%	内：橙色5YR7/6 外：にぶい赤褐色10YR6/4	
358	18	SB1801	－	土師器	坏	(11.2)	－	4.45	－	30%	橙色7.5YR7/6	
359	18	SB1801	－	土師器	坏	(11.4)	－	(3.8)	－	口縁部25%	内：橙色5YR7/8 外：浅黄橙色10YR8/3	
360	18	SB1801	－	土師器	高坏	(12.7)	－	(4.0)	－	口縁部～体部30%	にぶい黄橙色10YR6/3	
361	18	SB1801	－	土師器	高坏	(13.6)	－	(3.1)	－	口縁部～体部15%	内：にぶい赤褐色5YR4/3 外：にぶい赤褐色5YR5/4	
362	18	SB1801	－	弥生土器	壺	(16.4)	－	(7.4)	－	口縁部～胴部30%	灰白色5Y7/1	
363	18	SB1801	－	弥生土器	壺	－	(9.6)	(4.35)	－	底部25%	にぶい黄橙色10YR7/4	
364	18	SB1802	－	弥生土器	壺	－	(10.2)	(2.3)	－	底部30%	内：褐灰色10YR6/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
365	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(18.8)	－	(1.7)	－	口縁部20%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
366	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(1.7)	－	口縁部20%	にぶい橙色7.5YR7/4	
367	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(21.4)	－	(4.9)	－	口縁部20%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：橙色7.5YR7/6	
368	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(23.4)	－	(3.1)	－	口縁部10%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
369	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(17.1)	－	(8.0)	－	口縁部40%	にぶい黄橙色10YR7/2	
370	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(15.9)	－	(5.6)	－	口縁部25%	内：にぶい黄橙色10YR7/4 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
371	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(13.0)	－	(3.1)	－	口縁部25%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい橙色7.5YR7/3	
372	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(12.1)	－	(6.3)	－	口縁部30%	にぶい橙色7.5YR7/4	
373	18	SB1803	－	弥生土器	壺	(23.2)	－	(4.4)	－	口縁部15%	内：灰黄褐色10YR6/2 外：にぶい橙色7.5YR7/3	
374	18	SB1803	－	弥生土器	壺	－	10.0	(16.1)	－	体部～底部40%	灰白色10YR8/2	
375	18	SB1803	－	弥生土器	壺	－	9.1	(3.7)	－	底部100%	内：黄灰色2.5Y7/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
376	18	SB1803	－	弥生土器	壺	－	(9.2)	(4.0)	－	底部40%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：にぶい黄橙色10YR6/4	
377	18	SB1803	－	弥生土器	壺	－	8.0	(3.2)	－	底部100%	内：灰黄色2.5Y6/2 外：橙色7.5YR7/6	
378	18	SB1803	－	弥生土器	小型壺	(8.4)	－	(3.6)	－	口縁部25%	にぶい黄橙色10YR7/4	
379	18	SB1803	－	弥生土器	小型壺	(10.2)	－	(2.2)	－	口縁部30%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：橙色7.5YR7/6	
380	18	SB1803	－	弥生土器	小型壺	－	6.8	(13.1)	－	体部～底部90%	内：にぶい黄橙色10YR6/3 外：にぶい黄橙色10YR7/3	
381	18	SB1803	－	弥生土器	小型壺	－	(6.3)	(6.3)	－	底部100%	内：明褐灰色7.5YR7/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	

第6表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
382	18	SD1803	－	弥生土器	小型壺	－	(5.7)	(3.0)	－	底部30%	内：灰白色7.5Y7/1 外：淡黄灰色2.5Y8/3	
383	18	SD1803	－	弥生土器	小型壺	－	(5.7)	(2.75)	－	底部50%	内：黄灰色2.5Y6/1 外：淡黄色2.5Y8/3	
384	18	SD1803	－	弥生土器	甕	(20.4)	－	(5.15)	－	口縁部15%	にぶい橙色7.5YR7/4	
385	18	SD1803	－	弥生土器	甕	(25.2)	－	(3.4)	－	口縁部20%	内：にぶい黄橙色10YR7/4 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
386	18	SD1803	－	弥生土器	甕	(20.6)	－	(2.9)	－	口縁部7%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい黄橙色10YR4/3	
387	18	SD1803	－	弥生土器	甕	(20.4)	－	(6.7)	－	口縁部15%	内：にぶい橙色7.5YR7/3 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
388	18	SD1803	－	弥生土器	甕	(20.8)	－	(6.6)	－	口縁部20%	にぶい黄橙色10YR3/1	
389	18	SD1803	－	弥生土器	台付甕	－	11.4	(9.3)	－	脚台部100%	内：橙色2.5YR6/6 外：にぶい橙色5YR7/4	
390	18	SD1803	－	弥生土器	台付甕	6.4	－	(5.8)	－	脚台部90%	にぶい橙色5YR7/4	
391	18	SD1803	－	弥生土器	台付甕	－	(9.4)	(4.6)	－	脚台部30%	内：にぶい橙色5YR7/4 外：にぶい橙色2.5YR6/4	
392	18	SD1809	－	弥生土器	壺	－	(9.8)	(2.0)	－	底部15%	内：明灰色10YR6/1 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
393	18	SD1815	－	弥生土器	壺	(13.7)	－	(1.2)	－	口縁部10%	内：橙色7.5YR7/6 外：橙色7.5YR6/6	
394	18	SD1815	－	弥生土器	壺	－	(8.2)	(3.0)	－	底部20%	内：にぶい橙色7.5YR6/4 外：橙色2.5YR6/6	
395	18	SD1815	－	弥生土器	甕	(20.4)	－	(4.8)	－	口縁部10%	内：にぶい橙色7.5YR7/4 外：にぶい黄橙色10YR7/4	
396	18	SD1815	－	弥生土器	台付甕	－	(10.2)	(4.0)	－	台部15%	にぶい橙色7.5YR7/3	
397	18	SD1816	－	弥生土器	壺	(20.0)	－	(8.0)	－	口縁部25%	内：にぶい黄橙色10YR7/3 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
398	18	SD1816	－	弥生土器	壺	(11.2)	8.2	14.7	－	70%	内：灰黄褐色10YR6/2 外：にぶい黄橙色10YR7/3	
399	18	SD1816	－	弥生土器	小型壺	(12.4)	－	(5.5)	－	口縁部～頸部15%	にぶい橙色7.5YR7/4	
400	18	SD1816	－	弥生土器	壺	(13.4)	－	(5.9)	－	口縁部25%	内：橙色5YR6/6 外：橙色7.5YR6/6	
401	18	SD1816	－	弥生土器	壺	(16.0)	－	(3.15)	－	口縁部30%	灰黄褐色10YR6/2	
402	18	SD1816	－	弥生土器	小型壺	－	(6.4)	(8.3)	－	体部～底部30%	にぶい黄橙色10YR7/3	
403	18	SD1816	－	弥生土器	壺	－	－	(21.5)	－	体部40%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい黄橙色10YR7/4	
404	18	SD1816	－	弥生土器	壺	－	－	(13.7)	－	体部35%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：にぶい黄橙色10YR7/4	
405	18	SD1816	－	弥生土器	壺	－	(10.8)	(3.0)	－	底部40%	にぶい黄橙色10YR7/2	
406	18	SD1816	－	弥生土器	甕	(25.0)	－	(10.2)	－	口縁部～体部10%	明赤褐色2.5YR5/6	
407	18	SD1816	－	弥生土器	甕	(22.4)	－	(9.1)	－	口縁部～体部10%	橙色5YR6/8	
408	18	SD1816	－	弥生土器	甕	－	－	(6.8)	－	体部15%	橙色5YR6/8	
409	18	SD1816	－	弥生土器	台付甕	8.0	(6.0)	－	－	脚台部100%	にぶい黄橙色10YR7/3	
410	18	SK1801	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(2.0)	－	口縁部10%以下	橙色7.5YR7/6	
411	18	SK1801	－	弥生土器	壺	－	(9.2)	(2.3)	－	底部40%	にぶい橙色7.5YR7/4	
412	18	SK1801	－	弥生土器	甕	(24.8)	－	(2.3)	－	口縁部10%以下	にぶい橙色5YR6/4	
413	18	SK1802	－	弥生土器	壺	－	(8.6)	(3.6)	－	底部50%弱	橙色5YR7/6	
414	18	SK1802	－	弥生土器	甕	(20.0)	－	(7.8)	－	口縁部～体部15%	橙色5YR7/6	
415	18	SK1802	－	弥生土器	甕	(10.0)	－	(6.9)	－	口縁部～頸部10%	橙色5YR6/6	
416	18	SK1802	－	弥生土器	甕	(19.6)	－	(6.25)	－	口縁部10%	橙色5YR6/6	
417	18	SK1806	－	弥生土器	壺	(15.8)	－	(4.0)	－	口縁部15%	橙色5YR6/6	
418	18	SK1806	－	弥生土器	壺	(14.0)	－	(3.1)	－	口縁部10%	にぶい橙色5YR7/4	
419	18	SK1806	－	弥生土器	壺	(19.0)	－	(4.1)	－	口縁部10%以下	橙色7.5YR7/6	
421	18	SX1802	－	弥生土器	壺	(14.0)	－	(2.8)	－	口縁部15%	にぶい橙色7.5YR7/4	
422	18	SX1402	－	弥生土器	壺	－	(11.2)	(3.5)	－	底部10%	にぶい橙色7.5YR7/4	
423	18	SP1803	－	土師器	壺	(23.4)	－	(9.85)	－	口縁部25%	にぶい橙色7.5YR7/4	
424	19	土器集中地点		土師器	壺	(13.0)	－	(4.2)	－	口縁部20%	内：灰白色10YR7/1 外：にぶい黄橙色10YR7/2	
425	19	土器集中地点		弥生土器	壺	14.2	－	(16.4)	－	口縁部100～体部20%	にぶい橙色7.5YR7/4	
426	19	土器集中地点		弥生土器	壺	(12.9)	－	(14.0)	－	口縁部～体部20%	にぶい橙色7.5YR7/4	
427	19	土器集中地点		弥生土器	壺	(19.0)	－	(4.7)	－	口縁部25%	内：にぶい黄橙色10YR6/4 外：にぶい黄橙色10YR6/3	
428	19	土器集中地点		弥生土器	壺	(16.2)	－	(1.9)	－	口縁部20%	内：明褐灰色7.5YR7/2 外：にぶい橙色7.5YR7/4	
429	19	土器集中地点		弥生土器	壺	(16.4)	－	(4.3)	－	口縁部25%	にぶい橙色7.5YR7/4	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
430	19	土器集中地点		弥生土器	壺	(18.3)	－	(9.1)	－	口縁部 25%	内：にぶい黄橙色 10YR7/2 外：明褐灰色 7.5YR7/2	
431	19	土器集中地点		弥生土器	壺	(29.0)	－	(4.3)	－	口縁部 10%	内：にぶい黄橙色 10YR7/2 外：灰黄褐色 10YR6/2	
432	19	土器集中地点		弥生土器	壺	－	(13.0)	(4.5)	－	底部 20%	にぶい黄橙色 10YR6/4	
433	19	土器集中地点		弥生土器	壺	－	11.6	(5.4)	－	底部 90%	内：にぶい黄橙色 10YR7/2 外：明褐灰色 7.5YR7/2	
434	19	土器集中地点		弥生土器	壺	－	(12.6)	(2.7)	－	底部 40%	内：にぶい黄橙色 10YR6/3 外：灰黄褐色 10YR6/2	
435	19	土器集中地点		弥生土器	壺	－	(10.2)	(2.2)	－	底部 20%	内：黄灰色 2.5Y6/1 外：にぶい黄橙色 10YR6/4	
436	19	土器集中地点		弥生土器	壺	－	(9.4)	(1.8)	－	底部 20%	内：橙色 2.5YR6/6 外：淡赤橙色 2.5YR7/4	
437	19	土器集中地点		弥生土器	甕	(20.9)	－	(6.4)	－	口縁部～胴部 10%	内：橙色 2.5YR6/6 外：にぶい赤褐色 2.5YR5/4	
439	14	遺石塚物	黄褐色土	須恵器	坏蓋	(15.0)	－	(2.5)	－	口縁部～体部 20%	内：灰白色 2.5Y7/1 外：灰黄色 2.5Y7/2	
440	14	遺石塚物	黄褐色土	須恵器	坏身	－	－	(2.2)	(10.2)	高台部 25%	内：灰白色 2.5Y7/1 外：黄灰色 2.5Y6/1	
441	14	遺石塚物	黄・灰褐色土	須恵器	坏身	(12.8)	－	4.1	(10.0)	20%	灰白色 N7/	
442	14	遺石塚物	黄～灰褐色土	須恵器	坏身	－	－	(3.9)	(5.8)	高台部 50%	内：灰白色 5Y7/1 外：灰色 N6/	
443	14	遺石塚物	黄褐色土	須恵器	坏身	－	－	(1.8)	(7.4)	高台部 25%	灰白色 N7/	
444	14	遺石塚物	黄褐色土	灰釉陶器	椀	－	－	(2.6)	(7.0)	底部 50%	灰白色 2.5Y7/1	
445	14	遺石塚物	黄褐色土	灰釉陶器	椀	－	－	(2.35)	7.7	底部 100%	灰白色 N8/	
446	14	遺石塚物	黒～灰・黄褐色土	灰釉陶器	椀	－	－	(3.15)	(8.2)	底部 30%	灰白色 2.5Y6/1	
447	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	灰釉陶器	椀	(13.9)	－	(4.35)	6.7	口縁部 40～底部 100%	灰白色 N8/	
448	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	灰釉陶器	椀	(14.4)	－	(2.8)	－	口縁部 40%	灰白色 5Y8/1	
449	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	灰釉陶器	椀	－	－	(1.75)	7.65	底部 60%	灰白色 2.5Y8/1	
450	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	灰釉陶器	椀	－	－	(2.75)	(6.3)	底部 70%	灰色 N6/	
451	14	遺石塚物	黒～灰・黄褐色土	灰釉陶器	鉢	(24.0)	－	(9.1)	－	口縁部～体部 20%	灰白色 2.5Y7/1	
452	14	遺石塚物	黄褐色土	須恵器	甕	－	(6.0)	(4.65)	－	底部 30%	灰白色 N7/	
453	14	遺石塚物	黄褐色土	須恵器	甕	－	－	(6.6)	(8.3)	高台部 25%	灰白色 2.5Y7/1	
454	14	遺石塚物	黄褐色土	灰釉陶器	甕	－	－	(5.1)	(9.5)	底部 50%	灰白色 N8/	
455	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	緑釉陶器	椀	－	－	(4.05)	6.8	底部 90%	釉：明緑灰色 10GY8/1 露胎：灰白色 N8/	
456	14	遺石塚物	黄褐色土	土師器	椀	－	－	(2.0)	(6.65)	底部 100%	橙色 5YR6/8	
457	14	遺石塚物	灰褐色土	土師器	椀	－	－	(1.7)	6.0	底部 70%	内：浅黄橙色 7.5YR8/3 外：浅黄橙色 7.5YR8/4	
458	14	遺石塚物	黄褐色土	土師器	椀	－	－	(2.7)	(7.0)	底部 20%	浅黄橙色 7.5YR8/6	
459	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	土師器	椀	－	－	(2.3)	(7.4)	底部 25%	橙色 5YR7/8	
460	14	遺石塚物	灰褐色土	土師器	椀	－	(8.4)	(3.0)	－	底部 70%	橙色 5YR6/8	
461	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	土師器	椀	－	－	(3.1)	(9.0)	底部 20%	浅黄橙色 10YR8/3	
462	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	土師器	椀	－	－	(3.6)	－	体部～底部 30%	橙色 5YR6/8	
463	19	基壇		土師器	椀	－	－	(2.5)	(8.2)	高台部 50%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
464	14	遺石塚物	黄褐色土	土師器	坏	－	5.0	(2.0)	－	底部 10%	内：橙色 5YR6/6 外：明赤褐色 5YR5/6	
465	14	遺石塚物	黄褐色土	土師器	坏	－	(6.0)	(2.7)	－	底部 25%	内：橙色 5YR7/6 外：橙色 2.5YR6/8	
466	14	遺石塚物	灰・黄褐色土	土師器	坏	(13.7)	6.1	3.9	－	40%	橙色 5YR6/6	
467	14	遺石塚物	灰褐色土	土師器	坏	－	5.0	(2.1)	－	底部 50%	橙色 2.5YR6/6	
468	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	土師器	坏	－	4.7	(1.5)	－	底部 80%	浅黄橙色 7.5YR8/6	
469	14	遺石塚物	黒～灰褐色土	土師器	坏	－	5.3	(2.6)	－	底部 60%	内：にぶい黄橙色 10YR7/4 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
470	19	基壇		土師器	坏	－	5.4	(2.0)	－	底部 100%	橙色 5YR7/6	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
471	14	礎石建物	黒～灰褐色土	土師器	坏	－	6.1	(2.2)	－	底部 60%	橙色 5YR6/6	
476	19	掘込地業		須恵器	坏蓋	－	－	(2.7)	－	天井部 20%	内：灰白色 2.5Y7/1 外：灰白色 10YR7/1	
477	19	基壇		須恵器	坏身	－	－	(3.3)	(10.4)	体部～高台部 20%	灰白色 2.5Y7/1	
478	19	掘込地業		須恵器	坏蓋	(10.0)	－	3.2	－	25%	灰白色 N6/	
479	14	SK1419	埋土	土師器	椀	－	－	(1.7)	(7.2)	底部 20%	内：橙色 7.5YR7/6 外：橙色 5YR6/6	
480	14	SK1419	埋土	土師器	坏	(11.6)	6.1	3.4	－	60%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
481	14	SK1419	埋土	土師器	坏	(12.0)	－	(2.1)	－	口縁部 10%	橙色 5YR6/6	
482	14	SK1419	埋土	土師器	坏	－	(5.0)	(1.7)	－	底部 20%	橙色 5YR6/8	
483	14	SK1419	埋土	土師器	坏	－	(5.6)	(1.7)	－	底部 25%	浅黄橙色 10YR6/4	
484	14	SK1419	埋土	土師器	坏	－	(6.0)	(2.6)	－	底部 20%	浅黄橙色 10YR6/3	
485	14	SK1445	埋土	土師器	坏	－	(5.0)	(1.9)	－	底部 20%	橙色 7.5YR7/6	
486	14	SK1426	埋土	須恵器	坏身	－	－	(2.2)	(10.4)	高台部 25%	灰白色 N7/	
487	14	SK1426	埋土	須恵器	坏身	(12.8)	－	(3.0)	－	口縁部 10%	灰白色 N7/	
488	14	SK1427	埋土	土師器	椀	－	－	(3.1)	(6.7)	底部 15%	橙色 5YR6/6	
489	14	SK1427	埋土	土師器	椀	－	－	(2.3)	(7.6)	底部 20%	橙色 5YR6/6	
490	14	SK1427	埋土	土師器	坏	－	(6.6)	(2.55)	－	底部 50%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
491	14	SK1427	埋土	土師器	坏	－	(5.6)	(1.7)	－	底部 25%	橙色 5YR6/6	
492	14	SK1428	埋土	土師器	坏	－	(5.7)	(2.6)	－	底部 40%	灰白色 2.5Y8/2	
493	15	SX1507	炭化物直上	灰釉陶器	椀	－	－	(1.55)	(7.6)	底部 25%	内：灰白色 7.5Y7/1 外：灰白色 10YR7/1	
494	15	SX1507	炭化物層	黒色土器	椀	(15.8)	－	4.4	(6.6)	40%	内：黒色 7.5YR7/1 にぶい橙色 7.5YR7/4	
495	15	SX1507	炭化物直上	土師器	椀	(16.1)	－	6.35	9.0	70%	浅黄橙色 10YR8/4	
496	15	SX1507	炭化物直上	土師器	椀	(15.2)	－	(3.6)	－	口縁部 10%	浅黄橙色 10YR8/3	
497	15	SX1507	－	土師器	椀	－	－	(3.1)	(8.6)	底部 90%	浅黄橙色 10YR8/3	
498	15	SX1507	－	土師器	椀	－	－	(3.7)	(8.4)	底部 90%	橙色 7.5YR7/6	
499	15	SX1507	炭化物直上	土師器	椀	－	－	(3.65)	(9.3)	底部 10%	浅黄橙色 10YR8/4	
500	15	SX1507	炭化物直上	土師器	椀	－	－	(3.3)	(8.8)	底部 10%	浅黄橙色 10YR8/3	
501	15	SX1507	－	土師器	椀	－	－	(2.8)	(8.7)	底部 20%	橙色 5YR7/6	
502	15	SX1507	炭化物直上	土師器	椀	－	－	(2.7)	(7.3)	底部 40%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
503	15	SX1507	－	土師器	椀	－	－	(2.8)	(9.6)	底部 15%	灰白色 10YR8/2	
504	15	SX1507	炭化物直上	土師器	皿	(12.4)	－	3.3	7.6	60%	橙色 5YR7/6	
505	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	(14.2)	5.6	4.9	－	60%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
506	15	SX1507	－	土師器	坏	－	6.4	(2.1)	－	底部 100%	内：浅黄橙色 10YR8/3 外：にぶい黄橙色 10YR7/3	
507	15	SX1507	炭化物層（壁面）	土師器	坏	－	6.2	(3.3)	－	底部 50%	内：灰白色 2.5Y8/1 外：灰白色 2.5Y8/2	
508	15	SX1507	炭化物層	土師器	坏	－	(5.2)	(2.8)	－	底部 30%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
509	15	SX1507	－	土師器	坏	－	(6.0)	(1.0)	－	底部 40%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
510	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	(11.6)	5.0	3.4～3.6	－	60%	浅黄橙色 10YR8/4	
511	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	(14.1)	(5.6)	3.8	－	15%	浅黄橙色 10YR8/4	
512	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	10.0	5.1	3.8～4.3	－	90%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
513	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	(13.0)	(4.4)	3.5	－	60%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
514	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	12.2	4.6	3.3～3.7	－	70%	内：橙色 5YR6/6 外：にぶい橙色 5YR6/4	
515	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	12.3	4.7	3.2～3.3	－	80%	内：橙色 7.5YR7/6 外：橙色 7.5YR6/6	
516	15	SX1507	炭化物直上	土師器	坏	－	5.0	(1.9)	－	底部 100%	内：浅黄橙色 7.5YR8/4 外：浅黄橙色 7.5YR8/6	
517	15	SX1507	－	土師器	坏	－	(5.6)	(2.8)	－	底部 30%	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	
518	15	SX1507	－	土師器	坏	－	(5.4)	(2.0)	－	底部 50%	内：明赤褐色 5YR5/8 外：橙色 5YR6/8	
519	15	SX1507	火山灰層	土師器	甕高台部	－	(7.8)	(3.5)	－	高台部 100%	内：浅黄橙色 10YR8/4 外：橙色 7.5YR7/6	
521	5	大溝	下層	須恵器	坏身	(14.5)	－	4.4	(10.6)	25%	灰白色 N7/	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
522	6	大溝	－	須恵器	坏身	(14.4)	－	3.9	(9.1)	30%	灰白色N7/	
523	5	大溝	上層	須恵器	坏身	(13.2)	－	3.7	(8.8)	15%	灰白色N7/	
524	10	大溝	－	須恵器	坏身	(14.2)	－	3.6	(9.2)	40%	灰白色N7/	
525	6	大溝	－	須恵器	坏身	(11.7)	－	3.7	(9.0)	15%	灰白色7.5Y7/1	
526	6	大溝	－	須恵器	坏身	－	－	(2.2)	11.4	高台部80%	灰黄色2.5Y7/2	
527	4	大溝	下層	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	10.9	高台部90%	灰白色N7/	
528	5	大溝	下層	須恵器	坏身	－	－	(3.2)	(9.4)	高台部50%	灰白色N8/	
529	3	大溝	埋土	須恵器	坏身	－	－	(1.7)	(10.0)	高台部40%	灰白色5Y7/1	
530	3	大溝	－	須恵器	坏身	－	－	(1.9)	10.8	高台部50%	灰白色2.5Y8/1	
531	9	大溝	－	須恵器	坏身	－	－	(2.1)	(9.6)	高台部50%	内：灰白色N7/ 外：灰白色N8/	
532	8	大溝	上層	須恵器	坏身	－	－	(2.1)	(8.6)	高台部30%	灰白色N7/	
533	6	大溝	－	須恵器	坏身	(11.3)	－	4.1	(7.6)	40%	灰白色2.5Y7/1	
534	6	大溝	－	須恵器	坏身	－	－	(1.8)	7.6	高台部50%	灰色N6/	
535	6	大溝	－	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	8.4	高台部30%	内：灰色N6/ 外：黄灰色2.5Y6/1	
536	7	大溝	－	須恵器	坏身	－	－	(3.2)	8.1	高台部20%	内：にぶい黄橙色10YR7/2 外：灰黄褐色10YR6/2	
537	5	大溝	－	須恵器	坏身	(16.5)	－	6.5	(12.0)	30%	灰白色N7/	
538	6	大溝	－	須恵器	坏身	(11.6)	(9.2)	3.6	－	40%	灰白色N7/	
539	5	大溝	下層	須恵器	坏蓋	(15.5)	－	(2.6)	－	口縁部～天井部30%	灰色N6/	
540	3	大溝	埋土	須恵器	坏蓋	(18.3)	－	(3.15)	－	口縁部～体部25%	灰白色N7/	
541	3	大溝	－	須恵器	坏蓋	(19.8)	－	(1.95)	－	口縁部～体部12%	灰色N6/	
542	4	大溝	下層	須恵器	坏蓋	(15.2)	－	(2.2)	－	口縁部15%	内：灰白色N7/ 外：灰色N6/	
543	6	大溝	－	須恵器	坏蓋	(15.5)	－	(2.55)	－	口縁部～体部20%	内：灰白色N8/ 外：灰白色N7/	
544	6	大溝	－	須恵器	坏蓋	(17.2)	－	(2.45)	－	口縁部～体部20%	灰白色N8/	
545	8	大溝	上層	須恵器	坏蓋	(16.1)	－	(2.65)	－	口縁部～体部15%	内：灰白色N7/ 外：灰色N6/	
546	4	大溝	上層	須恵器	坏蓋	(15.5)	－	(1.75)	－	口縁部～体部20%	灰白色N7/	
547	8	大溝	上層	須恵器	坏蓋	(16.3)	－	(1.9)	－	口縁部15%	灰白色N7/	
548	3	大溝	埋土	須恵器	坏蓋	－	－	(3.45)	－	天井部40%	灰白色N8/	
549	6	大溝	－	須恵器	坏蓋	(18.0)	－	(2.65)	－	口縁部～天井部30%	内：灰色N6/ 外：灰白色N7/	
550	3	大溝	－	須恵器	坏蓋	(17.8)	－	(3.15)	－	口縁部～体部20%	内：灰白色N8/ 外：灰白色5Y7/1	
551	5	大溝	下層	須恵器	坏蓋	(17.4)	－	(2.1)	－	口縁部～体部12%	内：灰色N6/ 外：灰白色N7/	
552	3	大溝	－	須恵器	坏蓋	(18.4)	－	(2.7)	－	口縁部～体部10%	内：灰白色N7/ 外：灰色N6/	
553	5	大溝	下層	須恵器	坏蓋	(14.7)	－	(2.5)	－	20%	灰白色N8/	
554	5	大溝	－	須恵器	盤	－	－	(1.8)	(11.5)	高台部40%	灰白色N7/	
555	8	大溝	下層	須恵器	盤	－	－	(2.0)	(13.3)	高台部25%	灰白色N8/	
556	3	大溝	埋土	須恵器	甕	(26.0)	－	(8.2)	－	口縁部～頸部20%	灰色N6/	
557	3	大溝	－	須恵器	甕	(29.8)	－	(9.2)	－	口縁部20%	内：灰白色N7/ 外：黄灰色2.5Y6/1 灰色N4/	
558	9	大溝	－	須恵器	転用硯	－	－	－	－	－	灰白色N7/	
559	8	大溝	下層	緑釉陶器	椀	(14.1)	－	4.1	(7.8)	30%	明オリーブ灰色2.5Y7/1	
560	10	大溝	－	灰釉陶器	椀	－	－	(2.4)	6.9	底部100%	灰白色N8/	
561	10	大溝	－	灰釉陶器	椀	(14.2)	－	(3.8)	－	口縁部25%	内：灰オリーブ色7.5Y6/2 外：灰白色N8/	
562	6	大溝	－	灰釉陶器	椀	－	－	(2.0)	(8.1)	底部10%	灰白色N8/	
563	10	大溝	－	灰釉陶器	椀	－	－	(1.5)	(6.8)	底部30%	灰白色N8/	
564	10	大溝	－	灰釉陶器	椀	－	－	(2.6)	(7.6)	底部40%	灰白色N8/	
565	6	大溝	－	灰釉陶器	椀	－	－	(1.3)	(5.9)	底部25%	灰白色N7/	
566	10	大溝	－	土師器	盤	－	－	(1.6)	(8.6)	底部30%	灰黄色2.5Y7/2	
567	10	大溝	－	土師器	椀	(16.8)	－	5.95	8.7	体部15～底部75%	にぶい黄橙色10YR7/4	
568	10	大溝	－	土師器	椀	－	－	(3.6)	(8.8)	底部30%	淡黄色2.5YR/3	
569	9	大溝	－	土師器	椀	－	－	(3.4)	(9.0)	底部30%	灰白色2.5YR/2	
570	10	大溝	－	土師器	椀	(15.7)	－	5.7	(8.6)	体部20～底部50%	灰白色10YR8/2	
571	10	大溝	－	土師器	椀	(16.1)	－	5.6	9.7	口縁部15～体部60～体部80%	灰白色10YR8/1	
572	9	大溝	－	土師器	椀	(18.0)	－	(3.6)	－	口縁部～体部10%	にぶい黄橙色10YR7/2	
573	10	大溝	－	土師器	椀	－	－	(2.9)	(8.8)	底部70%	にぶい黄橙色10YR7/3	
574	9	大溝	－	土師器	椀	－	－	(4.8)	(6.5)	底部80%	橙色5YR6/8	
575	7	大溝	－	土師器	椀	－	－	(4.0)	9.2	底部100%	橙色5YR7/6	
576	9	大溝	－	土師器	椀	－	－	(4.0)	－	底部100%	にぶい黄橙色10YR7/4	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
577	10	大溝	－	土師器	椀	12.6	－	6.1	7.6	100%	内：浅黄橙色 10YR8/3 外：灰白色 2.5Y8/2	
578	9	大溝	－	土師器	椀	－	－	(3.65)	－	底部 30%	浅黄橙色 7.5YR8/6	
579	7	大溝	－	土師器	椀	－	－	(3.5)	(7.0)	底部 90%	内：橙色 5YR6/6 外：橙色 5YR7/6	
580	6	大溝	－	土師器	椀	－	－	(2.4)	(7.5)	底部 90%	橙色 5YR7/6	
581	6	大溝	－	土師器	椀	－	－	(2.8)	(7.0)	底部 80%	橙色 7.5YR7/6	
582	6	大溝	－	土師器	椀	－	－	(2.7)	(7.5)	底部 70%	内：にぶい橙色 10YR7/4 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
583	6	大溝	－	土師器	椀	－	－	(2.7)	(6.3)	底部 95%	橙色 2.5YR6/6	
584	10	大溝	－	土師器	坏	12.2	－	3.7	5.6	100%	橙色 5YR7/6	
585	7	大溝	－	土師器	坏	－	(6.1)	(2.6)	－	底部 50%	にぶい橙色 10YR7/3	
586	6	大溝	－	土師器	坏	(12.4)	(5.2)	4.4	－	10%	橙色 5YR6/8	
587	6	大溝	－	土師器	坏	－	5.1	(2.8)	－	底部 100%	橙色 5YR7/6	
588	10	大溝	－	土師器	坏	(10.5)	4.8	2.7	－	60%	灰白色 10YR8/2	
589	8	大溝	上層	土師器	坏	－	5.0	(2.2)	－	底部 40%	灰白色 N8/	
590	6	大溝	－	土師器	坏	(14.0)	5.4	4.3	－	20%	灰白色 10YR8/2	
591	9	大溝	－	土師器	坏	－	(5.0)	(2.9)	－	底部 25%	灰白色 2.5Y8/1	
592	7	大溝	－	土師器	坏	－	5.6	(1.4)	－	底部 100%	橙色 5YR6/6	
593	7	大溝	埋土	土師器	坏	(11.8)	5.3	3.2	－	40%	橙色 7.5YR7/6	
594	7	大溝	上層	土師器	坏	(11.2)	(5.2)	3.2	－	30%	橙色 5YR7/6	完形に復原
595	7	大溝	上層	土師器	坏	－	5.4	(2.1)	－	底部 40%	内：橙色 5YR7/6 外：橙色 5YR6/6	
596	10	大溝	－	土師器	坏	(11.5)	7.1	3.1	－	50%	浅黄橙色 10YR8/3	
597	10	大溝	－	土師器	坏	(11.4)	(7.0)	3.1	－	30%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
598	5	大溝	－	土師器	椀	(17.2)	－	(7.9)	－	口縁部～体部 15%	橙色 5YR6/6	
599	5	大溝	－	弥生土器	小型壺	(11.0)	－	(2.6)	－	口縁部 10%	浅黄橙色 10YR8/3	
657	1	－	VI層	土師器	椀	(14.4)	－	5.1	6.9	60%	橙色 2.5YR6/6	
658	2	－	－	陶器	天目茶碗	(11.9)	－	6.65	4.5	15%	釉胎：灰白色 5YR7/1 鉄釉：褐色 10YR4/4 と 黒色 10YR2/1 の混ざり	
659	2	－	1 面目	陶器	天目茶碗	－	－	(2.25)	4.4	底部～高台部 100%	釉胎：にぶい褐色 7.5YR5/3 素地：灰色 5Y6/1 鉄釉：にぶい黄橙色 10YR5/3 と黒褐色 10YR3/1 の混ざり	
660	2	－	－	陶器	擂鉢	(5.0)	－	2.6	(2.6)	30%	内：灰白色 5YR7/1 外：灰白色 2.5Y7/1	
661	2	－	1 面目	山茶碗	椀	(15.0)	－	(4.15)	－	口縁部 15%	内：明褐色 7.5YR5/6 外：明赤褐色 5YR5/6	
662	2	－	1 面目	陶器	擂鉢・鉢	－	－	(6.25)	(13.6)	底部～高台部 15%	灰白色 5Y7/1	
663	2	－	1 面目	陶器	常滑・壺	－	(17.2)	(6.95)		底部 15%	内：灰黄色 2.5Y7/2 外：黄橙色 10YR5/3	
664	2	－	1 面目	土師器	坏	(13.4)	－	4.6	－	40%	橙色 2.5YR6/8	
665	2	－	2 面目	土師器	坏	(19.9)	－	(4.7)	－	口縁部～体部 20%	内：橙色 5YR7/6 外：灰白色 10YR8/2	
666	2	－	－	土師器	坏	(11.8)	－	(3.9)	－	口縁部～体部 10%	橙色 5YR6/6	
667	2	－	－	土師器	小型鉢	(13.0)	－	7.3	－	30%	黄橙色 10YR7/4	
668	2	－	IV－1～2 層	土師器	甕	(10.0)	－	(4.55)	－	口縁部～体部 15%	内：明褐色 7.5YR5/6 外：明赤褐色 5YR5/6	
669	2	－	IV－1～2 層	弥生土器	壺	(15.0)	－	(6.6)	－	口縁部 15%	橙色 7.5YR7/6	
670	2	－	－	弥生土器	壺	(15.2)	－	(5.95)	－	口縁部 30%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：浅黄橙色 7.5YR8/4	
671	2	－	IV－2 層上面	弥生土器	壺	－	6.9	(11.05)	－	体部～底部 70%	浅黄橙色 10YR8/3	
672	2	－	IV－2 層	弥生土器	甕	(20.0)	－	(5.0)	－	口縁部 15%	橙色 5YR7/6	
673	2	－	－	弥生土器	台付甕	－	－	(11.0)	－	底部～脚台部 30%	内：灰色 5Y4/1 外：にぶい橙色 5YR6/4	
674	2	－	IV－2 層上面	土製品	模造品	4.7	4.0	5.1	－	100%	灰白色 10YR/2	
675	3	－	1 面目	須恵器	坏蓋	(19.2)	－	(3.6)	－	口縁部～天井部 10% 以下	口縁部：灰色 5Y6/1 天井部：灰白色 2.5Y7/1	
676	3	－	1 面目	須恵器	坏蓋	(17.0)	－	(3.15)	－	口縁部 10～天井部 15%	灰色 N6/ 口縁部外面：灰白色 2.5Y7/1	
677	3	－	2 面目	須恵器	坏身	－	－	(1.15)	(11.6)	底部～高台部 20%	灰白色 7.5Y8/1	
678	3	－	2 面目	弥生土器	小型壺	(8.6)	8.7	13.9	－	80%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
679	3	－	2 面目	弥生土器	壺	(16.4)	－	(6.7)	－	口縁部 30%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
680	3	－	－	弥生土器	壺	(20.0)	－	(7.1)	－	口縁部 25%	にぶい黄橙色 10YR7/4	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
681	3	－	2 面目	弥生土器	壺	－	(11.8)	(3.4)	－	底部 30%	内：褐灰色 10YR6/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
682	3	－	2 面目	弥生土器	甕	(20.4)	－	(6.15)	－	口縁部 30%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
683	3	－	2 面目	弥生土器	甕	(16.6)	－	(5.3)	－	口縁部 15%	灰黄褐色 10YR5/2	
684	3	－	1 面目	弥生土器	甕	(20.0)	－	(7.1)	－	口縁部～胴部 25%	内：浅黄橙色 10YR8/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/3	
685	3	－	2 面目	弥生土器	甕	(16.4)	－	(6.3)	－	口縁部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
686	3	－	2 面目	弥生土器	台付甕	－	－	(4.3)	－	脚台部 60%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
687	3	－	－	弥生土器	小型鉢	(8.7)	5.5	3.3	－	70%	にぶい赤褐色 5YR5/4	
688	3	－	－	土製品	模造品	(5.4)	(4.2)	2.45	－	25%	にぶい橙色 7.5YR6/4	
691	4	－	Ⅱ～Ⅳ層	灰釉陶器	碗	－	－	(1.8)	(7.0)	底部～高台部 25%	灰白色 10Y7/1	
692	4	－	Ⅶ層	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	(9.85)	底部～高台部 25%	灰白色 N8/	
693	4	－	Ⅱ～Ⅳ層	土師器	坏	(11.0)	－	(2.8)	－	口縁部～体部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
694	4	－	Ⅴ層	土師器	坏	(13.6)	－	(3.9)	－	口縁部 10 ～ 体部 25%	浅黄橙色 10YR8/3	
695	4	－	Ⅶ層	土師器	坏	－	－	(2.9)	－	口縁部～体部 15%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
696	4	－	側溝	弥生土器	壺	(17.0)	－	(6.4)	－	口縁部 15%	内：灰色 7.5Y6/1 外：にぶい黄橙色 10YR7/4	
697	5	－	1 面目	灰釉陶器	碗	－	－	(3.2)	(7.4)	高台部 60%	内：明オリーブ灰色 2.5GY 外：灰白色 N8/	
698	5	－	－	灰釉陶器	碗	－	－	(2.1)	(7.4)	高台部 25%	灰白色 N8/	
699	5	－	－	灰釉陶器	碗	－	－	(1.6)	(7.9)	高台部 30%	灰白色 N8/	
700	5	－	－	灰釉陶器	碗	－	－	(2.3)	(6.5)	高台部 70%	灰白色 N8/	
701	5	－	－	灰釉陶器	碗	－	－	(2.5)	6.8	高台部 100%	灰白色 N8/	
702	5	－	－	山茶碗	碗	－	－	(1.55)	(6.6)	高台部 30%	灰色 N6/	
703	5	－	1 面目	灰釉陶器	壺	－	－	(8.6)	(15.5)	底部 20%	内：灰白色 10Y7/2 外：灰白色 N8/	
704	5	－	1 面目	土師器	碗	(15.2)	－	6.8	4.4	口縁部 40 ～ 高台部 100%	橙色 2.5YR6/6	
705	5	－	1 面目	土師器	碗	－	－	(2.5)	(7.0)	高台部 70%	橙色 5YR7/8	
706	5	－	1 面目	土師器	坏	(15.0)	7.0	4.7	－	口縁部 50 ～ 底部 100%	内：にぶい黄橙色 10YR7/4 外：橙色 5YR7/8	
707	5	－	1 面目	土師器	坏	(14.6)	5.0	4.6	－	口縁部 30 ～ 底部 70%	橙色 5YR6/8	
708	5	－	1 面目	土師器	坏	－	(6.3)	(3.45)	－	口縁部～体部 30%	内：橙色 5YR7/8 外：橙色 5YR6/8	
709	5	－	－	土師器	坏	(13.4)	－	(5.0)	－	口縁部～体部 20%	にぶい橙色 10YR7/4	
710	5	－	1 面目	土師器	坏	(12.8)	－	(3.9)	－	口縁部～体部 30%	橙色 5YR6/6	
711	5	－	－	須恵器	坏身	－	－	(2.35)	(11.0)	高台部 30%	灰色 N6/	
712	5	－	2 面目	土師器	S 字甕	(16.8)	－	(4.2)	－	口縁部 50%	褐色 7.5YR4/4	
713	5	－	2 面目	土師器	S 字甕	(15.6)	－	(4.0)	－	口縁部 15%	にぶい橙色 7.5YR7/3	
714	5	－	1 面目	土師器	高坏	(12.8)	－	(5.2)	－	坏部 70%	橙色 5YR6/6	
715	5	－	1 面目	土師器	小型器台	(9.8)	－	(4.0)	－	口縁部～脚部 70%	橙色 7.5YR6/6	
716	5	－	2 面目	土師器	壺	(13.8)	－	(5.45)	－	口縁部 30%	橙色 5YR7/6	
717	5	－	2 面目	土師器	壺	(14.0)	－	(7.8)	－	口縁部～頸部 25%	橙色 10R6/6	
718	5	－	1 面目	土師器	壺	(20.9)	－	(4.85)	－	口縁部 25%	橙色 5YR7/6	
719	5	－	－	弥生土器	壺	(20.0)	－	(7.7)	－	口縁部 40%	浅黄橙色 10YR8/3	
720	5	－	1 面目	弥生土器	壺	(22.7)	－	(8.7)	－	口縁部 40%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
721	5	－	－	弥生土器	壺	(10.4)	－	(6.9)	－	口縁部～頸部 60%	にぶい橙色 5YR7/4	
722	5	－	2 面目	弥生土器	壺	(22.1)	－	(24.6)	－	口縁部～体部 50%	内：褐灰色 10YR6/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
723	5	－	2 面目	弥生土器	壺	(25.4)	－	(6.7)	－	口縁部 50%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
724	5	－	2 面目	弥生土器	小型壺	(6.8)	6.6	12.0	－	口縁部～底部 90%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
725	5	－	2 面目	弥生土器	小型壺	(7.5)	(3.9)	8.9	－	口縁部～底部 40%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
726	5	－	2 面目	弥生土器	小型壺	－	3.4	(3.7)	－	底部 100%	内：褐灰色 10YR5/1 外：浅黄橙色 7.5YR8/3	
727	5	－	2 面目	弥生土器	台付甕	－	(8.4)	(6.9)	－	脚台部 30%	灰白色 10YR8/2	
728	5	－	1 面目	弥生土器	台付甕	－	(9.4)	(6.55)	－	脚台部 50%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
729	6	－	包含層 I	灰釉陶器	碗	－	－	(1.5)	(7.4)	高台部 40%	灰白色 2.5Y8/1	
730	6	－	－	灰釉陶器	碗	－	－	(2.4)	(6.2)	高台部 25%	灰白色 2.5Y7/1	
731	6	－	包含層 I	土師器	坏	(12.2)	(4.8)	3.4	－	25%	内：橙色 7.5YR6/6 外：にぶい褐色 7.5YR5/4	
732	6	－	包含層 I	土師器	坏	－	(6.2)	(2.1)	－	底部 50%	浅黄橙色 10YR8/4	
733	6	－	包含層 I	土師器	坏	－	(5.6)	(2.2)	－	底部 40%	内：浅黄橙色 7.5YR8/3 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
734	6	－	包含層 I	須恵器	坏蓋	(14.0)	－	(2.3)	－	口縁部 20%	灰色 5Y6/1	
735	6	－	包含層 I	須恵器	坏身	－	－	(3.0)	(9.8)	高台部 40%	灰色 N6/	
736	6	－	包含層 I	土師器	甕	(16.0)	－	(4.55)	－	口縁部 10%	内：灰黄褐色 10YR6/2 外：灰黄褐色 10YR6/2	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
737	6	－	包含層２	弥生土器	壺	(12.9)	－	(4.5)	－	口縁部～頸部 40%	内：灰白色 10YR8/2 外：浅黄橙色 10YR8/3	
738	6	－	包含層２	弥生土器	壺	(15.2)	－	(5.1)	－	口縁部 25%	内：にぶい黄橙色 10YR7/4 外：橙色 5YR6/6	
739	6	－	包含層１	弥生土器	壺	(16.0)	－	(7.3)	－	口縁部 25%	内：にぶい黄橙色 10YR8/3 外：橙色 5YR7/6	
740	6	－	包含層２	弥生土器	壺	－	9.4	(7.8)	－	底部 100% 体部 40%	内：浅黄橙色 10YR8/3 外：にぶい黄橙色 10YR7/4	
741	6	－	包含層２	弥生土器	壺	－	10.8	(4.5)	－	底部 100%	内：灰黄橙色 10YR6/2 外：にぶい橙色 7.5YR6/4	
742	6	－	包含層２	弥生土器	壺	－	(7.8)	(3.0)	－	底部 50%	内：にぶい橙色 10YR7/2 外：橙色 7.5YR6/6	
743	6	－	包含層２	弥生土器	小型壺	(8.3)	5.7	11.4	－	50%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
744	6	－	包含層１	弥生土器	小型壺	－	(6.1)	(9.9)	－	体部～底部 40%	橙色 5YR6/6	
745	6	－	包含層２	弥生土器	壺	(22.0)	－	(2.9)	－	口縁部 15%	内：にぶい黄橙色 10YR7/4 外：灰白色 10YR8/2	
746	6	－	包含層２	弥生土器	壺	(23.6)	－	(4.5)	－	口縁部 10%	内：にぶい橙色 7.5YR6/3 外：にぶい橙色 5YR6/4	
747	6	－	包含層２	弥生土器	台付甕	－	9.0	(7.7)	－	脚台部 60%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
748	6	－	包含層２	弥生土器	台付甕	－	(7.6)	(5.15)	－	脚台部 30%	淡橙色 5YR8/3	
749	7	－	－	土師器	椀	－	－	(3.1)	(7.6)	高台部 30%	橙色 5YR7/6	
750	7	－	－	土師器	椀	－	－	(3.4)	(8.4)	高台部 70%	橙色 7.5YR7/6	
751	7	－	－	土師器	椀	－	－	(4.0)	7.1	体部～高台部 100%	橙色 5YR7/6	
752	7	－	壁面	土師器	椀	－	－	(1.7)	(7.0)	高台部 50%	橙色 7.5YR7/6	
753	7	－	－	土師器	坏	－	(4.3)	(2.5)	－	底部 50%	橙色 5YR7/6	
754	7	－	－	須恵器	甕	(22.8)	－	(7.3)	－	口縁部 15%	灰白色 N7/	
755	7	－	１面目	土師器	Ｓ字甕	(17.8)	－	(2.25)	－	口縁部 20%	にぶい橙色 7.5YR5/3	
756	7	－	２面目	弥生土器	壺	(18.0)	－	(3.4)	－	口縁部 15%	橙色 7.5YR7/6	
757	7	－	壁面	弥生土器	台付甕	－	(7.8)	(4.9)	－	脚台部 40%	浅黄橙色 10YR8/4	
758	8	－	－	土師器	椀	－	－	(1.9)	(8.0)	高台部 20%	橙色 5YR6/6	
759	8	－	－	土師器	椀	－	－	(2.4)	(5.8)	高台部 60%	内：橙色 5YR7/6 外：橙色 5YR6/8	
760	8	－	－	土師器	坏	－	(5.0)	(1.7)	－	底部 50%	内：灰白色 10YR8/2 外：浅黄橙色 10YR8/3	
761	8	－	－	須恵器	坏蓋	(15.0)	－	(1.7)	－	口縁部～天井部 20%	内：灰白色 2.5Y7/1 外：灰白色 10YR7/1	
762	8	－	－	須恵器	坏身	－	－	(3.2)	(9.6)	高台部～体部 25%	灰白色 N8/	
763	8	－	側溝	須恵器	坏身	－	－	(2.1)	9.4	高台部 80%	内：灰白色 N7/ 外：灰色 N5/	
764	8	－	－	弥生土器	壺	(17.6)	－	(1.3)	－	口縁部 20%	黄灰色 2.5Y6/1	
765	8	－		弥生土器	壺	－	(10.0)	(3.5)	－	底部 30%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：にぶい黄橙色 10YR7/3	
766	10	－	－	灰釉陶器	瓶	－	－	(4.5)	(11.0)	体部～高台部 25%	灰白色 2.5Y7/1	
767	10	－	－	土師器	椀	14.9	－	6.4	(9.4)	60%	内：にぶい橙色 7.5Y6/4 外：にぶい橙色 7.5Y6/4	
768	10	－	－	土師器	坏	(12.2)	－	(3.8)	－	口縁部～体部 20%	橙色 5YR6/6	
769	10	－	－	須恵器	坏蓋	(13.6)	－	(1.5)	－	口縁部 15%	灰白色 5Y7/1	
770	10	－	－	須恵器	坏蓋	(14.0)	－	(1.8)	－	口縁部 10%	灰白色 5Y7/1	
771	10	－	－	須恵器	坏身	(17.0)	－	(6.4)	－	口縁部～体部 15%	内：灰色 N6/ 外：灰色 5Y6/1	
772	10	－	－	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	(9.2)	高台部 50%	灰色 N5/	
773	10	－	西側側溝	須恵器	甕	(21.2)	－	(5.5)	－	口縁部 15%	内：灰黄色 2.5Y7/2 外：灰白色 2.5Y7/1	
774	10	－	－	弥生土器	壺	(14.8)	－	(4.9)	－	口縁部 25%	内：にぶい黄橙色 10YR7/4 外：橙色 7.5YR7/6	
775	10	－	１面目	弥生土器	小型壺	－	(5.4)	(2.9)	－	底部 25%	内：黄灰色 2.5Y5/1 外：にぶい黄橙色 10YR6/4	
776	10	－	－	弥生土器	甕	(20.4)	－	(4.8)	－	口縁部 10%	橙色 5YR6/6	
777	11	－	包含層１	須恵器	坏身	(8.2)	－	(2.0)	－	口縁部 10%	内：灰色 N6/　外：灰色 N5/	
778	11	－	－	須恵器	坏身	－	－	(2.25)	(10.8)	底部～高台部 30%	灰白色 N8/	
779	11	－	包含層１	土師器	小型 丸底土器	(8.0)	－	(8.75)	－	口縁部 30 ～ 体部 25%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
780	11	－	包含層２	弥生土器	小型壺	(8.4)	－	(4.3)	－	口縁部 30%	浅黄橙色 10YR8/3	
781	11	－	包含層１	弥生土器	壺	－	8.3	(2.3)	－	底部 100%	橙色 5YR6/6	
782	11	－	包含層１	弥生土器	小型壺	－	4.6	(1.65)	－	底部 100%	灰白色 5YR8/2	
783	11	－	包含層１	弥生土器	甕	(26.0)	－	(9.7)	－	口縁部 20%	浅黄橙色 7.5YR6/6	
784	11	－	包含層２	弥生土器	台付甕	－	－	(5.0)	－	脚台部 15%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
785	12	－	包含層	須恵器	坏身	－	－	(1.4)	(7.6)	底部～高台部 10% 以下	灰白色 N7/	
786	12	－	包含層	弥生土器	壺	(13.2)	－	(3.5)	－	口縁部 15%	浅黄橙色 10YR8/3	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
787	12	－	包含層	弥生土器	壺	(17.4)	－	(1.7)	－	口縁部 10%	橙色 5YR7/6	
788	12	－	包含層	弥生土器	壺	－	(9.4)	(2.75)	－	底部 50%	内：灰色 5Y4/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
789	12	－	包含層	弥生土器	壺	－	(5.4)	(1.95)	－	底部 70%	内：黄灰色 2.5Y5/1 外：橙色 5YR6/6	
790	12	－	包含層	弥生土器	小型壺	－	(4.4)	(2.85)	－	底部 40%	内：灰色 5Y4/1 外：にぶい橙色 10YR7/3	
791	12	－	包含層	土師器	S字甕	(12.8)	－	(3.2)	－	口縁部 10%	にぶい橙色 7.5YR7/3	
792	12	－	包含層	弥生土器	甕	(16.0)	－	(3.95)	－	口縁部 10%以下	にぶい黄橙色 10YR7/4	
793	12	－	包含層	土師器	高坏	－	－	(7.0)	－	40%	橙色 2.5YR6/6	
794	13	－	－	弥生土器	壺	(12.9)	－	(4.4)	－	口縁部 15%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
795	13	－	－	弥生土器	壺	(20.0)	－	(5.1)	－	口縁部 10%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
796	13	－	排水溝	弥生土器	小型壺	(7.1)	5.6	9.15	－	70%	内：褐灰色 10YR4/1 外：浅黄橙色 10YR8/3	
797	13	－	排水溝	弥生土器	台付甕	－	－	(6.0)	－	脚台部 100%	橙色 5YR7/6	
798	13	－	－	土師器	高坏	－	－	(7.35)	－	脚部 25%	橙色 7.5YR6/6	
799	13	－	－	土師器	高坏	－	－	(7.0)	－	脚部 25%	内：黄灰色 2.5Y5/1 外：橙色 7.5YR6/6	
800	14・15	－	包含層 1	灰釉陶器	椀	(18.7)	－	(3.6)	－	口縁部 50%	内：オリーブ黄色 7.5Y6/3 外：灰白色 N8/	
801	14・15	－	包含層 1	灰釉陶器	椀	－	－	(2.8)	(7.2)	底部～高台部 20%	灰白色 N7/	
802	14・15	－	排水溝	須恵器	坏蓋	－	－	(4.0)	－	天井部 40%	灰色 N6/	
803	14・15	－	包含層 1	須恵器	坏蓋	－	－	(2.9)	－	天井部 20%	内：にぶい橙色 5YR6/3 外：灰褐色 7.5YR6/2	
804	14・15	－	包含層 1	須恵器	坏蓋	(18.2)	－	(2.3)	－	口縁部 10%	灰色 N6/	
805	14・15	－	包含層 1	須恵器	坏蓋	(16.8)	－	(1.9)	－	口縁部 10%	灰色 N8/	
806	14・15	－	排水溝	須恵器	坏身	8.6	－	3.35	－	100%	灰色 N6/	
807	14・15	－	排水溝	須恵器	坏身	－	－	(3.5)	(11.4)	底部～高台部 10%	灰色 N6/	
808	14・15	－	排水溝	須恵器	坏身	－	－	(1.05)	(11.6)	底部～高台部 50%	灰白色 N7/	
809	14・15	－	－	須恵器	壺	(12.3)	－	(6.2)	－	口縁部 20%	灰白色 N8/	
810	14・15	－	排水溝	須恵器	甕	－	(7.4)	(6.0)	－	体部～底部 25%	灰白色 N7/	
811	14・15	－	排水溝	土師器	椀	(16.5)	－	(3.0)	－	口縁部～体部 25%	内：浅黄橙色 7.5YR8/6 外：橙色 2.5YR7/8	
812	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(3.1)	(9.9)	底部～高台部 15%	浅黄橙色 7.5YR8/3	
813	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(3.1)	(8.7)	底部～高台部 30%	内：橙色 5YR6/8 外：にぶい黄橙色 10YR7/4	
814	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(3.8)	(9.3)	底部 40 ～ 高台部 10%	淡黄色 2.5Y8/3	
815	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(4.0)	(9.0)	底部 50 ～ 高台部 10%	浅黄橙色 10YR8/3	
816	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(4.0)	(8.0)	底部 90 ～ 高台部 40%	浅黄橙色 10YR8/4	
817	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(3.5)	－	底部 70 ～ 高台部 20%	橙色 5YR7/6	
818	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(2.35)	(8.6)	底部～高台部 30%	橙色 5YR7/8	
819	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(2.3)	(8.2)	底部 70 ～高台部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
820	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(4.1)	(8.4)	底部～高台部 25%	橙色 7.5YR7/6	
821	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(9.0)	(3.4)	底部～高台部 20%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
822	14・15	－	－	土師器	椀	－	－	(3.4)	(7.8)	底部 70 ～ 高台部 30%	灰白色 2.5Y8/2	
823	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(4.0)	(6.7)	底部 100 ～高台部 10%	浅黄橙色 10YR8/4	
824	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(2.9)	－	底部～高台部 30%	橙色 5YR6/6	
825	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(3.7)	(7.4)	底部～高台部 100%	橙色 2.5YR6/8	
826	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(3.5)	(7.2)	底部～高台部 25%	橙色 5YR6/8	
827	14・15	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(2.2)	(7.4)	底部～高台部 30%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
828	14・15	－	－	土師器	椀	－	－	(3.0)	(7.0)	底部 40 ～ 高台部 25%	橙色 5YR6/6	
829	14・15	－	包含層 1	土師器	椀	－	－	(2.05)	(7.0)	底部～高台部 70%	橙色 5YR6/8	
830	14・15	－	包含層 1	土師器	坏	－	(5.8)	(2.4)	－	底部 25%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：橙色 5YR6/6	
831	14・15	－	包含層 1	土師器	坏	－	(4.2)	(2.15)	－	底部 20%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
832	14・15	－	包含層 1	土師器	坏	－	(6.4)	(2.0)	－	底部 25%	明赤褐色 5YR5/8	
833	14・15	－	－	土師器	坏	－	(5.9)	(1.8)	－	底部 25%	内：橙色 5YR6/6 外：橙色 2.5YR6/8	
834	14・15	－	排水溝	土師器	坏	(13.3)	－	(3.8)	－	口縁部～ 体部 20%	内：橙色 5YR7/6 外：橙色 2.5YR6/8	
835	14・15	－	排水溝	土師器	坏	(12.8)	－	(3.8)	－	口縁部～体部 15%	橙色 5YR6/6	
836	14・15	－	排水溝	土師器	坏	(12.8)	－	3.95	－	25%	浅黄橙色 7.5YR8/6	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
837	14・15	－	排水溝	土師器	坏	(13.4)	－	(2.5)	－	口縁部～体部 15%	内：橙色 5YR7/8 外：橙色 2.5YR6/8	
838	14・15	－	排水溝	土師器	坏	(10.6)	－	2.8	－	15%	内：橙色 7.5YR7/6 外：橙色 2.5YR6/6	
839	14・15	－	包含層２	土師器	Ｓ字甕	(20.6)	－	(4.7)	－	口縁部 10%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
840	14・15	－	包含層２	土師器	Ｓ字甕	(18.8)	－	(3.45)	－	口縁部 10%	内：にぶい橙色 7.5YR6/4 外：にぶい赤橙色 5YR5/4	
841	14・15	－	排水溝	土師器	高坏	－	－	(5.7)	－	60%	内：にぶい黄橙色 10YR7/3 外：灰白色 10YR8/2	
842	14・15	－	排水溝	土師器	高坏	－	－	(5.75)	－	脚部 70%	内：灰白色 5Y7/2 外：にぶい橙色 10YR7/3	
843	14・15	－	排水溝	土師器	高坏	－	－	(4.9)	－	脚部 100%	内：灰黄褐色 10YR5/2 外：浅黄橙色 7.5YR8/4	
844	14・15	－	包含層２	土師器	小型器台	(9.4)	－	(4.5)	－	口縁部～体部 60%	内：にぶい橙色 7.5YR6/4 外：明赤褐色 5YR5/6	
845	14・15	－	包含層２	土師器	壺	(12.2)	－	(4.15)	－	口縁部～頸部 30%	浅黄橙色 10YR6/3	
846	14・15	－	包含層２	土師器	壺	(13.2)	－	(4.9)	－	口縁部～頸部 20%	内：にぶい橙色 5YR7/4 外：浅黄橙色 7.5YR8/3	
847	14・15	－	包含層２	弥生土器	壺	(16.6)	－	(5.7)	－	口縁部 25%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
848	14・15	－	包含層２	弥生土器	壺	(16.8)	－	(2.8)	－	口縁部 10%	内：黄灰色 2.5Y6/1 外：にぶい黄橙色 10YR7/3	
849	14・15	－	包含層２	弥生土器	壺	－	(6.8)	(8.8)	－	底部 80%	浅黄橙 2.5Y7/3	
850	14・15	－	包含層２	弥生土器	壺	－	(9.0)	(4.5)	－	底部 30%	内：灰色 5Y5/1 外：橙色 2.5YR7/6	
851	14・15	－	排水溝	弥生土器	壺	－	9.2	(3.1)	－	底部 100%	内：黄灰色 2.5Y6/1 外：にぶい橙色 7.5YR7/4	
852	14・15	－	包含層２	弥生土器	壺	－	7.0	(2.5)	－	底部 100%	内：灰色 N5/ 外：灰白色 10YR8/2	
853	14・15	－	包含層２	弥生土器	小型壺	－	4.8	(2.25)	－	底部 90%	内：灰色 N5/ 外：橙色 2.5Y7/6	
854	14・15	－	排水溝	弥生土器	甕	(20.8)	－	(8.4)	－	口縁部 25%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
855	14・15	－	包含層２	弥生土器	甕	(15.8)	－	(3.7)	－	口縁部 10%	内：にぶい橙色 5YR7/4 外：浅黄橙色 7.5YR8/4	
856	14・15	－	排水溝	弥生土器	甕	(19.6)	－	(3.9)	－	口縁部 10%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：橙色 2.5YR6/8	
857	14・15	－	排水溝	弥生土器	台付甕	－	－	(6.9)	－	脚台部 60%	内：にぶい橙色 7.5YR7/4 外：淡黄色 2.5Y8/3	
858	14・15	－	包含層２	弥生土器	台付甕	－	－	(3.95)	－	脚台部 30%	浅黄橙色 10YR8/3	
859	14・15	－	包含層２	弥生土器	台付甕	－	－	(6.7)	－	脚台部 25%	内：橙色 5YR7/8 外：にぶい黄橙色 10YR7/4	
860	16	－	排水溝	灰釉陶器	椀	14.1	－	4.4	7.3	90%	灰白色 7.5Y7/1 内底部：灰色 N5/	
861	16	－	排水溝	灰釉陶器	椀	(13.7)	－	4.1	(7.5)	40%	灰白色 5Y8/1	
862	16	－	Ⅲ層	灰釉陶器	椀	－	－	(1.95)	(7.9)	底部 50 ～高台部 30%	灰白色 N8/	
863	16	－	排水溝	灰釉陶器	椀	－	－	(2.1)	(7.7)	底部～高台部 50%	灰白色 N8/	
864	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	(15.0)	－	(4.3)	－	口縁部～体部 20%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
865	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(2.8)	(7.1)	底部～高台部 50%	橙色 5YR7/6	
866	16	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(5.05)	(7.8)	底部～高台部 40%	浅黄橙色 10YR8/3	
867	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(3.95)	(8.0)	底部～高台部 40%	にぶい橙色 10YR6/4	
868	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(4.0)	(9.2)	底部 60 ～高台部 50%	内：灰白色 10YR8/1 外：褐灰色 10YR6/1	
869	16	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(2.85)	(8.8)	底部～高台部 80%	橙色 5YR7/8	
870	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(2.9)	(8.4)	底部～高台部 60%	橙色 5YR7/6	
871	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	(16.4)	－	(4.95)	－	10%	橙色 2.5YR6/8	
872	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(3.8)	－	底部～高台部 70%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
873	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(2.9)	－	底部～高台部 20%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
874	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(3.45)	－	底部～高台部 30%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
875	16	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(3.0)	－	20%	橙色 5YR7/6	
876	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(4.9)	－	50%	橙色 5YR6/8	
877	16	－	排水溝	土師器	椀	(15.4)	－	4.85	(6.8)	15%	灰白色 10YR8/2	
878	16	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(2.3)	7.3	底部 90 ～高台部 70%	橙色 5YR7/6	
879	16	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(1.7)	6.9	底部～高台部 80%	橙色 5YR7/8	
880	16	－	排水溝	土師器	椀	－	－	(2.25)	6.9	底部～高台部 100%	浅黄橙色 7.5YR8/3	
881	16	－	Ⅱ層	土師器	椀	－	－	(2.3)	(5.3)	30%	橙色 5YR7/8	
882	16	－	Ⅲ層	土師器	坏	(14.8)	(5.0)	－	－	口縁部 10% 以下～体部 25%	橙色 5YR7/6	
884	16	－	Ⅱ層	土師器	坏	(12.8)	(5.8)	3.85	－	70%	橙色 5YR6/8	

第６表　出土遺物観察表

報告書図版No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	高台径(cm)	残存率	色調	備考
885	16	－	Ⅲ層	土師器	坏	－	(6.5)	(2.9)	－	体部～底部 50%	にぶい橙色 10YR7/3	
886	16	－	Ⅱ層	土師器	坏	－	(6.0)	(3.2)	－	体部～底部 25%	内：褐灰色 10YR5/1 外：黒褐色 10YR3/1	
887	16	－	Ⅱ層	土師器	坏	－	5.1	(2.8)	－	体部 50～底部 90%	橙色 2.5YR7/8	
888	16	－	排水溝	土師器	坏	－	(5.1)	(2.7)	－	25%	橙色 5YR7/8	
889	16	－	Ⅱ層	土師器	坏	－	5.0	(2.15)	－	底部 100%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
890	16	－	排水溝	土師器	坏	－	(5.6)	(2.6)	－	体部 40～底部 60%	橙色 5YR7/8	
891	16	－	Ⅱ層	土師器	皿	－	5.1	(2.15)	－	底部 100%	浅黄橙色 10YR8/4	
892	16	－	Ⅱ層	土師器	坏	(10.0)	(5.0)	3.15	－	40%	灰白色 10YR8/2	
893	16	－	Ⅲ層	土師器	碗	－	6.4	(4.5)	－	体部 25～底部 75%	明赤褐色 5YR5/6	
893	16	－	排水溝	土師器	皿	(9.7)	(5.7)	2.25	－	30%	灰白色 10YR8/2	
894	16	－	Ⅱ層	土師器	皿	(11.0)	(5.6)	2.1	－	25%	浅黄橙色 7.5YR8/4	
895	16	－	Ⅱ層	土師器	皿	(9.4)	(4.9)	2.2	－	30%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
896	16	－	Ⅱ層	土師器	坏	(9.5)	5.1	2.8	－	60%	橙色 2.5YR6/6	
897	16	－	排水溝	土師器	坏	(10.4)	4.9	2.4	－	50%	橙色 5YR6/8	
898	16	－	Ⅳ・Ⅴ層	須恵器	坏蓋	(17.4)	－	(4.7)	－	25%	灰色 7.5Y6/1	
899	16	－	Ⅳ・Ⅴ層	弥生土器	壺	(16.0)	－	(5.1)	－	口縁部 15%	橙色 5YR7/6	
900	16	－	Ⅳ・Ⅴ層	弥生土器	壺	(19.8)	－	(3.7)	－	口縁部 10 以下	浅黄橙色 7.5YR8/3	
901	16	－	Ⅳ・Ⅴ層	弥生土器	小型壺	－	(6.9)	(2.0)	－	底部 30%	橙色 5YR7/6	
902	17	－	包含層 1	灰釉陶器	碗	－	－	(1.8)	(7.6)	底部～高台部 25%	灰白色 2.5YR8/1	
903	17	－	－	土師器	皿	(9.95)	－	3.2	6.2	80%	橙色 5YR6/8	
904	17	－	包含層 1	土師器	壺	(15.8)	－	(4.4)	－	口縁部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
905	17	－	包含層 1	弥生土器	壺	(16.6)	－	(5.0)	－	口縁部 20%	橙色 7.5YR7/6	
906	17	－	包含層 1	弥生土器	壺	－	－	(5.0)	－	頸部 30%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
907	17	－	包含層 1	弥生土器	壺	－	9.5	(3.1)	－	底部 100%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
908	17	－	包含層 2	弥生土器	甕	(24.0)	－	(3.2)	－	口縁部 10%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
909	17	－	包含層 2	弥生土器	甕	(17.8)	－	(5.1)	－	口縁部 15%	橙色 5YR6/8	
910	17	－	包含層 2	弥生土器	甕	(25.4)	－	(8.15)	－	口縁部～頸部 20%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
911	17	－	包含層 1	土製品	模造品	7.4	3.75	5.85	－	100%	灰白色 10YR8/2	
912	18	－	排水溝	須恵器	坏蓋	(20.0)	－	(2.6)	－	口縁部～天井部 25%	内：褐灰色 5YR5/1 外：灰色 N6/	
913	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	坏身	(9.4)	－	3.05	－	40%	灰白色 7.5Y7/1	
914	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	須恵器	坏身	(15.7)	－	(3.2)	－	口縁部～ 体部 10% 以下	灰白色 2.5YR7/1	
915	18	－	－	須恵器	坏身	－	－	(2.3)	(8.2)	底部～高台部 50%	灰白色 7.5Y7/1	
916	18	－	排水溝	須恵器	高坏	(15.3)	－	(3.4)	－	口縁部～体部 10%	灰白色 7.5Y7/1	
917	18	－	－	須恵器	細頸壺	(9.0)	－	(2.8)	－	口縁部 25%	灰白色 5Y7/1	
918	18	－	Ⅱ層	須恵器	壺	－	－	(8.9)	－	体部 50～底部 100%	灰白色 10YR7/1	
919	18	－	1 面目	土師器	坏	(11.8)	－	3.9	－	25%	橙色 5YR7/6	
920	18	－	Ⅲ・Ⅳ層	土師器	坏	(11.0)	－	2.6	－	15%	橙色 7.5YR7/6	
921	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	土師器	坏	(13.6)	－	4.6	－	25%	内：褐灰色 10YR4/1 外：灰黄褐色 10YR6/2	
922	18	－	Ⅲ・Ⅳ層	土師器	高坏	(25.0)	－	(8.3)	－	坏部 25%	橙色 5YR7/6	
923	18	－	Ⅱ層	土師器	高坏	－	－	(6.4)	－	底部～脚部 60%	橙色 2.5YR6/8	
924	18	－	Ⅲ層	弥生土器	壺	(19.2)	－	(13.2)	－	口縁部～胴部 30%	橙色 7.5YR7/6	
925	18	－	排水溝	弥生土器	壺	(14.2)	－	(8.1)	－	口縁部 25%	橙色 7.5YR7/6	
926	18	－	Ⅲ・Ⅳ層	弥生土器	壺	(19.4)	－	(5.4)	－	口縁部 20%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
927	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	弥生土器	壺	(20.0)	－	(4.8)	－	口縁部 15%	橙色 7.5YR7/6	
928	18	－	Ⅲ層	弥生土器	壺	－	7.2	(11.7)	－	頸部～底部 60%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
929	18	－	Ⅴ・Ⅵ層	弥生土器	小型壺	(6.8)	－	11.95	(7.1)	60%	橙色 5YR6/6	
930	18	－	Ⅰ・Ⅲ層	弥生土器	小型壺	－	4.3	(3.2)	－	底部 100%	橙色 5YR6/6	
931	18	－	Ⅱ層	弥生土器	壺	－	(11.2)	(5.5)	－	底部 70%	にぶい橙色 5YR6/4	
932	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	弥生土器	壺	－	9.6	(2.2)	－	底部 90%	にぶい橙色 7.5YR7/3	
933	18	－	Ⅲ・Ⅳ層	弥生土器	壺	－	7.4	(2.85)	－	底部 90%	にぶい黄橙色 10YR7/3	
934	18	－	Ⅴ・Ⅵ層	弥生土器	甕	(23.6)	－	(5.6)	－	口縁部 10%	にぶい橙色 7.5YR7/4	
935	18	－	Ⅴ・Ⅵ層	弥生土器	甕	(23.2)	－	(7.29)	－	口縁部 10%	橙色 5YR6/8	
936	18	－	Ⅱ層	弥生土器	甕	(19.0)	－	(13.9)	－	口縁部～体部 25%	橙色 5YR6/6	
937	18	－	Ⅱ層	弥生土器	甕	(22.0)	－	(9.2)	－	口縁部～体部 30%	灰褐色 7.5YR5/2	
938	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	弥生土器	甕	(24.0)	－	(6.25)	－	口縁部 15%	橙色 5YR7/8	
939	18	－	Ⅱ・Ⅲ層	弥生土器	甕	(20.2)	－	(4.6)	－	口縁部 10% 以下	にぶい橙色 7.5YR7/4	
940	18	－	Ⅲ・Ⅳ層	弥生土器	甕	(22.0)	－	(5.0)	－	口縁部 15%	にぶい橙色 7.5YR6/3	
941	18	－	Ⅱ層	弥生土器	台付甕	－	10.0	(5.8)	－	脚台部 100%	淡黄色 2.5Y8/3	
942	19	－	－	須恵器	壺	(27.5)	－	(7.95)	－	口縁部 10%	灰白色 N7/	
943	19	－	－	弥生土器	壺	－	－	(11.8)	－	頸部 40%	灰色 N6/	
944	19	－	－	弥生土器	壺	－	(10.4)	(6.2)	－	底部 40%	橙色 5YR7/6	

※（　）は推定径または残存高

第６表　出土遺物観察表

【土製品】

報告書図版番号	調査区	遺構名	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	残存率	色調	備考
128	10	SX1001	上層	土錘	5.3	4.0	3.6	86.0	100%	にぶい黄橙色 10YR7/4	
689	3	-	2 面目	土錘	4.8	1.8	1.8	14.5	100%	にぶい橙色 7.5YR6/4	
690	3	-	-	土錘	6.4	4.95	4.95	97.2	60%	にぶい橙色 7.5YR7/4	

【瓦】

報告書図版番号	調査区	遺構名	層位	種類	叩き目	調整	厚さ (cm)	重量 (g)	残存部	色調	備考
6	2	SE0201	底部	平瓦	斜格子	-	2.5	322.7	広端部	黄灰色 2.5Y4/1	糸切痕 粘土接合痕（S 型）
22	2	NR0202	-	平瓦	斜格子か	側面：凸面側削り	2.7	921	狭端部	黄灰色 2.5Y6/1	全体に摩滅著しい
23	2	NR0202	-	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2	243.4	狭端部	灰色 N5/	
24	2	NR0202	-	平瓦	-	凸面：全面ナデ 側面：凸面側削り 凹面：凸面側削り	2	814.7	広端部	灰色 7.5Y5/1	
25	2	NR0202	-	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.4	347.8	広端部	灰色 N5/	糸切痕
26	2	NR0202	-	丸瓦（有段式）	-	凸面：全面ナデ	2.1	506.4	段部	灰色 7.5Y5/1	段部の粘土痕跡
27	2	NR0202	-	丸瓦（有段式）	-	凸面：全面ナデ	1.8	174.5	玉縁部	灰色 N5/	
28	2	NR0202	-	丸瓦（有段式）	-	凸面：全面ナデ	1.8	107.2	玉縁部	灰白色 5Y7/1	粘土接合痕（Z 型）
29	2	NR0202	-	丸瓦	-	凸面：全面ナデ	2	251.3	広端部	灰色 5Y5/1	布袋綿ミ目 布端続れ
138	11	SD1103	-	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.5	451.9	側端部	灰色 N6/	
191	13	NR1301	最下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.4	363.3	狭端部	灰色 N6/	
192	13	NR1301	中層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.7	372.8	狭端部	灰色 N6/	回面摩滅著しい 布袋綿ミ目
193	13	NR1301	中層	平瓦	斜格子	-	2.2	209.6	広端部	灰色 5Y6/1	
194	13	NR1301	下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.4	305	側端部	灰色 7.5Y6/1	
195	13	NR1301	上層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.3	185.3	側端部	灰色 5Y6/1	回面摩滅著しい
196	13	NR1301	下層	丸瓦（有段式）	-	回面：側端側削り	1.9	266.5	玉縁部	黄灰色 2.5Y6/1	段部の粘土痕跡
197	13	NR1301	上層	丸瓦 （無段式か）	-	凸面：縦方向削り	1.5	383.9	広端部	橙色 7.5YR7/6	回面広端側に布端
217	14	SD1409	中層	軒丸瓦	-	凸面：全面ナデ	2.1	160.6	瓦当	灰色 N5/	
218	14	SD1409	下層	丸瓦 （無段式か）	-	凸面：縦方向削り	1.4	49.7	広端部	黄灰色 2.5Y5/1	
219	14	SD1409	上層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.8	98.6	広端部	淡黄色 2.5Y8/3	
220	14	SD1409	上層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.4	109.3	広端部	灰黄色 2.5Y7/2	糸切痕
227	15	SD1502	-	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.9	813.4	狭端部	灰色 N6/	
259	15	SD1506	下層	平瓦	斜格子	-	2.4	145	広端部	黄灰色 2.5Y6/1	表面被熱
420	18	SK1801	-	平瓦	斜格子か	側面：凸面側削り	2.5	713.9	側端部	にぶい橙色 7.5YR7/4	全体に摩滅著しい
472	14	遺石建物	黒～ 灰褐色土	丸瓦 （有段式か）	-	回面：側端側削り	2.4	297.6	広端部	灰色 N6/	
473	14	遺石建物	灰褐色	平瓦	斜格子	側面：回凸面側削り	2.0	276.1	側端部	黄灰色 2.5Y6/1	表面摩滅著しい
474	14	遺石建物	黒～ 灰褐色土	平瓦	縄目	-	2.5	174.9	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	表面摩滅著しい
475	19	基壇	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.4	402.9	側端部	灰白色 N5/	糸切痕	
520	15	SX1507	火山灰層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.8	182.7	側端部	黄灰色 2.5Y5/1	分厚突若
600	6	大溝	-	軒丸瓦	-	-	(1.7)	11.1	瓦当	にぶい橙色 7.5YR7/4	瓦当表面のみ
601	5	大溝	-	軒丸瓦	-	凸面：縦方向削り	1.5	174.8	丸瓦部	にぶい黄橙色 10YR7/4	表面摩滅著しい
602	5	大溝	-	軒平瓦	斜格子	顎部・平瓦部端 横ナデ	4.1/2.2	518.4	瓦当～ 平瓦部	灰色 5Y7/1	顎面斜格子叩き
603	3	大溝	底部	軒平瓦	-	顎段部横ナデ	1.7	149.8	瓦当 （顎部）	灰白色 2.5Y8/2	顎面斜格子叩き
604	10	大溝	-	軒平瓦	-	顎段部横ナデ	1.6	92.5	瓦当 （顎部）	灰色 5Y7/1	顎面斜格子叩き
605	7	大溝	下層	軒平瓦	-	顎段部横ナデ	1.5	101.5	瓦当 （顎部）	灰色 N4/	顎面斜格子叩き
606	5	大溝	-	軒平瓦	-	顎段部横ナデ	1.4	49	瓦当 （顎部）	にぶい橙色 7.5YR7/4	顎面斜格子叩き
607	8	大溝	下層	軒平瓦	-	回面：瓦当側削り 側面：凸面側削り	1.4	53	瓦当	にぶい橙色 7.5YR7/4	顎部剥落
608	3	大溝	-	丸瓦（無段式）	-	凸面：全面横ナデ	2.1	354.8	狭端部	灰色 N6/	布袋綿ミ目
609	5	大溝	下層	丸瓦（無段式）	-	凸面：全面ナデ	1.2	90.1	狭端部	浅黄橙色 10YR8/4	
610	3	大溝	底部	丸瓦（無段式）	-	凸面：縦方向削り	1.2	121	狭端部	にぶい褐色 7.5YR5/4	布袋綿ミ目

第６表　出土遺物観察表

報告書図版番号	調査区	遺構名	層位	種類	叩き目	調整	厚さ (cm)	重量 (g)	残存部	色調	備考
611	3	大溝	下層	丸瓦（無段式か）	－	凸面：全面ナデ	1.2	49.2	狭端部	浅黄橙色 7.5YR8/6	布袋綴じ目
612	3	大溝	－	丸瓦（有段式）	－	－	2.1	292.7	段部	灰白色 10YR7/1	凸面摩滅著しい
613	5	大溝	－	丸瓦	－	凸面：全面ナデ	2.4	373.9	広端部	灰色 5Y6/1	瓦当剥落、硬化粘土
614	10	大溝	－	丸瓦（無段式）	－	凸面：縦方向削り	1.2	212.6	広端部	橙色 7.5YR7/6	
615	7	大溝	－	丸瓦（有段式か）	－	凸面：全面ナデ	2.5	203	広端部	灰色 5Y6/1	布袋綴じ目
616	5	大溝	下層	平瓦	斜格子	側面：全面削り	1.5	162	狭端部	にぶい黄橙色 10YR7/2	叩き目重複 粘土接合痕（Z型）
617	3	大溝	底部	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.6	223.7	狭端部	にぶい黄橙色 10YR6/4	粘土接合痕（Z型）
618	5	大溝	下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.5	259.2	狭端部	褐灰色 10YR5/1	布袋綴じ目、糸切痕
619	5	大溝	下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.8	191	狭端部	灰色 N4/	糸切痕
620	5	大溝	下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.0	87.5	狭端部	灰白色 5Y7/1	糸切痕
621	3	大溝	底部	平瓦	斜格子	－	1.8	62	狭端部	橙色 5YR7/6	
622	6	大溝	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.5	158.8	広端部	黄灰色 2.5Y5/1	糸切痕
623	5	大溝	上層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.5	221.6	広端部	にぶい橙色 7.5YR6/4	糸切痕
624	3	大溝	－	平瓦	斜格子	－	2.1	153.3	広端部	灰白色 N7/	表面摩滅著しい
625	6	大溝	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.5	344.2	広端部	にぶい黄橙色 10YR6/3	布袋綴じ目 断面被熱
626	5	大溝	下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.6	160.7	広端部	灰色 N6/	
627	5	大溝	上層	平瓦	斜格子	－	2.2	335.5	広端部	灰色 N5/	側面削り直し 糸切痕、布袋綴じ目
628	6	大溝	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.7	232.7	広端部	灰色 5Y5/1	断面被熱、糸切痕
629	6	大溝	－	平瓦	－	凸面：全面ナデ・広端側削り 凹面：広端側削り 側面：凸面側削り	2.5	134.8	広端部	にぶい黄橙色 10YR7/2	
630	5	大溝	下層	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.7	341.3	側端部	灰色 N5/	
631	10	大溝	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.6	150.4	側端部	灰色 7.5Y4/1	糸切痕
632	3	大溝	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.8	444.7	側端部	にぶい橙色 7.5YR7/4	糸切痕
633	5	大溝	－	熨斗瓦	斜格子	側面：分割痕跡残る	2.4	541.6	両側端部	にぶい橙色 7.5YR7/3	表面摩滅著しい
945	2	－	1面目	軒平瓦	斜格子か	－	2.7	456.7	瓦当	灰色 N5/	表面摩滅著しい
946	2	－	1面目	丸瓦（有段式）	－	－	2.0	142.4	段部	灰白色 N7/	表面摩滅著しい
947	2	－	1面目	丸瓦	縄目	凸面：ナデ（部分的）	1.8	591.7	広端部	灰色 7.5Y5/1	布袋綴じ目
948	2	－	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.2	283.4	広端部	灰色 N6/	布袋綴じ目
949	2	－	1面目	平瓦	斜格子	－	2.1	269.7	狭端部	灰色 7.5Y6/1	糸切痕
950	5	－	1面目	丸瓦（有段式か）	－	凸面：全面ナデ 凹面：側端側削り	2.2	691.2	広端部	灰白色 5Y7/1	布袋綴じ目
951	5	－	－	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.3	162.8	狭端部	橙色 5YR6/6	粘土接合痕（Z型） 凹面摩滅
952	9	－	側溝	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	2.4	244.8	狭端部	灰色 N5/	
953	10	－	南壁	平瓦	斜格子	側面：凸面側削り	1.1	34.7	狭端部	にぶい黄橙色 10YR7/2	
954	11	－	包含層1	隅平瓦	不明	側面：凸面側削り	1.8	239.6	広端部	明黄褐色 10YR6/6	表面摩滅著しい
955	11	－	重機掘削	平瓦	斜格子	－	2.4	404.9	広端部	黄灰色 2.5Y6/1	断面被熱
956	12	－	包含層	平瓦	斜格子か	側面：凸面側削り	2.2	266	側端部	灰白色 5Y7/1	凹面摩滅著しい
957	13	－	排水溝	軒平瓦	－	凸面：平瓦部・段部現機ナデ 凹面：瓦当部側削り	2.7	387.4	瓦当	灰白色 N7/	表面摩滅著しい
958	14	－	重機掘削	平瓦	縄目	－	1.4	321.1	側端部	灰白色 10YR8/2	顎面剥落
959	14	－	排水溝	隅平瓦	不明	側面：凸面側削り	1.8	103.7	広端部	灰白色 2.5Y7/1	一枚づくり 凹面摩滅著しい
960	19	－	－	軒丸瓦	－	－	1.3	45.1	瓦当	黄灰色 2.5Y5/1	裏面剥落

第６表　出土遺物観察表

【木製品】

報告書図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	樹種	大分類名	小分類名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	AMS 分析番号	時代	特記事項
7	2 区	－	SE0201	－	ケヤキ	漆椀	漆椀	13.2	6.7	5			
49	3 区	－	SP0308	－	スギ	建築部材	礎板	23	10.7	2.2	RCAMS №.10	紀元前１世紀中頃～紀元前１世紀後半	
50	3 区	－	SP0309	－	スギ	建築部材	礎板	20.3	7.6	2.2	RCAMS №.11	５世紀前半～６世紀後半	
60	4 区	－	SP0406	－	スダジイ	建築部材	礎板	76	6.1	5.5			
61	4 区	－	SP0406	－	スダジイ	建築部材	礎板	54.7	5.3	3.2	RCAMS №.7	７世紀後半～８世紀後半	
62	4 区	－	SP0406	－	スダジイ	建築部材	礎板	72.1	6.2	5.9			
63	4 区	－	SP0406	－	ツブラジイ	建築部材	礎板	66.8	5.2	3.1	RCAMS №.13	７世紀中頃～８世紀後半	
64	4 区	－	SP0407	－	ヤナギ属	建築部材	礎板	47.5	5.9	4.8	RCAMS №.14	７世紀後半～８世紀後半	
65	4 区	－	SP0407	－	ヤナギ属	建築部材	礎板	46	6.4	3.9			
137	10 区	－	SP1003	－	スギ	建築部材	礎板	18.2	13	5.9	RCAMS №.12	９世紀後半～10 世紀後半	
198	13 区	K12	NR1301	上層	トチノキ	漆椀	漆椀	12.2	1	4.3			
199	13 区	－	NR1301	下層（河床）	スギ	建築部材	礎板	31.5	5.25	1.9	RCAMS №.20	６世紀前半～７世紀初頭	
200	13 区	－	NR1301	下層（河床）	カヤ	建築部材	柱根	25.95	28.3	27	RCAMS №.9	６世紀末または７世紀初頭～中頃	
201	13 区	－	NR1301	下層（河床）	スギ	建築部材	礎板	39.6	14.9	2.1			
202	13 区	－	NR1301	下層（河床）	スギ	建築部材	礎板	43.1	14.6	2.2			
203	13 区	－	NR1301	下層（河床）	スギ	建築部材	礎板	47.2	15.6	3.1	RCAMS №.19	６世紀前半～７世紀初頭	
204	13 区	－	NR1301	下層（河床）	スギ	建築部材	礎板	48.6	10.5	2.8			
205	13 区	－	NR1301	下層（河床）	スギ	建築部材	礎板	52.6	12.3	2.9			
221	19 区		SD1409		ヒノキ	つけ木	つけ木	25.4	1.6	1.4			
222	19 区		SD1409		ヒノキ	つけ木	つけ木	25.15	1.8	1			
223	19 区		SD1409		ヒノキ	つけ木	つけ木	19.4	1.6	1.1			
250	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	14	13	4.8			
251	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	16.7	10.2	4.3			
252	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	15.5	13.4	5.6			
253	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	18.55	14	4.5			
254	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	19.85	14.1	5.1			
255	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	16.3	14.5	4.8			
256	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	20	10.8	7.1			
257	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	19.85	8.75	5.2	RCAMS №.15	５世紀前半～６世紀前半	
299	15 区	－	SP1546	柱穴埋土	カヤ	建築部材	礎板	35.05	14.5	8.05			
300	15 区	－	SP1546	柱穴埋土	スギ	建築部材	礎板	31.4	18.1	3.9	RCAMS №.16	６世紀後半～７世紀中頃	
250	15 区	－	SD1505	暗褐色土	カヤ	加工木片	加工木片	28.6	14.7	3.6	RCAMS №.17	５世紀前半～６世紀中	
301	15 区	－	SP1548	柱穴埋土	カヤ	建築部材	礎板	36.9	23.1	5.5			
302	15 区	－	SP1548	柱穴埋土	ヒノキ	建築部材	礎板	29.5	13.5	4.6			
303	15 区	－	SP1548	柱穴埋土	ヒノキ	建築部材	礎板	53.6	27.2	14.5	RCAMS №.8	６世紀末または７世紀初頭～中頃	
304	15 区	－	SP1549	柱穴埋土	スギ	建築部材	礎板	47.5	27.5	9	RCAMS №.18	７世紀初頭～中頃	
305	16 区	J-18	SP1615	－	カヤ	建築部材	礎板	49.1	22.6	12.1	RCAMS №.6	６世紀末または７世紀初頭～中頃	
634	4 区	－	大溝	－	ヒノキ	雑具	燃え差し	17.2	1.9	0.8			
635	4 区	－	大溝	－	スギ	加工木片	加工木片	8.9	7	2.8			
636	6 区	E19	大溝	－	トチノキ	食事具	挽物	3.7	8.8	1.1			
637	6 区	E20	大溝	－	ヒノキ	食事具	刳物	15	5.2	1.1			
638	6 区	E20	大溝	－	トチノキ	祭祀具	斎串状	12.1	1.5	0.35			
639	6 区	E19	大溝	－	ヒノキ	雑具	燃え差し	13.85	1.3	0.7			
640	6 区	E19	大溝	－	ヒノキ	雑具	燃え差し	20.75	2.2	0.8			
641	6 区	E19	大溝	－	スギ	用途不明品	薄板状	11.6	1.7	0.6	RCAMS №.21	６世紀後半～７世紀中頃	
642	6 区	E19	大溝	－	スギ	用途不明品	用途不明品	15.6	1.3	0.8			
643	6 区	E20	大溝	－	スギ	用途不明品	薄板状	14.55	1.1	0.6			
644	6 区	E19	大溝	－	スギ	用途不明品	用途不明品	15.2	1.7	1			
645	6 区	E19	大溝	－	スギ	用途不明品	棒状	17	1.2	0.5			
646	6 区	E19	大溝	－	スギ	用途不明品	薄板状	16.85	1.25	0.45			

第６表　出土遺物観察表

報告書図版番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	樹種	大分類名	小分類名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	AMS分析番号	時代	特記事項
647	6区	E20	大溝	－	スギ	用途不明品	薄板状	20.55	1.25	0.9			
648	6区	E20	大溝	－	ヒノキ	用途不明品	用途不明品	26.2	2	0.7			
649	10区	－	大溝	－	スギ	用途不明品	用途不明品	20.5	2.6	0.65			
650	10区	－	大溝	－	－	用途不明品	用途不明品	13.1	1.2	0.7			
651	10区	－	大溝	－	スギ	用途不明品	用途不明品	13.5	8.8	3.5			
652	10区	－	大溝	－	ヒノキ	木簡	木簡	23.8	3.3	0.5			
653	6区	E-19	大溝	－	スギ	木簡	木簡	16.7	2	0.6			
654	6区	E-19	大溝	－	ヒノキ	木簡	木簡	19.3	1.6	0.4			
655	6区	E-20	大溝	－	スギ	木簡	木簡	25.7	3	1.6			
656	13区	K12	NR1301	上層	ヒノキ	木簡	木簡(木札)	4.2	2.4	0.6			
961	19区		包含層		スギ	板	板	165.5	18.4	4.4	RCAMS №23	6世紀後半～7世紀中頃	
962	19区		包含層		スギ	板	板	84	14	5	RCAMS №22	6世紀中頃～7世紀初頭	
963	19区		包含層		ヒノキ	杭	杭	73.7	6.6	5.2	RCAMS №25	17世紀末～20世紀中頃	
964	19区		包含層		クリ	杭	杭	62.4	9.7		RCAMS №24	17世紀中頃～20世紀中頃	
965	19区				クリ	有孔板片	有孔板片	22.9	9.6	2.9			

【石器・石製品】

報告書図版番号	調査区	遺構名	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率	石材	備考
438	19	土器集中地点	－	石棒	(16.1)	6.0	5.15	779.7	下半部欠損	砂岩	
966	5	包含層	－	打製石斧	10.6	4.5	1.5	75	完形	粘板岩	
967	10	包含層	－	石棒	27.1	5.8	4.6	1302.92	完形	粗粒砂岩	

※（　）は現存値

【金属製品】

報告書図版番号	調査区	遺構名	層位	種類	径・長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存部	備考
4	2	SB0201	－	鉄釘	13.2	1.3～1.7	0.4～1.0	112.9	先端部欠損	
206	13	NR1301	埋土上層	鉄釘	9.8	0.5～0.7	0.3～0.7	12.9	先端部欠損	
207	13	NR1301	埋土上層	用途不明鉄製品	12.95	0.6	0.6	18.8		
208	13	NR1301	埋土上層	寛永通宝	2.7	－	0.1	4.3		
209	13	NR1301	埋土上層	寛永通宝	2.3	－	0.08	3.2		
968	2	－	－	寛永通宝	2.2	－	0.08	2.7		

第５章　自然科学分析

第１節　尾羽廃寺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

静岡市清水区尾羽地内に所在する尾羽廃寺跡は、庵原山地から駿河湾へと流下する庵原川下流域左岸の沖積低地上に位置する。これまでの発掘調査により、平安時代とされる礎石建物跡や区画溝などの遺構が検出され、それらに伴う遺物も出土している。

本報告では、礎石建物跡の基壇の裾を覆う土壌中に確認された火山灰(テフラ)と考えられる堆積物を対象として分析を行い、その性状を明らかにすることによって、既知のテフラとの対比から、基壇に係る年代資料を作成する。また、調査区内から多量に出土した炭化米や炭化材および木片を対象とした放射性炭素年代測定を実施し、これらも尾羽廃寺跡に係る年代資料とする。

１　火山灰の分析

（１）試料

試料は、基壇南側で採取された２点と15区の炭化米下層から採取された２点の計４点の堆積物である。基壇南側の２点にはサンプル№.１と２が付され、炭化米下層の２点にはサンプル№.３と４がそれぞれ付されている。

試料の外観は、いずれも灰白色を呈する砂質シルトである。ただし、採取された試料のうち、サンプル№.１～３では厚さ３cm程度の層状をなすが、サンプル№.４は褐色土中に灰白色のブロックが斑状に散在する状態を呈する。

（２）分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

（３）結果

結果を表１に示す。４点の試料からは、細砂～極細砂径の火山ガラスが検出された。火山ガラスの量比は、サンプル№.１と２では中量程度、サンプル№.３では多量、サンプル№.４では少量程度である。いずれの試料においても、無色透明の軽石型火山ガラスにより構成される。また、サンプル№.１と２では極めて微量、サンプル№.３では微量ではあるが黒雲母の微細片が確認された。

表１　テフラ分析結果

試料名	グリッド	遺構・層位	スコリア	火山ガラス		軽石
			量	量	色調・形態	量
サンプル№１		基壇南側	－	+++	cl・pm	
サンプル№１		基壇南側	－	+++	cl・pm	
サンプル№３	15区	炭化米下層	－	++++	cl・pm	
サンプル№４	15区	炭化米下層	－	++	cl・pm	

凡例　－：含まれない，(+)：きわめて微量，+：微量，++：少量，+++：中量，++++多量
cl：無色透明，br：褐色，bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型

（４）考察

分析処理後の砂分の状況から、試料とした灰白色の砂質シルトは、細粒の火山ガラスにより構成される火山ガラス質テフラの降下堆積物であると考えられる。火山ガラスの色調や形態および微量ながらも黒雲母をともなうこと、そして検出された層位が平安時代に築造された基壇よりも上位であることと尾羽廃寺跡の地理的位置などを考慮すると、テフラは伊豆神津島の天上山を給源とする神津島天上山テフラ(Ⅰz-Kt：一色，1982)に同定される。噴出年代は、文献資料によりAD838年(承和５年)とされている(一色，1982)。したがって、基壇の築造年代はⅠz-Ktの降灰する直前の９世紀初頭頃とすることができる。

２　炭化米・炭化材・木片の放射性炭素年代測定

（１）試料

試料は、調査区内各所で採取された炭化米３点と炭化米集中部から採取された炭化米１点および炭化材１点、さらに柱穴より採取された木片３点と河川跡から採取された木片１点の合計９点である。各試料にはサンプル№１～９までの試料名が付されている。試料の一覧を表２に示す。

発掘調査所見によれば、炭化米および炭化材は、郡衙の施設である正倉の火災を示すものとされている。一方、柱穴より採取された木片は柱の礎板の一部であったと考えられており、河川跡から出土した木片は、建物の柱とされる木材から採取されたものである。ただし、木材の出土した柱穴の検出面と同層準からは弥生時代から平安時代までの遺物が出土しており、その時期は不明とされている。また、柱の出土した河川跡は江戸時代の河川と考えられていることから、やはり柱自体の年代については不明とされている。

表２　年代測定試料一覧

試料名	遺構・層位	備考
サンプル№１	基壇裾部（S-灰）	炭化米
サンプル№２	基壇裾部（東N-灰）	炭化米
サンプル№３	SK1419（埋土）	炭化米
サンプル№４	炭化米集中（SX1507）	炭化米
サンプル№５	炭化米集中（SX1507）	炭化木材
サンプル№６	SP1615　第144図305	木片（水漬け）
サンプル№７	SP0406　第89図61	木片（水漬け）
サンプル№８	SP1548　第144図303	木片（水漬け）
サンプル№９	NR1301　第121図200	木片（水漬け）

（２）分析方法

試料は、試料の状況を観察後、分析用試料とする。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・

酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lであるが、試料が脆弱な場合や少ない場合は、アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ(AaAと記載)。試料がさらに少ない場合、アルカリ処理を行うと測定に必要な炭素が得られなくなるため、1mol/Lの塩酸処理のみにとどめている(HClと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度(^{14}C/^{12}C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)を用いる。較正曲線はIntcal13 (Reimer et al.,2013)を用いる。

(3) 結果

結果を表3に示す。今回は加速器質量分析計による年代測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は、サンプル№1(炭化米)とサンプル№2(炭化米)が1120±20BP、サンプル№3(炭化米)とサンプル№4(炭化米)が1090±20BP、サンプル№5(炭化材)が1110±20BP、サンプル№6(木片)が1440±20BP、サンプル№7(木片)が1275±20BP、サンプル№8(木片)が1410±20BP、サンプル№9(木片)が1420±20BPである。

表3および図1には暦年較正値も示す。暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差2σの暦年代は、サンプル№1からサンプル№5までの炭化米および炭化材が9世紀末から10世紀末までの年代であり、サンプル№6とサンプル№8およびサンプル№9の木片は6世紀末または7世紀初頭から7世紀中頃までの年代、サンプル№7の木片は7世紀後半から8世紀後半までの年代である。

(4) 考察

前述したように年代測定の試料とした炭化米と炭化材は、郡衙の施設である正倉の火災によるものとされている。測定された年代値がほぼ同一であることから、一度の火災によって生じたものであることを示していると考えられる。火災の発生年代は、おそらく10世紀中のある年代であると考えられる。このことは、前述したテフラにより推定された正倉の基壇の構築年代とも矛盾しない。

木片試料から得られた年代は、いずれも炭化米や炭化材が示す年代よりも有意に古く、古墳時代末から奈良時代までの年代を示す。おそらく、郡衙以前の建物に由来すると考えられる。これらのうち、礎板の試料2点と河川跡出土柱の試料は、ほぼ同様の年代であることから、それぞれ同時期にあった建物に由来する可能性があると考えられる。

表3　放射性炭素年代測定結果

| 試料 | 種別／性状 | 方法 | 補正年代（暦年較正用）BP | δ 13C (‰) | 暦年較正年代 | | |

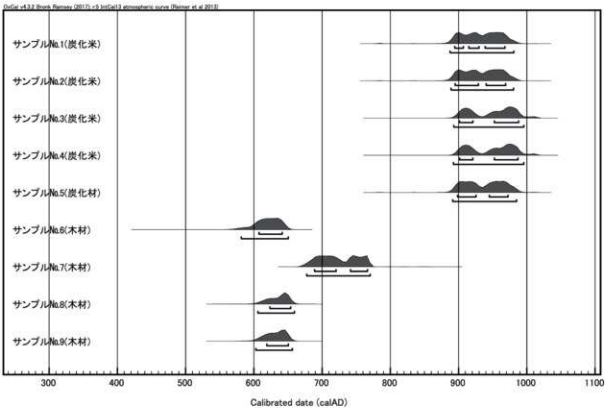
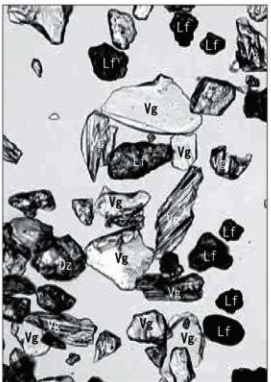
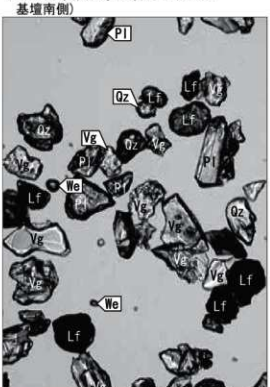

OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
サンプルNo.1(炭化米)
サンプルNo.2(炭化米)
サンプルNo.3(炭化米)
サンプルNo.4(炭化米)
サンプルNo.5(炭化材)
サンプルNo.6(木材)
サンプルNo.7(木材)
サンプルNo.8(木材)
サンプルNo.9(木材)
300
400
500
600
700
800
900
1000
1100
Calibrated date (calAD)

図１　暦年校正結果

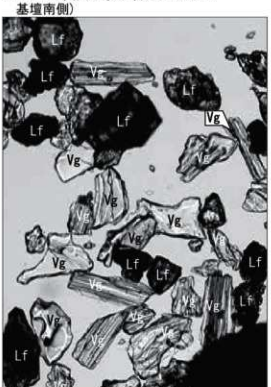
1. Iz-Ktの火山ガラス（サンプルNo.1
基壇南側）



2. Iz-Ktの火山ガラス（サンプルNo.2
基壇南側）



3. Iz-Ktの火山ガラス（サンプルNo.3
15区　炭化米下層　火山灰）



4. Iz-Ktの火山ガラス（サンプルNo.4
15区　炭化米下層　火山灰）

Vg：火山ガラス．Qz：石英．Pl：斜長石．Lf：岩片．We：風化粒．

0.2mm

写真1　テフラ

第２節　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・米田恭子

はじめに

静岡市清水区尾羽地内に所在する尾羽廃寺跡より検出された木片16点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

1　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料はいずれも生材で、柱穴SP0308から採取された試料№10（PLD-44834）、柱穴SP0309から採取された試料№11（PLD-44835）、柱穴SP1003から採取された試料№12（PLD-44836）、掘立柱建物の柱穴SP0406から採取された試料№13（PLD-44837）、掘立柱建物の柱穴SP0407から採取された試料№14（PLD-44838）、溝SD1505から採取された試料№15（PLD-44839）、掘立柱建物の柱穴SP1546から採取された試料№16（PLD-44840）、掘立柱建物の柱穴SP1547から採取された試料№17（PLD-44841）、掘立柱建物の柱穴SP1548から採取された試料№18（PLD-44842）、NR1301から出土した柱根の礎板２点（試料№19：PLD-44843、試料№20：PLD-44844）、大溝の木簡付近の木製品溜まりより採取された試料№21（PLD-44845）、19区基壇脇の基壇裾から出土した板２点（試料№22：PLD-44846、試料№23：PLD-44847）、19区第1面の基壇裾から出土した杭２点（試料№24：PLD-44848、試料№25：PLD-44849）の、合計16点である。試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、部位不明であった。

なお、現場所見では、試料№10～№23が採取された遺構の時期は、古墳時代から平安時代とみられており、試料№24と№25については、より新しい時期と考えられている。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{13}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

2　結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20、暦年較正結果が1950年以降にのびる

試料についてはPost-bomb atmospheric NH2）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

3　考察

以下では、各試料の暦年較正結果のうち、2σ暦年代範囲（確率95.45%）に着目して、遺構ごとに結果を整理する。なお、弥生時代の暦年代については小林（2009）、古墳時代の暦年代については岸本（2011）を参照した。

柱穴SP0308の試料№10（PLD-44834）は、47 cal BC-65 cal AD（95.45%）の暦年代を示した。これは紀元前1世紀中頃～紀元後1世紀後半で、弥生時代中期後葉～後期前半に相当する。一方、同一の建物の柱穴の可能性があるSP0309の試料№11（PLD-44835）は、415-481 cal AD（55.17%）および490-537 cal AD（40.28%）の暦年代を示した。これは5世紀前半～6世紀前半で、古墳時代中期～後期に相当する。

柱穴SP1003の試料№12（PLD-44836）は、775-785 cal AD（5.57%）、830-850 cal AD（4.86%）、875-977 cal AD（85.02%）の暦年代を示した。これは9世紀後半～10世紀後半で、平安時代前～中期に相当する。

掘立柱建物の柱穴SP0406の試料№13（PLD-44837）は、658-705 cal AD（49.75%）および739-773 cal AD（45.70%）の暦年代を示した。また、同じ掘立柱建物の柱穴SP0407から採取された試料№14（PLD-44838）は、663-707 cal AD（44.37%）および725-773 cal AD（51.08%）の暦年代を示した。いずれも飛鳥時代～奈良時代に相当する暦年代である。

溝SD1505の試料№15（PLD-44839）は、416-482 cal AD（53.42%）および488-538 cal AD（42.03%）の暦年代を示した。これは5世紀前半～6世紀前半で、古墳時代中期～後期に相当する。

掘立柱建物の柱穴SP1546の試料№16（PLD-44840）は、573-644 cal AD（95.45%）の暦年代を示した。これは6世紀後半～7世紀中頃で、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。同じ掘立柱建物の柱穴SP1547の試料№17（PLD-44841）は、428-545 cal AD（95.45%）の暦年代を示した。これは5世紀前半～6世紀中頃で、古墳時代中期～後期に相当する。さらに、同じ掘立柱建物の柱穴SP1548の試料№18（PLD-44842）は、603-655 cal AD（95.45%）の暦年代を示した。これは7世紀初頭～中頃で、飛鳥時代に相当する。

NR1301の試料№19（PLD-44843）は539-603 cal AD（95.45%）、試料№20（PLD-44844）は539-603 cal AD（95.45%）の暦年代を示した。いずれも6世紀前半～7世紀初頭で、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。

大溝の試料№21（PLD-44845）は、562-641 cal AD（95.45%）の暦年代を示した。これは6世紀後半～7世紀前半で、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。

19区基壇脇の基壇裾から出土した板である試料№22（PLD-44846）は544-604 cal AD（95.45%）で6世紀中頃～7世紀初頭、試料№23（PLD-44847）は589-649 cal AD（95.45%）で6世紀後半～7世紀中頃の暦年代を示した。いずれも古墳時代後期～飛鳥時代に相当する暦年代である。

19区第1面の基壇裾から出土した杭である試料№24（PLD-44848）は、1642-1674 cal AD（46.76%）、1742-1750 cal AD（1.88%）、1765-1774 cal AD（2.71%）、1777-1799 cal AD（37.54%）、1941-1951 cal AD（6.28%）、1953-1954 cal AD（0.28%）の暦年代を示した。これは17世中頃～18世紀末および20世紀中頃で、江戸時代前期～後期および昭和時代の暦年代である。また、同じ19区第1面の基壇裾から出土した杭である試料№25（PLD-44849）は、1695-1725 cal AD（28.97%）、1811-1838 cal AD

(27.04%)、1843-1853 cal AD (2.42%)、1855-1861 cal AD (1.34%)、1866-1872 cal AD (1.20%)、1877-1916 cal AD (33.97%)、1954-1955 cal AD (0.53%)の暦年代を示した。これは17世紀末～20世紀中頃で、江戸時代前期～昭和時代の暦年代である。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

今回の測定結果では、現場所見による推定時期に対しておおむね整合的な年代値が得られた。ただし、柱穴SP0308の試料№10 (PLD-44834) については、やや古い年代値を示した。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. Radiocarbon, 55(4), 1-14.

岸本直文 (2011) 古墳編年と時期区分. 一瀬和夫・福永伸哉・北条芳隆編「古墳時代の考古学1　古墳時代史の枠組み」: 34-44, 同成社.

小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12

表 1　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44834	遺構：柱穴 SP0308 出土位置：3 区 試料№ 10 遺物№第 85 図 48 備考：試料№ 11 と同一の建物か？	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44835	遺構：柱穴 SP0309 出土位置：3 区 試料№ 11 遺物№第 85 図 49 備考：№ 10 と同一の建物か？	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44836	遺構：柱穴 SP1003 出土位置：10 区 試料№ 12 遺物№第 109 図 137	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44837	遺構：柱穴 SP0406 出土位置：4 区 試料№ 13 遺物№第 89 図 63 備考：№ 14 と同一の建物	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44838	遺構：柱穴 SP0407 出土位置：4 区 試料№ 14 遺物№第 89 図 64 備考：№ 13 と同一の建物	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44839	遺構：溝 SD1505 出土位置：15 区 試料№ 15 遺物№第 134 図 257	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44840	遺構：柱穴 SP1546 出土位置：15 区 試料№ 16 遺物№第 144 図 299 備考：試料№ 17、18 と同一の建物	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44841	遺構：柱穴 SP1547 出土位置：15 区 試料№ 17 遺物№第 144 図 300 備考：試料№ 16、18 と同一の建物	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44842	遺構：柱穴 SP1548 出土位置：15 区 試料№ 18 遺物№第 144 図 304 備考：試料№ 16、17 と同一の建物	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44843	遺構：NR1301 出土位置：13 区 試料№ 19 遺物№第 121 図 203 備考：柱根の礎板	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44844	遺構：NR1301 出土位置：13 区 試料№ 20 遺物№第 121 図 199 種類：柱根の礎板	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44845	遺構：大溝 出土位置：6 区 試料№ 21 遺物№第 199 図 641 備考：木簡付近の木製品溜まり	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-44846	遺構：基壇脇 出土位置：19区基壇脇 試料№.22 遺物№.第221図972 種類：板	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44847	遺構：基壇脇 出土位置：19区基壇脇 試料№.23 遺物№.第221図971 種類：板	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44848	遺構：基壇脇 出土位置：19区第1面 試料№.24 遺物№.第221図974 種類：杭	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-44849	遺構：基壇脇 出土位置：19区第1面 試料№.25 遺物№.第221図973 種類：杭	種類：生材（木片） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-44834 試料№.10 柱穴 SP0308	−23.42 ± 0.24	2007 ± 21	2005 ± 20	41-10 cal BC (37.55%) 0-25 cal AD (28.36%) 51-54 cal AD (2.36%)	47 cal BC-65 cal AD (95.45%)
PLD-44835 試料№.11 柱穴 SP0309	−26.32 ± 0.21	1615 ± 20	1615 ± 20	418-437 cal AD (22.87%) 463-476 cal AD (14.00%) 499-512 cal AD (12.39%) 513-532 cal AD (19.01%)	415-481 cal AD (55.17%) 490-537 cal AD (40.28%)
PLD-44836 試料№.12 柱穴 SP1003	−25.56 ± 0.28	1145 ± 19	1145 ± 20	776-780 cal AD (3.20%) 883-898 cal AD (17.74%) 919-957 cal AD (44.30%) 968-973 cal AD (3.02%)	775-785 cal AD (5.57%) 830-850 cal AD (4.86%) 875-977 cal AD (85.02%)
PLD-44837 試料№.13 柱穴 SP0406	−28.40 ± 0.20	1314 ± 20	1315 ± 20	664-683 cal AD (31.37%) 744-760 cal AD (27.32%) 766-772 cal AD (9.58%)	658-705 cal AD (49.75%) 739-773 cal AD (45.70%)
PLD-44838 試料№.14 柱穴 SP0407	−29.03 ± 0.22	1301 ± 20	1300 ± 20	670-687 cal AD (22.26%) 699-701 cal AD (2.88%) 742-772 cal AD (43.12%)	663-707 cal AD (44.37%) 725-773 cal AD (51.08%)
PLD-44839 試料№.15 溝 SD1505	−23.30 ± 0.20	1610 ± 20	1610 ± 20	420-437 cal AD (19.20%) 462-476 cal AD (14.91%) 498-532 cal AD (34.16%)	416-482 cal AD (53.42%) 488-538 cal AD (42.03%)
PLD-44840 試料№.16 柱穴 SP1546	−24.49 ± 0.26	1463 ± 20	1465 ± 20	590-610 cal AD (31.88%) 618-640 cal AD (36.39%)	573-644 cal AD (95.45%)
PLD-44841 試料№.17 柱穴 SP1547	−26.12 ± 0.20	1582 ± 20	1580 ± 20	435-465 cal AD (28.80%) 475-500 cal AD (23.56%) 507-516 cal AD (7.52%) 530-539 cal AD (8.39%)	428-545 cal AD (95.45%)
PLD-44842 試料№.18 柱穴 SP1548	−25.77 ± 0.22	1416 ± 20	1415 ± 20	607-622 cal AD (33.14%) 638-651 cal AD (35.13%)	603-655 cal AD (95.45%)

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-44844 試料№ 20 NK1301	-23.22 ± 0.20	1514 ± 20	1515 ± 20	551-586 cal AD (68.27%)	539-603 cal AD (95.45%)
PLD-44845 試料№ 21 大溝	-23.70 ± 0.20	1479 ± 20	1480 ± 20	572-605 cal AD (60.99%) 628-634 cal AD (7.28%)	562-641 cal AD (95.45%)
PLD-44846 試料№ 22 基壇裾	-24.68 ± 0.23	1504 ± 19	1505 ± 20	562-595 cal AD (68.27%)	544-604 cal AD (95.45%)
PLD-44847 試料№ 23 基壇裾	-24.30 ± 0.26	1445 ± 19	1445 ± 20	604-611 cal AD (15.47%) 615-641 cal AD (52.80%)	589-649 cal AD (95.45%)
PLD-44848 試料№ 24 基壇裾	-27.81 ± 0.20	227 ± 19	225 ± 20	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1650-1667 cal AD (36.29%) 1783-1795 cal AD (31.97%)	Post-bomb NH2 2013, Reimer et al 2020: 1642-1674 cal AD (46.76%) 1742-1750 cal AD (1.88%) 1765-1774 cal AD (2.71%) 1777-1799 cal AD (37.54%) 1941-1951 cal AD (6.28%) 1953-1954 cal AD (0.28%)

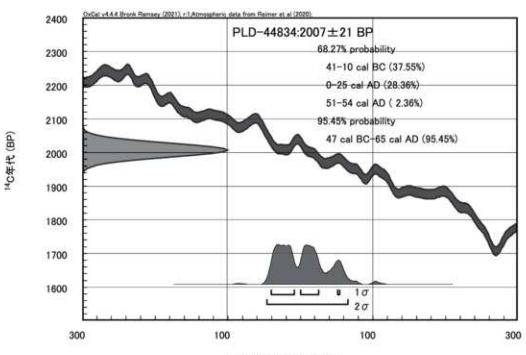
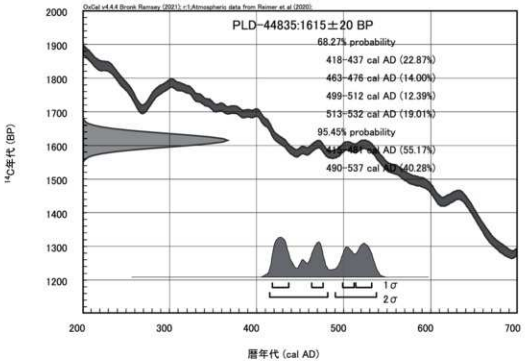


図１　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44835:1615±20 BP
68.27% probability
418-437 cal AD (22.87%)
463-476 cal AD (14.00%)
499-512 cal AD (12.39%)
513-532 cal AD (19.01%)
95.45% probability
415-451 cal AD (55.17%)
490-537 cal AD (40.28%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

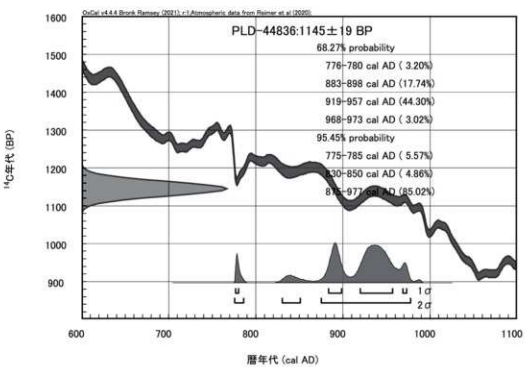
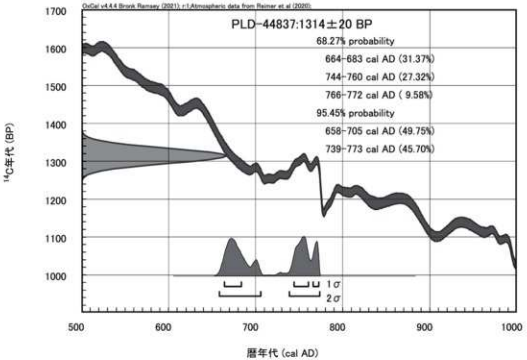

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44836:1145±19 BP
68.27% probability
776-780 cal AD (3.20%)
883-898 cal AD (17.74%)
919-957 cal AD (44.30%)
968-973 cal AD (3.02%)
95.45% probability
775-785 cal AD (5.57%)
830-850 cal AD (4.86%)
875-977 cal AD (85.02%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図2　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44837:1314±20 BP
68.27% probability
664-683 cal AD (31.37%)
744-760 cal AD (27.32%)
766-772 cal AD (9.58%)
95.45% probability
658-705 cal AD (49.75%)
739-773 cal AD (45.70%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

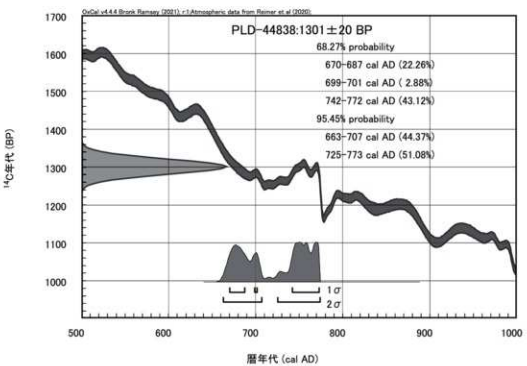
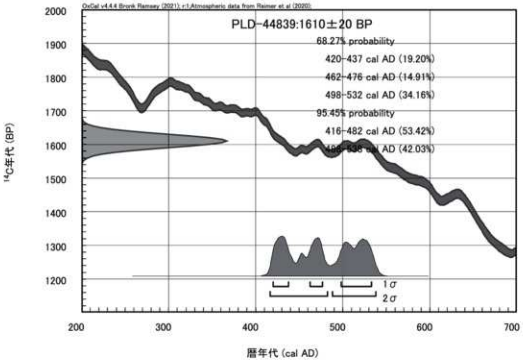

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44838:1301±20 BP
68.27% probability
670-687 cal AD (22.26%)
699-701 cal AD (2.88%)
742-772 cal AD (43.12%)
95.45% probability
663-707 cal AD (44.37%)
725-773 cal AD (51.08%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図3　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44839:1610±20 BP
68.27% probability
420-437 cal AD (19.20%)
462-476 cal AD (14.91%)
498-532 cal AD (34.16%)
95.45% probability
416-482 cal AD (53.42%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

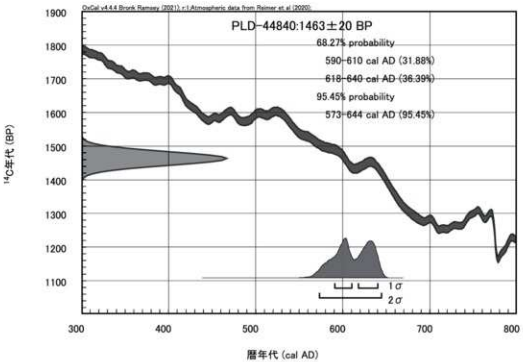
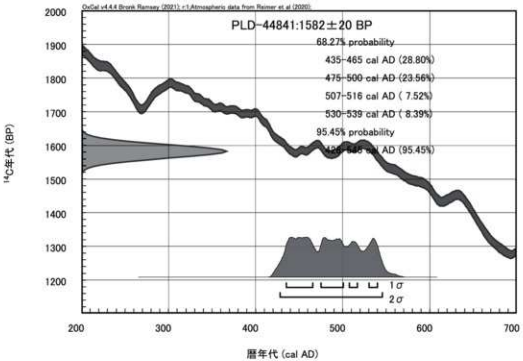

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44840:1463±20 BP
68.27% probability
590-610 cal AD (31.88%)
618-640 cal AD (36.39%)
95.45% probability
573-644 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図4　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44841:1582±20 BP
68.27% probability
435-465 cal AD (28.80%)
475-500 cal AD (23.56%)
507-516 cal AD (7.52%)
530-539 cal AD (8.39%)
95.45% probability
426-548 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

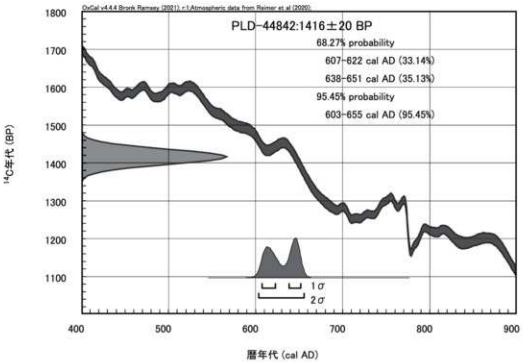
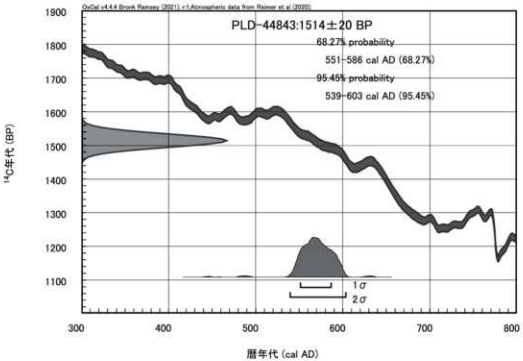

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44842:1416±20 BP
68.27% probability
607-622 cal AD (33.14%)
638-651 cal AD (35.13%)
95.45% probability
603-655 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図５　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44843:1514±20 BP
68.27% probability
551-586 cal AD (68.27%)
95.45% probability
539-603 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

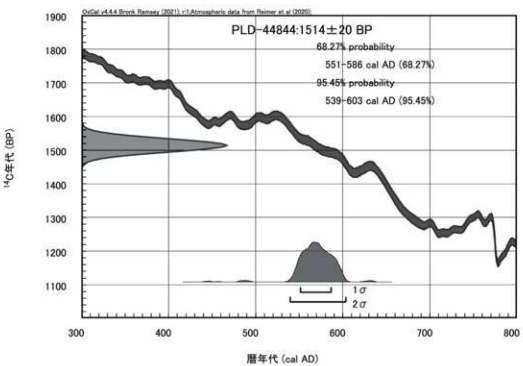
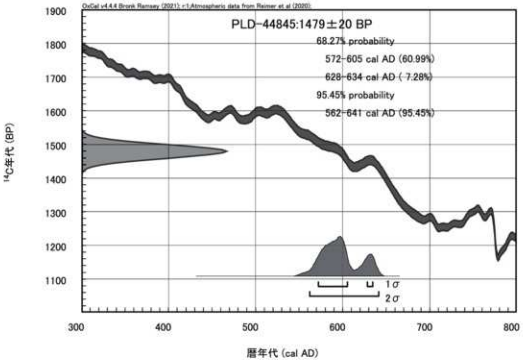

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44844:1514±20 BP
68.27% probability
551-586 cal AD (68.27%)
95.45% probability
539-603 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図6　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44845:1479±20 BP
68.27% probability
572-605 cal AD (60.99%)
628-634 cal AD (7.28%)
95.45% probability
562-641 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

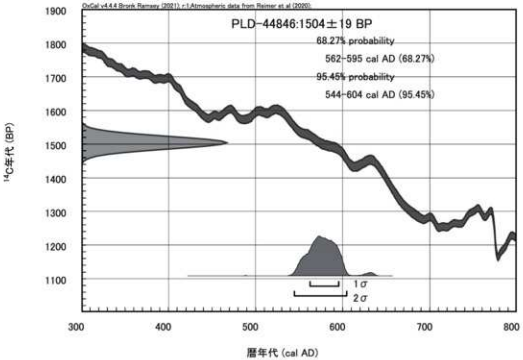
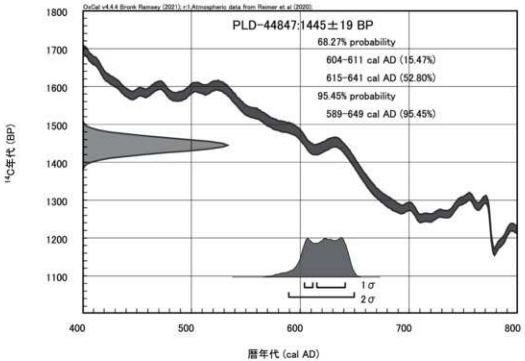

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5;Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44846:1504±19 BP
68.27% probability
562-595 cal AD (68.27%)
95.45% probability
544-604 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図7　分析結果


OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020);
PLD-44847:1445±19 BP
68.27% probability
604-611 cal AD (15.47%)
615-641 cal AD (52.80%)
95.45% probability
589-649 cal AD (95.45%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

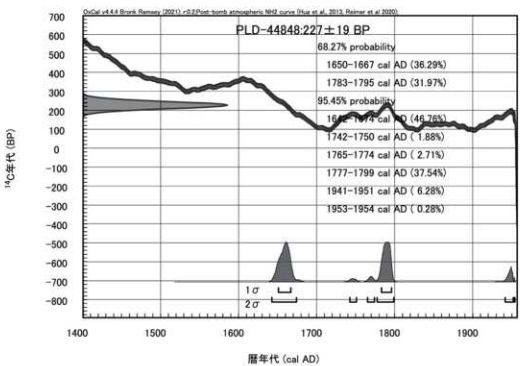

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 2.2Post-bomb atmospheric NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020);
PLD-44848:227±19 BP
68.27% probability
1650-1667 cal AD (36.29%)
1783-1795 cal AD (31.97%)
95.45% probability
1650-1774 cal AD (46.76%)
1742-1750 cal AD (1.88%)
1765-1774 cal AD (2.71%)
1777-1799 cal AD (37.54%)
1941-1951 cal AD (6.28%)
1953-1954 cal AD (0.28%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
暦年代 (cal AD)

図8　分析結果

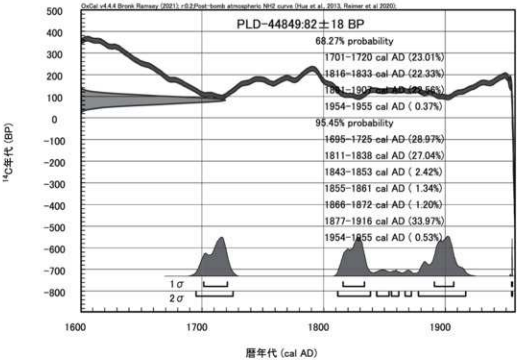

OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Post-bomb atmospheric NH2 curve (Hua et al., 2013, Reimer et al 2020)
PLD-44849:82±18 BP
68.27% probability
1701-1720 cal AD (23.01%)
1816-1833 cal AD (22.33%)
1841-1903 cal AD (22.56%)
1954-1955 cal AD (0.37%)
95.45% probability
1695-1725 cal AD (28.97%)
1811-1838 cal AD (27.04%)
1843-1853 cal AD (2.42%)
1855-1861 cal AD (1.34%)
1866-1872 cal AD (1.20%)
1877-1916 cal AD (33.97%)
1954-1955 cal AD (0.53%)
1σ
2σ
500
400
300
200
100
0
−100
−200
−300
−400
−500
−600
−700
−800
14C年代 (BP)
1600
1700
1800
1900
暦年代 (cal AD)

図9　分析結果

第３節　尾羽廃寺跡から出土した木材の樹種

鈴木　三男

静岡市清水区尾羽の古代寺院である尾羽廃寺跡から出土した木材138点の樹種を同定した。樹種を調べた木材は用途が明確なものは柱材、礎板、漆器、木簡、杭材など多岐に亘るが、多くは薄板状、棒状、加工材の木片などと表記される部材あるいは端材で、形状と用途が明確に類推できるものは多くは無いが、廃寺関連の出土材と言うことから当時の用材傾向の一端を知る手がかりとなり得ることからその樹種同定を行った。

以上138点の資料から下記に述べる木材の15の樹種と１種類の樹皮が同定された。

（１）イヌマキ属 *Podocarpus*　マキ科

写真１-1a-c（№172311）

材が均質で年輪のはっきりしない針葉樹材で、出土材の保存性は良い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部は年輪界附近の数細胞しか認められない。樹脂細胞は横断面で扁平な四角形、量が多く、年輪内全体に均一に散在するが、ヒノキ科のように黒褐色の樹脂様物質が蓄積されることはないので、横断面では見つけにくい。また樹脂細胞の水平壁は薄く平滑で、数珠状に肥厚することはない。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみから成り、分野壁孔は、小型のヒノキからトウヒ型、１分野あたり１～２個存在する。以上の形質から、マキ科のイヌマキ属の材と同定した。

イヌマキ属には関東地方南部以南の沿岸部の温暖地に生育するイヌマキ*Podocarpus macrophyllus*（Thunb.）Lambertと紀伊半島南部より南西に分布するナギ*Podocarpus nagi*（Thunb.）Zoll. et Moritziの２種があり、静岡県地方では後者もしばしば植栽されているが、その自然分布から本遺跡出土材はイヌマキと考えられる。静岡県内の弥生時代～中世の遺跡からは他府県では例を見ない量のイヌマキ属の木材(多くは丸木弓や柱材)が出土している。イヌマキの材は年輪が不明瞭で木理通直、硬く緻密で粘りがあり特に水湿に強く、また、シロアリにも強く、建築材(柱、土台回り)によく使われたが、資源量が限られているので現在ではほとんど使われることはない。本遺跡出土材は礎板と薄板状の加工材の２点である。

（２）ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Siebold et Zucc.　ヒノキ科

写真１-2a-c（№17235）

出土材はスギに比して色が淡く、褐色を呈するのが一般的である。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は急で、年輪はやや明瞭だが、晩材部の量が少ないので年輪そのものは目立たない。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に緩く集まって散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。放射組織は単列で、放射柔組織のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ～トウヒ型で、１分野に１～２個ある。これらの形質から、ヒノキ科ヒノキ属のヒノキと同定した。

ヒノキは関東地方北部から九州屋久島までの温帯域に広く分布するが、特に中部地方の山地帯に多い。わが国の針葉樹類中でもっとも材質が優れたものの一つで、古代の畿内地方を中心に大型の建築物の建築材や各種器具材、細工物、木簡や形代、斎串、曲物など、広く用いられてきている。本遺跡出土材は木簡、斎串状、杭、薄板状、つけ木、棒など多様で25点ある。

（３）スギ *Cryptomeria japonica*（Linn.f.）D.Don　ヒノキ科

写真１-3a-c（№17201）

出土材は一般に黒褐色を呈する。水平・垂直の両樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は明瞭で、早材から晩材への移行はゆるやか～やや急で、年輪幅は広いものから非常に狭いものまでの変異がある。樹脂細胞は晩材部に接線方向にややまとまりながら散在している。樹脂細胞の水平壁はやや厚くなり、微小な単壁孔があるが、通常は数珠状に肥厚することはない。放射組織は単列で放射柔細胞のみからなる。放射柔細胞の水平壁、垂直壁は平滑で壁孔は見られない。分野壁孔は大型のスギ型で１分野あたり通常２個あり、開孔部の長軸は水平に近い方向になる。以上の形質より、ヒノキ科のスギの材と同定した。

スギは青森県南部から九州屋久島までの全国の温帯～暖帯に広く分布し、特に本州日本海側と東海地方に多い。成長が早く、幹径１ｍ、樹高30ｍを超える大木になり、大材が得易く、また、軽軟で切断、加工がしやすく、建築材を始め、各種器具材に縄文時代以来、北陸、東海地方でよく利用されてきている。

豊富なスギ資源を背景に、静岡県は弥生時代～中世の遺跡から大量のスギ材が出土している。本遺跡出土材は薄板状、杭、礎板、木簡、用途不明品材など50点である。

（４）ヒノキ科樹皮　Cupressaceae bark

写真２-4a-c（№17316）

黒褐色の板状及び薄板状の「木材」で、容易に薄く剥がれる。横断面では細胞が接線（板目）方向に整然と配列した細胞層群を直角に横切る放射組織で区画されている。接線方向に配列する細胞層群には明確に２種類があり、一つは厚壁で断面が四角形～円形で、中心にせまい細胞内腔を持つ繊維細胞が1細胞層の厚さで接線方向に連なる「繊維細胞層」である。もう一つは、細胞が扁平で細胞壁は薄く、細胞内腔が大きい細胞が２～10細胞層ほどの厚さで接線方向に連なる「柔細胞・篩細胞層」である。中には細胞内に濃い褐色物質が詰まった細胞層が認められることがあるが、これは柔細胞層であるが、他の部分では篩細胞層と区別できないところが多い。このように、本出土遺物は１細胞層の「繊維細胞層」と２から10細胞層程度の「柔細胞・篩細胞層」が交互に釣り返し積み重なってできている。また、ところどころ大きな空隙が接線方向に連なるが、これは傷害樹脂道である。放射組織は木部の放射組織と同様に単列である。放射断面（柾目）では篩細胞の側壁に円形～ゆがんだ楕円形の篩域が、あたかも仮道管の有縁壁孔のように縦に配列しているのがわかる。以上の形質から本出土品をヒノキ科の樹皮であると同定した。

ヒノキ科にはヒノキ、スギを始め多数の樹種があるが、いずれの樹皮構造も基本的には同形態で、樹皮での樹種の識別はできない。本遺跡では木材としてスギとヒノキが多く出土していることからこのいずれかである可能性が高い。ヒノキの樹皮はいわゆる「檜皮」で、屋根葺き材、縄材、船舶の水漏れを防ぐ詰め物などの用途があり、本遺跡が寺院であることを考えると屋根葺き材などの廃棄されたものなどである可能性も考えられる。

（４’）ヒノキ科樹

年輪の明瞭な針葉樹材で垂直・水平の両樹脂道を欠き、黒褐色物質を含む樹脂相棒があることからヒノキ科の木材であることが分かるが分野壁孔が観察できないため、ヒノキ、スギあるいはその他のヒノキ科の樹種であるかどうかの判定が出来なかったものである。出土材は加工木片１点である。

（５）カヤ　*Torreya nucifera*（L.）Siebold et Zucc.　イチイ科

写真２-5a-c（№17195）

保存性の良い針葉樹の出土材で、木材組織はしっかりしている。年輪は目立たず、樹脂細胞はなく、仮道管と放射組織の２種類の細胞からなる。早材部には断面が方形の仮道管が整然と並び、晩材部ではやや細く厚壁となる。晩材部の量はわずかである。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、２～３本ずつまとまって走る。放射組織は柔細胞のみからなり、背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは東北地方南部以南の暖帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径１ｍを超え、樹高は25m以上の大木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弾性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。神社、仏閣などの特別な建物の建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、特に彫刻材として優れ、仏像や神像、木魚などの木製仏具に、また碁盤、将棋盤などの特用がある。古代～近代にわたり、全国の寺院の木彫仏などに重用されている。本遺跡出土材は礎板６点、柱材１点の他、「加工木片」とされるものなど合計33点あり、スギに次いで多い出土数となっている。これは他の遺跡に類を見ない大きな比率で、本遺跡が寺院跡であることと強く関係していると思われる。

（６）ケヤキ　*Zelkova serrata* Thunb.　ニレ科

写真２-6a-c（№17317）

年輪の始めに丸い大道管が間隔を空けて一層に配列する環孔材で、それ以外の部分では薄壁多角形の小道管が多数集まった部分と繊維細胞が集まった部分とがモザイク状に配置する。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に配列し、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は随伴状だが横断面では目立たない。放射組織は大型の多列で上下の縁の部分を除いてはほぼ平伏細胞からなる。上下縁の細胞は時に大きく膨らみ、中に大きな結晶を一つ持つ。これらの形質からニレ科のケヤキの材と同定した。

ケヤキは本州青森県から九州鹿児島県北部までの、平野部から山地帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、屋敷、社寺などによく植栽される。成長は早く、幹径1.5m、樹高30mを超える巨木となる。材はやや堅硬で強靭、光沢があり、時に美しい杢が出る優秀な広葉樹材である。大黒柱など家屋の主要部分、特に社寺等の大型建築物、木彫像、家具など幅広い用途に好んで用いられる。本遺跡出土材は漆椀１点で、漆器への利用も主な用途の一つである。

（７）クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　ブナ科

写真３-7a-c（№17906）

芯材が漆黒になる出土材で、年輪の始めに接線径が300μmをこえる楕円形の大道管が並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が道管状仮道管とともに集まって火炎状に配列する環孔材で、年輪は明瞭である。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、小道管の内壁にはらせん肥厚は無い。木部柔組織は１、２細胞厚の接線状である。放射組織は単列同性で背は高くない。これらの形質からブナ科のクリの材と同定した。

クリは北海道石狩低地から九州鹿児島県までの平野部から山地帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、農家廻りや社寺の境内にしばしば植栽される。陽光地で成長が早く、幹径１ｍ、樹高25m以上の巨木となる。材はやや堅硬で割裂容易、耐久力が強く，保存性に優れ、特に水湿に強いことから家屋の土台、橋梁や土木材、鉄道枕木などの特用があるが、それ以外にも実にさまざまな用途に利用される。本遺跡出土材は杭材２点である。

（８）ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky　ブナ科

写真３-8a-c（№17290）

年輪始めに中型で楕円形の単独道管が間隔を置いて配置し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が道管状仮道管とともに集まって放射状～火炎状に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔組織は１、２細胞厚の接線状で、晩材部でやや目立つ。放射組織は背が高くない単列同性のものと、集合状の大きい放射組織がある。これらの形質からブナ科シイ属のツブラジイ（コジイ）の材と同定した。

ツブラジイは関東地方南部以南西の本州、四国、九州の平野部から山地帯にかけて分布する常緑高木

で、幹径１m、樹高25mに達する。材はやや堅硬で緻密で割裂容易だが、肌は粗く、保存性は高くない。建築材、各種器具材、柄物などの用途がある。本遺跡出土材は柱の礎板１点である。

（9）スダジイ　*Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima　ブナ科

写真３-9a-c（№17262）

クリ、ツブラジイによく似た材で、年輪の始めに中型の円形～楕円形の単独道管が間隔を置いて配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管、道管状仮道管、木部柔組織が集まって火炎状となる放射孔材的環孔材で、年輪はやや明瞭である。幅広い年輪では年輪内側から外側に向かっての道管径の減少率は小さく、あたかもカシ類などの放射孔材に似てくることもある。木部柔組織は１、２細胞厚の接線状で晩材部で目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状である。放射組織は単列同性であり、集合放射組織を持たない。このように道管形態、配列はツブラジイとほとんど変わらない環孔材であるが、集合放射組織を持たないことから区別される。

スダジイは東北地方の南部以南、九州屋久島までの照葉樹林帯に広く分布し、特に海岸部に多い。樹高25m、幹径1m以上となる常緑広葉樹で、特に海岸部では幹は高くならず横枝が発達する独特の樹形となる。材はツブラジイ同様、やや堅硬で緻密であるが、肌目粗く、保存性が低い。用途等はツブラジイと区別されない。本遺跡出土材は礎板など４点である。

（10）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科

写真４-10a-c（№17240）

丸～楕円形の中型の単独道管がゆるく集まって放射方向に揺らぎながら年輪界を超えて長く続く放射孔材で、道管の穿孔は単一である。木部柔組織は２～３細胞厚の接線状でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織には繊維細胞が混入して部分的に集合状となることがよくある。これらの形質からコナラ属のアカガシ亜属の材と同定した。日本列島に分布するアカガシ亜属のなかではイチイガシ*Quercus gilva* Blumeは接線径が200μmを超える大型の道管を持つことから他のアカガシ亜属の樹種から区別され、除外される。

静岡県地方の照葉樹林にはアカガシ*Quercus acuta* Thunb.、シラカシ*Q. myrsinaefolia* Blume、アラカシ*Q. glauca* Thunb.など多数のアカガシ亜属の樹種がある。材構造は基本的に皆同じであり、上述のイチイガシを除いては道管径の変異の範囲が互いに重なることから個々の種を区別するのは困難である。アカガシは幹径１m、樹高25mになる常緑高木で、材は堅硬で弾性強く強靭で加工性は難である。各種器具材、特に柄物、棒類によく使われる。本遺跡出土材は板状と加工木片の２点である。

（11）コナラ属クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　ブナ科

写真４-11a-c（№17209）

年輪の始めに丸い単独の大道管が1～数層に配列する環孔材で、孔圏外では丸い小道管が複合せずに単独で緩く放射方向に散在して配列する。道管の穿孔は単一、らせん肥厚はない。木部柔組織は２～３細胞厚の接線状で孔圏外でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状で、複合放射組織内には大きな結晶細胞が混じる。これらの形質からコナラ亜属クヌギ節の材と同定した。

クヌギ節には東北中部以南から九州までの全国に広く分布するクヌギ*Quercus acutissima* Carr.と関東・北陸以西から九州北部まで分布するアベマキ*Q. variabilis* Blumeがあり、これら両者の材構造は互いによく似ていて識別は困難である。両者とも暖帯性の落葉高木で、幹径60cm、樹高20mになる。材はやや堅硬、木理は粗く、割裂自在で、ミカン割り材をつくりやすい。各種柄類、車軸、艪の柄などの用途があるが、近年は椎茸のほだ木としてよく使われる。本遺跡出土材は杭１点である。

（12）ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科

写真４-12a-c（№17311）

断面楕円形の単独あるいは２～数個が、主に放射方向に複合した道管が均一に散在する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に配列する。らせん肥厚は見られない。放射組織は単列異性で道管との壁孔は交互状に密にあり、いわゆる蜂の巣状になる。これらの形質からヤナギ科ヤナギ属の材と同定した。

ヤナギ属は低木～高木になる落葉樹で、我が国には非常に多くの樹種があり、材構造は互いに近似していて樹種の区別は出来ない。木材は一般に軽軟で、割裂自在、耐朽性に劣る。箱物などの利用がある。当遺跡出土材は礎板、薄板状、用途不明の木材など５点である。

（13）トチノキ *Aesculus trubinata* Blume　ムクロジ科

写真５-13a-c（№17226）

薄壁楕円形の小道管が多くは放射方向に２～数個複合して密度高く均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状である。木部柔組織は散在状で量少なく、目立たない。放射組織は単列同性で背は低く、層階状に配列する。以上の形質からトチノキの材と同定した。

トチノキは幹径２ｍ以上、樹高30ｍの巨木になる落葉大高木で、北海道石狩低地付近から九州北部の温帯域に広く分布する。材は柔らかく肌目が緻密で加工が容易で，保存性、耐朽性は劣るが、木理美しく、層階状の放射組織により美しい杢が出る。建築材の装飾的部分、こね鉢、飼いば桶など大型の刳物，漆器木地、各種器具材など広い用途がある。本遺跡出土材は漆器椀、刳物、挽物など５点である。

（14）タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev.　ヤブコウジ科

写真５-14a-c（№17219）

薄壁でやや丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合したものが、まばらに均一に散在する散孔材で、道管径は年輪内でほとんど変わらず、年輪は全く目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は微少孔紋で、交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、繊維細胞は薄い隔壁を持つ。放射組織は単列と多列があり、前者は極めて背の高い直立細胞のみからなる。多列放射組織は３～８細胞幅程度で極めて背が高い。構成細胞は大振りで不整形、時に結晶を持つ。以上の形質からヤブコウジ科のタイミンタチバナの材と同定した。

タイミンタチバナは千葉県南部以南西の温暖地、特に海岸近くに生える常緑小高木で、幹径15cm、樹高６ｍくらいになる。材はやや重く堅硬緻密で、保存性も良いが狂いやすく、小細工ものなどに使われるにすぎない。本遺跡出土材は杭１点で、遺跡付近に生えていたものを伐って利用したと考えられる。

静岡県内では岳美遺跡、寺家前遺跡、中山遺跡・高橋遺跡、角江遺跡、赤土政所・一反田遺跡など、弥生時代～中世の遺跡から１～数点と、数は少ないながらも、比較的多くの遺跡から出土している。これは静岡県の遺跡群が他の都府県に比べれば「沿岸」に近い位置にあること、そして県全体が照葉樹林帯にあることから、この樹木が遺跡周辺に比較的普通に生えていたことによるものと考えられる。

（15）トネリコ属 *Fraxinus*　モクセイ科

写真５-15a-c（№17208）

年輪のはじめに単独あるいは２個放射方向に複合した楕円形の大道管が１～数層に並び、順次径を減じて晩材部では厚壁で外形多角形、内腔円形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材だが、本試料では年輪幅が狭く、晩材部の小道管は少ない。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微細孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状で、放射組織は１～２細胞幅の同性で、背は低く、サイズがほとんど揃う。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には多数の種があるが、材構造は互いに似ていて種の識別は困難である。静岡県地方にはトネリコ*Fraxinus japonica* Blume、アオダモF. *lanuginose* Koidz. f. *serrate* (Nak.) Mura.、ヤマトアオダモF. *longicuspis* Siebold et Zucc.、マルバアオダモF. *sieboldiana* Blume、シオジ

F. platypoda Oliv.などがある。落葉の小高木～大高木で、大きなものは幹径60cm、樹高20m以上となる。材はやや柔らかく弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易な優秀な広葉樹材で、建築材、各種器具材、特に家具、運動具の用途がある。当遺跡出土材は杭１点である。

（16）広葉樹環孔材　*Ring-porous wood*

写真６-16a-c（No17228）

年輪はじめに大きく円形（～楕円形）の単独道管が１～数層に並び、そこから年輪外側に向かってやや径を減じた単独道管がある環孔材である。組織が激しく潰れているため道管の配列パターンの詳細は観察できない。また、ところどころに繊維細胞塊が崩れたものと思われる褐色の濃い部分があることから、木材組織中に柔組織と繊維組織塊が分かれてある木材であると思われる。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状と推察できる。放射組織は横断面（木口）で見る限りは２～４細胞幅程度で、異性と推察されるが、観察できない。以上、材構造の保存が極めて悪いことから、観察できた形質は限られており、樹種を特定するには至らなかった。出土材は用途不明の材１点である。

出土材の用材

令和元年度と３年度の２度にわたって樹種同定された試料138点の結果を表１に、それらを木製品の種類ごとに集計したものを表２に示した。同定された樹種は上に記載した16樹種・タイプである。もっとも同定数が多かったのはスギで50点、ついでカヤ（33点）、ヒノキ（25点）で、この３樹種で全体のほぼ８割を占める。スギ材の土木、建築材を始め各種生活具、器具材への多用は静岡県を始め東海地方の弥生時代～中世の遺跡では広く認められることで本遺跡も例外で無いことが確認されたと言える。しかし、当遺跡に特徴的なのは次いで多いカヤ材である。樹種記載の項でも触れているがこのカヤ材の多用が本遺跡の最大特徴であると言える。カヤ材は均質性、強靭性、弾性、切削加工性、美しさのどれも優れた優秀な針葉樹材であるが、スギのようにまとまって資源量があるわけではないことから、何にでも使えると言うことではない。本遺跡での出土材の大きな部分は「加工材片」であり、これはある目的にカヤ材を用いたその「端材」とも考えられ、その目的とした木製品は遺物としての出土に至らなかったということで、カヤ材が当遺跡においては重要な素材であったことを示している。このカヤ材は廃寺の建築材および木彫仏など仏教器具類に用いられたものと推測できる。また、カヤに次いで出土数の多いヒノキ材も似たようなことが起きていたことを窺わせる。ヒノキ材は古代の畿内で建築材を始め、実に多様な用途、言ってみればありとあらゆる用途に用いられて大量に消費された。ある意味では日本の古代社会・文明を支えた木材とも言える。この木材の利用は畿内を離れるに従い順次減衰して行き、地方ではスギ、あるいはモミなど他の樹種に入れ代わって行くが、東海地方は中部山岳地域の豊富なヒノキ資源に支えられてヒノキ材が比較的多く広範囲に利用されてきたと言え、当遺跡でもその傾向の中にあると言える。

上記３樹種以外の利用樹種は種類数、出土数とも少ない。トチノキ、ケヤキは漆器木地としての利用であるほかは、他の樹種は特段の利用傾向というものは出土数が少ないこともあり、うかがい知れない。

表１　尾羽廃寺跡出土木材樹種同定結果一覧

プレパラート番号	樹　　種	加工材の種類	遺物整理番号	調査年次	地区名	出土遺構名
17195	カヤ	加工木片	46	H30	15 区	SD1505
17196	ヒノキ	杭	81	H30	6 区	大溝
17197	カヤ	加工木片	36	H30	15 区	SD1505
17198	カヤ	加工木片	39	H30	15 区	SD1505
17199	スギ	用途不明品	2	H28	2 区	－
17200	カヤ	加工木片	44	H30	15 区	SD1505
17201	スギ	杭	9	H28	3 区	大溝
17202	カヤ	加工木片	50	H30	15 区	SD1505
17203	スギ	杭	5	H28	2 区	SD0201
17204	スギ	杭	76	H30	4 区	大溝
17205	カヤ	加工木片	40	H30	15 区	SD1505
17206	スギ	薄板状	94	H30	6 区	大溝
17207	スギ	杭	12	H28	8 区	－
17208	トネリコ属	杭	15	H28	10 区	大溝
17209	コナラ属クヌギ節	杭	1	H28	2 区	－
17210	カヤ	用途不明	58	H30	15 区	SD1505
17211	イヌマキ属	薄板状	104	H30	6 区	大溝
17212	ヒノキ	加工木片	102	H30	6 区	大溝
17213	カヤ	礫板	22	H29	16 区	SP1612
17214	カヤ	加工木片	37	H30	15 区	SD1505
17215	スギ	用途不明	83	H30	6 区	大溝
17216	スギ	薄板状	118	H30	6 区	大溝
17217	スギ	杭	19	H28	10 区	大溝
17218	スギ	杭	3	H28	2 区	SD0201
17219	タイミンタチバナ	杭	101	H30	6 区	大溝
17220	スギ	枝状	21	H28	10 区	－
17221	スギ	用途不明品	20	H28	10 区	大溝
17222	イヌマキ属	礫板	17	H28	10 区	SP1004
17223	ヒノキ	杭	73	H30	4 区	大溝
17224	カヤ	加工木片	41	H30	15 区	SD1505
17225	スギ	薄板状	120	H30	6 区	大溝
17226	トチノキ	板状	123	H30	6 区	大溝
17227	カヤ	加工木片	53	H30	15 区	SD1505
17228	広葉樹環孔材	用途不明	28	H30	4 区	SP0406
17229	ヤナギ属	用途不明	77	H30	4 区	SP0407
17230	カヤ	薄板状	109	H30	6 区	大溝
17231	スギ	薄板状	110	H30	6 区	大溝
17232	スギ	薄板状	116	H30	6 区	大溝
17233	スギ	棒状	91	H30	6 区	大溝
17234	スギ	薄板状	115	H30	6 区	大溝
17235	ヒノキ	棒状	92	H30	6 区	大溝
17236	ヒノキ	杭	84	H30	6 区	大溝
17237	カヤ	加工木片	56	H30	15 区	SD1505
17238	カヤ	加工木片	55	H30	15 区	SD1505
17239	スギ	薄板状	96	H30	6 区	大溝
17240	コナラ属アカガシ亜属	板状	124	H30	6 区	大溝
17241	カヤ	加工木片	35	H30	15 区	SD1505
17242	カヤ	用途不明	57	H30	15 区	SD1505
17243	ヒノキ	棒状	108	H30	6 区	大溝
17244	スギ	薄板状	114	H30	6 区	大溝
17245	スギ	用途不明	27	H30	4 区	SP0406
17246	ヒノキ	薄板状	111	H30	6 区	大溝
17247	スギ	薄板状	106	H30	6 区	大溝
17248	スギ	薄板状	105	H30	6 区	大溝
17249	カヤ	加工木片	49	H30	15 区	SD1505
17250	スギ	薄板状	119	H30	6 区	大溝
17251	カヤ	加工木片	38	H30	15 区	SD1505
17252	スギ	薄板状	97	H30	6 区	大溝
17253	ヒノキ	杭	4	H28	2 区	－

表1　尾羽廃寺跡出土木材樹種同定結果一覧

プレパラート番号	樹　種	加工材の種類	遺物整理番号	調査年次	地区名	出土遺構名
17254	スギ	棒状	107	H30	6区	大溝
17255	ヒノキ	薄板状	99	H30	6区	大溝
17256	スギ	薄板状	100	H30	6区	大溝
17257	コナラ属アカガシ亜属	加工木片	125	H30	6区	大溝
17258	ヒノキ	薄板状	98	H30	6区	大溝
17259	ヒノキ	棒状	112	H30	6区	大溝
17260	カヤ	礫板	23	H29	16区	SP1613
17261	ヤナギ属	用途不明	78	H30	4区	SP0407
17262	スダジイ	用途不明	25	H30	4区	SP0406
17263	スギ	薄板状	122	H30	6区	大溝
17264	スギ	用途不明	26	H30	4区	SP0406
17265	トチノキ	板状	121	H30	6区	大溝
17266	スギ	礫板	67	H30	13区	NR1301
17267	カヤ	礫板	63	H30	15区	SP1548
17268	カヤ	礫板	24	H29	16区	SP1615
17269	ヒノキ	礫板	64	H30	15区	SP1548
17270	スギ	礫板	65	H30	15区	SP1549
17271	カヤ	柱根	66	H30	13区	NR1301
17272	スダジイ	礫板	29	H30	4区	SP0406
17273	カヤ	礫板	60	H30	15区	SP1546
17274	ヤナギ属	礫板	33	H30	4区	SP0407
17275	ヤナギ属	礫板	34	H30	4区	SP0407
17276	スギ	礫板	72	H30	13区	NR1301
17277	スギ	礫板	69	H30	13区	NR1301
17278	スギ	礫板	68	H30	13区	NR1301
17279	スギ	加工木片	74	H30	4区	大溝
17280	カヤ	加工木片	54	H30	15区	SD1505
17281	スギ	礫板	70	H30	13区	NR1301
17282	スギ	用途不明品	14	H28	10区	SD06西
17283	カヤ	加工木片	47	H30	15区	SD1505
17284	カヤ	加工木片	51	H30	15区	SD1505
17285	カヤ	礫板	61	H30	15区	SP1547
17286	スギ	礫板	11	H28	3区	SP0309
17287	カヤ	加工木片	42	H30	15区	SD1505
17288	スギ	礫板	59	H30	15区	SP1546
17289	スダジイ	礫板	30	H30	4区	SP0406
17290	ツブラジイ	礫板	32	H30	4区	SP0406
17291	カヤ	加工木片	52	H30	15区	SD1505
17292	ヒノキ	燃え差し	86	H30	6区	大溝
17293	スギ	用途不明	82	H30	4区	大溝
17294	スギ	用途不明品	18	H28	10区	大溝
17295	ヒノキ	用途不明	79	H30	6区	大溝
17296	ヒノキ	用途不明	75	H30	4区	大溝
17297	カヤ	加工木片	45	H30	15区	SD1505
17298	スダジイ	礫板	31	H30	4区	SP6
17299	ヒノキ	燃え差し	87	H30	6区	大溝
17300	ヒノキ科	加工木片	126	H30	6区	大溝
17301	カヤ	用途不明	80	H30	6区	大溝
17302	スギ	礫板	16	H28	10区	SP1003
17303	スギ	薄板状	89	H30	6区	大溝
17304	カヤ	加工木片	48	H30	15区	SD1505
17305	スギ	薄板状	90	H30	6区	大溝
17306	スギ	礫板	71	H30	13区	NR1301
17307	スギ	薄板状	113	H30	6区	大溝
17308	トチノキ	刳物	117	H30	6区	大溝
17309	ヒノキ科樹皮	杭	7	H28	3区	－
17310	ヒノキ	礫板	62	H30	15区	SP1548
17311	ヤナギ属	薄板状	95	H30	6区	大溝
17312	カヤ	加工木片	43	H30	15区	SD1505

表１　尾羽廃寺跡出土木材樹種同定結果一覧

プレパラート番号	樹　種	加工材の種類	遺物整理番号	調査年次	地区名	出土遺構名
17313	トチノキ	挽物	93	H30	6区	大溝
17314	スギ	礎板	10	H28	3区	SP0308
17315	ヒノキ科樹皮	用途不明品	8	H28	3区	大溝
17316	ヒノキ科樹皮	薄板状	103	H30	6区	大溝
17317	ケヤキ	漆椀	6	H28	2区	SE0201
17318	ヒノキ	木簡	13	H28	10区	大溝
17319	ヒノキ	斎串状	85	H30	6区	大溝
17320	ヒノキ	木簡	88	H30	6区	大溝
17321	スギ	木簡	127	H30	6区	大溝
17322	スギ	木簡	128	H30	6区	大溝
17323	ヒノキ	木簡（木札）	129	H30	13区	NR1301
17324	トチノキ	漆椀	130	H30	13区	NR1301
17903	スギ	板	130	R2	19区	基壇掘
17904	スギ	有孔板片	130	R2	19区	
17905	クリ	杭	130	R2	19区	基壇掘
17906	クリ	杭	130	R2	19区	基壇掘
17907	ヒノキ	つけ木	130	R2	19区	SD1409
17908	ヒノキ	つけ木	130	R2	19区	SD1409
17909	ヒノキ	つけ木	130	R2	19区	SD1409
17910	ヒノキ					

表２　尾羽廃寺跡出土木材の樹種組成

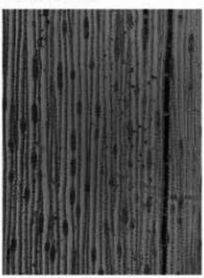
樹　種	木簡	容器	つけ木・燃えさし	礎板	杭	板・薄板状	棒状	加工木片	用途不明・その他	総計
スギ	2			11	6	18	2	1	10	50
カヤ			1	6		1		22	3	33
ヒノキ	3		5	2	4	4	3	1	3	25
トチノキ		3				2				5
ヤナギ属				2		1			2	5
スダジイ				3					1	4
ヒノキ科樹皮					1	1			1	3
イヌマキ属				1		1				2
クリ					2					2
コナラ属アカガシ亜属						1		1		2
ケヤキ		1								1
コナラ属クヌギ節					1					1
タイミンタチバナ					1					1
ツブラジイ				1						1
トネリコ属					1					1
ヒノキ科								1		1
広葉樹環孔材									1	1
総計	**5**	**4**	**6**	**26**	**16**	**29**	**5**	**26**	**21**	**138**

1a. イヌマキ属　№17211　木口 ×30

1b. 同　板目 ×60

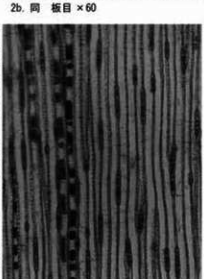
1c. 同　柾目×240

2a. ヒノキ　№17235　木口 ×30


2b. 同　板目 ×60

2c. 同　柾目×240

3a. スギ　№17201　木口 ×30


3b. 同　板目 ×60

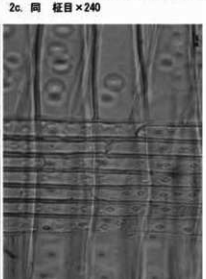
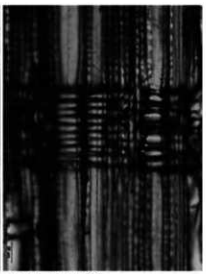

3c. 同　柾目×240

写真１　顕微鏡写真１

4a. ヒノキ科樹皮　№17316　木口 ×30

4b. 同　板目 ×60

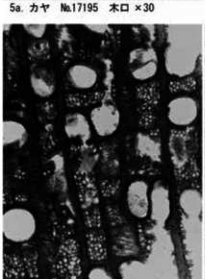


4c. 同　柾目×120

5a. カヤ　№17195　木口 ×30

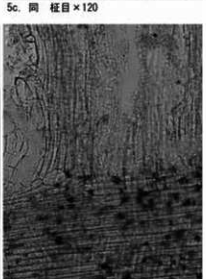
5b. 同　板目 ×60

5c. 同　柾目×120



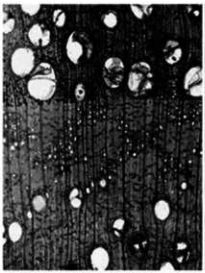
6a. ケヤキ　№17317　木口 ×30

6b. 同　板目 ×60



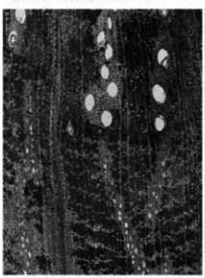
6c. 同　柾目×120

写真２　顕微鏡写真２


7a. クリ　№17906　木口 ×30

7b. 同　板目 ×60

7c. 同　柾目×120


8a. ツブラジイ　№17290　木口 ×30

8b. 同　板目 ×60

8c. 同　柾目×120

9a. スダジイ　№17262　木口 ×30

9b. 同　板目 ×60

9c. 同　柾目×120

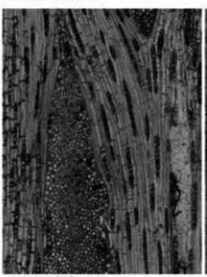
写真３　顕微鏡写真３

10a. アカガシ亜属　№17240　木口 ×30

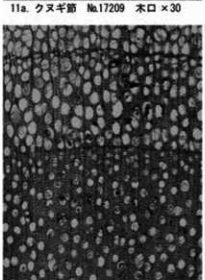
10b. 同　板目 ×60

10c. 同　柾目×120

11a. クヌギ節　№17209　木口 ×30


11b. 同　板目 ×60

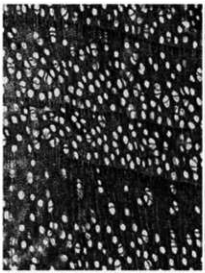
11c. 同　柾目×120


12a. ヤナギ属　№17311　木口 ×30

12b. 同　板目 ×60

12c. 同　柾目×120

写真４　顕微鏡写真４

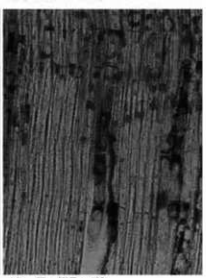

13a. トチノキ　№17226　木口 ×30

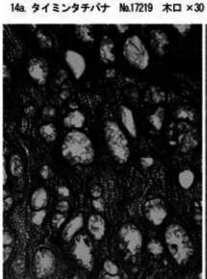
13b. 同　板目 ×60

13c. 同　柾目×120

14a. タイミンタチバナ　№17219　木口 ×30

14b. 同　板目 ×60

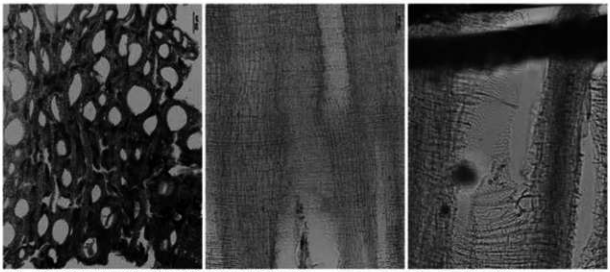

14c. 同　柾目×120


15a. トネリコ属　№17208　木口 ×30

15b. 同　板目 ×60

15c. 同　柾目×120

写真５　顕微鏡写真５



16a. 広葉樹環孔材　№17228　木口 ×30　16b. 同　板目 ×60　16c. 同　柾目 ×120

写真６　顕微鏡写真６

第４節　尾羽廃寺跡出土米の粒形質分析

上條信彦（弘前大学人文社会科学部）

１　粒形質分析試料と分析方法

静岡県埋蔵文化財センターより送付された尾羽廃寺跡出土米200粒が対象である。出土遺構の内訳は基壇を有する礎石建物跡（正倉）の基壇裾部と、基壇より少し離れた箇所で確認した炭化物集中（SX1507）の２遺構である。時期は年代測定の結果から、おおむね10世紀代である。

種子の入った土壌のフルイによる水洗選別試料である。方法は種子1粒ごと番号を付し、200mmのマクロレンズ（Ai AF Micro-Nikkor 200mm f/4D IF-ED,（株)ニコン）を装着したカメラ（ニコンD800）で撮影する。種子の長さと幅をImage J 1.47（National Institute of Mental Health, USA）を用いて計測する。粒大と粒型を、それぞれ粒型（長幅比）と粒大（長幅積）として算出した後、松本（1994）に従って種子を分類する（表１）。なお、粒大と粒型、集団内の平均、標準偏差や変動係数および集団間の有意差検定はEXCEL 統計ver. 7.0（(株)エスミ）により実施する。なお、各遺構の完全粒100粒を計測し、焼け膨れが著しいもの、籾は形状分析から除外する。

表１　出土米の粒型と粒大の分類基準

粒型		長幅比
長粒	長	2.6-3.6
	中	2.3-2.6
	短	2.0-2.3
短粒	長	1.8-2.0
	中	1.6-1.8
	短	1.4-1.6
円粒	長	1.2-1.4
	中	1.0-1.2
	短	1.0以下

粒大タイプ	長幅積
極大	20以上
大	16-20
中	12-16
小	8-12
極小	8以下

松本（1994）の一部を改変

２　粒形質分析の結果（表２～４・写真１・２）

種皮片が付いたものがSX1507で６粒、基壇裾部９粒で、ほぼ同じ割合でみられる。そのほかは胚乳（玄米）の状態である。分析対象外を含め籾付きや焼膨れはない。よって、SX1507と基壇裾部はほぼ同じ状態であり、脱穀後の調整前後段階の状態であったとみられる。かつ同じ熱条件下で炭化したものと判断される。

遺構ごとにみる。SX1507の種子長は平均4.91±0.30mm、種子幅は平均2.62±0.26mmである。種子長5.0mm、種子幅2.5mmに1つのピークがある。粒型は平均1.9、粒大は平均12.8である。粒型と粒大を組み合わせると、中型の長短粒が23粒と最も多い（表２上段）。

基壇裾部の種子長は平均5.03±0.31mm、種子幅は平均2.63±0.26mmである。S17内SK11には種子長5.0mm、種子幅2.75mmに１つのピークがある。粒型は平均1.9、粒大は平均13.2である。粒型と粒大を組み合わせると、中型の短長粒が28粒と最も多く、中型の長短粒24粒が続く（表２下段）。

表２　尾羽廃寺跡出土米の粒形質分布

1　15区 SX1507

粒型		粒大 極小	小	中	大	極大	計
長粒	長	－	－	－	－	－	0
	中	－	4	3	－	－	7
	短	－	12	15	－	－	27
短粒	長	－	9	23	－	－	32
	中	－	7	16	1	－	24
	短	－	1	7	1	－	9
円粒	長	－	－	1	－	－	1
	中	－	－	－	－	－	0
	短	－	－	－	－	－	0
計		0	33	65	2	0	100

2　14区 基壇裾部

粒型		粒大 極小	小	中	大	極大	計
長粒	長	－	－	－	－	－	0
	中	－	3	4	－	－	7
	短	－	7	28	－	－	35
短粒	長	－	6	24	1	－	31
	中	－	1	16	1	－	18
	短	－	1	7	1	－	9
円粒	長	－	－	－	－	－	0
	中	－	－	－	－	－	0
	短	－	－	－	－	－	0
計		0	18	79	3	0	100

3　粒形質分析のまとめ

２例を比べると、双方とも中型で、基壇掘部のほうがやや長粒であるが、有意な差は認められない。またピークは1つで、ばらつきが狭いことから、２例ともほぼ同じ一定形質のイネだったとみられる。もともとは他の形質が混ざらないまとまった状態で保管されていたとみられる。さらに２例とも被熱状態や外観も同じであることから、ほぼ同じ条件下における火災後に埋没したとみられる。

4　周辺遺跡と比較からみた粒形質の特徴

本分析の結果と田中・上條ほか（2015）および小泉・上條ほか（2019）など静岡県内の出土米との比較を行い、本例の形質的特徴を述べたい（図１）。図１に、本例を除く静岡県内で粒計測値が公開されている5例について、粒型･粒大の平均値（図中菱印）、および標準偏差を示した。バーは標準偏差を示し粒形質のばらつき程度を表す。５例は伊場（古墳時代／浜松市）、上ノ平（弥生時代後期／掛川市）、将監名（弥生時代後期主体／浜松市）、菖蒲ヶ谷（弥生時代後期／掛川市）、登呂（弥生時代後期／静岡市）である。

粒型（図１上段）をみると、尾羽廃寺跡の２例は、古墳時代以前よりも長粒の傾向を示す。また、尾羽廃寺跡のばらつきは、弥生時代後期以降の伊場・上ノ平・将監名に比べて大きい。これは、長粒が多いことに起因する。粒大（図１下段）をみると、伊場・上ノ平・将監名に比べ中型が多く、粒が大きい。粒大のばらつきは上記3例とほぼ同じである。なお、登呂や菖蒲ヶ谷は同じ弥生時代後期の上ノ平・将監名に比べてばらつきが大きい。このように、尾羽廃寺跡２例は、古墳時代以前に比べ粒が長細く大きい傾向にある。

以上のように現状では尾羽廃寺跡２例は、県内の古墳時代以前とは異なる粒形質が多いといえる。そこで範囲を広げて、次に尾羽廃寺跡２例の平均（粒型1.9、粒型偏差0.24、粒大13.0、粒大偏差1.4）の粒型、粒大に近い事例を『日本の出土米Ⅰ～Ⅴ』561例の中から検索した。

その結果、粒型1.7 ～ 1.9、粒型偏差0.18 ～ 0.3、粒大12.3 ～ 13.4、粒大偏差1.0 ～ 1.8の範囲で該当するのは15例あった。都道府県別では、宮城県１、山形県２、福島県２、栃木県１、群馬県１、東京都１、新潟県１、富山県２、石川県１、大阪府１、

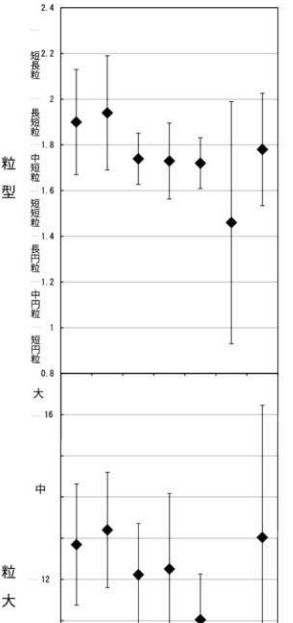


図１　尾羽廃寺跡と静岡県内遺跡との比較

佐賀県１、大分県１で、北陸以東に偏る。特に分析例中に占める割合からみると、関東や北陸が高い。時期別では弥生５、古代５、中世５である。弥生５例のうち２例は西日本である。また古代の年代には、10世紀以降２例がある。以上をふまえると、尾羽廃寺跡２例は東日本の古代～中世の例に類似し、とりわけ10世紀以降の北陸・関東の状況を反映していたといえる。

文献

田中克典・上條信彦2014『日本の出土米Ⅰ』弘前大学人文学部北日本考古学研究センター

田中克典・上條信彦・佐藤洋一郎2015『日本の出土米Ⅱ　佐藤敏也コレクションの研究』六一書房

小泉翔太・上條信彦・田中克典2018『日本の出土米Ⅲ』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター

小泉翔太・上條信彦・田中克典2019『日本の出土米 Ⅳ』弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター

小泉翔太・田中克典・上條信彦2020『日本の出土米Ⅴ』弘前大学人文学部北日本考古学研究センター

松本豪1994「日本の稲作遺跡と古代米に関する研究」『大阪府立大学紀要』第46号，135-194頁

古環境研究所2012「炭化種実同定」『将監名遺跡』325-328頁

佐藤洋一郎・㈱ジェネテック2001「菖蒲ヶ谷遺跡出土遺物の自然科学分析」『菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群』123-136頁

佐藤洋一郎・花森功仁子2006『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書』静岡市教育委員会90-97頁

表3　尾羽廃寺跡出土米の観察表１（15区 SX1507）

番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型		粒大		備考
			長幅比	型	長幅積	型	
1	5.02	2.59	1.94	長短粒	13.00	中	
2	5.27	2.26	2.33	中長粒	11.91	小	
3	5.35	2.80	1.91	長短粒	14.98	中	種皮付
4	4.65	2.64	1.76	中短粒	12.28	中	
5	5.14	2.72	1.89	長短粒	13.98	中	
6	4.94	2.02	2.45	中長粒	9.98	小	
7	4.61	2.96	1.56	短短粒	13.65	中	種皮付
8	5.27	2.59	2.03	短長粒	13.65	中	
9	5.27	2.18	2.42	中長粒	11.49	小	
10	4.98	2.51	1.98	長短粒	12.50	中	
11	4.41	2.43	1.81	長短粒	10.72	小	
12	4.69	2.64	1.78	中短粒	12.38	中	
13	4.69	2.63	1.78	中短粒	12.33	中	
14	5.06	2.63	1.92	長短粒	13.31	中	
15	4.98	2.39	2.08	短長粒	11.90	小	
16	5.19	2.43	2.14	短長粒	12.61	中	
17	4.98	2.47	2.02	短長粒	12.30	中	
18	4.44	2.18	2.04	短長粒	9.68	小	
19	5.64	2.43	2.32	中長粒	13.71	中	
20	4.57	2.55	1.79	中短粒	11.65	小	種皮付
21	4.73	2.47	1.91	長短粒	11.68	小	
22	5.31	2.22	2.39	中長粒	11.79	小	
23	5.02	2.88	1.74	中短粒	14.46	中	
24	4.86	2.59	1.88	長短粒	12.59	中	
25	5.10	2.55	2.00	短長粒	13.01	中	
26	4.32	2.51	1.72	中短粒	10.84	小	
27	4.57	2.55	1.79	中短粒	11.65	小	
28	4.86	2.84	1.71	中短粒	13.80	中	
29	4.25	2.67	1.59	短短粒	11.35	小	
30	4.86	2.92	1.66	中短粒	14.19	中	
31	5.19	2.47	2.10	短長粒	12.82	中	土付
32	5.02	2.76	1.82	長短粒	13.86	中	土付
33	5.06	2.76	1.83	長短粒	13.97	中	土付
34	5.02	2.35	2.14	短長粒	11.80	小	
35	5.06	2.55	1.98	長短粒	12.90	中	
36	5.02	2.51	2.00	短長粒	12.60	中	種皮付
37	5.02	2.92	1.72	中短粒	14.66	中	
38	5.44	2.64	2.06	短長粒	14.36	中	
39	5.35	3.54	1.51	短短粒	18.94	大	
40	4.77	2.84	1.68	中短粒	13.55	中	
41	5.10	2.59	1.97	長短粒	13.21	中	
42	5.52	2.47	2.23	短長粒	13.63	中	
43	5.19	3.17	1.64	中短粒	16.45	大	土付
44	4.81	2.51	1.92	長短粒	12.07	中	
45	4.82	2.35	2.05	短長粒	11.33	小	
46	4.73	2.51	1.88	長短粒	11.87	小	
47	5.14	2.55	2.02	短長粒	13.11	中	
48	5.02	2.68	1.87	長短粒	13.45	中	
49	5.43	2.30	2.36	中長粒	12.49	中	
50	4.54	2.23	2.04	短長粒	10.12	小	種皮付
51	5.14	2.55	2.02	短長粒	13.11	中	
52	4.96	2.31	2.15	短長粒	11.46	小	
53	5.06	2.35	2.15	短長粒	11.89	小	
54	4.81	2.72	1.77	中短粒	13.08	中	
55	5.23	2.59	2.02	短長粒	13.55	中	
56	5.19	2.59	2.00	短長粒	13.44	中	土付
57	5.10	3.09	1.65	中短粒	15.76	中	
58	5.19	2.88	1.80	長短粒	14.95	中	
59	5.10	2.78	1.83	長短粒	14.18	中	
60	4.81	2.55	1.89	長短粒	12.27	中	
61	5.02	2.51	2.00	短長粒	12.60	中	
62	4.99	2.72	1.83	長短粒	13.57	中	
63	4.82	2.92	1.65	中短粒	14.07	中	
64	4.74	2.59	1.83	長短粒	12.28	中	
65	4.53	2.59	1.75	中短粒	11.73	小	
66	4.61	2.43	1.90	長短粒	11.20	小	
67	4.36	2.47	1.77	中短粒	10.77	小	
68	4.73	2.43	1.95	長短粒	11.49	小	
69	4.86	2.51	1.94	長短粒	12.20	中	
70	4.70	3.17	1.48	短短粒	14.90	中	土付
71	4.90	2.59	1.89	長短粒	12.69	中	
72	4.28	3.21	1.33	長円粒	13.74	中	
73	4.94	2.18	2.27	短長粒	10.77	小	
74	4.69	2.47	1.90	長短粒	11.58	小	
75	4.73	2.76	1.71	中短粒	13.05	中	
76	4.90	2.26	2.17	短長粒	11.07	小	
77	4.98	2.63	1.89	長短粒	13.10	中	
78	4.69	3.25	1.44	短短粒	15.24	中	
79	5.07	2.68	1.89	長短粒	13.59	中	一部破損
80	5.02	2.35	2.14	短長粒	11.80	小	
81	4.94	2.22	2.23	短長粒	10.97	小	
82	4.77	2.96	1.61	中短粒	14.12	中	
83	4.73	3.17	1.49	短短粒	14.99	中	
84	4.65	2.30	2.02	短長粒	10.70	小	
85	4.57	2.59	1.76	中短粒	11.84	小	
86	4.45	2.88	1.55	短短粒	12.82	中	
87	4.57	2.96	1.54	短短粒	13.53	中	
88	4.69	2.76	1.70	中短粒	12.94	中	
89	5.43	2.64	2.06	短長粒	14.34	中	
90	4.62	2.39	1.93	長短粒	11.04	小	
91	4.82	2.47	1.95	長短粒	11.91	小	
92	5.23	2.51	2.08	短長粒	13.13	中	
93	4.83	2.72	1.78	中短粒	13.14	中	
94	4.53	3.00	1.51	短短粒	13.59	中	
95	4.57	2.47	1.85	長短粒	11.29	小	土付
96	5.60	2.43	2.30	中長粒	13.61	中	
97	5.19	2.88	1.80	長短粒	14.95	中	土付
98	4.41	2.63	1.68	中短粒	11.60	小	
99	5.35	2.72	1.97	長短粒	14.55	中	種皮付
100	4.86	2.84	1.71	中短粒	13.80	中	

表3　尾羽廃寺跡出土米の観察表２（14区基壇裾部）

番号	長さ (mm)	幅 (mm)	粒型 長幅比	粒型 型	粒大 長幅積	粒大 型	備考
1	5.06	2.63	1.92	長短粒	13.31	中	
2	5.19	2.35	2.21	短長粒	12.20	中	
3	4.96	2.59	1.88	長短粒	12.59	中	
4	4.69	2.51	1.87	長短粒	11.77	小	種皮付
5	4.40	2.39	1.84	長短粒	10.52	小	種皮付
6	4.28	2.55	1.68	中短粒	10.91	小	
7	5.31	2.92	1.82	長短粒	15.51	中	
8	4.73	2.43	1.95	長短粒	11.49	小	
9	4.57	2.96	1.54	短短粒	13.53	中	種皮付
10	4.78	2.26	2.12	短長粒	10.80	小	
11	4.82	2.47	1.95	長短粒	11.91	小	
12	5.02	2.72	1.85	長短粒	13.65	中	一部破損
13	5.36	2.51	2.14	短長粒	13.45	中	
14	5.03	2.72	1.85	長短粒	13.68	中	
15	5.19	2.64	1.97	長短粒	13.70	中	
16	5.10	2.43	2.10	短長粒	12.39	中	
17	4.90	2.49	1.97	長短粒	12.20	中	
18	4.53	2.68	1.69	中短粒	12.14	中	
19	5.06	2.76	1.83	長短粒	13.97	中	
20	5.15	3.21	1.60	中短粒	16.53	大	
21	5.02	2.47	2.03	短長粒	12.40	中	
22	5.23	2.59	2.02	短長粒	13.55	中	
23	5.44	2.22	2.45	中長粒	12.08	中	土付
24	5.23	2.47	2.12	短長粒	12.92	中	
25	4.78	2.47	1.94	長短粒	11.81	小	
26	4.44	2.18	2.04	短長粒	9.68	小	
27	4.65	3.09	1.50	短短粒	14.37	中	
28	5.52	2.39	2.31	中長粒	13.19	中	
29	5.10	2.92	1.75	中短粒	14.89	中	
30	5.44	2.51	2.17	短長粒	13.65	中	
31	4.71	3.21	1.47	短短粒	15.12	中	土付
32	5.23	2.51	2.08	短長粒	13.13	中	
33	4.69	2.59	1.81	長短粒	12.15	中	
34	4.98	2.43	2.05	短長粒	12.10	中	
35	5.27	2.43	2.17	短長粒	12.81	中	
36	5.23	3.05	1.71	中短粒	15.95	中	
37	5.52	2.67	2.07	短長粒	14.74	中	
38	4.90	2.59	1.89	長短粒	12.69	中	
39	4.82	2.39	2.02	短長粒	11.52	小	
40	5.52	2.14	2.58	中長粒	11.81	小	
41	5.31	2.30	2.31	中長粒	12.21	中	
42	5.15	2.64	1.95	長短粒	13.60	中	
43	4.98	2.43	2.05	短長粒	12.10	中	
44	4.74	2.88	1.65	中短粒	13.65	中	
45	5.40	2.51	2.15	短長粒	13.55	中	
46	4.90	3.09	1.59	短短粒	15.14	中	
47	4.96	2.59	1.88	長短粒	12.59	中	種皮付
48	5.10	2.55	2.00	短長粒	13.01	中	土付
49	5.27	2.10	2.51	中長粒	11.07	小	
50	5.54	2.51	2.21	短長粒	13.91	中	
51	5.11	2.72	1.88	長短粒	13.90	中	
52	4.70	3.01	1.56	短短粒	14.15	中	
53	4.65	3.13	1.49	短短粒	14.55	中	
54	4.69	2.88	1.63	中短粒	13.51	中	
55	5.68	2.63	2.16	短長粒	14.94	中	
56	5.72	2.92	1.96	長短粒	16.70	大	
57	4.86	2.31	2.10	短長粒	11.23	小	種皮付
58	5.23	2.39	2.19	短長粒	12.50	中	種皮付
59	5.47	2.84	1.93	長短粒	15.53	中	土付
60	5.27	2.43	2.17	短長粒	12.81	中	
61	4.82	2.92	1.65	中短粒	14.07	中	
62	4.73	2.51	1.88	長短粒	11.87	小	
63	5.23	2.23	2.35	中長粒	11.66	小	
64	4.98	2.55	1.95	長短粒	12.70	中	
65	4.99	2.68	1.86	長短粒	13.37	中	
66	5.39	2.47	2.18	短長粒	13.31	中	
67	4.86	2.22	2.19	短長粒	10.79	小	
68	5.02	2.84	1.77	中短粒	14.26	中	種皮付
69	5.20	2.92	1.78	中短粒	15.18	中	
70	5.35	2.35	2.28	短長粒	12.57	中	
71	5.10	3.13	1.63	中短粒	15.96	中	
72	4.94	2.55	1.94	長短粒	12.60	中	
73	4.73	2.55	1.85	長短粒	12.06	中	
74	4.65	2.80	1.66	中短粒	13.02	中	
75	5.06	2.35	2.15	短長粒	11.89	小	
76	5.60	2.63	2.13	短長粒	14.73	中	
77	4.73	2.55	1.85	長短粒	12.06	中	
78	4.32	2.76	1.57	短短粒	11.92	小	一部破損
79	4.57	2.84	1.61	中短粒	12.98	中	
80	4.81	3.00	1.60	中短粒	14.43	中	
81	5.48	2.55	2.15	短長粒	13.97	中	
82	5.43	2.39	2.27	短長粒	12.98	中	
83	5.19	2.59	2.00	短長粒	13.44	中	
84	4.61	3.21	1.44	短短粒	14.80	中	種皮付
85	5.14	2.67	1.93	長短粒	13.72	中	
86	4.98	2.80	1.78	中短粒	13.94	中	
87	4.90	3.00	1.63	中短粒	14.70	中	
88	4.94	2.55	1.94	長短粒	12.60	中	
89	5.02	2.92	1.72	中短粒	14.66	中	
90	5.39	2.39	2.26	短長粒	12.88	中	
91	5.39	2.51	2.15	短長粒	13.53	中	
92	5.06	2.55	1.98	長短粒	12.90	中	土付
93	5.19	3.30	1.57	短短粒	17.13	大	
94	4.81	2.63	1.83	長短粒	12.65	中	
95	4.69	2.92	1.61	中短粒	13.69	中	
96	5.51	2.35	2.34	中長粒	12.95	中	
97	4.77	2.30	2.07	短長粒	10.97	小	
98	5.11	2.76	1.85	長短粒	14.10	中	
99	5.06	2.43	2.08	短長粒	12.30	中	
100	5.19	2.59	2.00	短長粒	13.44	中	種皮付

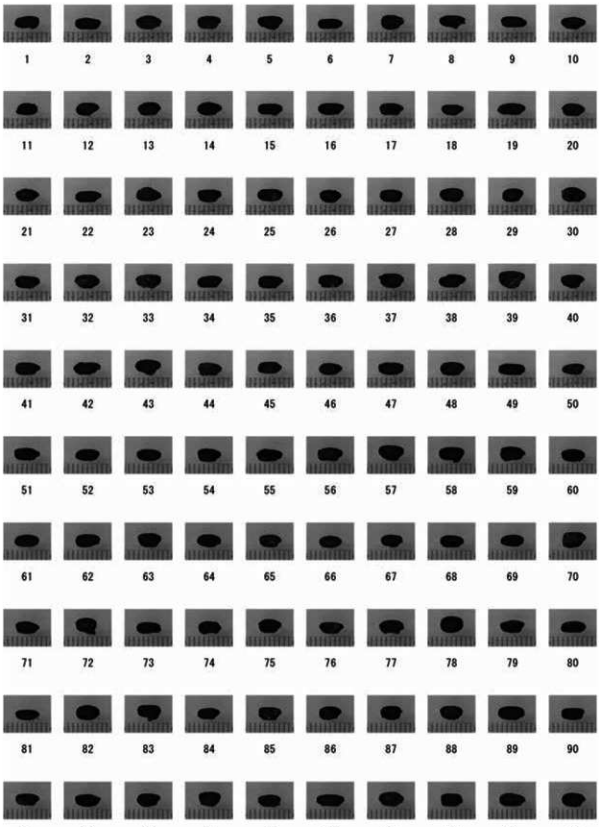


写真１　尾羽廃寺跡出土米１（15 区 SX1507）

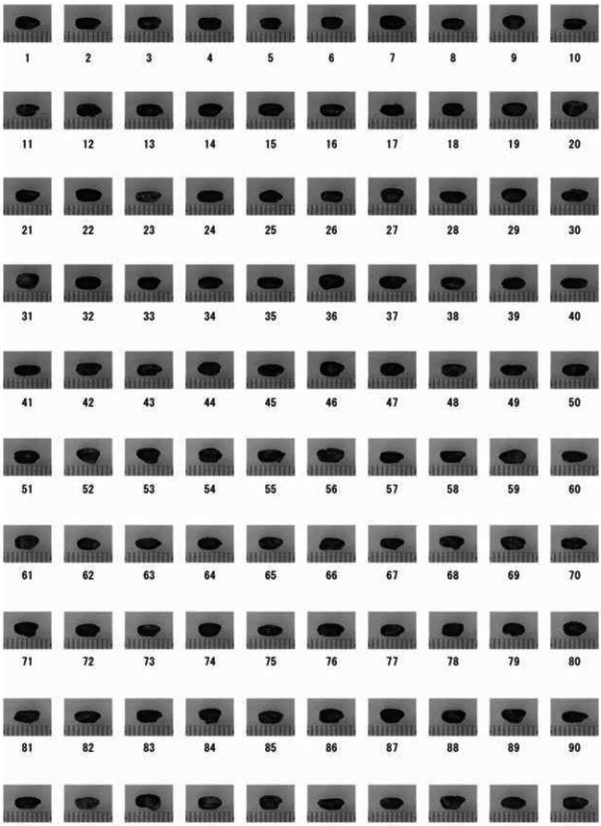


写真２　尾羽廃寺跡出土米２（14 区基壇裾部）

写真図版

図版1

1　１区全景（北から）

2　１区全景（東から）

3　１区 SD0101（南から）

1　2区 SE0201（南から）

2　2区 SE0201 内漆椀出土状況（西から）

3　2区 SE0202（南から）

2　2区 SE0202 内天目茶碗出土状況（南から）

図版3

1　2区 NR0202 礫等出土状況（南から）

2　2区 NR0202 北壁（南から）

3　2区 NR0202 南壁（北から）

1　2区天目茶碗出土状況（東から）

2　2区 NR0202 礎内擂鉢出土状況

3　2区 G11 土器出土状況

4　2区 G11 土器出土状況

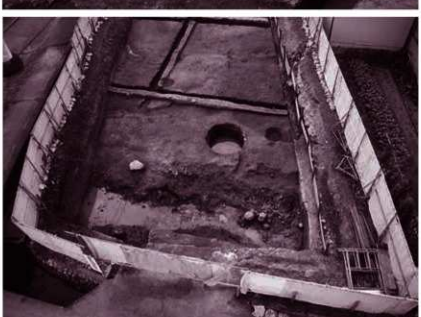
5　2区 G11 土器出土状況

6　2区 G11 土器出土状況

図版5

1　２区 SD0201（東から）

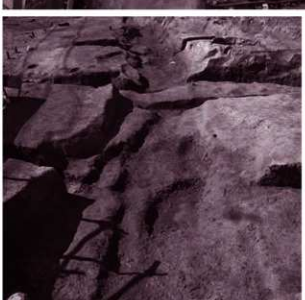
2　２区 NR0201（南から）



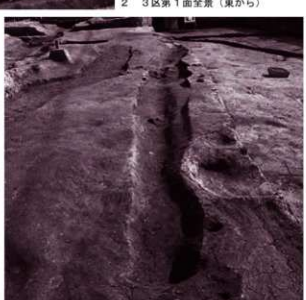
3　２区調査終了後（東から）

1　３区第１面全景（西から）

2　３区第１面全景（東から）



3　３区大溝（東から）



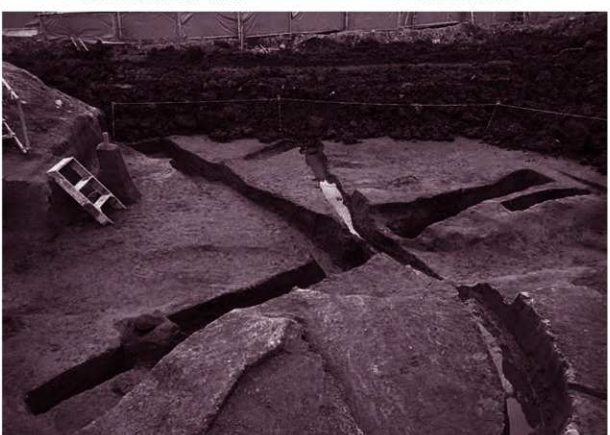
4　３区 SD0303・0304（西から）

図版7

1　3区 SP0308 礎板出土状況（南から）

2　3区 SP0309 礎板出土状況（南から）

3　3区 SD0305 内出土土器



4　3区 SD0305 他（北から）

1　４区第１面全景（南から）

2　４区第２面全景（南から）

3　４区大溝（西から）

4　４区 SP0406・0407（南から）

図版9

1　5区第1面全景（東から）

2　5区第1面全景（西から）

1　５区大溝（東から）

2　５区大溝土層帯断面（東から）

3　５区大溝西壁土層断面

図版 11

1　５区大溝北側遺物出土状況（北から）

2　５区大溝北側土器出土状況（北から）

3　５区大溝北側瓦出土状況（北から）

1　5区第２面検出状況（東から）

2　5区第２面検出状況（西から）

図版 13

1　5区 SD0509（東から）

2　5区 SD0510（北から）

3　5区 SD0511（西から）

1　5区包含層土器出土状況

2　5区包含層土器出土状況

3　5区 SD0509 内土器出土状況

4　5区 SD0511 内土器出土状況

5　5区 SD0511 内土器出土状況

図版 15

1　6区第１面 SD0601（東から）

2　6区第１面全景（東から）

3　6区大溝（西から）

4　6区大溝内木簡出土状況

5　6区第２面全景（東から）

6　6区 SD0603・0604（東から）

1　7区第1面全景（西から）

2　7区第1面土器出土状況（東から）

3　7区第1面大溝内土器出土状況

4　7区第2面 SD0702（西から）

図版 17

1　8区第1面大溝（東から）

2　8区第1面大溝西壁土層断面

3　8区第1面大溝東壁土層断面

4　8区第1面SD0801（北から）

5　9区第1面全景（西から）

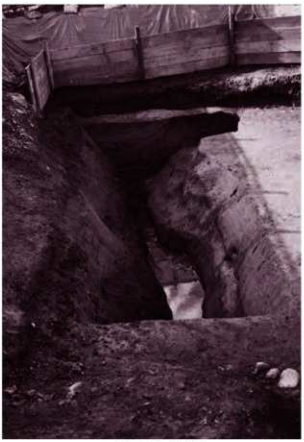
6　9区大溝（西から）

1　10 区第 1 面全景（西から）

2　10 区第 1 面 SD1001（東から）

3　10 区第 1 面全景（東から）

図版 19



1　10 区大溝（東から）

2　10 区大溝（西から）

3　10 区大溝西壁土層断面

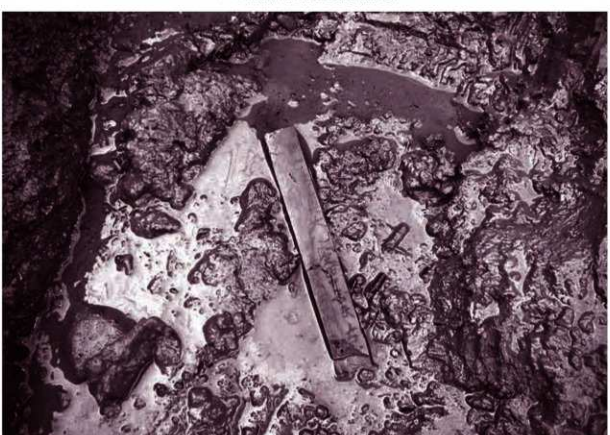
1　10 区大溝覆土上層土器出土状況

2　10 区大溝覆土上層土器出土状況

3　10 区大溝覆土上層土器出土状況

図版 21

1　10 区大溝内木階出土状況（東から）



2　10 区大溝内木階出土状況（拡大）

1　10 区 SD1002 全景（北東から）

2　10 区 SD1002 全景（西から）

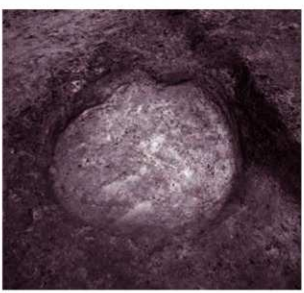
3　10 区 SD1002 土器出土状況（北から）

図版 23

1　10 区 SX1004 遺物出土状況（北から）

2　10 区 SX1004（南から）

3　10 区 SP1010（南から）



4　10 区 SX1003（南から）

5　10 区 SD1005・SP1010（南西から）

6　10 区 SP1006・1007（西から）

1　11 区第 1 面全景（北西から）

2　11 区 SD1105（北から）

図版 25

1　12 区第 1 面東側全景（東から）

2　12 区第 2 面東側全景（東から）

3　12 区 SD1204（北から）

4　12 区 SD1204 内土器出土状況（南西から）

5　12 区 SD1211・1212（南から）

6　12 区第 2 面西側全景（南から）

1　13 区 NR1301（北東から）

2　13 区 NR1301（北西から）

3　13 区 NR1301 内柱根出土状況
（南西から）

図版 27

1　14 区第 1 面全景（南西から）

2　14 区第 1 面全景（南東から）

1　14 区 SX1425 石室検出状況（南東から）

2　14 区 SX1425 石室検出状況（南から）

3　14 区 SX1425 石室床面検出状況（南東から）

4　14 区 SX1425 石室床面検出状況（北東から）

5　14 区 SX1425 基底石検出状況（南東から）

6　14 区 SX1425 基底石検出状況（北東から）

図版 29

1　14 区 SX1425 周溝・墓壙検出状況（南から）

2　14 区 SX1425 墓壙検出状況（南から）

3　14 区 SD1409（南東から）

4　14 区 SD1409 礫出土状況（南東から）

5　14 区 SD1412（北西から）

6　14 区 SD1409 土層帯断面（西から）

1　14 区礎石建物跡 SB1401 検出状況
（北西から）

2　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇
（南西から）

3　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇
（西から）

図版 31

1　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇（南から）

2　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇（南から）

1　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇土層①（北東から）

2　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇土層②（南西から）

3　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇土層③（北から）

4　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇土層④（北西から）

5　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇土層⑤（南東から）

6　14 区礎石建物跡 SB1401 基壇土層⑥（北東から）

図版 33

1　14 区礎石建物跡 SB1401 礎石（南から）

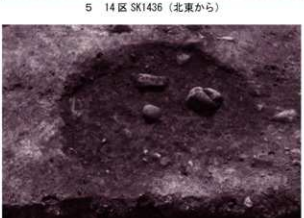
2　14 区礎石建物跡 SB1401 礎石（北から）

3　14 区 SK1433（東から）

4　14 区 SK1435（東から）

5　14 区 SK1436（北東から）

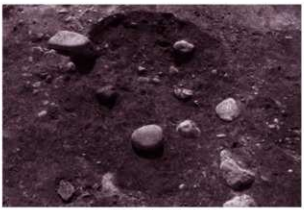
6　14 区 SK1437（北東から）



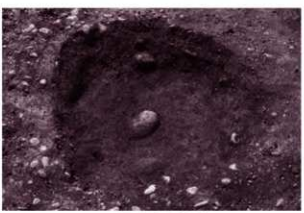
7　14 区 SK1413（北から）

8　14 区 SK1458（北から）

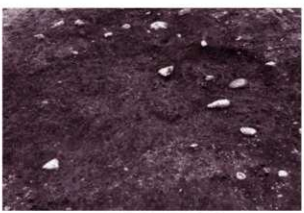
1　14 区 SK1419（北から）



2　14 区 SK1417（北から）



3　14 区 SK1459（北から）

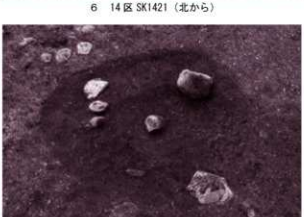


4　14 区 SK1441・1442（北から）

5　14 区 SK1444（北から）

6　14 区 SK1421（北から）

7　14 区 SK1423（北から）



8　14 区 SK1443（北から）

図版 35

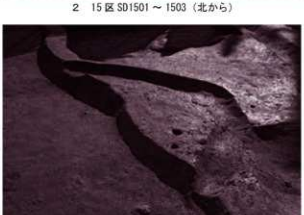
1　15 区炭化米集中遺構 SX1507（南から）

2　15 区炭化米集中遺構 SX1507（北東から）

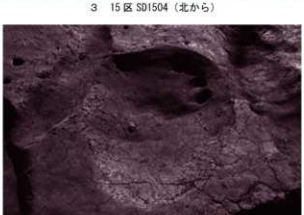
1　15 区第 1 面全景（南東から）

2　15 区 SD1501 ～ 1503（北から）

3　15 区 SD1504（北から）



4　15 区 SD1506（北から）

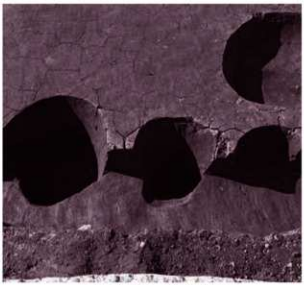


5　15 区 SK1508（北から）

図版 37

1　15 区第 2 面全景（東から）

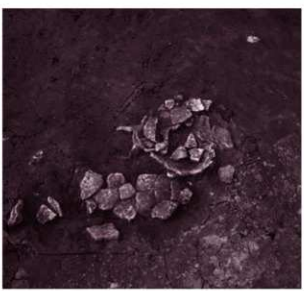
2　15 区第 2 面全景（北西から）



1　15 区 SP1550 ～ 1552（東から）

2　15 区 SD1505（北から）

3　15 区 SD1505 東岸木製品出土状況（北から）



4　15 区 SD1505 東岸土器出土状況（西から）

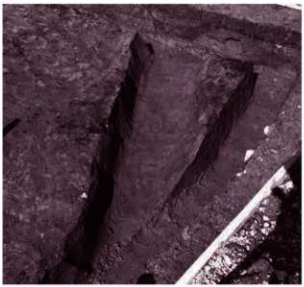
5　15 区 SD1556（北から）

6　15 区 SD1557（北から）

図版 39

1　16 区第 2 面全景（北から）

2　16 区第 2 面全景（東から）



1　16 区 SD1618（南東から）

2　16 区 SK1607（南東から）

3　16 区 SD1619（北西から）

4　16 区 SD1619 遺物出土状況（西から）

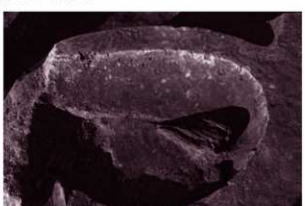
5　16 区 SD1620（北西から）

6　16 区 SD1620 遺物出土状況（北西から）

図版 41

1　15 区掘立柱建物跡 SB1501（東から）

2　15 区掘立柱建物跡柱穴 SP1546（南から）



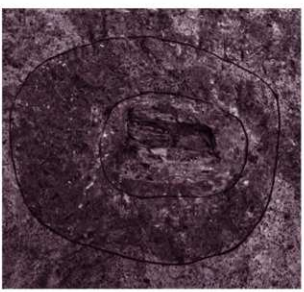
3　15 区掘立柱建物跡柱穴 SP1547（南から）

4　15 区掘立柱建物跡柱穴 SP1548（北から）

5　15 区掘立柱建物跡柱穴 SP1549（北から）

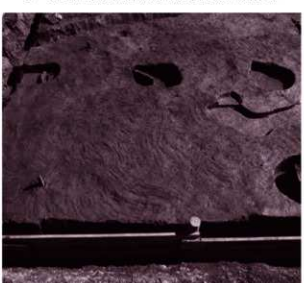
1　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1612（東から）

2　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1613（東から）



3　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1615 検出状況（南から）

4　16 区掘立柱建物跡柱穴 SP1615（南から）



5　16 区掘立柱建物跡 SB1501（西から）

6　16 区掘立柱建物跡 SB1501（北から）

図版 43

1　17 区第 1 面全景（南西から）

2　17 区第 1 面全景（北東から）

1　17 区第２面全景（北東から）

2　17 区 SD1770（南から）

3　17 区 SD17101・17102（南から）

図版 45

1　17 区掘立柱建物跡 SB1701・1702（南から）

2　17 区 SP1763 ～ 1765（南から）

3　17 区竪穴建物状遺構 SD1704・SX1751（南西から）

4　17 区 SP17111 ～ 17115（南から）

5　17 区 SD1703（南から）

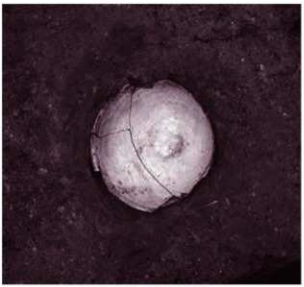
6　17 区 SD1736・1737（南から）

1　18 区第 1 面全景（西から）

2　18 区 SD1801（北東から）

3　18 区 SD1801（南西から）

図版 47

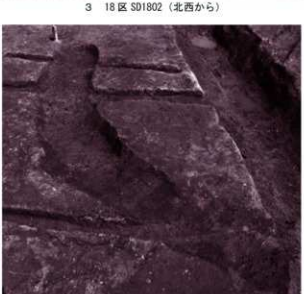


1　18 区土器出土状況

2　18 区 SD1812・1814（南東から）

3　18 区 SD1802（北西から）

4　18 区 SD1805 ～ 1808（北西から）

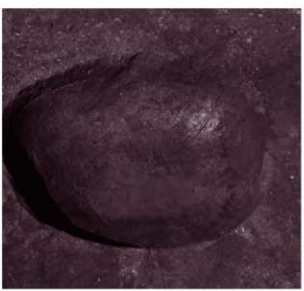


5　18 区 SD1813（南西から）

6　18 区 SD1815（北西から）

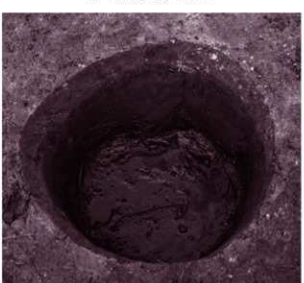
1　18 区 SX1801（東から）

2　18 区 SK1804（南西から）

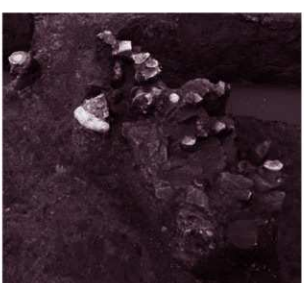


3　18 区 SK1805（南から）

4　18 区 SK1806（南西から）



5　18 区 SP1801（南東から）



6　18 区第 1 面包含層土器出土状況

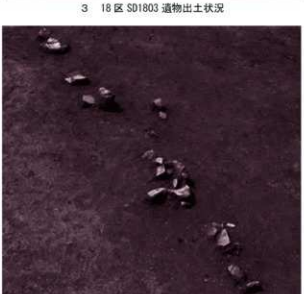
図版 49

1　18 区第 2 面全景（西から）

2　18 区 SD1803・1816

3　18 区 SD1803 遺物出土状況

4　18 区 SD1803 遺物出土状況



5　18 区 SD1816 遺物出土状況

6　18 区 SD1816 土器出土状況（北西から）

1　19 区第 1 面全景（北東から）

2　19 区第 1 面全景（北西から）

図版 51

1　19 区基壇上面（北西から）

2　19 区基壇上面（北西から）

3　19 区基壇内礫①（北西から）

4　19 区基壇内礫②（北西から）

5　19 区基壇内礫③（北から）

6　19 区基壇内礫④（北から）

1　19 区基壇土層①（西から）

2　19 区基壇土層②（西から）

3　19 区基壇土層③（西から）

4　19 区基壇土層④（西から）

5　19 区基壇土層⑤（西から）

6　19 区基壇掘込地業（西から）

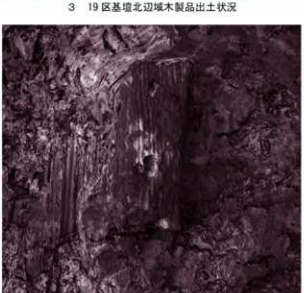
図版 53

1　19 区 SK1901・1902（北から）

2　19 区 SP1901（北東から）

3　19 区基壇北辺域木製品出土状況

4　19 区 SD1409（北西から）



5　19 区 SD1409 内木製品出土状況（北西から）

6　19 区土器集中地点（北から）

1　19 区調査区南壁全景（北から）

2　19 区調査区南壁①（北から）

3　19 区調査区南壁②（北から）

4　19 区調査区南壁③（北から）

5　19 区調査区南壁④（北から）

6　19 区調査区南壁⑤（北から）

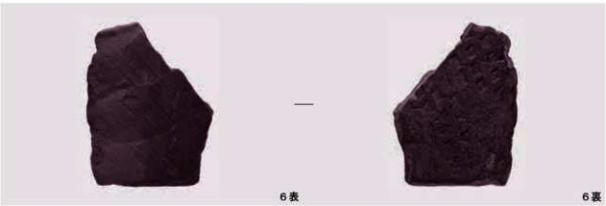
図版 55

1　5区 SD0509 出土遺物集合

2　15区 SX1507 出土遺物集合

2 区 SD0201 出土土器

2 区 SE0202 出土土器



2 区 SE0201 出土瓦（表）

2 区 SE0201 出土瓦（裏）

3 区 SD0305 出土土器 1

3 区 SD0305 出土土製品 2

4 区 SD0403 出土土器 1

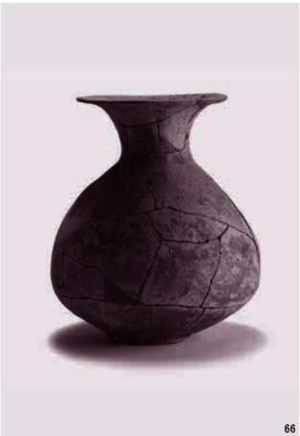
图版 57

4 区 SD0403 出土土器 2

4 区 SD0403 出土土器 3

4 区 SD0403 出土土器 4

5 区 SD0509 出土土器 2



5 区 SD0509 出土土器 1

5 区 SD0509 出土土器 3

5 区 SD0509 出土土器 4

5区 SD0509 出土土器 5

5区 SD0511 出土土器 1

5区 SD0509 出土土器 6

5区 SD0511 出土土器 2

5区 SD0511 出土土器 3

5区 SD0511 出土土器 4

6区 SD0603 出土土器

図版 59

10 区 SX1011 出土土製品

12 区 SK1214 出土土器

13 区 NR1301 出土土器 1

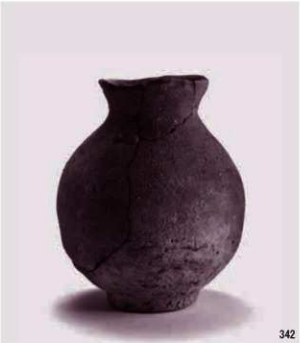
13 区 NR1301 出土土器 2

16 区 SD1619 出土土器

16 区 SD1620 出土土器 1

16 区 SD1620 出土土器 2

16 区 SD1620 出土土器 2



17 区 SD1770 出土土器 2

17 区 SD1770 出土土器 1

18 区 SD1801 出土土器 1

18 区 SD1801 出土土器 2

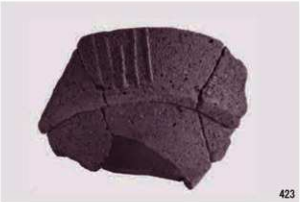
18 区 SD1801 出土土器 3

18 区 SD1803 出土土器 1

18 区 SD1803 出土土器 2

図版 61

18 区 SD1816 出土土器



18 区 SP1803 出土土器

大溝（6 区）出土土器 1

大溝（5 区）出土土器 2

大溝（5 区）出土土器 3

大溝（6 区）出土土器 4

大溝（10 区）出土土器 5

大溝（5 区）出土土器 6

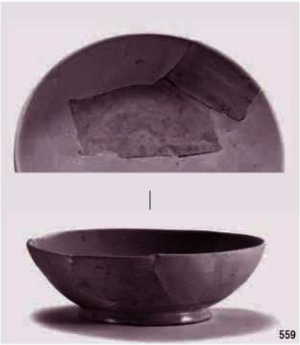
大溝（6区）出土土器7

大溝（5区）出土土器9

大溝（5区）出土土器10

大溝（10区）出土土器12

大溝（6区）出土土器8



大溝（8区）出土土器11

大溝（10区）出土土器13

図版 63

大溝（10 区）出土土器 14

大溝（10 区）出土土器 15

大溝（10 区）出土土器 16

大溝（10 区）出土土器 17

大溝（6 区）出土土器 18

大溝（6 区）出土土器 19

大溝（7 区）出土土器 20

大溝（7 区）出土土器 21

大溝（10 区）出土土器 22

大溝（10 区）出土土器 23

大溝（10 区）出土土器 24

15 区 SX1507 出土土器 1

15 区 SX1507 出土土器 2

15 区 SX1507 出土土器 3

15 区 SX1507 出土土器 4

15 区 SX1507 出土土器 5

15 区 SX1507 出土土器 6

15 区 SX1507 出土土器 7

15 区 SX1507 出土土器 8

15 区 SX1507 出土土器 9

図版 65

15 区 SX1507 出土瓦（表）　15 区 SX1507 出土瓦（表）

14 区 SD1409 出土土器 1

14 区 SD1409 出土土器 2

14 区 SD1409 出土土器 3

14 区 SD1409 出土土器 4

14 区礎石建物跡 SB1401 出土土器 1

14 区礎石建物跡 SB1401 出土土器 3

14 区礎石建物跡 SB1401 出土土器 2

14 区礎石建物跡 SB1401 出土土器 4

14 区礎石建物跡 SB1401 出土土器 5

14 区礎石建物跡 SB1401 出土土器 6

2 区出土土器 1

2 区出土土器 2

1 区出土土器 1

2 区出土土器 3

2 区出土土器 4

2 区出土土器 5

2 区出土土器 6

図版 67

3区出土土器1

3区出土土器2

3区出土土器3

5区出土土器1

5区出土土器2

5区出土土器3

5区出土土器4

5区出土土器5

5 区出土土器 6

6 区出土土器 1

6 区出土土器 2

10 区出土土器

13 区出土土器

14・15 区出土土器

16 区出土土器 1

16 区出土土器 2

16 区出土土器 3

16 区出土土器 4

図版 69

16 区出土土器 5

16 区出土土器 6

16 区出土土器 7

16 区出土土器 8

16 区出土土器 9

17 区出土土器 1

17 区出土土器 2

18 区出土土器 1

18 区出土土器 2

18 区出土土器 3

18 区出土土器 4

18 区出土土器 5

18 区出土土器 6

19 区堀込地業内出土土器

19 区基壇出土瓦（表）

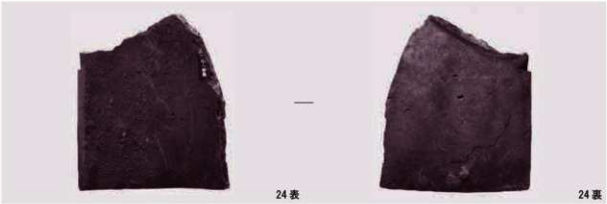
19 区基壇出土瓦（裏）

19 区土器集中地点出土土器

19 区出土瓦

19 区出土土器 1

図版 71



2 区 NR0202 出土瓦 1（表）　　2 区 NR0202 出土瓦 1（裏）

2 区 NR0202 出土瓦 2（表）　　2 区 NR0202 出土瓦 2（裏）

2 区 NR0202 出土瓦 3（表）　　2 区 NR0202 出土瓦 3（裏）

大溝（5 区）出土瓦 1

大溝（5 区）出土瓦 1

600 表

600 裏

大溝（6区）出土瓦2（表）　大溝（6区）出土瓦2（裏）

606 表

606 裏

大溝（5区）出土瓦3（表）　大溝（5区）出土瓦3（裏）

608 表

608 裏

大溝（3区）出土瓦4（表）　大溝（3区）出土瓦4（裏）

614 表

614 裏

大溝（10区）出土瓦5（表）　大溝（10区）出土瓦5（裏）

618 表

618 裏

大溝（5区）出土瓦6（表）　大溝（5区）出土瓦6（裏）

図版 73

大溝（3区）出土瓦7（表）　大溝（3区）出土瓦7（裏）

大溝（6区）出土瓦8（表）　大溝（6区）出土瓦8（裏）

大溝（6区）出土瓦9（表）　大溝（6区）出土瓦9（裏）

大溝（5区）出土瓦10（表）　大溝（5区）出土瓦10（裏）

大溝（5区）出土瓦11（表）　大溝（5区）出土瓦11（裏）

大溝（3区）出土瓦 12（表）　大溝（3区）出土瓦 12（裏）

大溝（5区）出土瓦 13（表）　大溝（5区）出土瓦 13（裏）

大溝（5区）出土瓦 14（表）　大溝（5区）出土瓦 14（裏）

大溝（5区）出土瓦 15（表）　大溝（5区）出土瓦 15（裏）

図版 75

954 表

954 裏

11 区出土瓦（表）　11 区出土瓦（裏）

613 表

613 裏

大溝（5区）出土瓦 16（表）　大溝（5区）出土瓦 16（裏）

208 表

208 裏

13 区 NR1301 出土銭貨（表）　13 区 NR1301 出土銭貨（裏）

968 表

968 裏

2 区出土銭貨（表）　2 区出土銭貨（裏）

209 表

209 裏

13 区 NR1301 出土銭貨（表）　13 区 NR1301 出土銭貨（裏）

13NR1301 区出土金属製品（表）　13 区 NR1301 出土金属製品（裏）

13 区 NR1301 出土金属製品

2 区 SD0201 出土金属製品

5 区出土石器

10 区出土石製品

19 区土器集中地点出土石製品

図版 77

2 区 SE0201 出土木製品

3 区 SP0309 出土木製品

大溝（4 区）出土木製品 1

大溝（4 区）出土木製品 2

3 区 SP0308 出土木製品

4 区 SP0406 出土木製品 1

4 区 SP0406 出土木製品 2

4 区 SP00406 出土木製品 3

4 区 SP0406 出土木製品 4

4 区 SP0407 出土木製品 1

4 区 SP0407 出土木製品 2

大溝（6 区）出土木製品 3（内面）　　大溝（6 区）出土木製品 3（外面）

大溝（6 区）出土木製品 4（内面）　　大溝（6 区）出土木製品 4（外面）

図版 79

大溝（6区）出土木製品5

大溝（6区）出土木製品6

大溝（6区）出土木製品7

大溝（6区）出土木製品8

大溝（6区）出土木製品9

大溝（6区）出土木製品10

大溝（6区）出土木製品11

大溝（6区）出土木製品12

大溝（6区）出土木製品13

647

大溝（6区）出土木製品 14

648

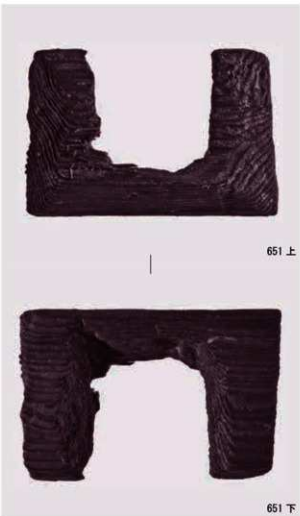
大溝（6区）出土木製品 15

649

大溝（10区）出土木製品 16

650

大溝（10区）出土木製品 17


651 上

651 下

大溝（10区）出土木製品 18

137

10区 SP1003 出土木製品 1

198

13区 NR1301 出土木製品 1

図版 81

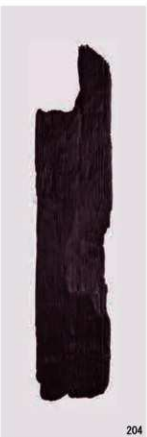
13 区 NR1301 出土木製品 2

13 区 NR1301 出土木製品 3

13 区 NR1301 出土木製品 4

13 区 NR1301 出土木製品 5

13 区 NR1301 出土木製品 6



13 区 NR1301 出土木製品 7

13 区 NR1301 出土木製品 8

15 区 SP1546 出土木製品 1

15 区 SP1546 出土木製品 2

15 区 SD1505 出土木製品 1

15 区 SP1548 出土木製品 2

15 区 SP1548 出土木製品 1

15 区 SP1548 出土木製品 3

15 区 SP1549 出土木製品

図版 83

15 区 SD1505 出土木製品 2

15 区 SD1505 出土木製品 3

15 区 SD1505 出土木製品 4

15 区 SD1505 出土木製品 5

15 区 SD1505 出土木製品 6

15 区 SD1505 出土木製品 7

15 区 SD1505 出土木製品 8

15 区 SD1505 出土木製品 9

16 区 SP1615 出土木製品

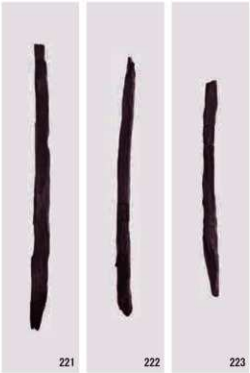
19 区出土木製品 1

19 区出土木製品 2

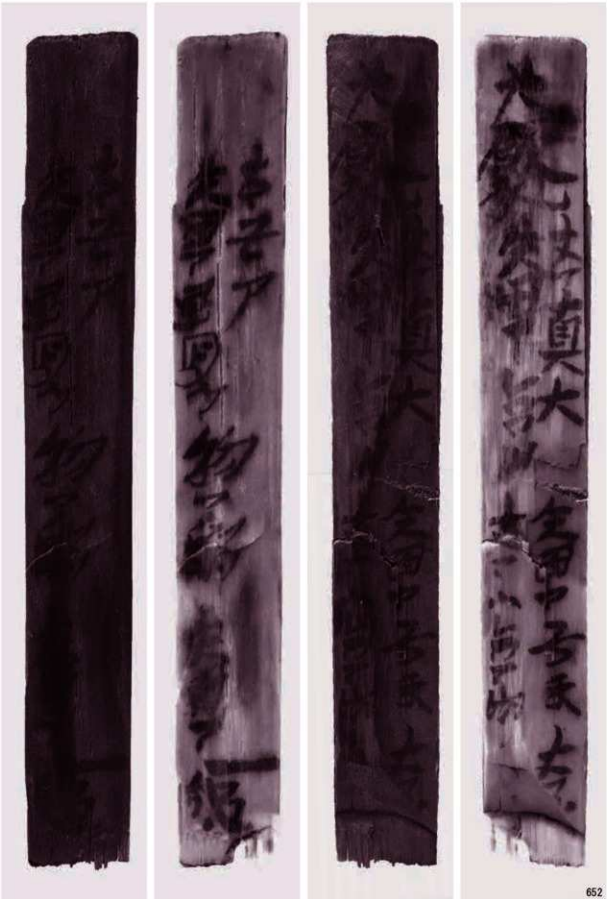
19 区出土木製品 3

19 区出土木製品 4

19 区出土木製品



19 区 SD1409 出土木製品 1 ～ 3



652

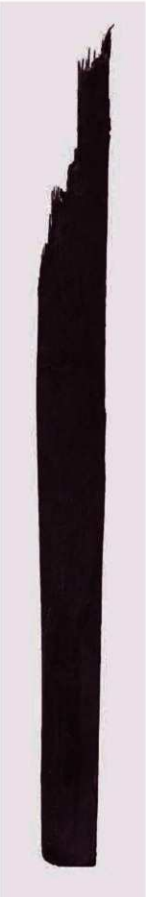
大溝（10区）出土木簡赤外線写真 1

653

大溝（6区）出土木簡赤外線写真2

654

大溝（6区）出土木簡赤外線写真3



655

大溝（6区）出土木簡赤外線写真4

656

13区 NR1301 出土木簡赤外線写真

報　告　書　抄　録

ふりがな	おばねはいじあと
書名	尾羽廃寺跡
副書名	国道１号清水立体埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 68 集
編著者名	岩﨑しのぶ（静岡県埋蔵文化財センター）・中川律子（同）・武田寛生（静岡県スポーツ・文化観光部文化財課）・勝又直人（伊豆の国市教育委員会）・上條信彦（弘前大学）・鈴木三男（東北大学）・パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボ
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒 421-3203　静岡県静岡市清水区蒲原 5300 番 5 号　　TEL　054 － 385 － 5500（代）
発行年月日	2023 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
おばねはいじあと 尾羽廃寺跡	しずおかしみなみ 静岡市 しみずみなみく 清水区尾羽	22103		35° 04′ 44″	138° 49′ 19″	201607 ～ 202011	5,119	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾羽廃寺跡	散布地	中近世	溝跡・井戸跡・河川跡	陶磁器・山茶碗・木製品（漆椀）・金属製品・銭貨	
	官衙跡	平安	礎石建物跡・炭化米集中遺構・溝跡	土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・木製品（礎板等）・炭化米	
	官衙跡	古墳時代後期～奈良	掘立柱建物跡・溝跡・古墳	土師器・須恵器・瓦・木簡・木製品（礎板・柱根等）・土製品（土錘等）	
	散布地	弥生時代後期～古墳時代中期	竪穴建物状遺構・掘立柱建物跡・溝跡・ピット	土器・石器	

要約

尾羽廃寺跡は静岡市清水区尾羽に所在する古代寺院跡である。これまでの発掘調査で、金堂と講堂が確認され、塔心礎と考えられる石材の出土が報告されている。

今回の調査では、金堂の東南に当たる地点で、基壇を伴う礎石建物跡が検出された。畿内を除く地域で古代に礎石建物があるのは寺院や官衙に限られること、建物付近で炭化米がまとまって出土したことなどから、この建物は駿河国廬原郡衙の正倉である可能性が考えられる。出土遺物や基壇の周辺で確認された火山灰や炭化米の年代測定の結果から、この礎石建物は9 世紀初頭に建てられ、10 世紀に焼失したと考えられる。礎石建物跡の北側では、東西約 130m にわたって直線的に延びる溝が検出された。溝内からは土器や瓦とともに、木簡が 4 点出土した。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第68集

尾羽廃寺跡

静岡市

国道1号清水立体埋蔵文化財発掘調査報告書

令和5年3月31日発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203　静岡県静岡市清水区蒲原5300-5

TEL　054-385-5500（代）

FAX　054-385-5506

印　刷　所　文光堂印刷株式会社

〒410-0871　静岡県沼津市西間門68-1

TEL　055-926-2800

FAX　055-926-2855